

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 633 集

うるしまち  
**漆町遺跡発掘調査報告書**

経営体育成基盤整備事業都鳥 3 期地区関連遺跡発掘調査

(第 1 分冊)

2015

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室  
(公財) 岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 633 集

漆町遺跡発掘調査報告書(第 1 分冊)

2015

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室  
(公財) 岩手県文化振興事業団

# 漆町遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥3期地区関連遺跡発掘調査

(第1分冊)



漆町遺跡航空写真（直上）

（左が北）



FSB01区門跡



VSD01 大溝跡

## 序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成24年度と25年度に発掘調査を行った奥州市胆沢区南都田字漆町に所在する漆町遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に奈良時代から始まり、平安時代（平泉藤原氏の時代を含む）、江戸時代までの長きにわたる人々の痕跡が明らかになりました。とくに平安時代では大溝に囲まれ、門を有する豪族の居宅跡と想定できるなど地域史はもとより、東北地方北部の社会を考える上で重要な発見となりました。また、平泉藤原氏の時代の遺構や遺物などがまとまって発見されたことは世界遺産となった平泉の歴史を解明していく上でも重要な成果となります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室や奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 本書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字漆町地内における漆町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は「経営体育成基盤事業都鳥3期地区」に関連して、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室の委託を受け（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。  
なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。
- 3 本調査に関わる期間・調査面積は下記の通りである。
  - (1) 発掘調査

[H24年度]	平成24年7月2日～平成24年12月14日	面積4,835㎡
[H25年度]	平成25年4月4日～平成25年7月12日	面積3,123㎡
  - (2) 整理作業

[H24年度]	平成24年11月1日～平成25年3月31日
[H25年度]	平成25年5月1日～平成26年3月31日
- 4 現地調査と室内整理に関わる担当者は以下の通りである。

[野外調査]

平成24年度	西澤正晴・溜浩二郎・高木晃・小野寺純也・巴亜子・佐藤英雄・鈴木博之・藤本玲子・佐藤奈津季・野中裕貴
平成25年度	西澤正晴・塩谷龍平・巴亜子・高木晃

[室内整理]

平成24年度	西澤正晴・巴亜子・鈴木博之・小野寺純也
平成25年度	西澤正晴
- 5 本書の執筆は下記の通りで、文末に明記している。編集は西澤が行った。  
I - 1：県南広域振興局農政部農村整備室 IV - 3（一部）：鈴木・巴（西澤加筆）  
V：各分析機関 上記以外：西澤
- 6 遺物番号は、種別にかかわらず連番を付している。写真図版に記した番号は本文中の遺物番号に対応する。
- 7 現地調査にあたっては、世界測地系 平面直角座標系Xを基準に準拠した。本書で用いる方位は国土座標に基づく座標北を示す。標高はGPSによる間接測量の成果を準用している。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 9 今回の調査に関わる成果についてはこれまで公表された資料がいくつかあるが本書が優先する。
- 10 調査にあたり、下記の方々及び機関のご教示・協力を得た（敬称略・五十音順）。  
石崎高臣、国生 尚、佐久間賢、佐藤良和、佐藤嘉広、櫻井友梓、島原弘征、菅原祥夫、高橋千晶、高橋與右衛門、千葉正彦、羽柴直人、本沢慎輔、村田晃一、室野秀文、八重樫忠郎、奥州市教育委員会、（公財）奥州市埋蔵文化財調査センター
- 11 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

# 目 次

(第1分冊)

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	2
1	遺跡の位置	2
2	周辺の地理・地形的環境	2
3	周辺の遺跡	6
4	これまでの調査	8
III	調査と整理の方法	10
1	野外調査	10
(1)	調査方法	10
(2)	調査経過	13
2	室内整理	15
(1)	室内整理の工程	15
(2)	図の掲載方法	15
(3)	実測図の表現方法について	16
IV	調査内容	21
1	各調査区の概要	21
2	基本層序	22
3	遺構と遺物	24
(1)	竪穴建物跡	24
(2)	掘立柱建物跡	143
(3)	大溝跡	189
(4)	材木塀跡	203
(5)	門跡	213
(6)	柱穴・ピット(小穴)	213
(7)	溝跡	215
(8)	土坑	284
(9)	焼土・焼成遺構	332
(10)	遺物包含層	334
(11)	遺構外出土遺物	337

V	自然科学分析	340
1	火山灰分析	340
2	花粉分析	350
3	漆町遺跡から出土した種実	364
4	漆町遺跡出土玉類の分析	369
5	漆町遺跡出土骨の分析	375
6	放射性炭素年代測定	378
VI	総括	383
1	出土土器の年代について	383
2	遺構の時期変遷について	388
3	大溝で囲まれる「集落」について	393
4	門について	394
5	まとめ	395
	報告書抄録	451

(第2分冊)

写真図版



## 図版目次

第1図	遺跡の位置 1	1	第44図	HSI06出土遺物 1	47
第2図	遺跡の位置 2	3	第45図	HSI06出土遺物 2	48
第3図	周辺地形図	4	第46図	HSI07竪穴建物跡 1	49
第4図	地形分類図	5	第47図	HSI07竪穴建物跡 2 (カマド)	50
第5図	周辺の遺跡	7	第48図	HSI07竪穴建物跡 3 (掘方)	51
第6図	グリッド配置図	11	第49図	HSI07出土遺物 1	51
第7図	遺構検出作業	12	第50図	HSI07出土遺物 2	52
第8図	機械測量	12	第51図	HSI08竪穴建物跡 1	53
第9図	ふるい作業	12	第52図	HSI08竪穴建物跡 2 (掘方)	54
第10図	雪中作業	12	第53図	HSI08出土遺物	54
第11図	現地説明会	13	第54図	HIS09竪穴建物跡	55
第12図	調査参加者 (H24年度)	13	第55図	HSI10竪穴建物跡 1	56
第13図	調査参加者 (H25年度)	13	第56図	HSI10竪穴建物跡 2 (掘方)	57
第14図	凡例・計測位置図	17	第57図	HSI10出土遺物	57
第15図	遺構配置図 1	18	第58図	HSK17竪穴建物跡	58
第16図	遺構配置図 2	19	第59図	HSK17出土遺物	59
第17図	遺構配置図 3	20	第60図	ISI01竪穴建物跡 1	60
第18図	基本土層模式図	23	第61図	ISI01竪穴建物跡 2 (掘方)	61
第19図	ASI01竪穴建物跡	24	第62図	ISI01出土遺物	61
第20図	ASI01出土遺物	25	第63図	ISI02・07竪穴建物跡	62
第21図	ASI01竪穴建物跡 (掘方)	26	第64図	ISI02出土遺物	63
第22図	ESI01竪穴建物跡 1 (掘方)	26	第65図	ISI03竪穴建物跡 1 (掘方)	63
第23図	ESI01竪穴建物跡 2	27	第66図	ISI03竪穴建物跡 2	64
第24図	ESI01遺物出土状況 1	28	第67図	ISI03出土遺物	65
第25図	ESI01遺物出土状況 2	28	第68図	ISI04竪穴建物跡 1 (掘方)	65
第26図	ESI01出土遺物	29	第69図	ISI04竪穴建物跡 2	66
第27図	FSI01竪穴建物跡	30	第70図	ISI04出土遺物	67
第28図	FSI03竪穴建物跡	31	第71図	ISI05竪穴建物跡 1 (掘方)	67
第29図	FSI03出土遺物	32	第72図	ISI05竪穴建物跡 2	68
第30図	FSI04竪穴建物跡	33	第73図	ISI05出土遺物	67
第31図	FSI04出土遺物	34	第74図	ISI06竪穴建物跡	69
第32図	HSI01・02竪穴建物跡	36	第75図	ISI06出土遺物	69
第33図	HSI03竪穴建物跡 1	37	第76図	ISI07出土遺物	69
第34図	HSI03竪穴建物跡 2	38	第77図	JSI01竪穴建物跡 1	70
第35図	HSI03竪穴建物跡 3 (掘方)	39	第78図	JSI01竪穴建物跡 2 (掘方)	72
第36図	HSI03出土遺物	40	第79図	JSI01出土遺物	72
第37図	HSI05竪穴建物跡 1	41	第80図	JSI02竪穴建物跡 1 (掘方)	72
第38図	HSI05竪穴建物跡 2 (カマド)	42	第81図	JSI02竪穴建物跡 2	73
第39図	HSI05竪穴建物跡 3 (掘方)	43	第82図	JSI02出土遺物	73
第40図	HSI05出土遺物	44	第83図	KSI01竪穴建物跡 1	74
第41図	HSI06竪穴建物跡 1	45	第84図	KSI01竪穴建物跡 2	75
第42図	HSI06竪穴建物跡 2	46	第85図	KSI01竪穴建物跡 3 (カマド)	76
第43図	HSI06竪穴建物跡 3 (掘方)	47	第86図	KSI01竪穴建物跡 4 (掘方)	77

第87図	KSI01出土遺物 1	78	第132図	QSI01竪穴建物跡 3 (カマド)	117
第88図	KSI01出土遺物 2	79	第133図	QSI01竪穴建物跡 4 (掘方)	118
第89図	KSI01出土遺物 3	80	第134図	QSI01出土遺物	119
第90図	KSI02竪穴建物跡 1	81	第135図	QSI02竪穴建物跡	121
第91図	KSI02竪穴建物跡 2 (カマド)	82	第136図	RSX01・02竪穴建物跡	122
第92図	KSI02竪穴建物跡 3 (掘方)	83	第137図	TSI01竪穴建物跡	124
第93図	KSI02出土遺物	83	第138図	USI01竪穴建物跡 1	125
第94図	KSI03竪穴建物跡 1	84	第139図	USI01竪穴建物跡 2 (カマド)	126
第95図	KSI03竪穴建物跡 2 (掘方)	85	第140図	USI01竪穴建物跡 3 (掘方)	127
第96図	KSI03出土遺物 1	86	第141図	USI01出土遺物	127
第97図	KSI03出土遺物 2	87	第142図	USI02竪穴建物跡 1	128
第98図	LSI01竪穴建物跡	88	第143図	USI02竪穴建物跡 2 (掘方)	129
第99図	LSI01出土遺物	89	第144図	USI02出土遺物	129
第100図	LSI02竪穴建物跡	90	第145図	USI03竪穴建物跡 1	130
第101図	LSI03竪穴建物跡 1	91	第146図	USI03竪穴建物跡 2 (掘方)	131
第102図	LSI03竪穴建物跡 2 (カマド)	92	第147図	VSX01竪穴建物跡	131
第103図	LSI03竪穴建物跡 3 (掘方)	93	第148図	VSX01出土遺物	132
第104図	LSI03出土遺物	93	第149図	VSX05・06竪穴建物跡	132
第105図	LSI04竪穴建物跡	94	第150図	XSI01竪穴建物跡	133
第106図	MSI01出土遺物	95	第151図	XSI01出土遺物	133
第107図	MSI01竪穴建物跡	96	第152図	YSI01竪穴建物跡 1	135
第108図	NSI01竪穴建物跡 1	98	第153図	YSI01竪穴建物跡 2	136
第109図	NSI01竪穴建物跡 2 (カマド)	99	第154図	YSI01竪穴建物跡 3 (カマド)	136
第110図	NSI01竪穴建物跡 3 (掘方)	100	第155図	YSI01竪穴建物跡 4 (掘方)	137
第111図	NSI01出土遺物	100	第156図	YSI01竪穴建物跡 5 (土器出土状況)	137
第112図	NSI02竪穴建物跡 1	101	第157図	YSI01出土遺物 1	138
第113図	NSI02竪穴建物跡 2 (掘方)	102	第158図	YSI01出土遺物 2	139
第114図	NSI02出土遺物	102	第159図	ZSI01竪穴建物跡 1	140
第115図	NSI03竪穴建物跡 1	103	第160図	ZSI01竪穴建物跡 2	141
第116図	NSI03竪穴建物跡 2 (掘方)	104	第161図	ZSI01竪穴建物跡 3 (掘方)	142
第117図	NSI03出土遺物	104	第162図	ZSI01出土遺物	142
第118図	NSI04竪穴建物跡 1	105	第163図	ESB01・02掘立柱建物跡	144
第119図	NSI04竪穴建物跡 2 (掘方)	106	第164図	ESB03掘立柱建物跡	145
第120図	NSI04出土遺物	106	第165図	ESB04掘立柱建物跡	146
第121図	NSI05竪穴建物跡	107	第166図	ESB05・06掘立柱建物跡	147
第122図	NSI05出土遺物	108	第167図	ESB07・08掘立柱建物跡	148
第123図	OSI01竪穴建物跡	108	第168図	FSB02掘立柱建物跡	150
第124図	OSI02竪穴建物跡	109	第169図	FSB03掘立柱建物跡	151
第125図	OSI02出土遺物	110	第170図	FSB04掘立柱建物跡 1	152
第126図	OSI03竪穴建物跡	111	第171図	FSB04掘立柱建物跡 2	153
第127図	OSI03出土遺物	112	第172図	FSB05掘立柱建物跡	154
第128図	OSI04竪穴建物跡	113	第173図	FSB06掘立柱建物跡	156
第129図	OSI04出土遺物	114	第174図	FSB07掘立柱建物跡	157
第130図	QSI01竪穴建物跡 1	115	第175図	FSB08掘立柱建物跡	158
第131図	QSI01竪穴建物跡 2	116	第176図	FSB09掘立柱建物跡	159

第177图	FSB10掘立柱建物跡	161	第222图	溝跡 2	B区 1 · D区 1	217
第178图	FSB11掘立柱建物跡	162	第223图	溝跡 3	C区 1	218
第179图	FSB12掘立柱建物跡	163	第224图	溝跡 4	A~D区断面	219
第180图	FSB13掘立柱建物跡	164	第225图	溝跡 5	F区 1	222
第181图	HSB01掘立柱建物跡	165	第226图	溝跡 6	F区 2	223
第182图	HSB02掘立柱建物跡	167	第227图	溝跡 7	G区 1	224
第183图	MSB01掘立柱建物跡	168	第228图	溝跡 8	H区 1	225
第184图	MSB02掘立柱建物跡	169	第229图	溝跡 9	H区 2	227
第185图	MSB03掘立柱建物跡	170	第230图	溝跡10	H区 3	228
第186图	NSB01 · 02掘立柱建物跡	172	第231图	溝跡11	H区 4	229
第187图	OSB01掘立柱建物跡	173	第232图	溝跡12	H区 5	230
第188图	OSB02掘立柱建物跡	174	第233图	溝跡13	G区 2 · H区 6	231
第189图	OSB03掘立柱建物跡	175	第234图	溝跡14	G区 3 · H区 7	233
第190图	OSB04 · 05掘立柱建物跡	177	第235图	溝跡15	I区	234
第191图	OSB06掘立柱建物跡	178	第236图	溝跡16	J区 1	235
第192图	OSB07掘立柱建物跡	179	第237图	溝跡17	J区 2	236
第193图	QSB01 · 02掘立柱建物跡	181	第238图	溝跡18	K区 1	238
第194图	USB01掘立柱建物跡	182	第239图	溝跡19	K区 2	239
第195图	VSB01掘立柱建物跡	183	第240图	溝跡20	L区 1	240
第196图	VSB02 · 03掘立柱建物跡	185	第241图	溝跡21	L区 2	241
第197图	VSB04掘立柱建物跡	186	第242图	溝跡22	L区 3	243
第198图	YSB01掘立柱建物跡	188	第243图	溝跡23	M区 1	245
第199图	大溝跡全体図	190	第244图	溝跡24	L区 4 · M区 2	246
第200图	大溝跡A地点 1	191	第245图	溝跡25	N区 1	248
第201图	大溝跡A地点 2	192	第246图	溝跡26	N区 2 · O区 1	250
第202图	大溝跡B地点 1	193	第247图	溝跡27	O区 2	251
第203图	大溝跡B地点 2	194	第248图	溝跡28	P区 1 · Q区 1	253
第204图	大溝跡C地点	196	第249图	溝跡29	Q区 2	254
第205图	大溝跡D地点	197	第250图	溝跡30	Q区 3	256
第206图	大溝跡E地点 1	198	第251图	溝跡31	R区 1 · S区 1	258
第207图	大溝跡E地点 2	199	第252图	溝跡32	P区 2 · Q区 4 · R区 2 · S区 2	259
第208图	大溝跡出土遺物 1	200				
第209图	大溝跡出土遺物 2	201	第253图	溝跡33	U区 1	261
第210图	材木堀跡全体図	204	第254图	溝跡34	U区 2	262
第211图	材木堀跡A地点 1	205	第255图	溝跡35	U区 3	264
第212图	材木堀跡A地点 2	206	第256图	溝跡36	U区 4	265
第213图	材木堀跡B地点 1	207	第257图	溝跡37	V区 1	267
第214图	材木堀跡B地点 2	208	第258图	溝跡38	V区 2	268
第215图	材木堀跡C地点 1	209	第259图	溝跡39	V区 3	269
第216图	材木堀跡C地点 2	210	第260图	溝跡40	W区 1 · X区 1 · Y区 1	270
第217图	材木堀跡D地点	212	第261图	溝跡41	W区 2 · X区 2 · Y区 2 · Z区	271
第218图	USD15出土遺物	212				
第219图	FSB01門跡	214	第262图	溝跡出土遺物 1		273
第220图	柱穴出土遺物	215	第263图	溝跡出土遺物 2		274
第221图	溝跡 1	A区 1	216	第264图	溝跡出土遺物 3	275

第265図	溝跡出土遺物 4	276	第299図	遺構外出土遺物 3	338
第266図	溝跡出土遺物 5	277	第300図	HSD05A-A' セクションの土層柱状図	341
第267図	溝跡出土遺物 6	278			
第268図	溝跡出土遺物 7	279	第301図	HSI07北側断面の土層柱状図	341
第269図	溝跡出土遺物 8	280	第302図	ISD01の土層柱状図	341
第270図	溝跡出土遺物 9	281	第303図	火山灰試料の火山ガラス比ダイアグラム	344
第271図	溝跡出土遺物10	282			
第272図	溝跡出土遺物11	283	第304図	火山ガラス写真	349
第273図	土坑1 B区・F区1	285	第305図	漆町遺跡：試料（堆積物）粒度組成	352
第274図	土坑2 F区2・H区1	288	第306図	漆町遺跡：FSD01における花粉ダイアグラム	357
第275図	土坑3 H区2	289			
第276図	土坑4 H区3	291	第307図	漆町遺跡：VSD01における花粉ダイアグラム	358
第277図	土坑5 H区4	294			
第278図	土坑6 H区5・I区・K区	297	第308図	漆町遺跡：HSD05A-A'における花粉ダイアグラム	359
第279図	土坑7 L区1・M区1	300			
第280図	土坑8 L区2・M区2	302	第309図	漆町遺跡：ISD01における花粉ダイアグラム	360
第281図	土坑9 M区3	304			
第282図	土坑10 M区4	306	第310図	漆町遺跡の花粉・孢子	362
第283図	土坑11 N区・O区1	312	第311図	漆町遺跡から出土した種実	368
第284図	土坑12 O区2	313	第312図	火山岩の分類の一例	369
第285図	土坑13 O区3・Q区・R区・S区	315	第313図	SiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図	373
第286図	土坑14 T区・U区1	317	第314図	SiO <sub>2</sub> -MgO 図	373
第287図	土坑15 U区2	321	第315図	K <sub>2</sub> O-CaO 図	374
第288図	土坑16 U区3・V区	323	第316図	漆町遺跡勾玉写真	374
第289図	土坑17 W区・X区・Y区	325	第317図	漆町遺跡丸玉写真	374
第290図	土坑出土遺物 1	327	第318図	試料の状況	377
第291図	土坑出土遺物 2	329	第319図	暦年較正図 1	381
第292図	土坑出土遺物 3	330	第320図	暦年較正図 2	382
第293図	土坑出土遺物 4	331	第321図	土器集成図 1	384
第294図	焼土・焼成遺構 1	332	第322図	土器集成図 2	385
第295図	焼土・焼成遺構 2	333	第323図	土器集成図 3	386
第296図	包含層 P区・W区	335	第324図	遺構変遷図 1	390
第297図	遺構外出土遺物 1	336	第325図	遺構変遷図 2	391
第298図	遺構外出土遺物 2	337			

## 表 目 次

<p>第1表 野外調査の工程表 ..... 13</p> <p>第2表 室内整理の工程表 ..... 14</p> <p>第3表 テフラ検出分析結果 ..... 343</p> <p>第4表 火山ガラス比分析結果 ..... 343</p> <p>第5表 屈折率測定結果 ..... 345</p> <p>第6表 VSD01火山灰試料に含まれる火山ガラスの主成分分析結果 ..... 346</p> <p>第7表 HSD05A-A' セクション試料1に含まれる火山ガラスの主成分分析結果 ..... 346</p> <p>第8表 タイプAの火山ガラスの主成分組成 ..... 346</p> <p>第9表 タイプBの火山ガラスの主成分組成 ..... 346</p> <p>第10表 タイプCの火山ガラスの主成分組成 ..... 346</p> <p>第11表 漆町遺跡テフラ試料と代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分組成 ..... 347</p> <p>第12表 分析試料一覧 ..... 350</p> <p>第13表 漆町遺跡における花粉分析結果1 ..... 354</p> <p>第14表 漆町遺跡における花粉分析結果2 ..... 355</p> <p>第15表 漆町遺跡から出土した種実1 ..... 364</p> <p>第16表 漆町遺跡から出土した種実2 ..... 365</p> <p>第17表 漆町遺跡から出土した種実3 ..... 365</p>	<p>第18表 漆町遺跡から出土した種実4 ..... 366</p> <p>第19表 火成岩分類表 ..... 369</p> <p>第20表 分析一覧表 ..... 371</p> <p>第21表 化学分析表 ..... 372</p> <p>第22表 骨同定結果 ..... 376</p> <p>第23表 放射性炭素年代測定結果 (<math>\delta^{13}\text{C}</math>補正值) ..... 380</p> <p>第24表 放射性炭素年代測定結果 (<math>\delta^{13}\text{C}</math>未補正值、 暦年較正用<math>^{14}\text{C}</math>年代、較正年代) 1 ..... 380</p> <p>第25表 放射性炭素年代測定結果 (<math>\delta^{13}\text{C}</math>未補正值、 暦年較正用<math>^{14}\text{C}</math>年代、較正年代) 2 ..... 380</p> <p>第26表 土器類観察表 ..... 398</p> <p>第27表 陶磁器観察表 ..... 407</p> <p>第28表 石器観察表 ..... 410</p> <p>第29表 石製品観察表 ..... 412</p> <p>第30表 土製品観察表 ..... 412</p> <p>第31表 金属製品観察表 ..... 414</p> <p>第32表 遺構別遺物出土量一覧 (不掲載) ..... 415</p> <p>第33表 柱穴観察表 ..... 425</p>
--	---



# I 調査に至る経過

## 1 発掘調査に至る経過

漆町遺跡は、「経営体育成基盤整備事業都鳥3期地区」のほ場整備工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市水沢区中心部より、西に5kmの胆沢区南都田字漆町地内に位置し、現況は小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。

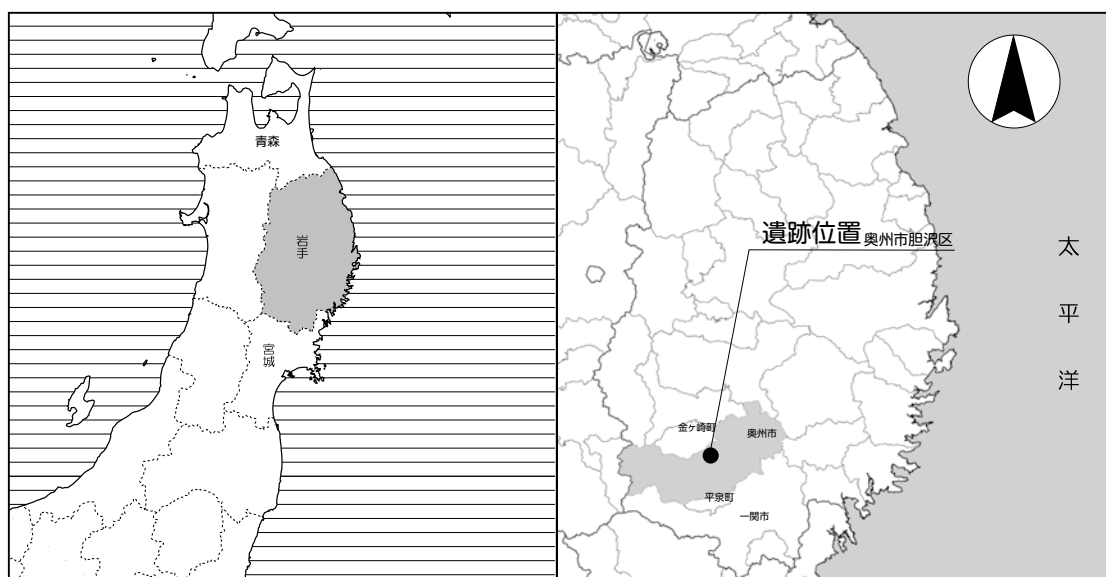
このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として事業着手した。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成23年9月28日付け県南広農整133-5号「経営体育成基盤整備事業都鳥3期地区における埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成23年10月24日から26日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成23年11月25日付け教生第997号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

この回答を受け、当農村整備室は平成23年12月8日付け、県南広農整133-9号「埋蔵文化財試掘結果による工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成24年5月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、平成25年度まで継続調査を行うこととなり、平成25年4月1日付けで同事業団と再度委託契約を締結し、発掘調査を実施した。（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）



第1図 遺跡の位置1

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置

漆町遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字漆町地内に所在する。JR 東北本線水沢駅の西約5.5kmの位置にある。国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」および2万5千分の1地形図「供養塚」の図幅中に含まれ、調査区の緯度・経度上の位置は、北緯39度8分17秒、東経141度4分47秒付近である。

遺跡の所在する奥州市胆沢区は岩手県南部に位置し、北上川低地帯（北上盆地）のほぼ中央部に相当し、広大な面積を誇る胆沢扇状地上に立地している。平成18年に旧水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の2市2町1村による広域合併により奥州市となった。北は北上市・金ヶ崎町、南は一関市・平泉町と接している。面積では県内3位の規模を誇り、人口約13万人（平成20年3月現在）を抱える都市となっている。奥州市では、北上川によりもたらされた肥沃かつ広大な土壌を活かした農業が盛んであり、江刺りんごをはじめとする農産物、前沢牛などの畜産物など全国的にも有名である。

胆沢区は、国道397号が東西を横断し、日本海側（秋田県）とつながる地域である。西半は奥羽山脈と焼石連峰からなる山岳地帯、東半は胆沢扇状地の水田・畑作地帯である。遺跡周辺を含めた胆沢扇状地の北半には民家相互の平均距離が約100mも離れる典型的な散村光景が展開している。統計によれば、年間の最高気温は35.7℃、最低気温-14.4℃、平均気温は10.5℃であり、岩手県の中では比較的温暖な地域である。年間の降水量は1,153mmと県平均に近い。

漆町遺跡は、胆沢扇状地上にある水沢段丘上に立地している（後述）。遺跡範囲は、北側を一段低い段丘面、南を小違川、東西は旧河川と考えられる低地によって区画され、その間に位置する微高地上にある。遺跡の現況は、水田や畑地であった。遺跡中央部の標高は85～86m前後であり、遺跡西側が高く、東側にむかって緩やかに傾斜している。遺跡の東端と西端の比高は約8m、遺跡南端と北端の比高は1～2mであり、東西方向の傾斜の方が強い。遺跡範囲に隣接して、延喜式内社である止々井神社跡（江戸時代に前沢区に移設）があるなど古代より歴史の残る地域でもある。

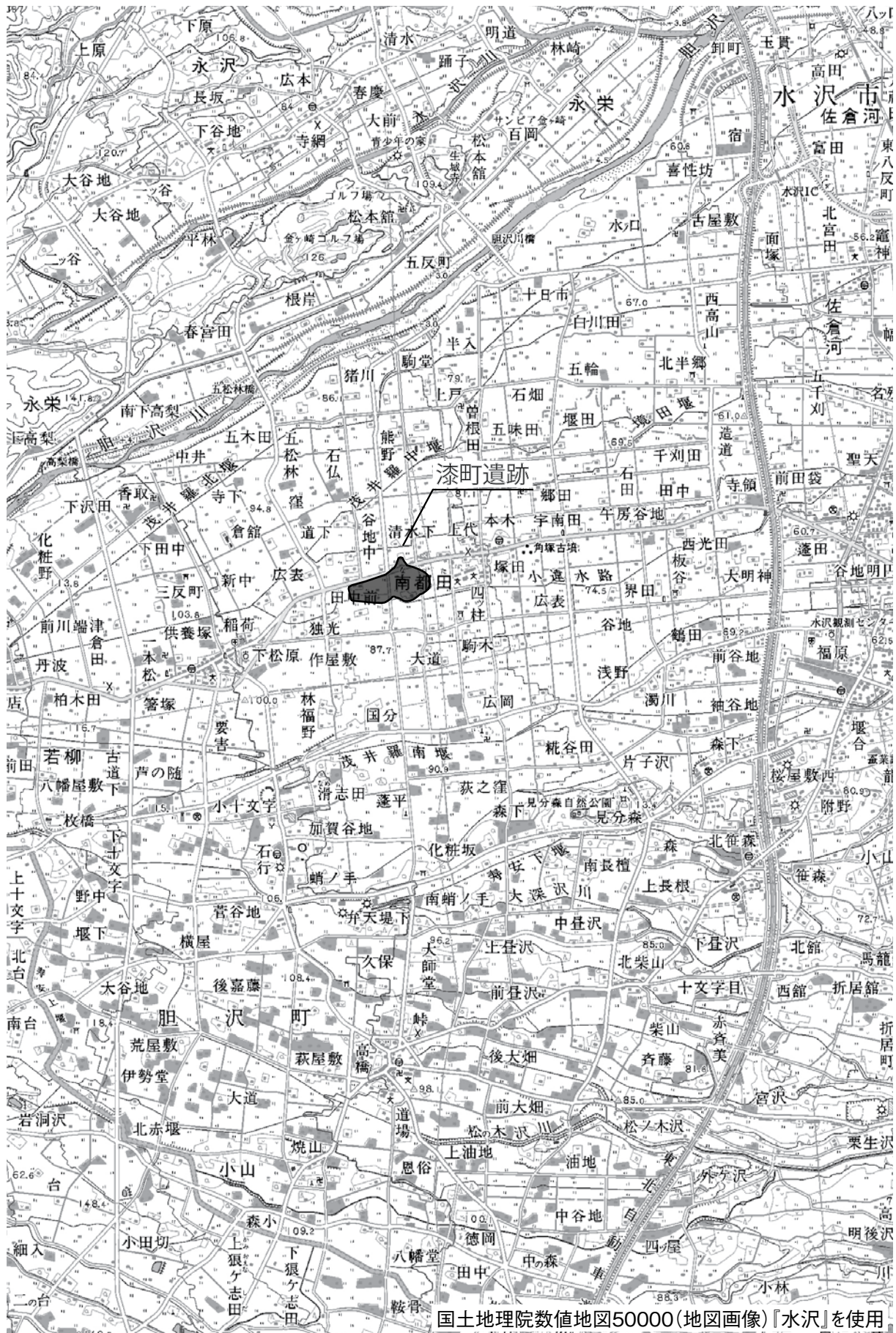
### 2 周辺の地理・地形的環境

岩手県内陸南部は西側に脊梁の奥羽山脈、中央を南流する北上川縦谷、東側に北上山地という地形区分で基本的には共通する。北上川の流路は低地帯の東側に偏っており、奥羽山脈に接する西側に扇状地、段丘の発達が顕著に見られる特徴がある。

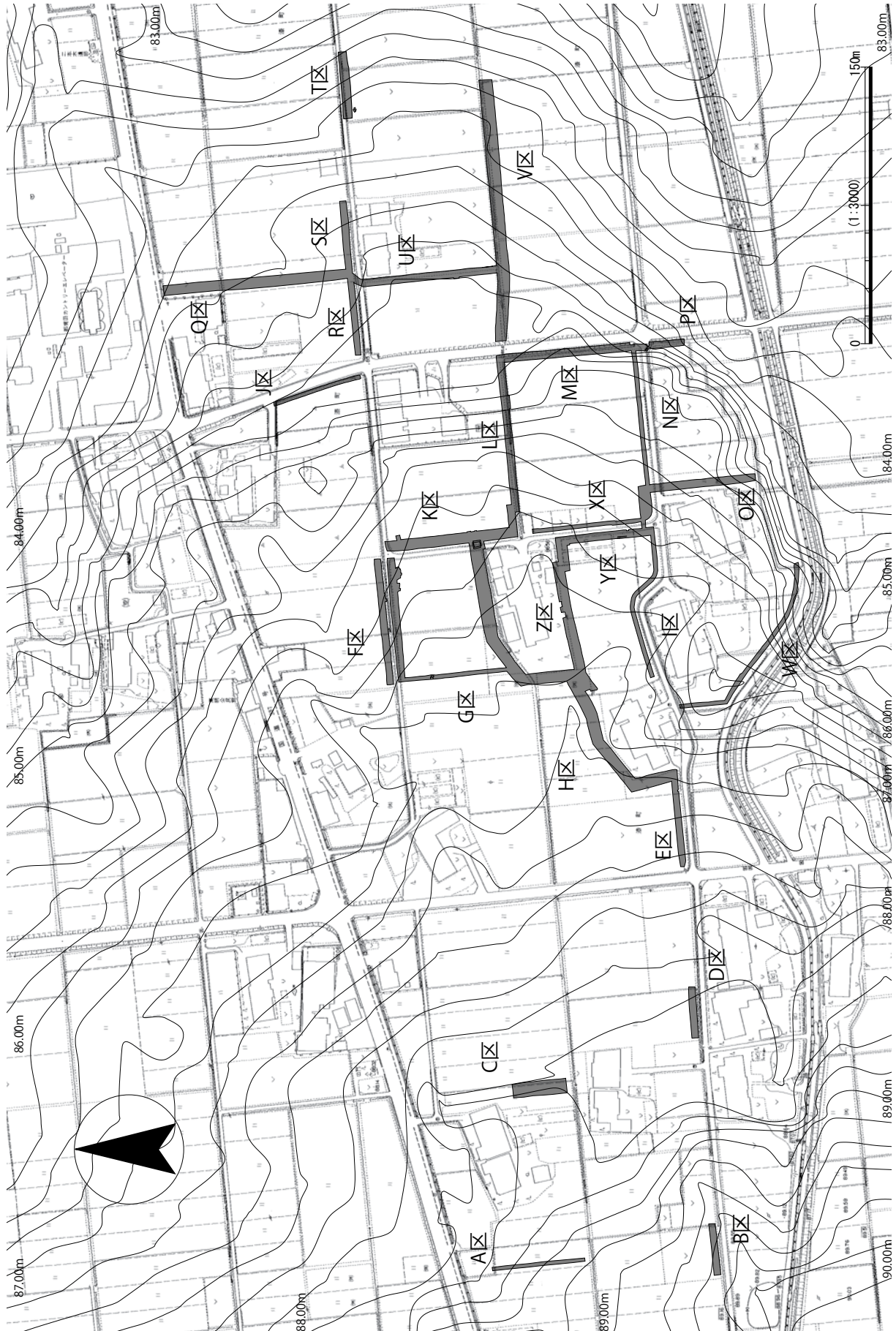
遺跡が立地する胆沢区もその基本地形と共通している。とくに胆沢川沿いは北上川流域最大の扇状地形が発達する。この扇状地は、焼石岳南西麓を水源とする胆沢川によって形成されたもので、胆沢川が山地を離れる胆沢区市野々地区を扇頂とし、扇長約18km、扇端幅約19km、面積約200km<sup>2</sup>に達する広大な地形である。胆沢扇状地は更新世中期から後期に形成されたと考えられており、胆沢川の開析を受けて段丘化している。段丘は、高位から順に大歩段丘、一首坂段丘（以上高位段丘）、上野原段丘、横道段丘、堀切段丘、福原段丘（以上中位段丘）があり、この段丘を取り巻くように低位段丘である水沢段丘面が広がる。この水沢段丘は水沢段丘高位面と水沢段丘低位面に細分され、北常から北下市付近にかけて南北約1.5kmの沖積低地が東西に走り、谷底平野を形成する。

各段丘は本流である北上川の流下方向とは逆に高位から漸次北に配列され、現在の胆沢川は北端の

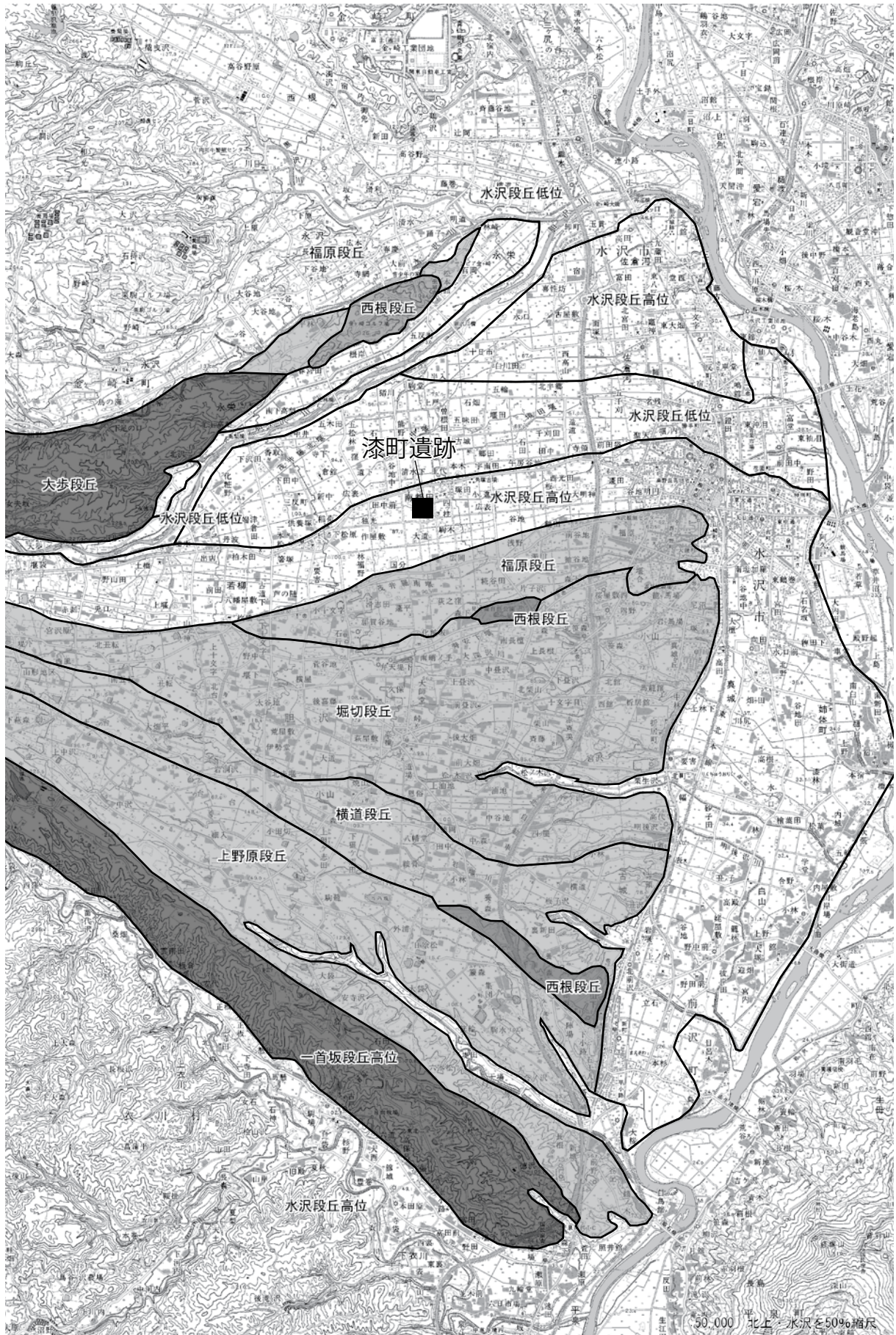




第2図 遺跡の位置2



第3図 周辺地形図



第4図 地形分類図

扇側部に沿って流れている。

遺跡の立地する水沢段丘は扇状地北端の胆沢川南岸から北上川沿いに発達し、高位面を南北に2分する状態に低位面が東西に延びている。遺跡はこのうち高位面上に立地している。高位面の標高は40～290m、低位面は標高38～120mである。両者の区分は、南側の境界に関しては上流の胆沢区出店付近で最大で10m前後の比高が、下流の水沢市街地側で最大4m前後の比高があり比較的明瞭であるが、漆町遺跡付近では水田化や宅地化にともなって境界は不明瞭である。北側の境界も下流の高山から元宿付近では1～2mの比高をもつが、半入から五輪付近では不明瞭となる。

胆沢川の対岸は北上川支流の夏油川が六原扇状地を形成している。段丘区分は、高位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に区分される。胆沢川北岸、永沢川との間には水沢段丘と対比される金ヶ崎段丘の中に高位面・中位面からなる永沢丘陵が北東に向かって延びている。

漆町遺跡は、水沢段丘高位面上に立地するが、低位面との境界付近に位置する。この境界付近に沿って国道397号が東西に走っており、段丘崖を利用して街道がつくられていたことがわかる。

次に、遺跡周辺の微地形について触れておく。周辺の水田一筆ごとの標高に基づいて等高線図を作成したのが第3図である。これを見ると段丘面が南が高く、北が低い状況にあることに加えて、西側から東側にむかって地形が下がっていく様子が見て取れる。調査区が存在する図の中央付近では、西から張り出した尾根様の地形であり、大溝はこの境界付近に存在しているようである。したがって、遺跡はこの周辺よりもやや高い範囲に存在していることがわかる。

### 3 周辺の遺跡

前述の水沢段丘上に立地する漆町遺跡周辺の遺跡には、高位面上に立地する遺跡と低位面上に立地する遺跡がある。周辺の遺跡の多くは、各段丘の境界付近に集中する傾向がある。また、低位面に立地する遺跡には、弥生から古墳時代にかけての集落が多く、高位面上に立地する遺跡には平安時代以降の集落が多い傾向にある。調査された遺跡をみても、基本土層（層序）は両者で異なっており、低位面上の遺跡は、土層の堆積環境が高位面と比べて早いようで、いわゆる沖積地の様相を示し、高位面では台地上の様相（県内に普遍的に存在する）を示すなど異なっていることがわかる。

さて漆町遺跡近接の遺跡について、段丘面ごとに触れておく。まず水沢段丘高位面上には、作屋敷遺跡、二本木遺跡、要害遺跡、塚田遺跡、角塚古墳、宇南田遺跡、堤遺跡、川端遺跡などがある。近年、ここで報告する漆町遺跡と同様には場整備事業にともなって調査が多く及んでいる。調査された遺跡を中心に内容を見ると、国内最北端の前方後円墳である角塚古墳以外は、奈良時代から平安時代にかけての集落が中心となる。作屋敷遺跡は平成20年、平成23年から本格的に調査が行われた。その結果、平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡などからなる集落であることが判明している。掘立柱建物が複数棟存在することから、有力な集落と考えられる。二本木遺跡は、漆町遺跡に隣接する遺跡で、過去に調査が行われている。竪穴建物跡が複数棟検出されており、8世紀後半や8世紀末から9世紀初頭の土器も出土しており、漆町遺跡と同様の時期の集落と考えられる。地形的にも隔てられるわけではなく一体であった可能性がある。二本木遺跡はまた今後調査が予定されており、内容解明が期待される。塚田遺跡は、角塚古墳の南側に広がる遺跡である。これまで調査が行われているが小規模な調査であり、詳細な内容が残るが、8世紀後半頃の土器が出土している。要害遺跡からも同様の時期の遺構が見つかっているととも平安時代の竪穴建物跡も検出されている。堤遺跡からも8世紀から9世紀前半にかけての集落が調査されている。川端遺跡は調査されているもののまだ内容が明確では



国土地理院数値地図25000(地図画像)「供養塚」を使用

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	漆町	縄文・弥生・奈良・平安	19	新屋敷	平安	37	二本木	奈良・平安
2	兵法田	縄文・平安	20	河原田	平安	38	作屋敷	奈良・平安
3	中半入	平安	21	寺屋敷	平安	39	堤	平安
4	蝦夷塚古墳	奈良	22	四ツ柱	不明	40	川端	平安
5	半入豪族屋敷	中・近世	23	銭倉	奈良・平安	41	牡丹野	縄文・古代
6	大田 I	平安	24	机地館(盛興館)	中世	42	尼坂	縄文・古代
7	中ノ目	平安	25	堰田	平安	43	広岡館(飯坂館)	中世
8	玉ノ木 I	平安	26	机地	奈良・平安	44	国分	古代・近世
9	太田 II	平安	27	沢田	奈良・平安	45	糞谷田	縄文・古代
10	玉の木 II	平安	28	石田 I・II	平安	46	片子沢	縄文・古代
11	太田 III	平安	29	西光田 I	平安	47	浅野	縄文・古代
12	小姓堂	平安	30	西光田 II	平安	48	浅野前	縄文・古代
13	外記 II	縄文、平安	31	西光田 III	平安	49	鶴田 II	縄文・平安
14	石畑	平安	32	宇南田	平安	50	鶴田 I	平安
15	外記 I	縄文	33	要害(止々井館)	奈良・平安・近世	51	濁川	縄文・平安
16	曾根田(常楽寺館)	平安	34	角塚古墳	古墳	52	合野	縄文・古代
17	高山	古墳	35	塚田	奈良・平安	53	袖谷地 II	平安
18	高谷宿	平安	36	清水下	弥生・平安			

第5図 周辺の遺跡

#### 4 これまでの調査

ない。こうしてみると、漆町遺跡と同一面に立地する遺跡には、類似した時代の遺跡が多く、とくに8世紀後半から9世紀前半にかけての遺跡が多い傾向にあることがわかる。

つぎに、漆町遺跡北側の低位面上にある遺跡をみると、清水下遺跡、銭倉遺跡、沢田遺跡、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、堰田遺跡、机地遺跡などがある。調査された遺跡を中心に内容を見ると、弥生時代から古墳時代にかけて集落や古墳群が存在する。清水下遺跡はこれまで、本格的な調査が行われていないが、工事等の際に弥生時代の石包丁が出土するなど、立地も合わせて、該期の水田跡の存在が予想されている。沢田遺跡からは古墳時代中期～後期にかけての古墳群が発見されている。いずれも主体部を削平された円墳であるが、4基調査された。また、古墳群の中には小石塚や土坑墓も存在している。こういった例は岩手県内では初めての例であり、古墳時代中期～後期には、前方後円墳以外の墓制も存在していたことになる。このほか、沢田遺跡では掘立柱建物跡をとまなう平安時代の集落という顔をもつ。多量の墨書土器や施釉陶器を出土する河川跡などが調査された。また、手づくねかわらけや白磁などの輸入陶磁の出土などもあり、平安時代末頃には、高級品や儀式を行える人物が周辺に存在していた可能性がある。少なくとも12世紀にも遺跡が利用されていたことわかっている。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡からは、古墳時代中期の集落と後期の集落が調査されている。中期の竪穴建物跡は16棟、後期～奈良時代にかけての竪穴建物跡は50棟前後であり、近年調査された中では有数の遺跡となる。ここでも白磁など12世紀代の遺物が出土している。堰田・机地・銭倉遺跡も近年調査が行われた。銭倉遺跡も調査されたものの近世主体であり、奈良時代から平安時代の遺物が散布している以外の情報は得られていない。机地遺跡からは8世紀から9世紀前半の竪穴建物跡が調査された。また、ここでも12世紀代のかかわらけや国産陶器片が出土している。堰田遺跡は調査されたもののまだ内容がよくわかっていない。

低位面上に立地する遺跡は高位面よりも弥生時代や古墳時代など古い時期に始まるものが多く、平安時代の初め頃までつづく遺跡が多いことがわかる。

低位面より北側にある水沢段丘高位面の対岸には、中半入遺跡や高山遺跡などがあり、古墳時代前期から続く集落が存在している。角塚古墳は単独で存在していたわけではなく、周辺には同時期の集落はもとより前後の時期の集落も存在し、継続的な古墳社会が営まれていたことがわかってきている。低位面上の遺跡と類似した内容の遺跡が多いと考えられる。

これまで触れた水沢段丘高位面の南側に目をむけると、水沢段丘高位面との境界付近の福原段丘面上に遺跡が集中する。ここには尼坂遺跡、牡丹野遺跡、国分遺跡などが立地する。これらの遺跡からは縄文時代の遺構や遺物が多く発見されるとともに、古代の遺構も発見されている。8世紀代の遺物を出土する遺跡があるものの、平安時代の遺跡が多いことがわかっている。

このように、近年のは場整備による調査の増加もあり、漆町遺跡周辺の各遺跡の内容が明らかになりつつある。段丘面ごとに時代的なまとまりがあることから、地形に制約を受けて（生産活動に影響か）集落が営まれてきたことがわかる。また古墳時代や奈良～平安時代以外でも、平泉藤原氏の時代の遺構や遺物が発見されはじめており、この12世紀という時期についても、何らかの役割を担った地域と考えられる。現在はまだ、その時期の内容まで詳細に判明していないが、この資料の増加は、平泉文化を考える上では重要な地域となろう。

#### 4 これまでの調査

漆町遺跡は昭和50年に水田改良工事の際に発見され、その際に調査が行われている。その内容を見

ると、縄文時代早期、弥生時代後期の土器のほかに、8世紀から9世紀前半の土器、10世紀の土器が出土している。遺構には竪穴建物跡、掘立柱建物跡、門跡、竪穴状遺構が調査された。竪穴建物跡には、奈良時代のものと同平安時代のもの2者があり、掘立柱建物跡には2間×2間の総柱建物である。

とくに注目すべきは門跡の存在であろう。平面図からみると一辺70cm前後の方形の掘方をもつ一對の柱穴であり、中心間の距離は3.19mである。棟門形式のこの門跡に塀跡などが付随するのかなど周囲の状況が不明であるため、詳細はよくわからない。門跡ではない可能性も残る。調査を行ったのが40年前ということもあり現在では正確な調査地点も不明となっている。

不明な点があるものの、漆町遺跡のこれまでの調査からは、縄文時代早期、弥生時代後期のほかに、奈良時代から平安時代の集落の存在が明らかとなっている。

## 文献一覧

\* 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第〇集→岩埋文第〇集に略

- 星雅之ほか 2010 『尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷発掘調査報告書』岩埋文第569集  
 高木晃ほか 2002 『中半入・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩文埋第380集  
 西澤正晴ほか 2004 『中半入遺跡第2次発掘調査報告書』岩文埋第443集  
 島原弘征ほか 2005 『中半入遺跡第4次発掘調査報告書』岩文埋465集  
 佐藤良和ほか 2004 『中半入遺跡第3次調査』水沢市埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第18集  
 高橋千晶ほか 2008 『市内遺跡発掘調査報告書（中半入遺跡）』岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第2集  
 安部庄吉 1988 『沢田遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第18集  
 佐々木いく子 1995 『要害遺跡緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第26集  
 鈴木明美 1985 『塚田遺跡緊急調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第14集  
 鈴木明美 1984 『二本木遺跡緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第13集  
 安部庄吉 1991 『国分・芦の随遺跡緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第21集  
 安部庄吉 1983 『尼坂遺跡発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第12集  
 山口興典 1992 『尼坂遺跡第二次緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第22集  
 佐々木いく子ほか 1993 『尼坂遺跡第三次（東）緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第23集  
 佐々木いく子ほか 1993 『尼坂遺跡第三次（西）緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第24集  
 安部庄吉ほか 1994 『尼坂遺跡第四次緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第25集  
 鈴木明美 1986 『宇南田遺跡緊急調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第16集  
 濱田宏ほか 2013 『作屋敷遺跡発掘調査報告書』岩文埋第616集  
 溜浩二郎ほか 2014 『沢田遺跡発掘調査報告書』岩文埋第626集  
 杉沢昭太郎ほか 2012 『国分・川端・堤遺跡発掘調査報告書』岩文埋第600集  
 川又晋ほか 2012 『堰田・机地遺跡発掘調査報告書』岩文埋第601集  
 伊藤鉄夫 1977 『漆町遺跡調査報告書』胆沢町教育委員会

### Ⅲ 調査と整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査方法

**グリッド・測量** 遺構の測量や遺物の取り上げなどの測量作業に際し基準としてグリッドを設定している。グリッドは広大な遺跡全体を覆うように設計した。グリッド原点は、北西隅を起点とし、座標は  $X=-95400$ 、 $Y=21040$  とした。設定に際し、年度ごとに、以下の3級基準点を打設し、それを基準として基-1・2、補-1～27までの補助杭（4級相当）を設置した（委託）。その29本の杭を基準として発掘調査の測量を行っている。なお、平面直角座標系（第X系）を使用している。

また、例言にも記したが高さ（H値）については、諸般の事情により標高（T.P.+）ではなくGPS測量による間接水準値をそのまま使用した。平成25年度調査の基3杭では、標高（T.P.+）との差が22.7cmあり、間接水準値の方が低い。調査では、この杭を基準とするため、断面図等に記載のレベル値にはこの22.7cmの差を足せば、T.P.+の値となる。本書では、変換に伴って混乱が生じるため、標高値（T.P.+）に置き換えず、そのまま間接水準値を使用している。

[平成24年度]

T-1  $X=-95673.674$   $Y=21603.667$   $H=87.496$ （間接水準）

T-2  $X=-95716.564$   $Y=21162.508$   $H=88.926$ （間接水準）

T-3  $X=-95532.243$   $Y=21714.364$   $H=83.971$ （間接水準）

T-4  $X=-95638.242$   $Y=21601.354$   $H=85.607$ （間接水準）

[平成25年度]

基3  $X=-95600.471$   $Y=21479.781$   $H=86.320$ （間接水準）  $H=86.547$ （直接水準）

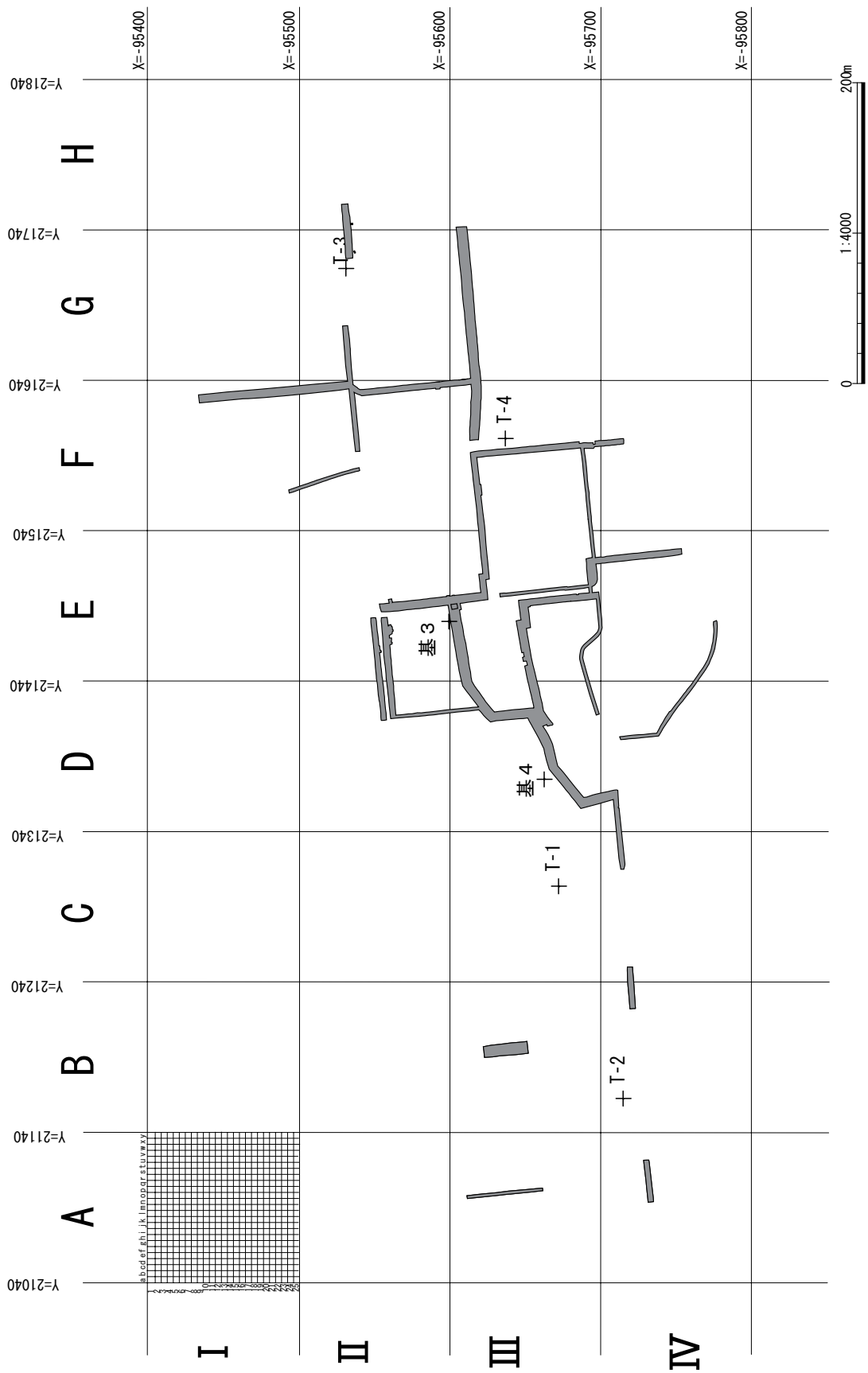
基4  $X=-95664.161$   $Y=21375.219$   $H=87.247$ （間接水準）  $H=87.474$ （直接水準）

グリッドは100m四方の大グリッドを設定し、それを東西25、南北25個の小グリッド（4m四方）に分割して使用している。グリッド名称は大グリッド（100m四方）の東西を西からA・B・・・、南北を北からI・II・・・とし各グリッドの北西隅をそのグリッド名称とした。小グリッドは東西を西からa・b・・・yまで、南北を北から1・2・・・25とし、大小グリッドの名称を組み合わせ使用している（例.IA1aなど）。グリッドはおもに野外調査時での遺物の取り上げに際し使用しており、適宜細分して使用した。室内整理作業段階ではそれを座標に置き換えて使用することが多く、本書でも同様に扱った。

**調査地区割** 今回の調査区の範囲は東西約1km、南北約400mに及ぶ広範囲にわたりかつ点在している。そのため、おおよそ調査順にそれぞれのまとまりに対し、調査区名を付与した。西から順にA・B・C区・・・としたが、隣接する場合はそれぞれのコーナーを基準にいずれかに含めている。また、広大な範囲のため、南北に走る市道を境にして西側調査区（A～D区）、中央調査区（E～P区、W～Z区）、東側調査区（Q～V区）というまとまりで調査時に呼称することもあり、本書でも使用する。なおW区～Z区については、調査中に追加されたため、中央調査区に位置することになる。

**表土掘削・遺構検出** 調査区は水田や畑作地、道路であったため、すぐに試掘トレンチを設置できた。





第6図 グリッド配置図

調査区内にトレンチを数本入れ、遺構検出面までの深さを確認する作業を行った。それにより、表土(現耕作土)を除去すると、遺構検出面であることがわかり、この高さを基準にして、それより上位層を重機によって除去した。表土の除去にあたっては、バックホウを使用し、調査員の指示のもと掘削を行っている。表土の除去後は、作業員によって鋤簾(ジョレン)などの道具を使用して遺構確認(検出作業)を行い、遺構を検出した。



第7図 遺構検出作業

**遺構精査・記録** 検出作業によって確認された遺構については、半截や土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しながら掘削をおこなった。実測図や写真などの記録を行った後に完掘を行い、記録を追加した。記録作業のうち、平面図の実測は電子平板システム(「遺構くん」(株)キュービック製)を基本に、簡易遣り方法による実測を併用しながら行っている。写真については6×7判カメラ(モノクロ)とデジタルカメラ(キャノン EOS 5D、EOS 5D Mark II)を中心に撮影を行った。調査区全景写真撮影に際してはセスナ機による撮影を委託している。6×7判フィルムについては現像して、アルバムに保管し、デジタル写真についてはRAW画像を当センターの写真専用HDD並びDVDに保管している。



第8図 機械測量

**遺構名称** 野外調査時には、調査区ごと、検出した順に、ASB01(A区の1号掘立柱建物跡)、BSK01(B区の1号土坑)のように、調査区・遺構略号・番号の組み合わせで呼称し、平面図の作成や遺物の取り上げを行った。使用した遺構略号は以下の通りである。



第9図 ふるい作業

S B 掘立柱建物跡、門跡      S I 竪穴建物跡、  
S K 土坑、S D 溝跡・塀跡・大溝跡  
S L 焼土      S X 不明遺構      P 柱穴

本書においても、基本的にこの呼称を使用している。

**その他** 本書は平成24年度と平成25年度の複数年度の調査をまとめた報告書となっている。



第10図 雪中作業

(2) 調査経過

[平成24年度調査]

7月2日 調査開始。器材搬入、現場設営を行う。  
当初は調査員2名（溜・小野寺）、作業員9名のみのため、調査区全域の表土除去と検出作業を優先させ、遺構数・内容の把握に努めるという作業方針をたてた。

7月3日 試掘トレンチで土層・遺構の確認を行いつつ、重機による表土除去を開始。西側の調査区から順に表土除去、遺構検出作業を行っていく。

7月9日 西側調査区の表土除去と検出を一旦終え、東側調査区へと移行する。西側調査区は、遺構密度が少ない検出状況であった。

7月20日 東側調査区の表土除去と遺構検出を終え、中央調査区に移行する。V区としたところ以外は遺構が密集している状況がうかがえた。竪穴建物跡も複数存在することもわかった。V区は大きく削平があることがわかり、表土直下が削られた地山となる。

7月30日 重機による表土除去作業がほぼ終わり、遺構の内容がおおよそ明らかとなった。中央調査区と東側調査区には、高密度に遺構が集中し、竪穴建物跡だけでも40棟以上存在することが予想された。また、本来近隣で調査を行っている石田Ⅰ・Ⅱ遺跡から合流するはずの調査員・作業員が、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査延長にともない、予定期間に合流できなことも判明した。今後の調査方針として、調査員・作業員増員までは比較的遺構密度の低い西側調査区の精査を優先すること、調査員・作業員増員後は東側調査区から精査を進めることを決めた。中央調査区は一番遺構密度が高いこと



第11図 現場説明会



第12図 調査参加者（H24年度）



第13図 調査参加者（H25年度）

第1表 野外調査の工程表

野外調査	H24年度						H25年度			
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	4月	5月	6月	7月
試掘・表土除去										
西側調査区（A～D区）										
東側調査区（U・V区）										
東側調査区（Q・R・S・T区）										
中央調査区（F・G・J・K・L・M・N・P・X区）										
中央調査区（I・O・W・Y・Z区）										
中央調査区（E・H区）										

1 野外調査

から、最後にまとめて行い、あわせて次年度に継続できないか打診することとなった。

- 7月31日 西側調査区の精査を開始。以降、この範囲の遺構精査を進める。
- 8月23日 西澤・鈴木・佐藤（英）調査員が合流し、作業員も増加する。東側調査区の精査開始。
- 8月30日 西側調査区の精査が終了する。以降東側調査区へ合流する。
- 9月3日 高木・巴・野中調査員合流する。東側調査区全域で精査が進む。V区東端にある大溝が、Q区にも存在することがわかり、連続するひとつの遺構である可能性がでてきた。以降精査を進めたが、U区やV区で12世紀の陶器が発見され、該期の遺構の存在が予想された。堀跡の確認もこの時期に行っている。
- 9月18日 中央調査区へ一部の班が移行する。
- 9月25日 東側調査区の県教育委員会による部分終了確認が行われる。
- 10月4日 東側調査区の精査がほぼ終了し、中央調査区へすべての班が移行する。
- 10月18日 中央調査区のうち、J・F・K区精査が順調に進むもののいまだ手つかずの調査区が多数あることから今後の見通しを委託者と当センターとの間で協議を行った。
- 11月10日 現地説明会 約110名の参加であった。
- 11月13日 委託者との協議。今年度は、中央調査区のなかで調査が進んでいるF・G・J・K・L・M・P・X区の調査を終了させることとし、残りは来年度に継続することが決まった。
- 11月27日 積雪のため作業が大幅に遅れる。調査環境がかなり悪化する。
- 12月14日 航空写真、撤収作業を行い、平成24年度の作業を終えた。

[平成25年度調査]

- 4月4日 器材搬入、現場設営を行う。
- 4月5日 昨年度からの継続調査のため、遺構検出作業から始める。N・I・O・W・Y・Z区とE・H区とに班を分け、2班同時進行で調査を行った。
- 5月1日 N区の調査がほぼ終了し、O区とI区の精査に主体は移る。
- 5月7日 範囲が不確定であったZ区とW区の位置が確定し、重機による表土除去を開始した。なお、現在使用されている道路を横断する箇所が4箇所あり、以降、通行止めの処置を行いつつ、速やかに調査を行った。
- 5月14日 道路下の調査区（N区西側）の部分終了確認を行う。
- 5月21日 Y区調査開始。天候がよく、調査は順調に進んでいく。

第2表 室内整理の工程表

室内整理	H24年度					H25年度											
	11月	12月	1月	2月	3月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
土器・土壌洗浄																	
接合・復元																	
実測																	
トレース																	
PCトレース																	
図版組																	
写真撮影																	
収納																	
原稿執筆																	

- 5月28日 W区の調査開始。
- 6月1日 高木主任専門員千苺遺跡へ異動
- 6月5日 この頃には、N、I、O、Z区の調査の目途がたち、Z区とH区の調査が中心となっていく。
- 6月22日 現地説明会を開催。参加者130名
- 6月30日 巴調査員が千苺遺跡へ異動。
- 7月5日 水沢地区センター（公民館）の見学。参加者50名。7月に入ると降雨が多くなる。
- 7月11日 終了確認を行う。
- 7月12日 残りの調査、撤収作業を終え、調査を終了する。古文書の会の見学。参加者12名。

## 2 室内整理

### (1) 室内整理の工程

室内整理作業は、野外調査終了年と次年度2回の都合2回に分けて行った。平成24年度の室内整理は平成24年11月1日から平成25年3月31日までと、平成25年度の整理作業を含めて、平成25年5月1日～平成26年3月31日まで行った。

**遺構** 平面図を中心に電子平板で作成したため、コンピューター上で合成・修正・図版組を行った。全体図を作成したのち、各遺構図を切り抜いて図版作成を行っている。

**遺物** 水洗後に注記→接合→実測→トレース→写真撮影→図版作成の順で作業を行った。土器・陶磁器類は破片が多く、実測可能な遺物の割合は少ない。反転復元が不可能な遺物については実測を行っていない。ただし、いわゆる中世陶器や輸入陶磁器については県内での出土事例が少ないことから、反転復元が不可であっても、全点掲載している。

石器については、ツール類を中心に掲載している。磨石等の礫石器類については、選択を行った後に掲載している。金属製品についても図化可能な遺物については極力図化を行った。遺物の登録番号は、当センターの写真撮影記号に準じて下記の種別ごとに記号を振り分け、それに通し番号を付与した。

A：土器類、B：土製品、C：陶磁器、D：石器類、E：石製品、F：金属製品、G：銭貨、H：木製品、I：植物遺存体、J：骨角器、K：動物遺存体、L：鞆羽口、M：炉壁、N：鉄滓、O：土壌サンプル、P：その他

調査や整理は2年分に及ぶため、番号の最初に12・13と付記した。たとえば、12年度の土器1番の場合は、12A001となる。この番号で遺物を管理し、掲載遺物については本書にも掲載番号とあわせて掲載している。

なお、遺物の実測については、従来通り、室内作業員による実測→ロットリングペンによるトレース→台紙上での図版組という方法で行っている。

**写真撮影** 遺物の撮影は、当センターの写真技師により、デジタル画像を中心として撮影を行っている。本書で使用するほか、保管用ディスクに保存している。

### (2) 図の掲載方法

掲載する図の縮尺等については、原則的に下記の通りである

#### 遺構図

竪穴建物・掘立柱建物・土坑平面・断面図：1/50

## 2 室内整理

竪穴建物のカマド平面・断面図：1/25

竪穴建物掘方平面図：1/80

溝跡平面図：1/100、断面：1/50

大溝平面図：1/200、断面：1/50

材木塀平面図：1/100、1/150、断面図：1/50

その他の遺構：1/50

上記や上記に該当しないものはスケールに縮尺を記載している。

### 遺物図

土器・陶器破片実測：1/3

剥片石器：1/2

礫石器：1/3

土・石製品：1/2

金属製品：1/2

なお写真図版については、縮尺は任意である。

### (3) 実測図の表現方法について

#### 遺構

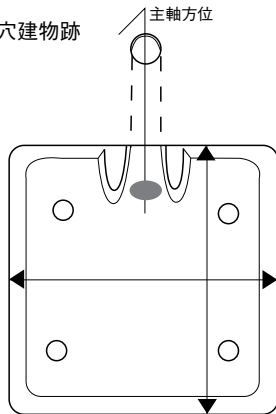
代表的な遺構の計測位置については、第14図のように行った。また、焼土や炭化物の範囲については、網掛けの表現を用いており、各挿図に凡例をつけた。

#### 遺物

遺物の実測図の表現については、第14図の通りである。詳細は、当センター報告書第607集による(福島2013『中嶋遺跡発掘調査報告書』第607集)。

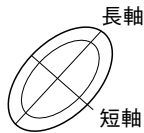
### ■平面図の計測位置

#### ■竪穴建物跡



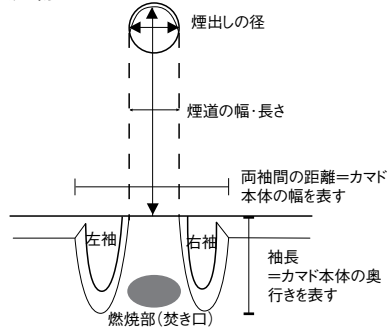
竪穴建物の規模は、東西と南北辺の大きさを計測する。調査区内に一部しかはらないものは一辺の長さを計測した。主軸方位は、カマドありの場合は、カマドの主軸を建物方位とする。カマドなしの場合は、建物の四辺のうち残りのよいものを基準とする

#### ■土坑



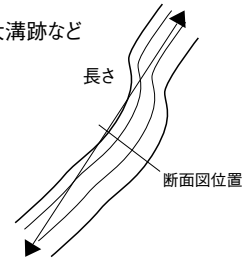
土坑の規模は、長軸の長さ(長径)と短軸の長さ(短径)を計測する。

#### ■竪穴建物カマド



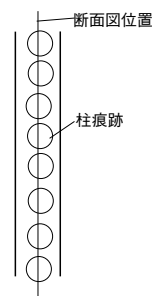
カマドは、本来の形を推定できる場所を計測した。

#### ■溝跡・大溝跡など



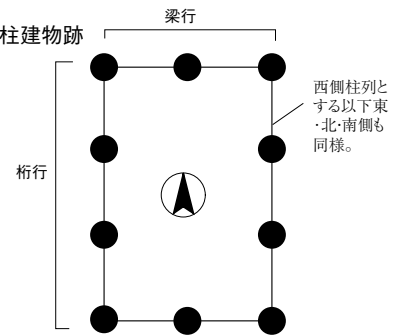
溝跡の長さは直線距離で計測する。断面図の位置は、原則横断面を図化する。

#### ■材木堀跡



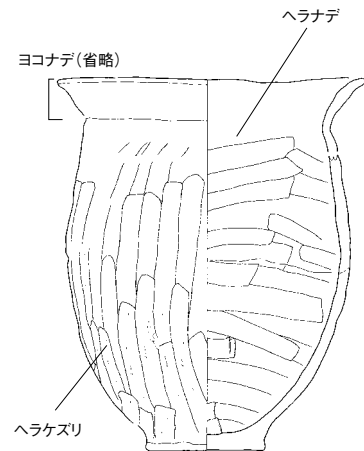
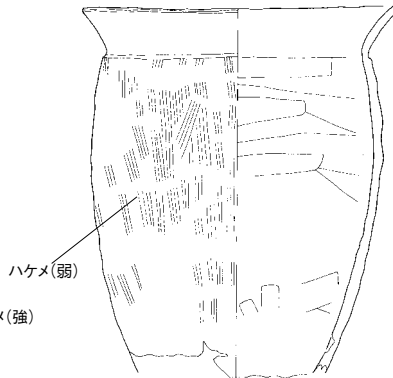
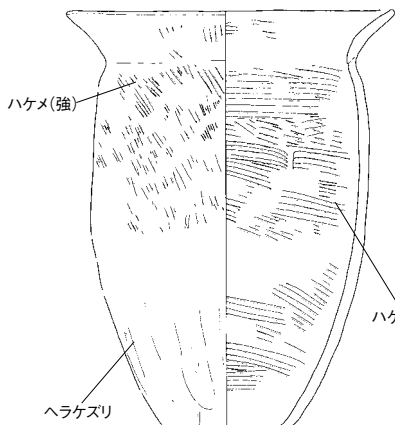
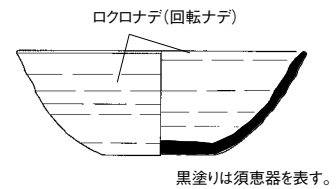
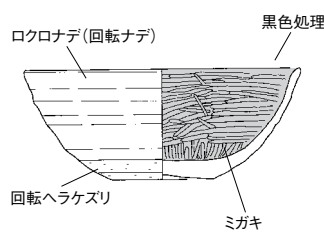
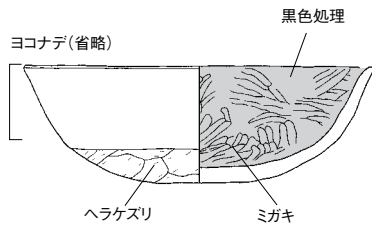
検出面から柱痕跡が確認できる位置まで段下げをしたのちに、縦断面を図化。その際、平面で記録した柱痕跡と、縦断面の柱痕跡が対応しない例は、断面を優先し、対応しない柱痕跡(平面図)は削除した。

#### ■掘立柱建物跡

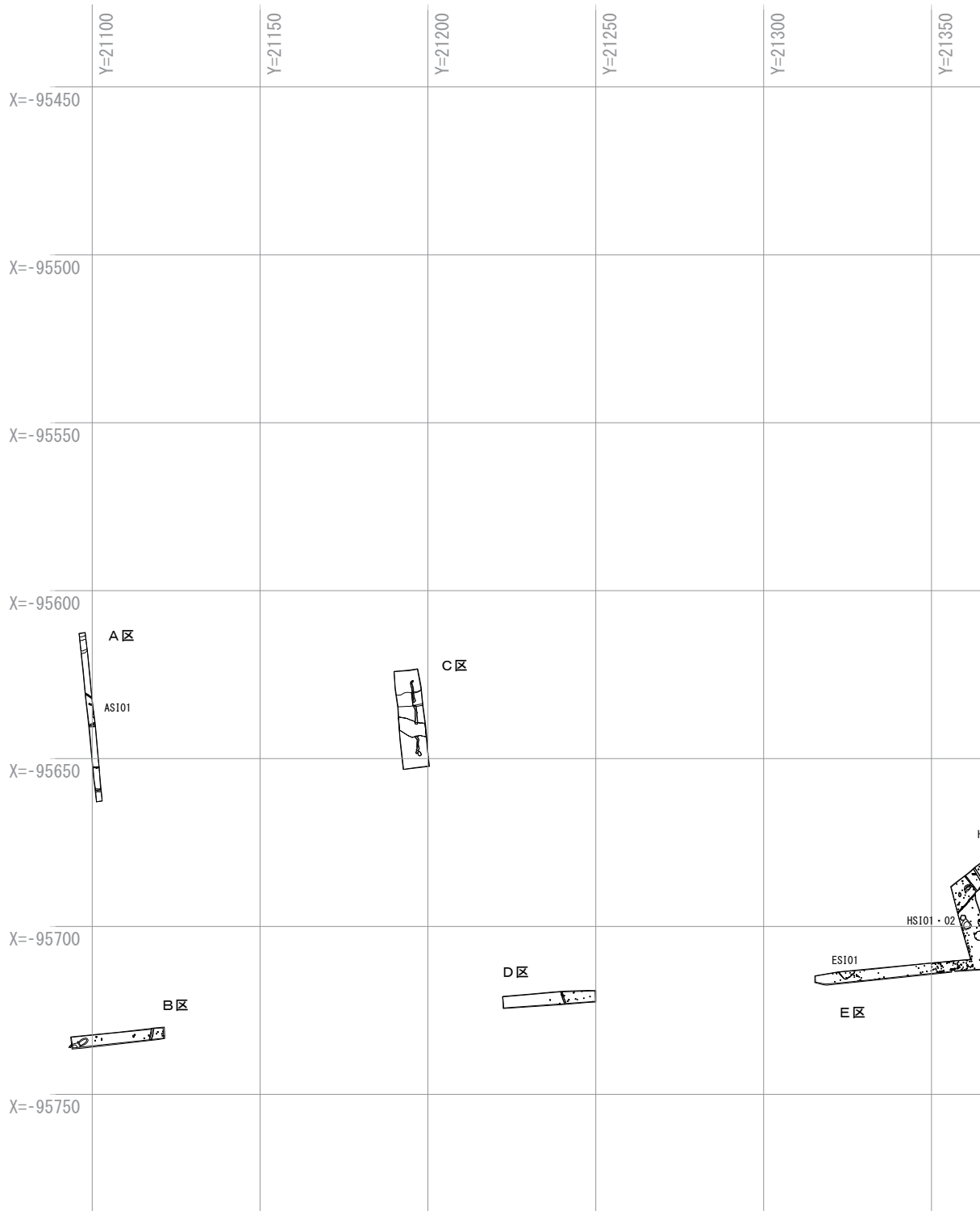


柱間寸法は、等間あるいは規則性のある寸法を復元する。規模の計測は、梁行×桁行の順に復元した柱筋(柱間寸法の合計)で行う。建物方位は東西棟・南北棟に関わらず、北に対する振れ幅を示す。残存状況のよい柱列を基準として計測する。

### ■土器の表現方法



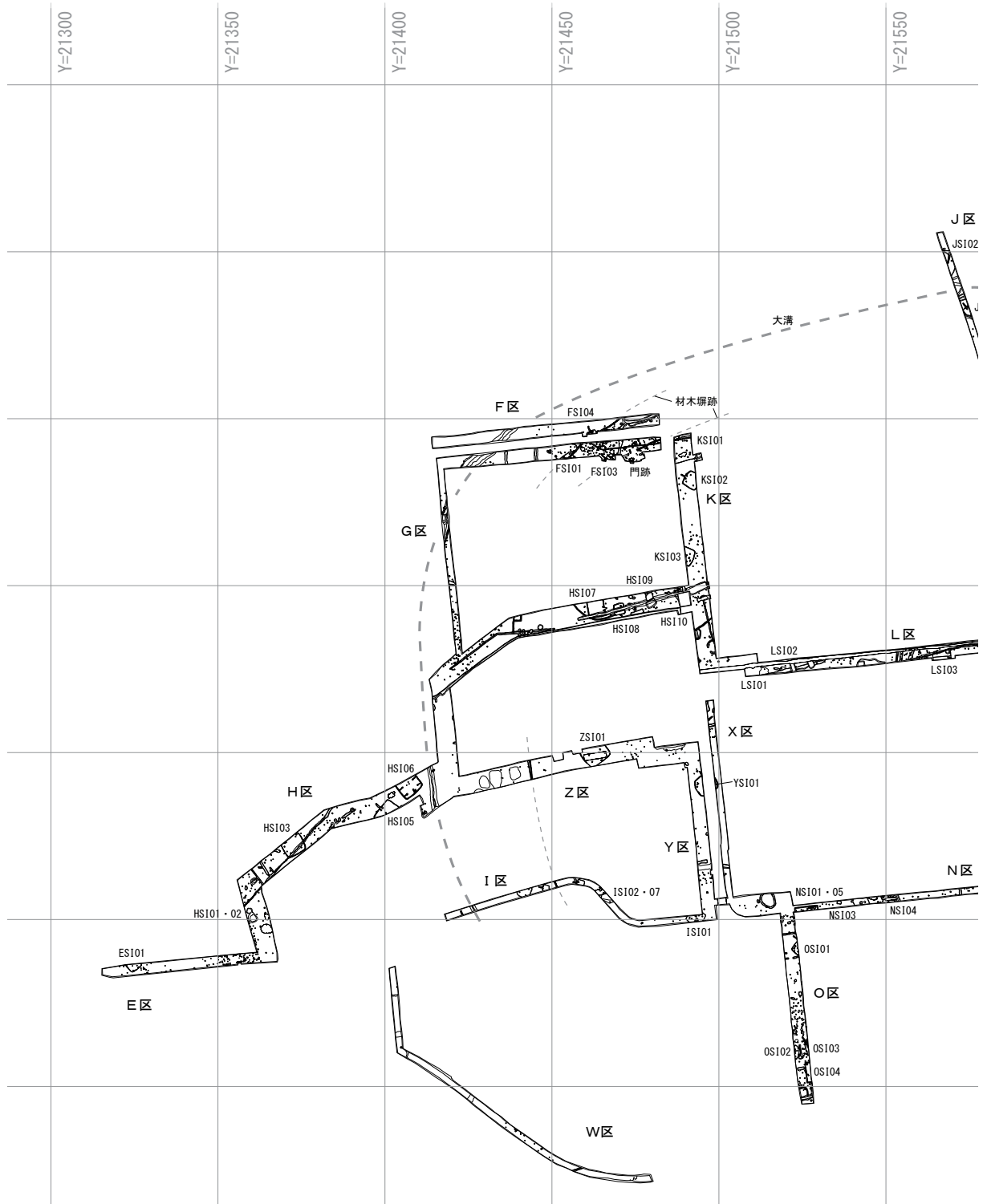
第14図 凡例・計測位置図



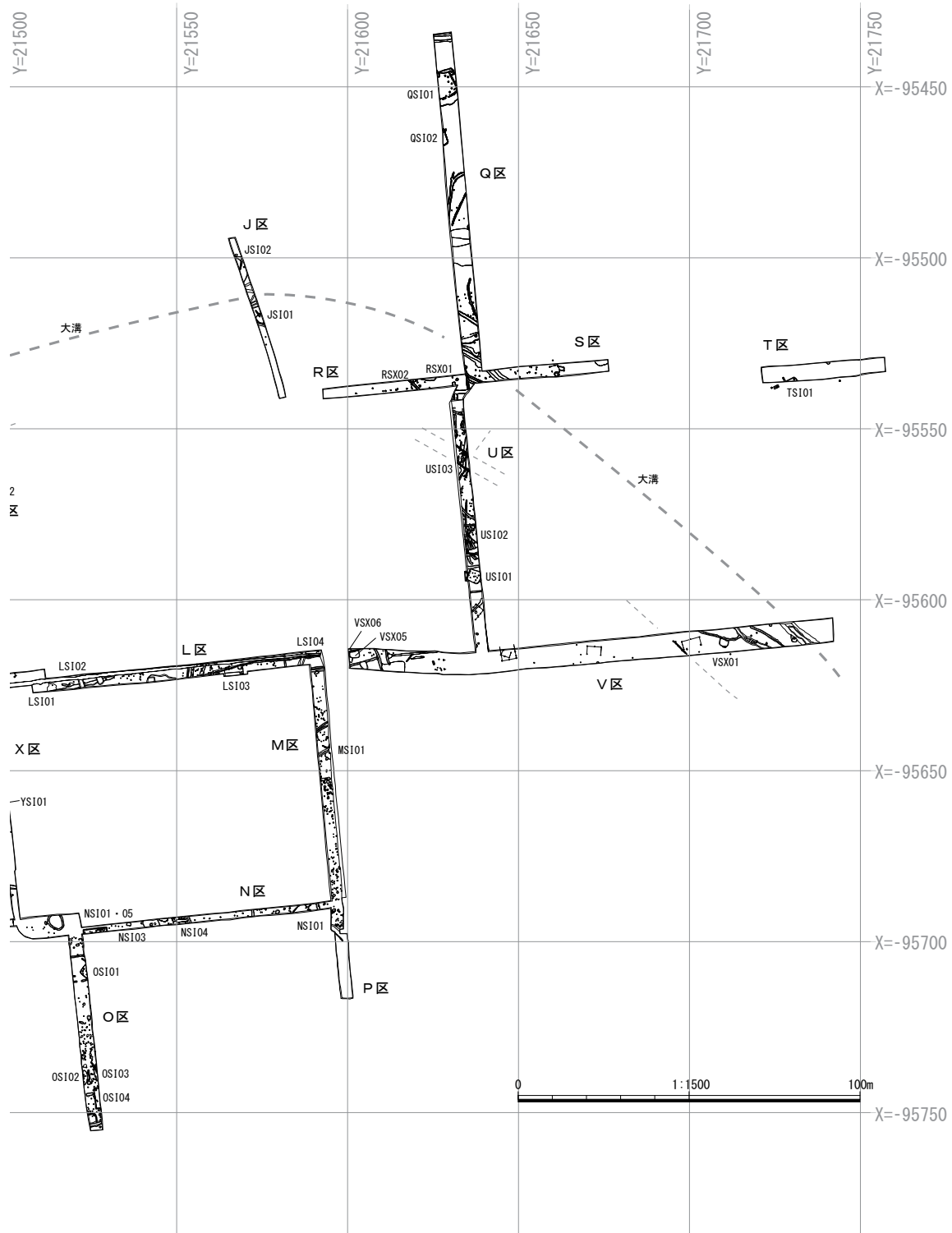
※1/500遺構配置図については付図として別紙とした。

第15図 遺構配置図1





第16図 遺構配置図2



第17図 遺構配置図3

## IV 調査内容

### 1 各調査区の概要

前述のように今回の調査区は26の調査区に分かれている。ここでは、この各調査区の概要を3大別して記述する。

#### (1) 西側調査区

A区～D区が該当する。今回の調査ではもっとも西側に位置し、平成24年度の岩手県教育委員会の試掘調査によって新たに遺跡として追加された範囲でもある。

遺構密度としては他の調査区よりも低く、遺構が点在している状況である。遺構確認面はⅡ層やⅢ～Ⅳ層上面であり、他の調査区よりも削平があまり及んでいない可能性がある。竪穴建物跡は1棟のみA区から検出され、周囲に複数の存在が予想されるが、中央調査区のように密集した状況ではなさそうである。そのほかは、溝跡が9条検出されているが、調査範囲が狭いこともあり、内容はよくわからない。柱穴やピットはD区周辺に集中しており、建物跡になる可能性がある。C区からは、沢跡状落ち込みが確認されることから、遺跡のある微高地上もいくつかの小さな旧河道が存在している。このような遺構分布の状況は、集落の周辺域の様相を示しているかもしれない。

#### (2) 中央調査区

E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P区とW・X・Y・Z区がこの範囲に含まれる。遺跡の中心的な範囲と想定した区域でもある。大溝跡であるISD01・HSD05・GSD01・FSD01・JSD03があり、中央調査区の北側から西側を囲む。この大溝はさらに東側調査区の方へ続いている。遺構の中心は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、大溝跡、材木堀跡、門跡などである。竪穴建物は、奈良時代のものが大半であり、平安時代のものが少数ある。中央調査区からは合計43棟を検出している。古代や古代以降の掘立柱建物跡もF区やE・H区周辺で多く見つかった。中央調査区北側では、材木堀の途切れた場所に門跡を検出している。このように重要遺構が集中する範囲であるため、遺跡の中心的な地点と考えられるが、調査範囲の狭さから、その内容には不明な点が多い。

地形的には、第3図で見たように全体的に西から東に尾根状に傾斜し、その頂部に相当する部分がこの中央調査区となる。その南側では、P区やW区で地形の落ち込みを確認しており、ここに傾斜変換点があり、遺跡範囲を限ると想定している。

#### (3) 東側調査区

Q・R・S・T・U・V区がこの範囲に含まれる。遺跡範囲の最も東側に相当する。U区を中心に遺構密度はかなり高く、重複遺構が多数を占める。ただし、V区は西端を除き、開田の際に大きく地形が改変されているため、遺構の残存は少なかった。周囲の状況から見ると本来はU区と同様に遺構密度が高いことが予想される。

この調査区では、遺跡の東を区切ると考えられる大溝跡が、V区東端、Q区南端付近で検出されている。今回の調査での成果のひとつである。さらに近接して、材木堀跡が大溝跡と同様の方向で存在する。竪穴建物跡は12棟の調査を行った。北側のQ区からU区にかけて集中し、T区に離れて2棟存

在している。このほか内容がよくわかっていない溝跡のなかには、12世紀に属するものがいくつかある。常滑や渥美焼の陶器を出土するもので、これも大溝跡と同様の方向に延びているようである。この方向は、先述した舌状に東に延びた台地の縁辺に相当すると考えられることから、地形に影響を受けていた可能性がある。掘立柱建物跡はQ区からV区にかけて点在している。建物として認定できない柱穴もU区には多いことから、竪穴建物と同様に、周辺一帯に分布していたと考えられる。ただし、建物跡の時期はよくわかっておらず、幅広い時期のものがあると考えられる。

こうしてみると、この調査区は遺跡の中心分布の東端から周辺にかけての範囲と想定することができよう。大溝を境にして東側は遺構の分布密度が低くなっている状況である。ただし、北側のQ区では大溝の外側（北側）でも、密度はあまり低くない。北側についてはまだ遺構のつながりが予想される。この方向に隣接する二本木遺跡との関連も考慮に入れる必要がある。

## 2 基本層序

調査区は平坦な微高地上にあるため、基本層序は単純である。しかしながら、農地として利用されていたため、度重なる土地改良が行われ、本来の土層堆積が確認できる地点は少なかった。以下は、比較的良好な地点の層序を組み合わせたものであり、これを基本層序としている。

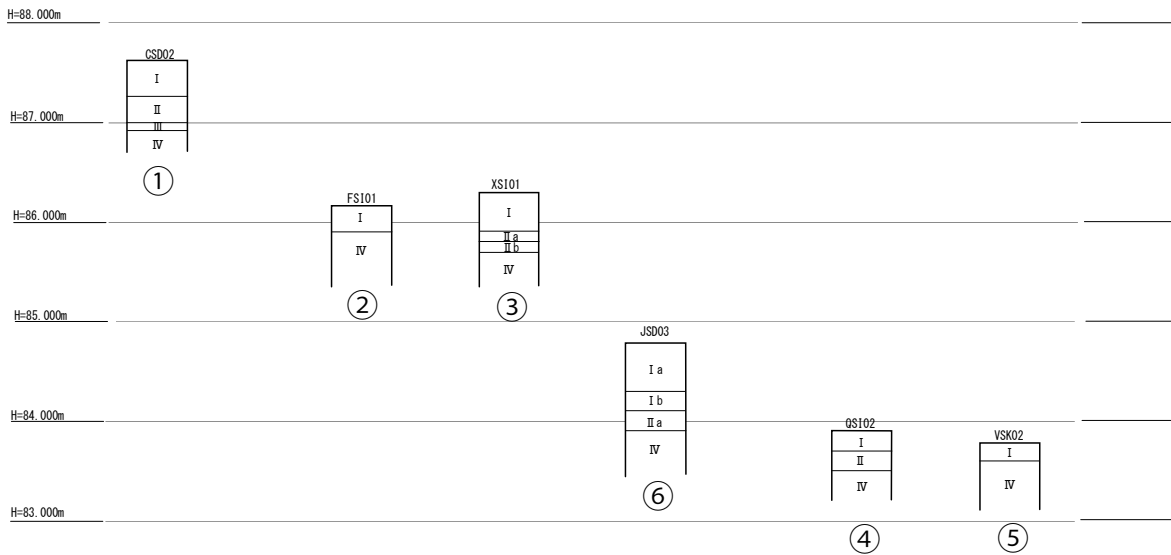
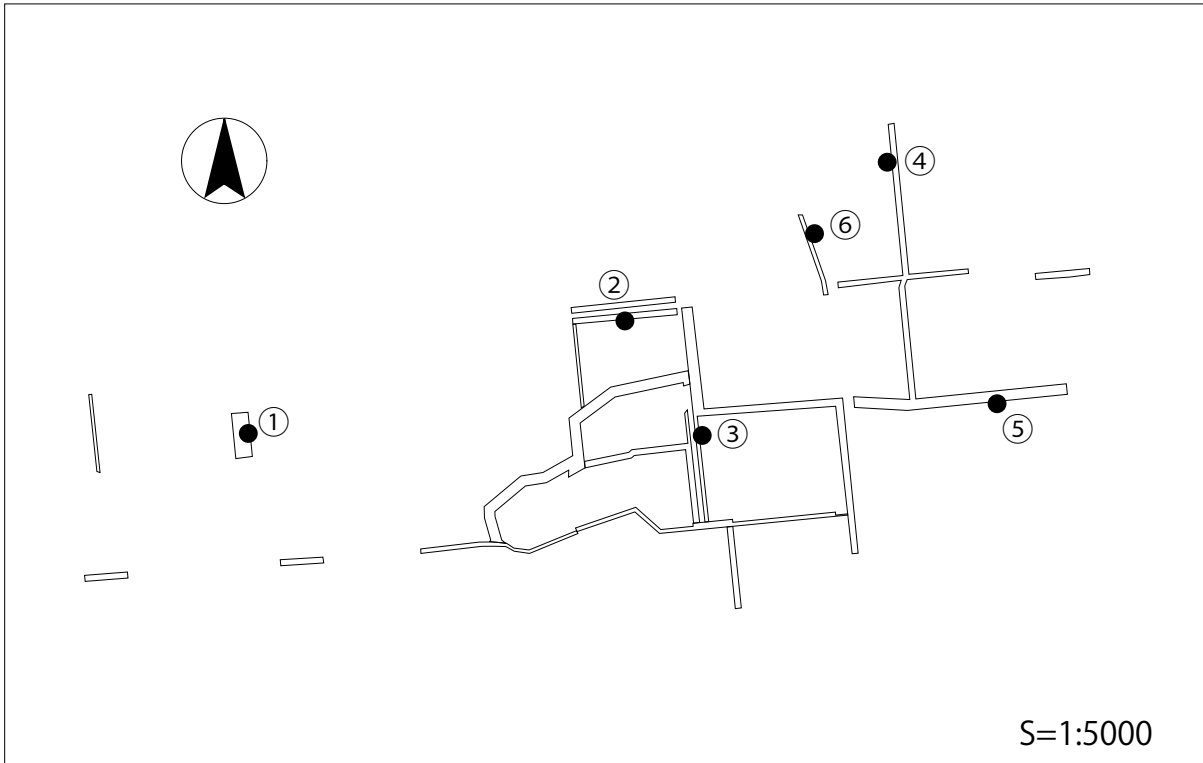
**I層** 褐灰色～黒褐色を呈するシルトである。表土であり、大部分の地点で水田耕作土として使用されている。耕地整理前の旧耕作土や盛り土などもこの層に含めている。

**II層** 黒褐色シルトである。標高の低い地点（南側）によく残存しており、縄文から古代の遺物包含層である。しかし、今回の調査区の大部分では、ほぼ削平されており、残存する地点は少ない。

**III層** 灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する粘土質シルトである。下層であるIV層との層界は比較的不明瞭であり、漸移的に移行することが多い。II層と同様に残存している地点が少ない。

**IV層** にぶい黄橙色～明黄褐色を呈するシルトや粘土質シルトである。全地点で確認された層で、基盤となる層である。I層直下がIV層となる地点が多く、そのため、IV層自体も削平を受けている。この層上を遺構検出面とすることが多い。

I層が表土や旧表土となり、重機によって除去した部分である。II層以下が、本来の堆積状況を示していると考えられるが、上述のように多くの地点で削平されている。したがって、表土直下がIV層となる地点が多く、またこの層自体もかなりの部分が削平を受けている場合がある。とくにV区では、検出面がかなり削平されており、遺構は大溝以外浅いものが多くなっている。また、西側調査区の遺構確認面は標高が87.0m前後であるが、東側調査区では83.8m前後となる。また、中央調査区の北側と南側では、前者が84m前後であるのに対し、後者では85.8m前後となる。したがって、遺構確認面では、西から東側に向かって、南から北側に向かって傾斜していることがわかる。これは前述した現地表面における地形の傾斜とほぼ対応している。

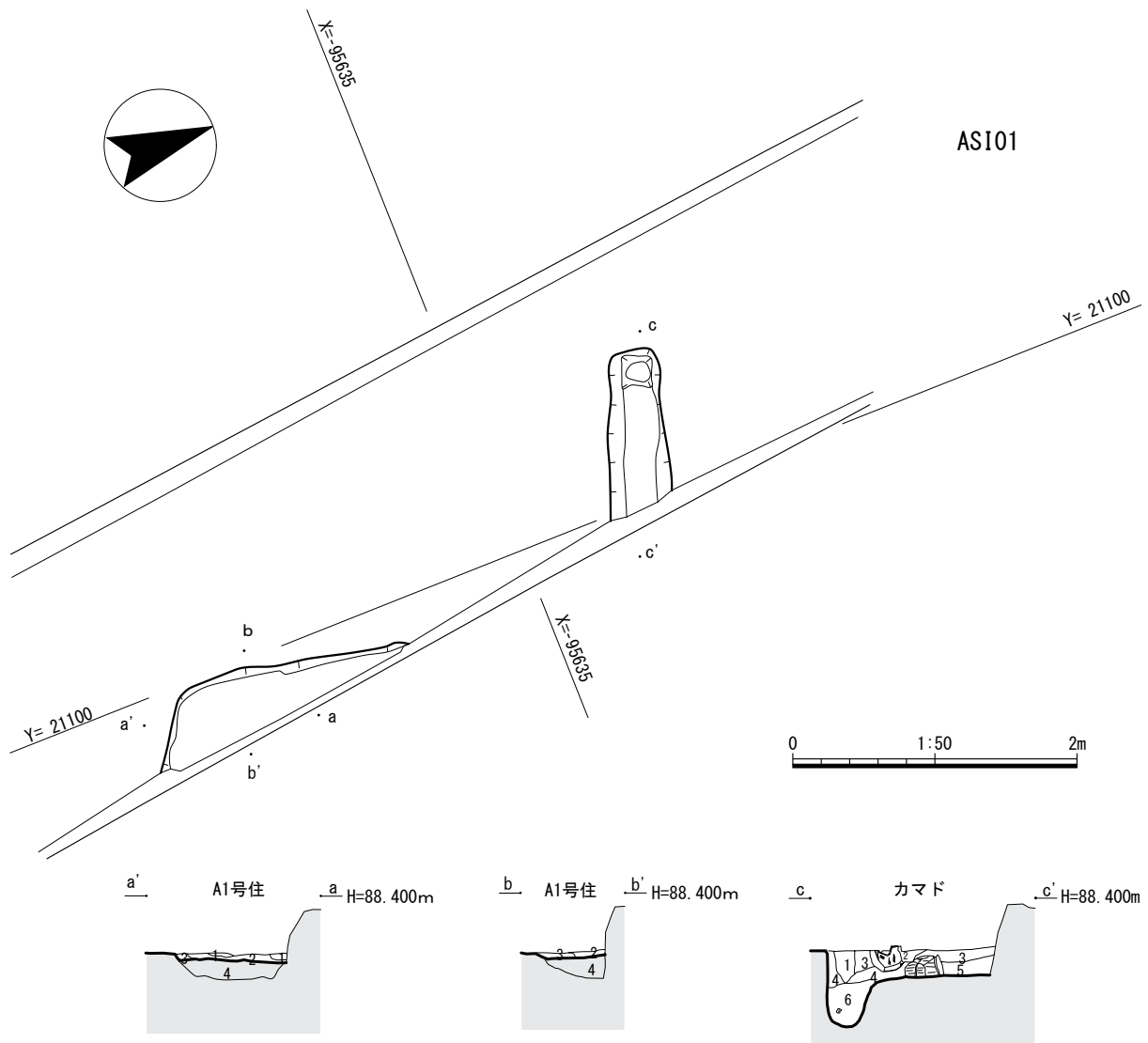


第18図 基本土層模式図

### 3 遺構と遺物

#### (1) 竪穴建物跡

調査区各地より検出されている。57棟に及ぶが、このうち4例は、規模や構造の点で他とは異なっている（一辺が3 m程度でかつカマドが確認できない）。これらを住居以外の機能が想定されるものもここに含めている。なお、遺構の時期については第VI章第1項で検討したものを記載している。



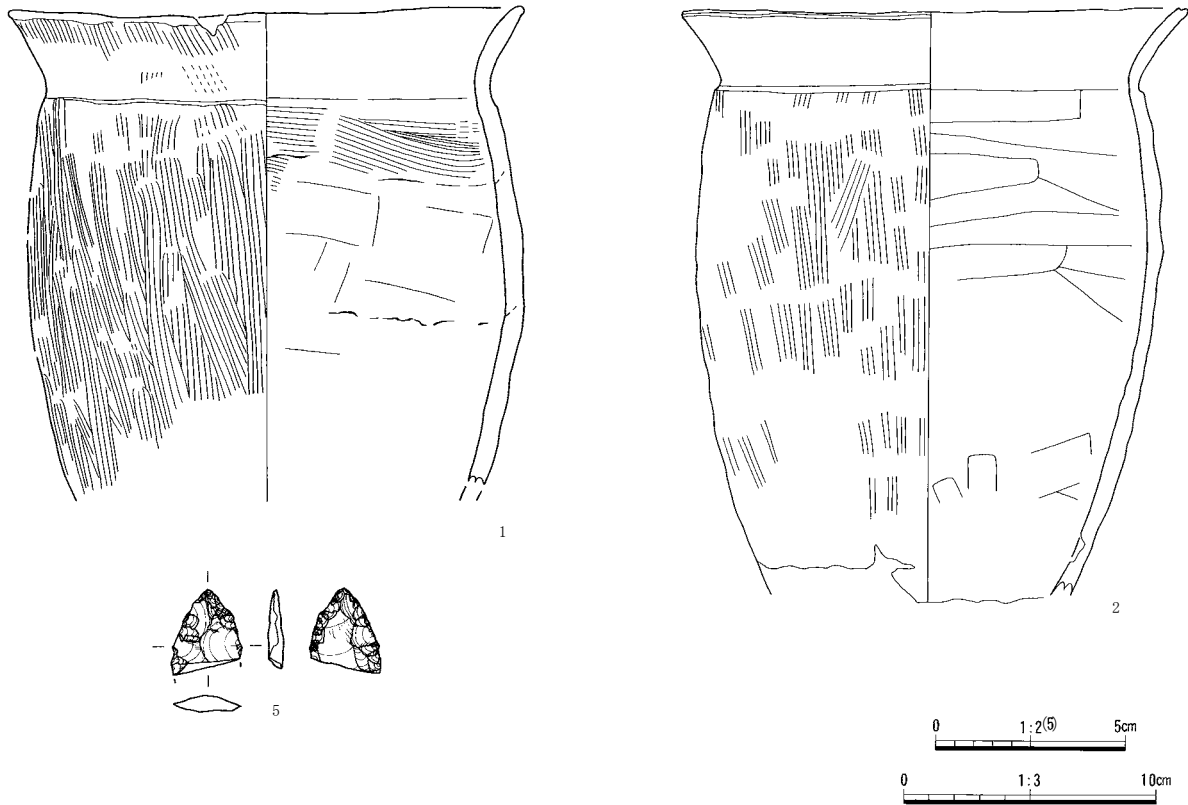
ASI01

- |                      |                                 |
|----------------------|---------------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1   | 酸化鉄粒 5%を含む                      |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2  | 暗褐色粘土粒 (10YR3/3) 20%、酸化鉄粒 5%を含む |
| 3 黒色粘土質シルト 10YR2/1   |                                 |
| 4 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 | にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 30%混合する。<貼床>  |

ASI01煙道

- |                      |                                |
|----------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1  |                                |
| 2 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 | 褐色シルト (10YR4/4) 5%を含む          |
| 3 褐色シルト 10YR4/4      | 暗褐色シルト (10YR3/3) 10%を含む        |
| 4 暗褐色シルト 10YP3/4     | 暗褐色砂粒 (10YR3/3) 20%、炭化物粒 5%を含む |
| 5 黒色シルト 10YR2/1      |                                |
| 6 黒褐色シルト 10YR2/2     |                                |

第19図 ASI01 竪穴建物跡



第20図 ASI01出土遺物

## ASI01 (第19~21図)

A区中央部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の南西辺の一部とカマド煙道を調査したのみであり、したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のⅢ層からⅣ層上面で行った。重複は調査区内では確認できない。

平面形は不明であるが、南西隅が鈍角気味に屈曲するため、ややいびつな方形を呈すると推定される。規模も一部の調査のため不明となる。煙道部は長さ1.14mのみ確認している。建物方位は、調査した南辺ではN-55°-Wである。床面も全体は不明であるが、調査した範囲では平坦であり、深さは確認面から8~10cmと浅い。掘方は調査した範囲では、ほぼ全体的に掘り込まれており、深さは床面から14cmである。堆積土は3層確認し、いずれも黒色から黒褐色を呈する粘土質シルトである。貼床は黒色とにぶい黄橙色との混合土であり、やや堅くしまっている。

建物跡には煙道の存在から西壁にカマドが付設されていると想定される。調査区内にある煙道の方位はN-68°-Wである。調査区内での長さは1.14m、幅は最大で42cmである。煙道先端に煙出し孔があり、確認面からの深さは52cmである。堆積土は6層が確認される。1・6層は黒褐色、2・5層は黒色、3層は褐色、4層は暗褐色を呈する粘土質シルトやシルトである。

遺物は、建物内や煙道を中心に2.11kg出土している。煙道からは土師器甕が2個体分横位あるいは倒立状態で出土しており(1・2)、原位置を保っていると考えられる。そのほか混入と考えられる石鏃(5)が出土している。時期は、建物方位や出土遺物から漆町Ⅱ期に位置付けた。

## ESI01 (第22～26図)

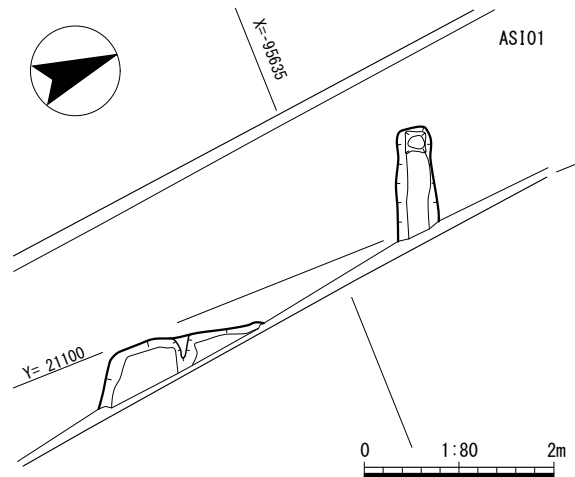
E区西部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の南辺約半分を調査したのみであり、残りは北側の調査区外にある。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複は調査区内では確認できない。平面形は不明であるが、隅丸の方形を呈すると推定される。規模は調査した、西壁と東壁の一部で計測すると、東西約4mとなる。建物方位は、調査した西辺ではN-39°-Wである。床面も全体は不明であるが、調査した範囲では平坦であり、深さは確認面から8～10cmと浅い。床面には、途切れている箇所もあるが、壁面に沿って壁溝が構築されている。幅は10～18cmで、深さは床面から5～6cmである。掘方は調査した範囲では、いずれも中央部よりも壁面付近を深く掘削するもので、床面から6～12cmの深さで貼床が施されている。

堆積土は3層に区分する。1・2層は黒褐色を呈するシルトで、建物跡の埋土である。3層は同色と黄褐色を呈する粘土質シルトとの混合土であり、貼床の構成土となる。

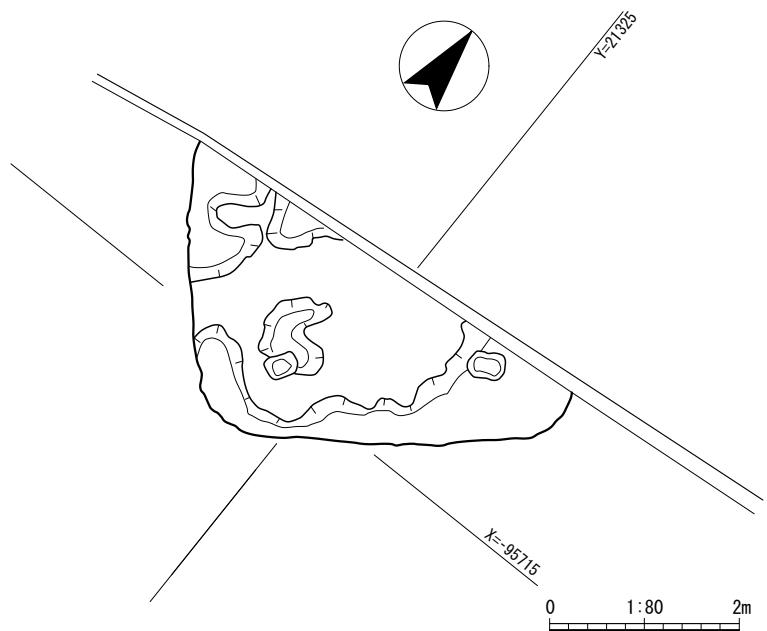
カマドは調査区内には存在せず付近の建物跡と同様に北辺に設置されていると予想される。そのほか床面には土坑1基、ピット5個を確認している。土坑(SK1)は建物跡南辺の中央やや東よりの位置に接して位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺60cm、短辺40cmであり、深さは床面から20cmである。堆積土は黒褐色を呈するシルトの単層であり、上部に土師器片が出土している。ピットは5個とも大きさや位置などから主柱穴を構成するものではない。いずれも円形から楕円形状を呈し、規模は18～32cm、深さは10～26cmである。堆積土は黒褐色から黒色を呈するシルト層の単層である。

遺物は、堆積土や床面中央から7.62kg出土している。床面中央には、土師器壺が押しつぶされたような状態で出土している(9・第24図)。上部が削平されているものの、原位置を保っていた可能性がある。そのほか土師器の非ロクロ調整の甕(6・7)、非ロクロ調整の杯片などが出土している。

時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町I期に位置づけた。

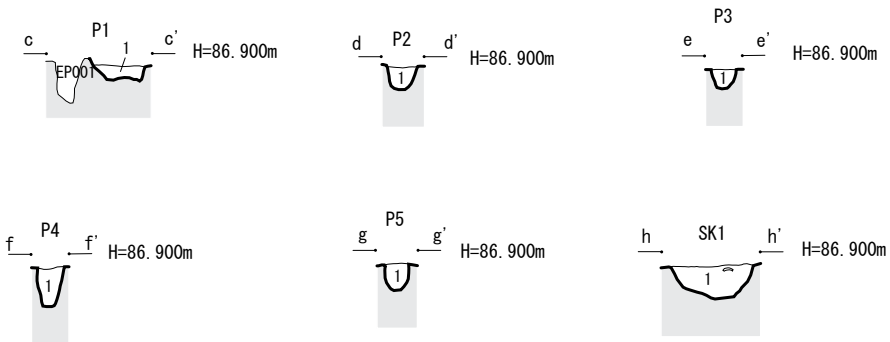
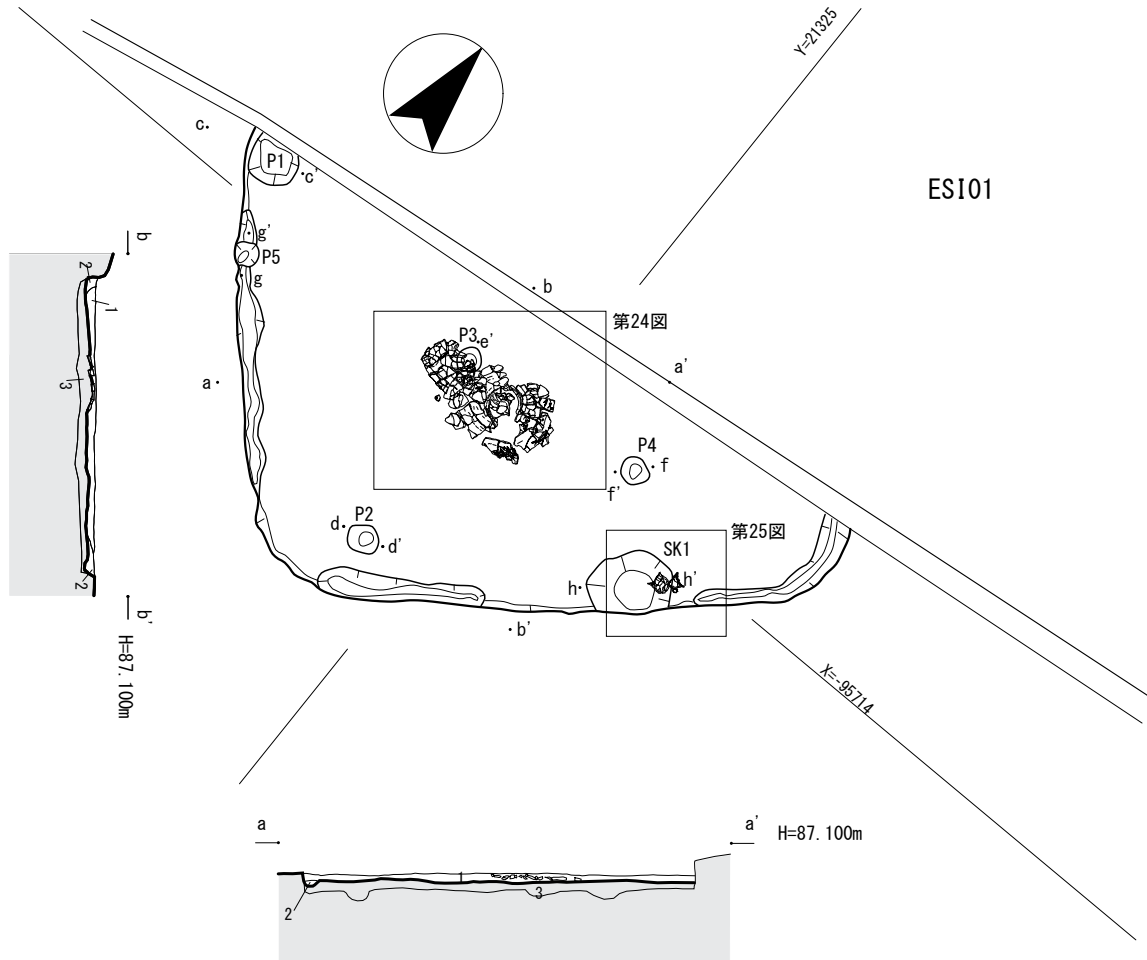


第21図 ASI01竪穴建物跡 (掘方)

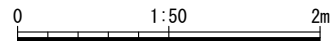


第22図 ESI01竪穴建物跡1 (掘方)





- ESI01
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~10mm) 5%を含む
  - 2 黒褐色シルト 10YR2/2 暗褐色シルト (10YR3/4) 10%、黄褐色シルト粒 (5/8) (径1~5mm) 7%を含む
  - 3 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) と黄褐色シルト (10YR5/8) (径20~40mm) 40%との混合土 (貼床)
- ESI01 P 1
- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1cm以下) 5%を含む
- ESI01 P 2
- 1 黒色シルト 10YR2/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) 1%を含む
- ESI01 P 3
- 1 黒色シルト 10YR2/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) 1%を含む
- ESI01 P 4
- 1 黒色シルト 10YR2/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) 1%を含む
- ESI01 P 5
- 1 黒色シルト 10YR2/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) 1%を含む
- ESI01SK11
- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1~2mm) 1%を含む



第23図 ESI01竪穴建物跡 2

## FSI01 (第27図)

F区中央部に位置する竪穴建物跡である。今回の調査では、建物跡の北東部付近の一部のみを調査したに過ぎず、大部分は調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI層除去後のIV層で行っている。FSD03、FP117と重複し、これらよりも古い遺構となる。

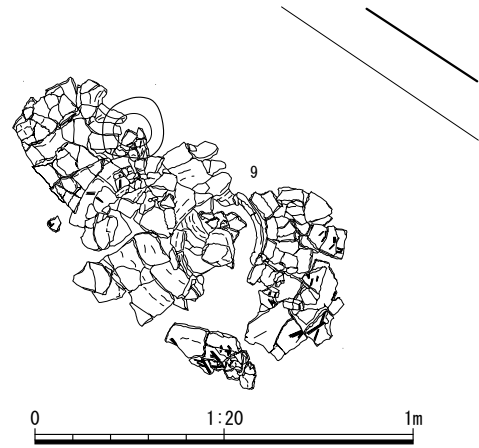
調査した北東部付近の形状から推定すると、ほぼ方形を呈する平面形となろう。規模は、大部分が調査区外にあるため、全容は不明であるが、調査した範囲では、北辺が3.3m、東辺が2.6mである。確認面から床面までの深さは20cmである。建物方位は、北辺を基準にするとN-48°-Wである。床面は、黒色と黄橙色の粘土質シルトの混合土を充填して、ほぼ平坦に構築されている。堆積土は4つの層が確認できる。最初に3層の黒褐色シルト層や4層の黒色シルト層が堆積し、その後黒褐色を呈するシルト層(1・2層)がやや厚く堆積している。

建物跡に付属する施設には、土坑が2基、ピット3個がある。土坑1は東辺の調査区際に位置する。一部が調査区外にある。平面形は、楕円形と推定され、規模は長径68cm、深さは床面から16cmである。堆積土は4つの層があり、いずれも黒色を呈する粘土質シルトである。このうち8・9層は水平に堆積していることから人為堆積かもしれない。土器片がまとまって出土しており、収納施設あるいは貯蔵用の施設の可能性がある。土坑2は北辺から南に約80cmの床面に構築されている。約半分が調査区外にある。平面形はほぼ円形を呈すると推定され、半径は62cmである。断面形はすり鉢状を呈しており、深さは床面から28cmである。堆積土は2つの層があり、いずれも黒色を呈する粘土質シルトである。ピット(小穴)は3個が床面に構築されている。P1は北東隅に、P2、P3は北辺の中央付近に位置する。平面形はいずれも円形～楕円形状を呈し、規模は径が20～30cm程である。床面からの深さは、P3が12cmと浅く、ほかの2個は30～50cmと深めである。この3個のピットはいずれも柱痕跡が確認できることから柱穴と考えられる。P2・P3は近接しており、建て替えにともなうものかもしれない。遺物は、漆器などの漆膜片や土器器非ロクロ甕片がわずかに33.2gのみ出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。

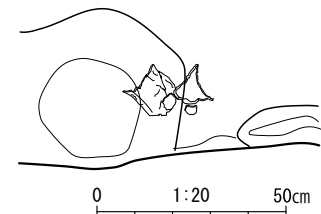
## FSI02欠番

## FSI03 (第28・29図)

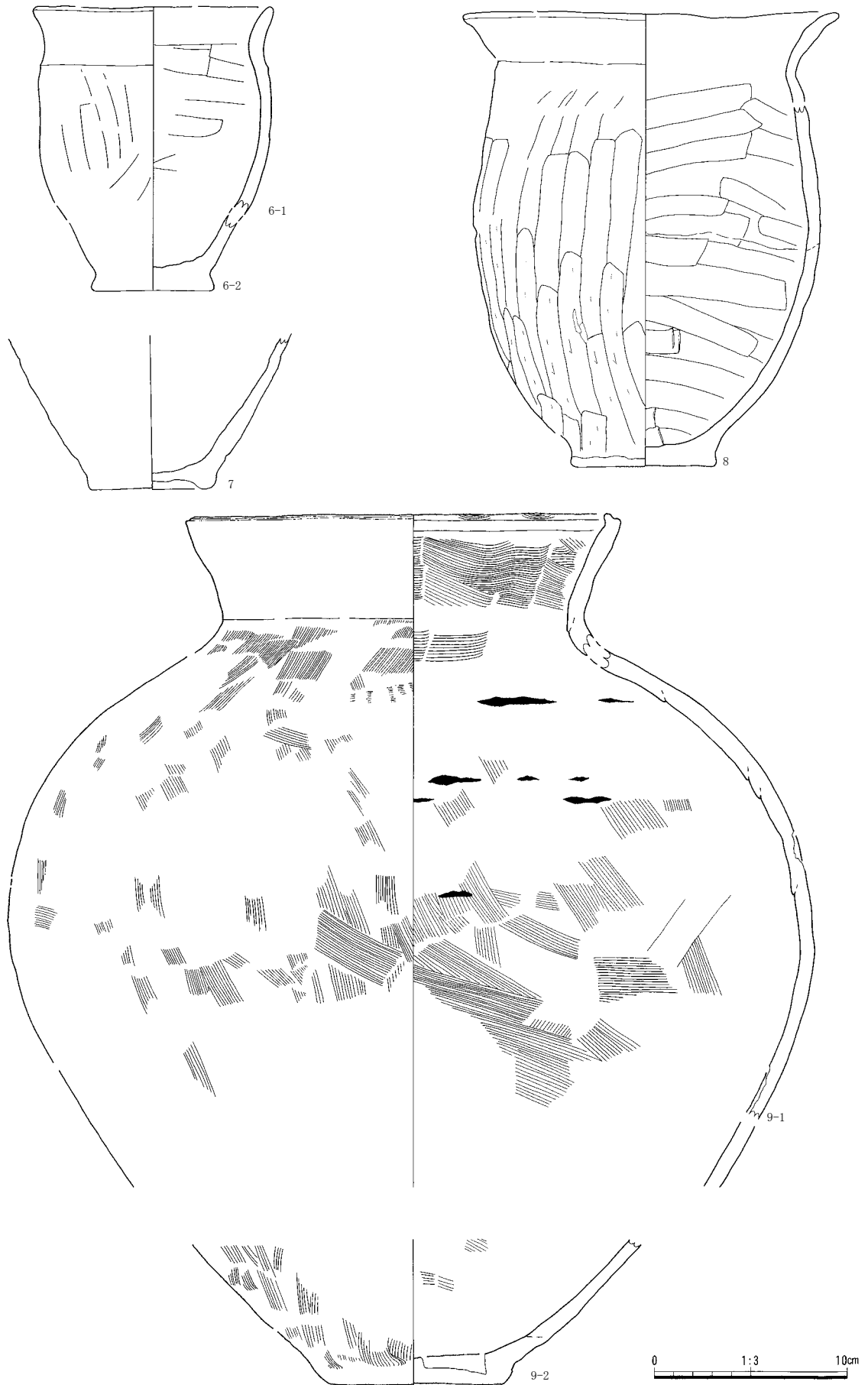
F区中央部に位置する竪穴建物跡である。当初調査区内には、煙道の一部と煙出し孔だけが位置していたが、調査区南側を拡張した結果、竪穴建物本体を検出したものである。この拡張した範囲については、内容を確認するための精査のみで、大部分は検出のまま残している。したがって、全容はほぼ不明であり完掘を行っていない。検出面はI層直下のIV層である。重複は、FP075・FP169・



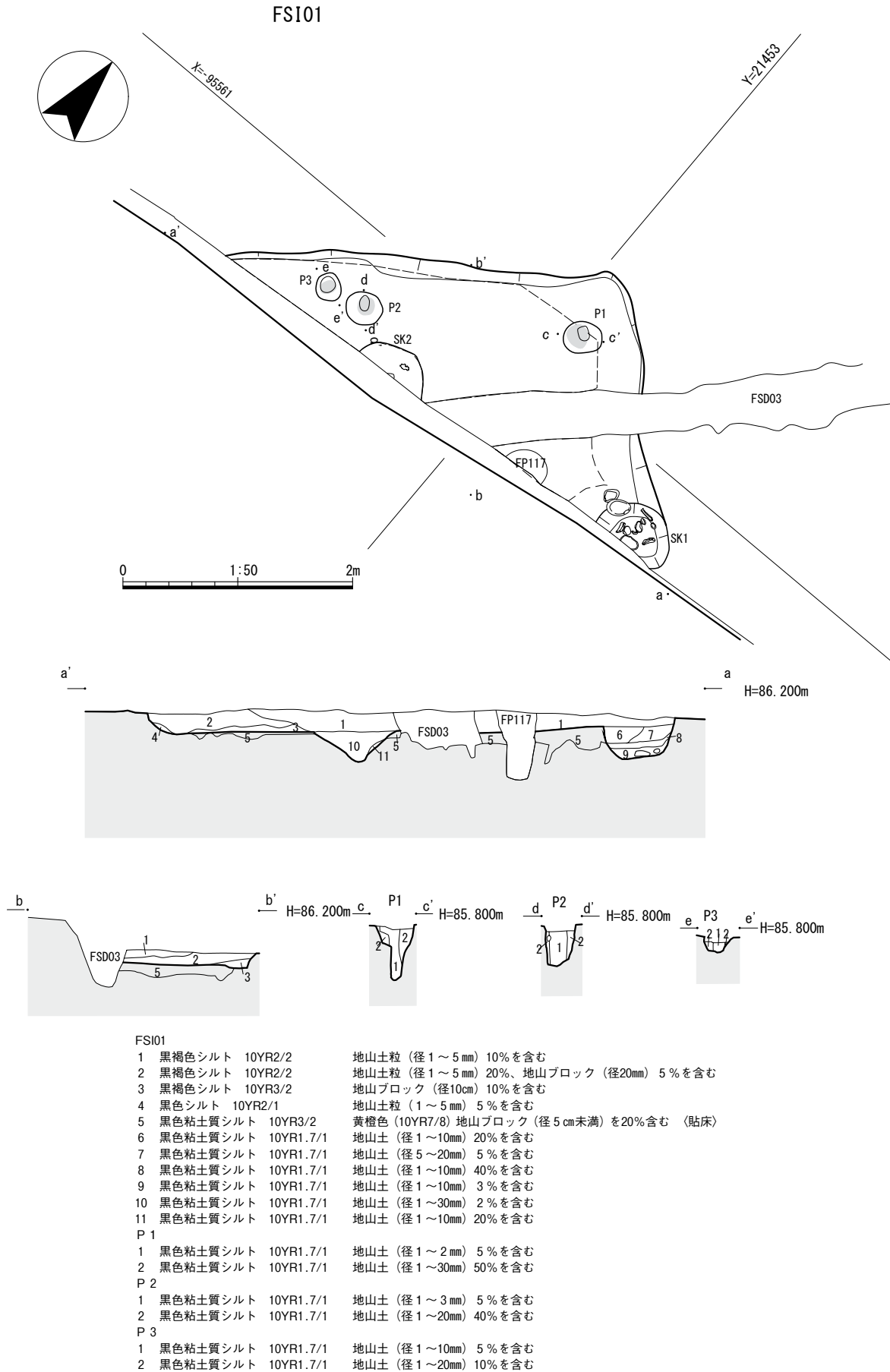
第24図 FSI01遺物出土状況 1



第25図 FSI01遺物出土状況 2

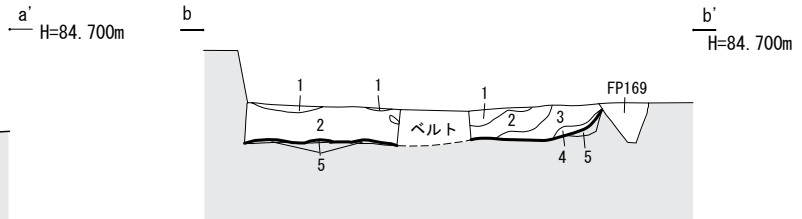
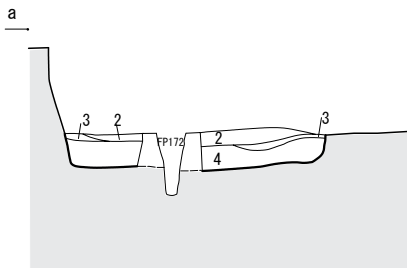
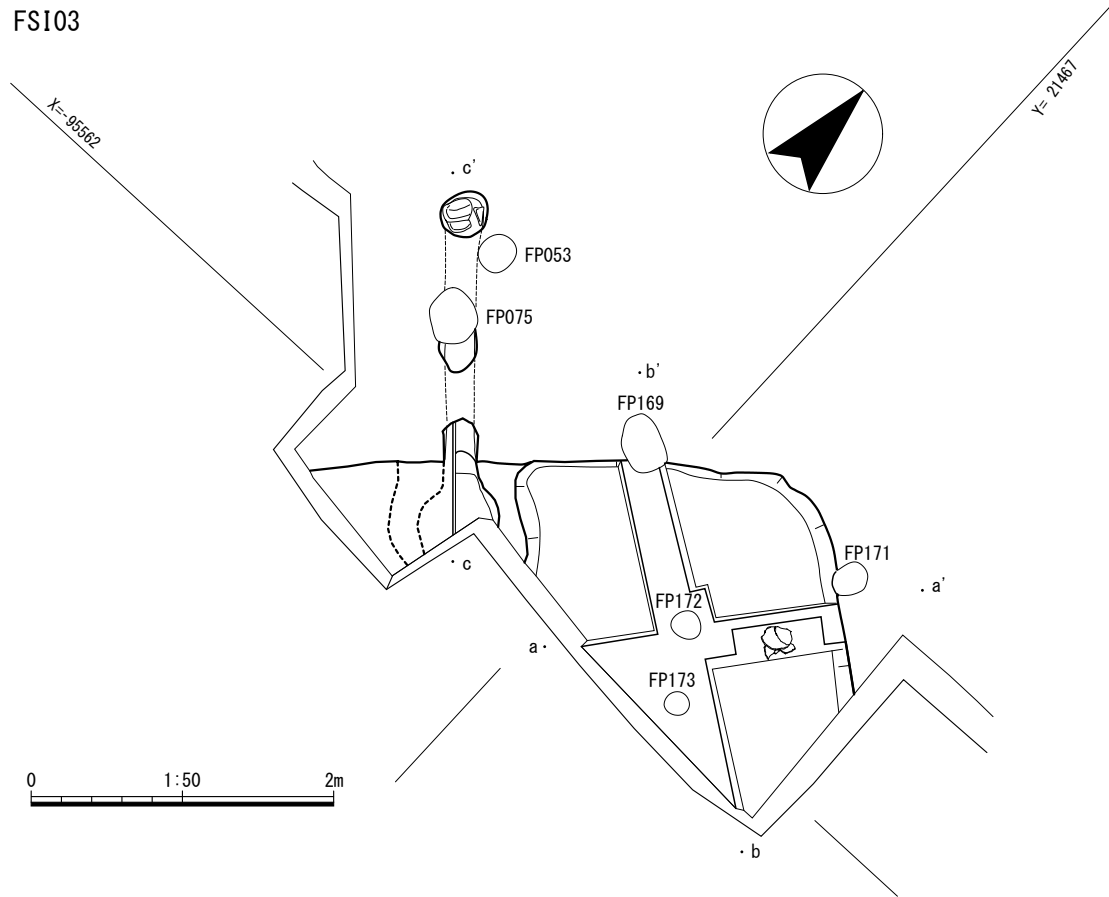


第26図 ESI01出土遺物



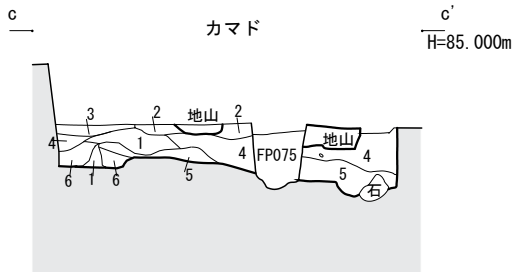
第27図 FSI01竪穴建物跡

FSI03



FSI03

- |   |                |  |
|---|----------------|--|
| 1 | 黒褐色シルト 10YR2/3 | 地山土 (径1~3mm) 5%を含む                                       |
| 2 | 暗褐色シルト 10YR3/3 | 地山土 (径1~5mm) 7%を含む                                       |
| 3 | 黒褐色シルト 10YR3/2 | 地山土 (径1~100mm) 10%を含む                                    |
| 4 | 黒褐色シルト 10YR3/2 | 地山土 (径1~20mm) 20%、焼土ブロック (2.5YR5/8) 明赤褐 (径1~10mm) 10%を含む |
| 5 | 褐色シルト 10YR4/4  | 地山土 (径1~30mm) 30%、地山土斑状10%を含む (貼床)                       |



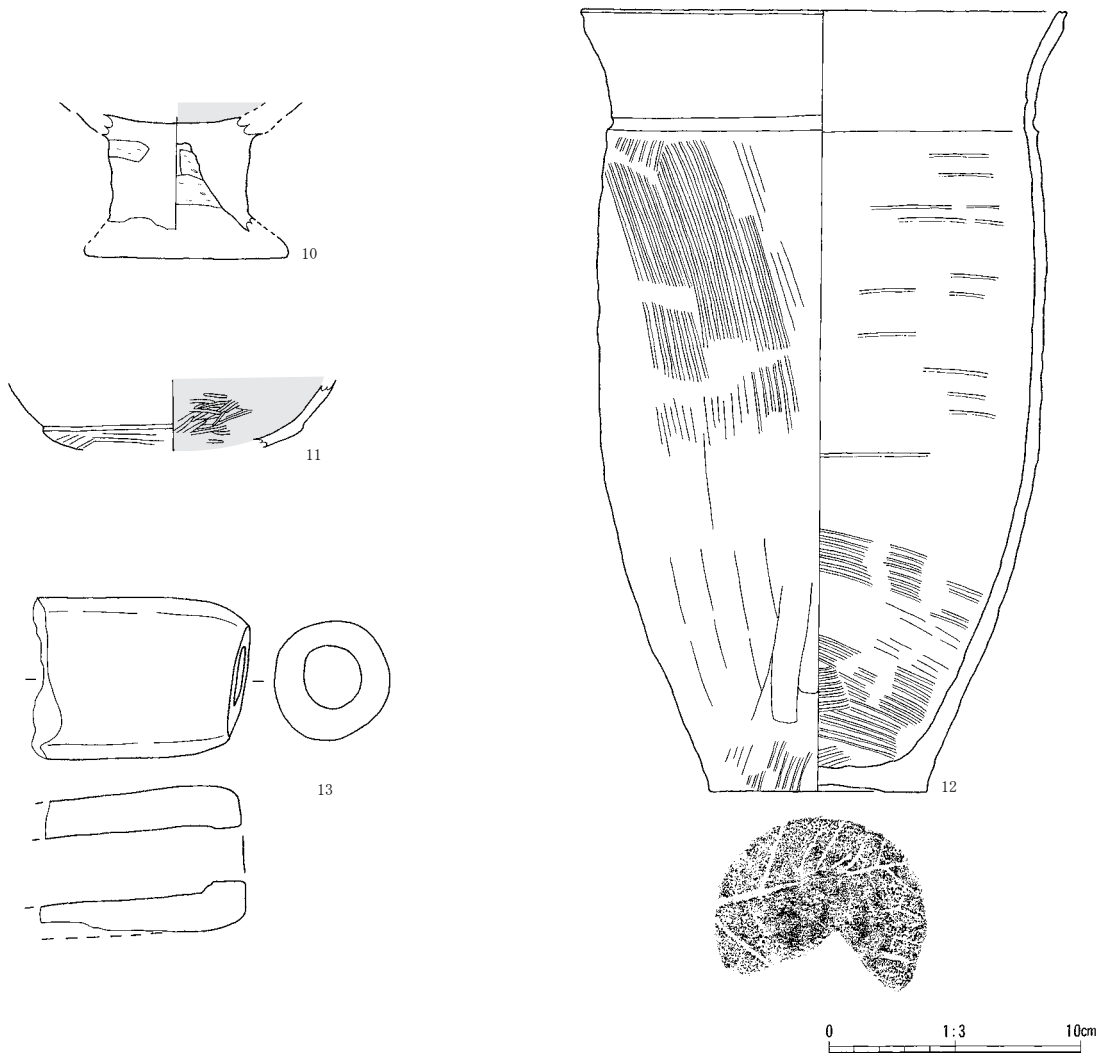
FSI03カマド

- |   |                |   |
|---|----------------|---|
| 1 | 黄橙色シルト 10YR8/8 | 天井部残り (崩落土を含む)                          |
| 2 | 暗褐色シルト 10YR3/3 | 3層よりうすいシルト (径1~40mm) 焼土ブロック5%を含む        |
| 3 | 黒褐色シルト 10YR2/3 | 地山土 (径1~3mm) を5%を含む、(住居内埋土1層と同じ)        |
| 4 | 暗褐色シルト 10YR3/3 | 地山土 (径1~30mm) 焼土10%、地山土 (径1~5mm) 骨2%を含む |
| 5 | 黒色シルト 10YR2/1  | 地山土 (径1~30mm) 上層部焼土ブロック5%を含む            |
| 6 | 褐色シルト 10YR4/4  | 地山ブロック3%を含む                             |

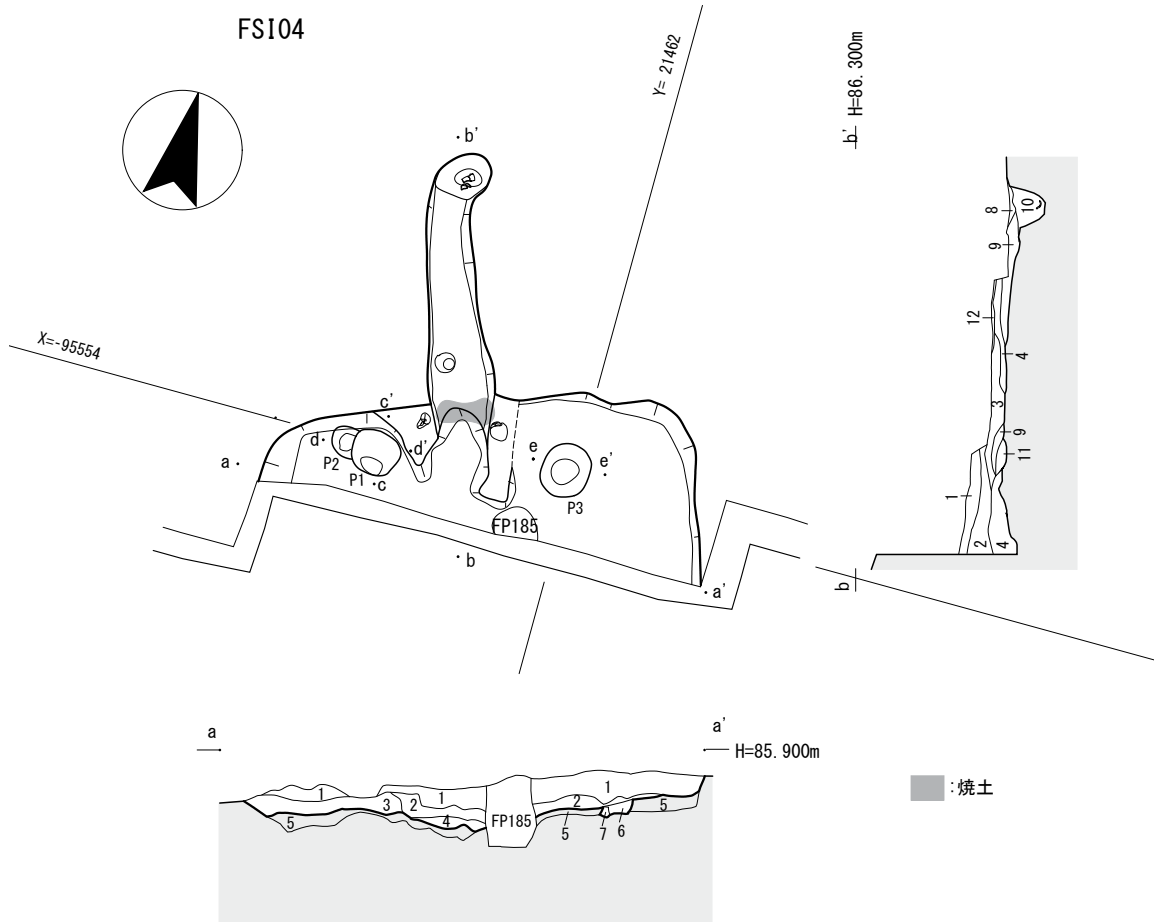
第28図 FSI03竪穴建物跡

FP171・FP172・FP173であり、切り合い関係から見ると本遺構の方が古い。平面形は、残存範囲から推定すると、およそ方形である。規模は不明であるが、カマドが北辺の中央に位置すると仮定すると約5m四方の規模と推定される。調査区内に残存する範囲では、北辺が3.2m、東辺が1.4mである。床面までの深さは確認面から20cmと浅く、多くが削平されている。床面はほぼ平坦であり、貼床が施されているが断ち割りは行っていない。そのため、掘方の状況も不明である。建物方位はカマド主軸を基準とするとN-43°-Wである。堆積土は4層に区分でき、上層には黒褐色や暗褐色を主体とするシルトで覆われ、比較的初期の堆積土についても黒褐色を主体とするシルト層である。

付属施設は、カマドのみを確認している。北辺に設置されるカマドは両袖の下半のみ残存し、煙道・煙出し孔が付属する。煙道の大部分はトンネル状に削り抜かれたものが残存していた。カマド本体は調査区外にあるため、一部の調査（右袖、煙道断ち割り）を行ったのみである。両袖間の距離は最大で1mであり、袖の長さは一部が調査区外にあるため不明である。袖間には明確な燃焼面は確認できていない。袖間から煙道への底面の状況は、カマドと煙道との境界付近で煙道底面が約10cm高くなり、その後煙出し孔に向かって緩やかに下降するもので、煙出し孔のみが深くなることはない。煙出し孔の直径は30cmである。カマド堆積土は住居と同様に黒色から黒褐色を主体とするシルトで構成される。煙道の天井部が一部残存しており、本来は削り抜き式であることがわかる。

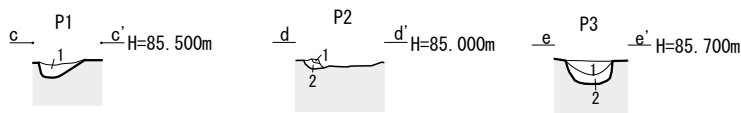


第29図 FSI03出土遺物



FSI04

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1   | 地山ブロック (径1~10mm) 5%、植物遺体2%を含む                           |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2   | 地山ブロック (径1~20mm) 10%、焼土粒 (径1~3mm) 20%を含む                |
| 3 黒色粘土質シルト 10YR2/1    | 地山ブロック (径1~50mm) 20%、焼土粒 (径1~3mm) 5%を含む                 |
| 4 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1  | 焼土粒 (径1~10mm) 30%、地山土 (径1~3mm) 5%を含む                    |
| 5 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1  | 地山土 (径1~50mm) 30%を含む (貼床)                               |
| 6 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2   | 地山ブロック (径1~3mm) 50%を含む                                  |
| 7 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2   | 地山ブロック (径1~5mm) 10%を含む                                  |
| 8 黒色シルト 7.5YR2/1      | 地山土 (径1~5mm) 2%を含む                                      |
| 9 黒褐色シルト 7.5YR2/2     | 地山土 (径1~20mm) 5%、明赤褐 (2.5YR5/8) (径1~20mm) 10%を含む=焼土ブロック |
| 10 黒色シルト 10YR1.7/1    | 地山土 (径1~10mm) 5%、土器片少量を含む                               |
| 11 黒色シルト 7.5YR2/1     | 地山土 (径1~5mm) 2%を含む                                      |
| 12 黒色地土質シルト 10YR1.7/1 | 地山土 (径1~10mm) 5%、明赤褐 (2.5YR5/8) (径1~10mm) 10%=焼土ブロックを含む |



FSI04P1

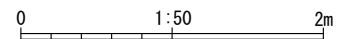
- |                   |                         |
|-------------------|-------------------------|
| 1 黒色シルト 10YR1.7/1 | 地山ブロック (径1~20mm) 10%を含む |
|-------------------|-------------------------|

FSI04P2

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 1 黒色シルト 10YR1.7/1 |                      |
| 2 黒色シルト 10YR1.7/1 | 地山土 (径1~10mm) 10%を含む |

FSI04P3

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1 黒色シルト 10YR1.7/1 | 地山土斑状20%を含む         |
| 2 暗褐色シルト 10YR3/4  | 地山土 (径1~5mm) 10%を含む |



第30図 FSI04竪穴建物跡

出土遺物は合計で3.56kg出土している。土師器高杯の脚部片（10）、土師器杯片（11）、土師器非ロクロ甕（12）、土製品（13）を図示したほか、土師器の非ロクロ甕の破片がある。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町Ⅰ期に位置づけた。

#### FSI04（第30・31図）

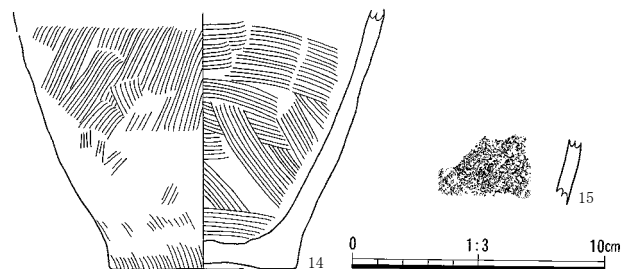
F区中央部北側に位置する竪穴建物跡である。調査区内には、一部しか位置しておらず、残りは調査区外に残存している。おおよそカマドが設置される北半のみの調査である。検出面はⅠ層直下のⅣ層である。他遺構との重複はFP185とであり、本遺構の方が古い。平面形は、残存範囲から推定すると、およそ方形であり、規模はすべてが残存している北辺を基準にすると、東西方向に2.9mと小型である。床面までの深さは確認面から20cmと浅く、多くが削平されている。床面は厚さ約4～10cmの粘土で構築され貼床としている。ほぼ平坦であるがカマド前方がやや窪んでいる。掘方の状況は全域を調査していないため詳細は不明である。建物方位はN-25°-Wである。建物の堆積土は大きく3層があり、いずれも黒色から黒褐色を主体とする粘土質シルトである。カマド前方の窪みにのみ焼土塊を含む粘土質シルトが堆積する。付属施設にはカマドが北辺中央部に、ピット（小穴）が3基床面に構築されている。

カマドは両袖の下半のみ残存し、煙道・煙出し孔が付属する。方位はN-21°-Wである。両袖間の距離は最大で90cm、左袖の長さは50cm、右袖が75cmである。袖間には明確な燃焼面は確認できなかったが、煙道との境界付近に赤変箇所が存在した。袖間から煙道へはほぼ平坦に北側に延びる。煙道手前には土師器甕の下半部が倒位で出土している。堆積土は住居と同様に黒色から黒褐色を主体とする粘土質シルトで構成される。ピットはP1からP3までの3基が確認できる。いずれも円形を呈する平面形であり、規模はP1が径20cm、P2が最大径30cm、P3が最大径38cmである。深さはいずれも床面から10cmから20cmと浅い。P1とP2はカマド西側に、P3はカマド東側に位置する。また前者には重複があり同時存在しない。

遺物は堆積土を中心に745g出土した。土師器甕（14）、縄文土器片（15）を図示したが、そのほかにも土師器非ロクロ甕の破片がある。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

#### HSI01（第32図）

H区西部に位置する小型の竪穴建物跡である。遺構の確認は、現耕作土であるⅠ層を除去後のⅣ層上面で行った。HSI02と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形はいびつであるが、台形あるいは方形状を呈する。規模は、東西間が最大で3m、南北間が2.4mである。建物方位は、北辺を基準とするとN-42°-Wである。床面は、ほぼ平坦に構築されており、貼床は施されていない。確認面からの深さは30cmである。堆積土は3の層があり、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、堆積土を中心に土師器の細片が15.1g出土しているのみである。この遺構は、カマドが無いことや規模の点で居住用でない可能性がある。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅰ期に位置づけた。



第31図 FSI04出土遺物



## HSI02 (第32図)

H区西部に位置する小型の竪穴建物跡である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。HSI01と重複し、本遺構の方が古い。平面形はいびつな方形を呈しており、規模は、東西間・南北間とも1.6mである。建物方位は、西辺を基準とするとN-65°-Wである。床面は、ほぼ平坦に構築されており、貼床は施されていない。確認面からの深さは12cmである。堆積土は2つの層があり、黒色から黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、堆積土から土師器の細片がわずかに3.3g出土しているのみである。この遺構は、カマドが無いことや規模・構造の点で居住用でない可能性がある。時期は、奈良や平安時代の遺物が混在しているが、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

## HSI03 (第33～36図)

H区中央部に位置する竪穴建物跡である。北側の一部が調査区外に位置するため完掘しておらず、残りは調査区外に残存している。検出面はI層直下のIV層である。他遺構との重複はHSD01とであり、本遺構の方が古い。平面形は、残存範囲から推定すると、おおよそ四辺がやや膨らんだ方形を呈しており、規模は東西方向6.8mである、床面までの深さは確認面から30cmである。南北方向は不明であるが、東辺は約5.7mの長さが調査区内にある。建物方位は西辺を基準とするとN-29°-Wである。

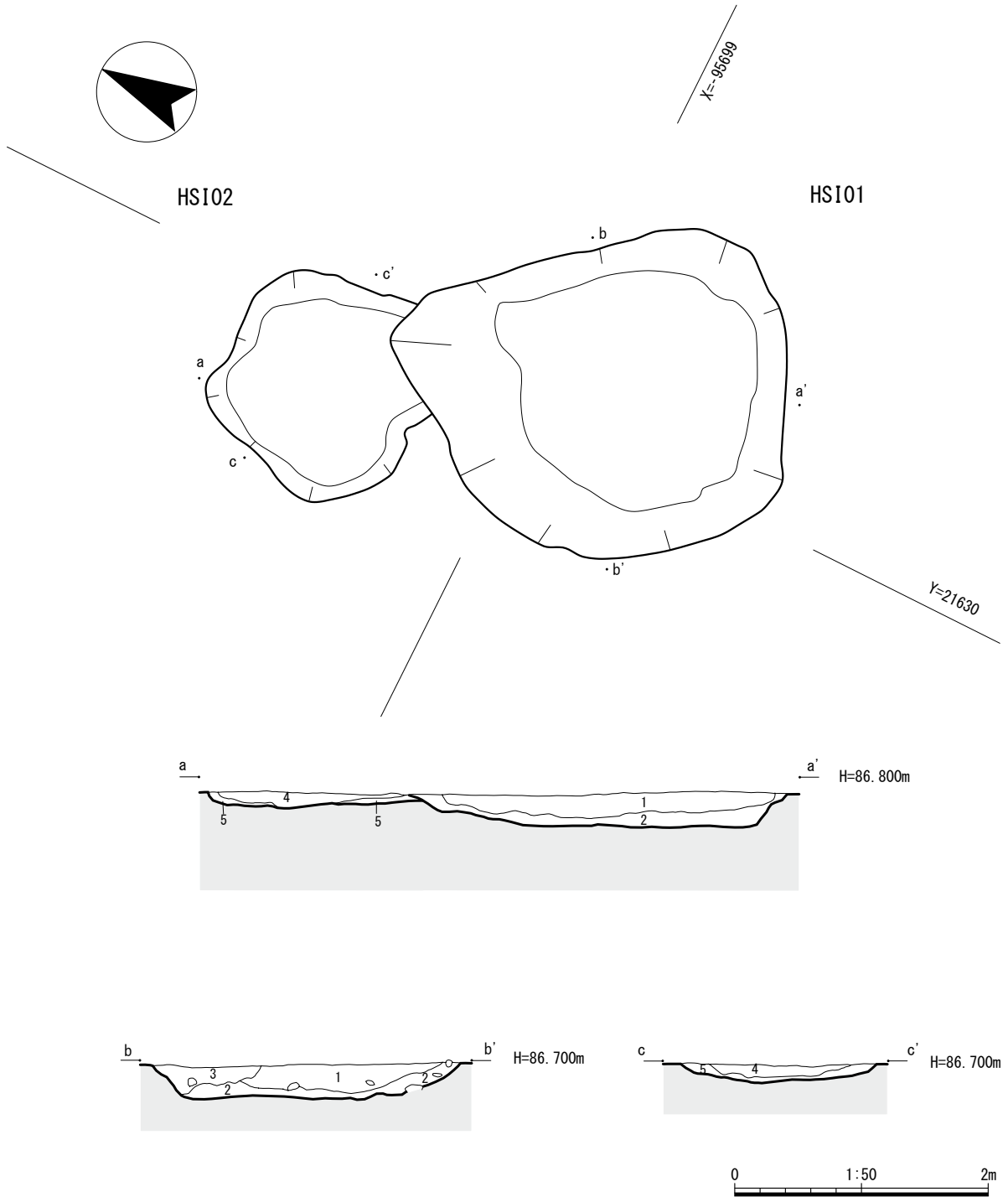
床面には、壁に沿って溝が構築されている。規模は、幅が10～30cm、深さが床面から10cm程度である。また、床面には厚さ約10～20cmの粘土でほぼ平坦に構築され貼床としている。掘方は中央よりも壁沿いを深く掘削されている状況が確認できる。堆積土は5層あり、いずれも暗褐色から黒褐色を主体とする粘土質シルトである。いずれも三角堆積からレンズ状堆積を示す状況が観察できることから自然堆積と考えられる。付属施設には、柱穴が4個、土坑(貯蔵ピット)1基、その他ピット(小穴)が3個あり、それぞれ床面に構築される。カマドは調査区内では確認されないが、調査区外の北辺に位置していると考えられる。P8・9・12・14は、その位置から建物跡の主柱穴を構成すると考えられる。これらはいずれもいびつな楕円形を呈する掘方で、規模は、径が30～50cm、深さが30～45cm程である。P14には柱痕跡が確認できる。P1は床面の北東隅付近に位置する土坑で、平面形はいびつな楕円形を呈し、規模は50×70cm、深さは床面より14cmである。堆積土中やその周辺には原位置を保っている可能性が高い土師器甕が複数個出土している。その西側にカマドがあると想定すると貯蔵ピットの可能性がある。

遺物は堆積土を中心に多く出土している(7.44kg)。そのうち図化できたのは11点である。土師器杯は、口径が13cm前後のもの(16)と15cm前後のもの(18～20)に分けられる。17は口径が20cm以上あり杯と言うより椀かもしれない。これはいずれも非ロクロ調整である。そのほか土師器甕(23～26)や須恵器杯(21)、須恵器甕の口縁部片(22)がある。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

## HSI05 (第37～40図)

H区中央東部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の約北半分を調査したのみであり、残りは南側の調査区外にある。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複はHP089、HSX01とであり、いずれも本遺構の方が新しい。平面形は全容が不明のため正確ではないが方形を呈すると推定される。北辺・東辺ともあまり膨らまない。規模は調査した、西壁と東壁の一部で計測すると、東西間が約6.9mとなる。建物方位は、調査した東辺で

3 遺構と遺物



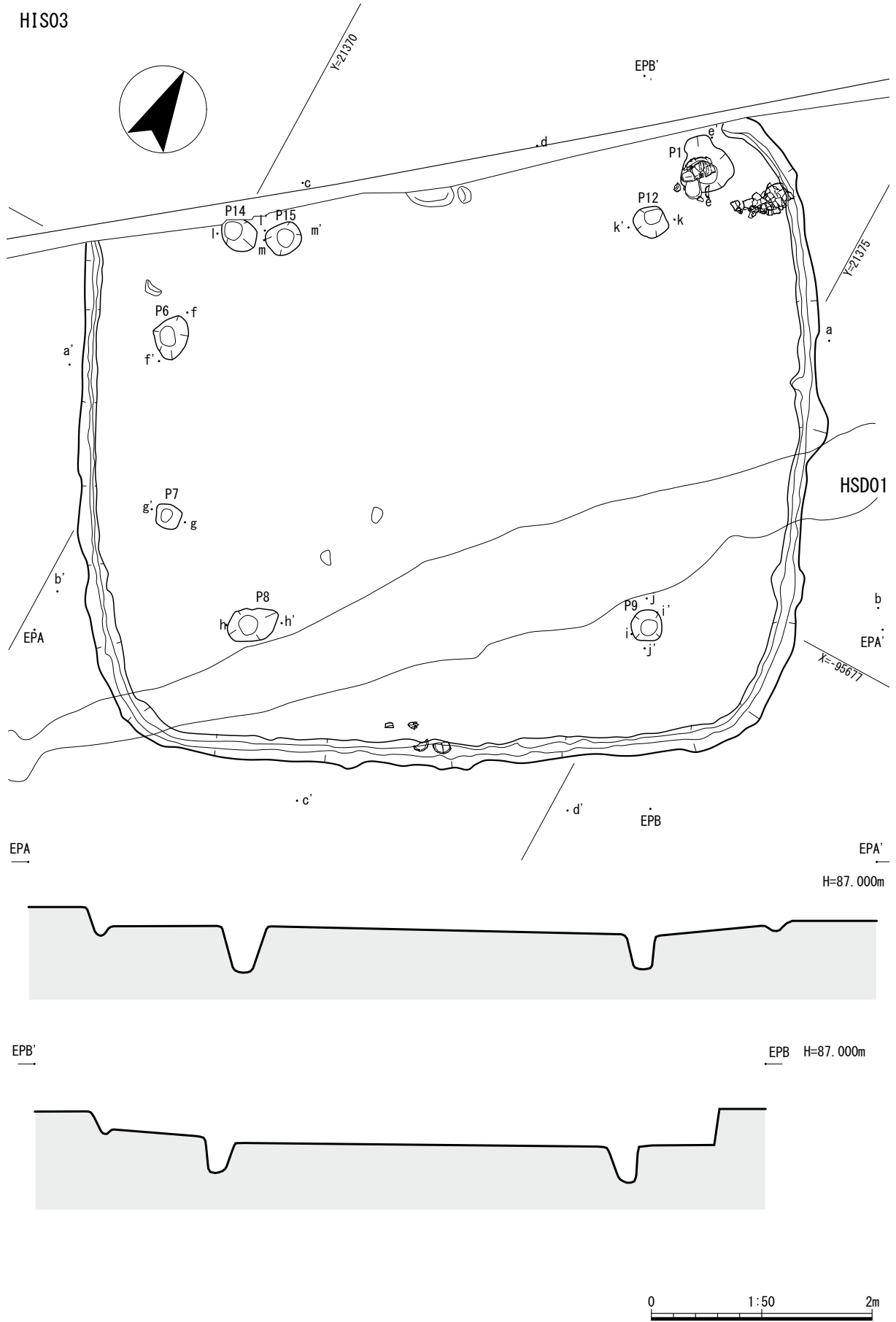
HSI01

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色シルトブロック (10YR4/6) (径20~40mm)、同シルト粒 (径1~20mm) 7%、炭化物 (径1~10mm) 1%、鉄分混入
- 2 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~10mm) 5%、炭化物 (径1~10mm) 1%を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) と褐色シルトブロック (10YR4/6) (径20mm) との混合土 (埋め戻し土?)

HSI02

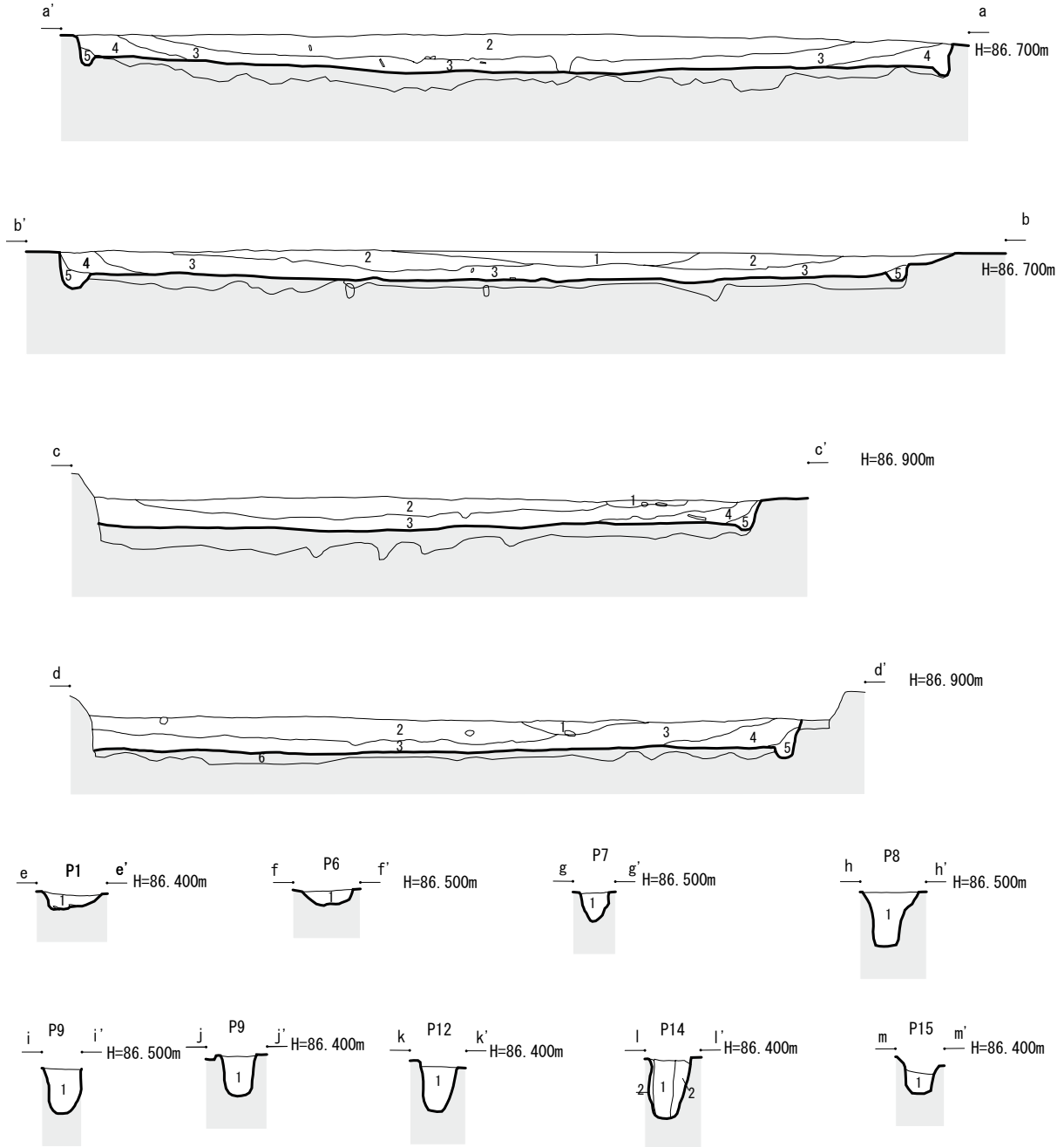
- 4 黒色シルト 10YR2/1 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~20mm) 3%を含む
- 5 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色シルトブロック (10YR4/4) (径10~40mm)、同シルト粒 (径1~10mm) 15%を含む

第32図 HSI01・02 竪穴建物跡



第33図 HIS03竪穴建物跡 1

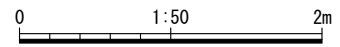
3 遺構と遺物



HSI03+HSD01

- |    |                   |  |
|----|-------------------|--|
| 1  | 黒褐色シルト 10YR2/2    | 黒褐色シルト (10YR2/3) 10%、褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~5mm) 3%、炭化物 (径1~3mm) 微量、礫混入 (径20~100mm) =HSD01 |
| 2  | 黒褐色シルト 10YR3/1    | 暗褐色シルト粒 (10YR3/3) 1%、焼土粒微量、にぶい黄褐色火山灰粒 (10YR6/4)、を含む                                      |
| 3  | 暗褐色シルト 10YR3/3    | 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) 3%を含む   |
| 4  | 暗褐色シルト 10YR3/4    | 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径1~2mm) 5%を含む   |
| 5  | 黒褐色シルト 10YR2/2    | 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径1~2mm) 7%を含む   |
| 貼床 | 黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 | 黒褐色シルト (10YR2/3) 7%、明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm)、同ブロック 5%を含む                             |

- |      |   |                   |   |
|------|---|-------------------|---|
| P 1  | 1 | 黒褐色シルト 10YR3/2    | 黄褐色粘土質シルトブロック (10YR5/6) 10%を含む            |
| P 6  | 1 | 黒褐色シルト 10YR3/2    | 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm) 3%を含む        |
| P 7  | 1 | 黒褐色シルト 10YR3/2    | 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm) 3%を含む        |
| P 8  | 1 | 黒褐色シルト 10YR3/2    | 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径20×20mm) 3%、炭化物混入 |
| P 9  | 1 | 黒褐色シルト 10YR3/2    | 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm) 3%を含む        |
| P 12 | 1 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 黄褐色粘土質シルトブロック (10YR5/6) 3%を含む             |
| P 14 | 1 | 暗褐色粘土質シルト 10YT3/4 | 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~10mm) 5%を含む         |
|      | 2 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~10mm) 7%を含む         |
| P 15 | 1 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~10mm) 5%を含む         |



第34図 HSI03豎穴建物跡 2

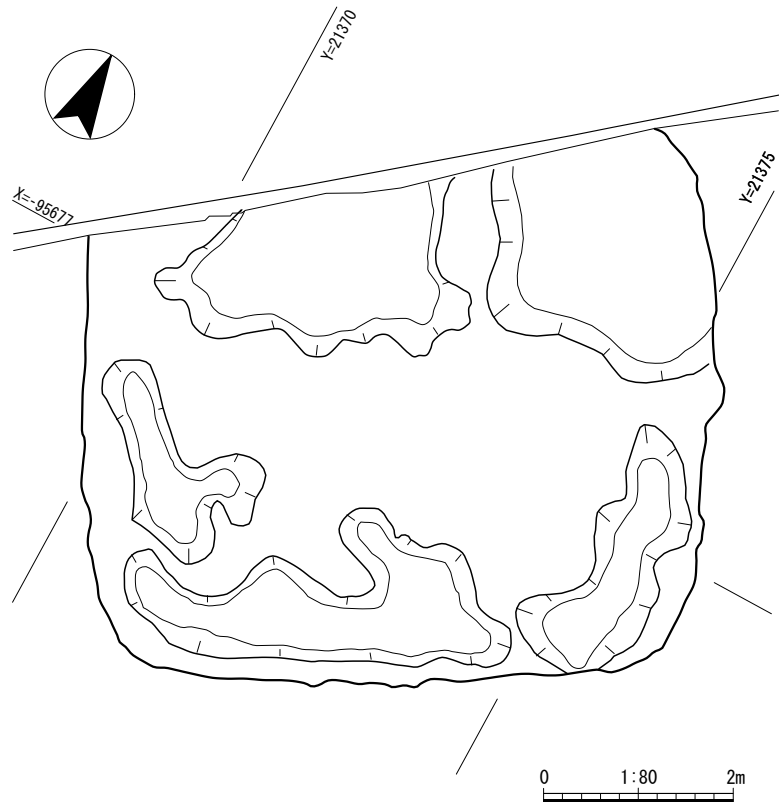
はN-55°-Wである。床面も全体は不明であるが、調査した範囲では平坦であり、深さは確認面から20cm程度である。床面には、壁面に沿って壁溝が構築されている。規模は、幅が10cm程度、深さが床面から5~6cmである。掘方は調査した範囲では、いずれも壁面周囲よりも中央部付近をよく掘削するもので、床面から10~15cmの深さで貼床が施されている。堆積土は4つの層があり、黒色から黒褐色を呈するシルト層である1・2・4層とにぶい黄褐色を呈する3層がある。2層には浅黄色を呈するテフラ (To-a) が含まれている。4層中には、壁面に沿って黒色土が直線的に堆積する箇所があり、これは板材の痕跡の可能性もある。5層は黒褐色と黄褐色を呈する粘土質シルトの混合土であり、貼床の構成土となる。

付属施設には、調査区内においてはカマドのみ北辺に設置されている。カマドは両袖の下半のみ残存し、煙道・煙出し孔が付属する。方位はN-54°-Wである。両袖間の距離は最大で1.3m、左袖の長さは90cm、右袖が80cmである。袖は、地山であるIV層と暗褐色の粘土質シルトで構成される。両袖間には燃焼面があり、50×60cmの範囲で焼土が広がっている。また、燃焼面の南端には、長さ50cm、厚さが30~40cm円礫がある。焼土の上に礫が位置することから、使用時には無かったことがわかる。カマドを構成する芯材であろうか。両袖間から煙道へは段差を経て北側に延びる。煙道の長さは1.6m、幅は最大で50cm、深さは確認面から25cmである。煙出し孔は径が約35cm、深さが40cmである。両者の堆積土は住居と同様に黒色から黒褐色を主体とする粘土質シルトで構成される。

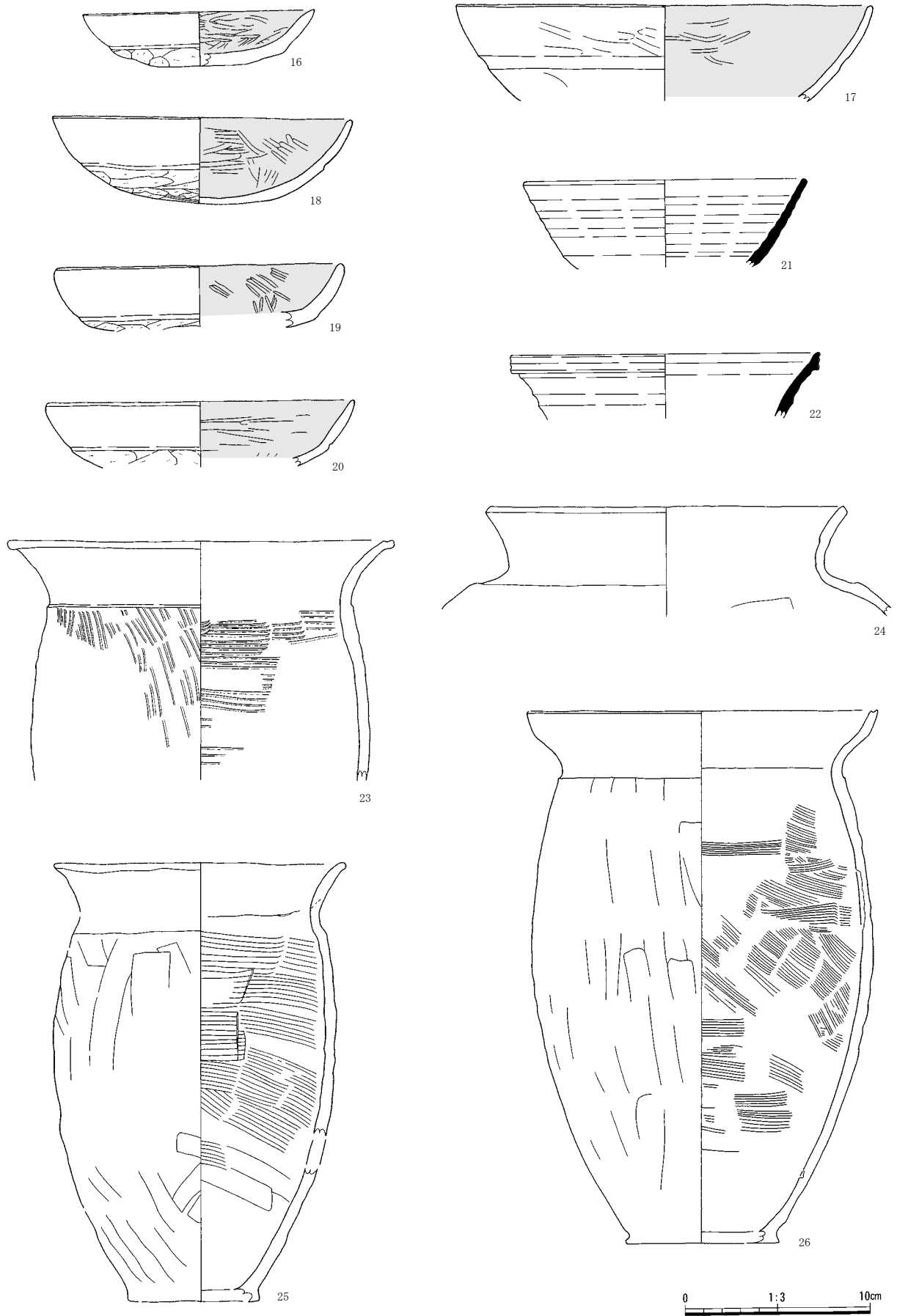
遺物は、堆積土や床面を中心に30.56kg出土している。土師器杯片 (28~30・32)、土師器球胴甕片 (35・36)、土師器高杯片 (34)、須恵器杯片 (31) などの土器のほか、ミニチュアの片口 (37)、土製勾玉 (38)、磨石 (39) などがある。このほか図示できない土師器各器種の細片がある。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

#### HSI06 (第40~45図)

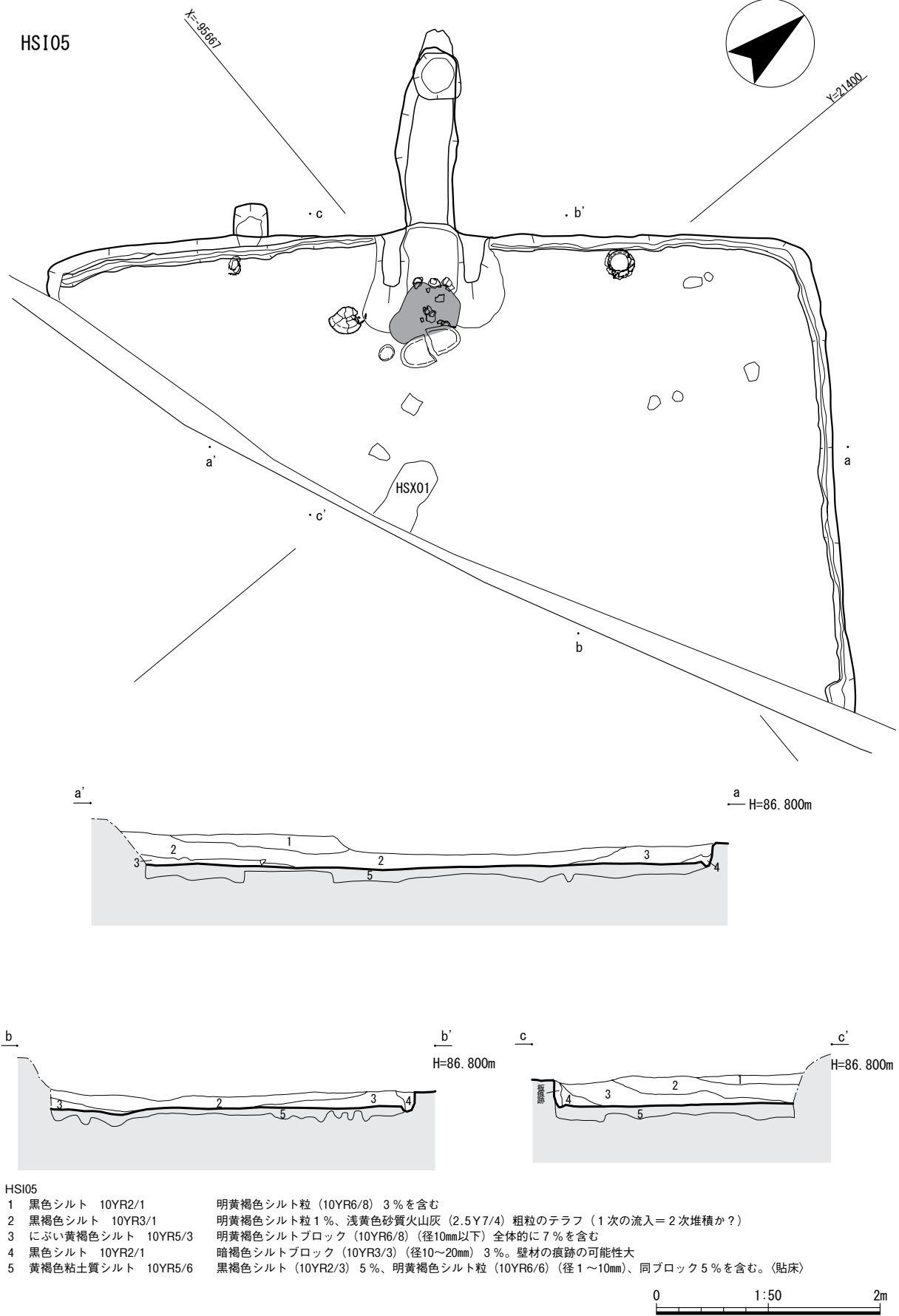
H区中央東部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の約3分の2を調査したのみであり、残りは北側の調査区外にある。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複は調査区内では確認できない。平面形は全容が不明のため正確ではないが方形を呈すると推定される。西辺・東辺ともあまり膨らまないが、南辺はやや膨らんでいる。規模は



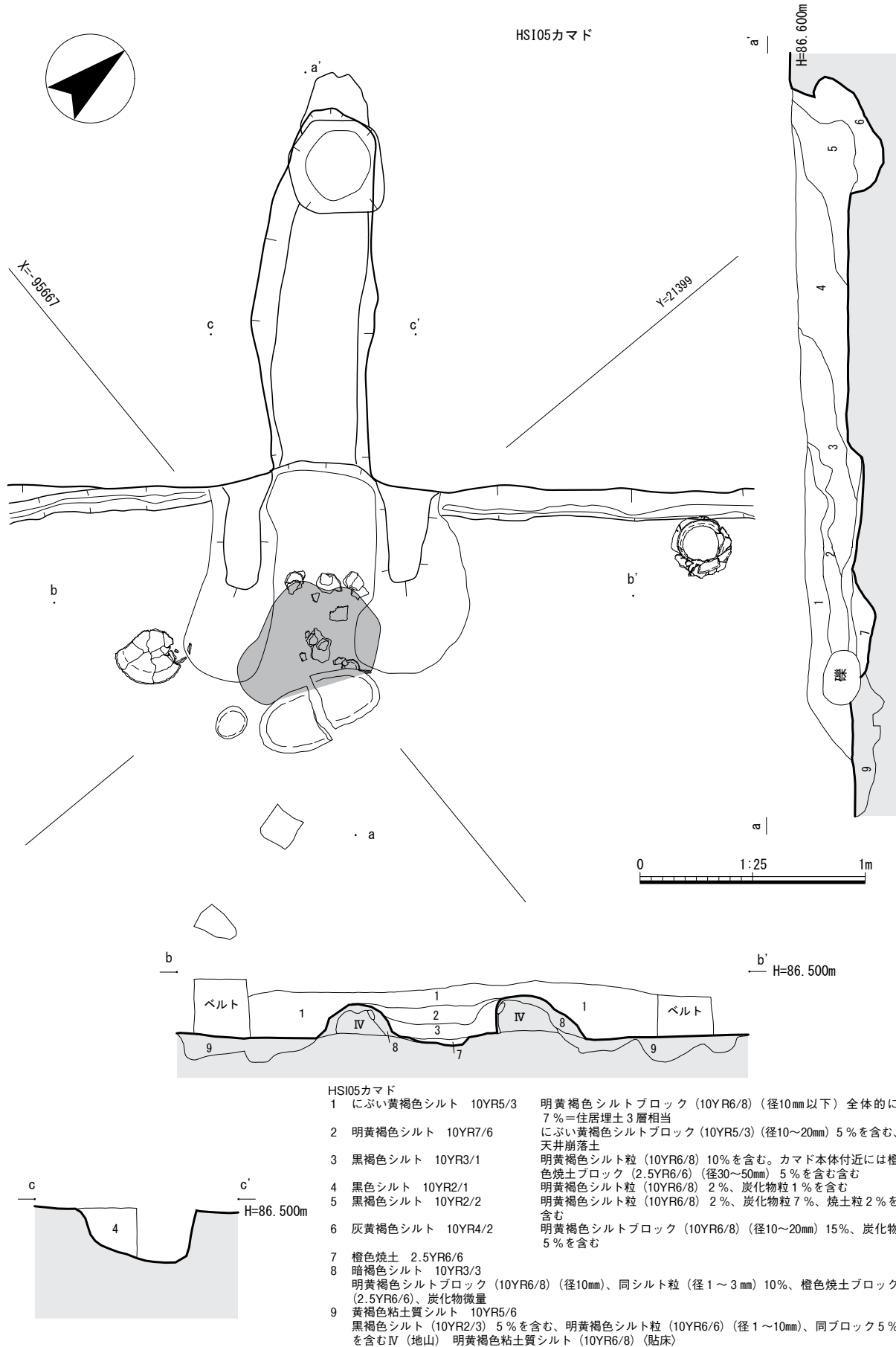
第35図 HSI03竪穴建物跡3 (掘方)



第36図 HSI03出土遺物



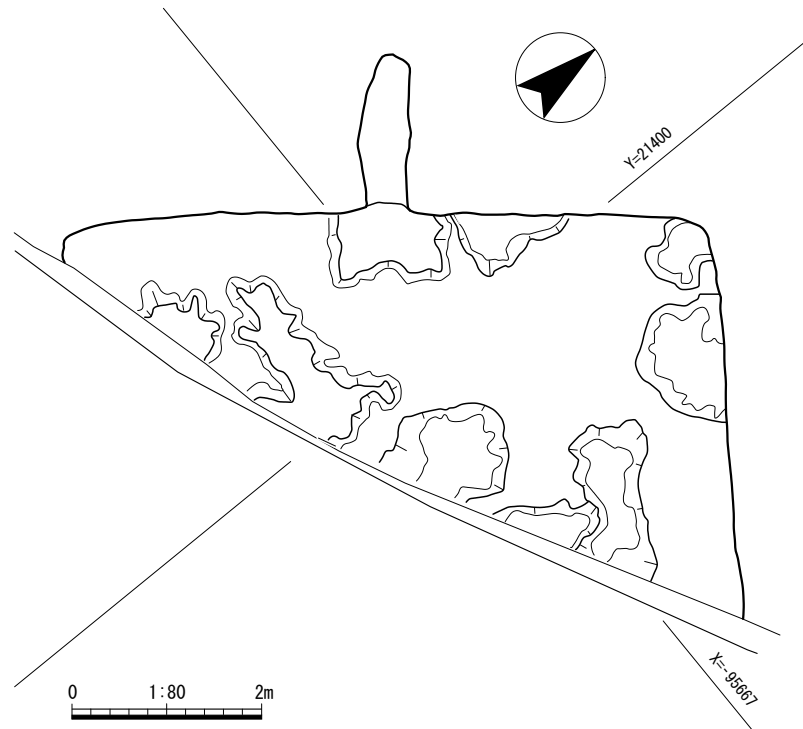
第37図 HSI05竪穴建物跡 1



第38図 HSI05竪穴建物跡2 (カマド)



調査した、西辺と東辺で計測すると、東西間が7mとなる。建物方位は、西辺を基準とするとN-39°-Wである。床面も全体は不明であるが、調査した範囲では平坦であり、深さは確認面から30cm程度である。床面には、一部途切れた箇所があるが、壁面に沿って壁溝が構築されている。規模は、幅が20cm程度、深さも床面から10cmである。掘方は、調査した範囲では、壁面周囲や中央部付近等の区別なく、散在的に掘削されている。床面から10~20cmの深さで貼床が施されている。堆積土には4つの層があり、そのうち1層と2層の境界付近にはテフラ(To-a)がブロック状に入っている。5層は黒褐色と明黄褐色を呈する粘土質シルトの混合土であり、貼床の構成土となる。



第39図 HSI05竪穴建物跡3(掘方)

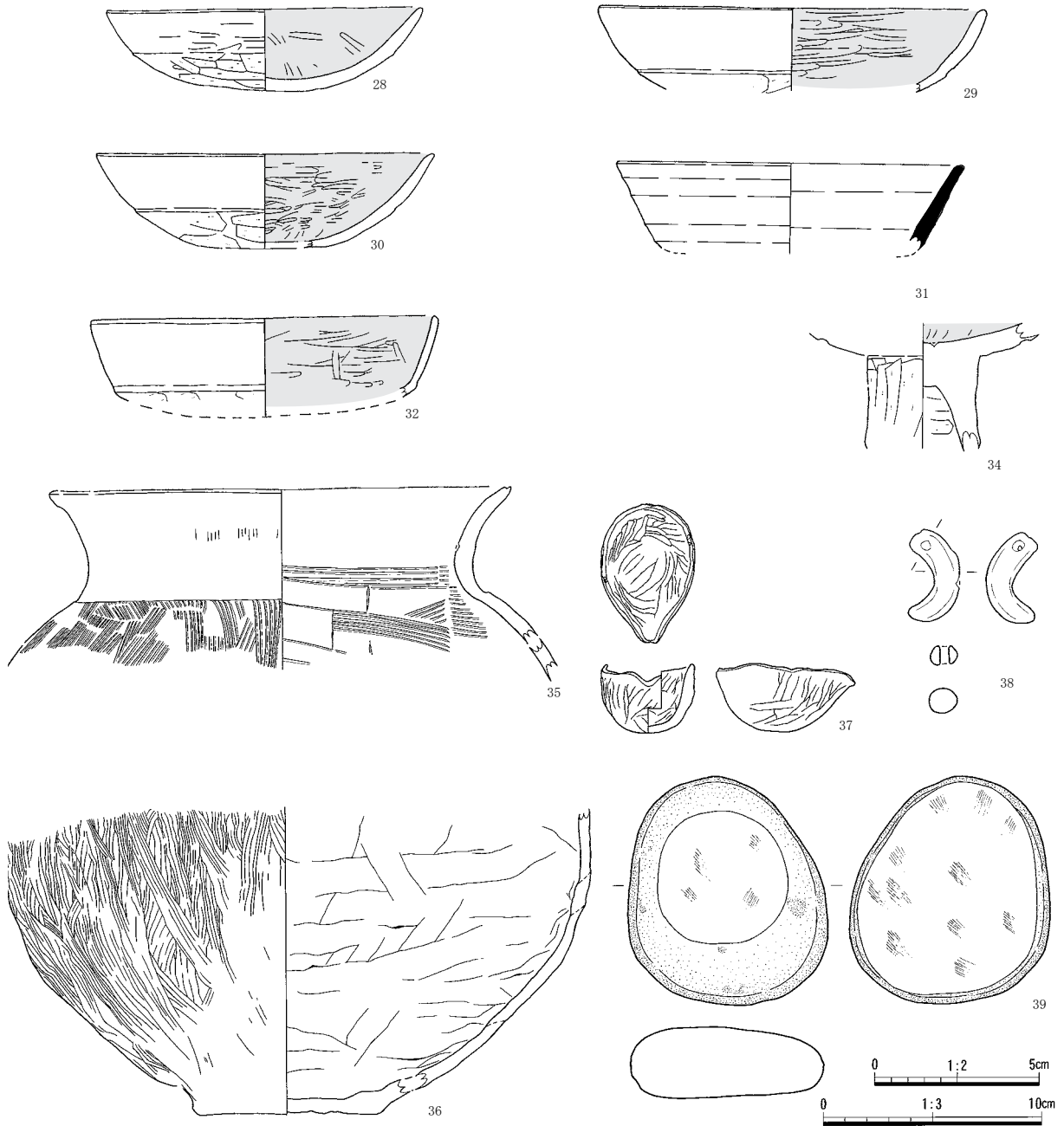
付属施設には、支柱穴が5個、いわゆる間仕切り溝が5条、ピット(小穴)が9個それぞれ床面にある。調査区内においてはカマドが確認されないが、周囲と同様、北辺にあらう。

P1~P5を支柱穴と想定している。平面形はいずれも円形から楕円形状を呈し、規模は径が40~50cmで、深さが床面から約40cmである。いずれも柱痕跡が確認できる。これら柱穴から壁面に向かって、それぞれ溝が延び、いわゆる間仕切り溝と考えられる。規模は、幅が約20cm、深さが10cm程度と浅いものである。P6~P14は床面に構築されるピット(小穴)である。平面形はいずれも円形から楕円形状を呈し、規模は小さいもので径20cm程度、大きいもので径50cm程度である。

遺物は、堆積土を中心に1.6kg出土している。とくに玉類の出土が目立つ。土師器杯(40・43・44)、土師器小型甕片(41・46)、土師器高杯片(34・47)、土師器碗(42)のほか、ヘラ切り痕が残る底部をもつ須恵器杯(45)がある。玉類には、土製勾玉6点(48~53)、石製勾玉1点(54)、土製平玉24点(56~79)、石製丸玉1点(80)がある。そのほか、鉄製刀子片(55)の出土もある。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町I期に位置づけた。

#### HSI07(第46~50図)

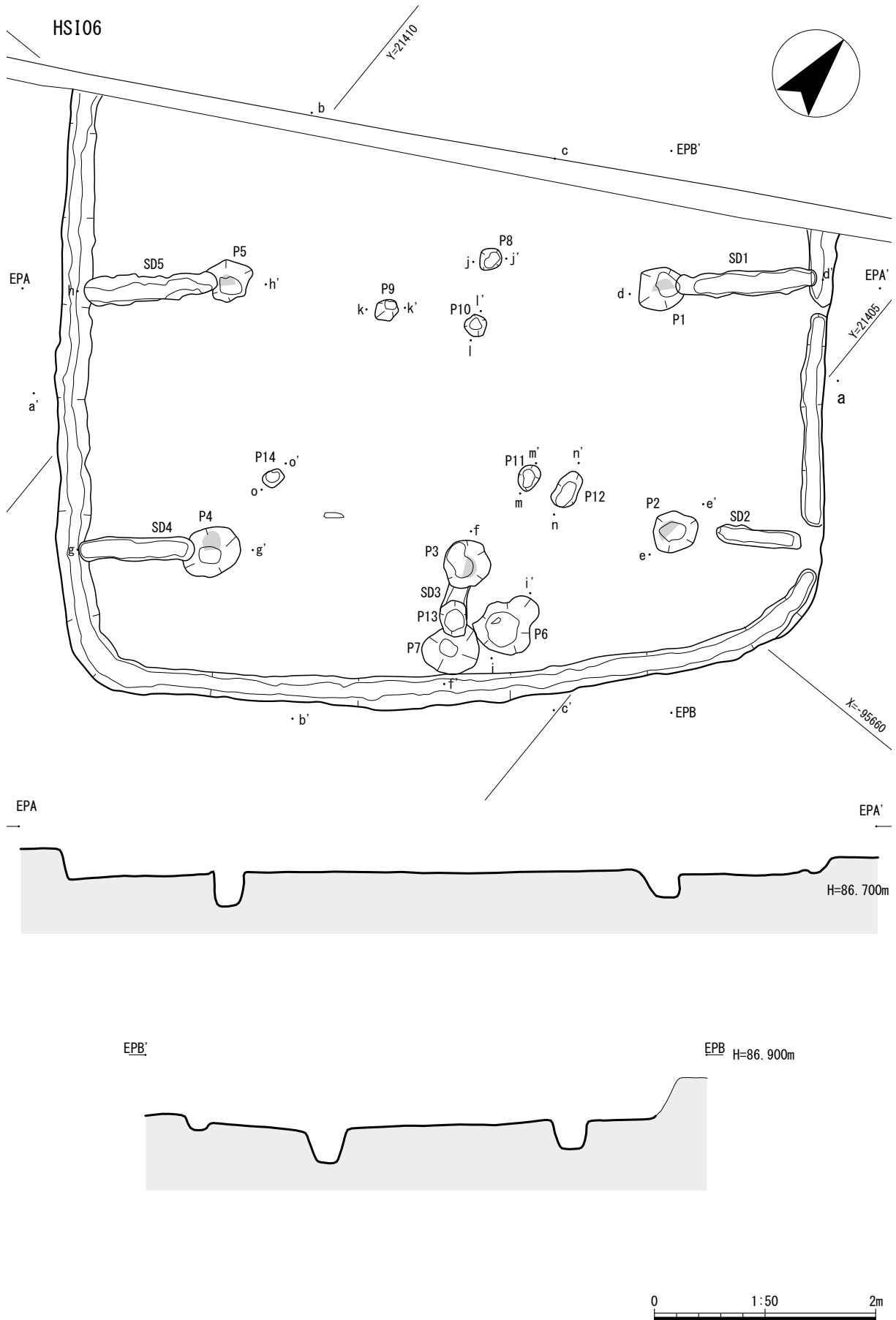
H区東部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の大部分を調査したが、北側の一部は調査区外にある。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複はHSD08、HP181・HP189・190とであり、いずれも本遺構の方が古い。平面形は全容が不明のため正確ではないが、各辺が直線的な方形を呈すると推定される。規模は南北間で5.1mである。建物方位は、西辺で計測するとN-12°-Eである。床面は、全容不明であるが、調査した範囲では



第40図 HSI05出土遺物

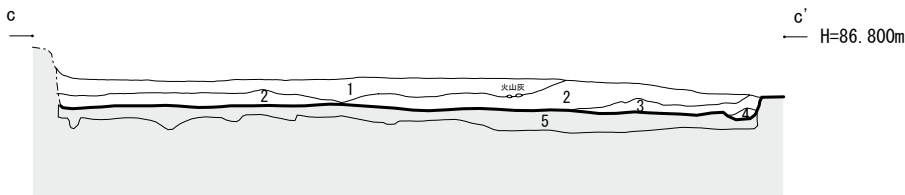
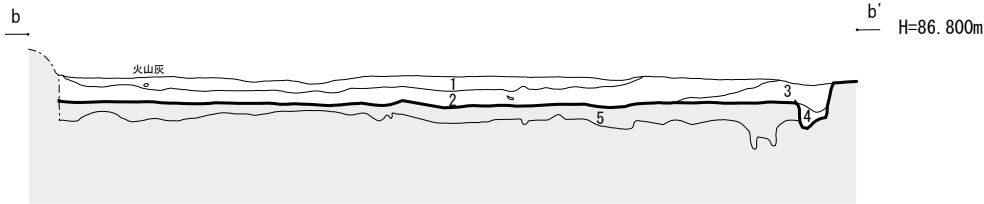
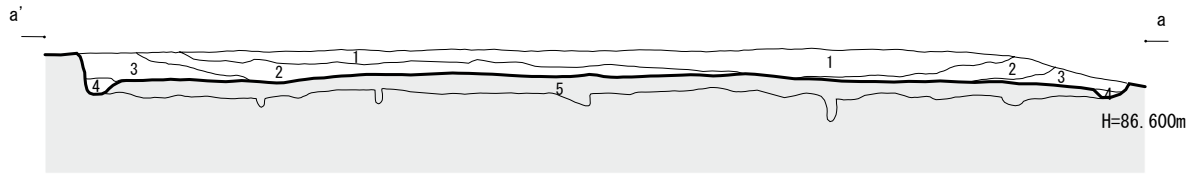
ほぼ平坦であり、東側が一部窪んでいる。床面までの深さは確認面から20cm程度である。床面には、壁面に沿って壁溝が構築されている。規模は、幅が20cm程度、深さが床面から10cm程である。掘方は中央部を中心に掘削が深く及び、床面から2～20cmの深さで貼床が施されている。堆積土は5つの層があり、黒褐色や褐灰色を呈する粘土質シルトが主体である。1層の下位には灰白色を呈するテフラ(To-a)が含まれている。三角堆積やレンズ状堆積が確認できることから自然堆積と考えられる。

付属施設には、調査区内においてはカマドが東辺に設置されているのみである。カマドは両袖の下半のみ残存し、煙道・煙出し孔が付属する。方位はN-81°-Eである。両袖間の距離は最大で1.4m、左袖の長さは50cm、右袖が62cmである。袖は、にぶい黄褐色と黒褐色シルトで構成されている。両袖



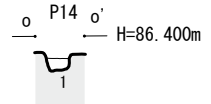
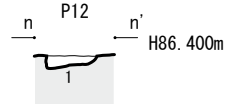
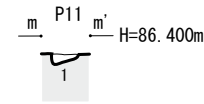
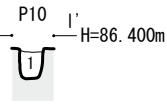
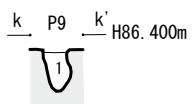
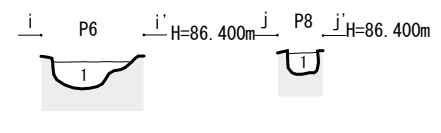
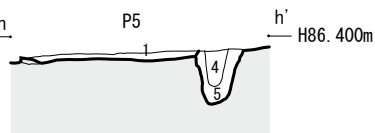
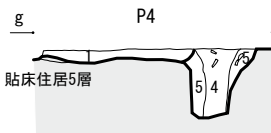
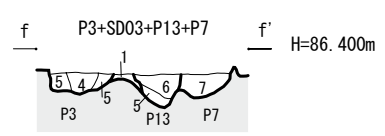
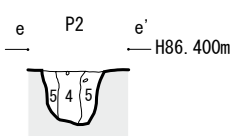
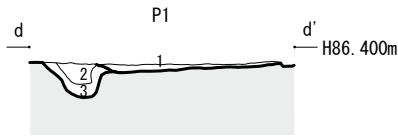
第41図 HSI06竪穴建物跡 1

3 遺構と遺物



HSI06

- |     |                   |  |
|-----|-------------------|--|
| 1   | 黒褐色シルト 10YR3/1    | 土器片(粒)を1%、明黄褐色シルト粒(10YR7/6)ごく少量を含む       |
| 2   | 暗褐色シルト 10YR3/3    | 明黄褐色シルト粒(10YR7/6)3%                      |
| 火山灰 | 灰白色シルト 10YR8/2    | To-a? 細粒の集合、ブロックで1層or1層と2層の境界に含まれる       |
| 3   | 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 明黄褐色シルトブロック(10YR7/6)(径10mm以下)7%を含む       |
| 4   | 黒褐色シルト 10YR3/1    | 明黄褐色シルト粒(10YR7/6)3%を含む                   |
| 5   | 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 | 明黄褐色シルトブロック(10YR7/6)(径50~70mm)を混合する=(貼床) |

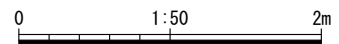


HSI06

- |      |   |                |   |
|------|---|----------------|---|
| P 6  | 1 | 黒褐色シルト 10YR2/3 | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~20mm)5%、炭化物(径1~10mm)1%を含む |
| P 8  | 1 | 黒色シルト 10YR2/1  | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~15mm)5%を含む                |
| P 9  | 1 | 黒色シルト 10YR2/1  | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~10mm)2%を含む                |
| P 10 | 1 | 黒色シルト 10YR2/1  | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~10mm)3%を含む                |
| P 11 | 1 | 黒褐色シルト 10YR2/2 | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~5mm)2%を含む                 |
| P 12 | 1 | 黒色シルト 10YR2/1  | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~10mm)3%を含む                |
| P 14 | 1 | 黒色シルト 10YR2/1  | 黄褐色シルト粒(10YR5/6)(径1~5mm)2%を含む                 |

HSI06内施設

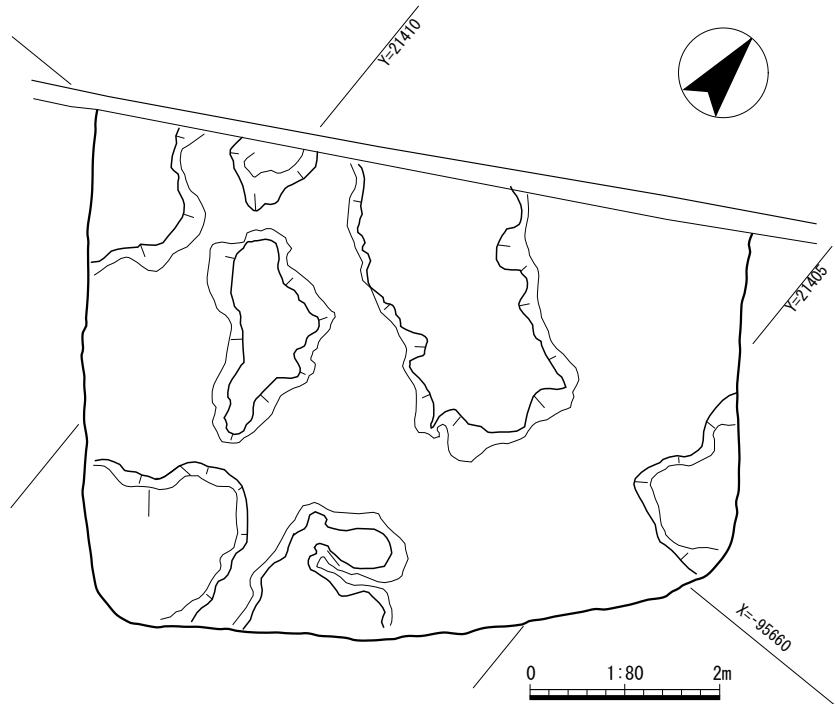
- |   |                    |  |
|---|--------------------|--|
| 1 | 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1  | 明黄褐色シルト粒(10YR7/6)3%。間仕切(SD1)埋土=SD1. 2. 3. 4. 5     |
| 2 | 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 明黄褐色シルトブロック(10YR7/6)(径30mm)3%を含む=P1                |
| 3 | 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 | 黒褐色シルトブロック(10YR3/2)(径10~20mm)7%を含む=P1.             |
| 4 | 黒褐色シルト 10YR3/1     | 明黄褐色シルトブロック(10YR6/6)(径10mm)3%を含む=柱痕跡=P2. 3. 4. 5   |
| 5 | 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1  |  |
|   |                    | 明黄褐色シルトブロック(10YR6/6)(径10mm)10%を含む=堀方埋土=P2. 3. 4. 5 |
| 6 | 黒褐色シルト 10YR3/1     | 明黄褐色シルト粒(10YR6/6)1%を含む6層=P13の1層、                   |
| 7 | 褐灰色粘土質シルト 10YR6/1  | 明黄褐色シルト粒(10YR6/6)10%、炭化物1%を含む7層=P7                 |



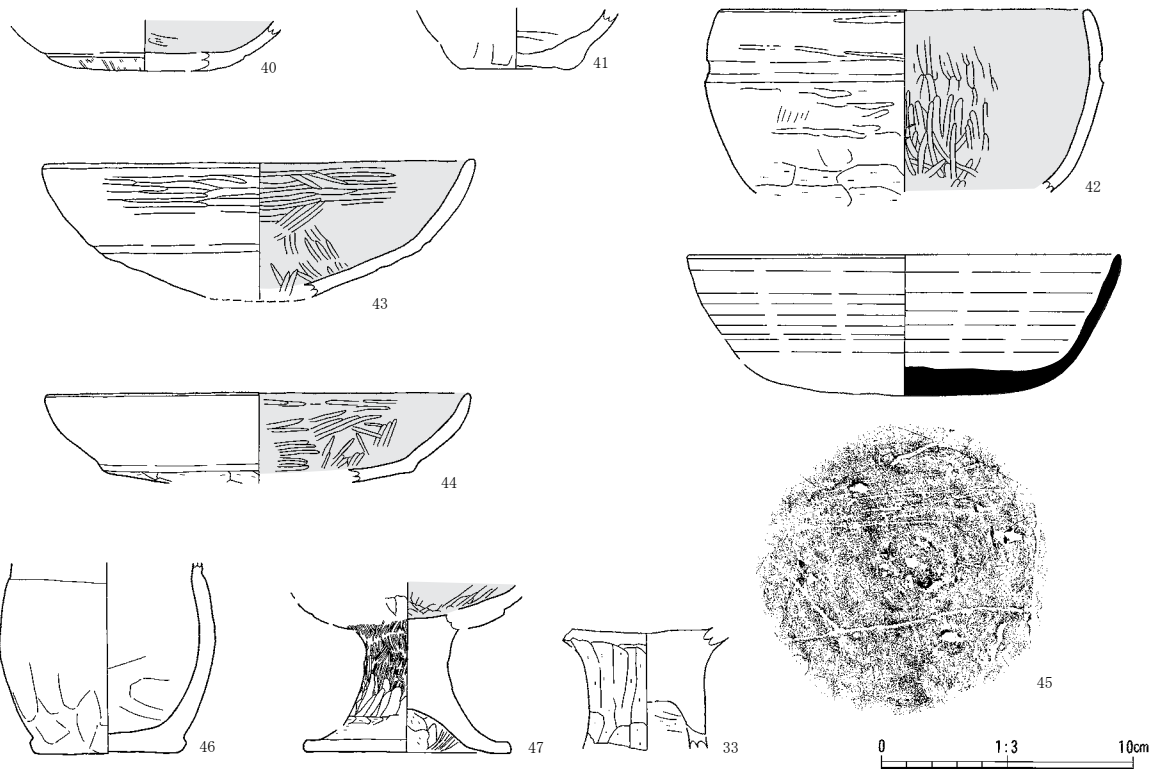
第42図 HSI06竪穴建物跡 2

間には燃焼面があり、60×70cmの範囲で焼土が広がっている。両袖間から煙道へは段差がなく延びている。煙道の長さは70cm、幅は最大で50cm、深さは確認面から30cmである。比較的短い煙道であり、煙道端がそのまま煙出しになっている。

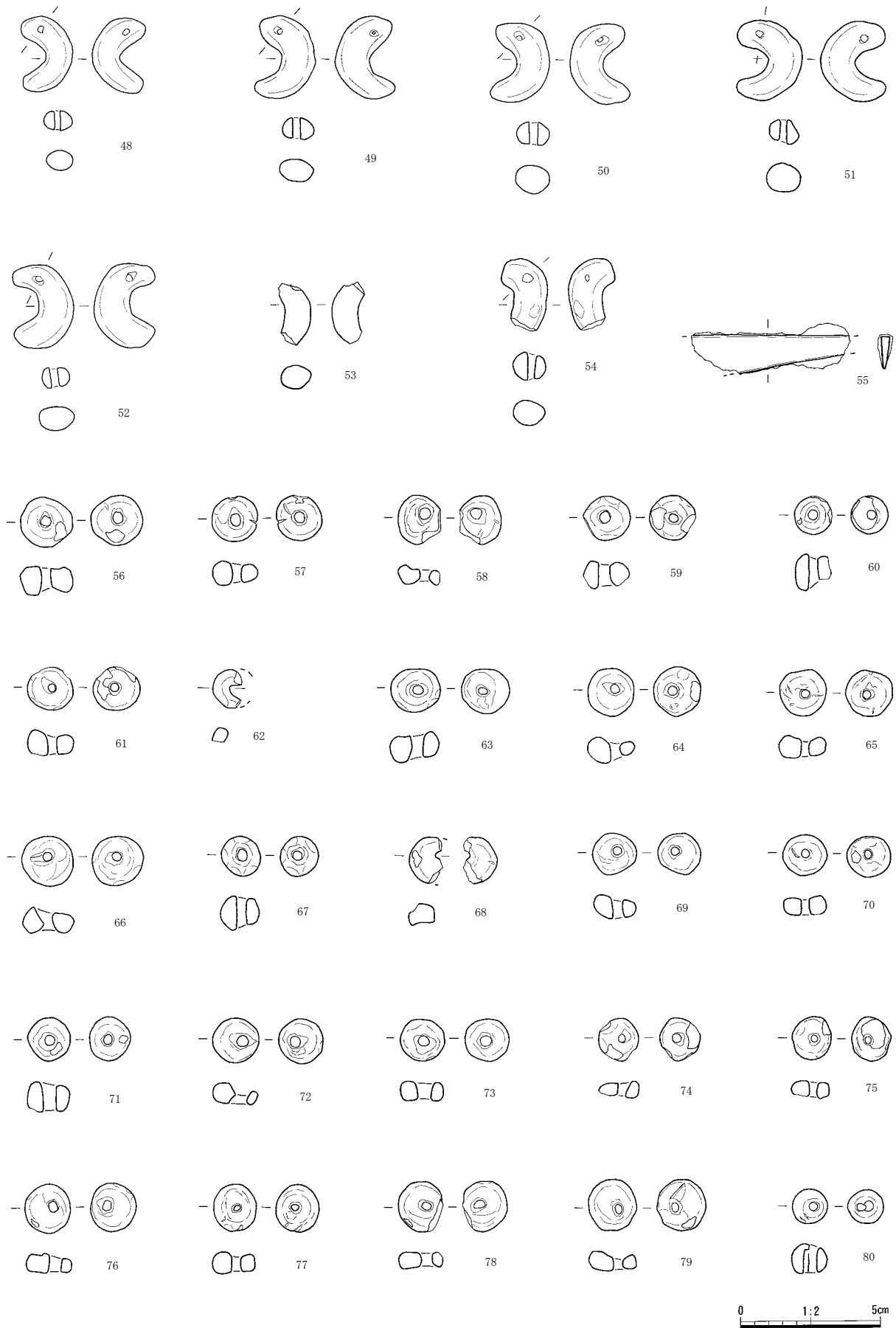
遺物は、堆積土を中心に10.08kg出土している。ロクロ調整の須恵器杯(81)や土師器小型甕(82~84)、大型甕(86~92)、ヘラ切り痕が残る土師器杯片(85)を図示した。ロクロ調整の土師器が多く、非ロクロ甕が一定量含まれているようである。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町IV期に位置づけた。



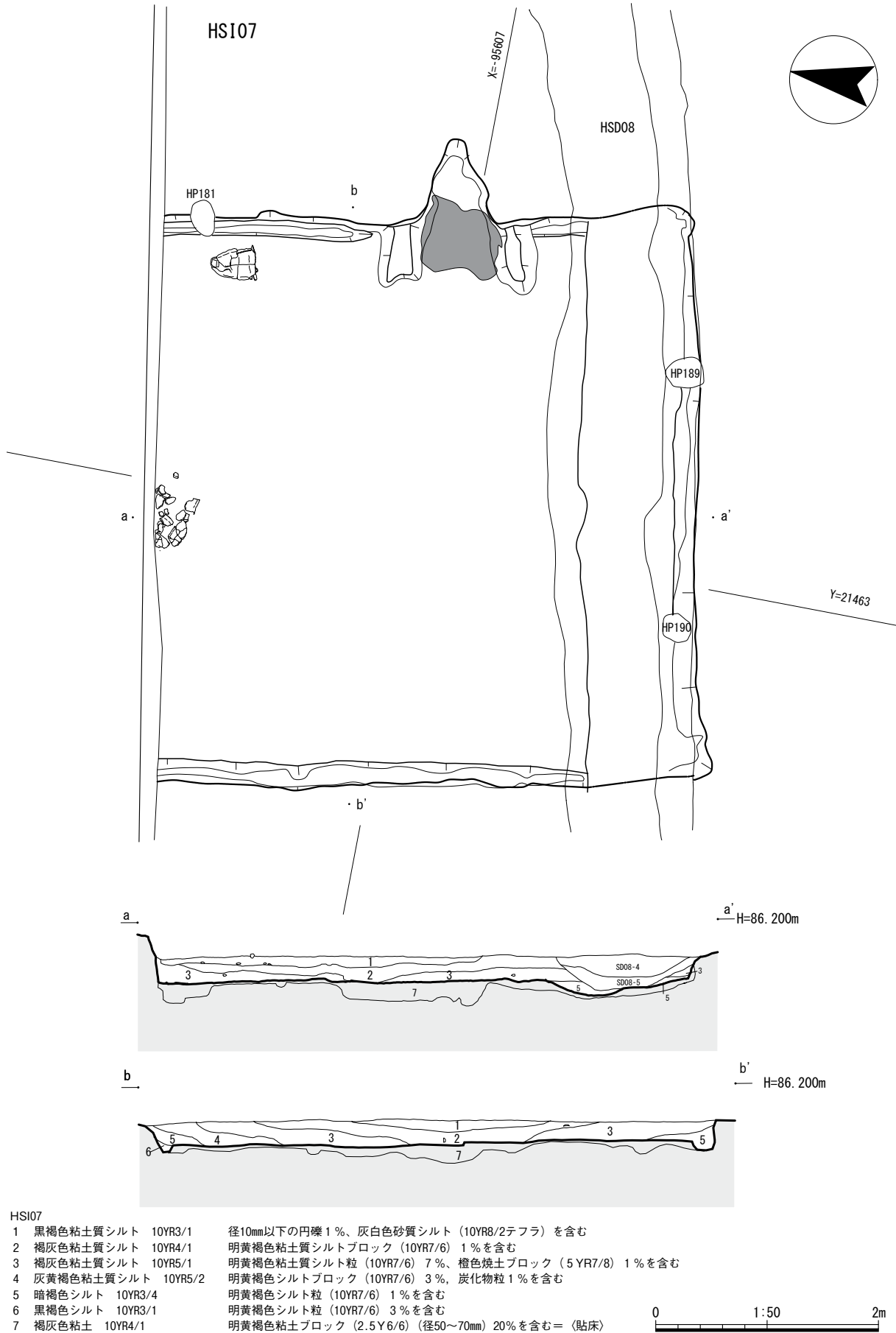
第43図 HSI06竪穴建物跡3(掘方)



第44図 HSI06出土遺物1



第45図 HSI06出土遺物 2

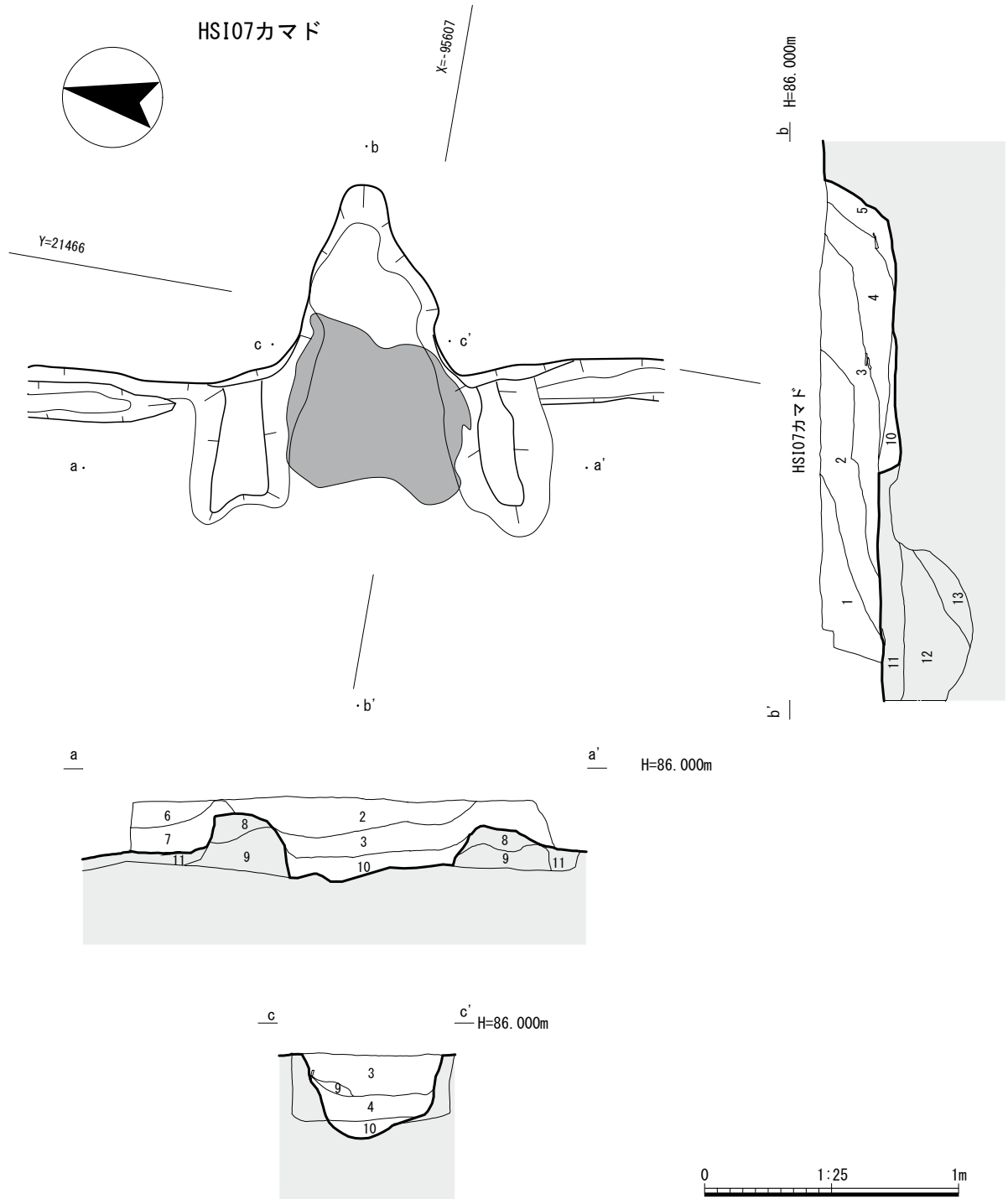


HSI07

- |   |            |         |  |
|---|------------|---------|--|
| 1 | 黒褐色粘土質シルト  | 10YR3/1 | 径10mm以下の円礫1%、灰白色砂質シルト(10YR8/2テフラ)を含む         |
| 2 | 褐灰色粘土質シルト  | 10YR4/1 | 明黄褐色粘土質シルトブロック(10YR7/6)1%を含む                 |
| 3 | 褐灰色粘土質シルト  | 10YR5/1 | 明黄褐色粘土質シルト粒(10YR7/6)7%、橙色焼土ブロック(5YR7/8)1%を含む |
| 4 | 灰黄褐色粘土質シルト | 10YR5/2 | 明黄褐色シルトブロック(10YR7/6)3%、炭化物粒1%を含む             |
| 5 | 暗褐色シルト     | 10YR3/4 | 明黄褐色シルト粒(10YR7/6)1%を含む                       |
| 6 | 黒褐色シルト     | 10YR3/1 | 明黄褐色シルト粒(10YR7/6)3%を含む                       |
| 7 | 褐灰色粘土      | 10YR4/1 | 明黄褐色粘土ブロック(2.5Y6/6)(径50~70mm)20%を含む=〈貼床〉     |

0 1:50 2m

第46図 HSI07 竪穴建物跡 1



HSI07カマド

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 1 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1  | 黒褐色シルトブロック (10YR2/2) (径20~30mm) 3%を含む 住居埋土2層と同じ                         |
| 2 褐灰色粘土質シルト 10YR6/1  | 黒褐色シルトブロック (10YR2/2) (径20~30mm) 1%、黄褐色シルトブロック (10YR8/6) (径10mm以下) 5%を含む |
| 3 明黄褐色シルト 10YR6/6    | 橙色焼土ブロック (5 YR7/8) (径10mm) 1%を含む (天井崩落土)                                |
| 4 黒褐色シルト 10YR3/2     | 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径20~50mm) 2%、橙色焼土粒 (5 YR7/8) 3%を含む               |
| 5 黒色シルト 10YR2/1      | 橙色焼土粒 (5 YR7/8) 1%、明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) 3%を含む                             |
| 6 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/2 | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) 3%、炭化物粒 1%を含む                                     |
| 7 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1  | 明黄褐色粘土ブロック (2.5 Y6/6) (径50~70mm) 20%を含む (貼床)                            |
| 8 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3  | 褐灰色シルト (10YR4/1) との混合土 (6 : 4)  |
| 9 黒褐色シルト 10YR2/2     | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径10mm以下) 3%を含む                                   |
| 10 褐灰色粘土質シルト 10YR5/1 | 焼土ブロック 3%、炭化物 2%を含む。うすい燃焼部か？  |
| 11 暗灰色粘土 N3/         | 明黄褐色粘土ブロック (10YR7/6) 30%を含む。(貼床)  |
| 12 暗灰色粘土 N4/         | オリーブ灰色シルトブロック (2.5GY6/1) 1%を含む  |
| 13 灰色粘土 N5/          | オリーブ灰色シルトブロック (2.5GY6/1) 5%を含む  |

第47図 HSI07竪穴建物跡2 (カマド)



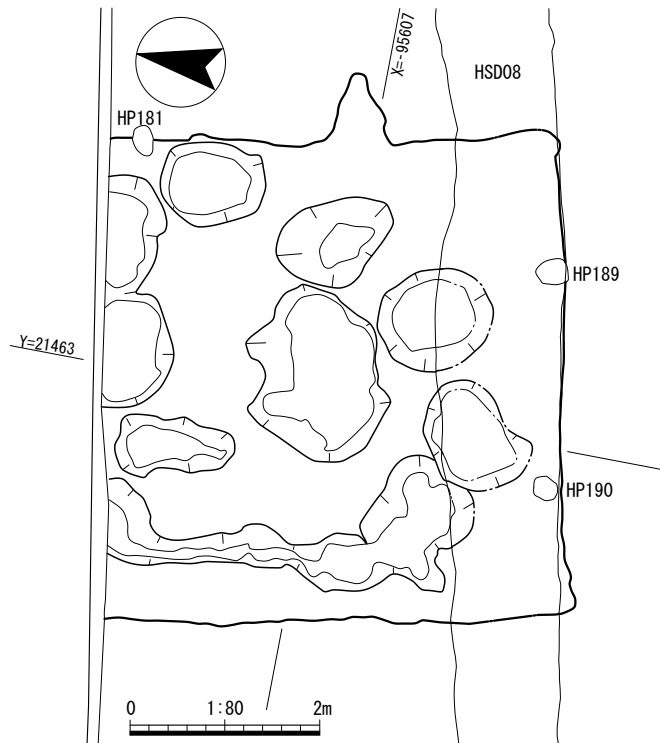
## HSI08 (第51~53図)

H区東部に位置する竪穴建物跡である。調査区内で完結する遺構である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複はHSD08・09、HP151・161・178とであり、HSD09以外は本遺構の方が古く、HSD09とは、本遺構の方が新しい。

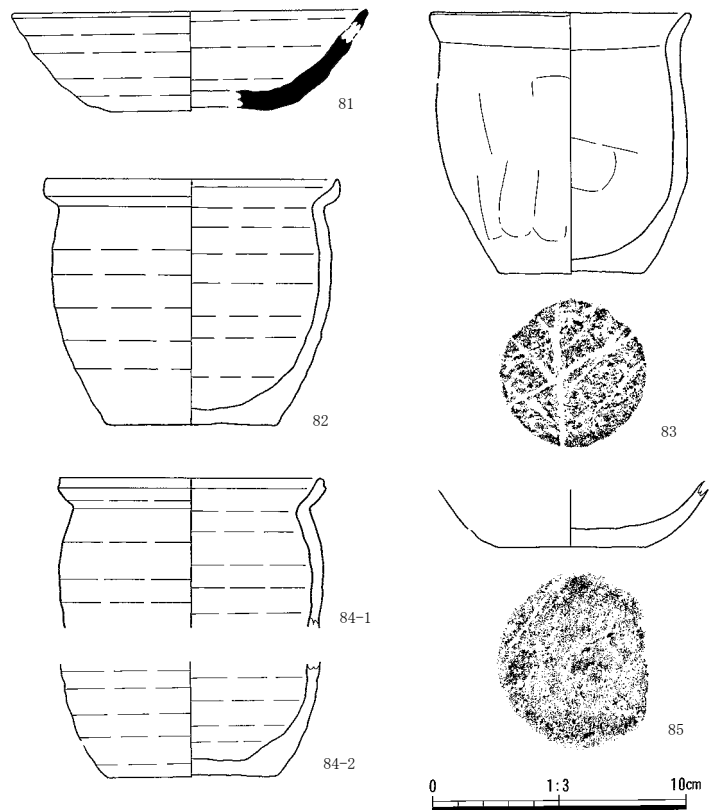
平面形は隅丸方形を呈する。規模は、東西壁間で3.2m、南北壁間で3.5mと小型の建物跡である。建物方位は、東辺を基準とするとN-13°-Wである。床面は、ほぼ平坦であり、深さは確認面から20cm程度である。床面には、壁面に沿って一部に壁溝が確認できる。規模は、幅が10cm程度、深さが床面から10cm程度である。掘方は、中央部よりも壁面に沿ってよく掘削するもので、床面から3~10cmの厚さで貼床が施されている。堆積土は4つの層があり、黒褐色を呈するシルト層が主体である。6層は黒褐色と黄褐色を呈する粘土質シルトの混合土であり、貼床の構成土となる。

付属施設には、土坑(SK1)が1基、焼土が2箇所ある。カマドは確認されない。SK1は、平面形が円形を呈し、長径が48cm、深さが60cmの規模である。焼土は2箇所床面の中央北側と南側に位置する。

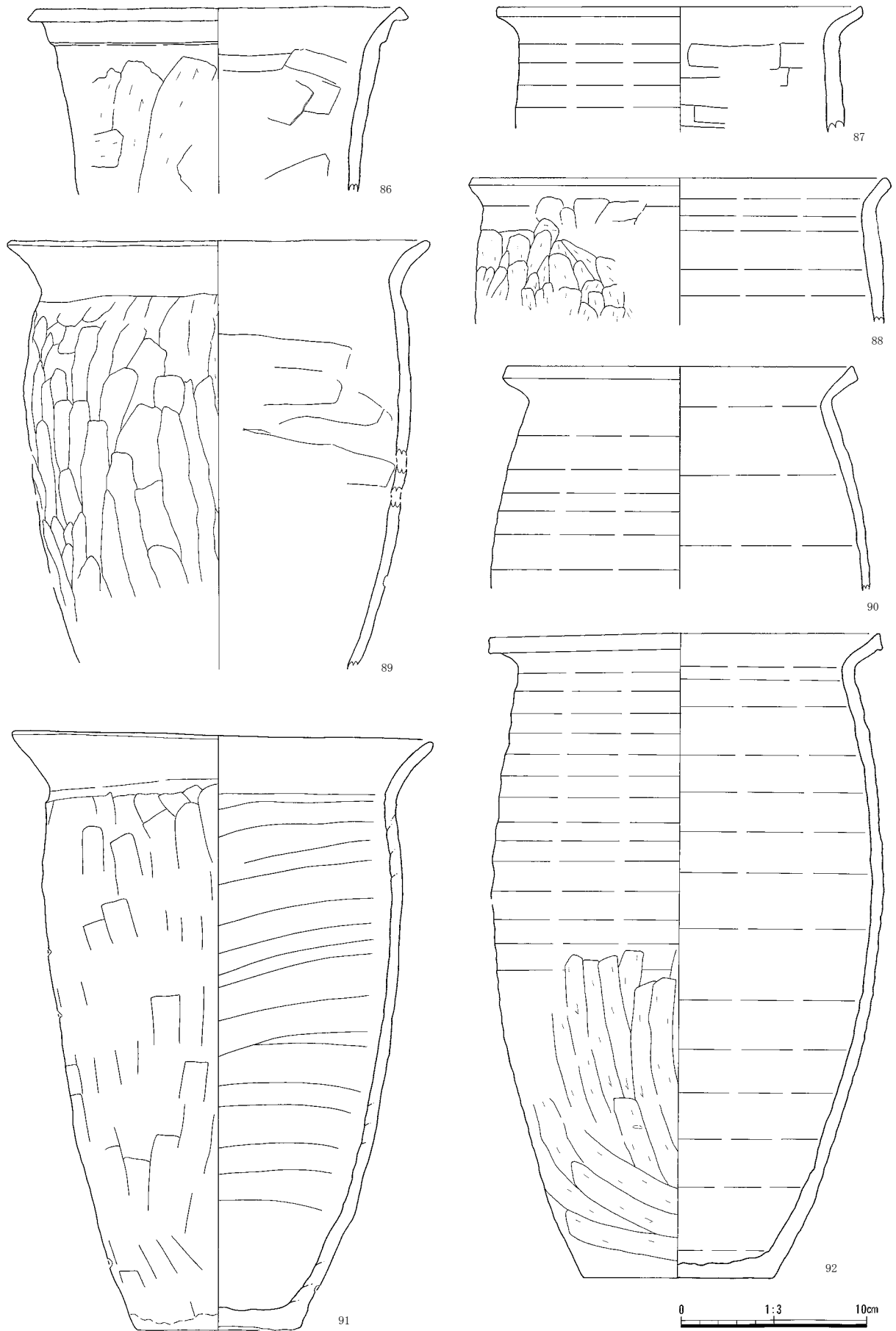
遺物は、堆積土を中心に2.86kg出土している。土師器球胴甕(93)や磨石(94)を図示したが、そのほか非ロクロ杯や非ロクロ甕などの細片が出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。



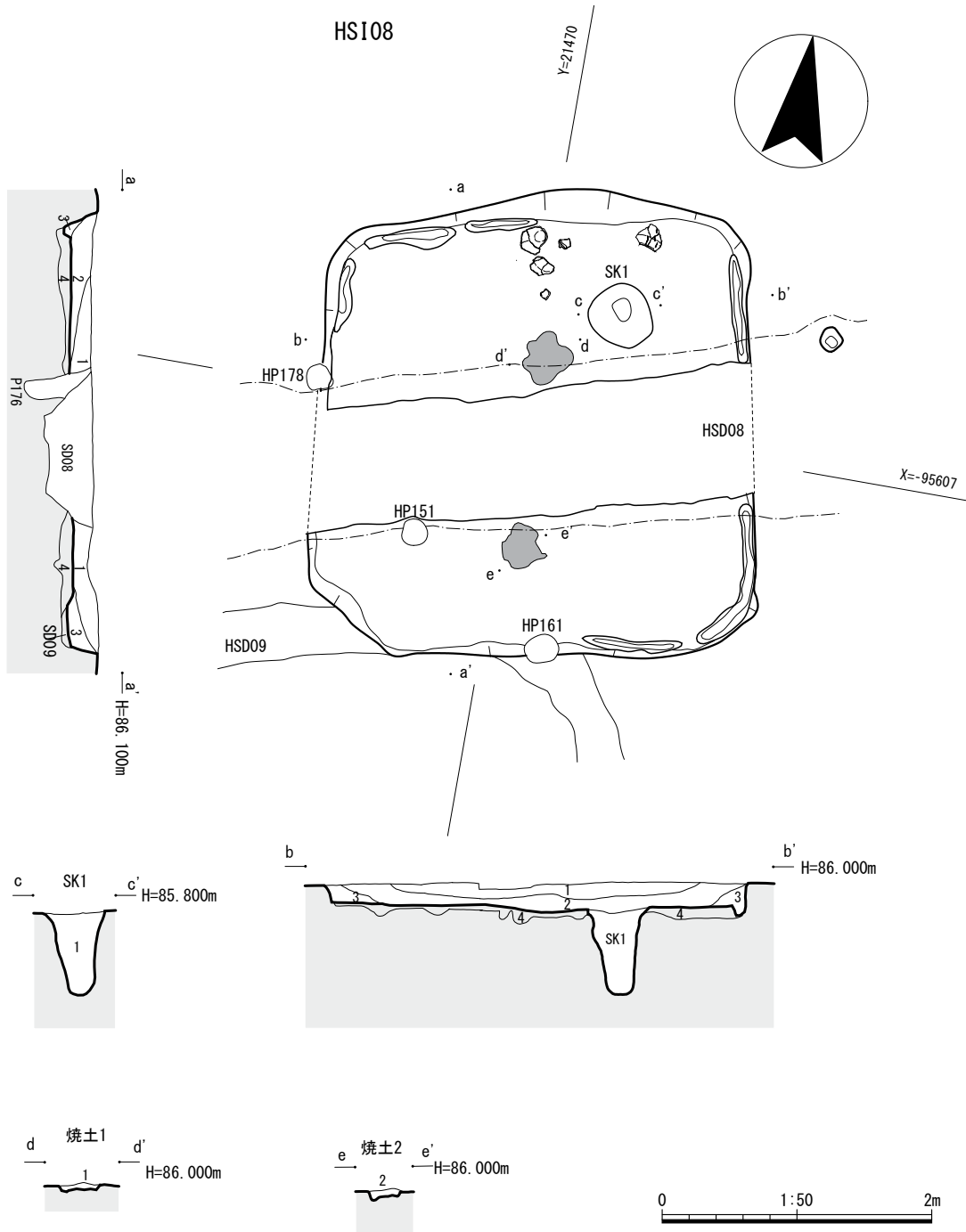
第48図 HSI07竪穴建物跡3 (掘方)



第49図 HSI07出土遺物1



第50図 HSI07出土遺物 2



HSI08

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR8/6) (径1~10mm) 3%、炭化物1%を含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR8/6) (径1~10mm) 5%、赤褐色焼土粒 (5YR4/8) (径1~5mm) 微量、炭化物微量を含む
- 3 黒褐色シルト 10YR2/3 明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~3mm) 5%を含む
- 4 明黄褐色シルト (10YR6/8) ブロックと、黒褐色シルト (10YR2/3) しまり中 粘中 との混泥土 (1:1)

HSI08SK 1

- 1 黒色シルト 10YR2/1 赤褐色焼土粒 (5YR4/8)、炭化物3%を含む

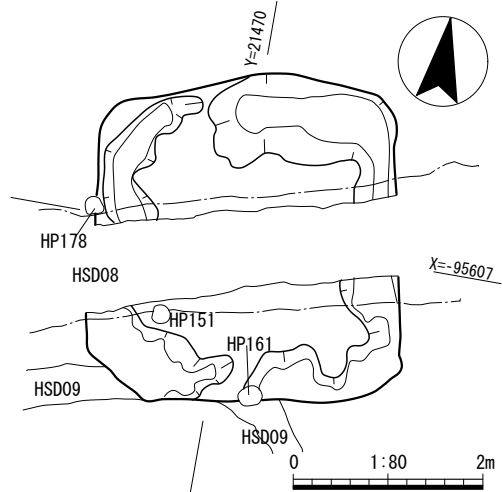
HSI08焼土1・焼土2

- 1 にぶい赤褐色シルト 5YR5/4 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック (径1cm以下) 1%を含む
- 2 明赤褐色シルト 5YR5/6 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック2%を含む 焼土1よりやや固い焼土

第51図 HSI08竪穴建物跡1

HSI09 (第54図)

H区東部に位置する小型の竪穴建物跡である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複は、HSK17・21、HSD08とであり、新旧関係は、HSK21より新しく、HSD08、HSK17よりは古い。ゆがんだ正方形形状を呈し、規模は、東西間、南北間とも2.2mである。建物方位は、西辺を基準とするとN-9°-Eである。床面は、ほぼ平坦に構築されており、貼床は施されていない。確認面からの床面までの深さは14cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。カマドが無いことや規模の点で居住用でない可能性がある。遺物は、堆積土から、ロクロ杯や非ロクロ杯が116g出土している。

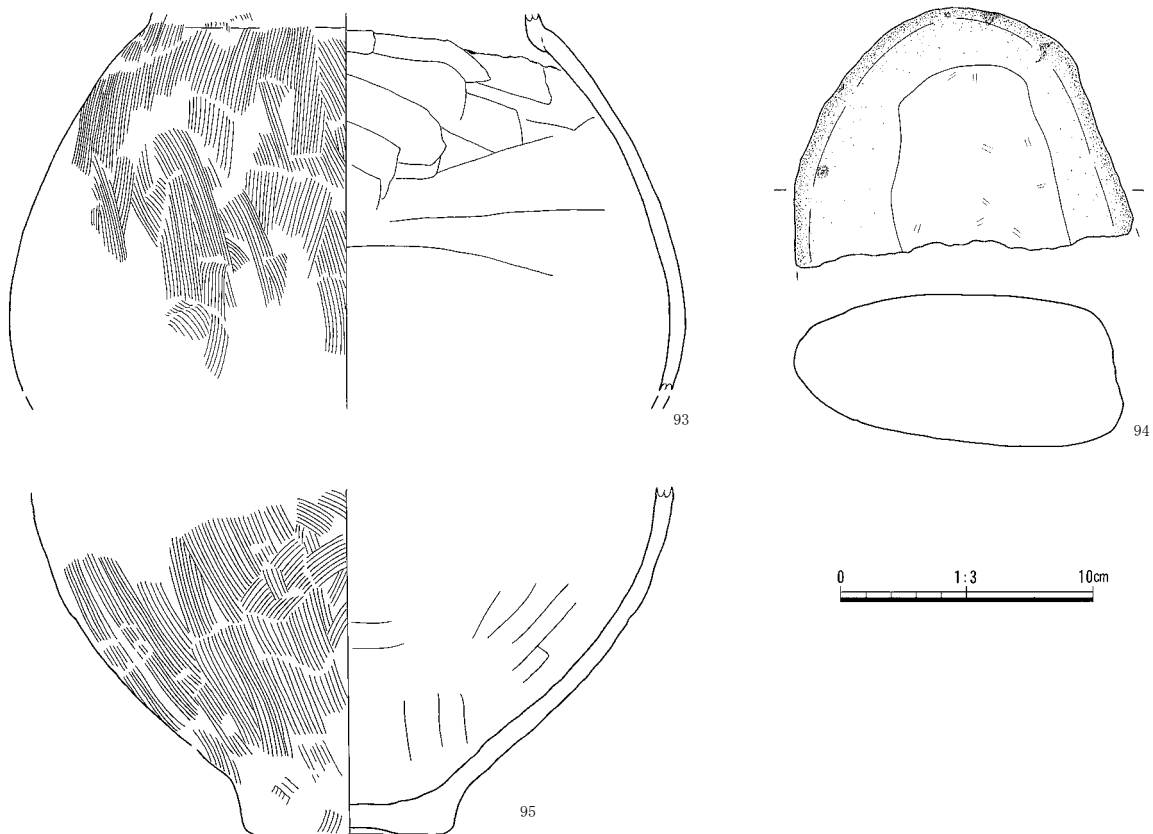


第52図 HSI08竪穴建物跡 2 (掘方)

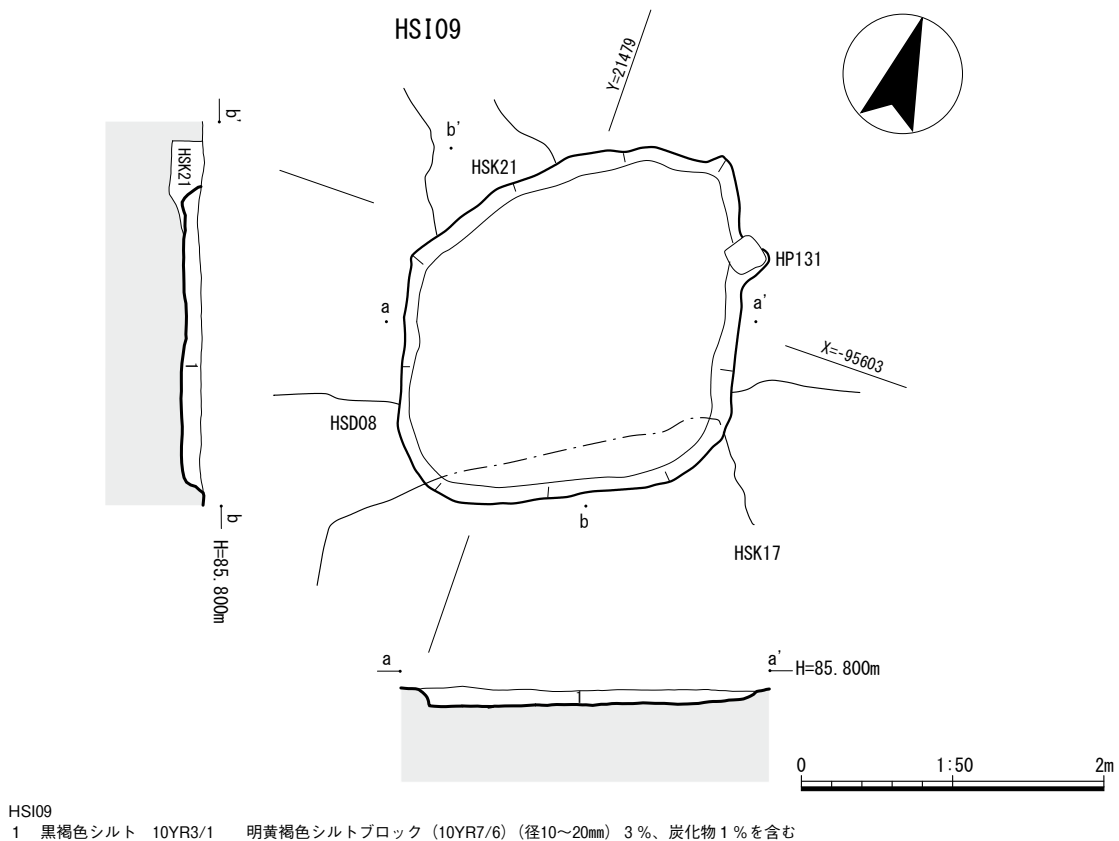
時期は、奈良や平安時代の遺物が混在しているが、建物方位を重視して漆町IV期に位置づけた。

HSI10 (第55~57図)

H区東端部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の約北半分を調査したのみであり、残りは北・南側の調査区外にある。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複は、HSD08、HSK24とであり、いずれも本遺構の方が古い。また、現代



第53図 HIS08出土遺物

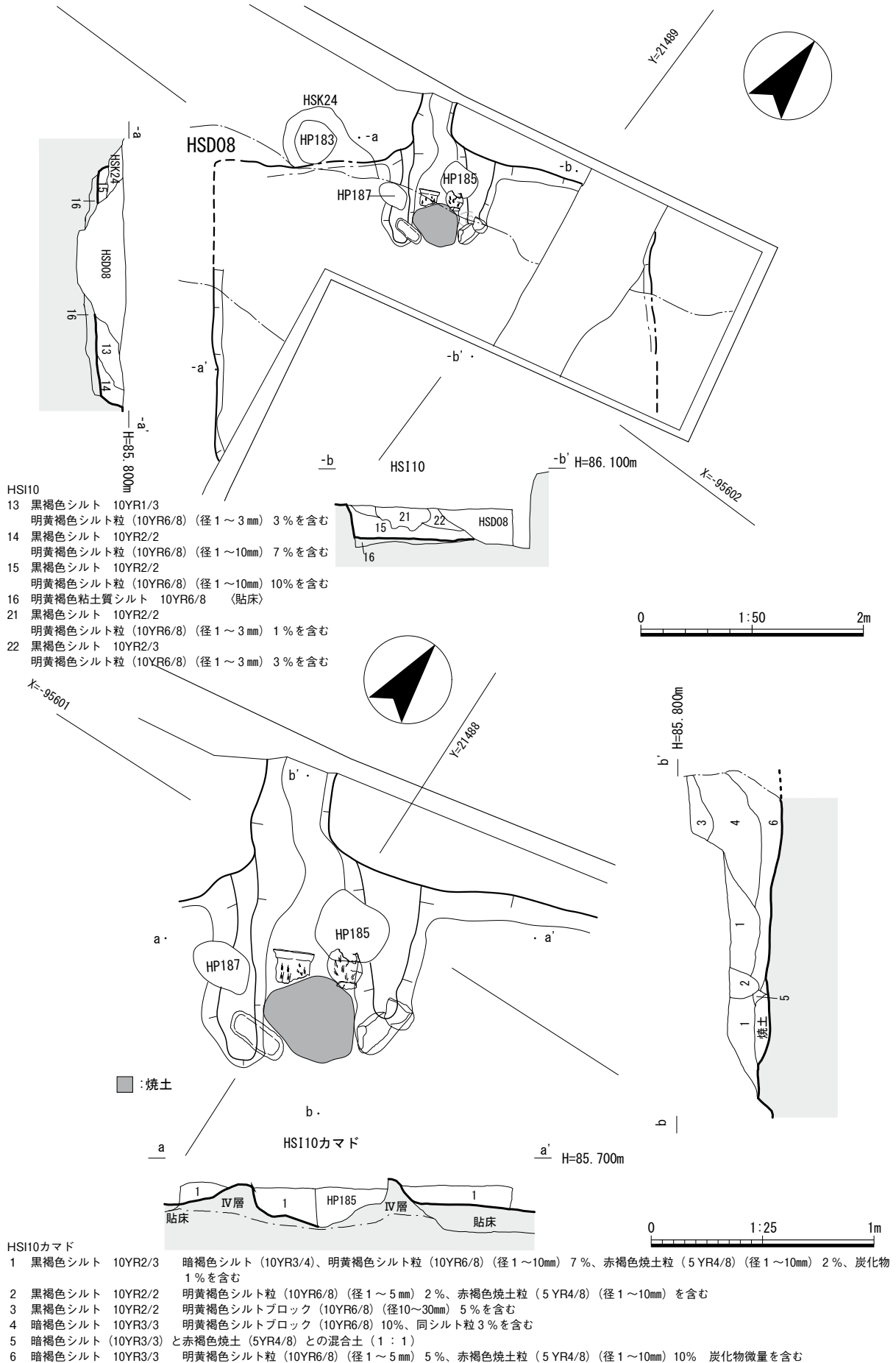


第54図 HSI09竪穴建物跡

の水道管によって一部が破壊されている。平面形は全容が不明のため正確ではないが方形を呈すると推定される。北辺・西辺ともあまり膨らまない。規模は、調査した西壁と東壁の一部で計測すると、東西間が約4mとなる。建物方位は、西辺を基準とするとN-38°-Wである。床面は、全体は不明であるが、調査した範囲ではほぼ平坦であり、深さは確認面から26cm程度である。掘方は調査した範囲では、北西隅部分や北東隅部分などがより深く掘削されており、床面から10cmの深さで貼床が施されている。堆積土は5つの層があり、いずれも黒色から黒褐色を呈するシルト層である。

付属施設にはカマドがあり、北辺中央に設置されている。カマドは両袖の下半のみ残存し、煙道の一部が付属する。煙道の先端や煙出し孔は調査区外に位置する。方位はN-34°-Wである。両袖間の距離は最大で1.0m、左袖の長さは0.9m、右袖が0.8mである。袖は、地山であるIV層を削り出して構築されている。焚き口周辺には円礫を立てて芯材としている。両袖間には燃焼面があり、40×50cmの範囲で焼土が広がっている。両袖間から煙道へは段差がなく北側に延びる。煙道は一部のみ調査区内にあるため詳細は不明である。

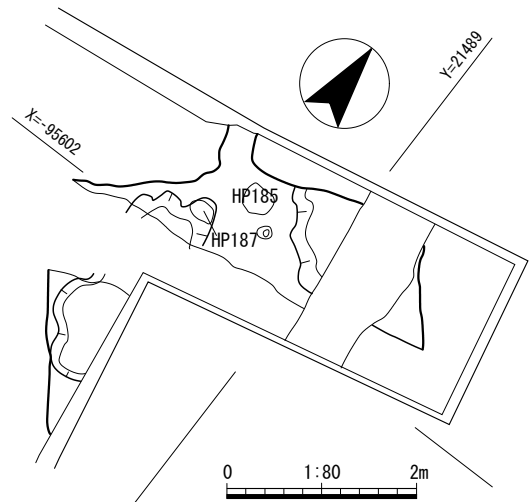
遺物は、堆積土を中心に1.78kg出土している。原位置を保っていた可能性があるのはカマド周辺の数点のみである。土師器鉢(96)、非ロクロ調整の土師器小型甕(97・98)のほか、非ロクロ杯、非ロクロ甕などの破片が出土している。時期は、建物方位の検討や出土遺物から、漆町I期に位置づけた。



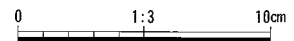
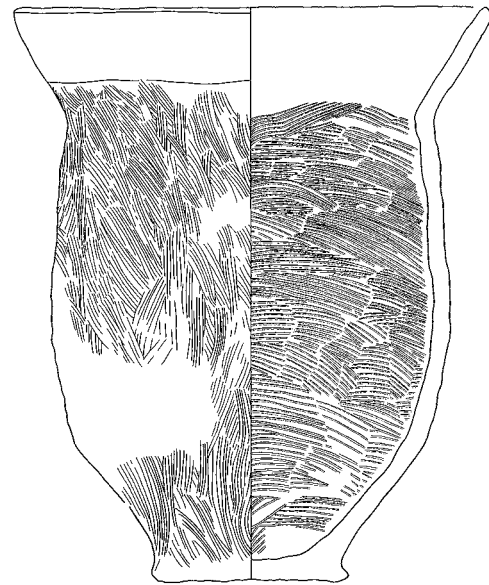
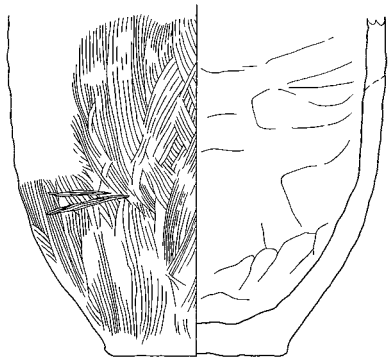
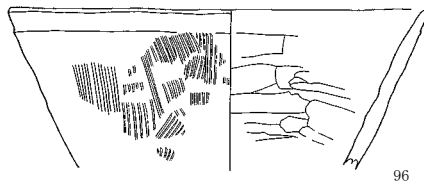
## HSK17

## (第58・59図)

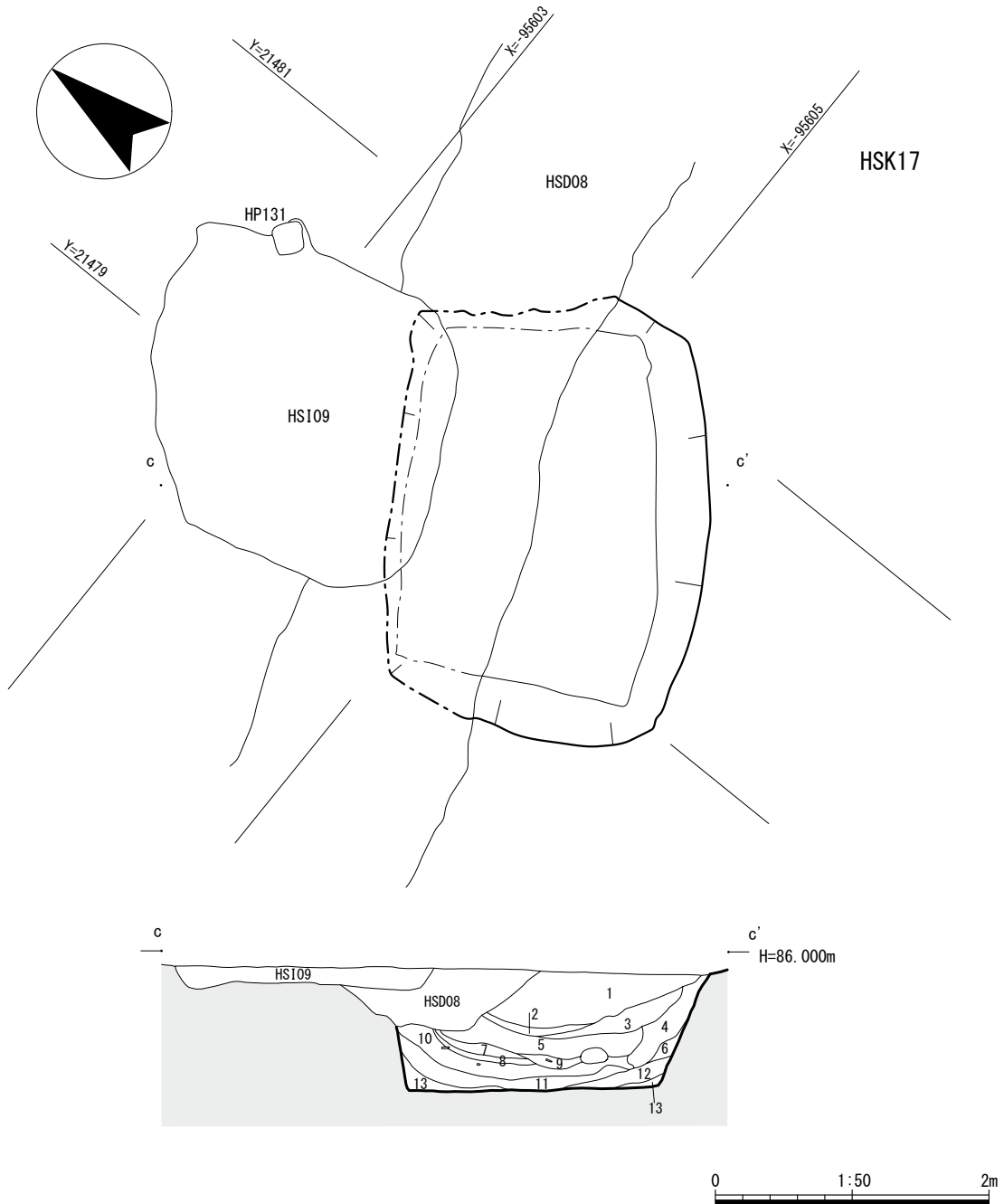
H区東部に位置する竪穴建物跡である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面と重複する遺構の調査後に行った。他遺構との重複は、HSI09、HSD08とであり、いずれよりも本遺構の方が古い。平面形は南北に長い隅丸方形を呈し、規模は、東西間が2.3m、南北間が3.3mである。建物方位は、東辺を基準とするとN-43°-Wである。床面は、ほぼ平坦に構築されており、貼床は施されていない。確認面からの深さは、最大で85cmと深い。堆積土は13の層があり、黒色から黒褐色、灰黄褐色から黄褐色、にぶい黄褐色を呈するシルト層が



第56図 HSI10竪穴建物跡 2 (掘方)



第57図 HSI10出土遺物



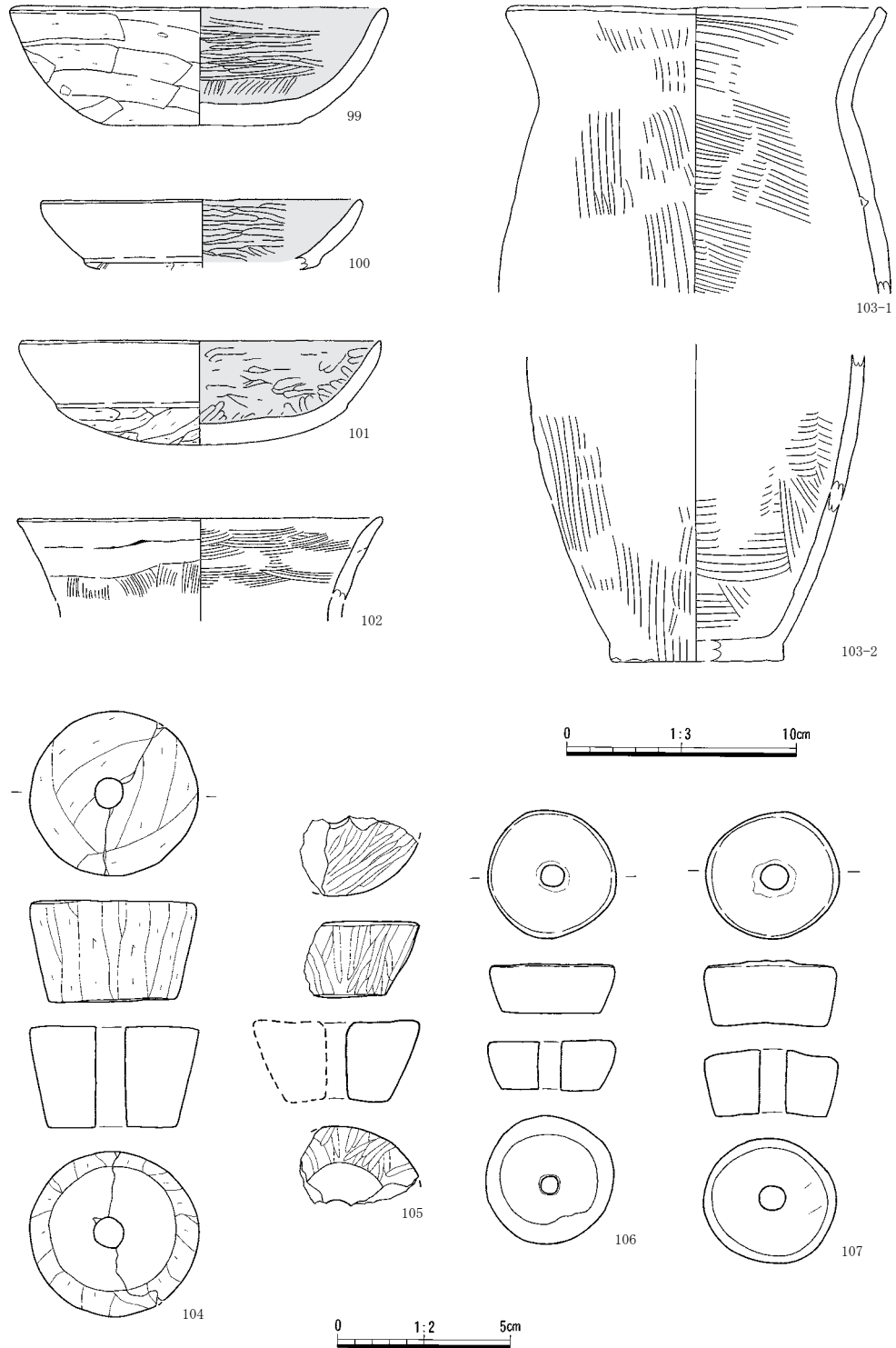
HSK17

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 1 黒褐色シルト 10YR3/2     | 明黄褐色シルト粒 (10YR7/6) 1%を含む                        |
| 2 黒色シルト 10YR2/1      | 明赤褐色焼土粒 (2.5YR5/6) ごく少量を含む                      |
| 3 暗褐色シルト 10YR3/3     | 明黄褐色シルト粒 (10YR7/6) 3%を含む                        |
| 4 灰黄褐色シルト 10YR4/2    | 明黄褐色シルト粒 (10YR7/6) 10%、炭化物ごく微量を含む               |
| 5 黒褐色シルト 10YR3/2     | 明黄褐色シルト粒 (10YR7/6) 2%、炭化物3%、焼土粒3%を含む            |
| 6 黄褐色シルト 10YR5/6     | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径20~30mm) 3%を含む          |
| 7 灰黄褐色シルト 10YR5/2    | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径10mm前後) 20%、炭化物3%を含む    |
| 8 褐灰色シルト 10YR4/1     | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径10mm) 5%、炭化物1%、焼土粒1%を含む |
| 9 褐灰色シルト 10YR4/1     | 炭化物3%、焼土粒3%、土器片を含む                              |
| 10 にぶい黄褐色シルト 10YR5/3 | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径10~30mm) 20%、炭化物3%を含む   |
| 11 褐灰色シルト 10YR4/1    | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径20~50mm) 10%を含む         |
| 12 にぶい黄褐色シルト 10YR5/4 | 褐灰色シルトブロック (10YR4/1) (径10mm) 3%を含む              |
| 13 明黄褐色シルト 10YR7/6   | 黒褐色シルト粒 (10YR3/2) 1%を含む                         |

第58図 HSK17竪穴建物跡



主体である。三角堆積やレンズ状堆積が観察できることから自然堆積と考えられる。カマドが無いことや規模の点で住居跡でない可能性がある。遺物は、堆積土を中心に総量9.39kg出土している。遺物には、土師器杯(99～101)や土師器甕(103)、土師器の甕あるいは球胴甕の口縁部片(102)があり、土製紡錘車の紡輪(104～107)がまとめて出土している。時期は、出土遺物や建物方位から判断すると漆町I期に位置づけられる。



第59図 HSK17出土遺物

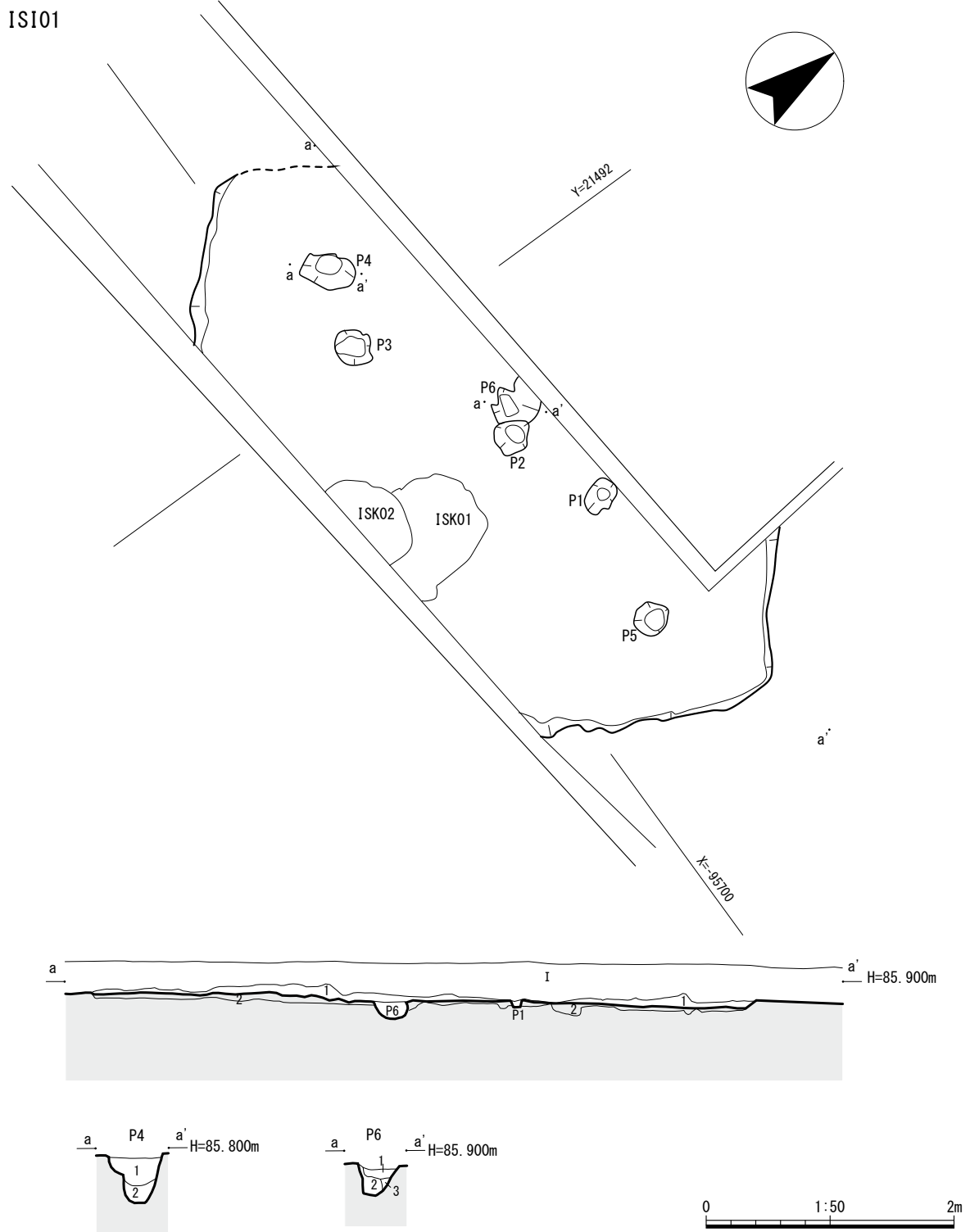
ISI01

(第60～62図)

I区の東側に位置する竪穴建物跡である。遺

構の検出はI層除去後のIV層上面で行った。遺構の北側・南側が調査区外に位置しており、確認できたのは建物跡の西辺と南・東辺の一部のみである。

ISK01・02と南側で重複し、いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。平面形は調査区外も含めて推定すると隅丸形状を呈し、規模は東西間4.7mである。方位は、東辺を主軸とするとN-61°-Wである。確認面からの床面までの深さは12cmと削平のため浅い。床面には厚さ4～10cmの貼床が施され、



ISI01

- 1 黒褐色シルト 10YR3/1  
地山土粒（径 1 cm）10%を含む 明黄褐色シルトブロック（10YR7/6）（径 3 cm）5%を含む（ISI01の埋土）
- 2 黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 黒褐色土 5%を含む 貼床

ISI01P4

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土粒（径 5 mm）3%を含む
- 2 明黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 黒色土（10YR1.7/1）5%を含む

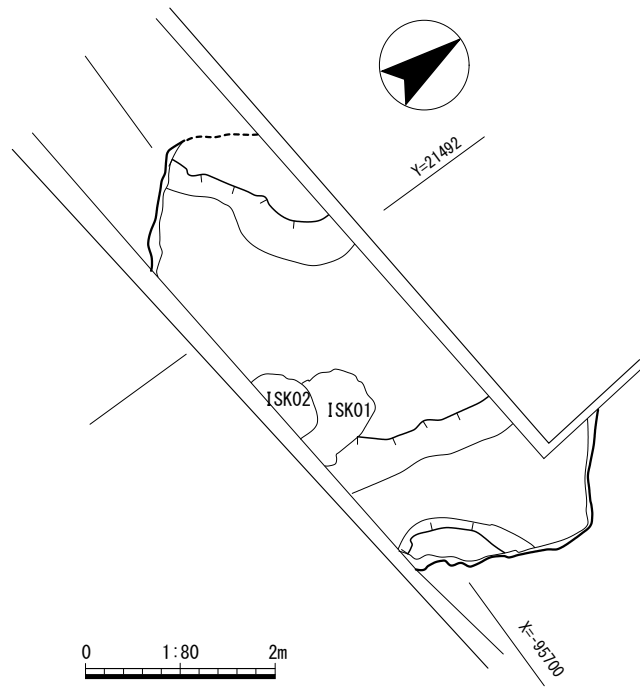
ISI01P6

- 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 地山土粒（径 1 cm）5%を含む
- 2 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 地山土粒（径 5 cm）5%を含む
- 3 黒褐色粘土質シルト 10YR6/5 褐灰色土（10YR4/1）5%を含む

第60図 ISI01竪穴建物跡 1

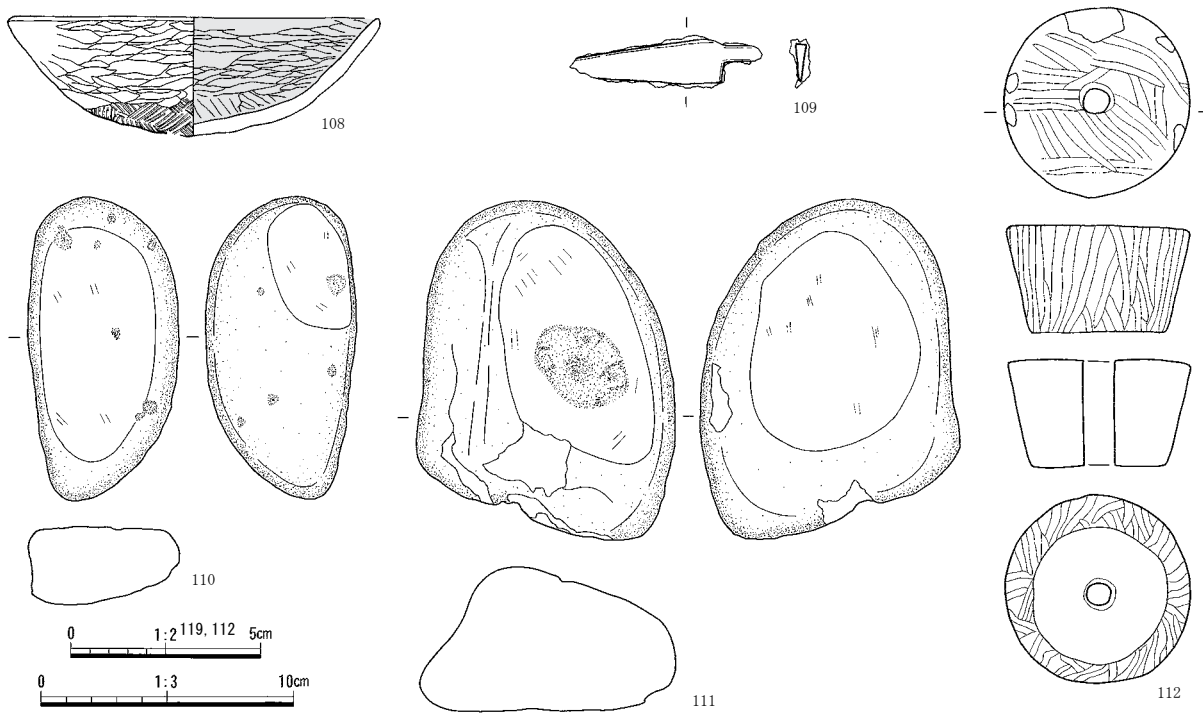
ほぼ平坦に構築されている。掘方は北  
辺側より2段に下げられている。堆積  
土は最下層の1層のみ確認でき、黒褐  
色を呈するシルト層である。貼床は黄  
褐色を呈する粘土質シルトであり、黒  
褐色を呈するシルト層を多く混合す  
る。

カマドは調査区内からは確認されな  
かったが、付近の建物と同様に北辺側  
に設置されていると予想される。その  
他の施設として5個のピット（小穴）  
を床面から検出している。平面形は円  
形から楕円形状を呈し、規模は径が30  
～42cm、深さが20～40cmである。堆積  
土は2～3層に区分でき、いずれも黒  
褐色を主体とする粘土質シルトであ  
る。P4・P5は位置関係から支柱穴  
と想定できるかもしれない。

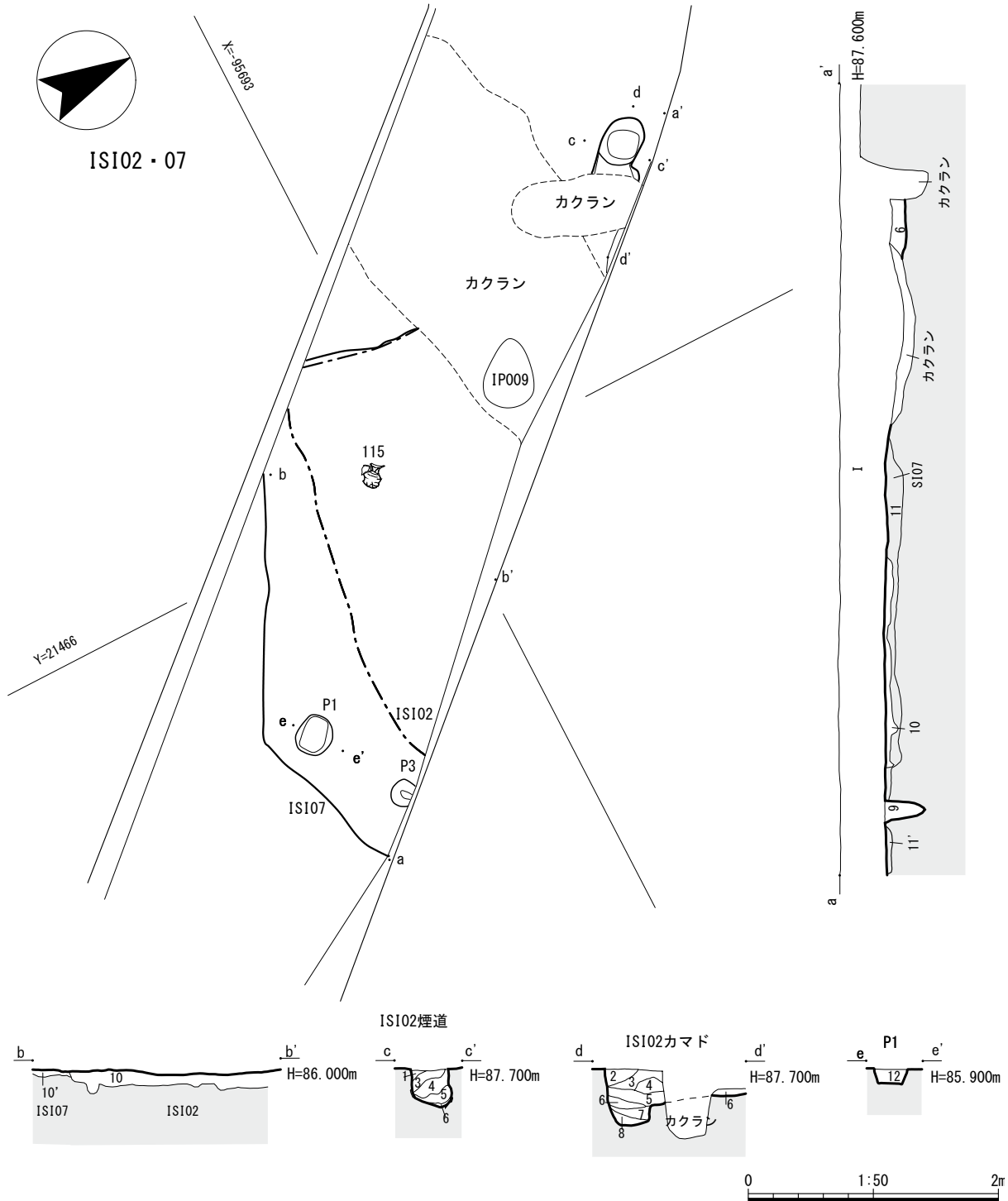


第61図 ISK01 竪穴建物跡 2（掘方）

遺物は堆積土を中心に12.62kg出土している。土師器が中心だが、土製品（112）や鉄製品（109）も出土している。108は土師器杯で、内外面ともミガキが施される。内面にのみ黒色処理がされている。そのほか土師器には非ロクロ甕が出土している。109は鉄製刀子である。茎部の一部が欠損している。112は土製紡錘車の紡輪である。外面はミガキで調整されている。110・111は磨石である。図示してい



第62図 ISK01 出土遺物



IS102-07

- 9 黒色シルト 7.5YR2/1
- 10 黒色シルト 10YR2/1
- 10' 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2
- 11 黒色シルト 7.5YR2/1

- 褐色粘土5% 焼土粒含 本年のIS102埋土に近いと思われる (P3)
- 地山土粒 (径5cm) 15%を含む
- 黒色シルトベースに褐色ブロックを60~80%を含む (HS107の掘り方)

IS102カマド煙道断面

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2
- 3 暗褐色シルト 10YR3/4
- 4 褐色シルト 10YR4/6
- 5 黒褐色シルト 10YR2/3
- 6 褐色シルト 7.5YR2/1
- 7 褐色粘土質シルト 10YR4/6
- 8 黒色シルト 10YR2/1
- 10 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2
- 12 黒色粘土シルト 10YR2/1

- 天井崩落の凹地堆積土
- 褐色土粒10%を含む、1層にほぼ同相
- 褐色土ブロック含む、天井崩落土の一部
- 天井崩落ブロックを含む
- 褐色土粒10~15%、焼土粒を含む
- 煙道堆積土

- 地山土粒 (径5cm) 10%を含む

第63図 IS102・07竪穴建物跡

ないが他にも出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

(巴・西澤)

#### ISI02 (第63・64図)

I区のはほぼ中央に位置する竪穴建物跡である。検出はI層除去後のIV層上面で行った。ISI07と重複し、ISI07より新しい。表土である耕作土によって、大部分が削平され

ており、貼床の範囲を確認したに過ぎない。また北側の一部は攪乱によって破壊され、東側が調査区外に位置するため、全容は不明である。平面形は、確認できた貼床の形状から推定すると隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、不明であるが、調査区内の現状では東西4m程である。建物方位は、西壁を主軸とすると $N-63^{\circ}-W$ である。床面はほぼ平坦であるが、本来の形状かは不明である。

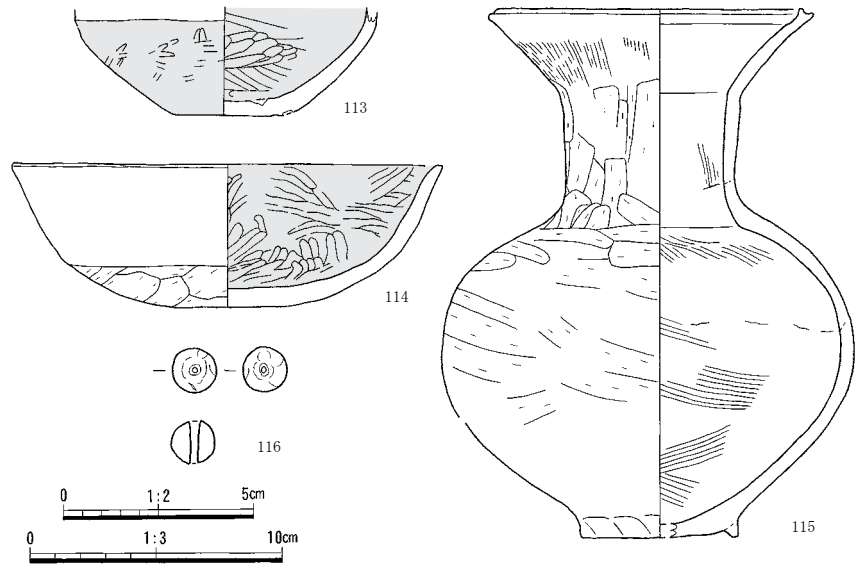
付属する施設には、カマドと床面にピット2個がある。カマドは北壁で確認したが、攪乱によって壊されており、確認できたのは煙出しと煙道の一部のみである。確認できた範囲では、煙出し孔は、径30~40cmである。堆積土は8つの層があり、黒褐色シルト層が主体である。床面にあるP1は径30×25cmの楕円形を呈する平面形である。P2は径20cmの円形を呈する平面形で、深さは32cmである。堆積土はいずれも単層であり、黒色を呈するシルト層である。

遺物は堆積土(貼床)から少量(833g)出土している。113・114は土師器杯で、113は内外面に黒色処理が施される両黒の杯である。底部は平底である。114は、復元口径17cmの杯で、体部下半はヘラケズリが施される。115は土師器壺である。直線的な頸部から大きく開く口縁部をもつ器形である。床面からの出土である。116は土製丸玉である。検出中に出土したことから、厳密にはこの遺構に伴わない可能性がある。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

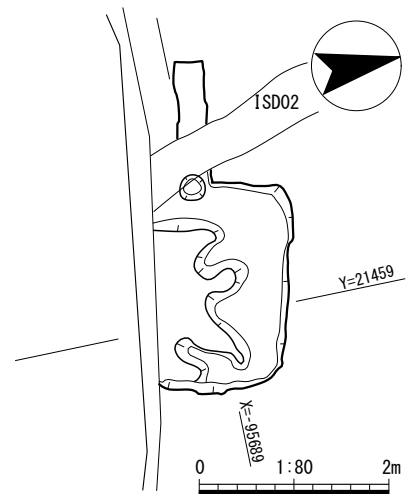
(巴・西澤)

#### ISI03 (第65~67図)

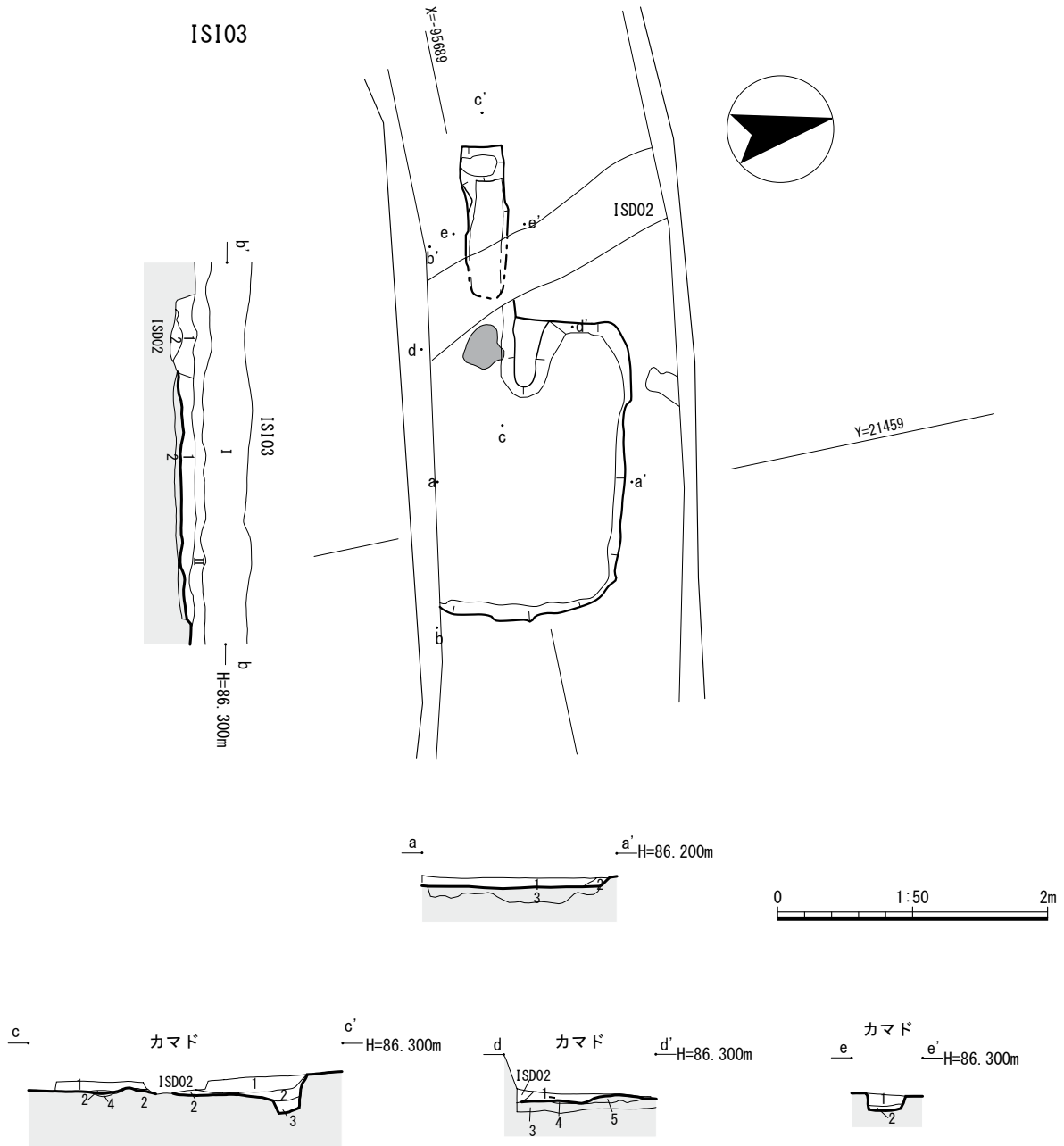
I区のはほぼ中央に位置する竪穴建物跡である。遺構の検出はI層除去後のIV層上面で行った。ISD02とカマド部分で重複し、本遺構が古い。北・東・西壁の一部が確認できたが、南壁は調査区外に位置するため全容は不明である。平面形は、調査区内の形状から推定すると、隅丸方形を呈すると考えられる。確認できる規模は、東西間2.2mと小型である。北壁を主軸とすると $N-76^{\circ}-W$ である。床面はほぼ平坦であり、柱穴などは確認できなかった。確認面から床面までの深さは10cm程度と



第64図 ISI02出土遺物



第65図 ISI03竪穴建物跡1 (掘方)



ISI03

- |              |         |  |
|--------------|---------|--|
| 1 黒褐色粘土質シルト  | 10YR3/1 | 地山土粒 (10YR6/8) (径 1 cm) 5 % 酸化鉄粒 5 % を含む |
| 2 褐灰色粘土質シルト  | 10YR4/1 | 地山土粒 (径 5 cm) 5 % を含む                    |
| 3 明黄褐色粘土質シルト | 10YR7/6 | 黒色土 (10YR2/1) 5 % を含む (貼床)               |

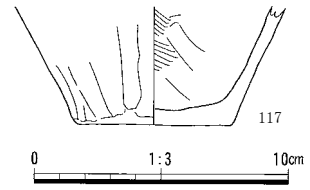
ISI03カマド

- |             |         |   |
|-------------|---------|---|
| 1 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1 | 地山ブロック (径 1 cm) 5 % を含む                                   |
| 2 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 | 焼土粒 (5YR4/6) (径 1 cm) 1 % 地山土粒 (10YR7/6) (径 5 mm) 3 % を含む |
| 3 褐色粘土質シルト  | 10YR4/6 | 黒褐色土 (10YR3/1) 5 % を含む                                    |
| 4 赤褐色シルト    | 5YR4/6  | 燃焼部焼土   |
| 5 橙色シルト     | 2.5Y7/6 | 黒褐色シルトブロック (10YR3/1) 10 % を含む (カマド袖)                      |

第66図 ISI03竪穴建物跡 2

浅い。掘方は中央部よりも壁際を深く掘り込むもので、厚さ4～10cmの貼床が施される。

付属する施設はカマドのみである。カマドは東壁に位置し、ISD02と重複するため煙道の一部は破壊されている。方位はN-82°-Wである。袖は右袖のみしか調査していないため、カマド規模は不明である。右袖は60cmである。袖は、基底部のみであるが、黒褐色シルトブロックを混合する明黄褐色シルト層で構成されている。袖間には燃焼面があり、35×28cmの範囲で焼土が広がっている。燃焼部から煙道へは若干の段差があり北側に延びる。煙道は、長さが1.2m、幅が30cmあり、先端に径30cmの煙出し孔がある。遺物は堆積土を中心に1.12kg出土している。図示可能な遺物は1点のみで、117は土師器甕の底部片である。そのほか、須恵器の小破片や磨石などが出土している。



第67図 IS103出土遺物

時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

(巴・西澤)

#### IS104 (第68～70図)

I区の中央よりやや西に位置する竪穴建物跡である。検出はI層除去後のIV層上面で行った。IP007と重複し、本遺構の方が新しい。調査区内には、北壁と東・西壁の一部のみ確認でき、その他は南側の調査区外へ続いている。したがって完掘は行っていない。平面形は、隅が緩い方形状を呈しており、規模は、東西間で2mである。確認面からの深さは最大で18cmである。建物方位はN-81°-Wである。

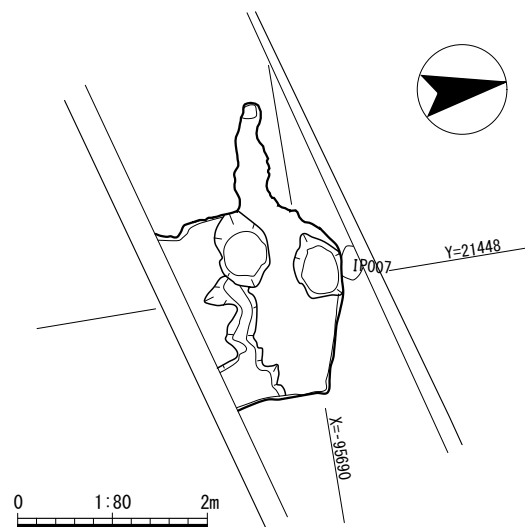
堆積土は3つの層があり、黒色や褐灰色を呈するシルト層が主体である。上部が大きく削平されているため、人為堆積か自然堆積かは不明であるが、3層が壁際に沿って斜堆積をしていることから自然堆積であると考えられる。掘方は北西隅、カマド燃焼面付近が深く掘り込まれており、また東から西へ溝状に深くなっている。床面はほぼ平坦であり、貼床の厚さは10cm程度である。

カマドは西壁に位置する。カマドは下部(袖)のみ残存する。両袖間の距離は80cm、左袖の長さは24cm、右袖36cmである。袖の先端には芯材と考えられる円礫がある。両袖間には燃焼部があり、30×16cmの範囲で焼土が広がっている。燃焼部からほぼ段差なく煙道がつづく。煙道は長さが1.1m、幅が最大で0.4mである。先端には径24×20cmの煙出し孔がある。

遺物は堆積土から5.06kg出土しているが、図示可能な遺物は少ない。118は土師器の小型甕、119は磨石である。磨石は混入の可能性もある。その他土師器の非ロクロ甕片などが出土している。

時期は建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

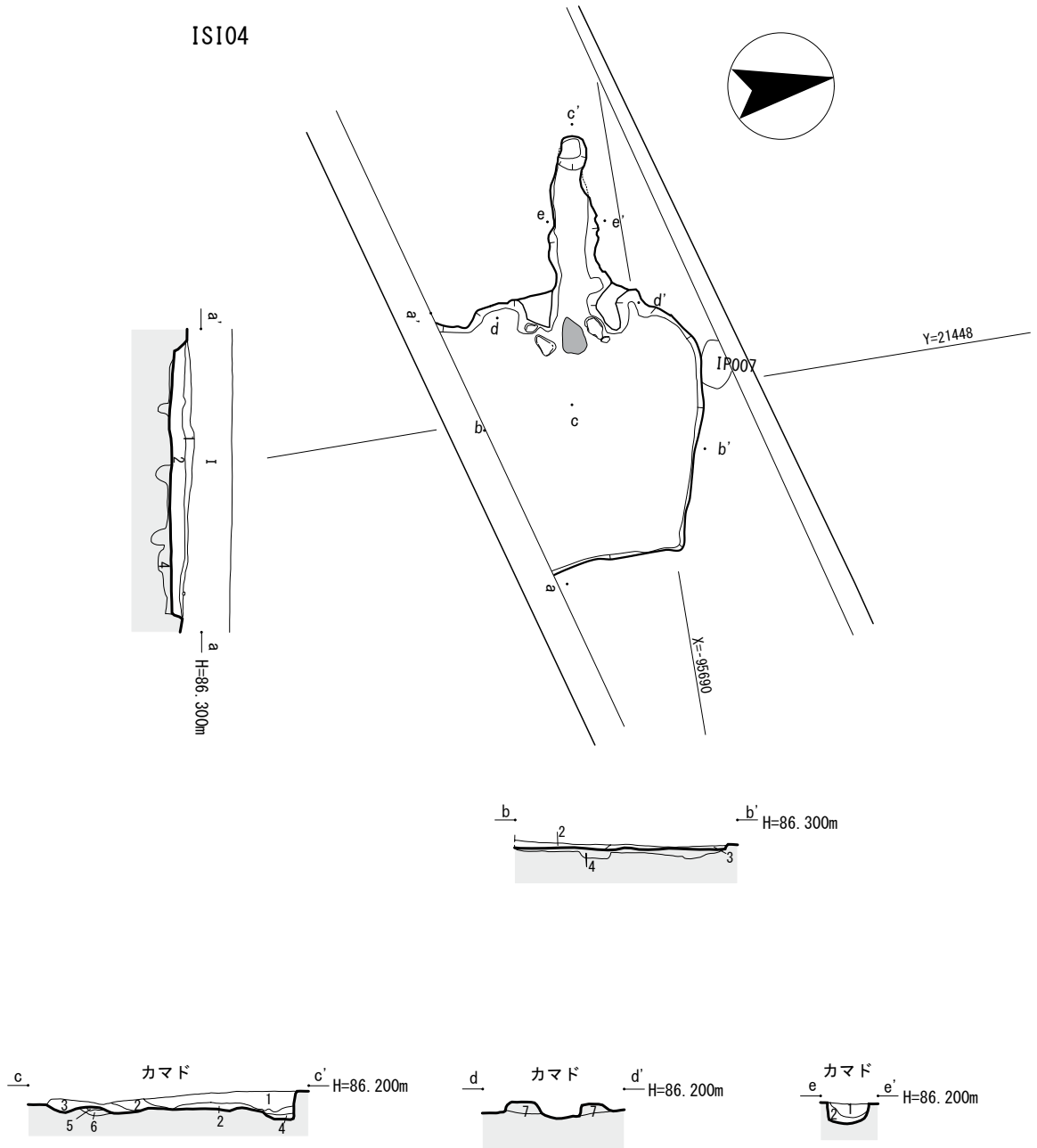
(巴・西澤)



第68図 IS104竪穴建物跡 1 (掘方)

#### IS105 (第71～73図)

I区の西側に位置する竪穴建物跡である。検出はI層除去後のIV層上面で行った。重複する遺構はないが周辺には東にIS104、西にIS106が位置する。北側と南側が調査区外へ続くことから、完掘しておらず、詳細



ISI04

- |                      |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1 褐色シルト 10YR4/1      | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1mm) 40%を含む (カクラン) |
| 2 黒色シルト 10YR2/1      | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1mm) 5%を含む         |
| 3 褐色シルト 10YR4/1      | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1cm) 5%を含む         |
| 4 明黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 | 褐色土、黒色土 5%を含む (貼床)                   |

ISI04カマド

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 1 黒色粘土シルト 10YR2/1 | 地山土粒 (10YR6/8) (径 1mm) 5%を含む                         |
| 2 黒褐色シルト 10YR3/2  | 焼土粒 (5YR4/6) (径 1cm) 1%、地山土粒 (10YR6/8) (径 1cm) 5%を含む |
| 3 灰黄褐色シルト 10YR4/2 | 地山土粒 (10YR6/8) (径 5mm) 10%を含む                        |
| 4 黒褐色シルト 10YR3/1  | 地山ブロック (10YR6/8) (径 5cm) 5%を含む                       |
| 5 赤褐色シルト 5YR4/6   | 地山の赤変  |
| 6 褐色シルト 5YR4/1    | 赤褐色焼土粒 (5YR4/6) (径 1cm~5mm) 5%を含む                    |
| 7 褐色粘土質シルト 5YR4/6 | 地山土粒 (径 1mm) 5%を含む。(カマド袖)                            |

第69図 ISI04竪穴建物跡 2



は不明である。調査区内では、南壁・西壁・北壁の一部が確認できる。平面形は隅丸方形を呈していると考えられ、確認できた3辺ともに膨らみがある。規模は、南北間が3.8mである。確認面から床面までの深さは25cmである。建物方位はN-62°-Wである。堆積土は4つに区分した。黒褐色粘土質シルトを主体とする。5層は貼床である。壁際の3~5層が斜体積をしているため自然堆積であると考えられる。床面はほぼ平坦であり、柱穴は3基確認した。また、P4付近の床面には炭化材が一部に広がっている。柱穴は四隅の内側に位置しており、支柱穴と考えられる。平面形はいずれも円形を呈し、規模は、径が25~30cm、深さが25~40cmである。カマドは調査区内からは確認できなかった。掘方は中央を除いて、壁際が深く掘り込まれるもので、厚さ約10cmの貼床が施されて、床面としている。遺物は堆積土から290g出土している。120は土師器杯の底部片で糸切り痕が残るものである。そのほか、土師器の非ロクロ甕片などが出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

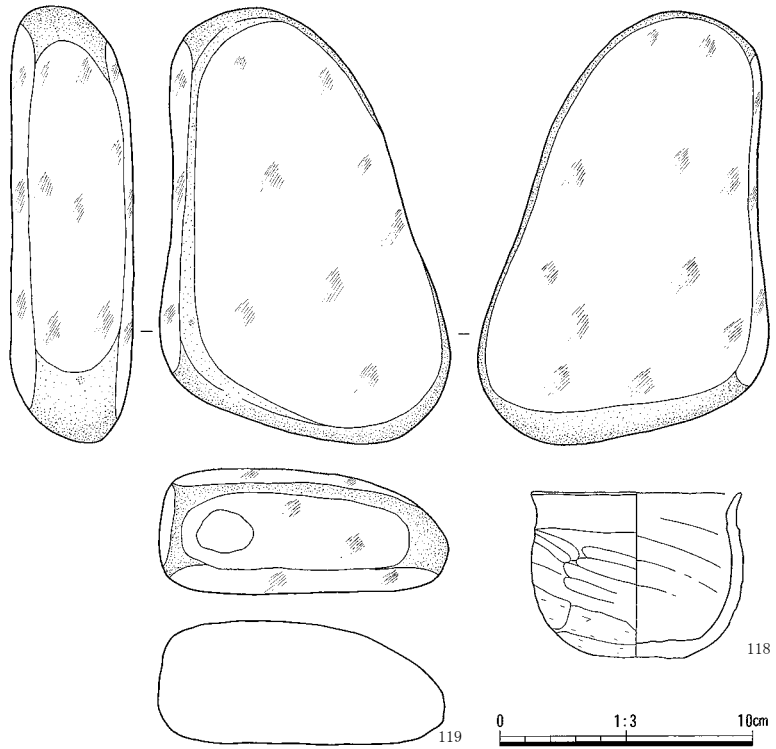
(巴・西澤)

#### ISI06 (第74・75図)

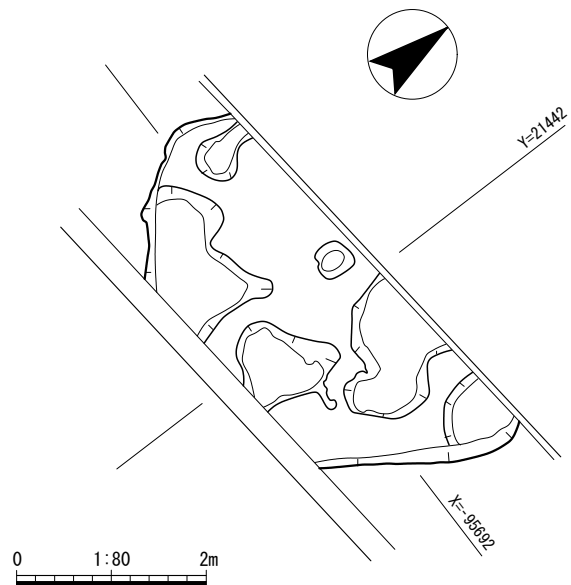
I区の西端に位置する竪穴建物跡に付属するカマドの煙道である。遺構の検出はI層除去後のIV層で行った。この構造のカマドは竪穴建物に付随するため、南側には竪穴建物本体が存在するであろう。

したがって、煙道先端の一部のみを調査したに過ぎず大部分は調査していない。

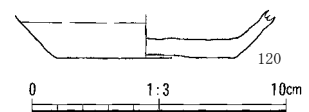
調査した煙道は、長さが現状で1.3m、



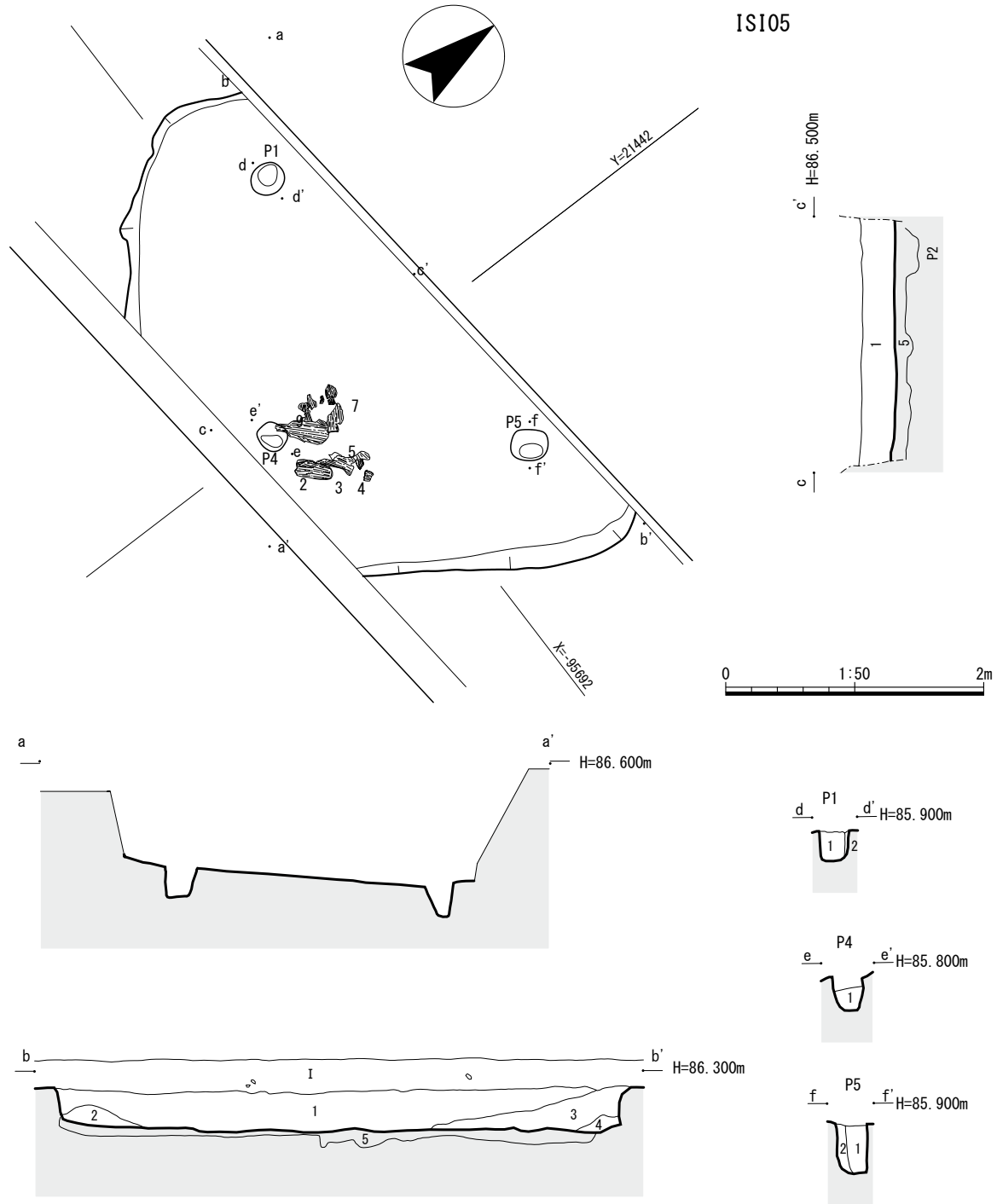
第70図 ISI04出土遺物



第71図 ISI05竪穴建物跡1 (掘方)



第73図 ISI05出土遺物



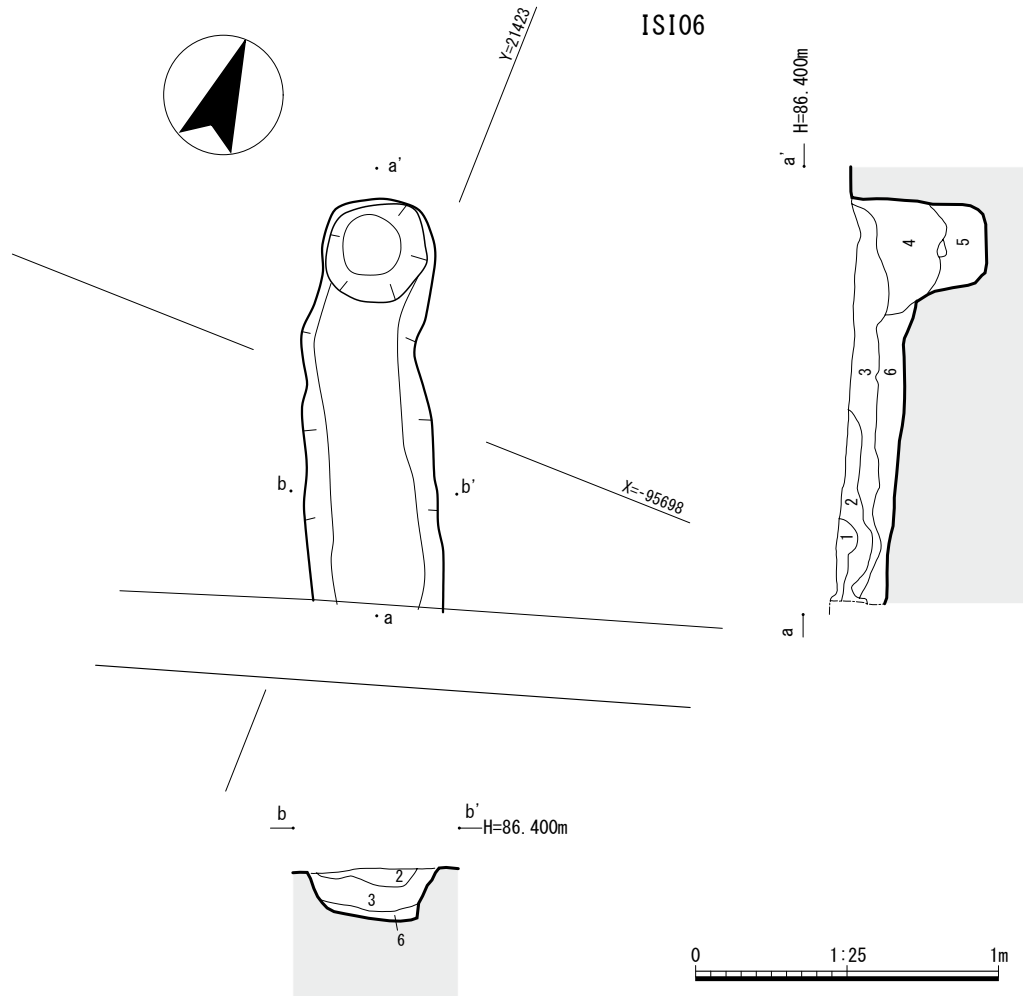
ISI05

- 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 酸化鉄粒 (径5~10mm) 5% 西側に多く含む
- 2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 地山土粒 (径1mm) 10%、地山ブロック (径3cm) 5%を含む
- 3 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 地山土粒 (径1mm) 20%を含む
- 4 黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 3層土3%を含む
- 5 黄褐色粘土質シルト 10YR5/8 黒褐色土 (10YR3/2) 3%を含む (貼床)

- P1
  - 1 黒褐色シルト 10YR3/1 地山土粒 1%を含む
  - 2 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 地山土粒 5%を含む
- P4
  - 1 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/2 地山土粒 5%を含む
- P5
  - 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 地山土粒 (径1cm) 5%を含む
  - 2 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 地山土粒 5%を含む

No.	樹種
2	クリ
3	クリ
4	クリ
5	ナラ
7	クリ
9	サワグルミ

第72図 ISI05竪穴建物跡 2



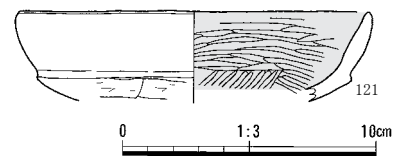
- ISI06カマド煙道
- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 | 2 層の天井土崩落後に堆積したもの                                  |
| 2 褐色粘土質シルト 10YR4/6  | 黒褐色土 (10YR3/1) 3%を含む 天井崩落土                         |
| 3 黒色粘土シルト 10YR2/1   | 地山土粒 (径1mm) 3%を含む                                  |
| 4 黒褐色シルト 10YR3/1    | 地山土粒 (径1mm) 10%を含む                                 |
| 5 明黄褐色シルト 10YR7/6   | 黒褐色土 (10YR3/1) 15%を含む                              |
| 6 黒褐色シルト 10YR2/2    | 焼土粒 (5YR4/6) (径1mm) 5% 地山土粒 1 (10YR7/6) (径1mm) 10% |

第74図 ISI06竪穴建物跡

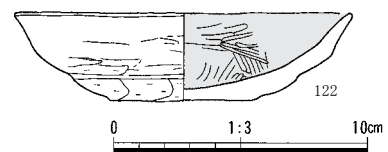
幅が0.45mである。煙出し孔の規模は、径が60cm、深さが45cmである。堆積土は6つの層があり、黒色から黒褐色を呈するシルトが主体である。建物方位は、カマド煙道の残存部残存部からN-22°-Wである。

遺物はわずか53gのみ出土している。121は土師器の非ロクロ調整の杯で、底部を欠損している。内湾する口縁部を有し、内面には黒色処理が施される。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

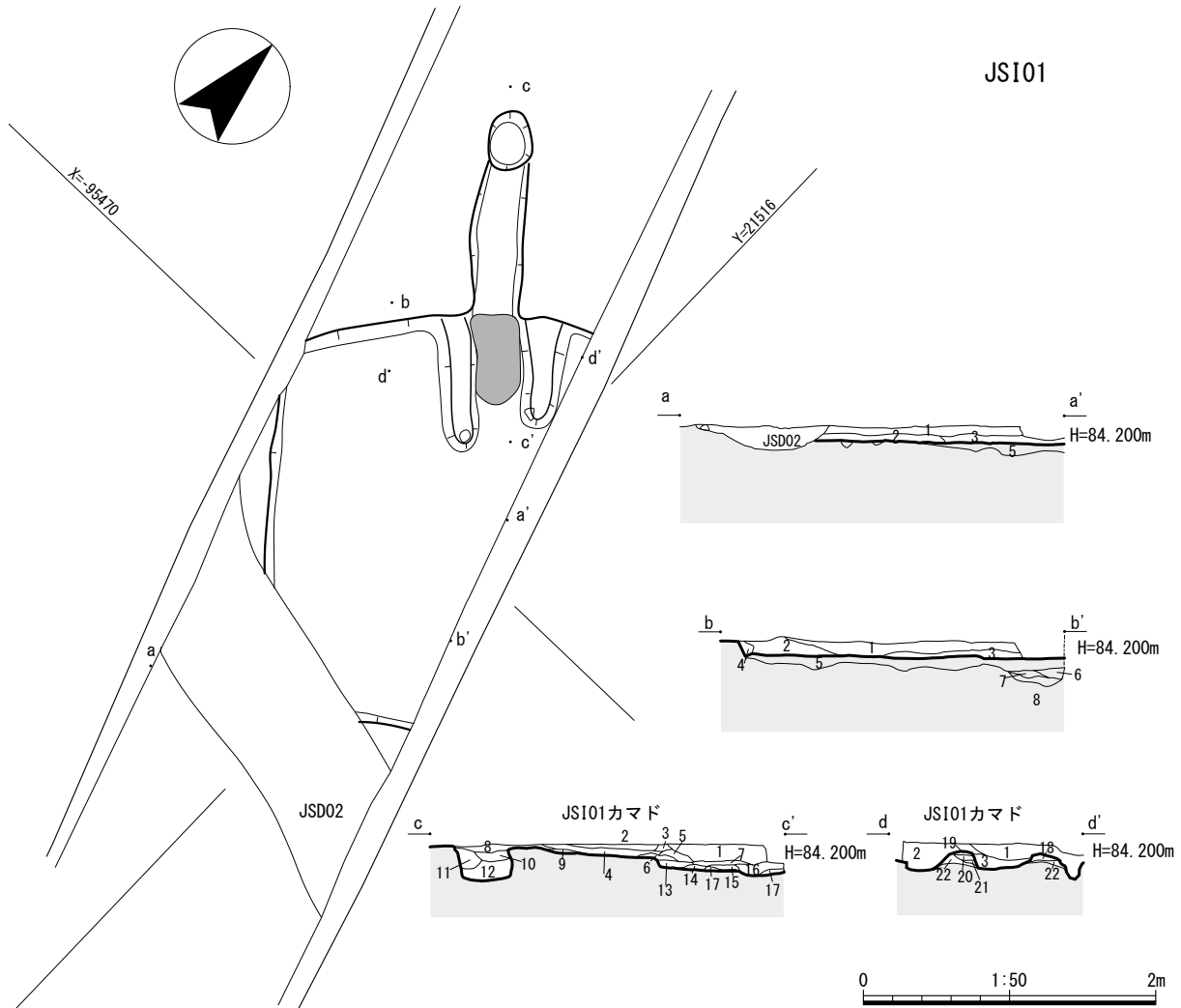
(巴)



第75図 ISI06出土遺物



第76図 ISI07出土遺物



JSI01

- |   |        |         |  |
|---|--------|---------|--|
| 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | にぶい黄橙色土粒 (10YR6/3) (径 1mm) 3~5%、炭化物粒 (径 5~7mm) 1%を含む |
| 2 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | にぶい黄橙色土粒 (10YR6/3) (径 3~5mm) 15~20%混合                |
| 3 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | にぶい黄橙色土粒 (10YR6/3) (径 3~5mm) 1~2%を含む                 |
| 4 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | にぶい黄橙色土粒 (10YR6/3) 30%混合                             |
| 5 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 灰黄褐色土 (10YR4/2) 15~20%混入。(貼床土)                       |
| 6 | 灰黄褐色粘土 | 10YR5/2 | 褐灰色土 (10YR4/1) 20%を含む (貼床) 旧遺構か                      |
| 7 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 貼床 旧遺構か  |
| 8 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 褐灰色土 (10YR4/1) 1~2%含む (貼床) 旧遺構か                      |

JSI01カマド

- |    |              |          |   |
|----|--------------|----------|---|
| 1  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | 灰黄褐色土 (10YR6/2) (径 3~5mm) 2~3%、炭化物粒 (径 3~5mm) 1%を含む |
| 2  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 5%を含む                             |
| 3  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 5~10%を含む                          |
| 4  | 褐灰色シルト       | 10YR4/1  |   |
| 5  | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | 灰黄褐色土 (10YR6/2)、酸化鉄15~20%混入                         |
| 6  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 10%を含む                            |
| 7  | 黒褐色粘土質シルト    | 10YR3/1  | 明褐色焼土 (7.5YR5/6) 15~20%を含む                          |
| 8  | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 3%を含む                             |
| 9  | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 10%を含む                            |
| 10 | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 10~15%含む                          |
| 11 | 褐灰色シルト       | 10YR4/1  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 3%含む                              |
| 12 | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | にぶい黄橙色土 (10YR7/2) 2~3%含む                            |
| 13 | 黒褐色シルト       | 10YR2/2  | 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1~2%含む                              |
| 14 | 褐灰色シルト       | 10YR4/1  | にぶい黄橙色土 (10YR6/3) 10~15%を含む                         |
| 15 | 明赤褐色シルト      | 5YR5/6   |   |
| 16 | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | 灰黄褐色土 (10YR6/2) 7~10%を含む                            |
| 17 | にぶい黄褐色粘土質シルト | 10YR6/3  |   |
| 18 | 黒色シルト        | 10YR2/1  | にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 3%を含む (右袖 覆土)                     |
| 19 | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 10%を含む (左袖 覆土)                    |
| 20 | 黒褐色シルト       | 10YR3/1  | にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 30%とにぶい黄橙色土 (10YR6/3) の混合         |
| 21 | 暗褐色シルト       | 7.5YR3/3 | 暗褐色焼土粒 (7.5YR3/4) (径 3~5mm) 3~5%を含む                 |
| 22 | にぶい黄褐色粘土質シルト | 10YR6/3  | 地山IV層   |

第77図 JSI01竪穴建物跡 1

## ISI07 (第63・76図)

I区のはほぼ中央に位置する竪穴建物跡である。検出はI層除去後のIV層上面で行った。ISI02と重複し、ISI02より古いと想定した。表土である耕作土やISI02によって大部分が削平されており、貼床の範囲を確認したに過ぎない。また、北側の一部は攪乱によって破壊され、東側が調査区外に位置するため、全容は不明である。平面形は、確認できた貼床の形状から推定すると方形状を呈すると考えられる。規模は、南辺3m以上であるが、詳細は不明である。南壁を主軸とするとN-79°-Wとなるが、本来の形状を表していないであろう。床面はほぼ平坦であるが、本来の形状かは不明である。付属する施設は、調査区内では確認できない。

遺物は堆積土から少量(217g)が出土している。122は土師器杯で、平底の底部をもつ。内面に黒色処理が施されている。そのほか土師器の非ロクロ甕片などが出土している。

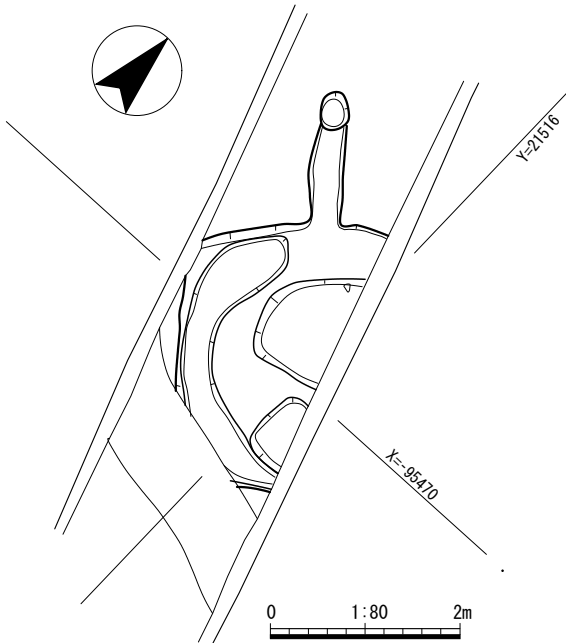
時期は、建物方位も不確かなため、不明とせざるを得ないが、漆町I～III期のいずれかに含まれるであろう。(巴・西澤)

## JSI01 (第77～79図)

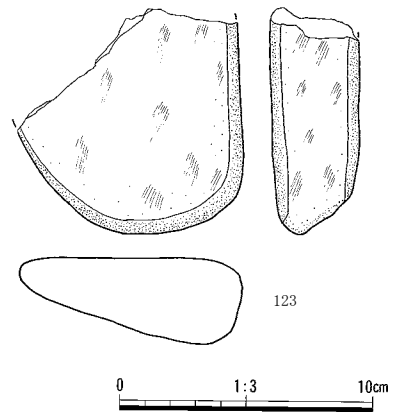
J区中央部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡の西半分付近のみを調査したに過ぎず、残りは調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI層除去後のIV層で行っている。JSD02と建物跡南西部で重複しており、切り合い関係からこれよりも古い遺構となる。平面形は調査区内の形状から判断すると、およそ方形を呈し、北辺にカマドが設置される。規模は、南北方向に2.8m、東西方向が不明であるが、カマドが北辺の中央にあると仮定すればおよそ3mとなり、約3m四方の規模の小型の建物跡と推定される。床面までの深さは確認面から15cmと浅く、大部分が削平されている。床面は全体に、黒褐色と灰黄褐色シルトの混合土で構成され、ほぼ平坦に構築されている。建物の掘方は外周に沿ってと中央部がより深く掘られており、その分貼床も厚く充填されている。また、貼床除去後には建物南端付近において、土坑状のくぼみを検出した。長径80cmの規模で、灰黄色粘土や黒褐色シルトが堆積していた。掘方の一部と捉えたが、旧期の別遺構となる可能性もある。建物方位は、カマド主軸を基準とすれば、N-41°-Wであり、大きく西に傾いている。堆積土は削平を受けているものの3つの層が確認できる。いずれも黒褐色シルトを主体とするものでIV層を起源とする黄橙色シルトが粒状に含まれている。

建物跡に付属する施設には、カマドが北辺に1基設置されている。カマド両袖、燃焼部、煙道、煙出し孔で構成される。袖(カマド本体の下半部)は左右とも残存し、両袖間の距離は最大で90cmであり、北辺からの長さが、左袖で95cm、右袖で78cmである。袖の高さは6～10cmで、黒褐色と暗褐色、にぶい黄褐色シルトで構成される。また左右袖の先端にはそれぞれ直径10cm程度の円礫が芯材として設置されている。両袖間には燃焼部が、60×30cmの範囲で広がっている。煙道は北辺からの長さが1.4mであり、先端に直径40cmの煙出し孔がある。両袖間から煙出し孔までの底面の状況は、カマド本体と煙道の境界で約5cm高くなり、その後煙出し孔までゆるやかに上昇する。煙出し孔は、径40×30cm、確認面からの深さ25cmであり、煙道底面より約20cm低くなっている。カマドや煙道、煙出し孔の堆積土は黒褐色を主体とするシルト層であり、自然堆積の状況が窺える。遺物は、わずか371g出土しているのみである。磨石(123)のみ図示した。

時期は、建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。



第78図 JSI01竪穴建物跡 2 (掘方)

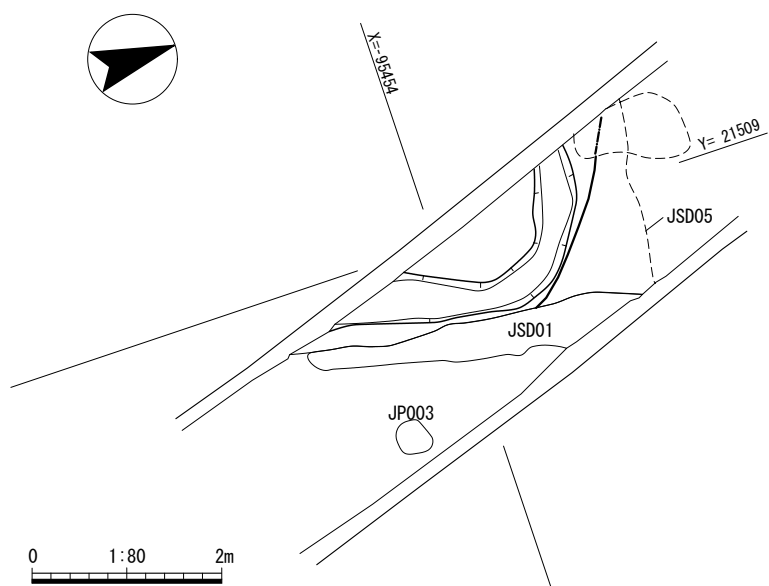


第79図 JSI01出土遺物

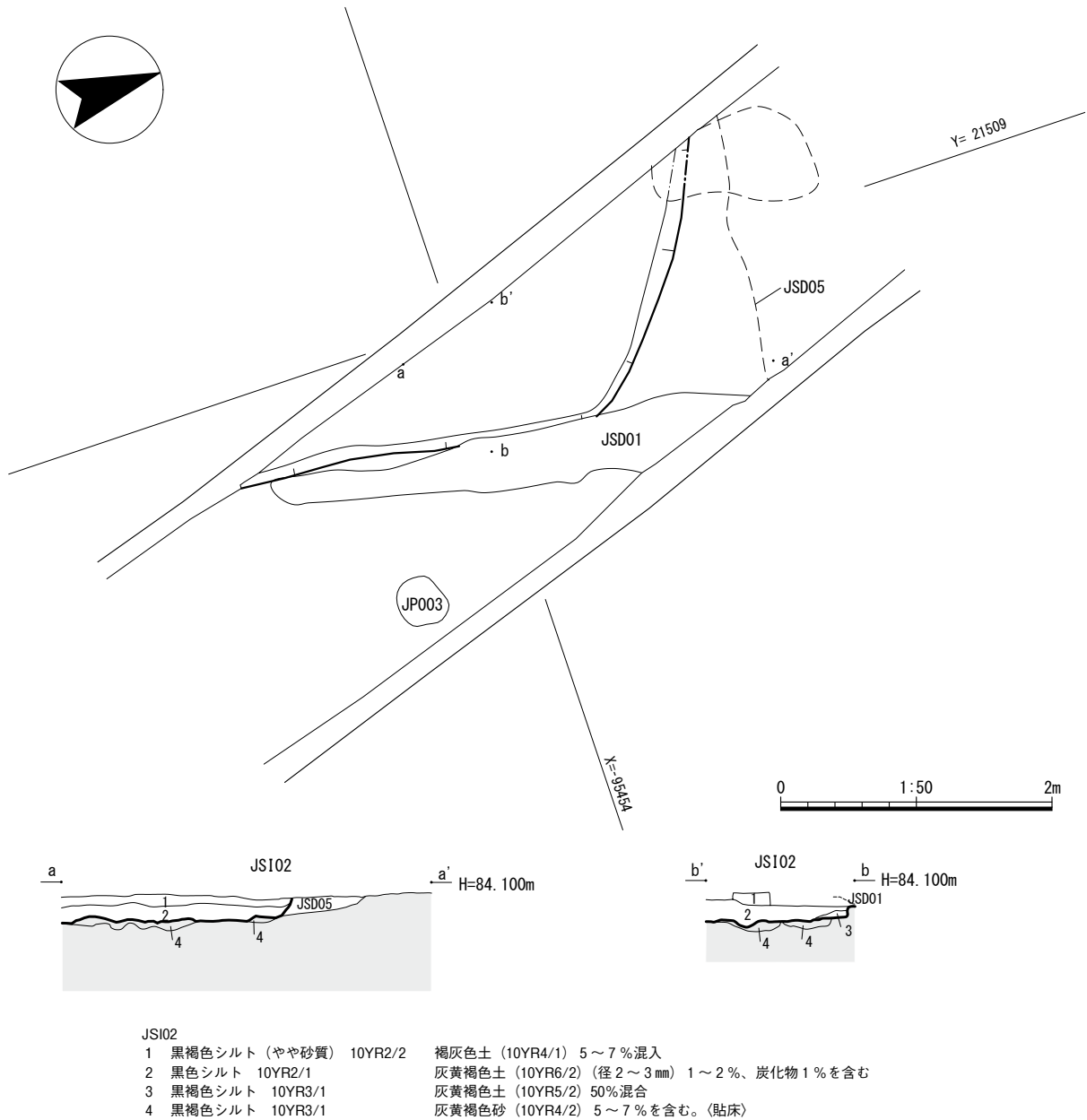
JSI02 (第80～82図)

J区北部に位置する竪穴建物跡である。調査内では、建物跡の東半分付近のみ（建物北辺と東辺の一部）を調査したに過ぎず、残りは調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI層除去後のIV層で行っている。JSD01とJSD05と建物跡東部で重複しており、切り合い関係からこれよりも古い遺構となる。また、北側の一部が攪乱を受けている。

平面形は調査区内の形状から判断すると、いびつな方形を呈すると予想される。調査区内にはカマドは確認されない。規模は、調査区内の状態からは計測できず詳細は不明である。残存値では、北辺が2.2m、東辺が1.5m程である。床面までの深さは確認面から20cmである。床面は全体に、黒褐色シルトと灰黄褐色砂質シルトとの混合土で構成され、ほぼ平坦に構築されている。建物の掘方は外周に沿ってより深く掘られており、その分貼床も厚く充填されている。建物方位は、北辺を基準とすれば、 $N-75^{\circ}-W$ であり、やや西に傾いている。堆積土は2つの層が確認できる。1層が黒褐色シルトでやや砂質であり、2層が黒色を呈するシルト層である。水平堆積に近いため短期間で埋没した可能性がある。あるいは人為堆積かもし



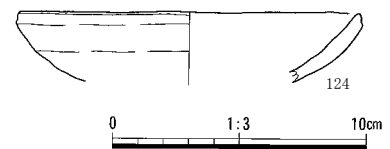
第80図 JSI02竪穴建物跡 1 (掘方)



第81図 JSI02竪穴建物跡 2

れない。建物跡に付属する施設は調査区内においては確認できない。

遺物は75g出土している。かわらけ片 (124)、土師器細片、須恵器甕などの細片が出土している。かわらけは、付近の遺構からの混入の可能性がある。

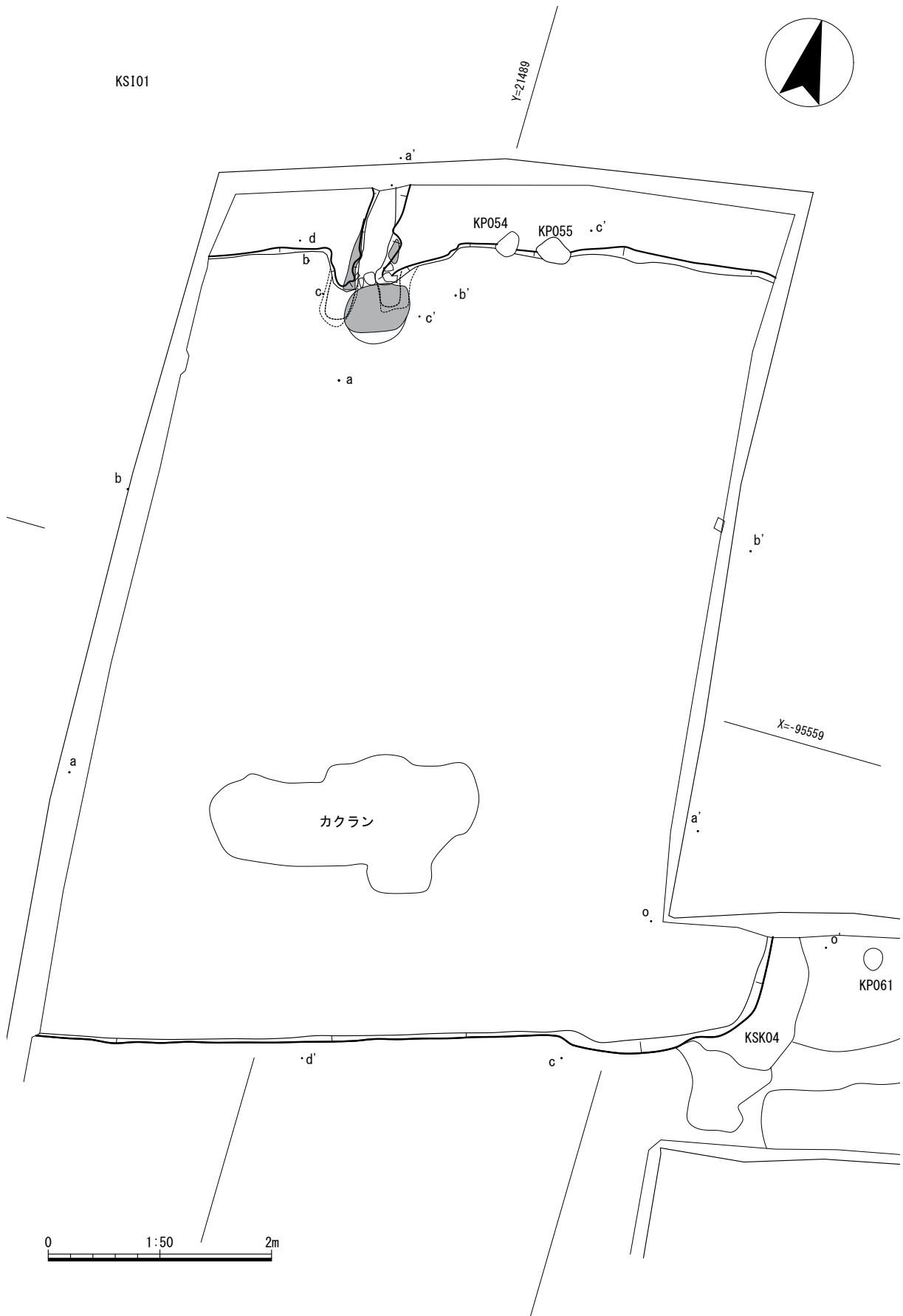


第82図 JSI02出土遺物

時期は、遺物からは難しいが、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

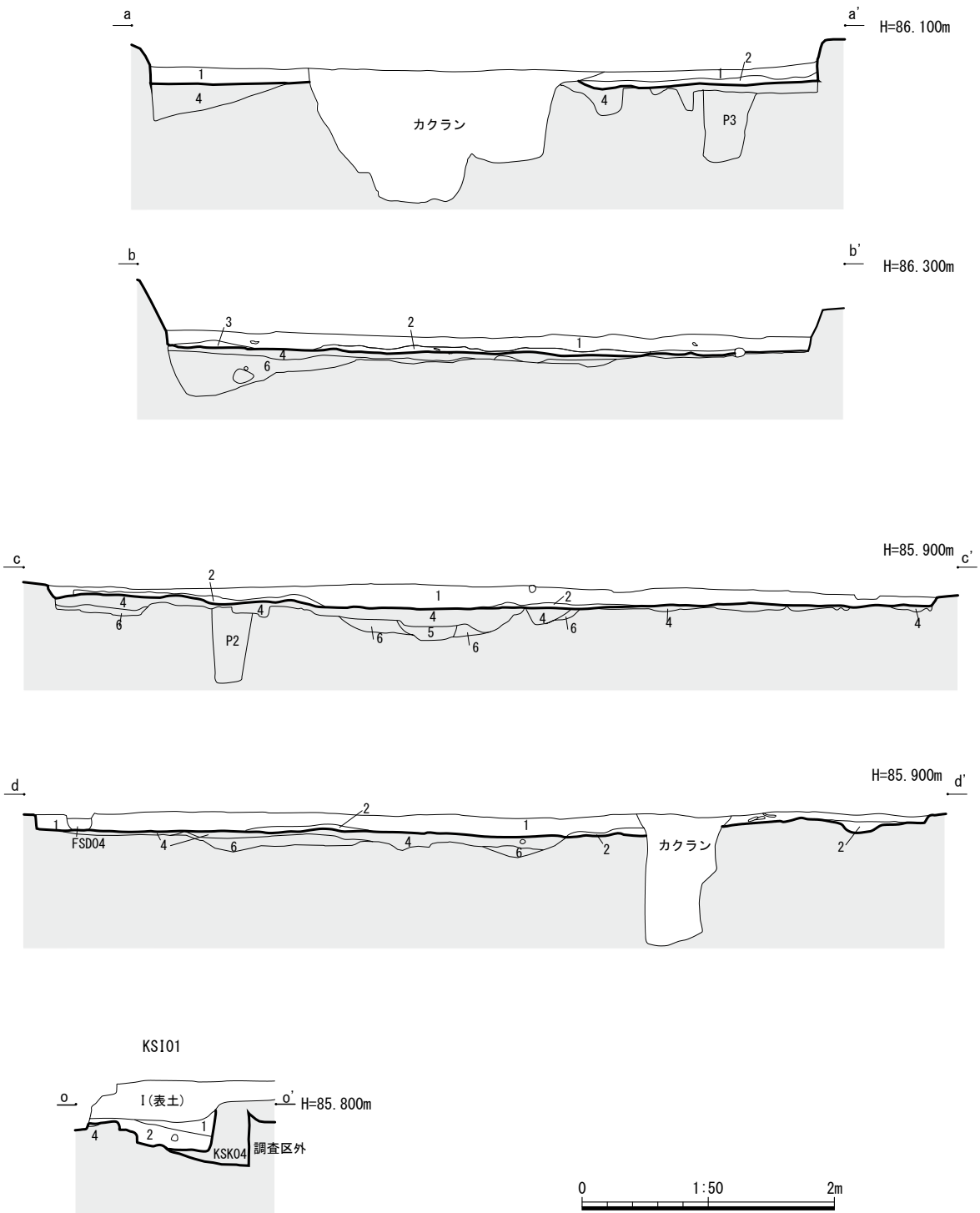
#### KSI01 (第83~89図)

K区北側に位置する竪穴建物跡である。遺構はI層除去後のIV層上面で確認を行っている。F区か



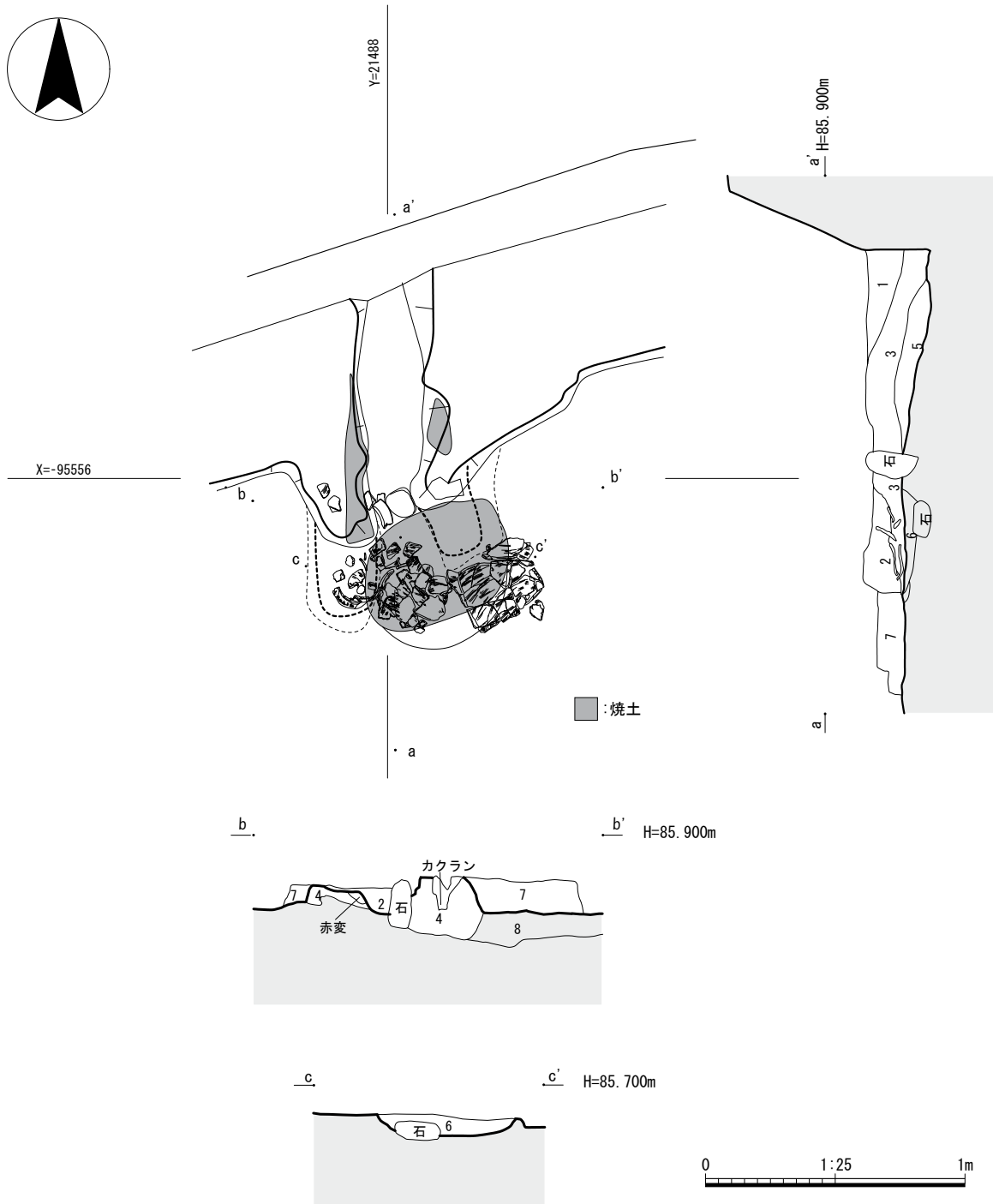
第83図 KSI01竪穴建物跡 1





- KSI01
- |                      |  |
|----------------------|--|
| 1 黒褐色シルト 10YR2/2     | 地山土粒 (～径10mm) 10%、地山ブロック (径20mm) 1%を含む   |
| 2 暗褐色シルト 10YR3/3     | 地山ブロック (径10mm) 3%、炭化物粒 (径10mm) 1%を含む     |
| 3 黒褐色シルト 10YR3/1     | 地山ブロック (径15～20mm) 斑状に50%、礫 (こぶし大) 10%を含む |
| 4 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山土粒 (径10mm) 20%を含む (貼床①)                |
| 5 明黄褐色粘土質シルト 10YR6/6 | 4層黒褐色土 5%を含む (貼床②)                       |
| 6 黒褐色シルト 10YR3/1     | 地山土粒 (径1～5mm) 10%を含む                     |

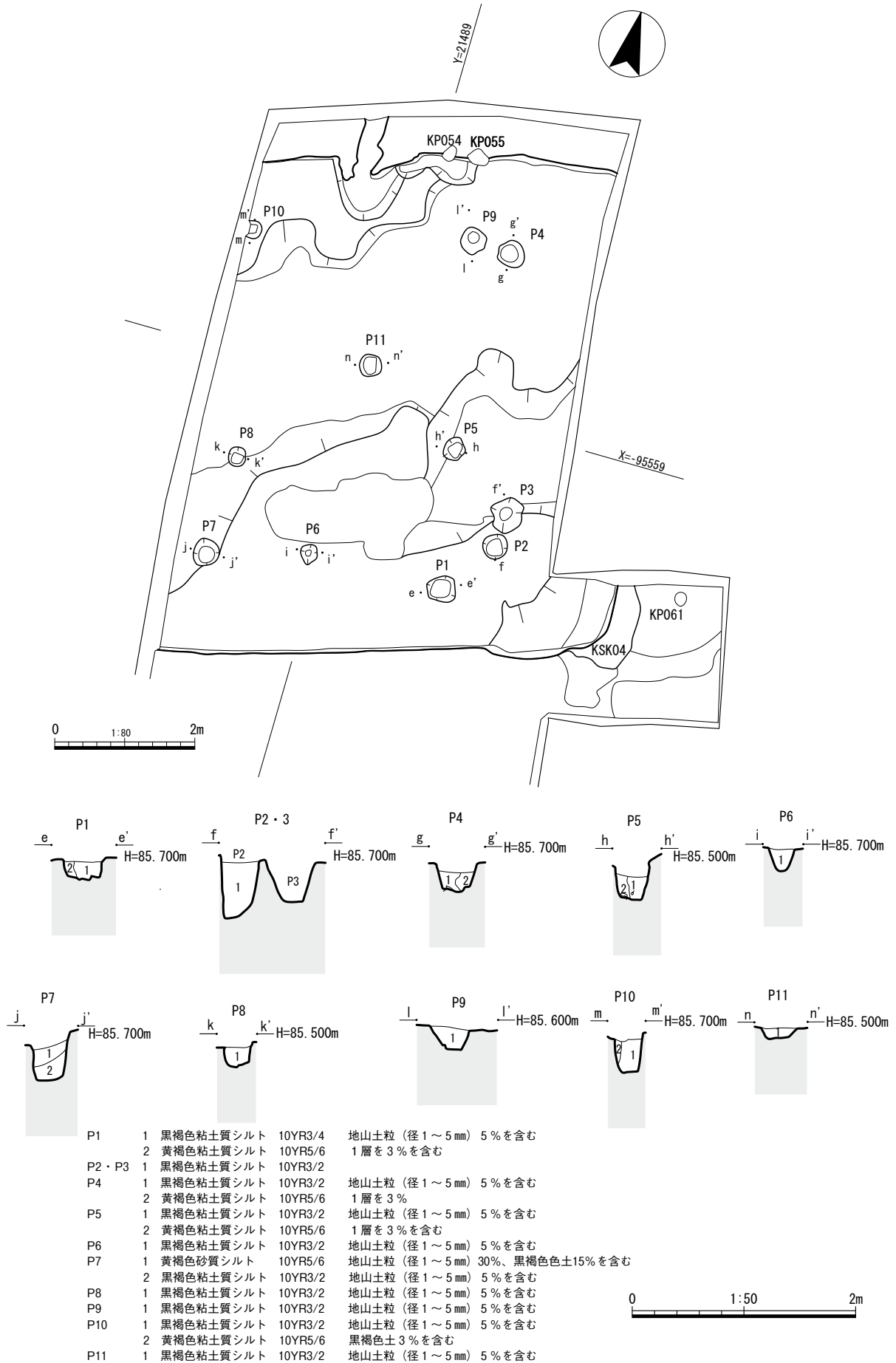
第84図 KSI01 竪穴建物跡 2



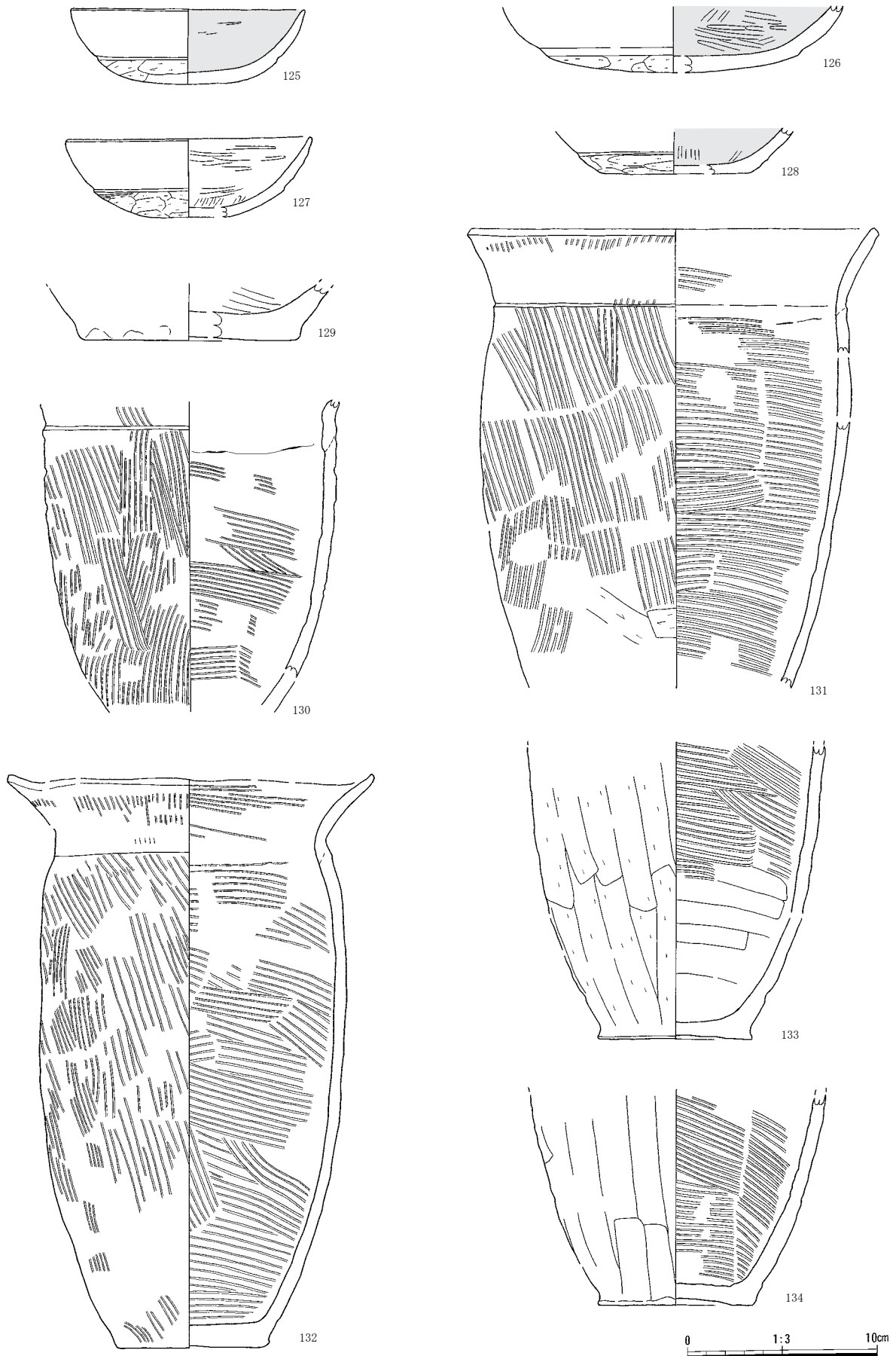
KSI01カマド

- |   |           |         |   |
|---|-----------|---------|---|
| 1 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2 | 地山ブロック (径5~10cm) 10%、焼土粒 (径1mm) 3%を含む         |
| 2 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/2 | 黒色土3%、土器 (土師器) を含む                            |
| 3 | 暗褐色粘土質シルト | 10YR3/4 | 黒褐色土10%、地山ブロック (径5cm) 1%を含む                   |
| 4 | 褐色粘土質シルト  | 10YR4/6 | 焼土粒 (径3mm) 5%、袖カマドの構築土、一部被熱による赤変あり            |
| 5 | 暗褐色粘土質シルト | 10YR3/3 | 焼土粒 (径1mm) 1%を含む                              |
| 6 | 赤褐色粘土質シルト | 5YR4/8  | 地山が被熱赤変。                                      |
| 7 | 黒褐色シルト    | 10YR2/2 | 地山土粒 (~径10mm) 10%、地山ブロック (径20mm) 1%を含む (住居埋土) |
| 8 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2 | 地山土粒 (径10mm) 20%を含む (貼床)                      |

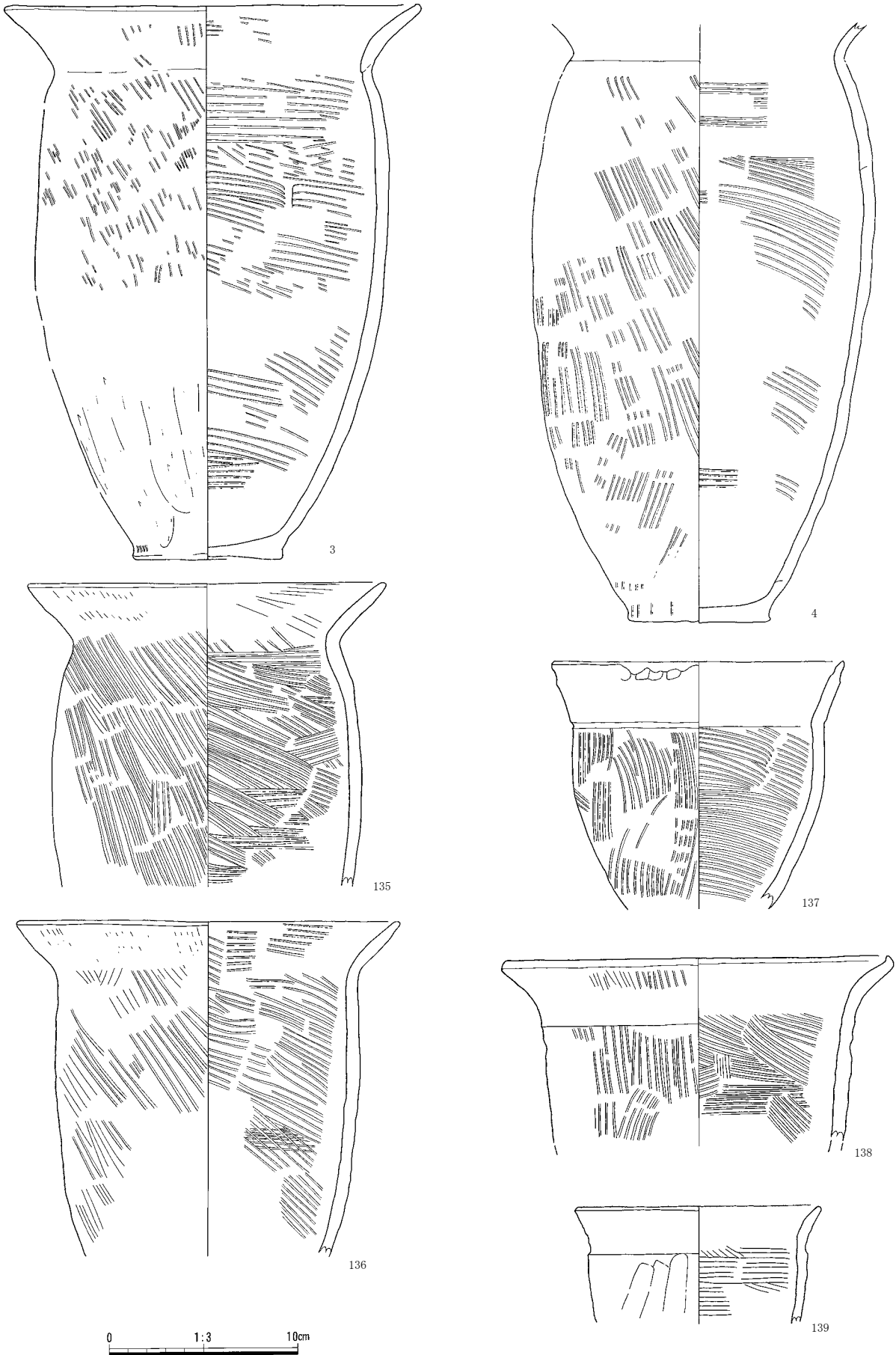
第85図 KSI01竪穴建物跡3 (カマド)



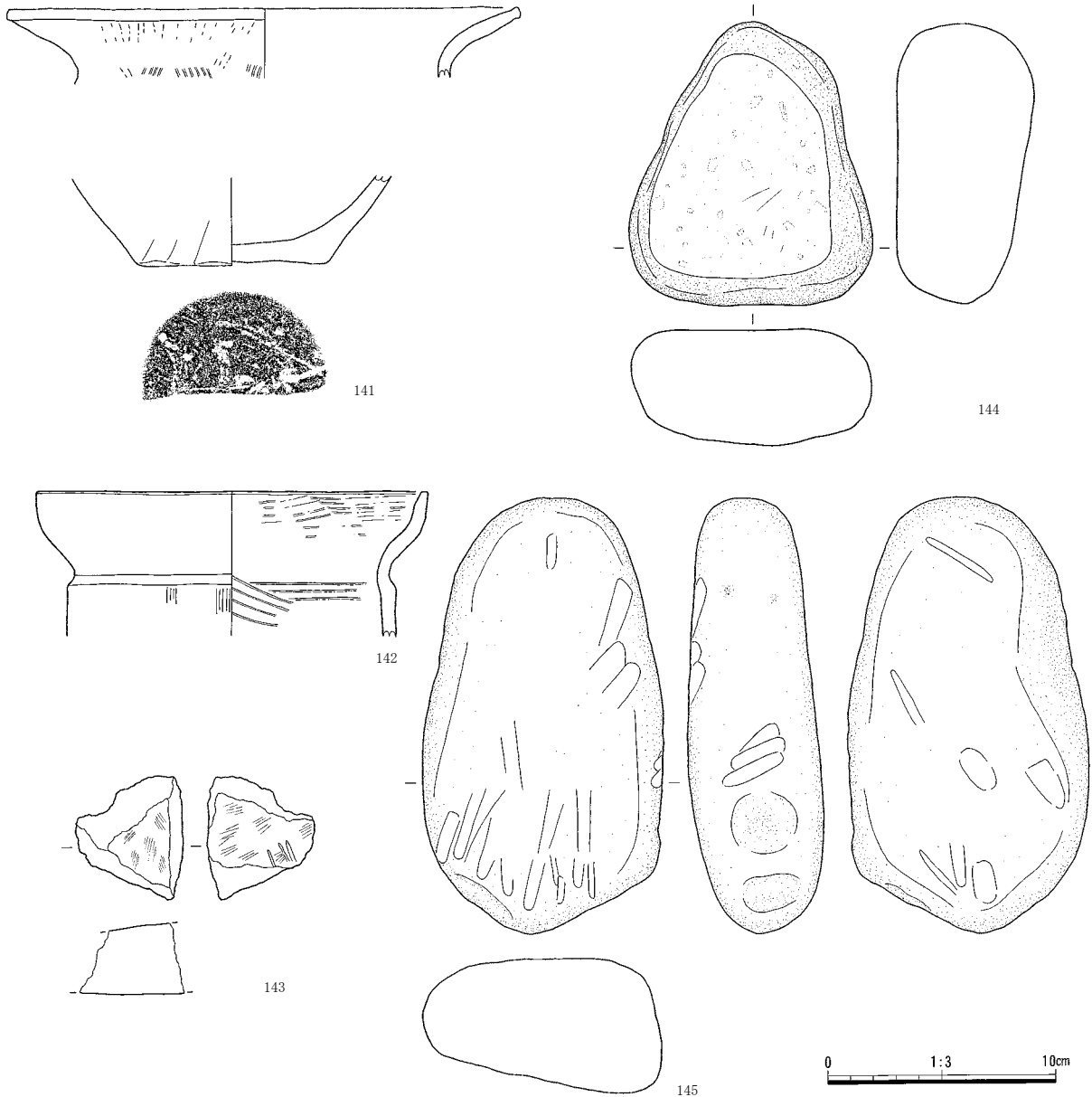
第86図 KSI01竪穴建物跡4 (掘方)



第87図 KSI01出土遺物 1



第88図 KSI01出土遺物 2

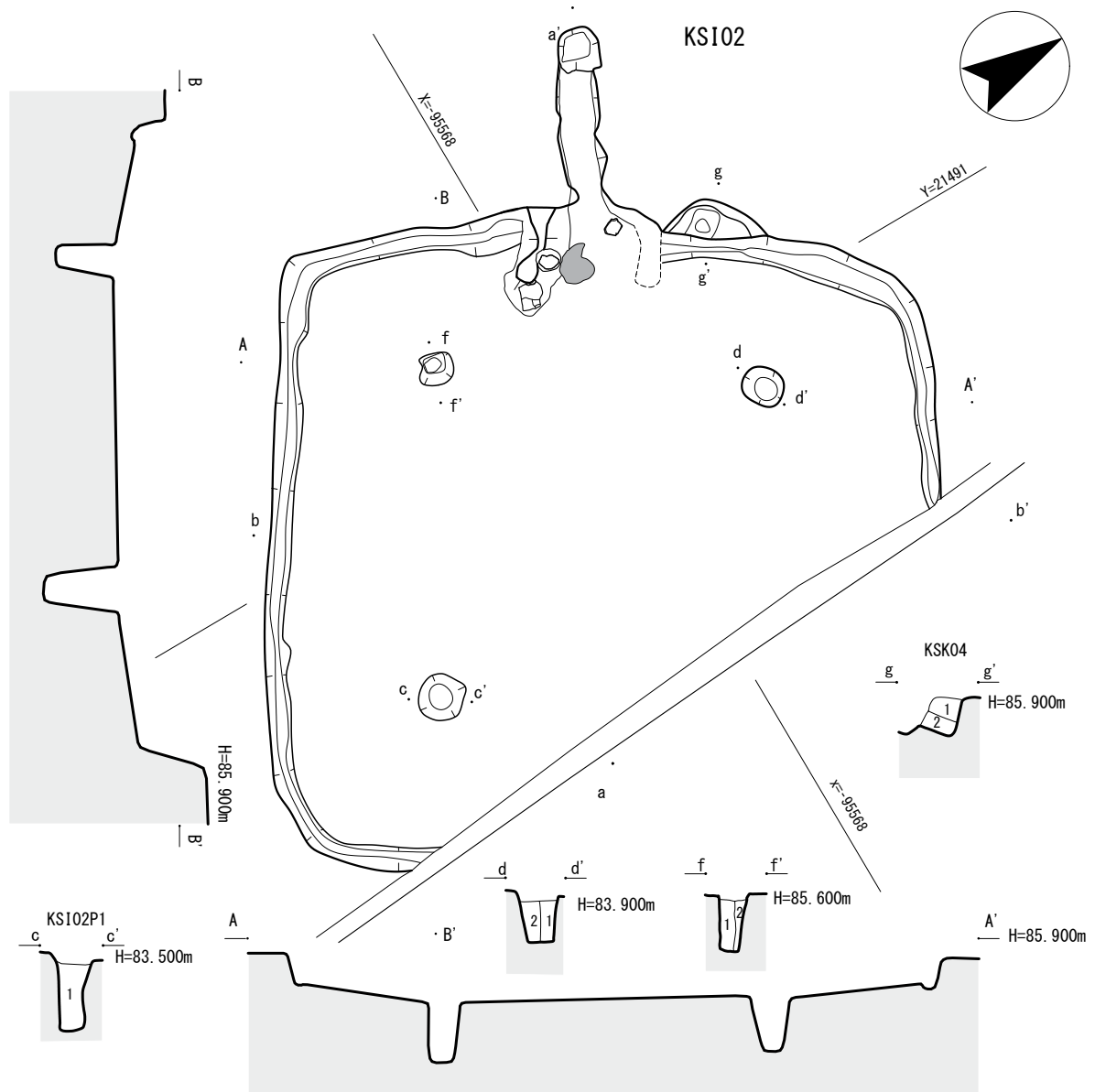


第89図 KSI01出土遺物 3

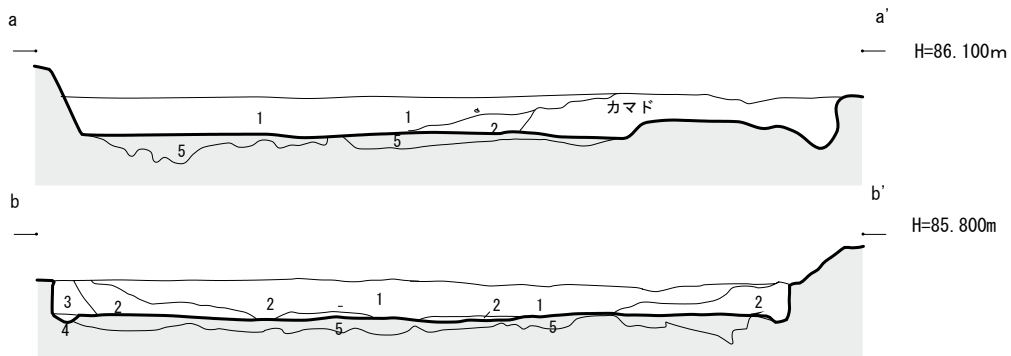
ら東西に延びるFSD04、KP001・KP002・KP055・KP056と重複しこれらの遺構より古く、南東隅でKSK04と重複しKSK04より新しい。また遺構中央部には近現代のものと推定される攪乱によって一部破壊されている。西辺と東辺の大部分が調査区外のため全容は不明である。

平面形は、東西が不明であるが、ほぼ方形状を呈すると推定される。規模は、南北間で7.1m、東西は不明である。建物方位は北辺を基準とするとN-16°-Wである。床面はほぼ平坦であり、確認面からの深さは7～10cmで、非常に浅い。

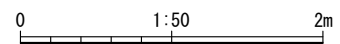
堆積土は3つに区分できる。1～3層は黒～黒褐色土を基調とし、地山ブロックを含んでいる。貼床は3つの層がある。掘方北東から南西にかけての中央部がより深く掘削されており、そこに黒褐色を基調とした4層、地山土を基調とした5層、黒褐色土を基調とした6層を貼床としている。また遺構内中央付近で床面よりやや上位で土器片が集中して確認できた。



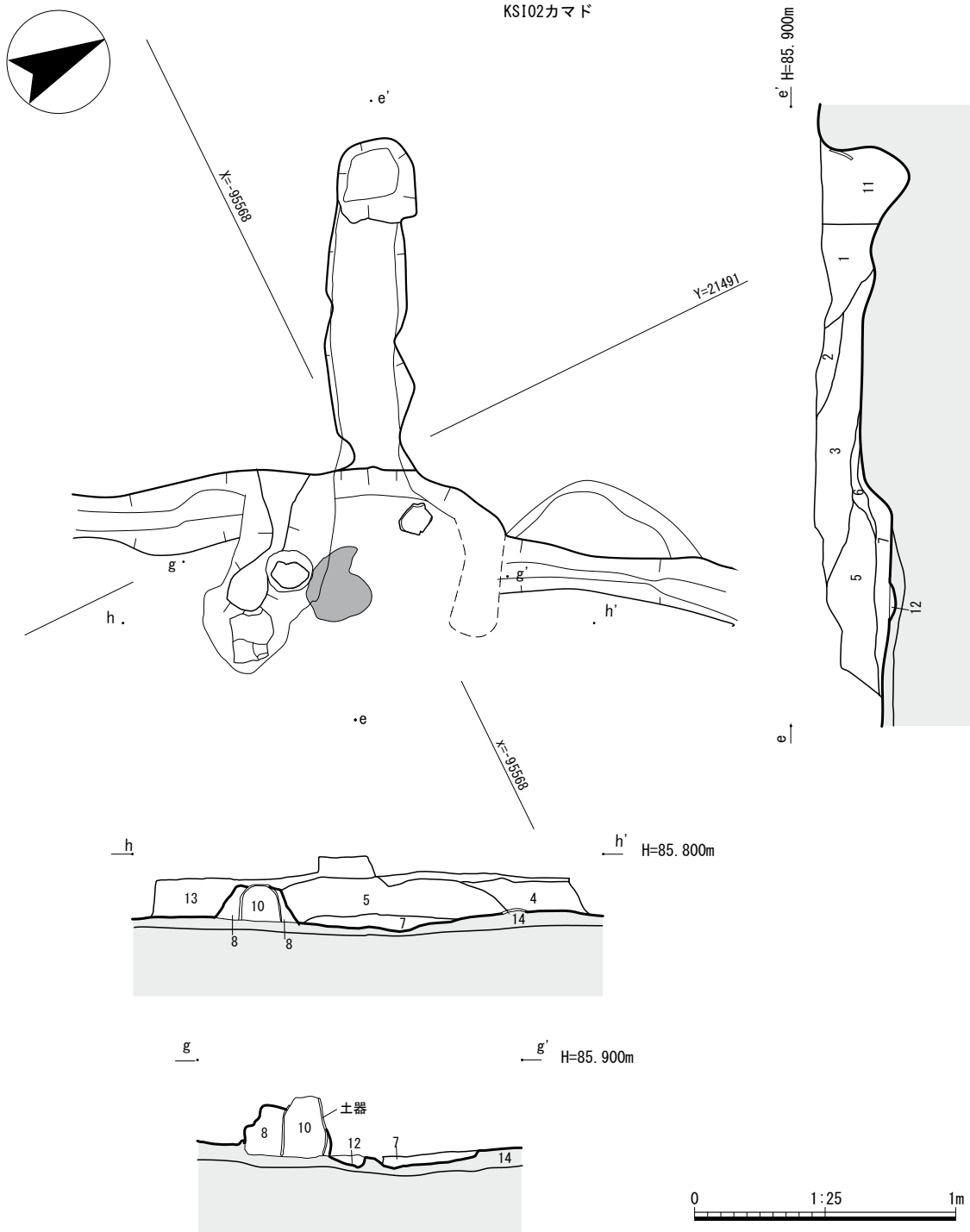
- |         |   |             |         |                     |       |   |        |         |                       |
|---------|---|-------------|---------|---------------------|-------|---|--------|---------|-----------------------|
| KSI02P1 | 1 | 黒褐色粘質シルト    | 10YR3/2 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む | KSK04 | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 地山土粒径 (1~5mm) 1%弱を含む  |
| KSI02P2 | 1 | 黒褐色粘質シルト    | 10YR3/2 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む |       | 2 | 黄褐色シルト | 10YR5/6 | 地山土粒径 (1~10mm) 3%弱を含む |
|         | 2 | 黄褐色粘質シルト    | 10YR5/6 | 1層土5%を含む            |       |   |        |         |                       |
| KSI02P3 | 1 | 黒褐色粘質シルト    | 10YR3/2 | 黒色土 (10YR2/1) 5%を含む |       |   |        |         |                       |
|         | 2 | にぶい黄褐色粘質シルト | 10YR4/3 | 黒褐色土3%を含む           |       |   |        |         |                       |



- |       |   |              |         |   |
|-------|---|--------------|---------|---|
| KSI02 | 1 | 黒褐色シルト       | 10YR2/2 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む                     |
|       | 2 | 暗褐色シルト       | 10YR3/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 20%、炭化物粒 (径1~10mm) 3%を含む |
|       | 3 | 黒褐色シルト       | 10YR3/2 | 地山土粒 (径1~10mm) 5%を含む                    |
|       | 4 | 黒褐色シルト       | 10YR3/2 | 地山土粒 (径1~10mm) 10%を含む (壁溝埋土)            |
|       | 5 | にぶい黄褐色粘土質シルト | 10YR4/3 | 地山土40%、砂質基盤地山層20%を含む (貼床)               |



第90図 KSI02竪穴建物跡1

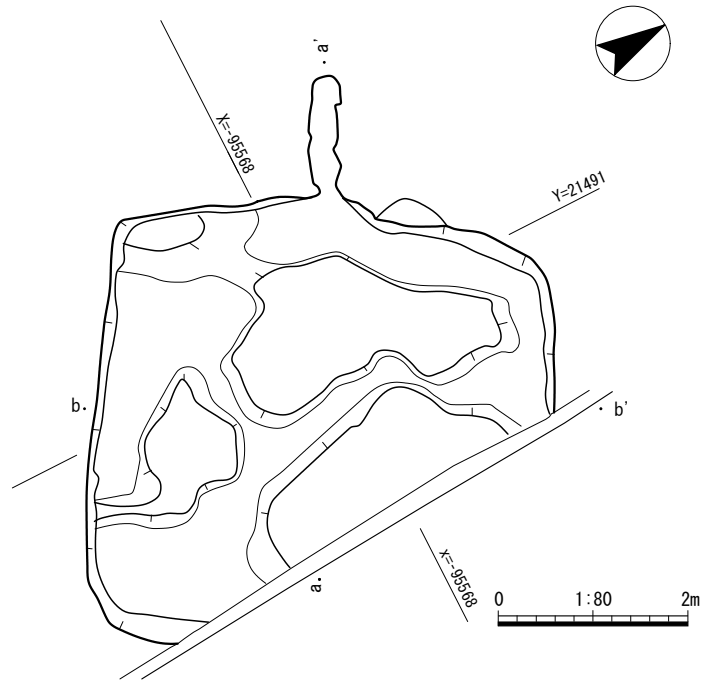


KSI02カマド

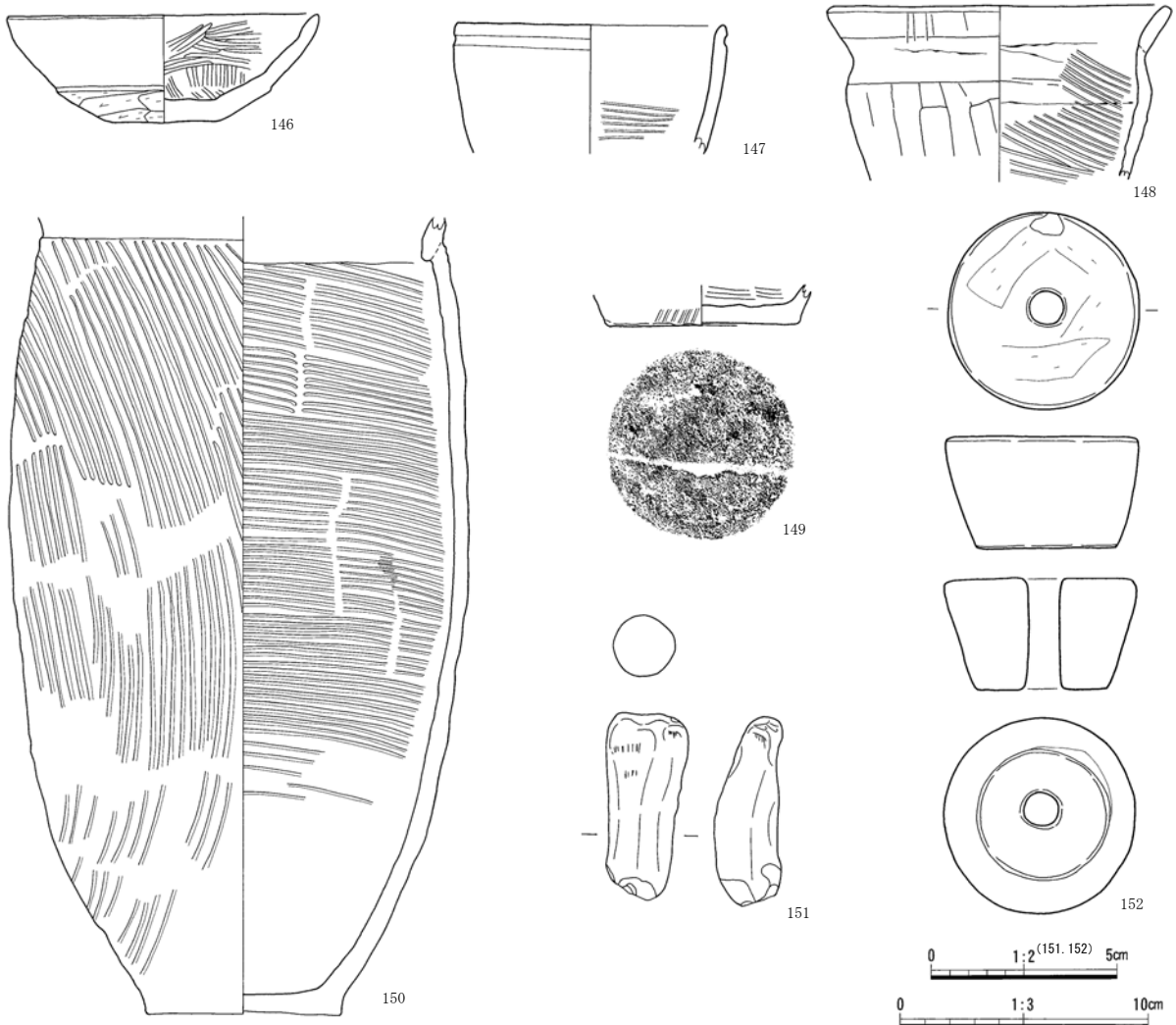
- |    |              |         |  |
|----|--------------|---------|--|
| 1  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2 | 地山土粒 (径1~5mm) 15%、炭化物粒 (径1mm) 3%を含む                    |
| 2  | 黒褐色シルト       | 10YR2/2 | 地山土粒 (径1~5mm) 10%、炭化物粒 (径1mm) 3%、焼土粒 (径10mm) 1%弱を含む    |
| 3  | 暗褐色シルト       | 10YR3/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 20%、炭化物粒 (径1~10mm) 3%を含む                |
| 4  | 暗褐色シルト       | 10YR3/4 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%、黒褐色土 5%を含む                            |
| 5  | 暗褐色シルト       | 10YR3/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 10%、炭化物粒 (径1~5mm) 1%、焼土粒 (径1~5mm) 5%を含む |
| 6  | 暗褐色シルト       | 10YR3/4 | 地山土粒 (径1~10mm) 5%を含む                                   |
| 7  | 黒褐色シルト       | 10YR3/2 | 炭化物粒 (径1~10mm) 3%、焼土粒 (5YR4/8) (径1~3cm) 10%を含む         |
| 8  | 暗褐色シルト       | 10YR3/4 | 黒褐色土斑状に 5%を含む  |
| 9  | 黒褐色シルト       | 10YR3/2 | 地山ブロック (径2~5cm) 10%を含む                                 |
| 10 | にぶい黄褐色粘土質シルト | 10YR4/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 15%を含む                                  |
| 11 | 暗褐色シルト       | 10YR3/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 10%を含む                                  |
| 12 | 赤褐色シルト       | 5YR4/6  | 混入なし (地山が被熱赤変したもの)                                     |
| 13 | 黒褐色シルト       | 10YR2/2 | 地山土粒 (径1~5mm) を含む                                      |
| 14 | にぶい黄褐色粘土質シルト | 10YR4/3 | 地山シルト40%、砂質地山20%を混合する                                  |

第91図 KSI02竪穴建物跡2 (カマド)

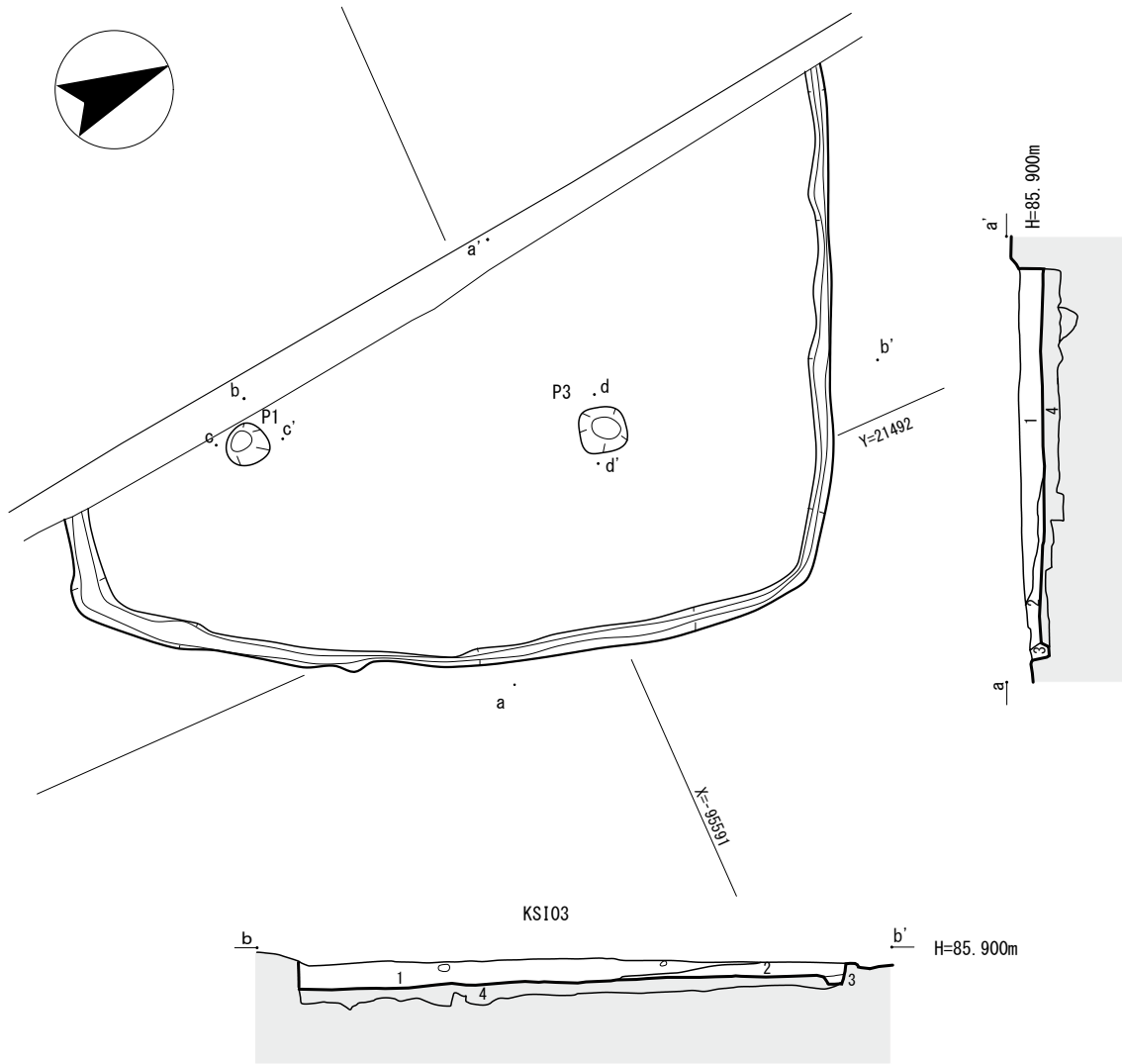




第92図 KSI02竪穴建物跡 3 (掘方)

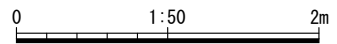
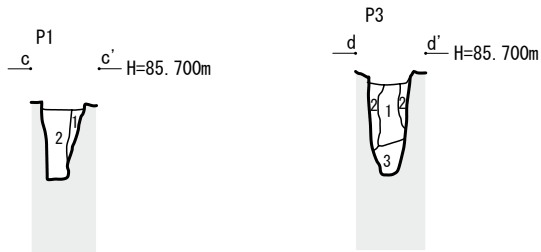


第93図 KSI02出土遺物



KSI03

- |   |                 |                             |
|---|-----------------|-----------------------------|
| 1 | 黒色シルト 10YR1.7/1 | 地山土粒 (径1~10mm) ブロック状に5%を含む  |
| 2 | 黒褐色シルト 10YR2/2  | 地山土粒 (径1~20mm) 5%を含む        |
| 3 | 黒色シルト 10YR2/1   | 地山土粒 (径1~3mm) 10%を含む (壁溝埋土) |
| 4 | 暗褐色シルト 10YR3/1  | 地山ブロック (径10cm) 20%を含む (貼床)  |



P1

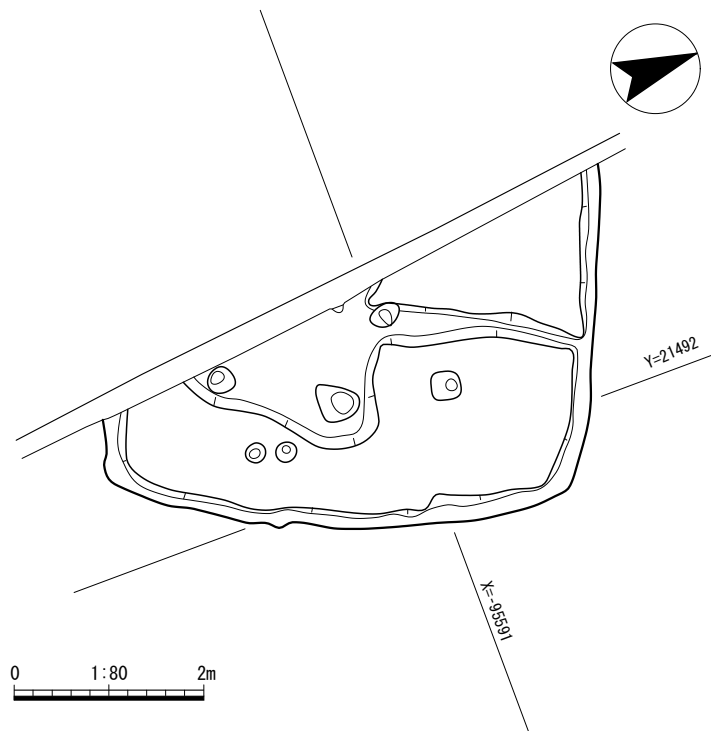
- |   |                   |                     |
|---|-------------------|---------------------|
| 1 | 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 | 地山土粒 (径1mm) 3%を含む   |
| 2 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む |

P3

- |   |                   |                       |
|---|-------------------|-----------------------|
| 1 | 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 | 地山土粒 (径1mm) 3%を含む     |
| 2 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む   |
| 3 | 暗褐色粘土質シルト 10YR3/4 | 地山ブロック (径1~5cm) 5%を含む |

第94図 KSI03竪穴建物跡 1

カマドは北辺中央に位置する。カマドの軸はN-16°-Wである。袖部の先端は確認できなかったが、確認できた範囲で長さは左袖35cm、右袖44cmである。袖の高さは最大で西袖8cm、東袖25cmである。左右の袖間の距離は最大で49cmである。西袖は地山を低いマウンド状に削り残した後、東袖は地山を掘りくぼめた後に褐色粘土で構築しており、芯材は確認できなかった。カマド内の堆積土は5層が確認できる。焼土は最下層直下に59×42cmの範囲に広がり、これが燃焼部である。燃焼部よりやや北側に長さ20cmほどの円礫が支脚として設置されている。煙道は燃焼部よりも約10cm下がり、北側へ延び調査区外へ続く。遺物は燃焼



第95図 KSI03竪穴建物跡 2 (掘方)

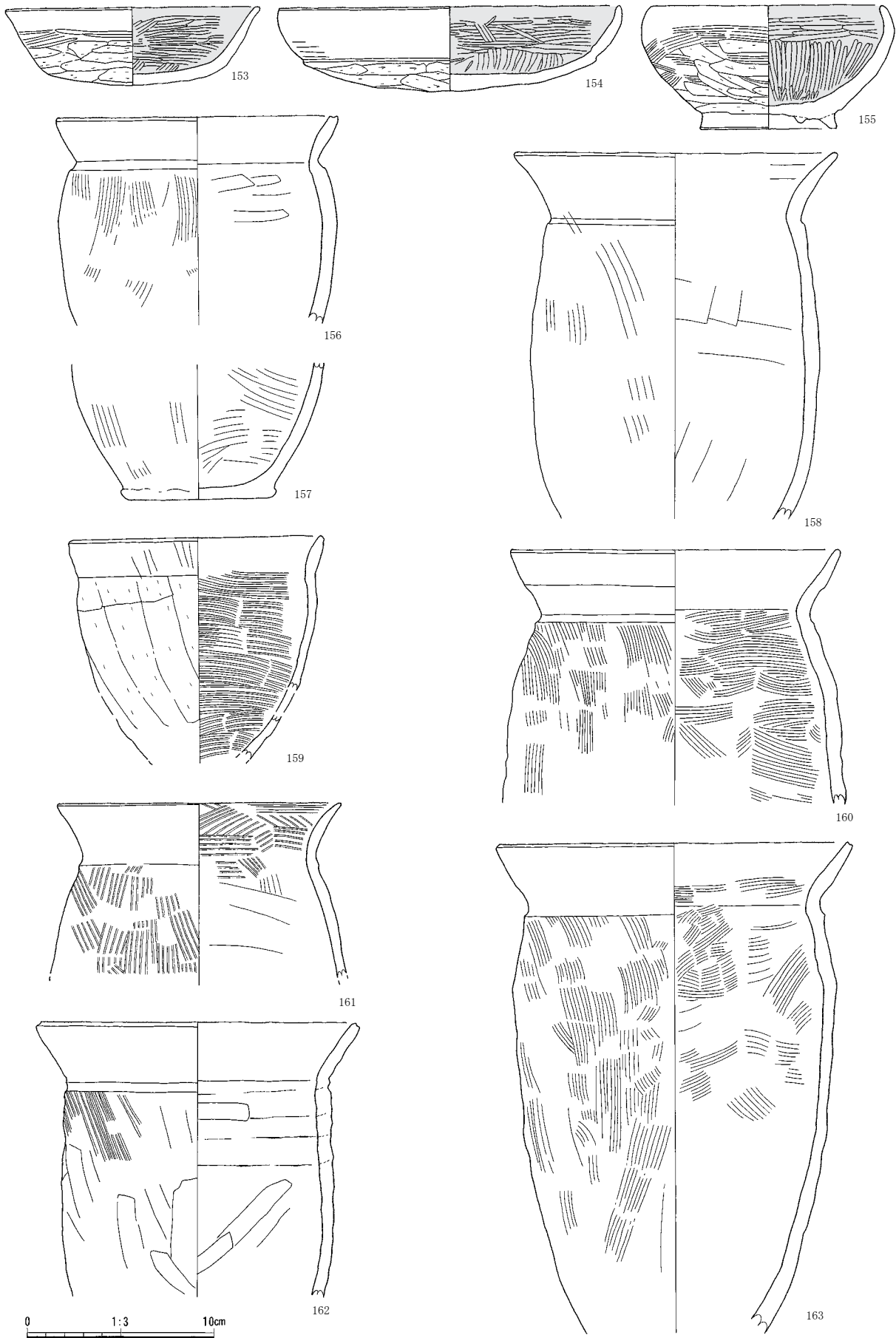
部周辺でまとまって出土している。カマドの掘方は床面から14cmと比較的浅い。貼床除去後、IV層面で柱穴を11基確認した。貼床掘り下げ後に確認できたことから本遺構とは時期が異なる可能性がある。深さは10~30cmのものが多いが、とくに深いのはP 2で57cmである。

遺物は堆積土を中心に25.07kg出土している。土師器杯 (125~128)、土師器甕 (3・4・130~142) を図示した。土師器甕には、間隔の広いハケ工具を使用したハケメが施されるのが特徴である。そのほか砥石 (143)、磨石 (144)、台石 (145) がある。これらの石器は混入の可能性もあるが、遺構に伴う可能性もある。時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。(巴)

#### KSI02 (第90~93図)

K区やや北側に位置する竪穴建物跡である。遺構はI層除去後のIV層上面で確認した。重複する遺構はない。東隅が調査区外に位置するため全容は不明であるが、平面形は各辺が膨らんだ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、東西間で4.7m、南北間で4.8mである。建物方位は西辺を基準にするとN-58°-Wである。床面は、ほぼ平坦に構築されており、確認面から床面までの深さは24cmである。堆積土は5つに区分した。1~4層は黒~黒褐色土を基調とし地山土粒・地山ブロックを含む。壁際には斜堆積が確認できることから自然堆積であると考えられる。掘方は中央部を大きく掘り込んでおり、そこに地山土を多量にふくむにぶい黄褐色土を充填し貼床としている。

付属施設には、カマドと柱穴3個がある。カマドは西辺のほぼ中央に位置する。カマドの主軸はN-62°-Wである。袖は左袖の確認できたが、北袖は確認できなかった。南袖の長さは80cm、最大の高さは15cmである。また左袖端には倒位の土師器甕を芯材として、にぶい黄褐色土と黒褐色土で構成される。カマド内の堆積土は7つに区分できる。焼土は最下層直下に30×25cmの範囲で広がっており、これが燃焼面である。支脚と考えられるような礫や土器は出土しなかった。煙道は燃焼面より約10cm



第96図 KSI03出土遺物 1

高くなり、煙出し孔に向かって緩やかに下降する。煙道の長さは、煙出し孔を含めて、1.25mである。柱穴は床面上で3個確認した。いずれも竪穴の四隅から約60～80cm内側に入った位置で確認したことから支柱穴を構成するものと考えられる。平面形はいずれも円形を呈し、規模は、径が30cm、深さが20～40cmである。

遺物は堆積土を中心に5.29kg出土している。土師器杯片(146)、土師器鉢片(147・148)、土師器甕片(150)などの土器がある。150の甕はカマドの芯材として使用されたものである。そのほか土製紡錘車の紡輪(152)、不明脚部片(151)などの土製品がある。

時期は、遺物や建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。(巴)

#### KSI03 (第94～97図)

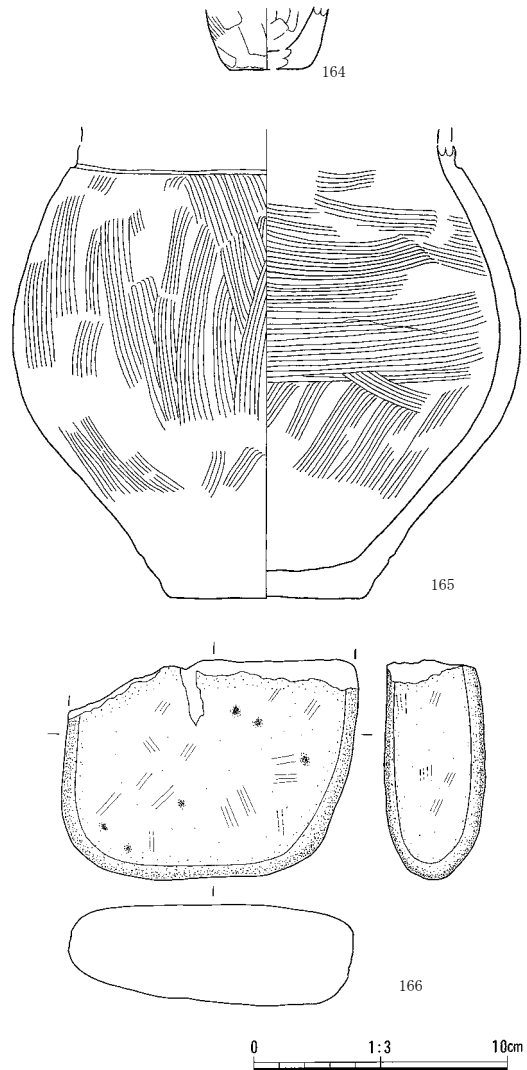
K区のはほぼ中央に位置する竪穴建物跡である。検出は、I層除去後のIV層上面で確認した。重複する遺構はない。建物跡の西側約半分が調査区外にあるため全容が不明である。平面形は、各辺が膨らんだ隅丸方形状を呈する。規模は南北間で5.1mであり、東西間は不明である。調査区内に残存する範囲では、北辺3.6m、東辺5.2m、南辺1.1mである。方位は東辺を基準とすると、N-67°-Wである。床面はほぼ平坦に構築されており、確認面から床面までの深さは20cmである。床面にはまた壁に沿って壁溝が造られている。壁溝の幅は10～20cm、深さは4～8cm程度である。堆積土は4つに区分した。1～3層は黒～黒褐色を基調とし、地山土粒を5～10%含むシルトである。3層は壁溝内堆積土である。竪穴部の掘方は中央部が大きく掘りくぼめられており、そこに地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトを敷き詰めて貼床としている。

付属施設には柱穴があり、床面で2個確認した。その位置から支柱穴を構成する柱穴と考えられる。堆積土は黒褐色～暗褐色土を基調とし、地山土粒を含むシルトである。

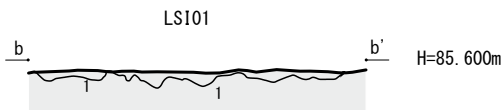
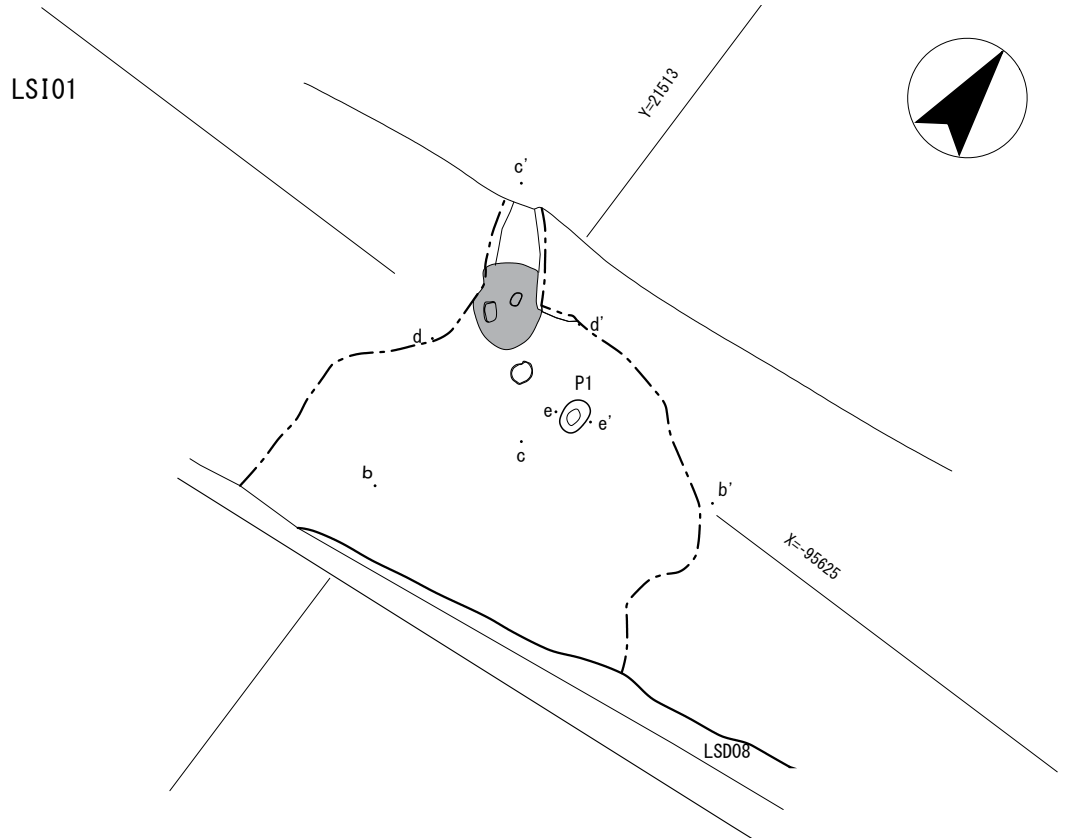
遺物は堆積土や床面を中心に5.87kg出土している。土師器杯(153・154)、土師器碗(155)、土師器甕(156～163)、土師器球胴甕片(165)などの土器やミニチュア土器(164)、磨石(166)がある。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期と位置づけた。(巴)

#### LSI01 (第98・99図)

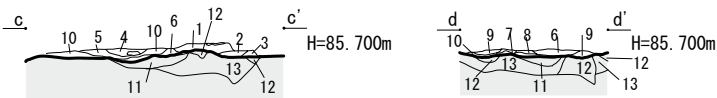
L区の西側に位置する竪穴建物跡である。南側をLSD08と重複し本遺構が古い。また北側を攪乱によって削平を受けている。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。ほぼ貼床範囲で確認したことから、平面形は不明である。したがって、規模も有為な計測はできない。調査区内における残存



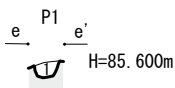
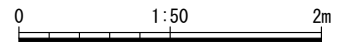
第97図 KSI03出土遺物 2



1 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土(10YR4/4) 10~15%を含む



- |                      |  |
|----------------------|--|
| 1 黒褐色シルト 10YR2/2     | 明赤褐色焼土 (5YR5/6) 1%を含む                              |
| 2 黒褐色シルト 10YR3/1     | にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 20~30%を含む                        |
| 3 黒褐色シルト 10YR2/2     |  |
| 4 黒色シルト 10YR2/1      | にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 1%を含む                            |
| 5 黒褐色シルト 10YR3/1     | 明赤褐色焼土粒 (5YR5/6) (径5~7mm) 3%を含む                    |
| 6 黒色シルト 10YR2/1      | 明赤褐色焼土粒 (5YR5/6) (径5~7mm) 3%を含む                    |
| 7 黒褐色シルト 10YR2/2     | 明赤褐色焼土 (5YR5/6) 5~7%を含む                            |
| 8 明赤褐色焼土 5YR5/8      |  |
| 9 黒褐色シルト 10YR2/2     | 黒色土粒 (10YR1.7/1) (径10~15mm) 1%を含む                  |
| 10 黒褐色シルト 10YR3/1    | にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 40%の混合土層。明赤褐色焼土 (5YR5/6) 1~2%を含む |
| 11 明赤褐色焼土 5YR5/6     |  |
| 12 黒色シルト 10YR2/1     | にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 10%混入 (貼床)                       |
| 13 にぶい黄褐色シルト 10YR6/4 | 黒褐色土 (10YR3/1) 10~15%を含む (貼床)                      |



1 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色土 (10YR4/4) 10~15%含む (貼床)

第98図 LSI01竪穴建物跡

範囲は、北辺が1.2m、東辺が2.6m、西辺が1.1mであり、煙道を基準にすると、建物方位はN-33°-Wである。上部を大きく削平されているため、確認面からの深さや断面形状は不明である。堆積土はなく貼床のみ確認できる。掘方は全体に凹凸があるが、とくに壁際が深く掘り込まれている。

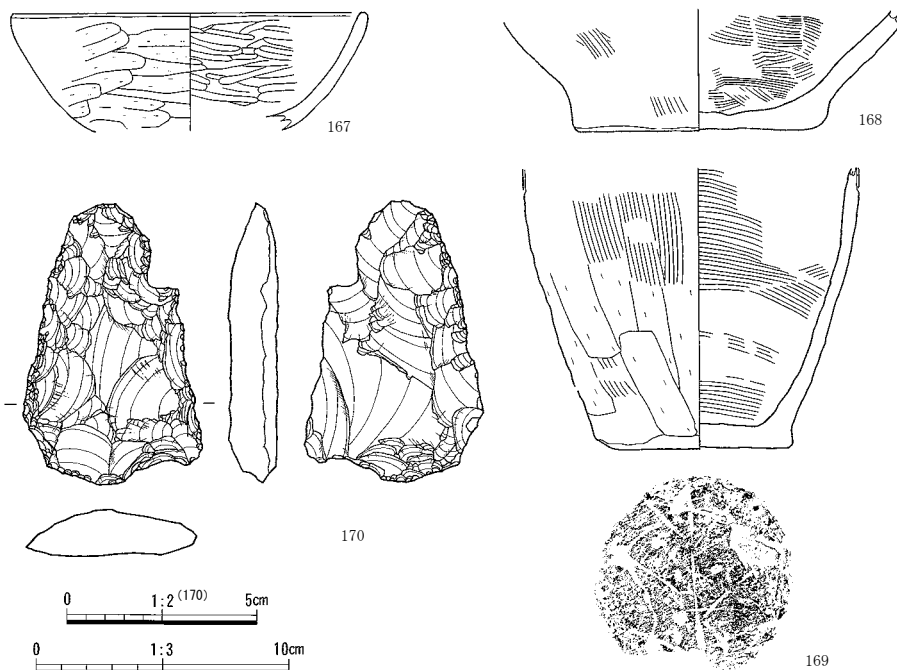
付属施設はカマドの痕跡のみ確認できる。カマド北辺に位置して

いるが、上部が大きく削平されているために煙道の一部と燃焼部のみ確認した。堆積土は貼床も含めて13層に区分したが、薄い層であるため、本来は同一層であった可能性もある。燃焼部は60×40cmの楕円形を呈する範囲に広がる。

遺物はカマド堆積土を中心に1.02kg出土している。土師器杯片(167)、土師器球胴甕片(168)、土師器甕片(169)などがある。そのほか石篋(170)のような石器があるが混入であろう。

時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅰ期に位置づけた。

(巴・西澤)



第99図 LSI01出土遺物

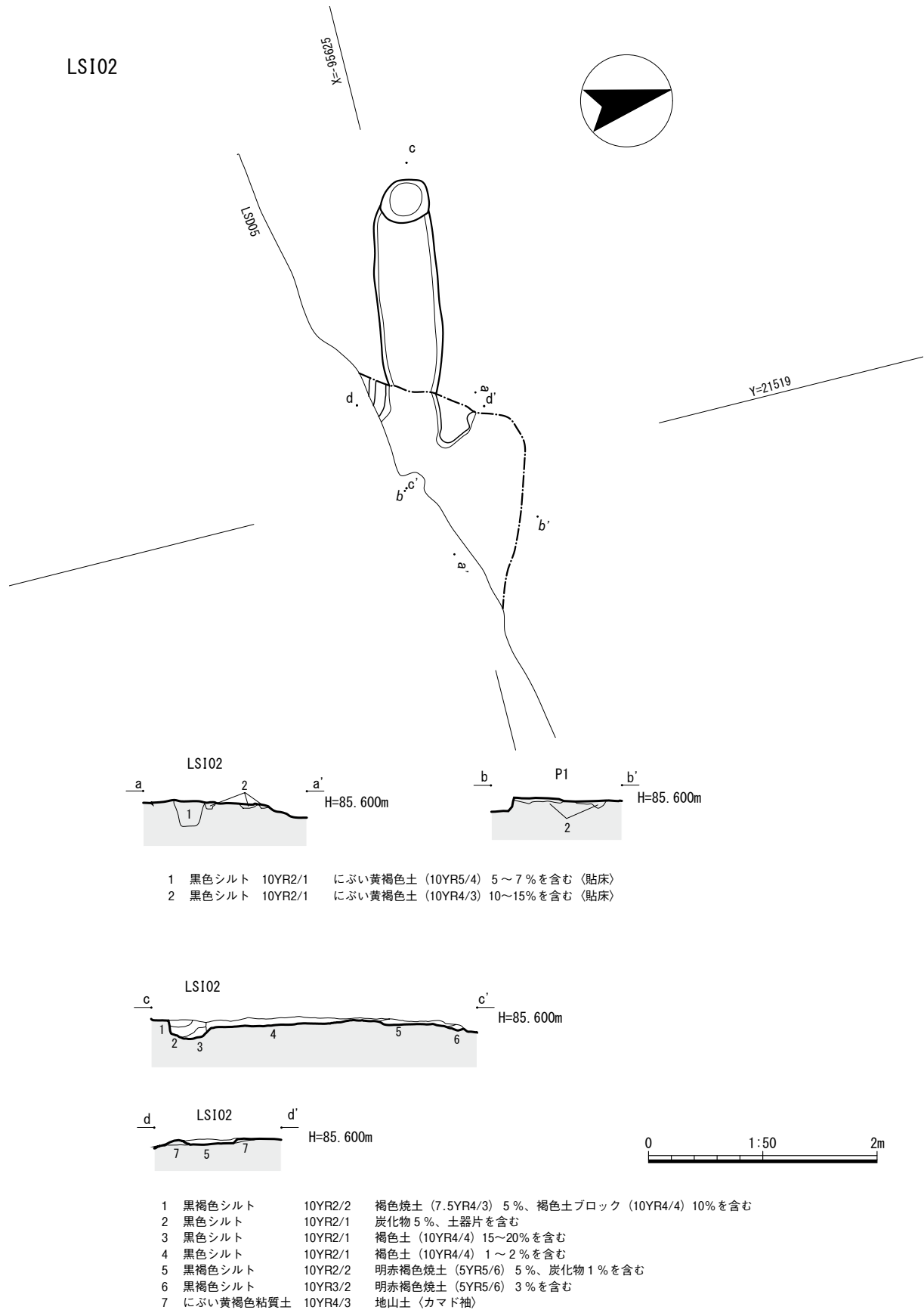
#### LSI02 (第100図)

L区西側に位置する竪穴建物跡である。遺構の確認はⅠ層除去後のⅣ層上面で行った。LSD08と南側で重複し、本遺構が古い。調査区内では建物跡北東部の一部のみしか位置しておらず、また上部を削平されていることから詳細は不明である。したがって、平面形・規模ともにほとんど不明となる。調査区内で確認できた範囲は、西辺が1.6m、北辺が1.7mである。建物方位は煙道を基準にするとN-77°-Wである。上部が大きく削平されているため堆積土は残っておらず、確認面からの深さや断面形は不明である。確認できたのは削平された貼床の範囲が中心で、カマドの痕跡がわずかに残る。掘方は北東辺を中心に部分的に掘り込んでおり、そこに地山由来土を含む黒色土を入れて貼床としている。

カマドは、西辺で確認した。カマドには、袖、煙道・煙出し孔を確認した。煙道は北西方向に延び、長さは1.8mである。袖の規模は、右袖の長さが41cm、左袖は、大部分がLSD05に削られているため、残存範囲で25cmである。両袖間の距離は64cmである。袖は、にぶい黄褐色粘質土で構成されている。明確な燃焼面は確認できなかったが、堆積土中に焼土粒が含まれる層がある。

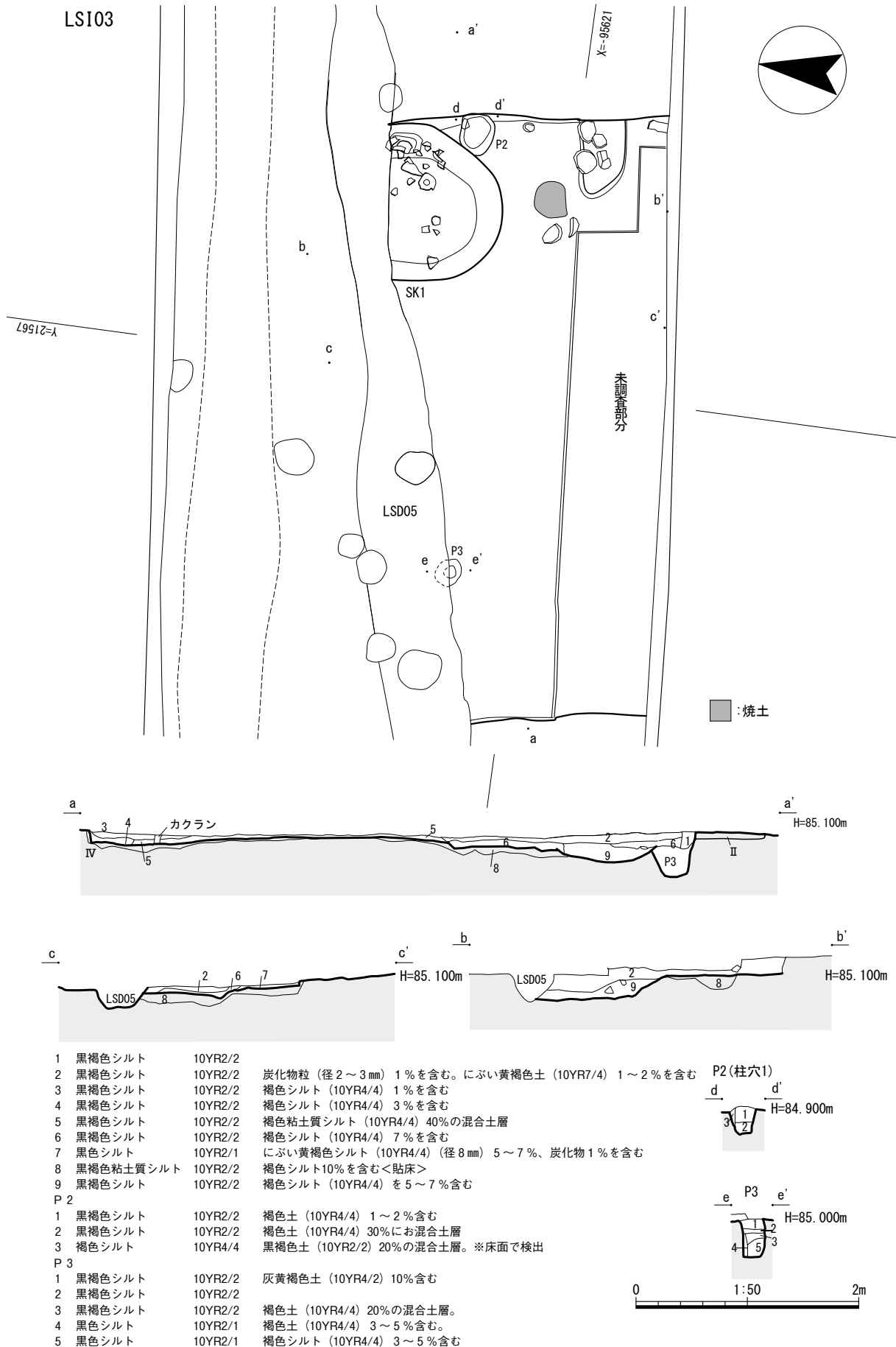
遺物は堆積土から非ロクロ甕の細片が51.3gのみ出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

(巴・西澤)

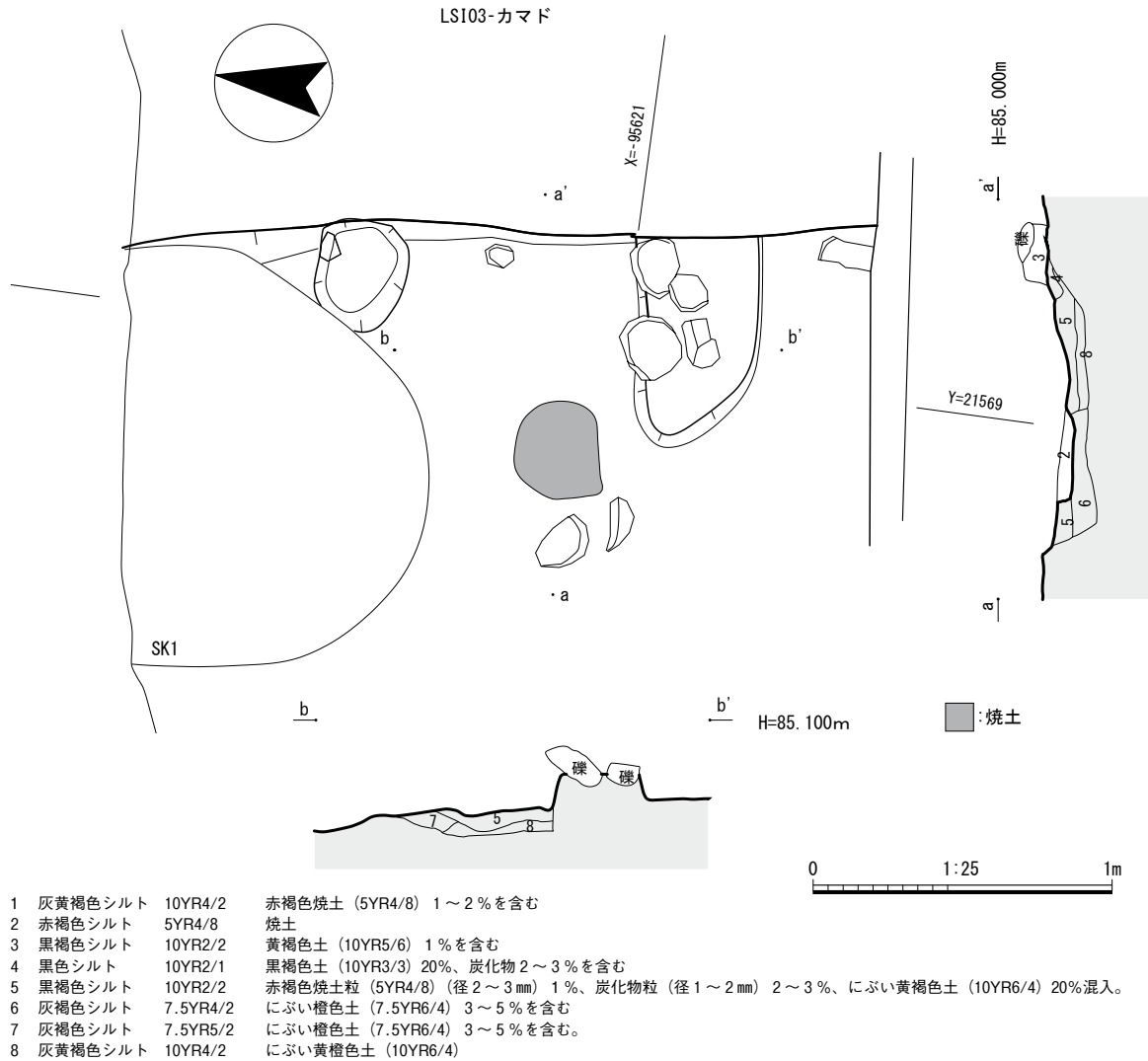


第100図 LSI02竪穴建物跡





第101図 LSI03竪穴建物跡 1

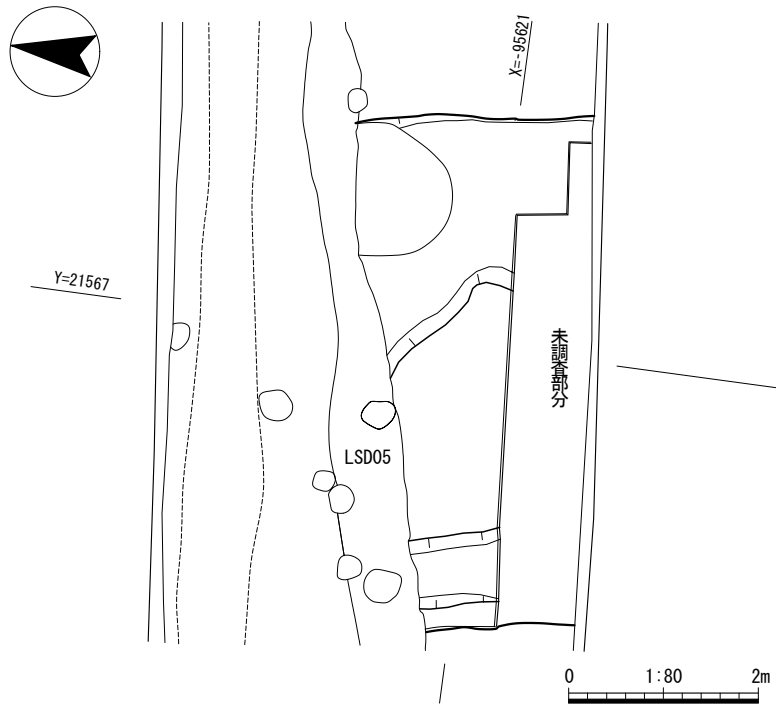


第102図 LSI03竪穴建物跡2 (カマド)

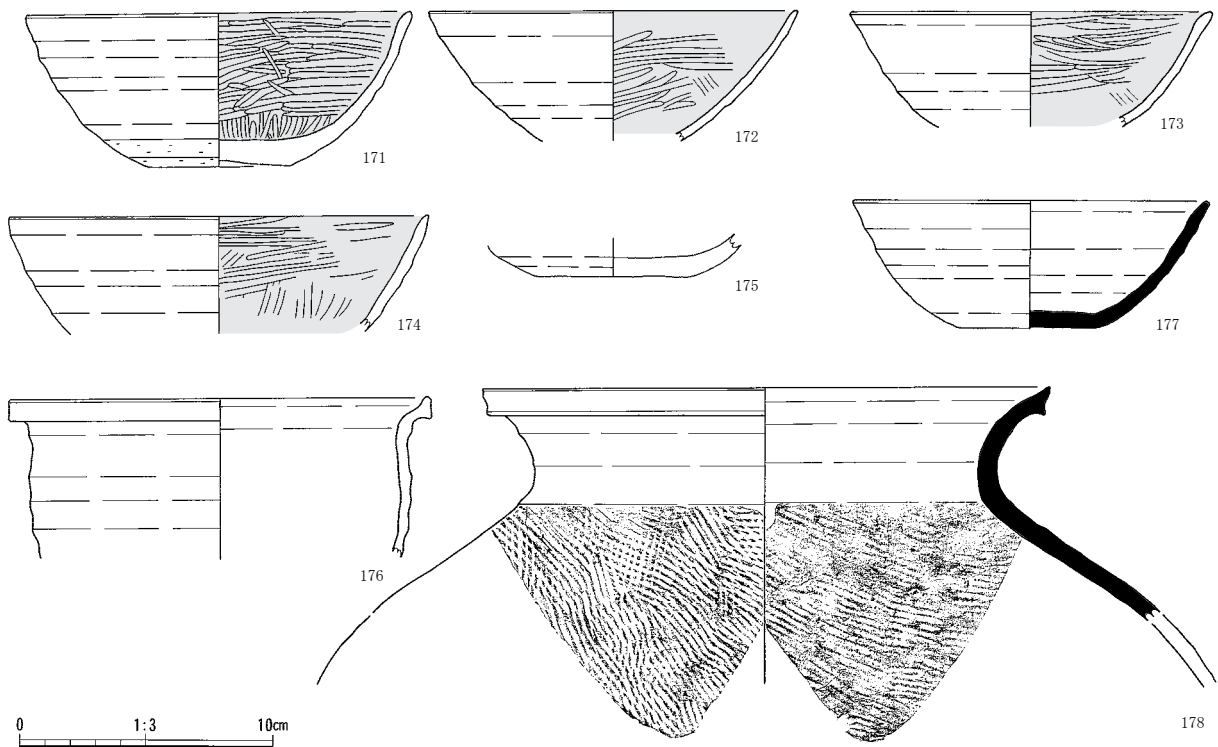
### LSI03 (第101図~104図)

L区の中央やや東寄りに位置する竪穴建物跡である。検出はI層除去後のIV層上面で行った。LSD05と北側で重複し、本遺構の方が古い。南側の大部分が調査区外であることから、詳細は不明な点が多い。また、確認調査範囲では、一部以外は精査を行っていない。平面形は不明であるが、東西の辺が直線的である。規模は、東西間で5.4mである。建物方位は東辺を基準とするとN-77°-Eである。LSI01・02と同様に上部が大きく削平されているため、確認面からの深さは10cm程しかない。掘方は、調査区内では、中央部を残して、壁際を中心に掘り込んでいる。堆積土は7つの層に区分した。いずれも黒~黒褐色土を基調とし炭化物や褐色土を含んでいる。全体的にレンズ状に堆積することから自然堆積であると考えられる。

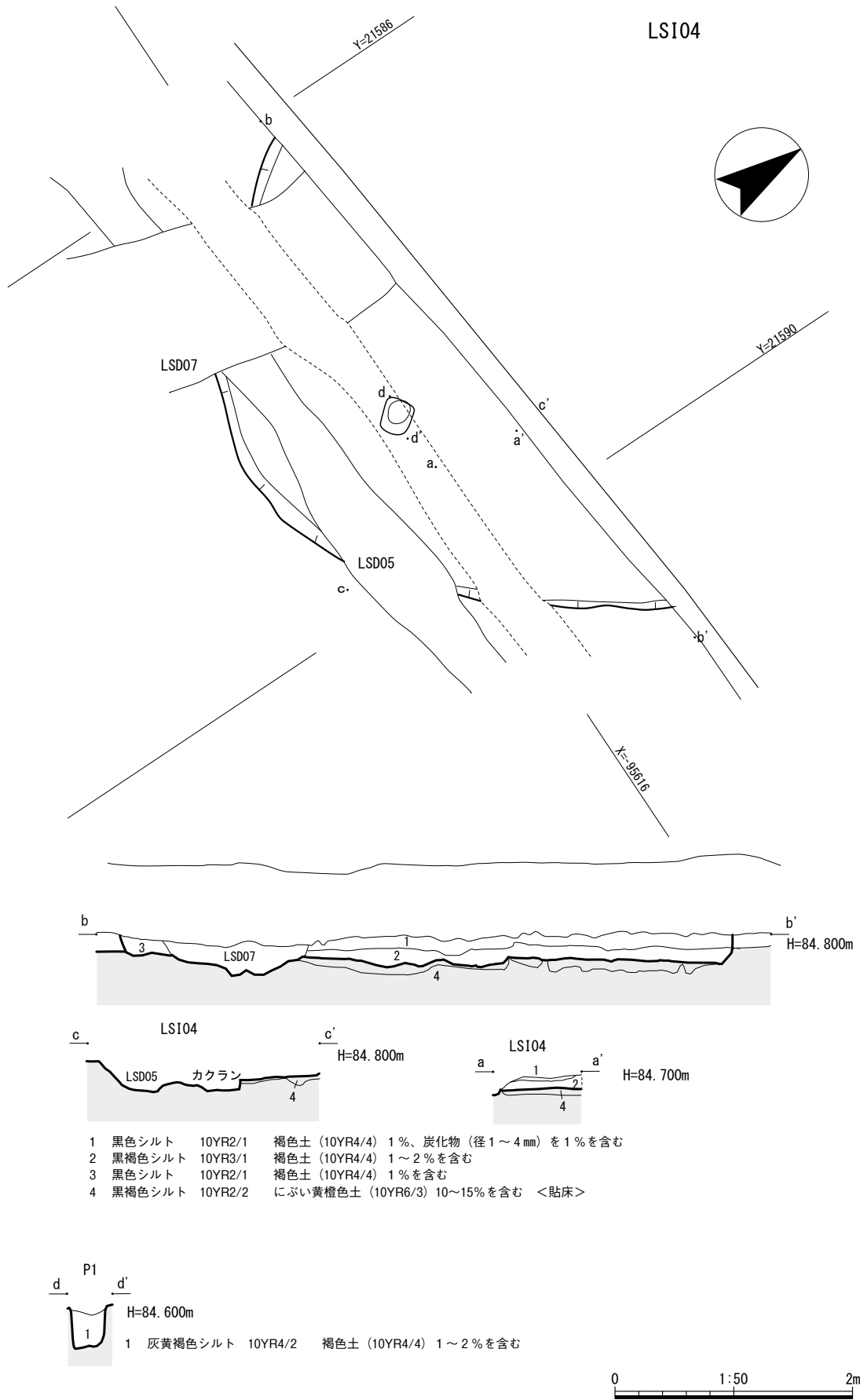
付属施設にはカマド、貯蔵穴 (SK1) 1基、ピット2個がある。カマドは東辺で確認した。確認できたのは右袖と燃焼部のみである。右袖の長さは70cmであり、地山土を用いて構築されており、芯材として複数の礫を用いている。左袖は確認できなかった。煙道は確認できないが、燃焼面よりも一段高い煙道があってそれが削平されたか、もともと無かったか、2通りの解釈ができる。貯蔵



第103図 LSI03竪穴建物跡 3 (掘方)



第104図 LSI03出土遺物



第105図 LSI04竪穴建物跡

穴の平面形は楕円形状を呈すると考えられる。規模は、長軸1.04m、短軸1.40mである。床面からの深さは17cmである。断面形は皿形を呈する。壁は外側に開きながら緩やかに立ち上がる。遺物が比較的多く出土している。カマドの一部を破壊しているとも考えられ、別遺構の可能性もある。P 2の平面形は楕円形を呈し、規模は径が40×30cm、床面からの深さが22cmである。P 3は、LSD05によって半分破壊されている。およそ円形の平面形である。

遺物は堆積土やカマド周辺から2.66kg出土している。土師器杯（171～174）、土師器甕片（175・176）がある。いずれもロクロ調整のものである。そのほか須恵器杯片（177）、甕片（178）などが出土している。時期は、建物方位や出土遺物から、漆町Ⅳ期（平安時代）に位置づけた。（巴・西澤）

#### LSI04（第105図）

L区の北西端に位置する竪穴建物跡である。検出はⅠ層除去後のⅣ層上面で行った。LSD05・07と重複し本遺構のほうが古い。また、現代の水路によって部分的に破壊されている。

調査区内には、建物跡の南辺と東辺の一部の約半分のみであり、残りは北側の調査区外にある。平面形は、隅丸で各辺が膨らんだ方形を呈すると推定される。規模は、不明であるが、調査区内における規模は、東辺3.8m、南辺3.5mである。建物方位は、南辺を基準とするとN-46°-Wである。床面は、やや凹凸が確認されるが、ほぼ平坦であり、確認面からの深さは16cmである。掘方は全体的に掘り込まれており、そこににぶい黄橙色シルトと黒褐色シルトとの混合土を入れて貼床としている。堆積土は3つの層があり、黒～黒褐色土を基調とする。1・2層では多少の凹凸があるものの、比較的水平に堆積していること、混入物等が類似していることから人為的に堆積したものと考えられる。また、攪乱内で柱穴を1基確認した。南隅からやや内側に寄った位置である。平面形は方形状を呈し、規模は一辺が30cm、確認面からの深さが34cmである。断面形は長方形状である。堆積土は単層で褐色土を含む灰黄褐色土である。

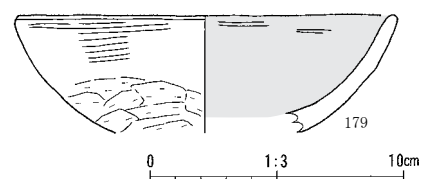
遺物は出土していない。時期は建物方位の検討から、漆町Ⅰ期に位置づけた。（巴・西澤）

#### MSI01（第106・107図）

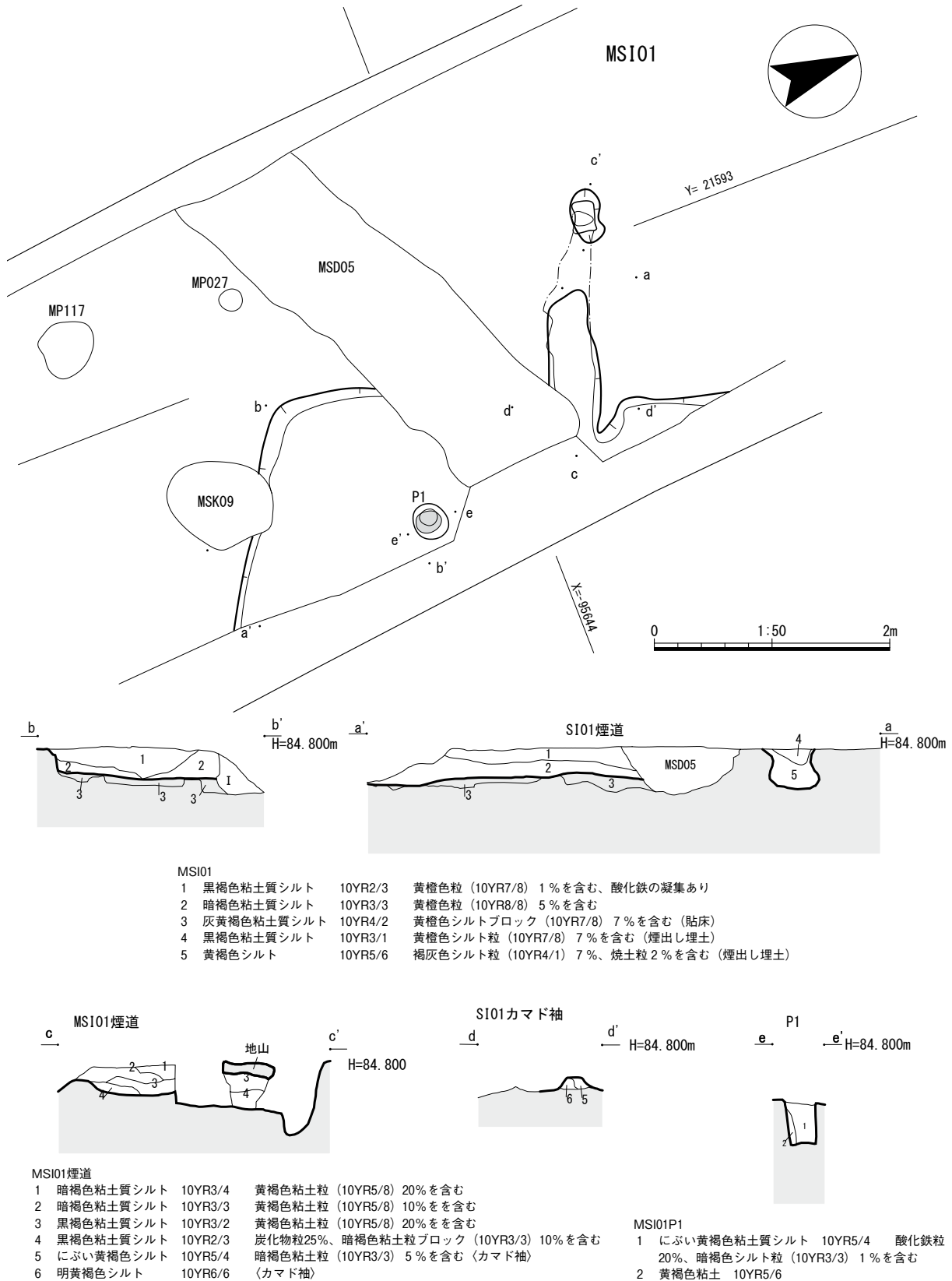
M区中央部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡の南西隅からカマド付近、西辺と南辺の一部のみを調査したに過ぎず、残りは調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はⅠ層除去後のⅣ層で行っている。MSD05とで重複しており、切り合い関係からこれよりも古い遺構となる。平面形は調査区内の形状から判断すると、およそ方形を呈し、西辺にカマドが設置される。規模は、調査区内の状態からは計測できず詳細は不明であるが、カマドが西辺の中央にあると仮定すればおよそ5mとなる。検出値では、南辺が2m、西辺が3.9mである。床面までの深さは確認面から25cmと浅く、大部分が削平されている。床面は全体に、灰黄褐色粘土質シルトと黄橙色シルト混合土で構成され、ほぼ平坦に構築されている。建物の掘方は建物中央部がより深く掘られており、その分貼床も厚く充填されている。建物方位は、カマド主軸を基準とすれば、N-66°-Wであり、大きく西に傾いている。

堆積土は2つの層が確認できる。1層が黒褐色粘土質シルト、2層が暗褐色粘土質シルトであり、レンズ状堆積が確認できることから自然堆積の可能性はある。

建物跡に付属する施設には、カマドが西辺に1基、床面にピツ



第106図 MSI01出土遺物



第107図 MSI01竪穴建物跡

トが1基ある。カマドは、右袖、煙道、煙出し孔が残存している。袖（カマド本体の下半部）は右のみ残存し、左袖はMSD05によって破壊されている。両袖間の距離は不明であり、右袖の長さは、西辺から38cmである。袖の高さは10cmで、にぶい黄橙色と明黄褐色シルトで構成される。両袖間には燃焼部が確認していない。煙道から煙出し孔までの長さは、1.85mであり、先端に直径44×22cmの煙出し孔がある。両袖間から煙出し孔までの底面の状況は、カマド本体から煙出し孔までゆるやかに下降する。煙出し孔は、深さが60cmであり、煙道よりも20cm低くなる。カマドや煙道、煙出し孔の堆積土は、暗褐色から黒褐色を主体とする粘土質シルト層であり、自然堆積の状況が窺える。煙道の一部には地山が残っており、当初トンネル状に削り抜かれた煙道であったと考えられる。

P1は床面にあり、直径30cmの円形を呈する形状である。深さは床面から40cmである。断面から柱痕跡が明確ではないが、検出位置から建物の支柱穴のひとつかもしれない。

出土遺物は、626g出土している。とくにカマド付近から多く出土する。土師器杯片（179）、土師器非ロクロ甕片、須恵器瓶類片、甕片などがある。時期は遺物や建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

#### NSI01（第108～111図）

N区の東側で検出した。確認は表土除去後のⅣ層で行った。重複する遺構はない。本遺構の南半分が調査区外にあるため、確認できたのは北辺・東辺の一部のみである。したがって、完掘しておらず、全容は不明である。確認できた範囲で北壁2.3m、東壁2.8m分である。平面形は、詳細は不明であるが、各辺が直線的な方形を呈すると予想される。規模は、相対する辺を確認していないため不明である。建物方位は東辺を基準とするとN-43°-Eである。床面には貼床が施され、ほぼ平坦に構築されている。確認面からの床面までの深さは40cmである。床面にはまた、壁に沿って幅が20cm、深さが10cm程度の壁溝が巡る。堆積土は6層に区分した。黒褐色を呈する粘土質シルト主体であり、褐色や黒色粘土質シルトがその間に含まれる。貼床は黒色～黒褐色粘土質シルトとⅣ層由来のシルト層との混合した層である。掘方は壁沿いよりも中央部が深く掘り込まれている。

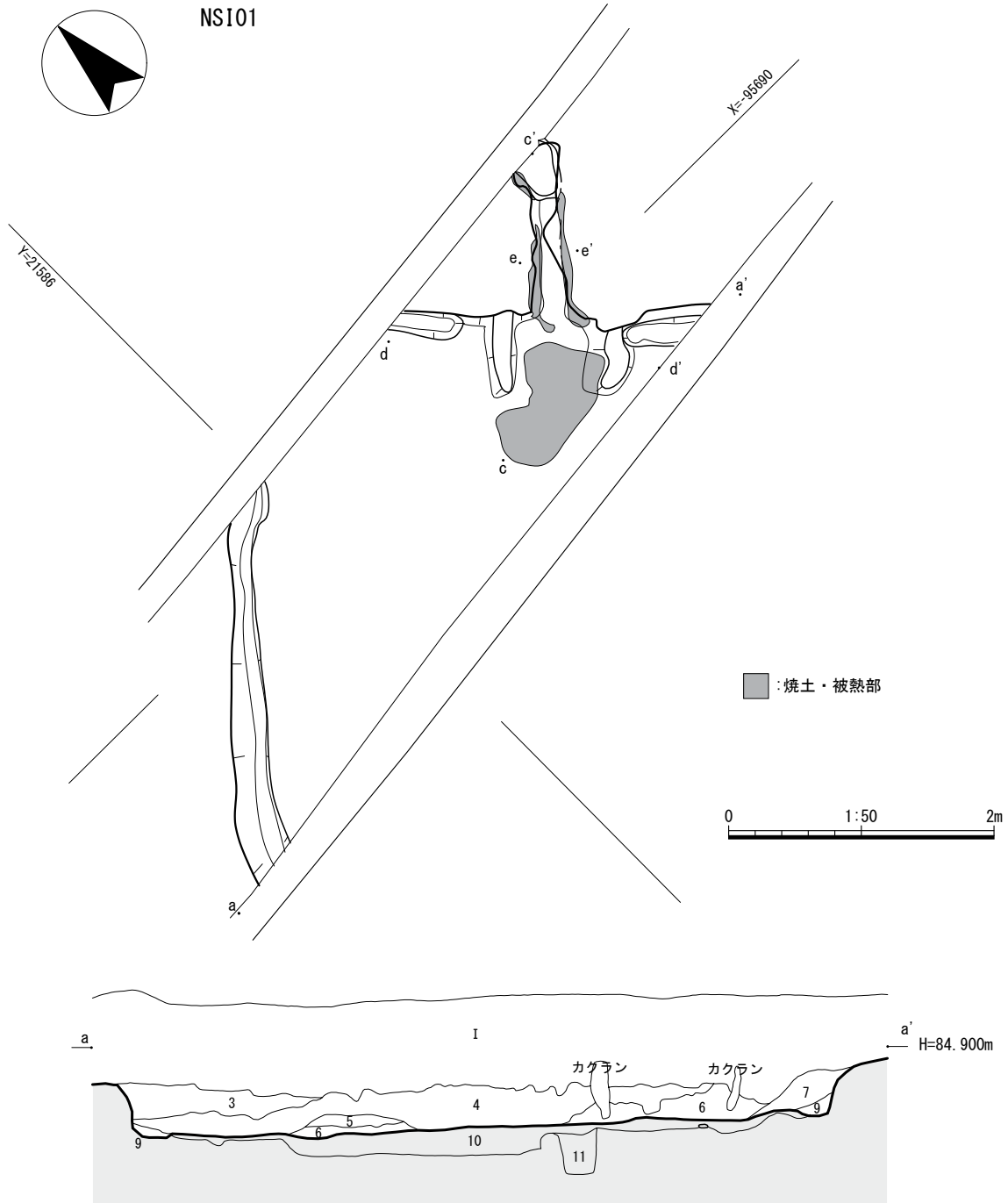
付属施設にはカマドがある。カマドは北壁で検出した。煙出し孔の一部は調査区外に位置するため全容は不明である。カマドには、左右袖、煙道、煙出し孔が残存している。両袖間（カマド本体の下半部）の距離は1.1m、右袖の長さは0.5m、左袖の長さが0.6mである。両袖間には燃焼部があり、90×60cmの範囲で焼土が広がっている。煙道は、燃焼部から段差を経て北東方向に延びる。煙道の両壁には被熱によって赤変した地山と被熱により固まったと考えられるタール状に変化した部分が確認できた。カマドの堆積土は8層に区分できる。黒褐色や褐色の粘土質シルトを主体とするが、天井部の崩落と想定できる黄橙色シルト層が間に含まれる。

遺物は堆積土を中心に5.54kg出土している。大半が土師器片であるが、細片が多く図示可能な遺物は少ない。土師器ロクロ甕や非ロクロ甕の破片、須恵器杯片や甕片などが出土している。180は床面より出土した磨石である。4面ともに磨り面がありよく使用されている。

建物方位は不規則なため、ロクロ甕の存在やカマドの位置などから、時期を漆町Ⅳ期に位置づけた。  
(巴・西澤)

#### NSI02（第112～114図）

N区西部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の北側の一部を調査したに過ぎず、大部分は南側の調査区外にあるため全容は不明である。したがって完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土で

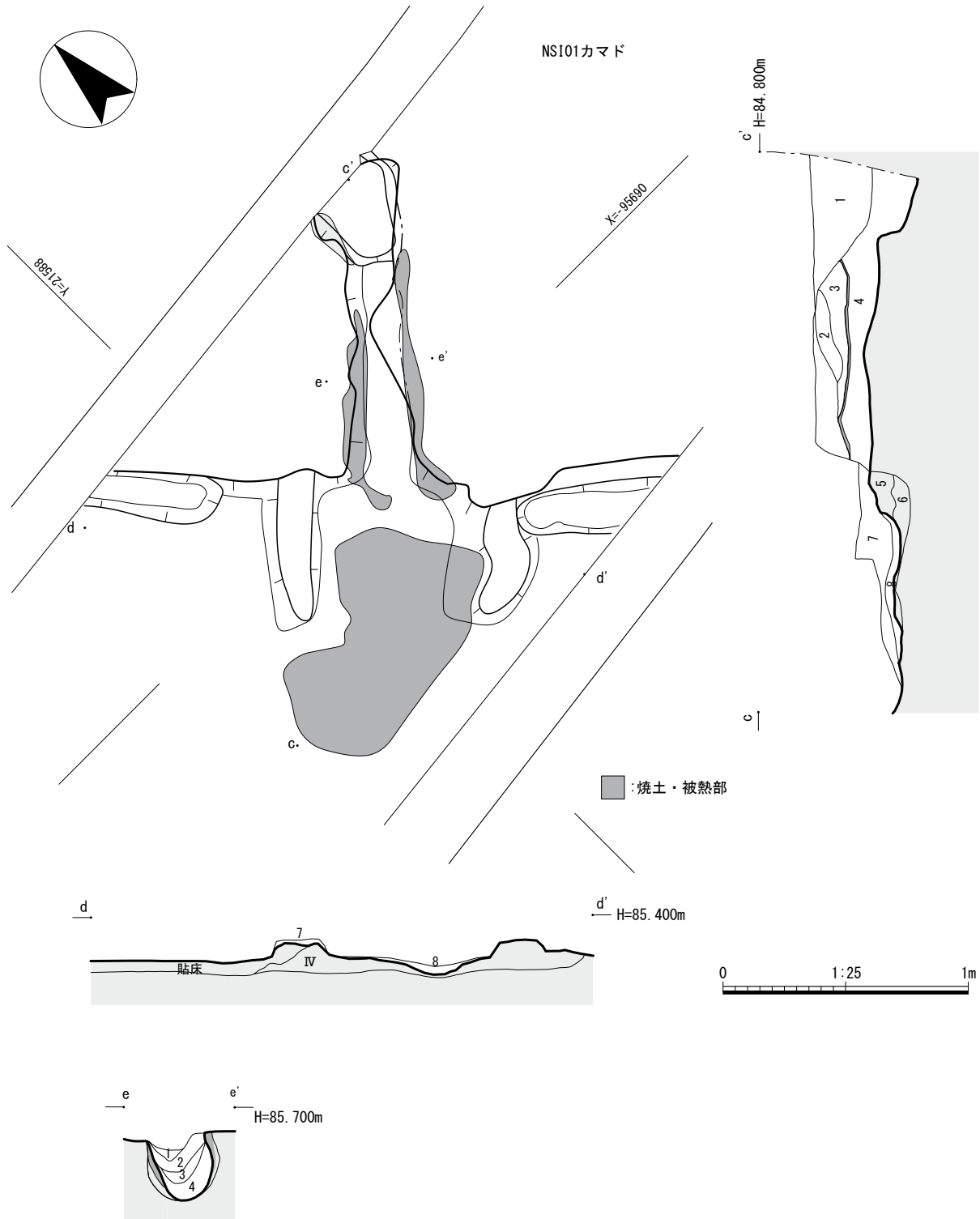


NSI01

I層：表土	黒褐色粘性シルト	10YR3/1	酸化鉄粒 (7.5YR5/8) (径10mm) 30%を含む
1	褐色粘土質シルト	7.5YR4/6	黒褐色土 (10YR3/1 I層土) 10%を含む杭跡
2	黒褐色粘土質シルト	10YR3/2	酸化鉄 (7.5YR5/8) (径10mm) 5%を含む地山土粒 (10YR7/8) (径10mm) 5%を含む
3	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1	黒色土 (2.5G2/1) を斑状に含む
4	黒褐色粘土質シルト	10YR3/2	酸化鉄粒 (7.5YR5/8) (径20mm) 5%、黒色粘土質シルト (2.5GY2/2) 帯状に5%を含む
5	褐色粘土質シルト	7.5YR4/6	地山土粒 (10YR7/8) (径10mm) 20%を含む
6	黒色粘土質シルト	2.5GY2/1	地山土粒 (10YR7/8) (径10mm) 20%マンガン粒 (5mm) 5%を含む
7	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1	
9	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1	地山土粒 (10YR6/8径) (5~10mm) 20%を含む
10	黒色粘土質シルト	10YR2/1	地山ブロック (10YR6/8) (径10~20cm) : 20%を含む (貼床)
11	黒褐色粘土質シルト	10YR3/2	炭化物 (径10mm) 10%を含む地山土粒 (10YR6/8) (径10mm) 10%を含む

第108図 NSI01竪穴建物跡 1

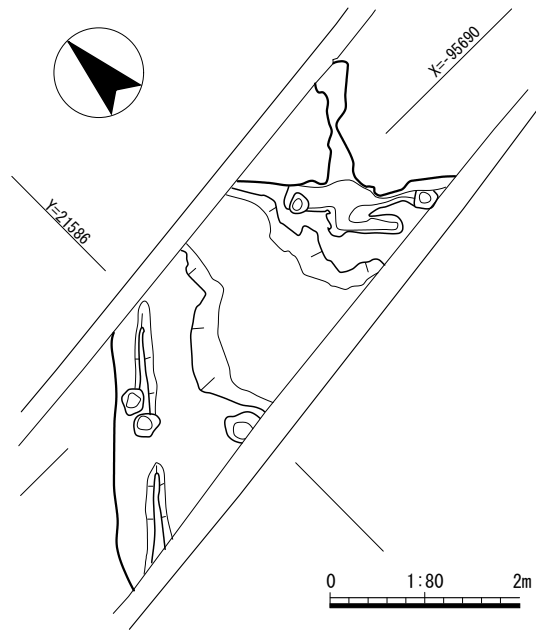




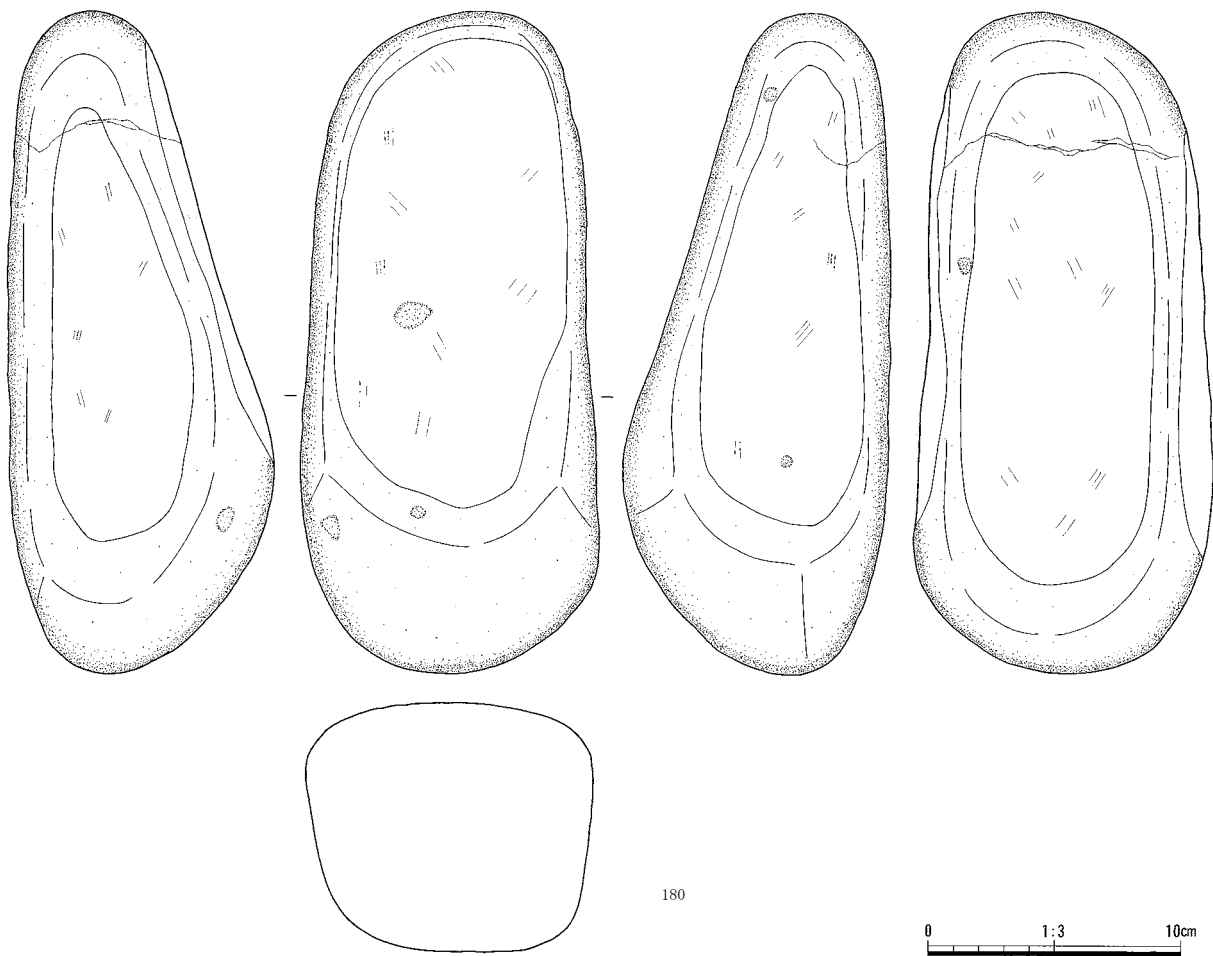
NSI01カマド

- |                                |  |
|--------------------------------|--|
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2            | 地山土粒 (径 1mm) 1%含む酸化鉄分粒 5%を含む *ややグライ化したもの                     |
| 2 黄橙色シルト 10YR8/8               | 黒褐色粘土質シルトブロック (10YR3/1) を10%含む。〈天井崩落土〉                       |
| 3 褐色粘土質シルト 10YR4/6             | 黒色土 (10YR2/1) (径10mm) 斑状に含む                                  |
| 4 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2            | 焼土粒 (5YR3/4) (径10mm) 5%地山土粒 (径 1mm) 20%を含む                   |
| 5 赤褐色粘性シルト 5YR4/8              | 炭化物 1%を含む (貼床)   |
| 6 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3            | 焼土粒 (5YR5/8) (径 3~5mm) 30%炭化物 (径 3mm) 3%を含む (貼床)             |
| 7 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1            | オリーブ灰色ブロック (2.5GY6/1) (径10mm) 3%含む (1層がややグライ化したもので住居内堆積土と同じ) |
| 8 焼土 (5YR4/6) と被熱赤変 (5YR1.7/1) |  |

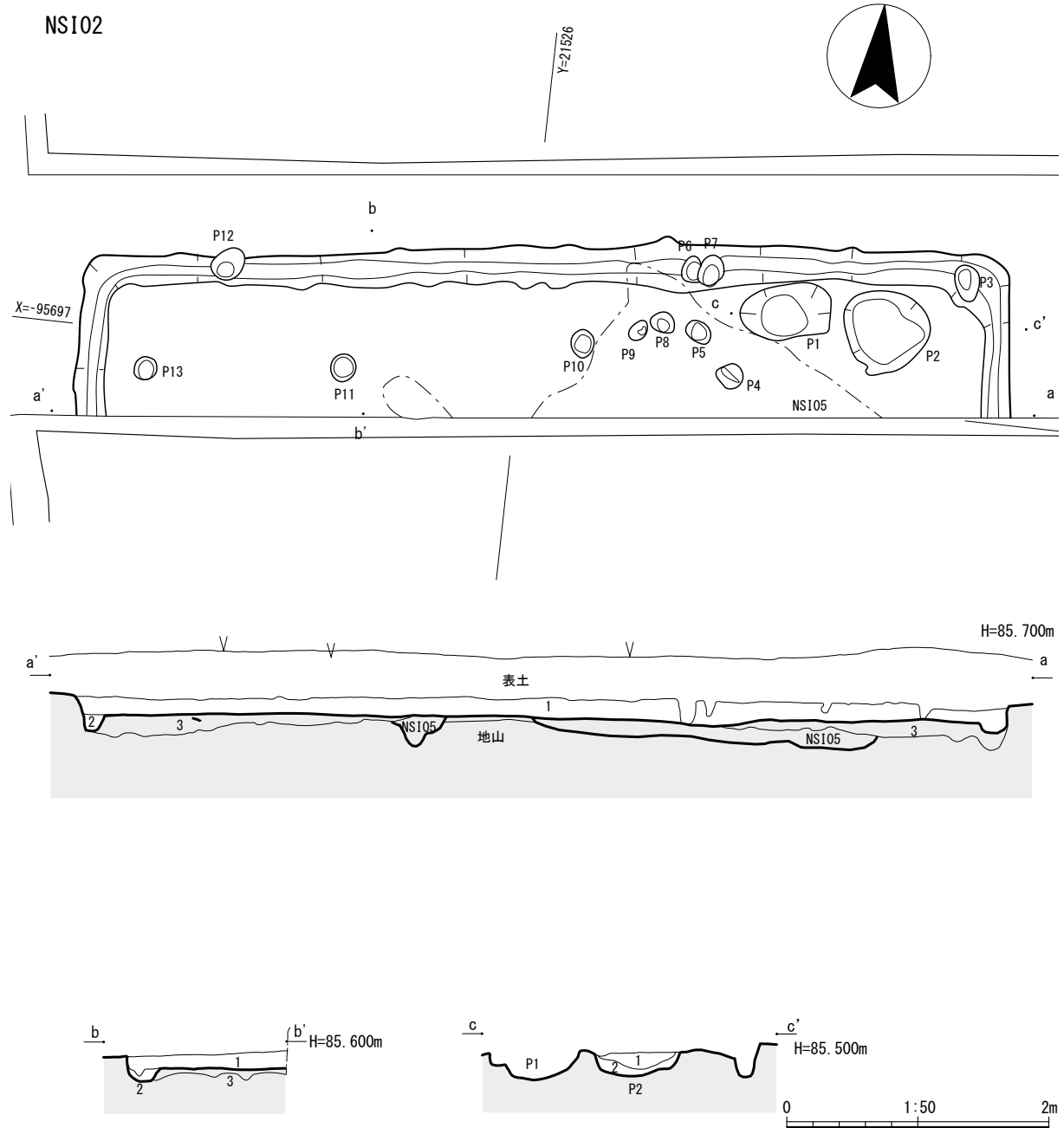
第109図 NSI01竪穴建物跡 2 (カマド)



第110図 NSI01竪穴建物跡 3 (掘方)



第111図 NSI01出土遺物



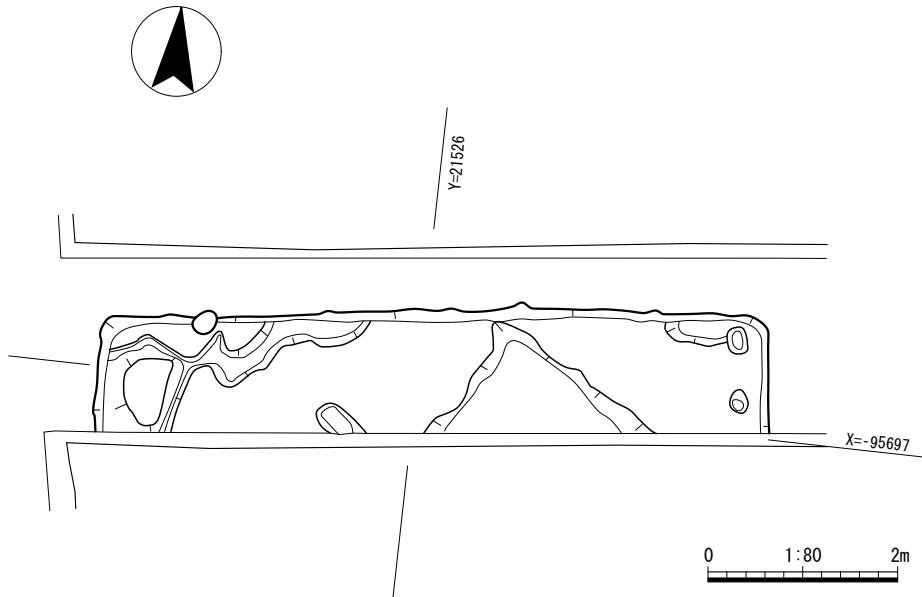
- NSI02
- |                    |                               |
|--------------------|-------------------------------|
| 1 黒色シルト 10YR2/1    | 褐色土粒 3～5% 炭化物を含む              |
| 2 黒色シルト 10YR2/1    | 褐色土ブロック20%を含む                 |
| 3 黄褐色粘性シルト 10YR5/6 | 黒褐色土 (10YR2/2) 斑状に20%を含む (貼床) |
- 
- NSI02・P1・2・壁溝
- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1 黒色シルト 10YR2/1  | 褐色土ブロック5%焼土粒を含む |
| 2 暗褐色シルト 10YR3/3 | 褐色土ブロック30%を含む   |

第112図 NSI02竪穴建物跡 1

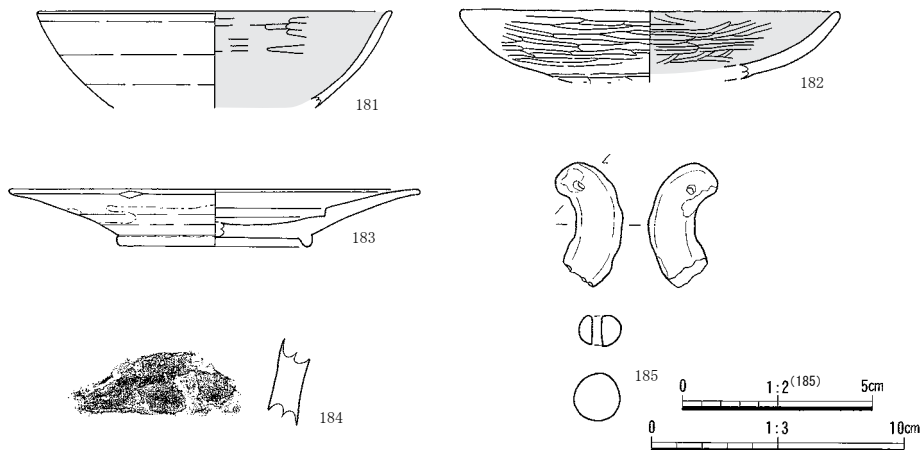
ある I 層を除去後の IV 層上面で行った。重複は NSI05 とであり、本遺構の方が新しい。平面形は全容が不明のため正確ではないが、各辺が直線的な方形を呈すると推定される。規模は東西 7.1m、建物方位は、北辺を基準とすると、N-85°-E である。

床面は、調査した範囲ではほぼ平坦であり、深さは確認面から 10cm 程度と浅い。大部分が削平されていることがわかる。床面には、壁面に沿って壁溝が構築されている。規模は、幅が 20cm 程度、深さが 10cm 程である。掘方は全体的に 10~20cm 深く掘られており、貼床で充填されている。また、貼床の下部には NSI05 の掘方が存在する。堆積土は 1 層のみ残存し、黒色を呈するシルトが主体である。

付属施設には、調査区内においては、ピットが 12 個あるのみでカマドは確認できない。P 1・P 2 は土坑状の遺構で、床面の北東隅に位置する。平面形はいびつな楕円形状を呈し、規模は、P 1 が 70×40cm、P 2 が 70×60cm であり、深さはいずれも床面から 20cm 程である。P 3・6・7・12 は、壁溝



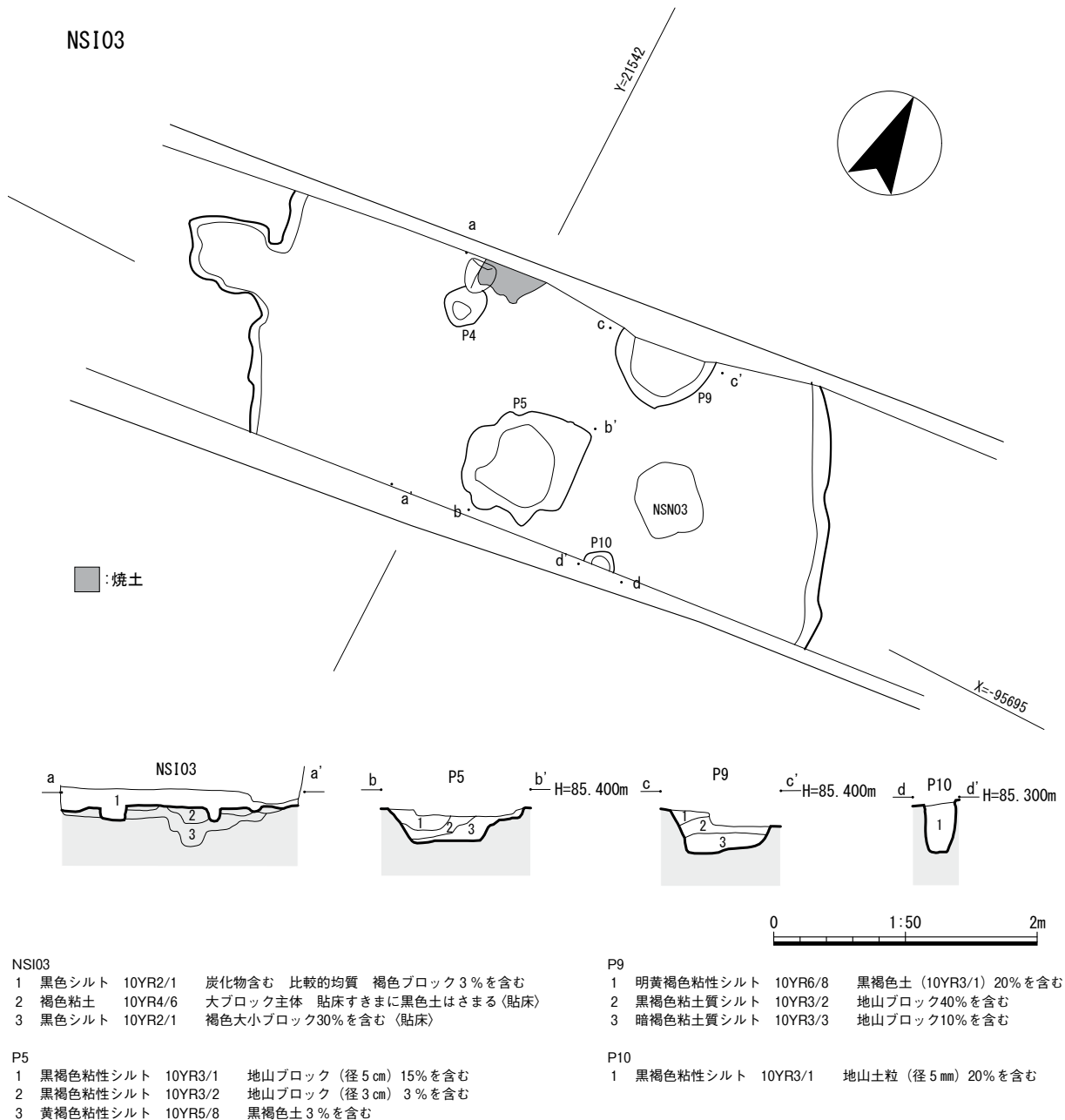
第113図 NSI02 竪穴建物跡 2 (掘方)



第114図 NSI02 出土遺物

上に位置している。平面形はいずれも円形から楕円形状を呈し、径が10~20cmである。P 4・5・8~11・13は、床面状に位置する。いずれも円形を基調とする平面形で、規模は径が15~20cmと小型である。

遺物は堆積土を中心に3.14kg出土している。そのうち図示したのは5点である。181・182は土師器杯である。181は外面にロクロ調整、内面にはミガキ、黒色処理が施される。182は内面にミガキ、黒色処理が施されている非ロクロ調整の杯である。いずれも堆積土からの出土である。183は灰釉陶器の皿である。低い高台を有し、内外面ともに高台裏以外施釉される。壁溝からの出土である。184は常滑産の甕片で、堆積土最上層からの出土である。185は土製勾玉である。尾部先端が欠損している。



第115図 NSI03竪穴建物跡 1

遺構の時期は、異なる時期の遺物が混ざっているが、建物跡の構造や方位、壁溝出土の灰釉陶器から判断して、漆町Ⅳ期に位置づけた。

### NSI03 (第115～117図)

N区中央部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の中央部分のみを調査したが、南北の一部は調査区外にあるため、完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複はNSL03とであり、本遺構の方が古い。平面形は、全容が不明のため正確ではないが、各辺がやや膨らんだ方形を呈すると推定される。規模は東西間で4.4mである。建物方位は、東辺で計測するとN-25°-Wである。西辺の一部が半円状に張り出すが、重複関係にあるかは確認できなかった。

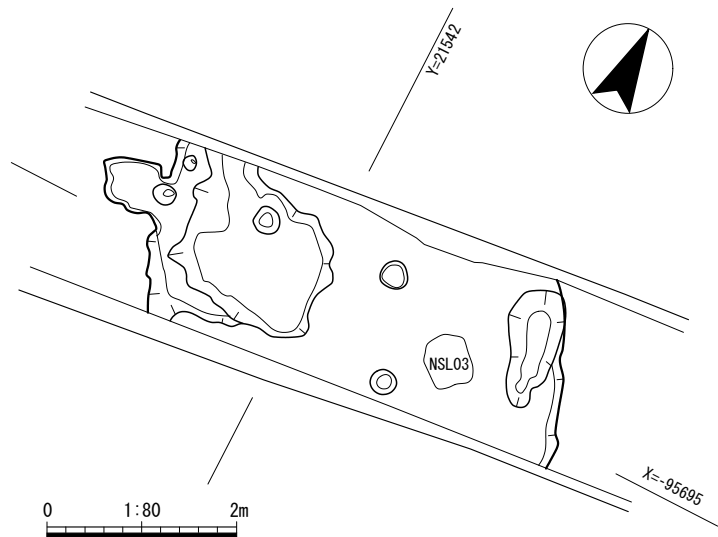
床面は、全容不明であるが、調査した範囲ではほぼ平坦であり、深さは確認面から10cm程度である。床面には、掘方は壁際周辺を中央よりも深く掘削するもので、床面から10～30cmの深さに貼床が施されている。堆積土は1層のみ残存し、黒色を呈するシルト層である。

付属施設には、土坑2基、ピット2個があり、カマド燃焼部と想定される焼土の一部が北側調査区境に確認している。P5は床面中央部にあり、平面形はいびつな楕円形状を呈し、径が1.1m×0.9m、深さが30cmである。P9は、約半分のみを確認し、残りは北側調査区外にある。平面形は、円形を呈すると想定される。調査区内における規模は、径75cm、深さ30cmである。P4・10は、ピット（小穴）であり、いずれも平面形は円形を呈し、径は20～30cm程度である。焼土の一部は、床面北側に長さ20cm、幅50cmで広がっており、大部分が北側調査区外に位置する。また、その位置や円礫の存在から北側にカマドの存在が予想される。

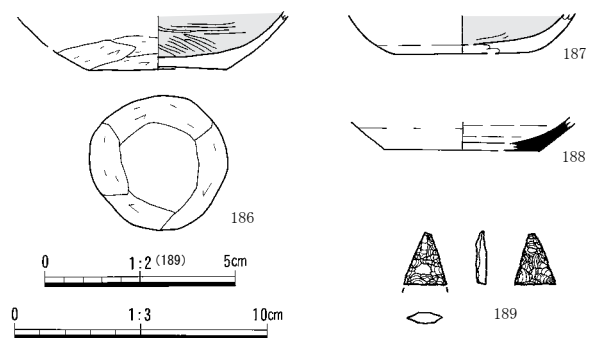
遺物は、堆積土を中心に1.03kg出土している。削平が多く及んだ遺構であるため、遺物は少ない。186・187は土師器杯であり、186の底部には回転糸切り痕や再調整のヘラケズリ痕が残る。いずれも内面には黒色処理が施される。188は須恵器杯の底部片である。189は石鏃であるが、付近からの混入と考えられる。時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

### NSI04 (第118～120図)

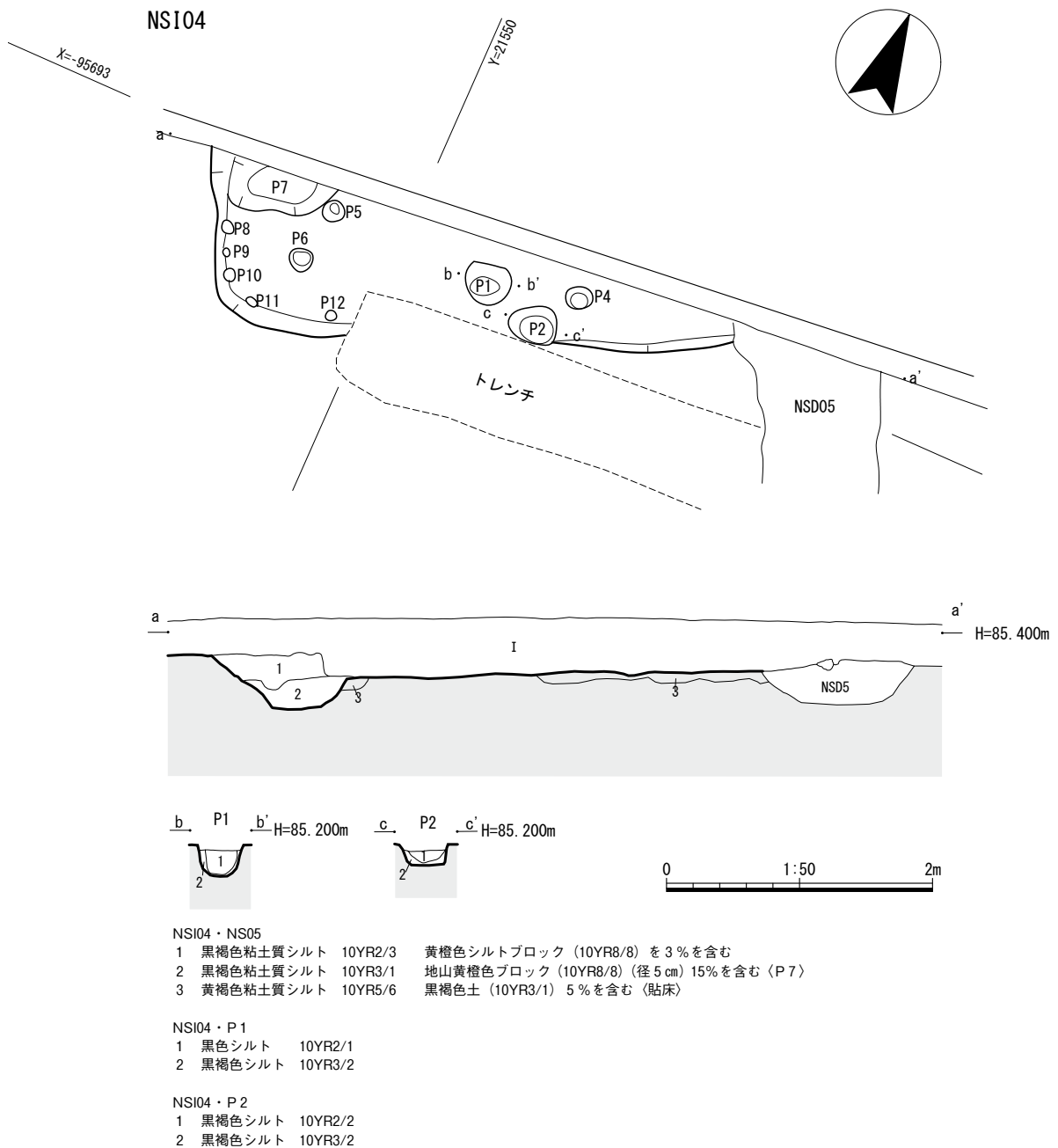
N区中央部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したが、北側の大部分は調査区



第116図 NSI03竪穴建物跡2 (掘方)



第117図 NSI03出土遺物



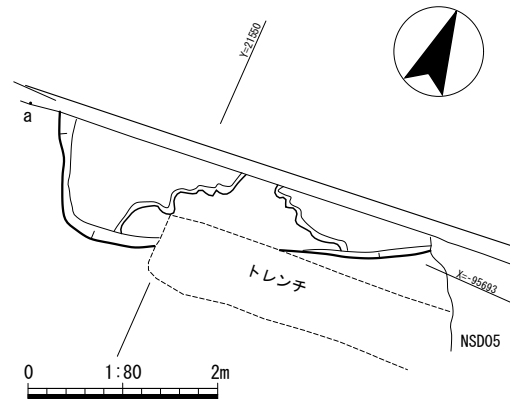
第118図 NSI04竪穴建物跡 1

外にあるため、完掘は行っていない。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。重複はNSD05とであり、本遺構の方が古い。平面形は、全容が不明のため正確ではないが、南辺の形状から方形を呈すると推定される。規模は、相対する辺を確認していないことから不明である。調査区内における残存範囲は、南壁で3.9m、西壁で1.2mである。建物方位は、南辺を基準とするとN-22°-Wである。床面は、全容不明であるが、調査した範囲ではほぼ平坦であり、深さは確認面から10cm程度である。大部分がI層により削平されている。床面には、掘方は南壁際以外を深く掘削するもので、床面から10cmの厚さで貼床が施されている。堆積土は1層の一部のみ残存し、黒褐色を呈する粘土質シルト層である。

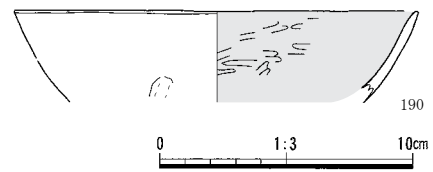
付属施設には、土坑1基、ピット10個がある。P7は西壁に接して位置しており、一部が調査区外にある。平面形は、楕円形状を呈すると予想され、規模は長径が80cm、深さが床面から20cmである。P8～12は、径が10cm程度の小ピットで、壁に沿って位置している。P1・2・4～6は、床面に位置し、楕円形から円形を呈する平面形で、規模は、径が15cmと35cmの2者がある。

遺物は堆積土を中心にわずかに(61g)出土している。図示したのは1点のみで、190は土師器非ロクロの杯片である。磨滅が激しいが、内面にわずかにミガキの痕跡が残る。また内面には黒色処理が施されている。

時期は、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。



第119図 NSI04竪穴建物跡2(掘方)



第120図 NSI04出土遺物

#### NSI05 (第121・122図)

N区西部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の北側一部の掘方のみを調査したが、南側の大部分は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内では、NSI02と上下に重複しており、本遺構の方が古い。平面形は、全容が不明のため正確ではないが、北東隅の形状から方形を呈すると推定される。規模は相対する辺が確認できないことから不明である。北東辺を基準とするとN-64°-Wである。床面は、NSI02によって削平されており、貼床の一部のみ残存しているため、不明である。貼床の残存はNSI02の掘方底面から10cm程度である。貼床は細かくみて3層があり、黒褐色や黄褐色を呈する粘土質シルト層が主体である。

付属施設には、カマド煙道がある。煙道の先端部と煙出し孔を確認しているが、大部分は調査区外にある。調査区内における規模は、煙道の長さが40cm、煙出し孔の径が30cmである。堆積土は1層のみ残存し、黒色を呈する粘土質シルトである。

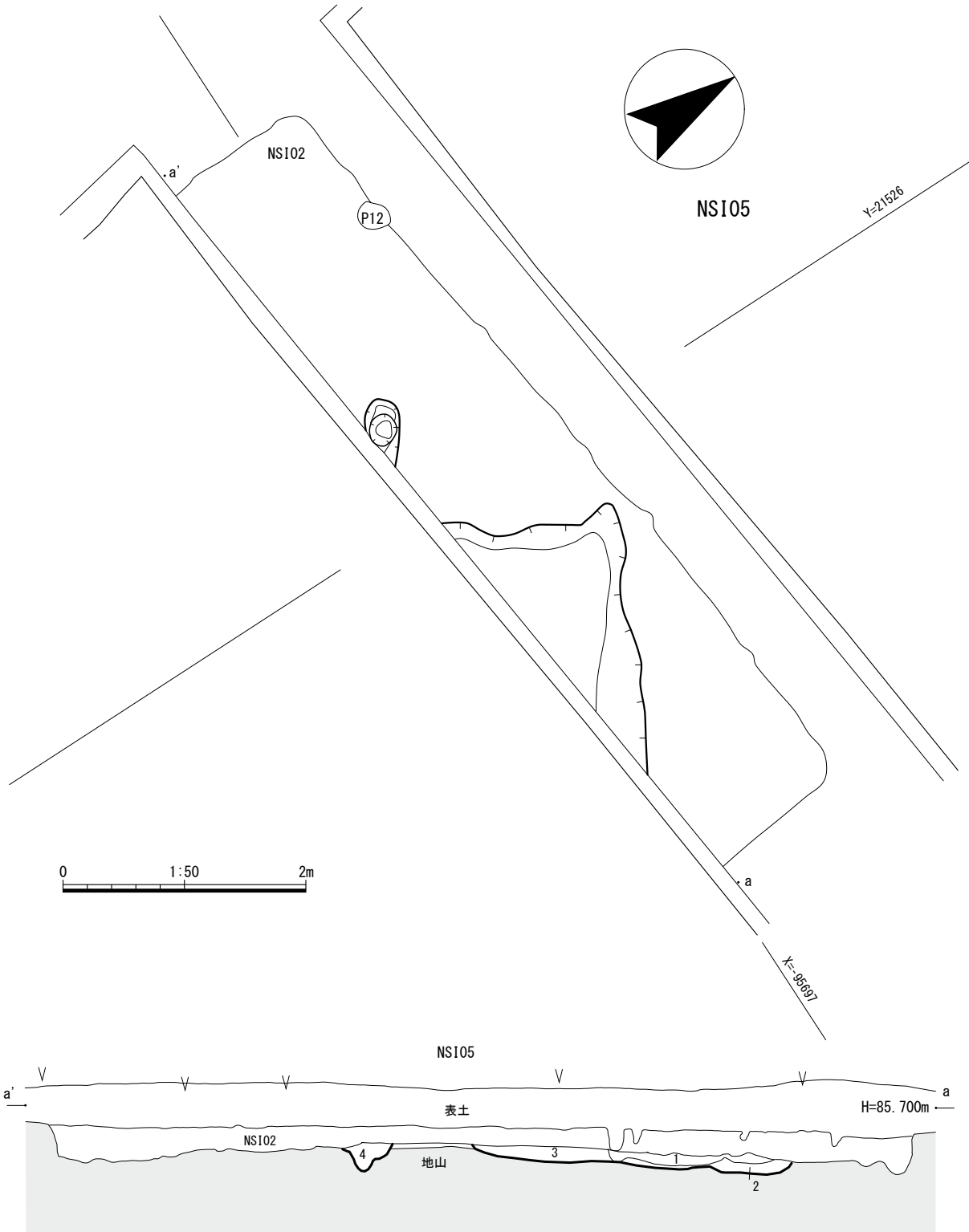
遺物は堆積土を中心に126g出土した。細片が多く図示可能な遺物は混入の石器1点のみである。細片の中にはロクロ杯や非ロクロ甕などがあるが、上部にあるNSI02からの混入の可能性もある。191は頁岩製のスクレイパーである。

時期は遺物からは不明であるが、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

#### OSI01 (第123図)

O区北部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したに過ぎず、東側の大部分は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行ったが、検出はほぼ床面から掘方にかけてであり、I層により大部分が削平されていた。OP062と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は、全容が不明のため正確ではないが、各辺が膨らんだ方形を呈すると推定される。規模は相対する辺が確認できないことから不明であるが、カマド煙道の位置が辺の中央と想定すると、6.6m程になる。建物方位はN-48°-Wである。床面は、I層によって削平さ





NSI05

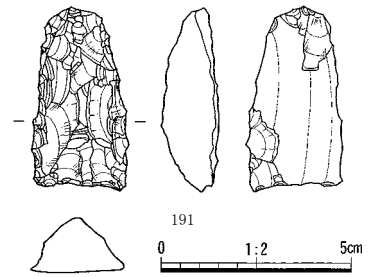
- |                     |   |
|---------------------|---|
| 1 黒褐色粘性シルト 10YR3/2  | 地山土粒明黄褐色 (10YR6/6) (径 5 mm) 30% を含む   |
| 2 黄褐色粘性シルト 10YR5/6  | 黒褐色土 (10YR3/2) 20% を含む  |
| 3 明黄褐色粘性シルト 10YR6/8 | 黒褐色土ブロック (10YR3/2) (径 5 ~ 10cm) 20% を含む   |
| 4 黒色粘性シルト 10YR1.7/1 | 明黄褐色 (10YR6/8) (径 1 ~ 5 mm) 5 % 炭化物粒 (径 1 ~ 5 mm) 3 %、焼土粒極暗褐色 (5YR2/3) (径 1 mm) 1 % を含む (カマド煙道) |

第121図 NSI05竪穴建物跡

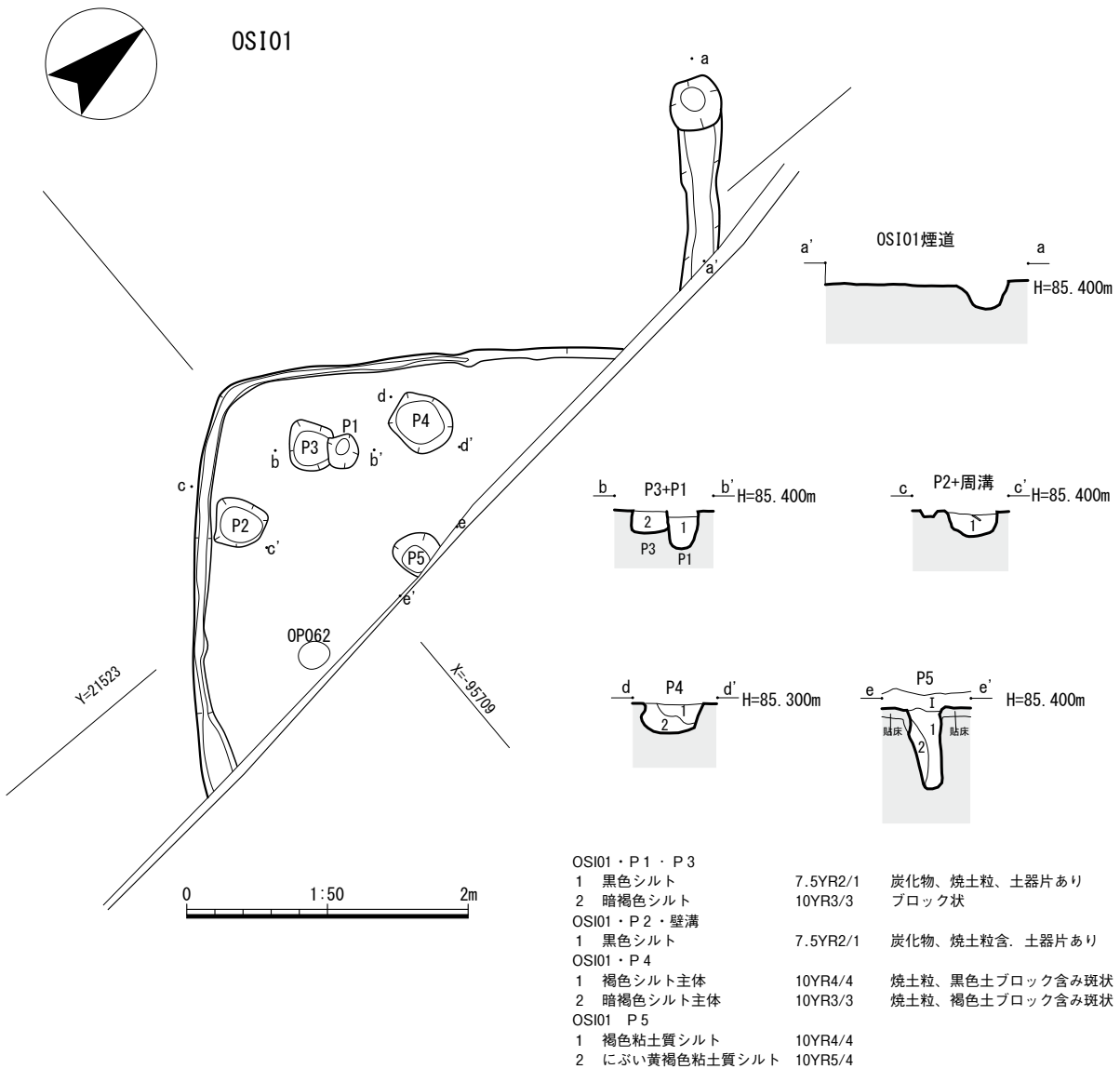
れており、床面から貼床の一部のみ残存しているため、不明である。壁面にはまた、壁溝の痕跡がわずかに残っている。

付属施設には、カマドの一部、ピット5個がある。カマドは煙道の先端部と煙出し孔を確認しているが、大部分は調査区外にある。調査区内における規模は、煙道の長さが1.4m、煙出し孔の径が40cmである。P1～5は、いずれも床面にあり、平面形は楕円形状を呈し、規模は径が30～40cm、深さが10～60cmである。P5のみが深く、柱痕跡が残る。

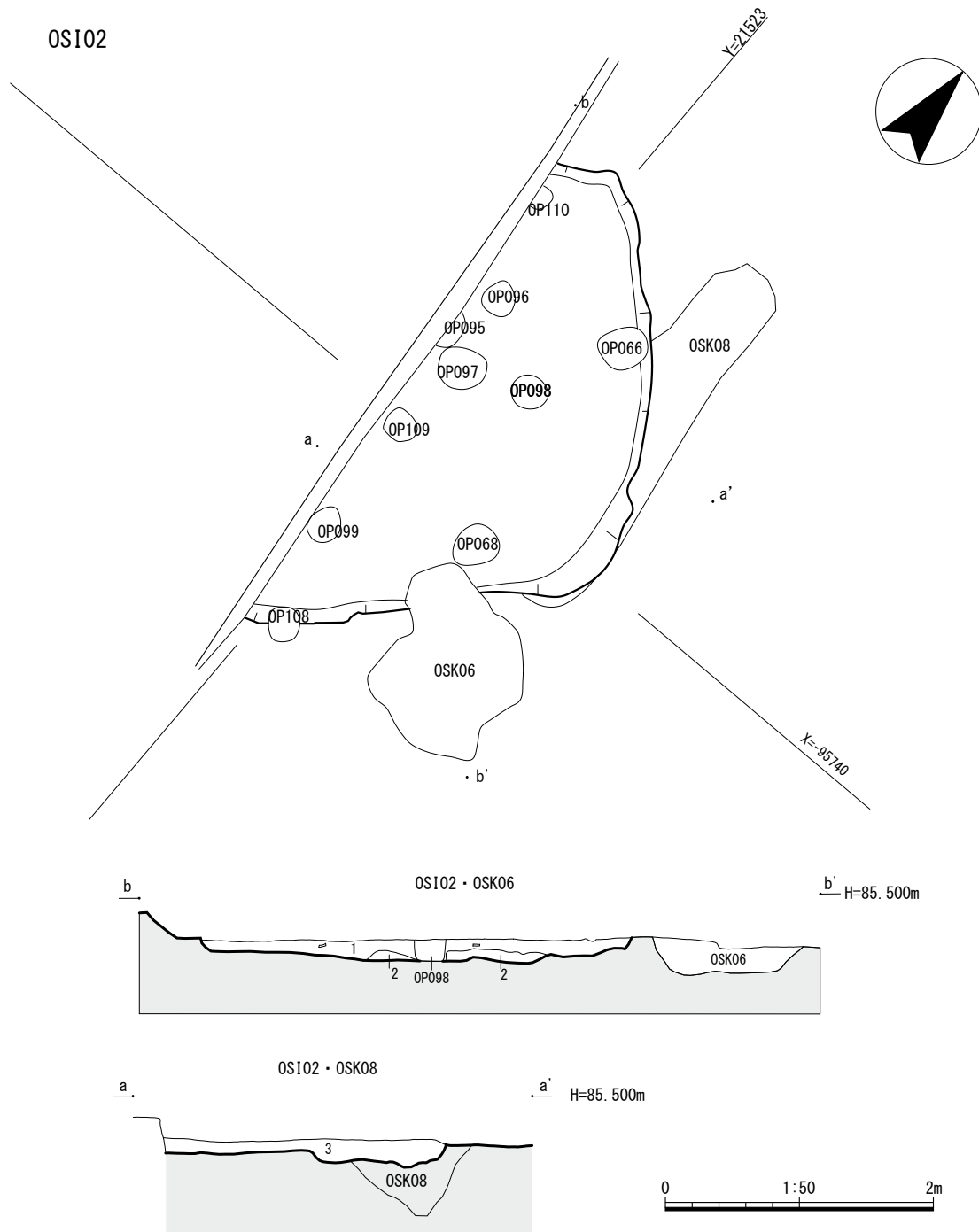
遺物は堆積土を中心に618g出土した。いずれも細片が多く図示可能な遺物はないが、非ロクロ杯や非ロクロ甕の破片が出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。



第122図 NSI05出土遺物



第123図 OSI01竪穴建物跡



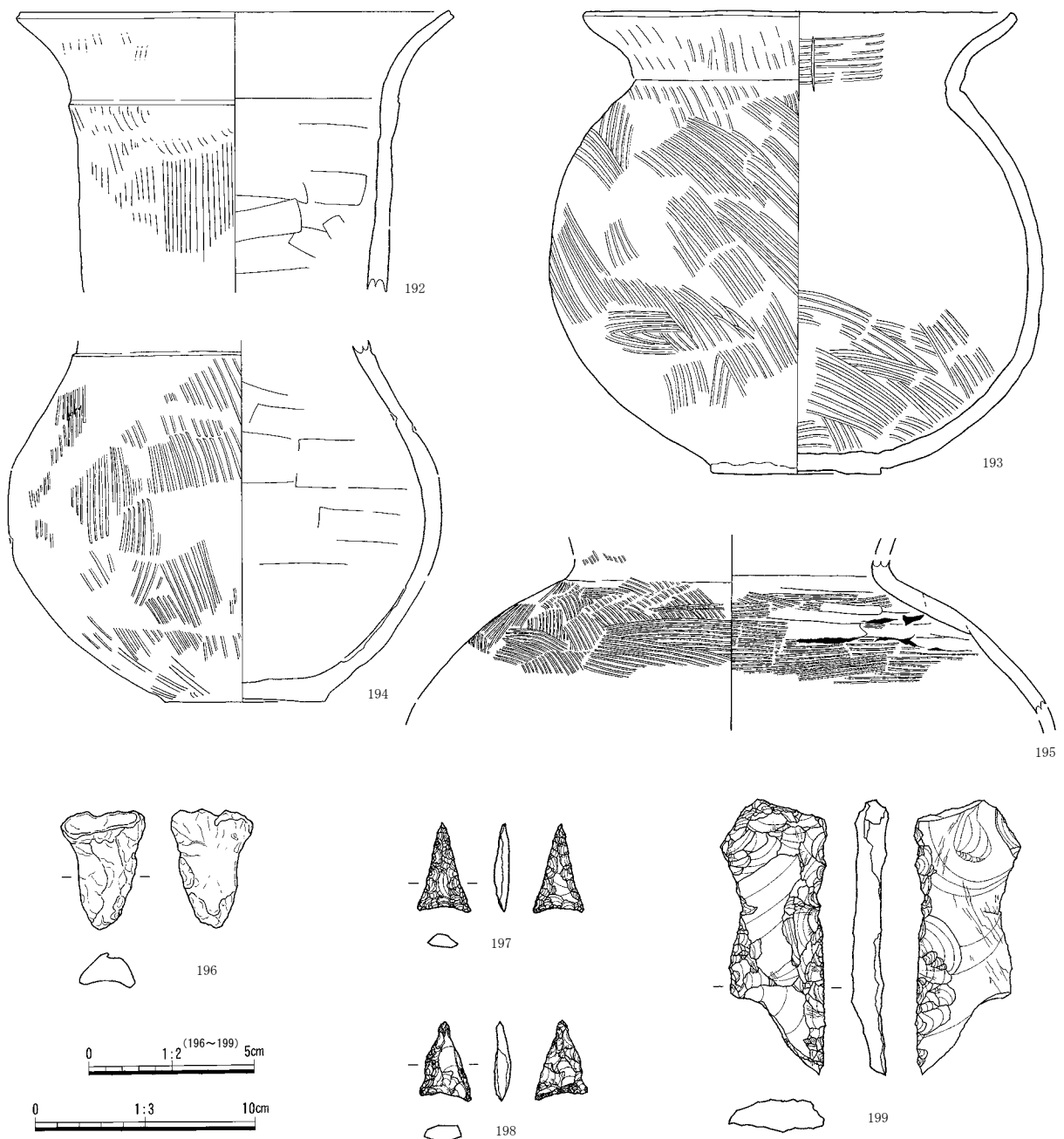
- OSI02
- |   |        |         |               |
|---|--------|---------|---------------|
| 1 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 |               |
| 2 | 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 褐色土ブロック30%を含む |
| 3 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 褐色土粒3~5%を含む   |

第124図 OSI02竪穴建物跡

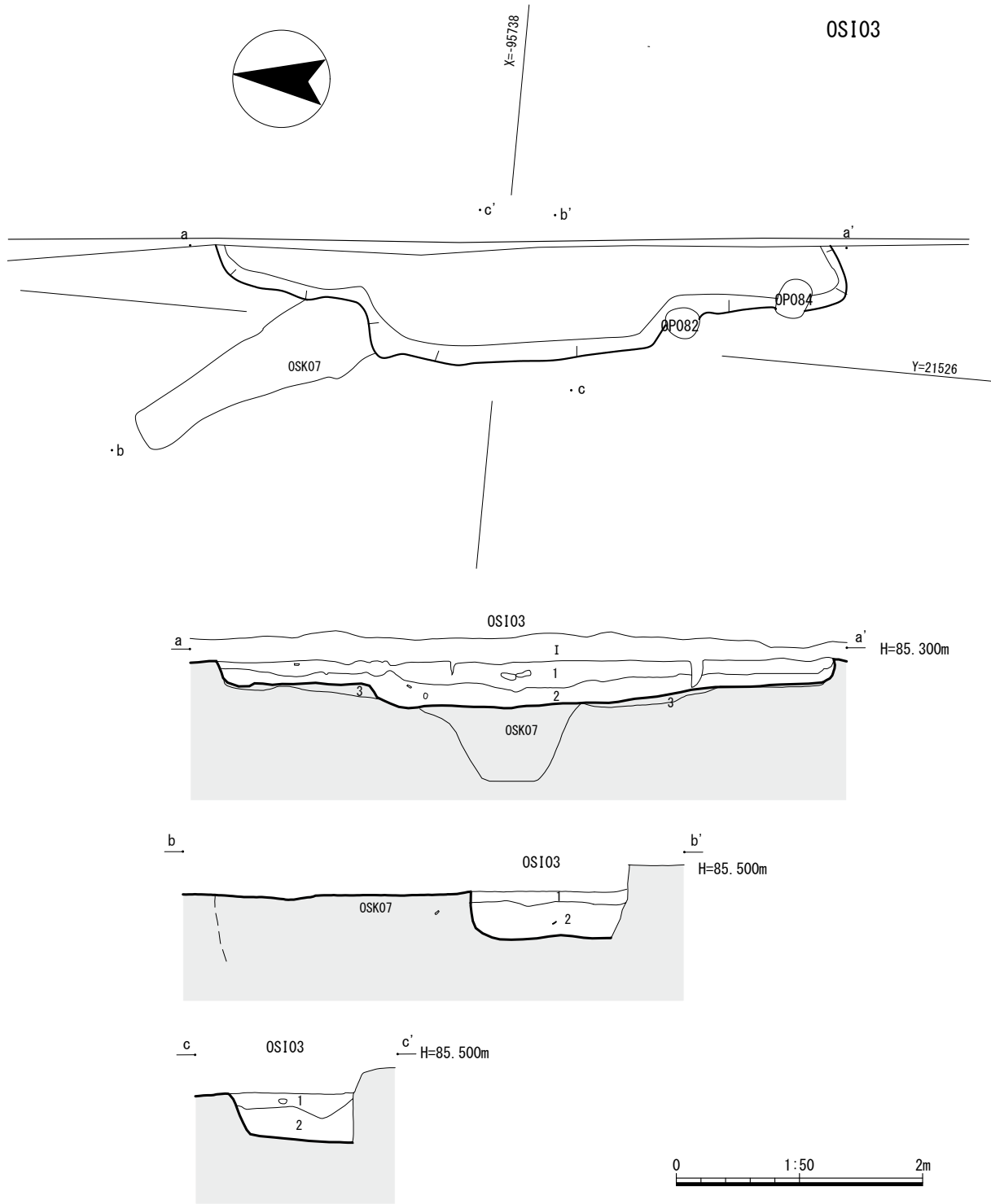
OSI02 (第124・125図)

○区中央部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したが、西側の大部分は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内では、OSK06・08、OSB02・03と重複しており、切り合い関係からみると、本遺構はOSK08よりは新しく、OSK06・OSB02・03よりは古い遺構となる。平面形は、全容が不明のため正確ではないが、各辺が膨らんだ方形を呈すると推定される。規模は南北間が3.2mであることから、小型の建物跡といえる。建物方位は、東辺を基準とするとN-36°-Wである。床面は、ほぼ平坦に構築されているが、貼床は確認されない。堆積土には2つの層があり、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。付属施設は調査区内では確認できない。

遺物は堆積土を中心に4.11kg出土した。土師器が多いが、須恵器や混入と考えられる石器もある。



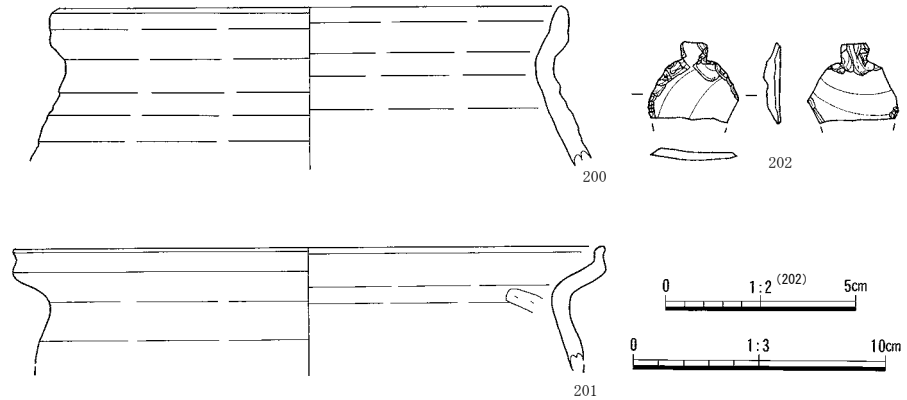
第125図 OSI02出土遺物



- OSI103
- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1 黒色シルト 10YR2/1     | 焼土粒 炭化物を含む      |
| 2 黒色シルト 7.5YR2/1    | 褐色ブロック5% 炭化物を含む |
| 3 褐色粘土質シルト 10YYR4/4 | (貼床)            |

第126図 OSI103竪穴建物跡

192は土師器甕で、非ロクロ調整であり底部を欠損している。193～195は土師器の球胴甕である。いずれも胴部が大きく膨らみ、貯蔵用と想定される土器である。193・194は、器高が20cm前後の小型品であるが、195は欠損が多いがその胴部径



第127図 OSI03出土遺物

から大型品に相当する。196は土製の脚部である。土器に付着する脚部あるいは把手かもしれない。197～199の石鏃やスクレイパーは周辺からの混入の可能性がある。土師器の球胴甕が多いが、細片にはロクロ杯や非ロクロ杯片、須恵器杯片などが出土している。時期は遺物や建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。

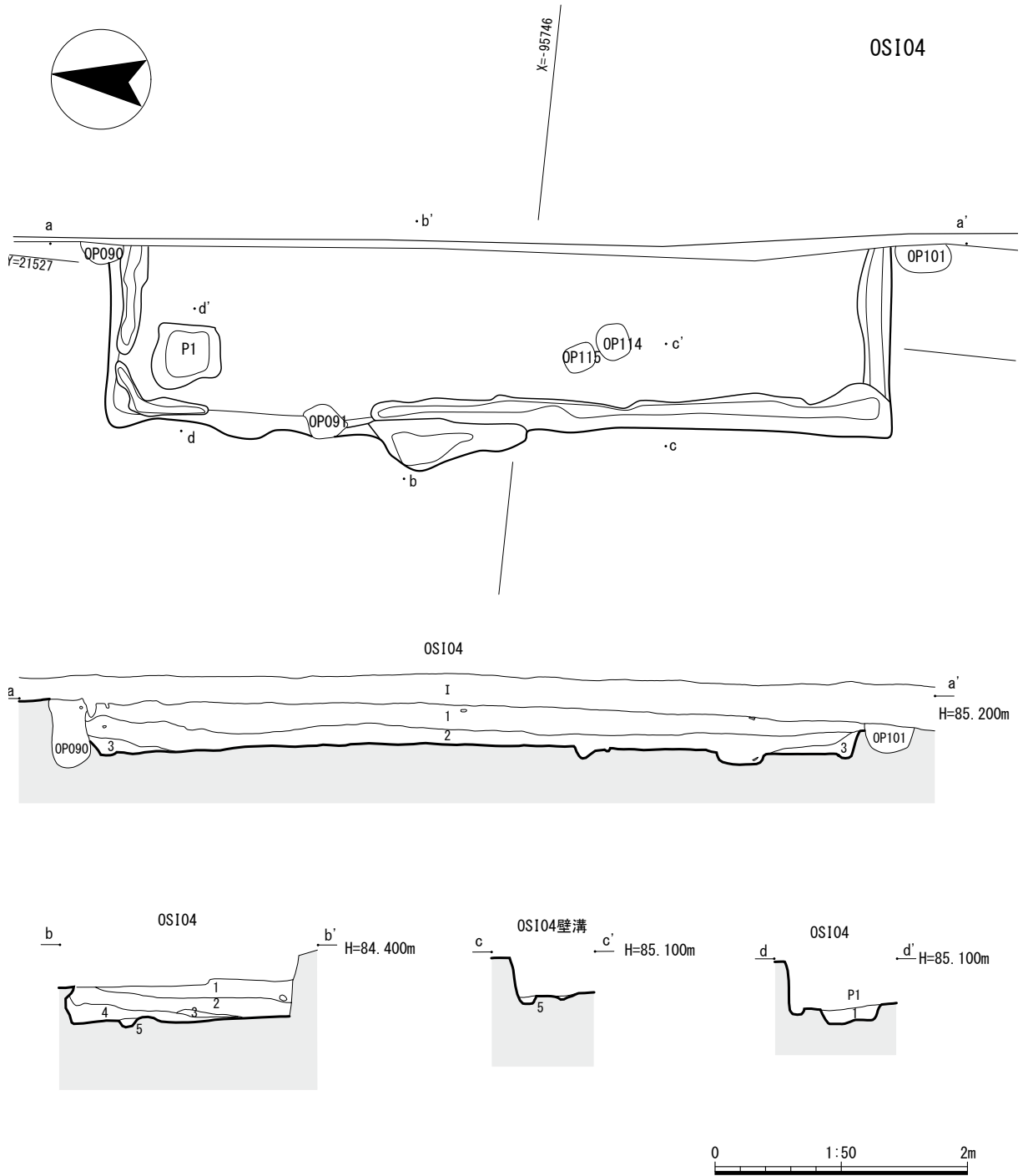
#### OSI03 (第126・127図)

○区中央部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したが、東側の大部分は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内では、OSK07やOSB06・OP082・084と重複している。本遺構は、切り合い関係からみると、OSK07よりは新しく、OP082・084よりは古い遺構である。OSB06とは直接切り合いがないため不明である。平面形は、調査した範囲が狭いため不明である。西辺の一部にはわずかな張り出しがある。規模は南北間でみると、5.1mである。建物方位は、西辺を基準とするとN-84°-Eである。床面は、ほぼ平坦ではあるが、北側一段高くなっている。貼床は全体的に施されるが、中央付近はやや厚い。堆積土は2つの層があり、いずれも黒色を呈するシルト層である。

付属施設は、調査区内では確認できない。遺物は堆積土を中心に2.13kg出土した。細片が多く図示したのは3点である。200・201は土師器のロクロ調整の甕である。いずれも口縁部から胴部上位にかけての破片であるが、口縁部の形態が異なっている。202は混入した石器である石匙であり、先端は欠損している。そのほか、ロクロ・非ロクロ調整の杯や須恵器甕片などが出土している。時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

#### OSI04 (第128・129図)

○区南部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したが、東側の大部分は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内では、OP090・091・114・115と重複し、切り合い関係からみると、本遺構はこれらよりも古い。平面形は、調査した範囲が狭いが、各辺が直線的な方形を呈すると推定される。また、西辺の一部にはわずかな張り出しがある。規模は南北間でみると、6.2mである。建物方位は、西辺を基準とするとN-85°-Eである。床面は、ほぼ平坦ではあるが、北側に向かってわずかに傾斜している。壁際には、壁溝が巡る。壁溝の幅は20cm、深さは10cm未満である。貼床は全体的に施されるが、厚さは確認していない。堆積土は5つの層があり、黒色から黒褐色シルトが主体である。付属施設には、



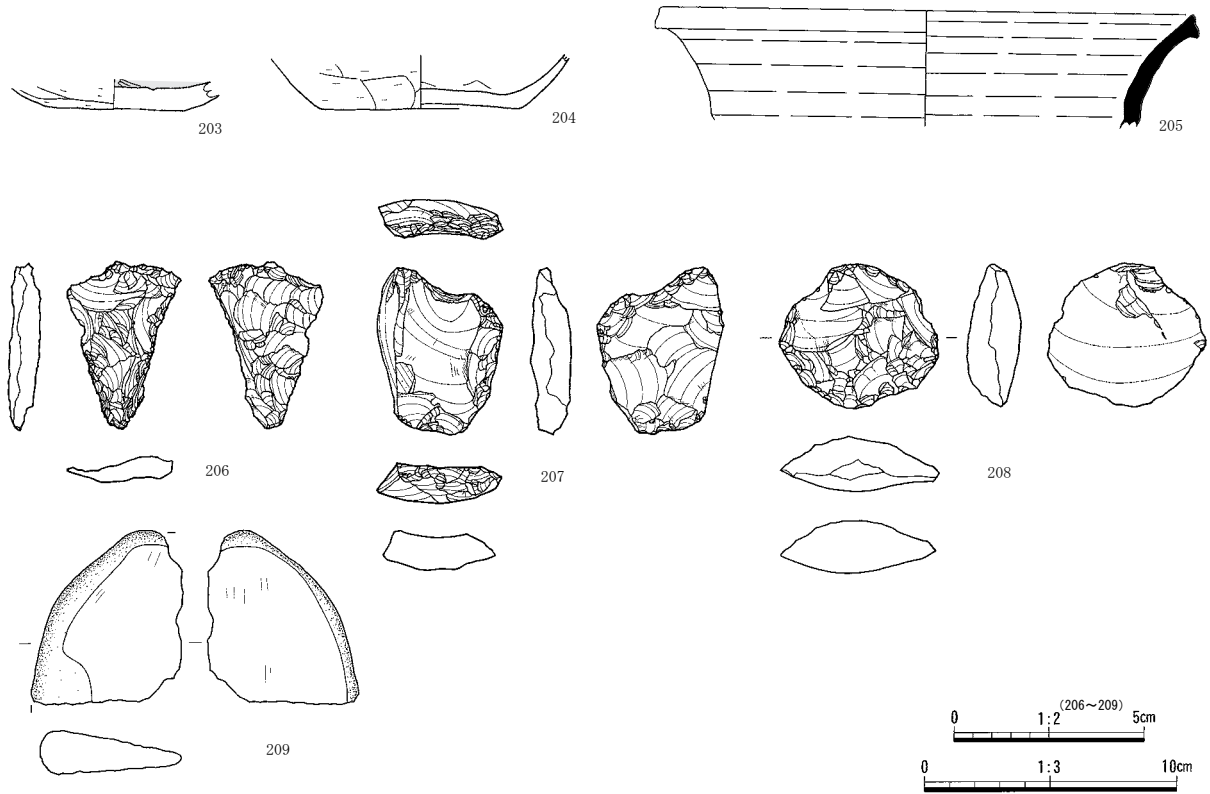
OS104

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1 黒色シルト 7.5YR2/1    | 均質褐色土粒 3%を含む        |
| 2 黒褐色シルト 10YR2/2    | 褐色土粒10%を含む          |
| 3 褐色土ブロック集中 10YR4/4 | 2層に含まれる             |
| 4 黒色シルト 7.5YR2/1    | 褐色土粒 3% (遺物取りあげ 3層) |
| 5 黒色シルト 7.5YR2/1    | 褐色土粒 5%を含む          |

OS104 P1

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| 1 黒褐色シルト 10YR2/2 | 褐色土ブロック20%を含む |
|------------------|---------------|

第128図 OS104竪穴建物跡



第129図 OSI04出土遺物

床面に土坑1基がある。平面形はややゆがむ方形を呈し、一辺が約50cmである。

遺物は堆積土を中心に1.63kg出土した。細片が多く図示したのは7点である。203・204は土師器杯でいずれも底部片である。203の底部はヘラケズリが施される。205は須恵器甕の口縁部片である。口径からみると大型品であろう。206～209は混入したと考えられる石器で、スクレイパーや磨石である。O区付近では、石器の混入が多く、付近に縄文時代の遺構もわずかに存在することから、これらも縄文時代に帰属する遺物と考えている。時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

#### QSI01 (第130～134図)

Q区北端部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡の北東隅からカマド付近、南辺の一部のみを調査したに過ぎず、残りの北西隅、南東隅、南西隅付近は調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI層除去後の削平されたIV層で行っている。他遺構との重複は調査区内においては確認できない。

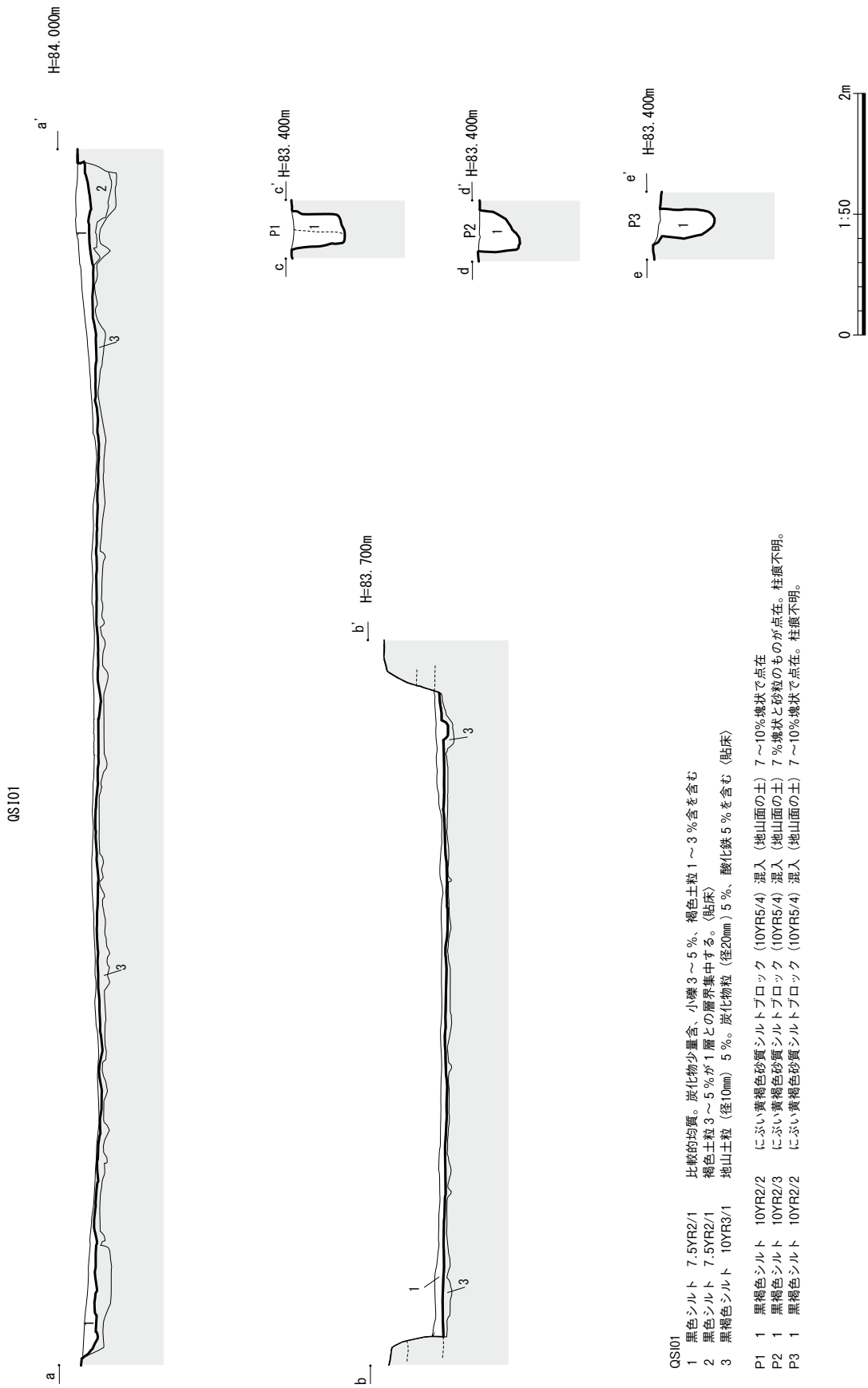
平面形は調査区内の形状から判断すると、およそ方形を呈し、北辺にカマドが設置される。南辺の中央部はわずかに外側(南側)に広がっている。規模は、南北が9.8m～10m、東西は不明であるが、カマドが北辺の中央にあると仮定すればおよそ9.6mとなる。約10m四方の大型竪穴建物である。床面までの深さは確認面から10cmと浅く、大部分が削平されている。床面は全体に、黒色～黒褐色シルトと黄橙色シルト混合土で構成される。ほぼ平坦に構築されているが、後述の間仕切り溝より外側は若干高くなっている。

床面には東辺と南辺から約1m内側にいわゆる間仕切り溝が確認できる。東辺側は、長さ5mの南





第130図 QSI01竪穴建物跡 1

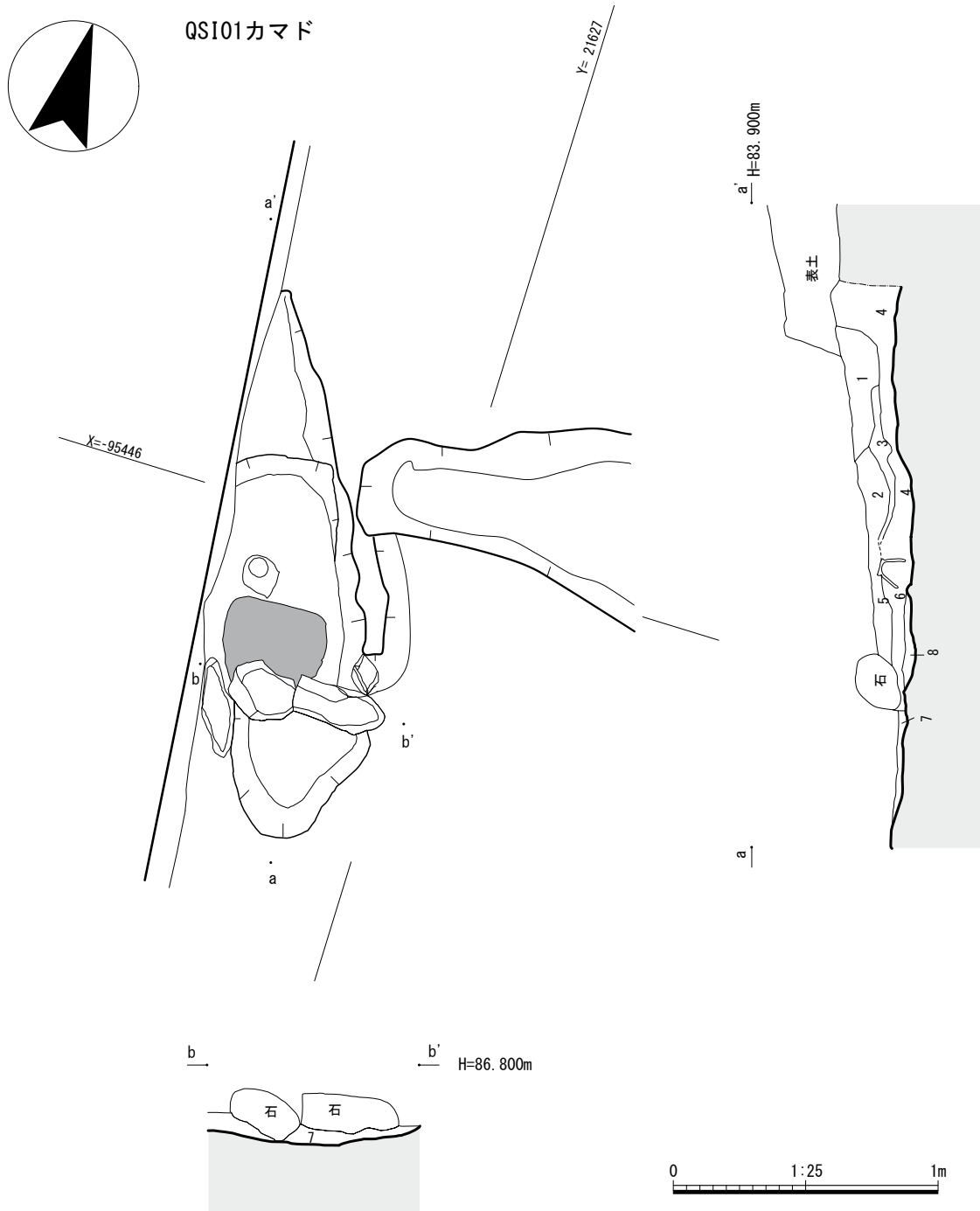


QSI01

- 1 黒色シルト 7.5YR2/1 比較的均質。炭化物少量含、小礫3~5%、褐色土粒1~3%含を含む
- 2 黒色シルト 7.5YR2/1 褐色土粒3~5%が1層との層着集中する。(貼床)
- 3 黒褐色シルト 10YR3/1 地山土粒(径10mm)5%。炭化物粒(径20mm)5%、酸化鉄5%を含む(貼床)

- P1 1 黒褐色シルト 10YR2/2 にぶい黄褐色砂質シルトブロック(10YR5/4)混入(地山面の土)7~10%塊状で点在
- P2 1 黒褐色シルト 10YR2/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック(10YR5/4)混入(地山面の土)7%塊状と砂粒のものが点在。柱痕不明。
- P3 1 黒褐色シルト 10YR2/2 にぶい黄褐色砂質シルトブロック(10YR5/4)混入(地山面の土)7~10%塊状で点在。柱痕不明。

第131図 QSI01竪穴建物跡2



QSI01カマド

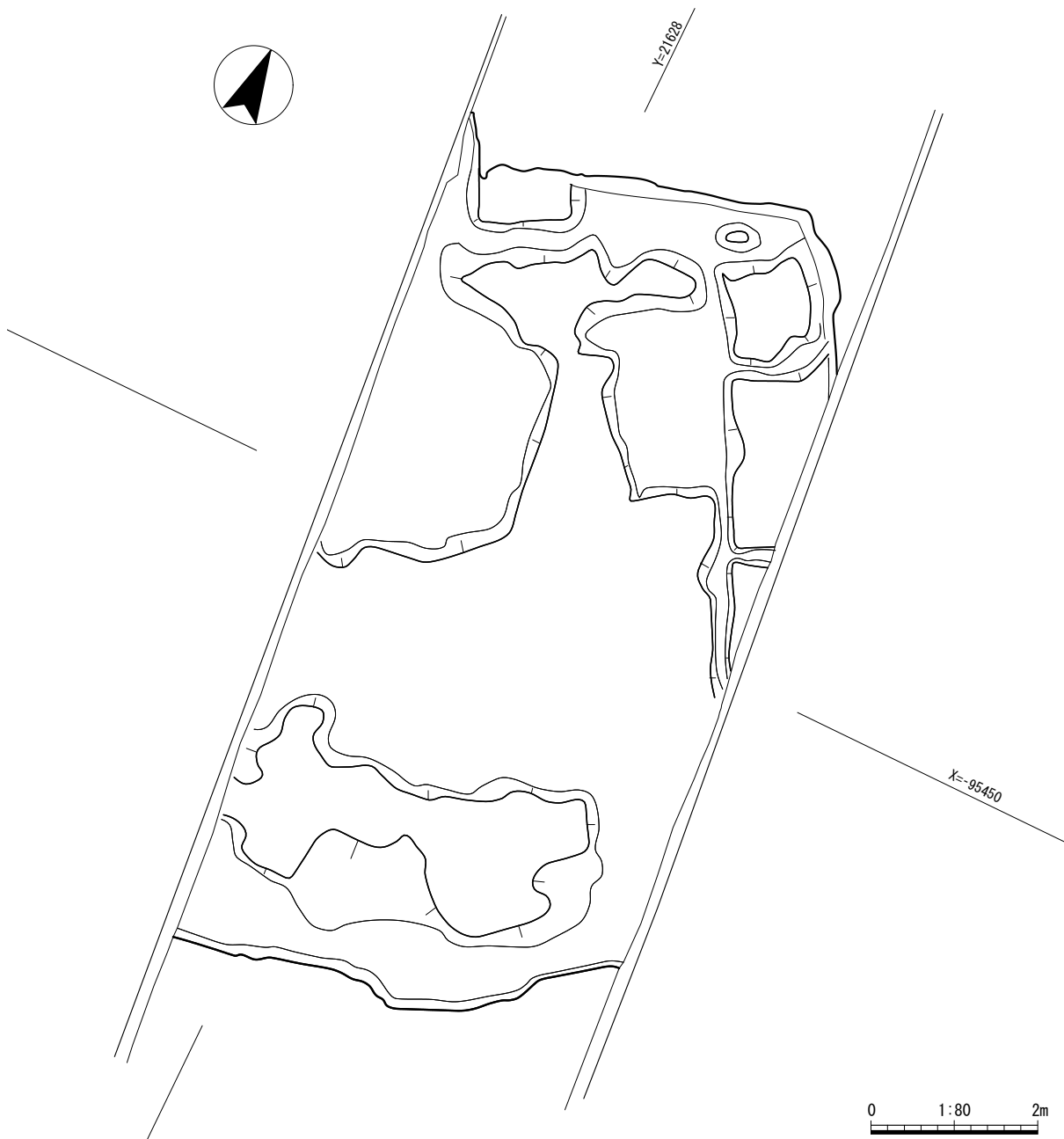
- 1 黒色シルト 10YR2/1
- 2 黒色シルト 10YR2/1
- 3 灰黄褐色粘土質シルト 10YR4/2
- 4 暗褐色粘土質シルト 7.5YR3/3
- 5 黒色シルト 10YR2/1
- 6 暗褐色粘土質シルト 7.5YR3/3
- 7 暗褐色粘土質シルト 7.5YR3/3
- 8 赤褐色シルト 5YR4/6

- 黄褐色土粒含20%を含む、天井部起源土のブロックと思われる。焼土なし
- 凹地の落ち込み埋土
- カマド天井部構成土ブロック
- 焼土ブロックを含む
- 凹地の落ち込み埋土
- 焼土ブロックを含む
- 焼土ブロックを含む
- 焼成面焼土、強変

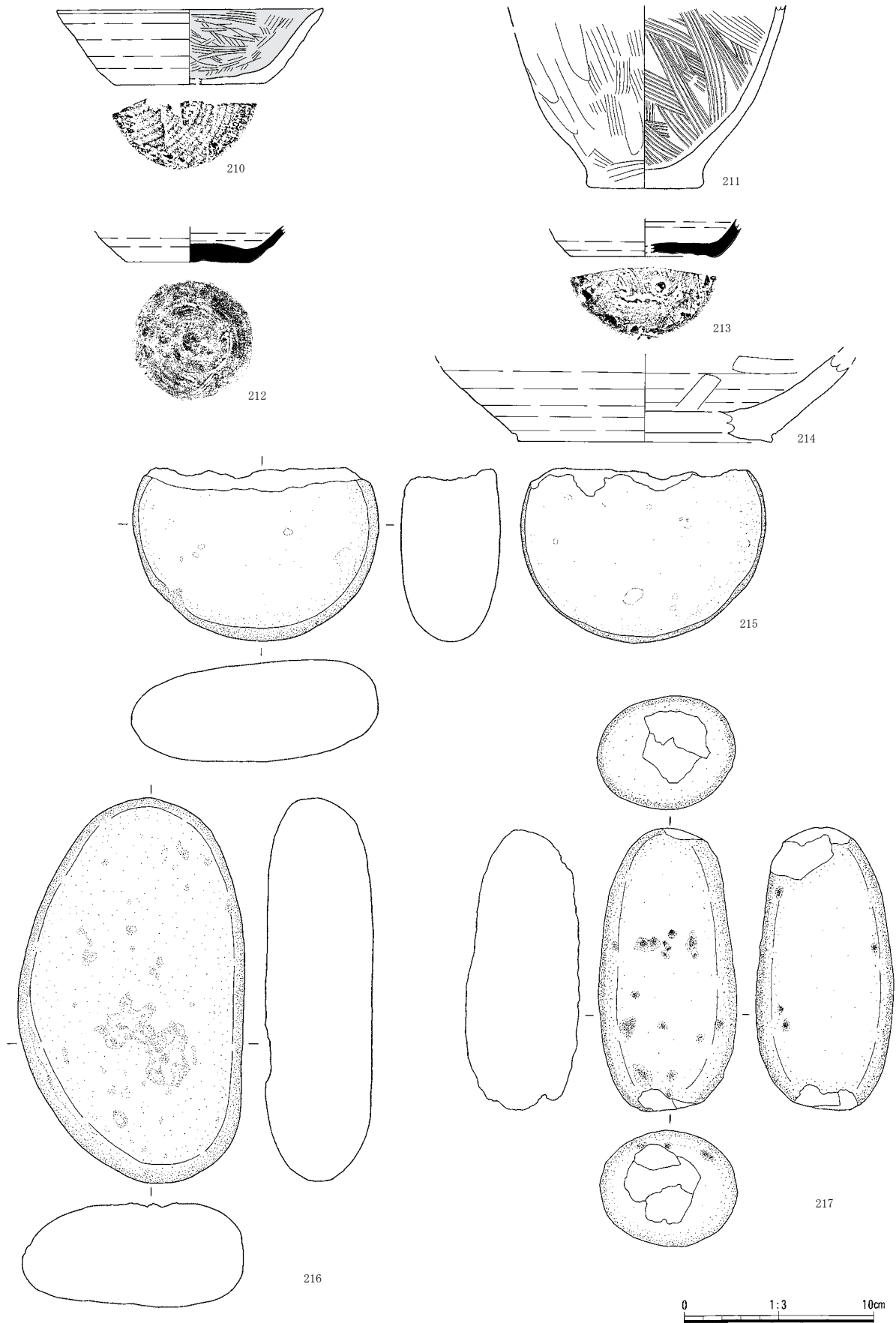
第132図 QSI01竪穴建物跡3 (カマド)

北方向の溝に、長さ1.2mの東西方向の溝が2条から構成される。南辺側は3条の東西方向の溝からなるが、これは本来1条の溝と想定される。北辺側は上述の2者よりも幅広（約1m）であり、形状も異なることから掘方の可能性がある。建物掘方は床面全体に施されているが、建物周辺部とカマド南側がより深く掘られており、その分貼床も厚く充填されている。建物方位は、南辺を基準とすれば、N -26° - Wであり、やや西に傾いている。堆積土は1層のみ確認できるが、非常に浅いため詳細は不明である。

建物跡に付属する施設には、カマドが北辺に1基、床面にピットが11基ある。カマドは、右袖、煙道の一部、燃焼部のみを調査しており、そのほかは調査区外に残存する。袖（カマド本体の下半部）は右のみを調査し、左袖は調査区外にあるため、両袖間の距離は不明である。右袖の長さは、北辺から54cmである。袖の高さは9cmで、黄橙色と黒褐色シルトで構成される。袖間には燃焼部がある。40



第133図 QSI01竪穴建物跡4（掘方）



第134図 QSI01出土遺物

cm×30cmの範囲に広がっている。燃焼部南端には長さ60cm、幅20cmの楕円形の円礫が位置し、一部が燃焼部の上に載っている。燃焼部の上に重なっているため、カマド天井部の補強材であった可能性がある。さらに燃焼部南側には、径60×50cmの不整形な楕円形を呈する土坑状の浅い落ち込みがある。カマド主軸はN-18°-Wであり、建物跡主軸とはやや異なっている。

床面に構築されたピット11基のうち、P1～P3はその位置から支柱穴と考えられる。P1からP3は南北方向に並んでおり、桁行方向と推定される。いずれの平面径も方形に近い楕円形状を呈し、径は40cm前後である。深さは床面から30～40cmである。P1の断面からは柱痕跡が確認できる。柱間寸法をみると、桁行はP1-P2、P2-P3間のいずれも2.1m等間と復元できる。梁行方向は対応する柱穴が調査区内に存在しないことから、桁行よりも広い可能性がある。P4～P6、P11は平面形や規模がP1～P3に類似しており、建て替えに伴うなど関連があるかもしれない。間仕切り溝付近に位置するP7～P10は径20～30cmと他のピットとは異なり、一回り小型である。

出土遺物は、5.74kg出土している。とくにカマド付近から多く出土する。これらのうち8点(4.54kg)を図化した。210は土師器の杯である。底径が大きく、体部が直線的に開く器形である。211は土師器甕の胴部下半から底部にかけての破片である。底径が小さく、内底面に平坦さはない。212・213は須恵器杯の底部片である。212の底部にはヘラ切り痕が残る。

これらの遺物や建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

#### QSI02 (第135図)

Q区北部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡の南東隅付近のみが位置し、大部分が調査区外に存在する。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI層除去後のⅢ層で行っている。調査区内においては他遺構との重複関係は確認できない。

平面形は調査区内における形状から判断すると、およそ方形を呈すると推定される。規模は、調査区内の状態からは判断できず詳細は不明である。残存値では、東辺が4.2m、南辺が1.9mである。床面までの深さは確認面から28cmであり、大部分が削平されている。床面の周囲には壁面に沿って壁溝構築されている。幅は20cm前後、深さは床面から8～10cmである。貼床は床面全体に施され、ほぼ平坦に構築されている。建物の掘方は部分調査のため不明であるが、最大で18cmの厚さがある。建物方位は、建物跡東辺を基準とすれば、N-36°-Wであり、やや大きく西に傾いている。

堆積土は3つの層が確認できる。いずれも黒色から黒褐色シルトであり、黄褐色砂質シルトブロックを含んでいる。基本的にいわゆるレンズ状堆積や三角堆積が観察できることから自然に埋没したと考えられる。

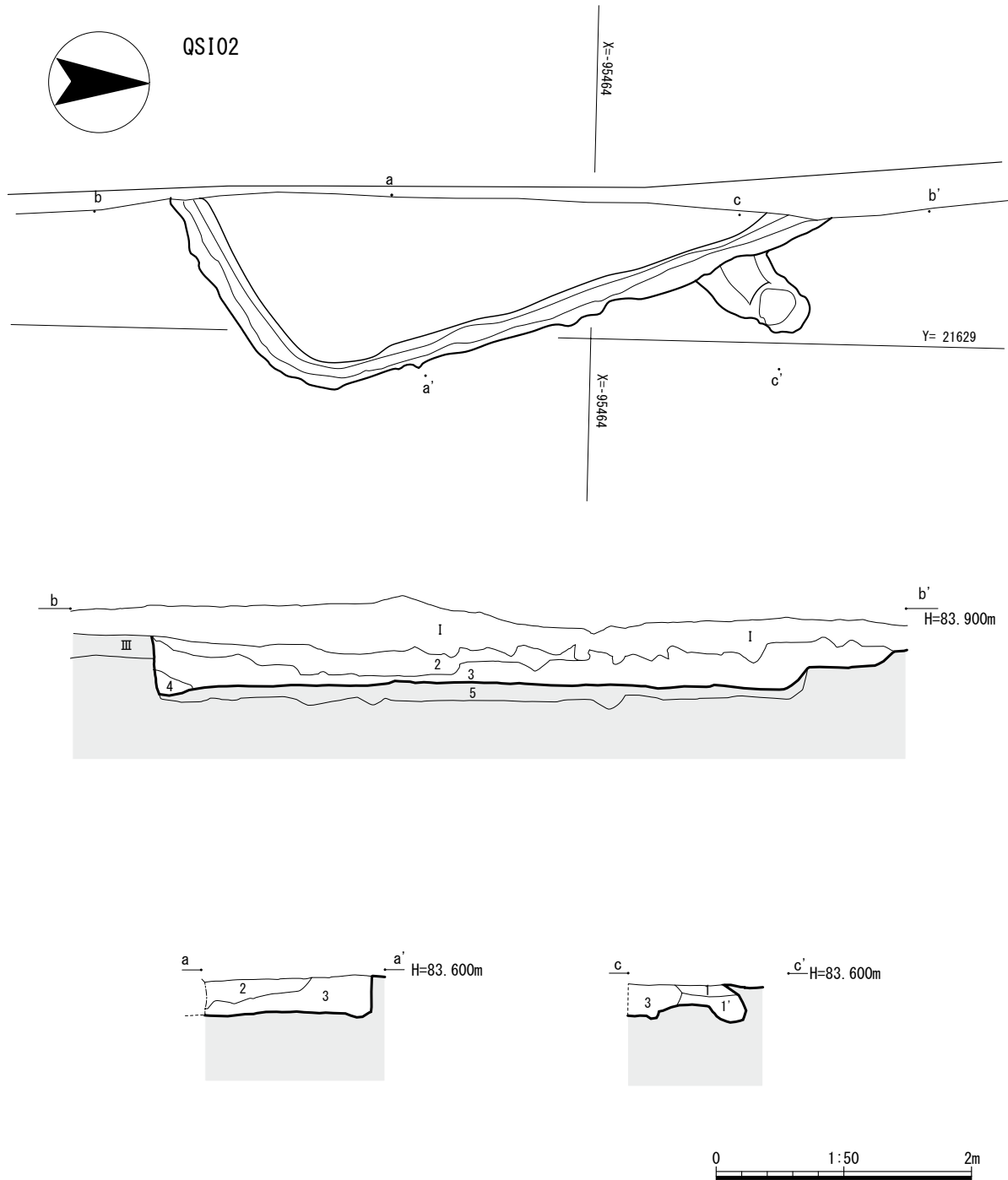
建物跡に付属する施設は、調査区内には存在しないが、東辺に煙道状の遺構がある。断面図をみると、建物跡堆積土よりも旧期の遺構である。形状から考えると、建て替え前の煙道や旧期の土坑の可能性もある。ここでは明確に煙道と判断する証拠がないため、旧期の土坑としておく。

出土遺物は、わずか161gのみ出土している。いずれも細片が多く図示可能な遺物はない。

時期は遺物からは不明であるが、建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。

#### RSX01 (第136図)

R区中央から西部に位置する竪穴建物跡と想定した遺構である。建物跡の南端部分のみを調査し、大部分は調査区外の北側に存在する。そのため、全容は不明であり、竪穴建物跡とは異なる遺構の可能性もある。検出は、現耕作土であるI層除去後のⅣ層面で行っている。他遺構との重複はない。平



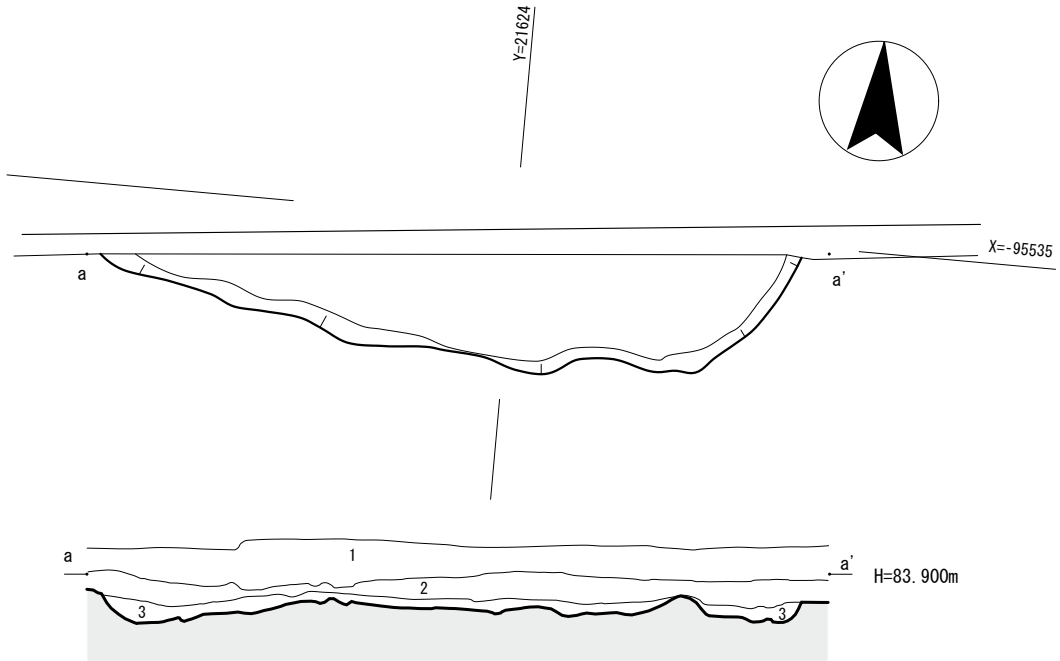
QSI02

- |    |                  |  |
|----|------------------|--|
| 1  | 黒色シルト 7.5YR2/1   | にぶい黄褐色砂質シルトブロック (10YR5/4) 混入 2% (地山面の土) 粒状で点在              |
| 1' | 黒色シルト 7.5YR2/1   | にぶい黄褐色砂質シルトブロック (10YR5/4) 混入 2% (地山面の土) 粒状で点在              |
| 2  | 黒色シルト 7.5YR2/1   | にぶい黄褐色砂質シルトブロック (10YR5/4) 混入 5~7% (地山面の土) 塊状のものと粒状のものが混在   |
| 3  | 黒褐色シルト 10YR3/2   | にぶい黄褐色砂質シルトブロック (10YR5/4) 混入 7~10% (地山面の土) 細かい粒状で点在        |
| 4  | 黒色シルト 7.5YR2/1   | にぶい黄褐色砂質シルトブロック (10YR5/4) 混入 3~5% (地山面の土) 細かい粒状で点在。住居の三角堆積 |
| 5  | 黄褐色砂質シルト 10YR5/6 | 黒色土ブロック状に含む (貼床)   |

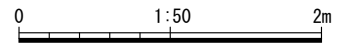
第135図 QSI02竪穴建物跡

3 遺構と遺物

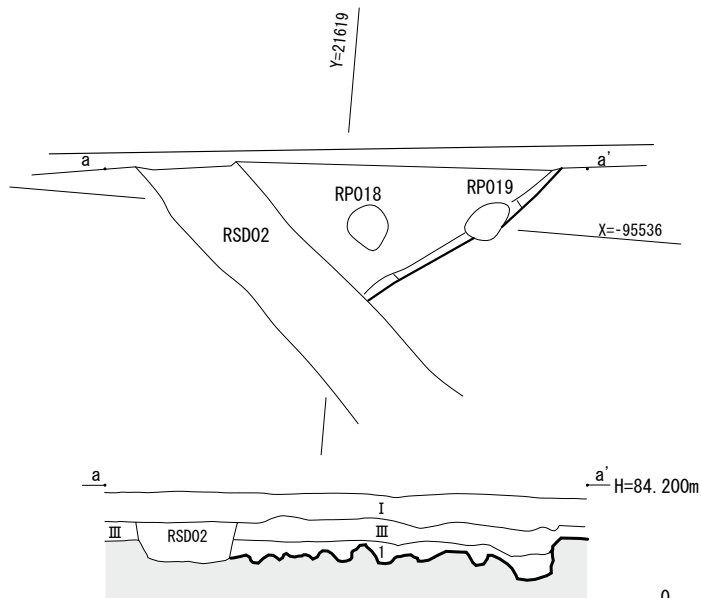
RSX01



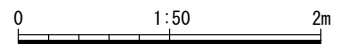
- RSX01  
 1 現表土  
 2 黒色シルト 10YR2/1  
 3 黒色シルト 7.5YR2/1 地上起源の褐色土ブロック30%を含む〈遺構埋土〉



RSX02



- RSX02断面  
 1 黒色シルト 7.5YR2/1 褐色土ブロック20%~30%を含む



第136図 RSX01・02竪穴建物跡



面形は、調査区内の形状だけでは判断つかないが、隅丸の方形を呈する可能性がある。規模は、相対する辺を確認できないことから不明であるが、調査区内での残存値は、南壁が4.0m、東壁が1.1mである。建物方位は南辺を基準とするとN-80°-Wである。床面までの深さは、確認面から10cmと浅い。床面の状況は、凹凸があり、平坦ではなく貼床も施されない。堆積土は1つの層のみであり、黒色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。

とくに床面の構造から居住用の建物とは考えにくい、全容が不明であることや、竪穴状に構築されていることから、一応竪穴建物跡とした。時期は遺物が無く決めがたいが、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

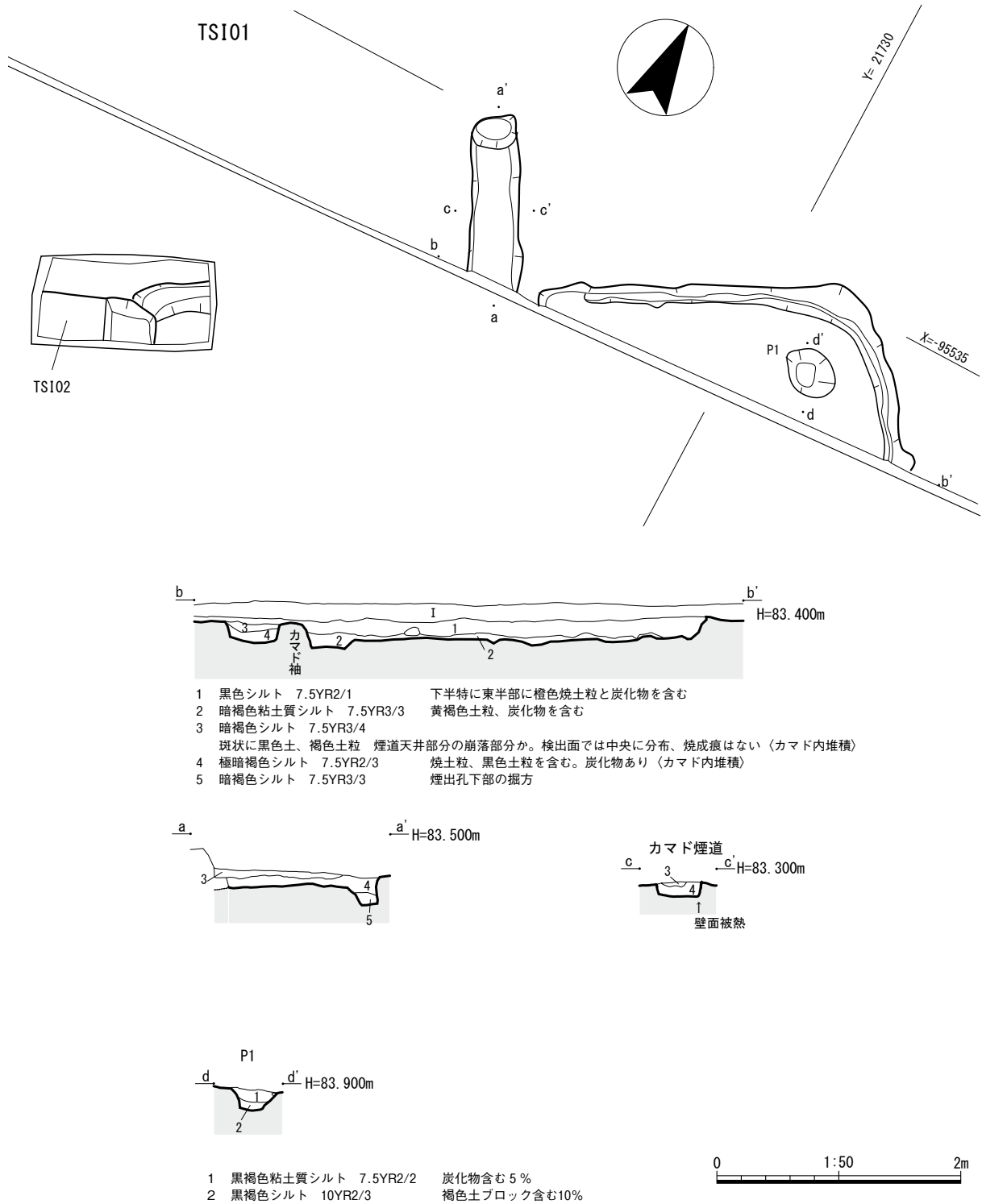
#### RSX02 (第136図)

R区中央から西部に位置する竪穴建物跡と想定した遺構である。建物跡の南端部分のみを調査し、大部分は調査区外の北側に存在する。そのため、全容は不明であり、竪穴建物跡とは異なる遺構の可能性もある。検出は、現耕作土であるⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。RSD02やRP018・019と重複し、いずれよりも古い遺構である。平面形は、調査区内の形状だけでは判断が難しいが、方形を呈すると予想している。規模は、相対する辺を確認できないことから不明であるが、調査区内での残存値は、南辺が1.5mである。建物方位は南辺を基準とするとN-38°-Wである。床面までの深さは、確認面から5～20cmである。床面の状況は、凹凸が大きく平坦ではない。平坦ではなく貼床も施されない。堆積土は1つの層のみであり、黒色を呈するシルト層である。これらの状況を削平された床面と捉えると、1層は貼床となるかもしれない。調査範囲が狭いため、確定的ではないが、竪穴建物跡の可能性を指摘しておくにとどめたい。遺物は、図示可能な遺物は無いが、土師器甕片などの細片が少量(48g)出土しているのみである。時期は遺物が無く決めがたいが、建物方位の検討から、漆町Ⅰ期に位置づけた。

#### TSI01 (第137図)

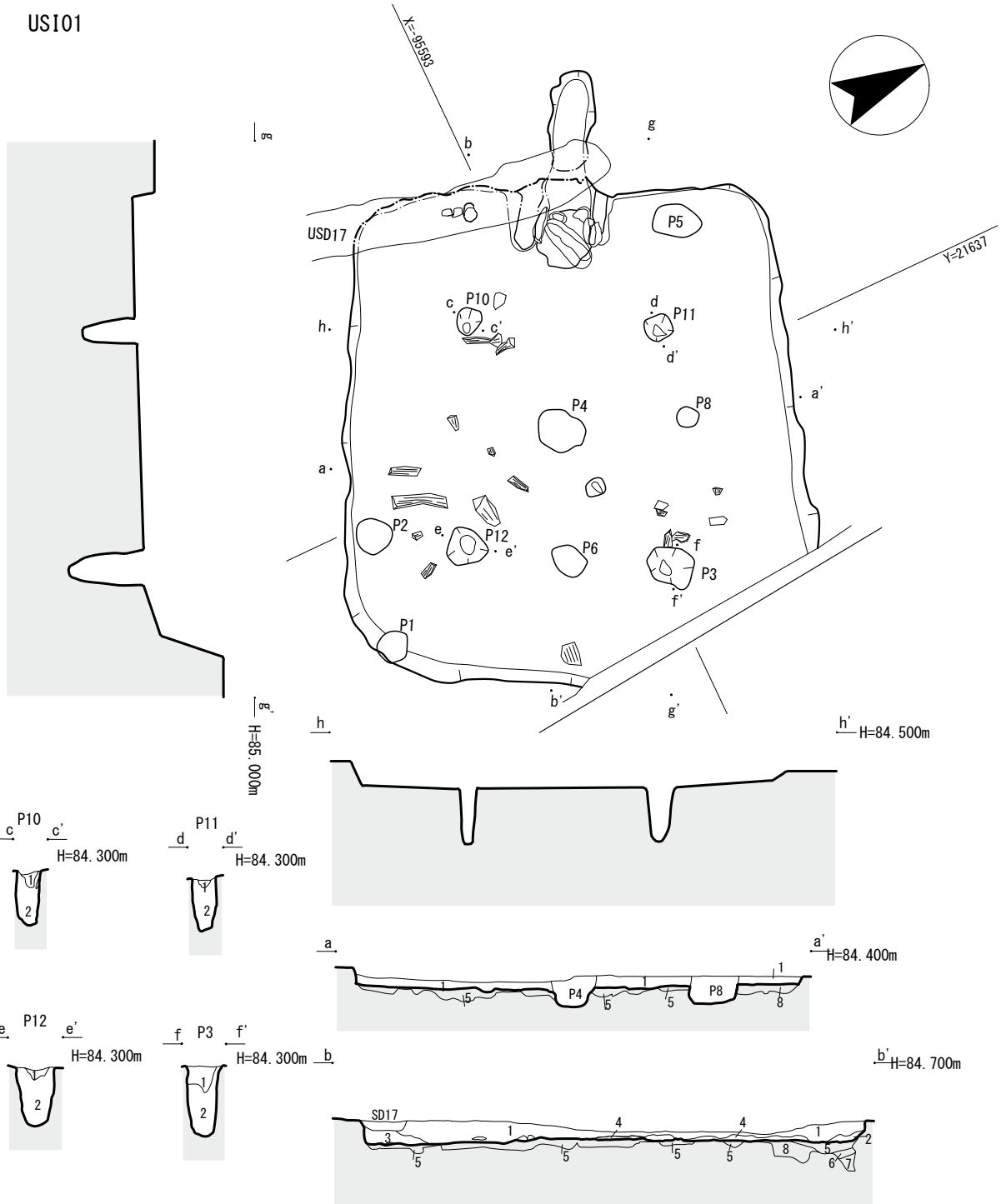
T区東部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡の北東隅とカマドの一部のみを調査したに過ぎず、残りは調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。また調査区外を拡張し、一部この遺構の検出を行っている。検出はⅠ層除去後のⅣ層で行った。他遺構との重複関係は拡張区においてTSI02とであり、切り合い関係から見ると、本遺構の方が古い遺構となる。平面形は調査区内の形状から推定すると、およそ方形を呈し、北辺にカマドが設置される。規模は、東西が約6m、南北が不明であるが、およそ6m四方と想定できるであろう。床面までの深さは確認面から20cmと浅く、大部分が削平されている。床面には明確な貼床が確認できないが、堆積土2層としたものが、あるいはこれに相当する可能性がある。また床面はほぼ平坦に構築されている。建物方位は、カマド主軸を基準とすれば、N-27°-Wであり、大きく西に傾いている。堆積土は2つの層が確認できる。1層が黒色シルト、2層が暗褐色粘土質シルトである。

建物跡に付属する施設には、カマドが北辺に1基、床面にピットが1基ある。カマドは、右袖の一部、煙道、煙出し孔を調査した。袖(カマド本体の下半部)は右側の一部のみ調査のため、規模は不明であるが、高さは14cmの残存である。袖は断ち割りを行っておらず、構築方法は不明である、煙道から煙出し孔までの残存値は1.3mであり、先端に直径38×25cmの煙出し孔がある。幅は40cmであり、断面形は箱形を呈する。煙道底面の状況は、煙出し孔までほぼ平坦であるが、煙出し孔で約15cm下がる。煙道の堆積土は、暗褐色から極暗褐色を主体とするシルト層である。底面と側面は被熱し、赤変して



第137図 TSI01 竪穴建物跡

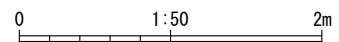
USI01



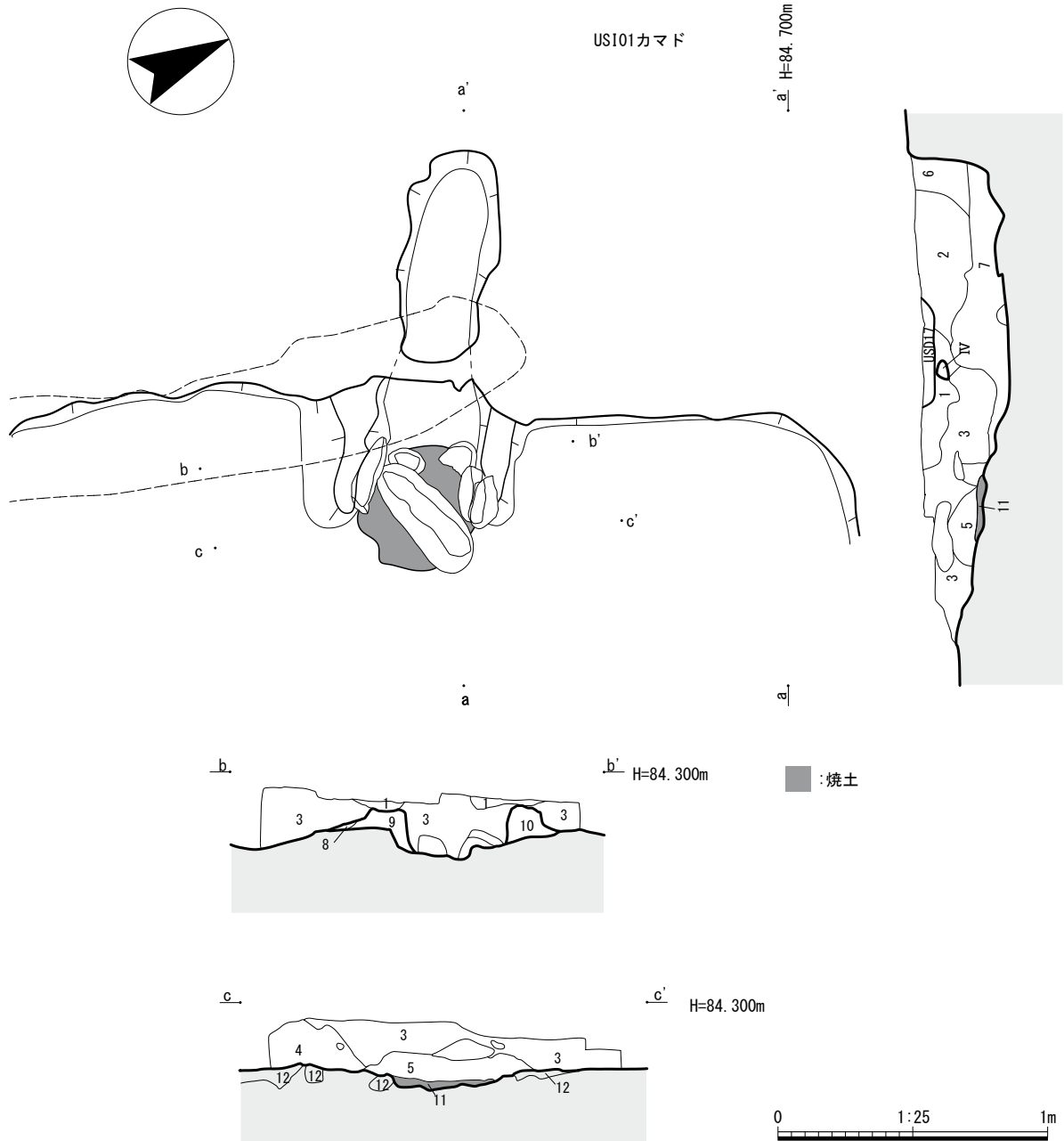
USI01

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1 褐色シルト 10YR4/4   | 地山ブロック (径1mm) 20%、炭化物 (径10mm) 3%を含む           |
| 2 褐色シルト 10YR4/4   | 地山ブロック (径2mm) 30%を含む                          |
| 3 暗褐色シルト 10YR3/3  | 地山ブロック (径20mm) 7%を含む                          |
| 4 灰黄褐色シルト 10YR5/6 | 暗褐色シルトブロック20%を含む、貼床                           |
| 5 黒褐色シルト 10YR2/2  | 明黄褐色土 (10YR6/6) (地山) 50%混合、褐色砂 (10YR4/4) 5%混入 |
| 6 褐色シルト 10YR4/4   | 黒褐色土 (10YR3/2) も10%混合                         |
| 7 褐色砂質シルト 10YR4/4 |   |
| 8 暗褐色シルト 10YR3/3  |   |

- |      |                     |                                   |
|------|---------------------|-----------------------------------|
| P 3  | 1 暗褐色粘土質シルト 10YR3/2 | 炭化物 (径2mm) 1%を含む                  |
|      | 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 地山ブロック20%を含む                      |
| P 10 | 1 黒褐色シルト 10YR3/2    | 炭化物 (径1mm) 1%、地山ブロック1%を含む         |
|      | 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 地山ブロック20%を含む                      |
| P 11 | 1 黒褐色シルト 10YR2/3    | 地山ブロック5%を含む                       |
|      | 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 地山ブロック20%を含む                      |
| P 12 | 1 黒褐色シルト 10YR3/2    | 焼土ブロック (径1mm) 1%、炭化物 (径1mm) 1%を含む |
|      | 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 地山ブロック20%を含む                      |



第138図 USI01竪穴建物跡 1



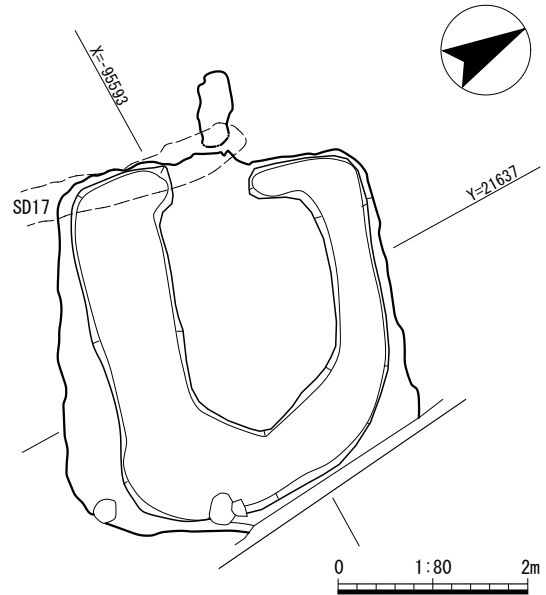
USI01カマド

- |    |            |          |   |
|----|------------|----------|---|
| 1  | 黒褐色シルト     | 10YR2/2  | 地山ブロック (径 5mm) 10% を含む                            |
| 2  | 黒褐色シルト     | 10YR3/1  | 地山ブロック (径 1mm) 1% を含む                             |
| 3  | 褐色シルト      | 10YR4/4  | 地山ブロック (径 2mm) 30%、焼土ブロック (径 1~最大30mm) 5% を含む     |
| 4  | 黒褐色シルト     | 10YR3/2  | 地山ブロック (現状径50mm) 20%、炭化物 (径 2mm) 3%、焼土ブロック 1% を含む |
| 5  | 灰黄褐色シルト    | 10YR4/2  | 地山ブロック (径 1mm) 2% を含む                             |
| 6  | 黒褐色シルト     | 10YR3/2  | にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ブロックで 1% を含む                    |
| 7  | 黄褐色シルト     | 10YR5/6  | 地山ブロック (塊状径50mm) 40%、焼土ブロック 1%、炭化物 1% を含む         |
| 8  | 黒褐色シルト     | 10YR3/1  | 黒褐色土 (10YR4/4) 90%、褐色土を10%混合 (左袖)                 |
| 9  | 黒褐色シルト     | 10YR3/1  | 黒褐色土 (10YR4/4) 70%、褐色土を30%混合 (左袖)                 |
| 10 | 明黄褐色粘土質シルト | 10YR7/6  | 黒褐色シルト (10YR2/2) 3% を含む (右袖)                      |
| 11 | 暗褐色焼土      | 7.5YR3/4 | 暗褐色焼土   |
| 12 | 黒褐色シルト     | 10YR3/2  | 明黄褐色土 (地山 10YR6/6) 10% 混合 (貼床)                    |

第139図 USI01竪穴建物跡2 (カマド)

いる。P 1は床面の北東隅にあり、径44×36cmの楕円形を呈する平面形である。深さは床面から18cmである。堆積土は2層あり、いずれも黒褐色粘土質シルトやシルトである。

出土遺物は、653g出土している。非ロクロ甕・須恵器などの細片があるが、図示可能な遺物はない。時期は、わずかな遺物や建物方位の検討から、漆町Ⅲ期に位置づけた。



第140図 USI01竪穴建物跡3（掘方）

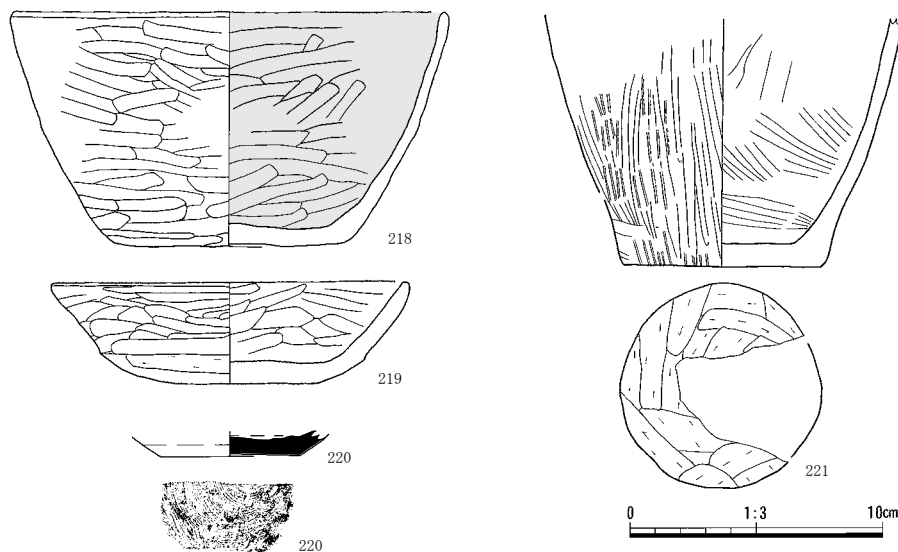
#### TSI02（第137図）

T区拡張区から検出した遺構であるわずかな部分しか確認していないため、ほかの遺構の可能性もある。TSI01と重複し、切り合い関係からみると本遺構の方が新しい。

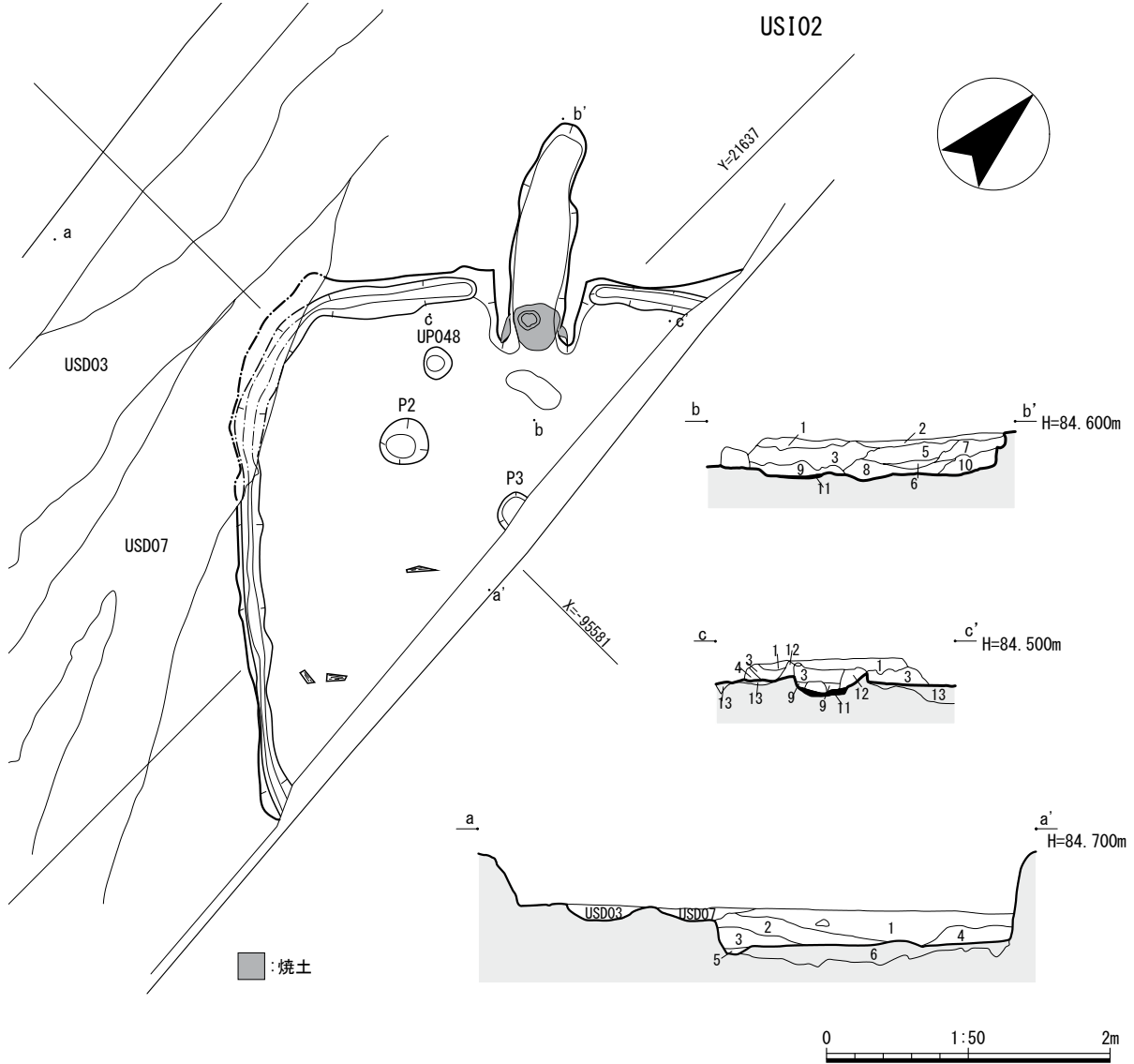
TSI01の規模把握のため設定した拡張区から検出したものであるため、詳細は全く不明である。遺物も出土していない。

#### USI01（第138～141図）

U区南部分に位置する。検出はⅣ層上面である。USD17と重複しており、本遺構が古い。建物跡の一部（北東隅）が調査区外にあるため完掘を行っていない。平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.9m×3.6mである。建物方位はN-64°-Wである。床面までの深さは、検出面から20cmである。床面はほぼ平坦である。貼床は黒褐色シルトと明黄褐色シルト（Ⅳ層＝地山）との混合土によって施されているが、一部は暗褐色シルトの貼床が見られる。掘方は、壁沿いに深く掘り込まれている。堆積土は4層に分層できる。褐色シルトを主体とする堆積で、いわゆる三角堆積が見られることから、自然堆



第141図 USI01出土遺物



USI02

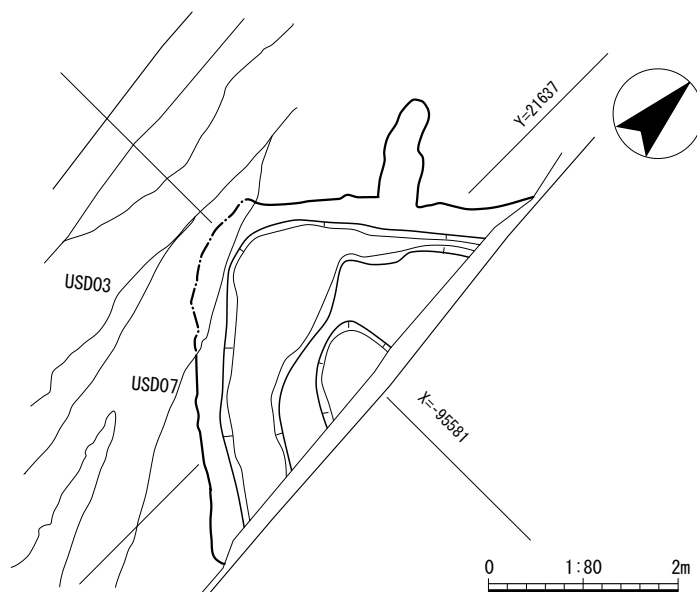
- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 黒褐色シルト 10YR3/2    | 灰黄褐色シルトブロック (10YR4/2) (径30mm) 5%、地山ブロック (径10mm) 3%、焼土ブロック 1% を含む |
| 2 黒褐色シルト 10YR3/2    | 地山ブロック (径10~20mm) 20%、炭化物 (径10mm) 1% を含む                         |
| 3 灰黄褐色シルト 10YR4/2   | 地山ブロック (径20mm) 5% を含む  |
| 4 暗褐色シルト 10YR3/2    | 炭化物 (径10mm) 3%、焼土ブロック (径5mm) 2%、地山ブロック (径10mm) 1% を含む            |
| 5 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3 | 地山ブロック (径10mm) 10% を含む (壁埋土)                                     |
| 6 黒褐色シルト 10YR2/3    | 褐色砂質土 (10YR4/4) 30% の混合土層 (貼床)                                   |

USI02カマド

- |                        |   |
|------------------------|---|
| 1 黒褐色シルト 10YR3/2       | 焼土ブロック (径10mm)                                      |
| 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2      | 地山ブロック (径1mm) 3%、焼土ブロック (径1mm) 1% を含む               |
| 3 褐色シルト 10YR4/4        | 炭化物 (径20mm) 3%、地山ブロック (径2mm) 3% を含む                 |
| 4 黄褐色シルト 10YR5/6       | 地山ブロック (径2mm) 15%、炭化物 (径3mm) 1% を含む                 |
| 5 黒褐色シルト 10YR2/3       | 地山ブロック (径3mm) 5%、炭化物 (径3mm) 1%、焼土ブロック (径3mm) 1% を含む |
| 6 褐色シルト 10YR4/6        | 地山ブロック  |
| 7 黒褐色シルト 10YR2/2       | 地山ブロック (径3mm) 3%、焼土ブロック (径1mm) 1% を含む               |
| 8 黒褐色シルト 10YR2/3       | 炭化物 (径1mm) 1% を含む                                   |
| 9 黒褐色シルト 10YR3/2       | 地山ブロック (径5mm) 7% を含む                                |
| 10 黒褐色シルト 10YR2/3      | 地山ブロック (径2mm) 1% を含む                                |
| 11 暗褐色砂質シルト 10YR2/3    | 焼土  |
| 12 にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/4 | 暗褐色土 (10YR3/3) 10% 混合土層                             |
| 13 黒褐色シルト 10YR2/2      | にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 50% の混合土層                       |

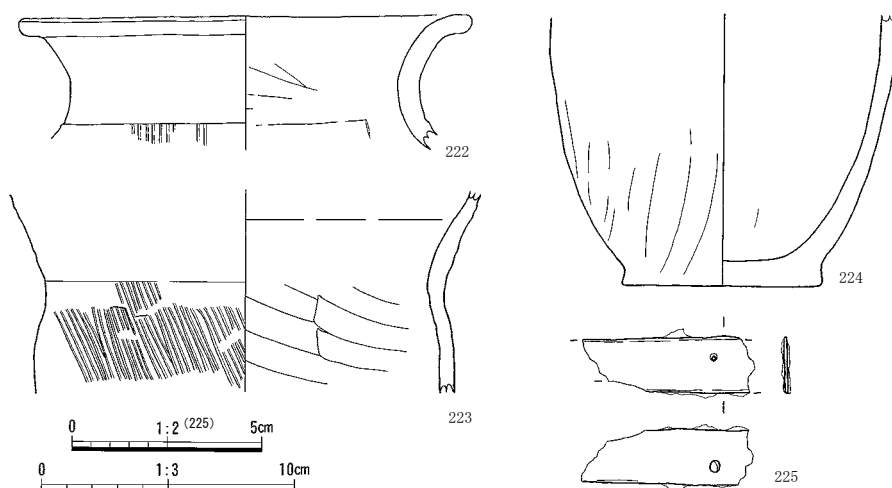
第142図 USI02竪穴建物跡 1

積と考えられる。カマドは西壁の中央部に構築されており、方位はN-61° - Wである。規模は、幅が82cm、長さが南袖で52cm、北袖で41cmである。袖の高さは南北とも10cmである。袖の芯材には礫が用いられている。袖は南側の付け根付近では明黄褐色シルト（IV層＝地山）塊を多く含む褐色シルトで構築されているが、先端に近づくと黒褐色シルトが多く入る。北側は明黄褐色シルトで構築されている。煙道は長さ90cm、幅35cmである。燃烧部から北西に向かって一旦落ち込み、その後は緩やかに上って壁面に突き当たる。煙道に堆積して



第143図 USI02竪穴建物跡 2（掘方）

いるカマドの7層は焼土塊やIV層（地山）の明黄褐色シルト塊が多く混じることから、天井の崩落土と思われる。また、天井の一部がごくわずかに残存している。燃烧部は46cm×40cmの範囲に暗褐色焼土として検出した。厚さは最大で3cmで、支脚を伴っている。



第144図 USI02出土遺物

カマドの堆積土は、焼土粒が混じる褐色シルトが主体であり、下層には灰黄褐色シルトの堆積が見られる。本遺構に付随する柱穴は4個検出した。これらは遺構の四隅からやや中央寄りに規則的に配置され、底面の標高は83.6m前後ではほぼ一定する。柱間の間隔は約1.7mである。全ての柱穴で柱痕跡は確認できなかった。堆積土はほぼ共通しており、上層が黒褐色シルト、下層が灰黄褐色である。

遺物は堆積土や床面を中心に1.43kg出土している。図示可能な遺物は4点のみである。土師器碗（218）、土師器杯（219）、土師器甕片（221）、須恵器杯片（220）が図示したもので、そのほかに、土師器非ロクロ杯（平底）や甕、須恵器甕の細片などが出土している。

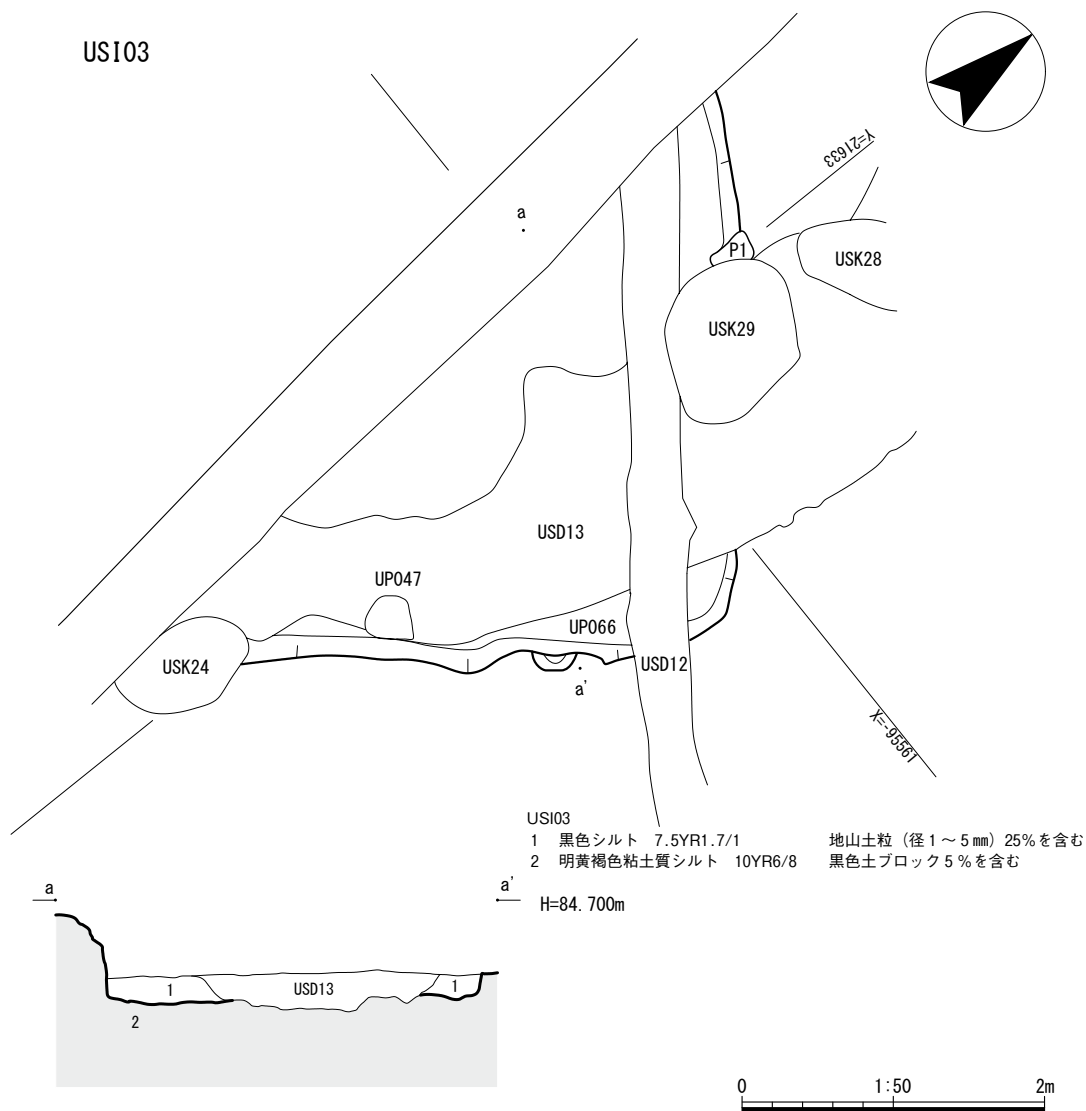
時期は、出土遺物の年代や、建物方位の検討から、漆町Ⅱ期に位置づけた。

（鈴木）

#### USI02（第142～144図）

U区中央部に位置する。検出はIV層上面である。USD07と重複しており、本遺構が古い。建物跡の東半部は調査区外にあるため、調査したのは一部となる。平面形は隅丸方形を呈し、確認できた規

模は最大で3.2m×2.8mである。床面の高さは検出面から25cmである。建物方位はN-44°-Wである。床面はほぼ平坦であるが、東側が若干高い。貼床は黒褐色シルトと褐色砂質シルトとの混合土によって施されている。掘方は、壁沿いを深く掘り込むものである。堆積土は5層に分層できる。黒褐色シルトが主体であり、自然堆積の様相を呈する。5層は壁溝の埋土である。カマドは北西壁に構築されており、方位はN-34°-Wである。規模は、幅63cm、奥行きは左袖が59cm、右袖が53cm、高さは左袖が15cm、右袖が10cmである。袖の内側は両側とも被熱しており、赤褐色に変色している。袖の心材には人頭大の礫が用いられている。袖の構築土はにぶい黄褐色シルトである。煙道は長さ110cm、幅40cmである。底面はほぼ平坦である。煙道の堆積土は黒褐色シルトが主体で、一部には焼土ブロックが少量混じる。燃烧部は33cm×30cmの範囲に明赤褐色焼土として検出した。厚さは最大で4cmで、支脚を伴っている。カマドの堆積土は褐色シルト（3層）が主体で、炭化物とIV層由来の黄褐色シルト塊が混じる。柱穴は3個検出したが、本遺構に付随するものかは不明である。遺物は、堆積土を中心に721g出土している。土師器甕片（222～224）や刀子片または、短刀片（225）などが出土している。時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。（鈴木）

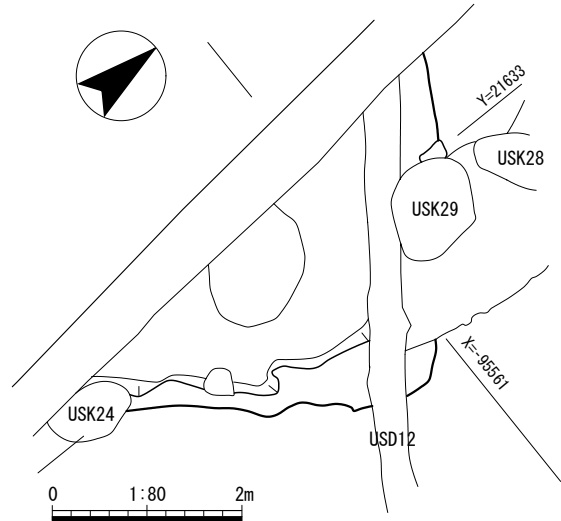


第145図 USI03竪穴建物跡 1

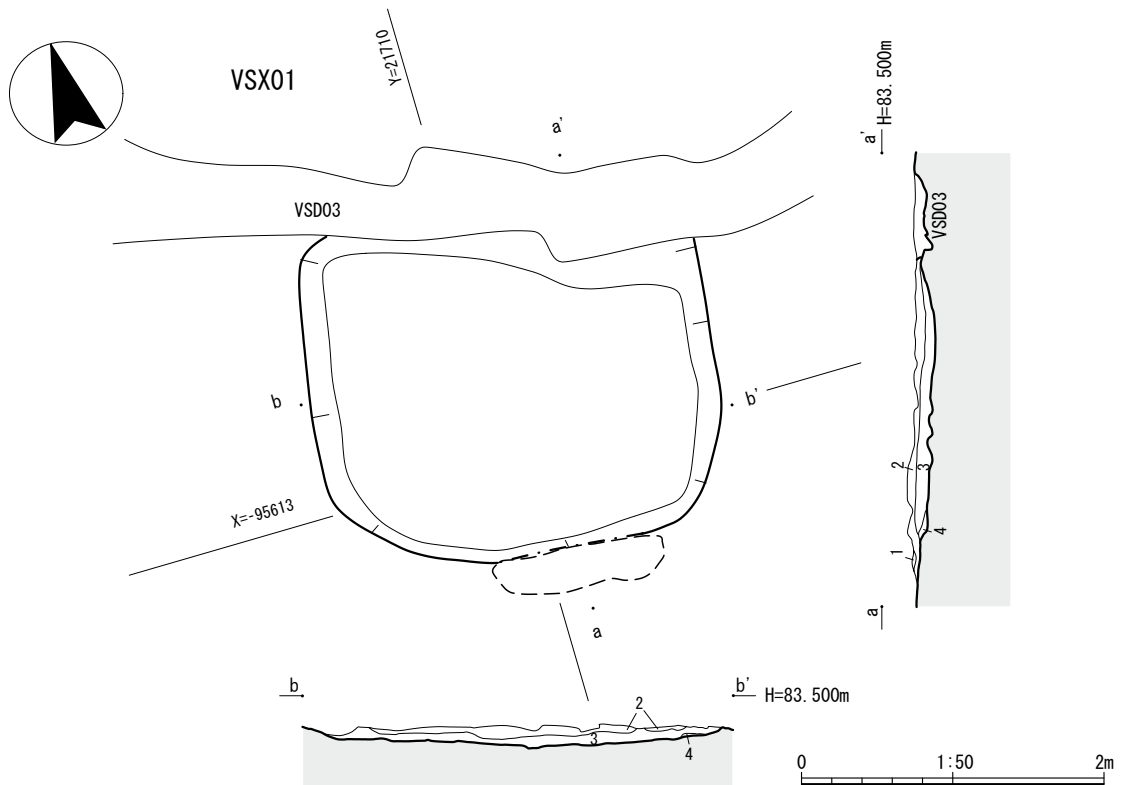


USI03 (第145・146図)

U区の北部分に位置する。検出面はIV層上面である。USD12、USD13、USK24、USK29、UP047、UP66と重複しており、本遺構は、UP066より新しく、他の遺構よりは古い。西側の大部分は調査区外にあり、調査したのは約半分の範囲である。確認できた規模は南辺・東辺ともに3.5mである。平面形は、東西南北にそれぞれ角を持つ隅丸方形の竪穴建物と推測され、今回確認できたのは、その東隅付近であると考えられる。床面の深さは、検出面から20cmで、ほぼ平坦である。掘方は中央部を中心に深く掘り込まれている。貼床は、黒色シルトが混入する明黄褐色粘土質シルトによって施されている。堆積土は黒色シルトの単層である。附属施設にはP1があるが、その位置から別遺構の可能性もある。カマドなどのその他の施設は確認できなかった。遺物は堆積土から少量13g出土しているのみである。時期は、遺物や建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。(鈴木)



第146図 USI03竪穴建物跡2 (掘方)

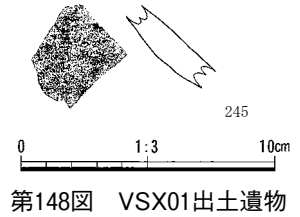


- VSX01
- 1 黒色シルト 10YR2/1
  - 2 黒褐色シルト 10YR3/1 酸化鉄10%含、径1cmの明黄褐色シルト(10YR6/6)1%を含む
  - 3 黒褐色シルト 10YR2/2
  - 4 黒褐色シルト 10YR2/2 にぶい黄褐色土粒(10YR7/4)5%を含む

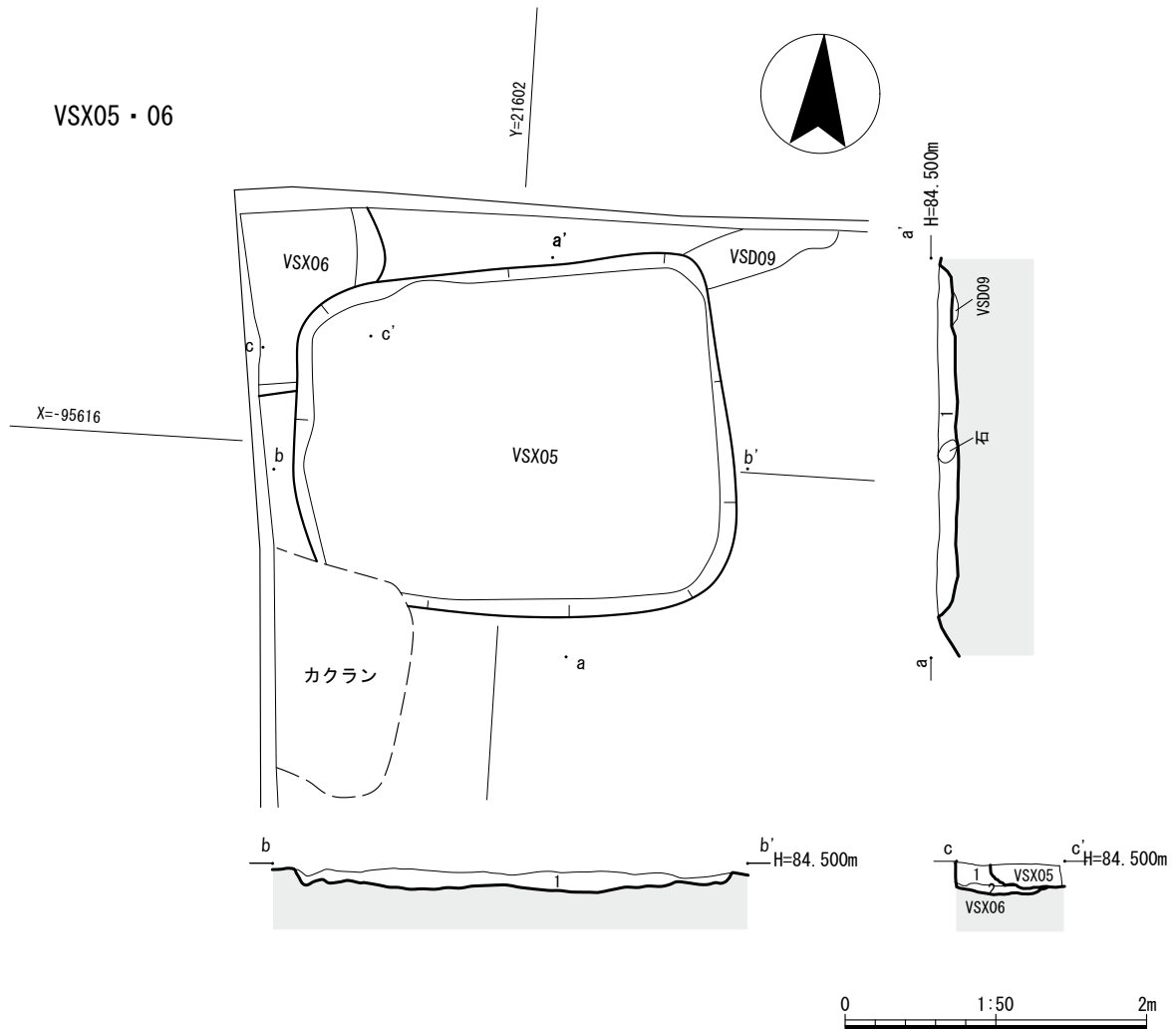
第147図 VSX01竪穴建物跡

VSX01 (第147・148図)

V区の東部分に位置する。検出はIV層上面である。VSD03と重複しており、北側の開口部はVSD03により削平されている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西が2.7mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から12cmである。底面は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。建物方位は、N-82°-Eである。堆積土は4層に分層でき、粘性の弱い黒褐色シルトが主体である。4層には三角堆積がみられることから、自然堆積の様相を呈している。南側にある張り出し状の浅い窪みは、本遺構に付随するものと思われる。竪穴住居状の遺構であるが、カマド・柱穴・貼床等の施設は検出されず、居住用の機能では無いと考えられる。遺物は、土師器の細片がわずかに出土しているのみである(33g)。245のような常滑産の甕片も出土しているが、付近の遺構からの混入の可能性がある。時期は建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。(鈴木)

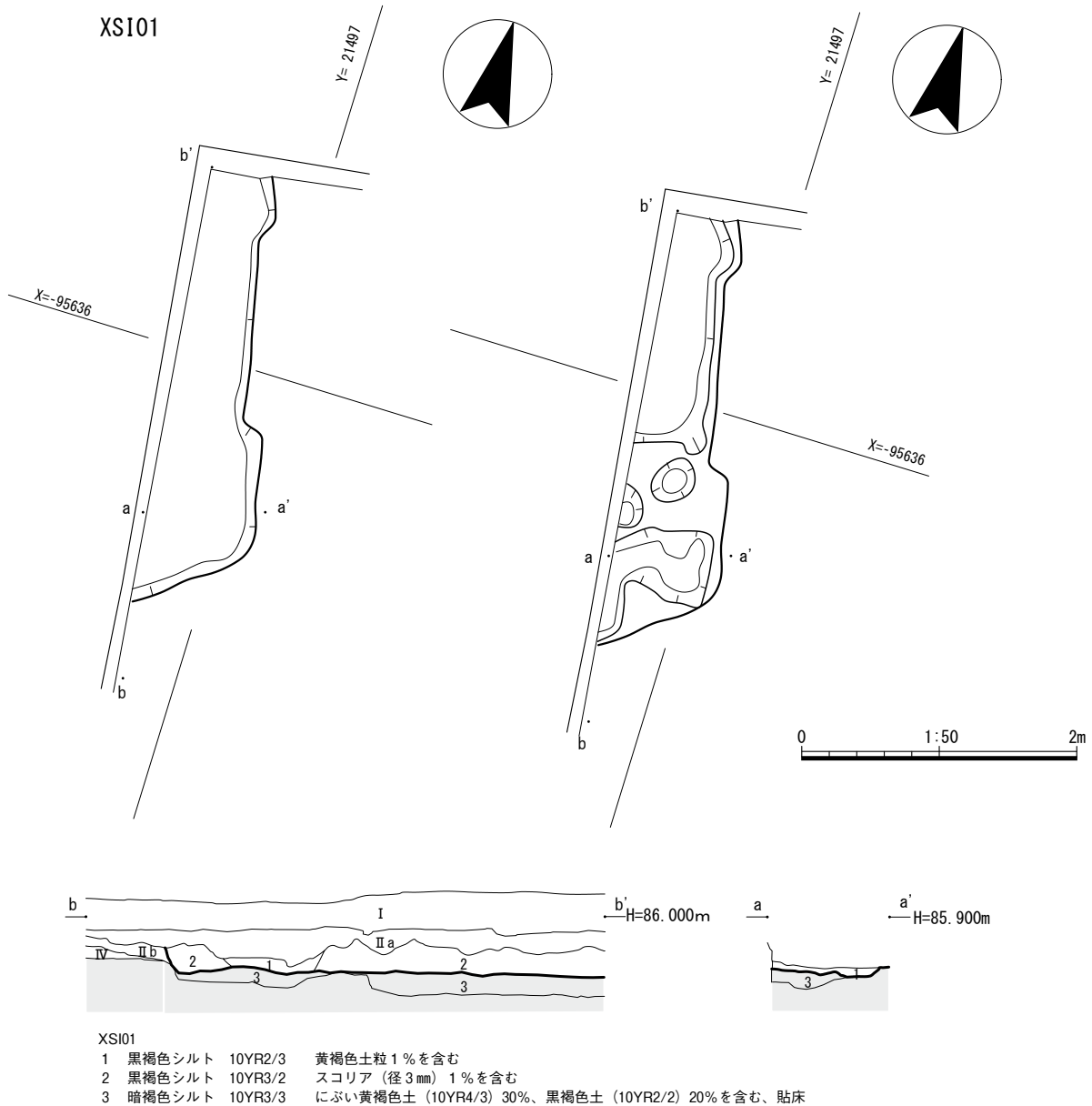


第148図 VSX01出土遺物



- VSX05  
 1 黒褐色シルト 10YR3/2 にぶい黄橙色ブロック (10YR6/4) 3%を含む
- VSX06  
 1 褐灰色シルト 10YR4/1 褐色砂質シルト粒 (10YR4/6) を3%を含む  
 2 褐灰色シルト 10YR4/1 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) 10%を含む

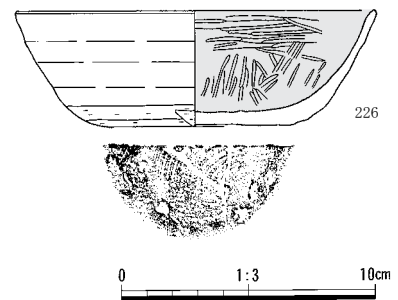
第149図 VSX05・06竪穴建物跡



第150図 XSI01竪穴建物跡

VSX05 (第149図)

V区西端に位置する。検出はIV層上面である。VSD09・VSX06と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。また、南西部隅は後世の攪乱によって削平されている。平面形は隅丸矩形を呈し、東西方向にやや長い。規模は東西2.9m、南北2.3mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から12cmである。建物方位はN-81°-Eである。堆積土は、IV層(地山)由来の粘土塊をわずかに含む黒褐色シルトの単層である。竪穴住居状の遺構であるが、カマド・柱穴・貼床等の施設は検出されず、居住用の機能は有していない。遺物は、土師器の細片がわずかに33g出土するのみである。時期は建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。(鈴木)



第151図 XSI01出土遺物

## VSX06 (第149図)

V区西端に位置する。検出はIV層上面である。VSD09・VSX05と重複しており、VSD09より新しく、VSX05より古い。一部分のみの検出であり、全体的な平面形は不明であるが、隅丸方形もしくは隅丸矩形を呈するものと推定される。検出した範囲での平面上の規模は、南北1.2m×東西0.9mである。断面は皿状を呈し、深さは検出面から20cmである。建物方位はN-75°-Eである。堆積土は2層に分層でき、褐灰色シルトが主体である。自然堆積の様相を呈する。遺物は出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。(鈴木)

## XSI01 (第150・151図)

X区北部に位置する竪穴建物跡である。調査区内では、建物跡南東隅の一部のみを調査したに過ぎず、残りは調査区外に存在している。したがって、完掘は行っておらず、不明な点も多い。検出はI・II a層除去後のII bからIV層で行っている。調査区内においては他遺構との重複関係は確認できない。

平面形は調査区内の形状から判断すると、およそ方形を呈すると推定できる。規模は、調査区内の状態からは計測できず詳細は不明である。調査区内の残存値では、南辺が約1m、東辺が2.8mである。床面までの深さは確認面から20cmと浅く、大部分が削平されている。床面には全体的に貼床が施される。貼床は暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトとの混合土で構成され、ほぼ平坦に構築されている。建物の掘方は、調査区内を見る限り周辺がより深く掘られており、その分貼床も厚く充填されている。建物方位は、建物東辺を基準とすれば、N-14°-Wであり、ほぼ北を向いている。堆積土は2つの層が確認できる。いずれも黒褐色シルト層である。建物跡に付属する施設は、調査区内においては確認できない。

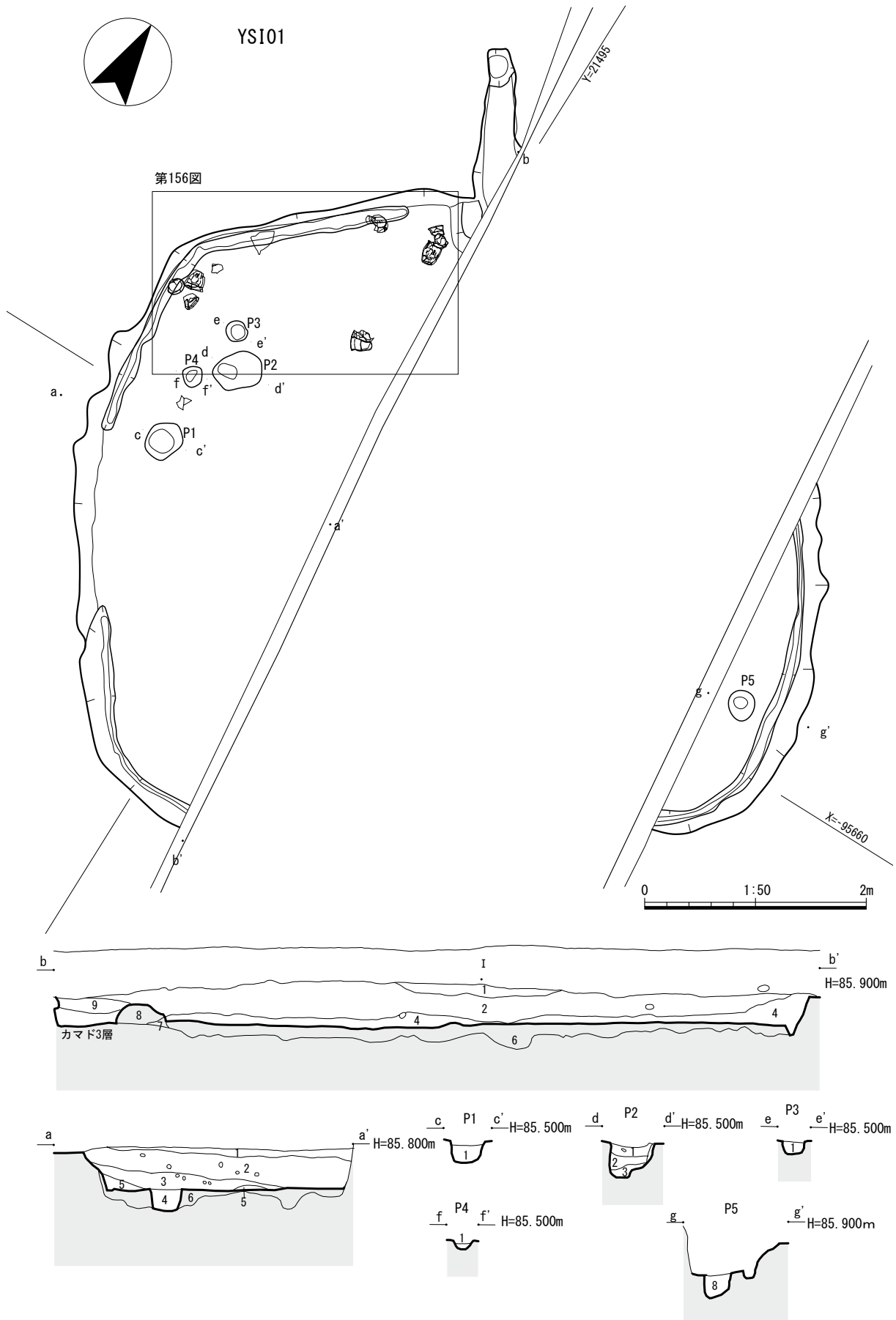
遺物は、底部にヘラケズリの再調整が入る土師器杯片(226)のほか、土師器細片が出土しているが少量である(合計180g)。

時期はこれらの遺物や建物方位の検討から、漆町III期に位置づけた。

## XSI02→YSI01

## YSI01 (第152～158図)

Y区～X区北部に位置する竪穴建物跡である。2カ年の調査によって、ひとつの竪穴建物と認識したものである。建物跡の中央部は調査範囲外であるため、この部分の調査は行っていない。そのため、不明な点も多く残る。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内での重複はない。調査した範囲でみると、各辺が膨らんだ隅丸方形形状を呈する。規模は、南北間が約6m、東西間が6.7mである。建物方位は、西辺を基準とするとN-31°-Wである。床面は、ほぼ平坦であり、壁に沿って壁溝がある。壁溝は、幅が20cm前後、深さが10cm程度であり、西壁の一部で途切れている。貼床は全体的に施されるが、壁際を中心に厚く、したがって掘方もその部分が深くなっている。堆積土は5つの層があり、黒褐色を呈する粘土質シルトやシルトが主体である。付属施設には、カマド、ピット(小穴)5個がある。カマドは北壁に設置され、左袖、煙道、煙出し孔がある。方位は煙道を基準とするとN-34°-Wである。カマド本体の大部分は調査区外にある。左袖は、長さが50cmである。煙道は、調査区内で約1m確認でき、幅は最大で40cmである。煙道の先端には煙出し孔があり、30×20cmの規模の方形形状を呈する平面形である。床面に構築されたピットは5個ある。平面形はいずれも



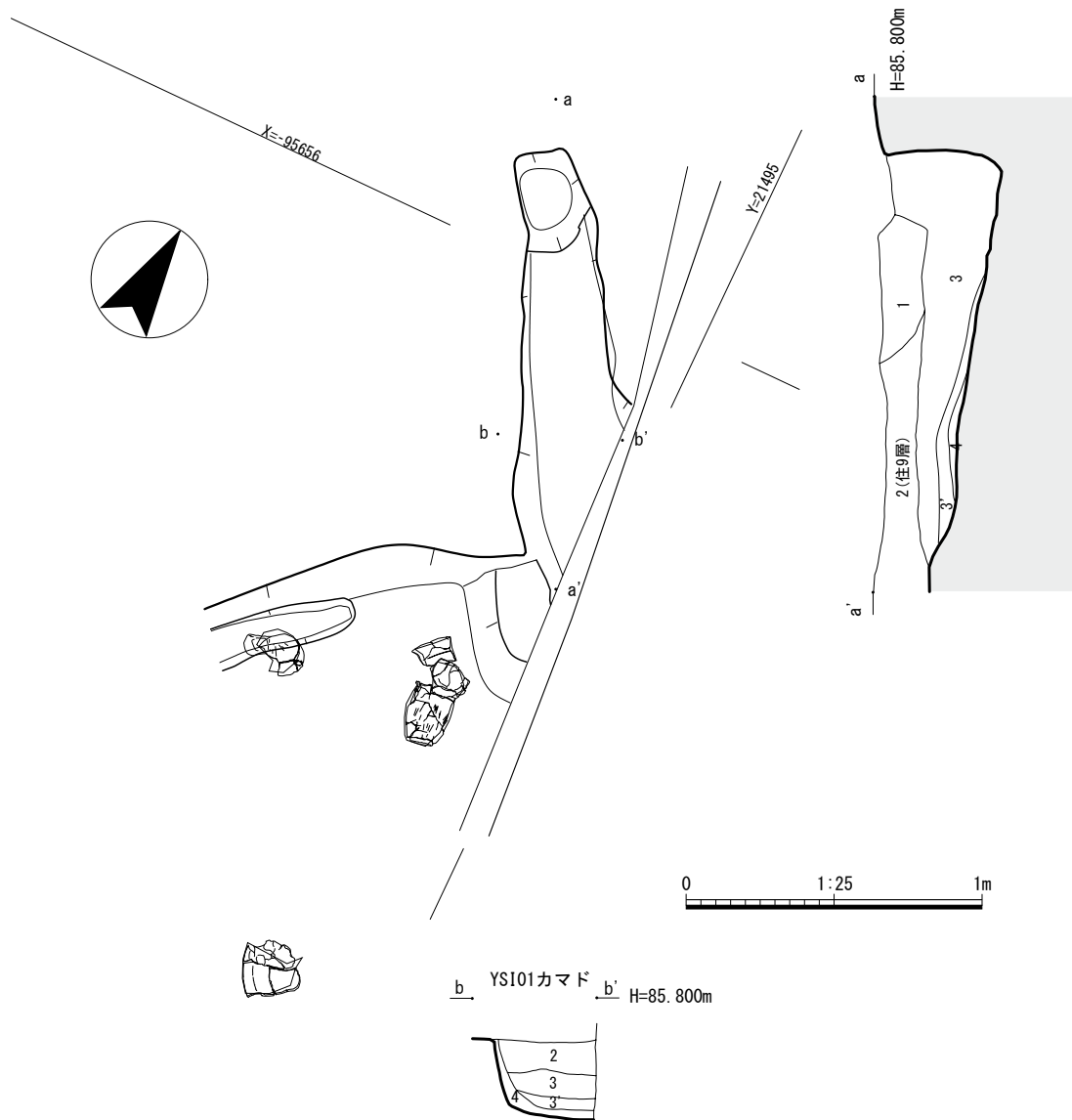
第152図 YSI01竪穴建物跡 1

3 遺構と遺物

YSI01

- |                      |  |
|----------------------|--|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1~3mm) 10% 炭化物粒 (径 5mm) 3% を含む |
| 2 黒褐色シルト 10YR2/2     | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1mm~) 1% 小礫 (拳大弱) 1% 弱を含む      |
| 3 黒褐色粘土質シルト 10YR2/3  | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1mm) 1% を含む                    |
| 4 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3  | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1mm) 10% 小礫 (径 5cm) 15% を含む    |
| 5 明黄褐色粘土質シルト 10YR6/8 | 暗褐色10% を含む                                       |
| 6 黒褐色シルト 10YR3/2     | 明黄褐色シルトブロック (10YR7/8) (径10~15cm) を40%混合する (貼床)   |
| 7 明黄褐色シルト 10YR7/6    | 地山 (IV層) (カマド袖)                                  |
| 8 暗褐色シルト 10YR3/3     | 黄褐色シルト粒 (10YR7/8) 5% 焼土粒、炭化物1% を含む (カマド袖)        |
| 9 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 黄褐色シルト粒 (10YR7/8) 5% を含む<煙道埋土>                   |
| P1                   |  |
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山土粒 (径 1mm) 5% を含む                              |
| P2                   |  |
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山土粒 (径 1mm) 5% を含む                              |
| 2 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3  | 地山土粒 (径 1mm) 30% を含む                             |
| 3 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3  | 地山土粒 (径 1mm) 50% を含む                             |
| P3                   |  |
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山土粒 (径 1mm) 3% を含む                              |
| P4                   |  |
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山土粒 (径 1mm) 3% を含む                              |
| P5                   |  |
| 8 暗褐色シルト 10YR3/4     | 黒褐色土粒 (10YR2/2) 5% にぶい黄褐色土粒 (10YR4/3) 5% を含む     |

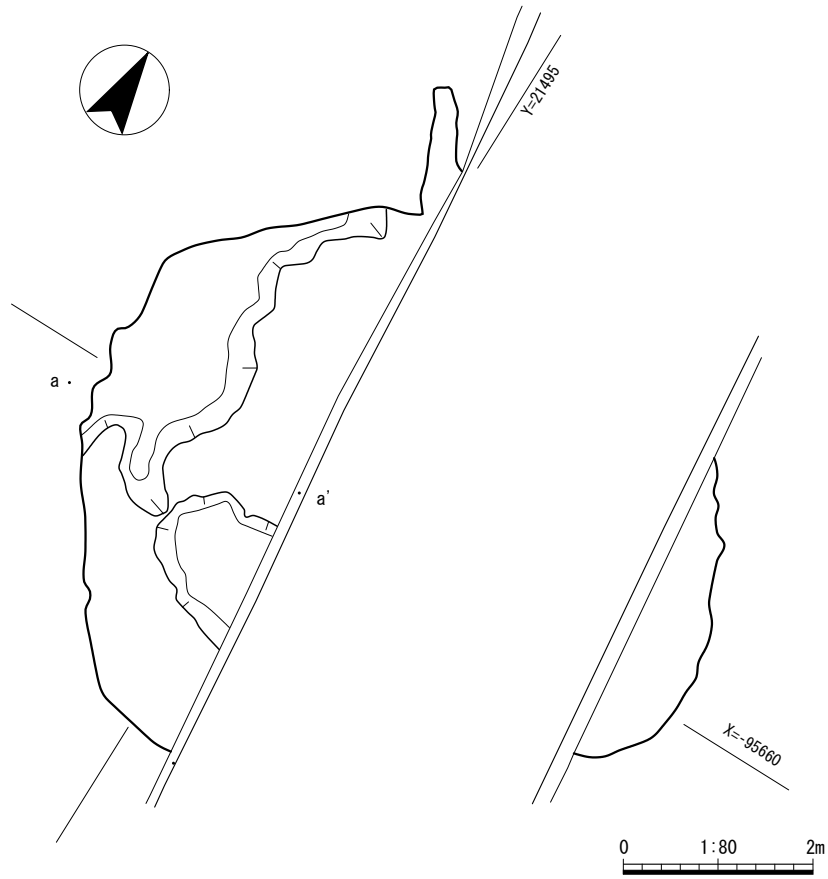
第153図 YSI01 竪穴建物跡 2



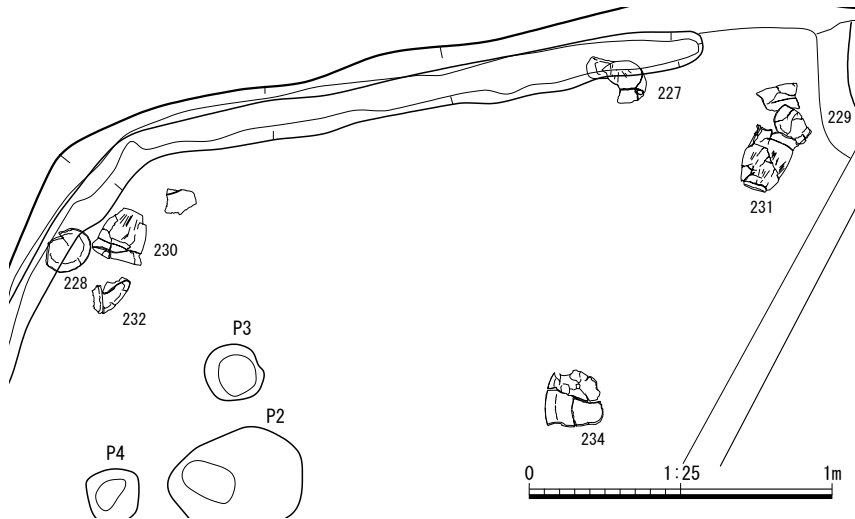
YSI01カマド

- |                      |  |
|----------------------|--|
| 1 黄褐色粘土質シルト 10YR8/6  | 3層と接する面にやや被熱あり 天井崩落土                     |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 地山ブロック (10YR7/6) (径 2cm) 3% を含む          |
| 3 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3  | 地山ブロック (10YR7/6) (径20cm) 含む→崩落した天井の可能性あり |
| 3' 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3 | 地山ブロック (10YR7/6) (径 1cm) 黒褐色土 5% を含む     |
| 4 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2  | 地山土粒 (径 1cm) 10% を含む                     |

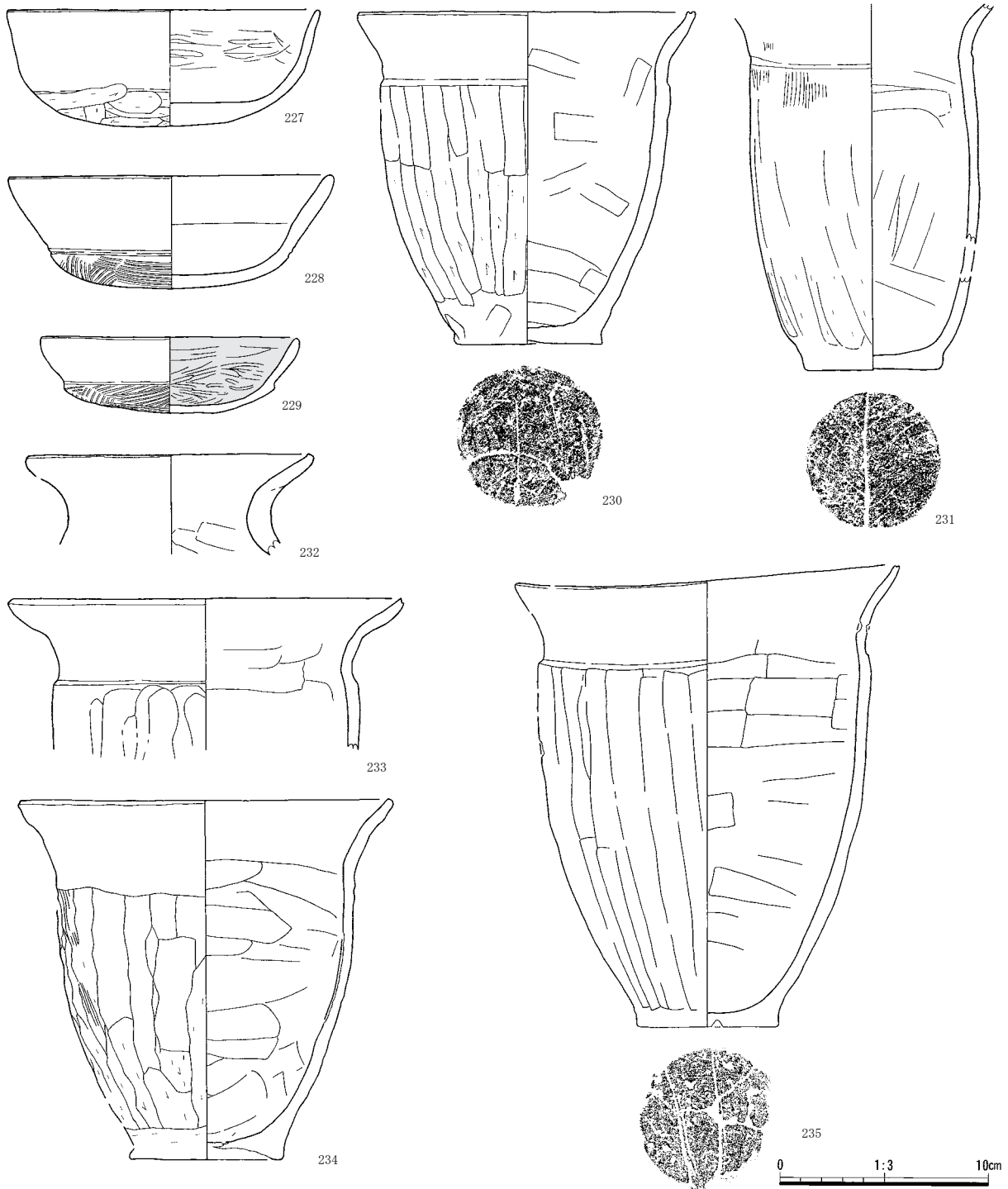
第154図 YSI01 竪穴建物跡 3 (カマド)



第155図 YSI01竪穴建物跡 4 (掘方)



第156図 YSI01竪穴建物跡 5 (土器出土状況)



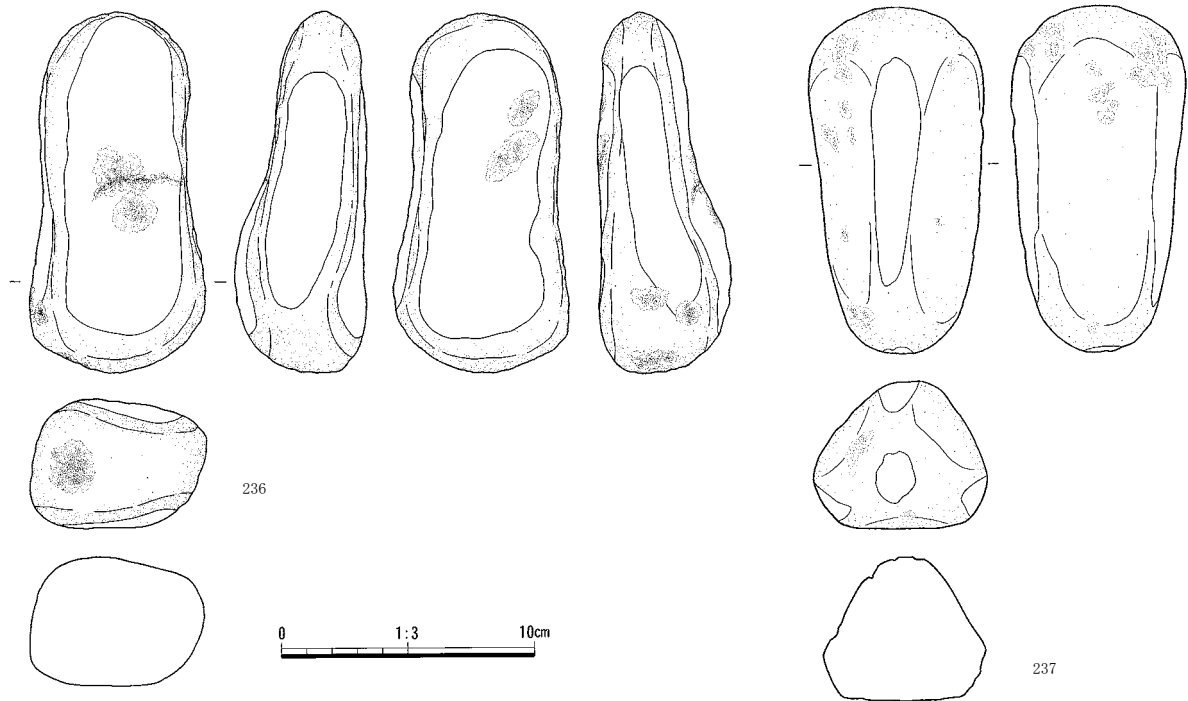
第157図 YSI01出土遺物 1

円形から楕円形状を呈する。規模は、径が20cm前後のもの（P 3～5）と40～50cm前後のもの（P 1・2）の2者がある。床面からの深さは10～30cmと浅いものが多い。

遺物は堆積土やカマド周辺を中心に5.93kg出土した。カマド西側には原位置を保っている土器が集中している。図示した遺物には、土師器杯（227～229）、土師器甕（230～235）があり、いずれも床面より出土し、比較的まとまった資料といえる。そのほか、磨石（236・237）なども出土している。

時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町 I 期に位置づけた。





第158図 YSI01出土遺物 2

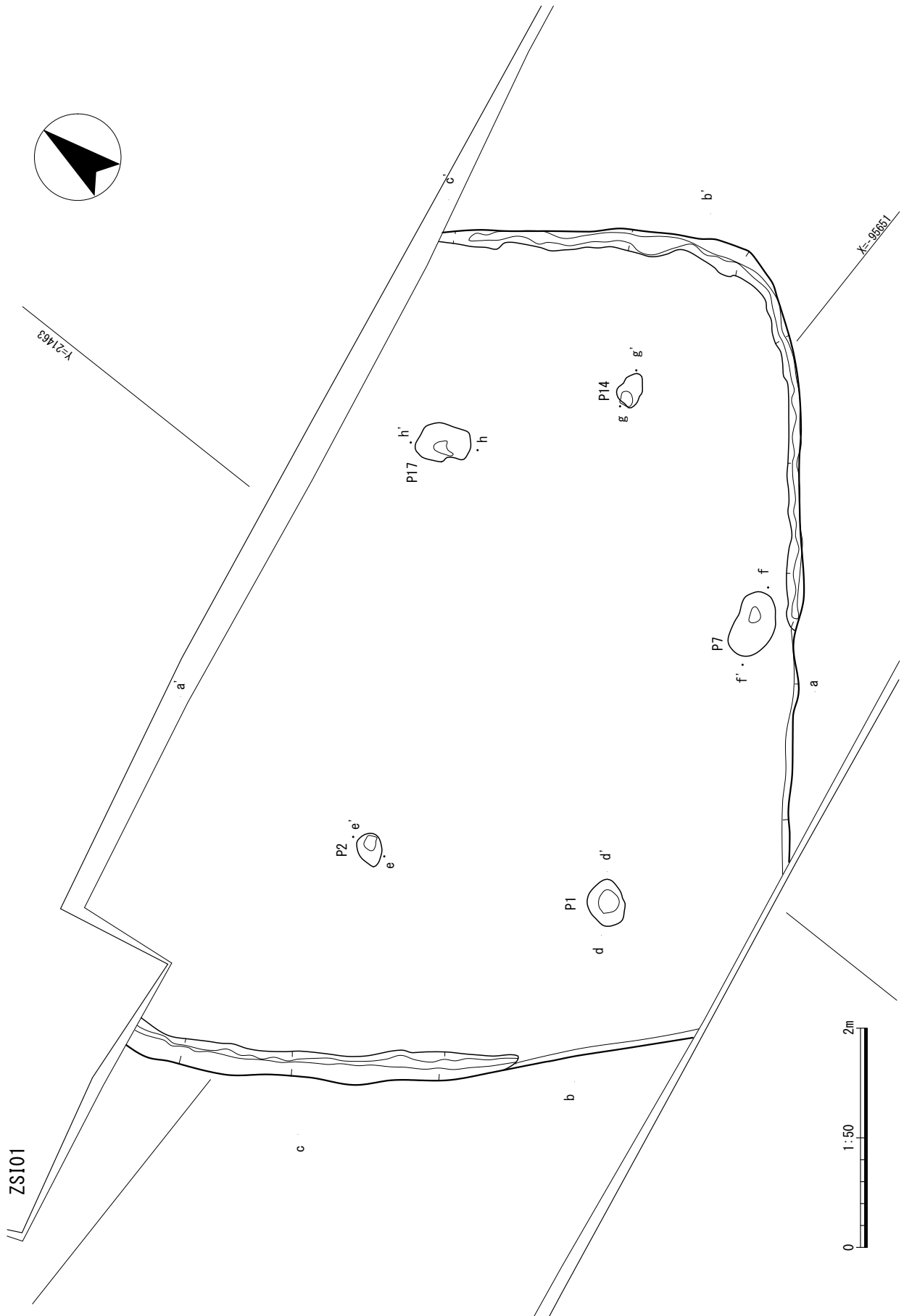
## ZSI01 (第159～162図)

Z区東部に位置する竪穴建物跡である。建物跡の一部のみを調査したが、北側の一部は調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認は、現耕作土であるI層を除去後のIV層上面で行った。調査区内での重複はない。平面形は、調査した範囲からみると、各辺がわずかに膨らんだ隅丸形状を呈する。規模は、南北間が不明であるが、東西間が7.7mであり、大型の建物といえる。建物方位は、西辺を基準とするとN-39°-Wである。床面は、ゆるやかな凹凸があるが、ほぼ平坦といえよう。壁際には、壁溝が巡る。壁溝の幅は20cm前後、深さは10cm程度である。貼床は、明黄褐色が主体とする粘土質シルトであり、床面の全体に施されるが、壁際が特に厚い。したがって、掘方も壁際周辺がより深く掘られている。堆積土には3つの層があり、黒色粘土質シルトや灰黄褐色粘土質シルトがある。

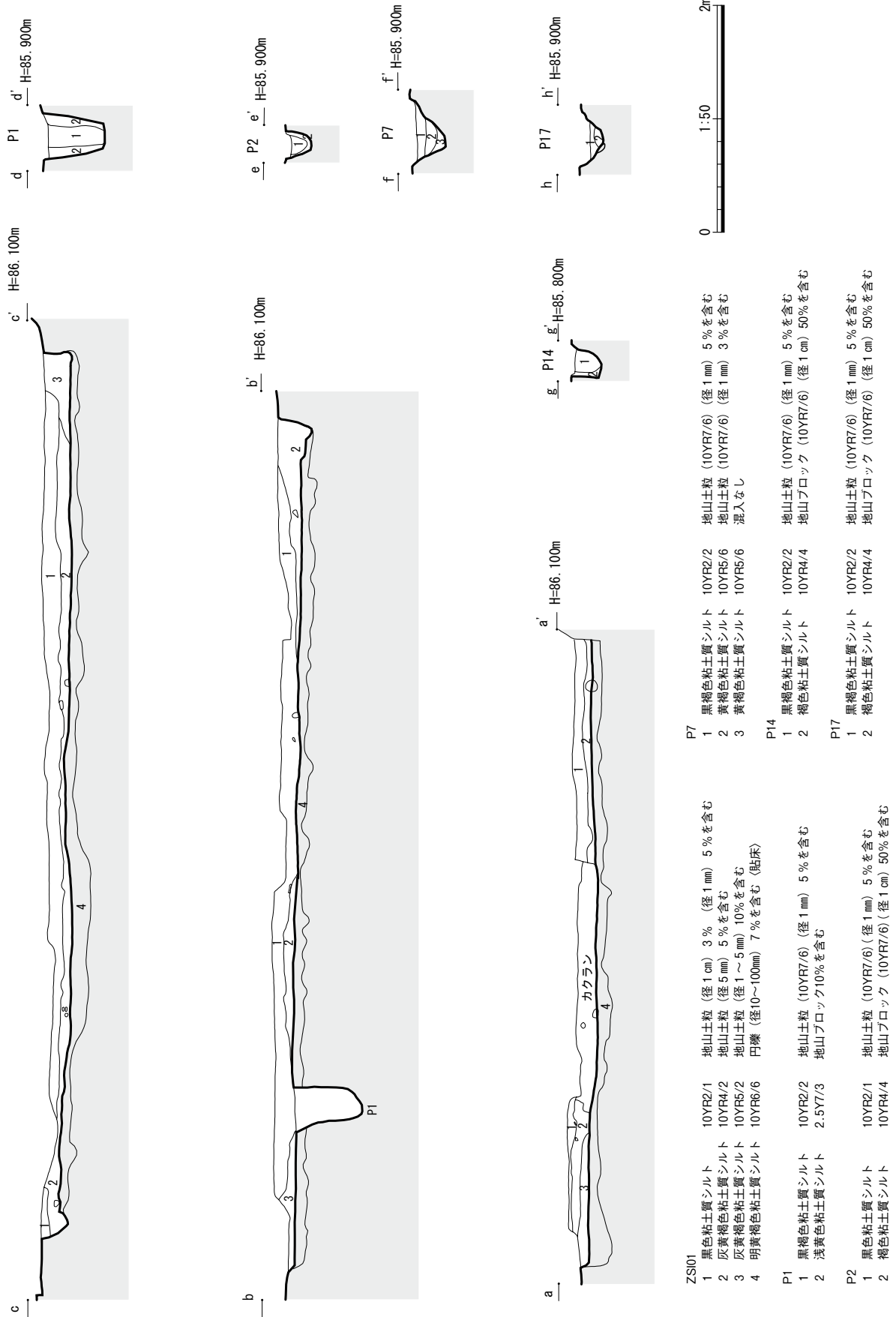
付属施設には、床面にピット5個がある。平面形はいずれもいびつな楕円形状を呈し、規模は、小型の径30cmのもの(P2・14)とやや大型の径40～60cmのもの(P1・7・17)の2者がある。

遺物は堆積土を中心に2.78kg出土した。土師器杯(238～240)、土師器甕(241～243)などが出土している。土師器の杯や甕は、ロクロ調整のものが含まれているが、非ロクロ調整のものが量的に多い。そのほか、石鏃(244)も出土しているが、混入であろう。

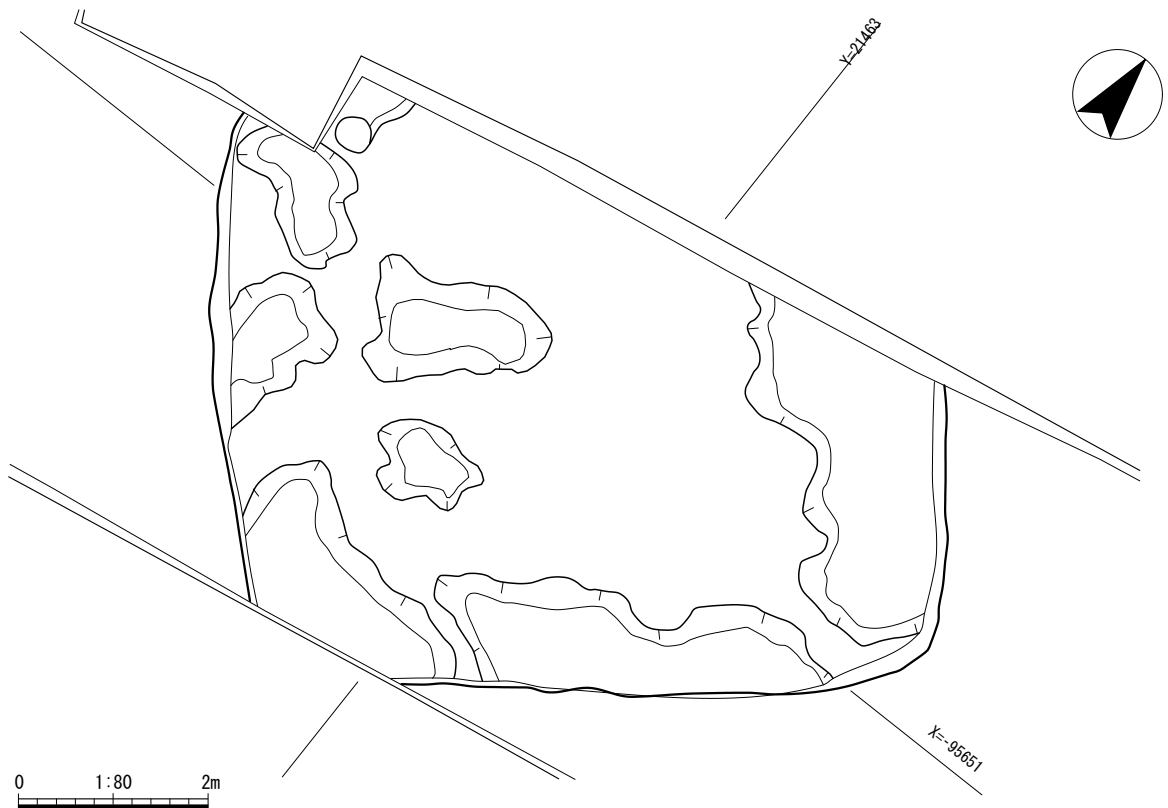
時期は、出土遺物や建物方位の検討から、漆町I期に位置づけた。



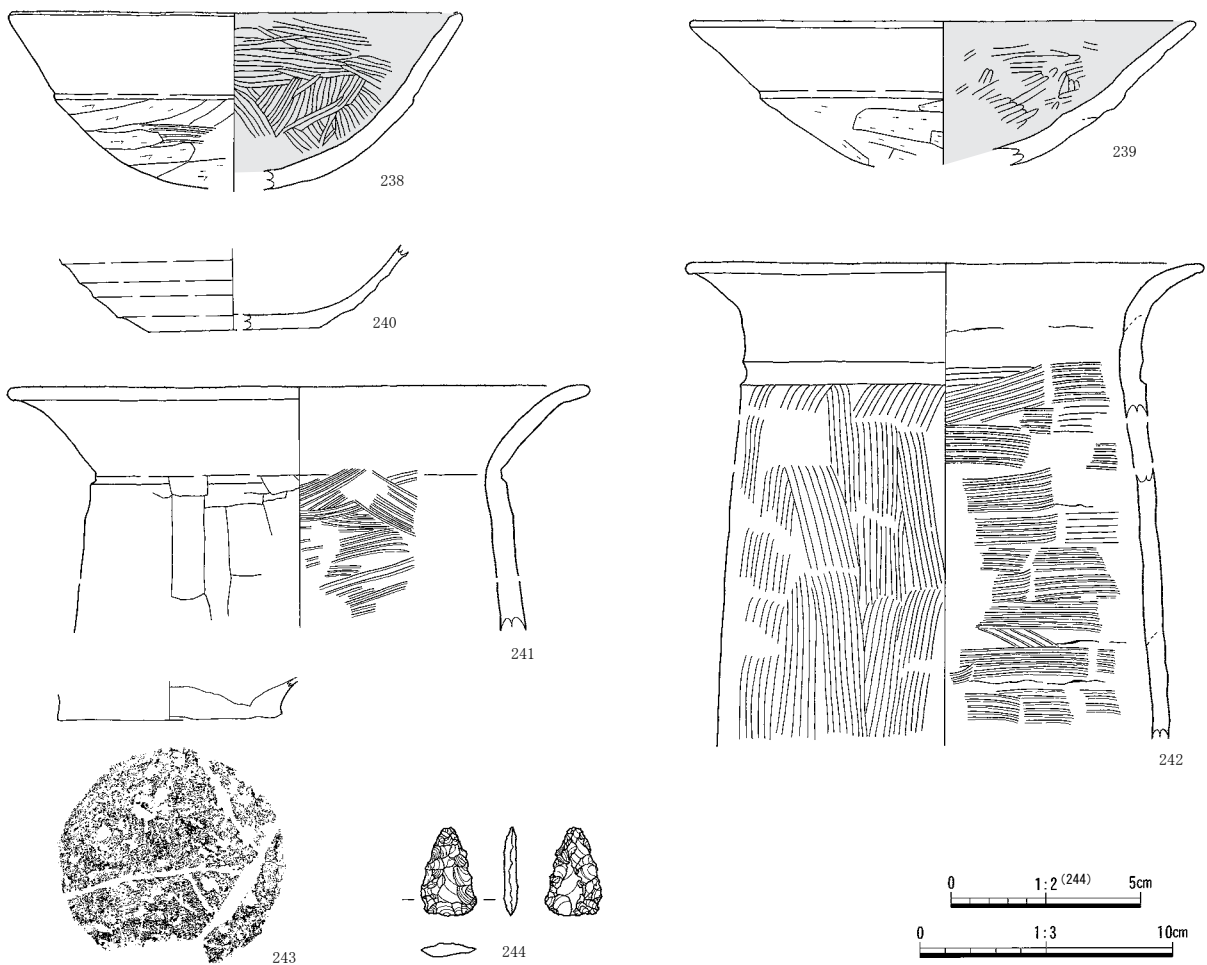
第159図 ZSI01竪穴建物跡 1



第160図 ZSI01 竪穴建物跡 2



第161図 ZSI01 竪穴建物跡 3 (掘方)



第162図 ZSI01 出土遺物

## (2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、各調査区に点在しているが、柱穴が密集して検出される、E・F・O・M区に多い傾向がある。柱穴は1,350個あり、それらを使用して42棟の建物跡に復元している。調査区が細長いこともあり、建物跡として復元する数は柱穴数に対し少ない。なおここでは、柱掘方を単に柱穴と略して記述する。また、建物の主軸の共通性が同時期に併存した建物群としてのひとつの根拠となるため、南北棟・東西棟ともに北に対する東西の振れ方を建物方位として記載している。

### ESB01 (第163図)

E区西部に位置する掘立柱建物跡である。建物跡が東西には広がらないことから、梁行1間、桁行1間以上の南北棟に復元したが、南北両端とも調査区外へ続くことから全容は不明である。遺構の確認は表土直下のIV層で行っている。ESI01と隣接しており、上部構造が重複するものの新旧関係は不明である。規模は、南北2.4m以上、東西が1.7mである。建物方位はN-13°-Wである。調査区内での柱間寸法は、梁行が1.7m、桁行が2.4mである。柱穴は4個あり、いずれも円形を呈し、規模は直径が20～24cm前後、深さは確認面から20～40cmであり、南側の柱穴2個(EP006、EP123)が深い。堆積土は黒褐色シルトが主体であり、EP006には柱痕跡が確認できる。遺物は出土せず、時期も不明である。

### ESB02 (第163図)

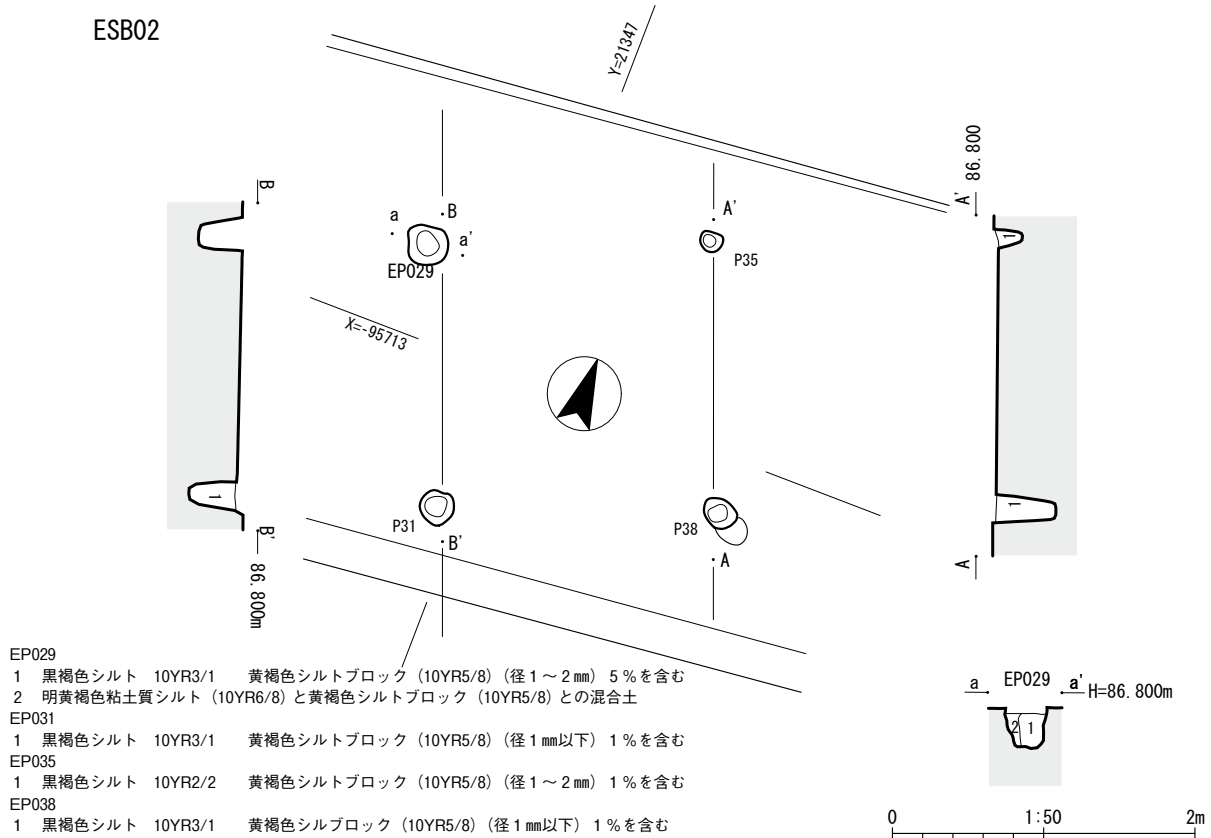
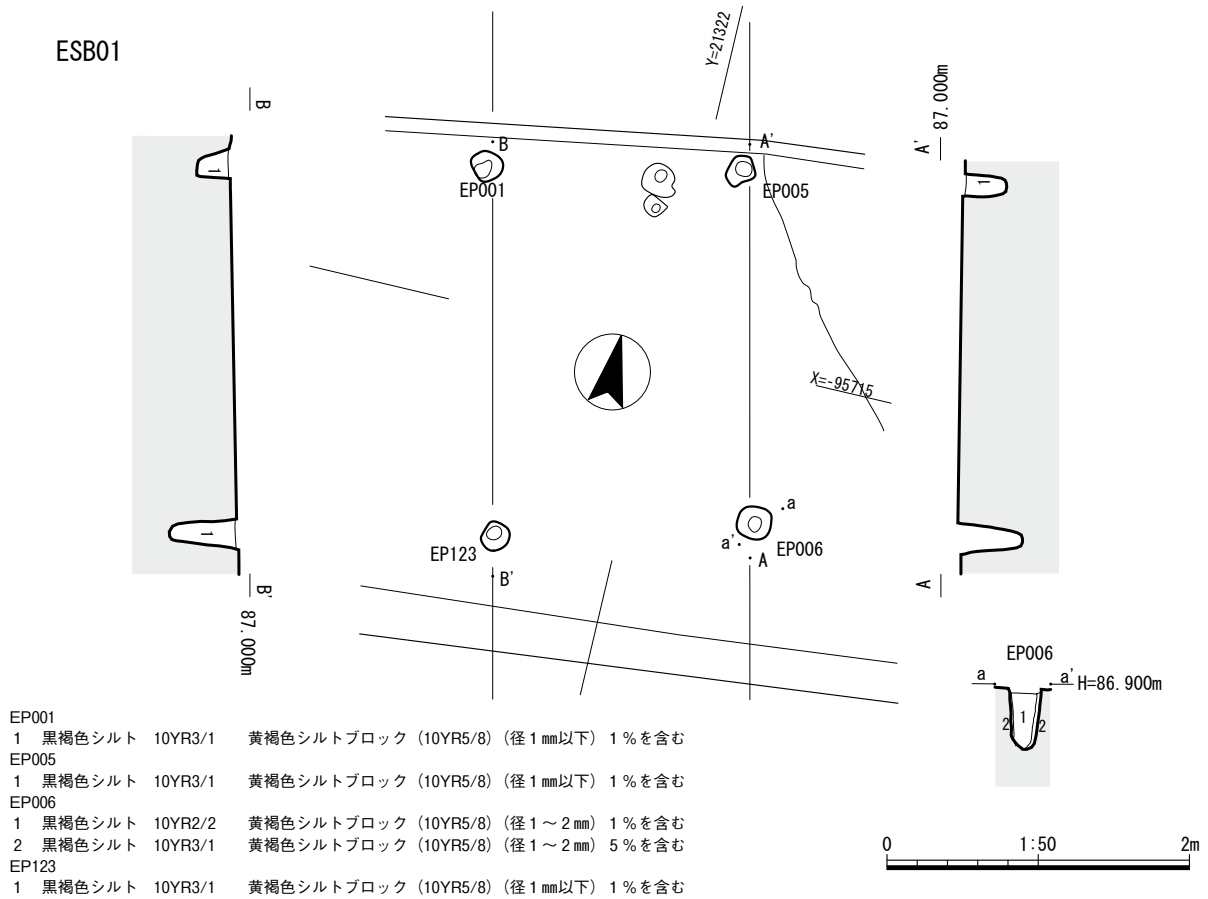
E区西部に位置する掘立柱建物跡である。建物跡が東西には広がらないことから、梁行1間、桁行1間以上の南北棟に復元したが、両端とも調査区外へ続くことから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。他遺構との重複はない。規模は南北1.8m以上、東西1.8m、建物方位はN-21°-Wである。調査区内における柱間寸法は、梁行、桁行ともに1.8mである。柱穴は4個あり、いずれも平面形は円形から楕円形状を呈する。規模は、直径が15～30cm、確認面からの深さが20～42cmとやや幅がある。堆積土は黒褐色シルトが主体である。遺物は出土せず、時期も不明である。

### ESB03 (第164図)

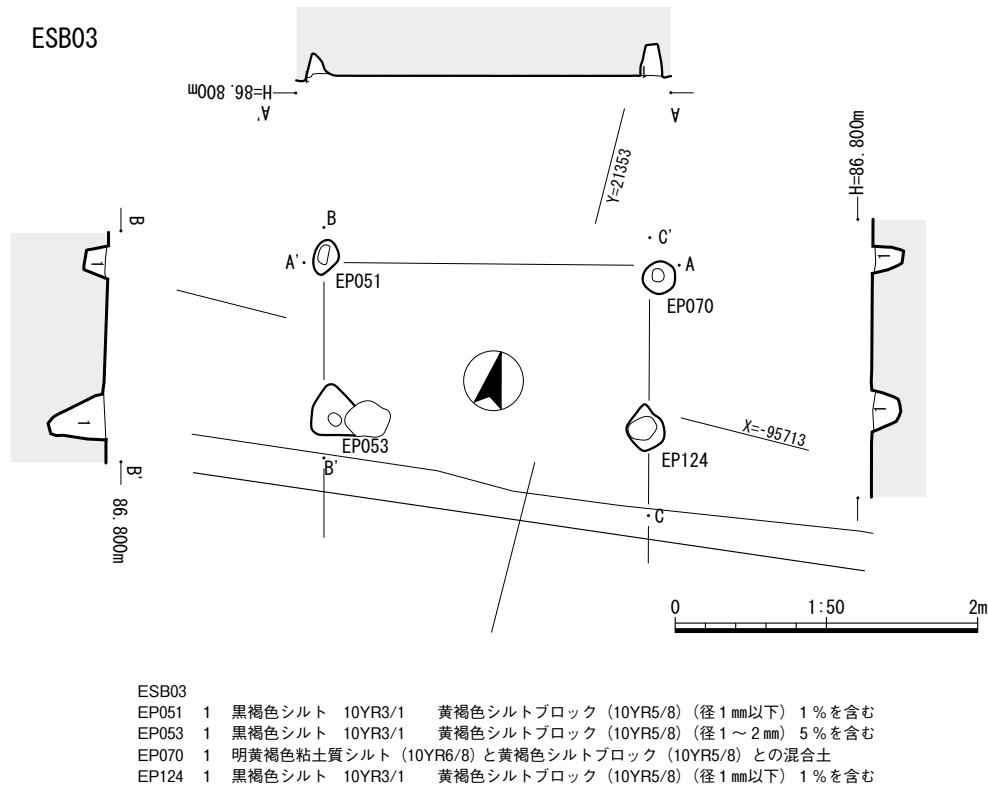
E区西部に位置する掘立柱建物跡である。建物跡が北には広がらないことから、梁行1間、桁行2間以上の南北棟に復元したが、南側は調査区外へ続くことから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB04と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。規模は南北1.5m以上、東西2.12m、建物方位はN-14°-Wである。調査区内における柱間寸法は、梁行が2.12m、桁行が1.0mである。柱穴は4個のみを確認し、平面形は楕円形を呈する。規模は直径が22～53cm、確認面からの深さが17～41cmであり、EP053のみが規模が大きい。堆積土は黒褐色シルトが主体である。遺物は出土せず、時期も不明である。

### ESB04 (第165図)

E区西部に位置する掘立柱建物跡である。建物跡が東西には広がらないことから、梁行1間以上、桁行1間以上の南北棟に復元したが、両端とも調査区外へ続くことから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB03、ESB05と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。規模は南北2.42m以上、東西3.33m、建物方位はN-11°-Wである。調査区内に



第163図 ESB01・02掘立柱建物跡



第164図 ESB03掘立柱建物跡

おける柱間寸法は、梁行が2.42m、桁行が1.8mである。柱穴は4個あり、平面形は方形から隅丸方形状を呈し、規模は、長軸の長さが44~50cm、短軸が20~38cmであり、確認面からの深さが41~55cmである。周囲の柱穴に比べて規模の大きな掘方である。堆積土は黒褐色シルト、明黄褐色シルトが主体である。柱痕跡は、EP067・EP074・EP114で確認しており、柱痕跡の径は10~20cmである。遺物は出土していないが、方形の掘方や、建物方位の検討から漆町IV期に属する可能性が高い。

#### ESB05 (第166図)

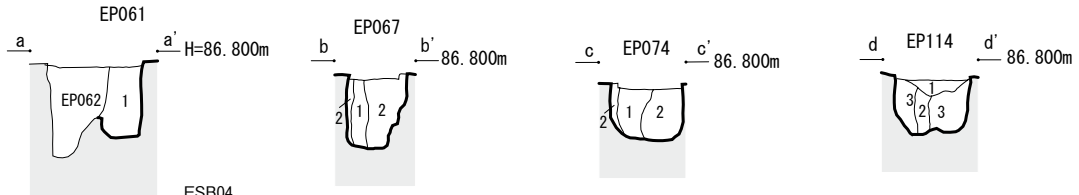
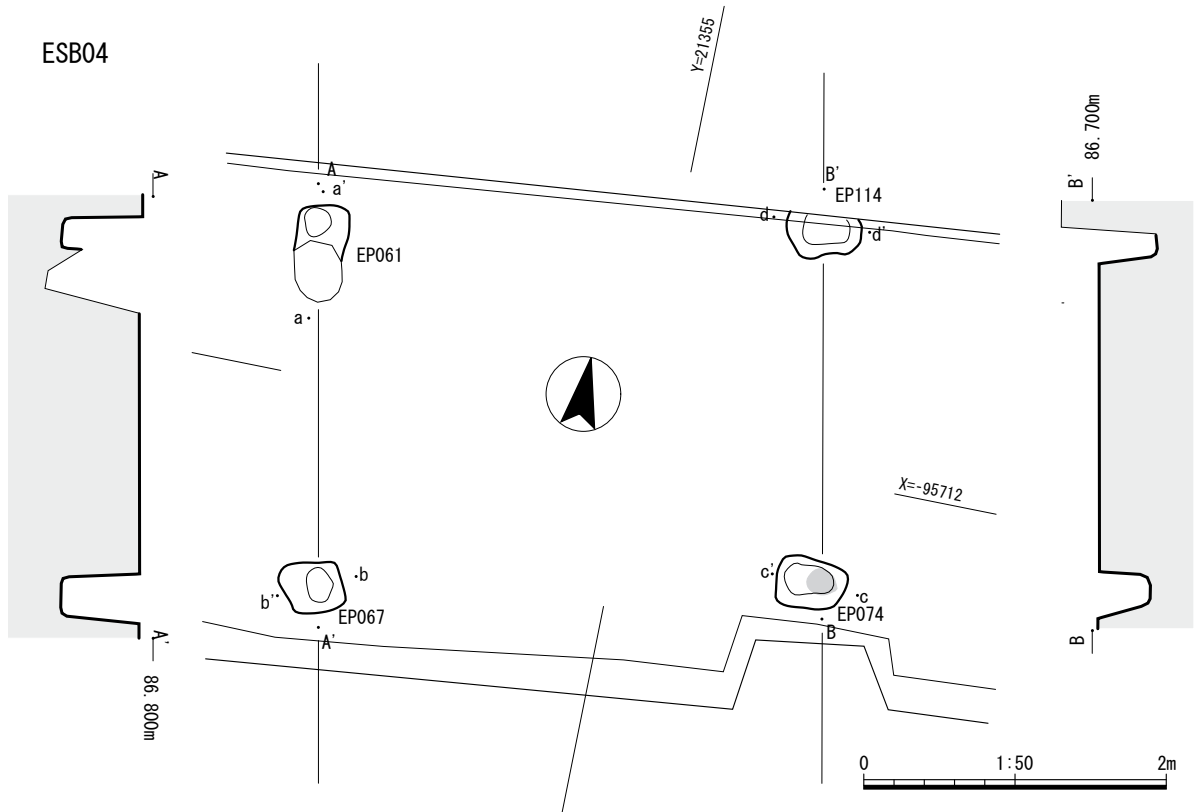
E区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行2間以上の南北棟に復元したが、南側の大部分が調査区外へ広がることから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB04・ESB06・ESB08と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模は南北1.5m以上、東西2.6m、建物方位はN-4°-Wである。調査区内における柱間寸法は、梁行が2.6m、桁行が1.5mである。柱穴は4個あり、平面形は円形から楕円形を呈する。規模は直径が16~20cm、確認面からの深さが11~25cmである。堆積土は黒褐色シルトが主体である。遺物は出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

#### ESB06 (第166図)

E区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間以上の東西棟に復元したが、南東側の大部分が調査区外へ広がることから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB05・ESB07と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模は南北1.9m、東西1.9m以上であり、建物方位はN-51°-Wである。調査区内における柱間寸法は、



ESB04

EP061

1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む

EP067

1 黒色シルト 10YR2/1 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) 1%以下を含む (柱痕跡)

2 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む

EP074

1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む

2 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 褐色シルトブロック (10YR4/6) (径3~5mm) 30%を含む

EP114

1 明黄褐色粘土質シルト 10YR6/8 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) との混合土

2 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 5%を含む

3 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む

第165図 ESB04掘立柱建物跡

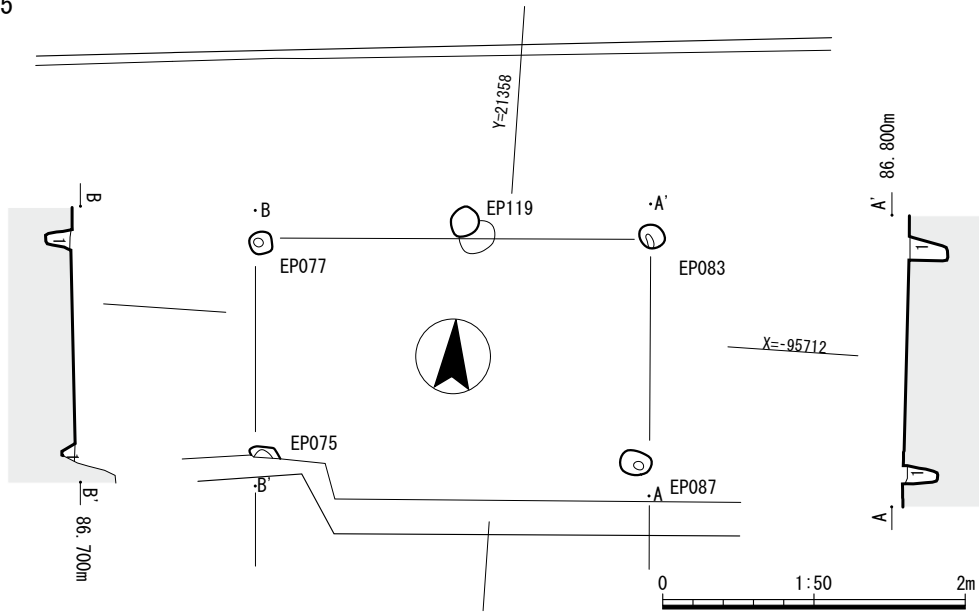
梁行が1.9m、桁行が北側柱列を基準とすると、東から1.0m・0.9mである。柱穴は5個確認し、平面形は円形から楕円形を呈する。規模は直径が22~29cm、確認面からの深さが24~53cmである。堆積土は黒褐色シルトが主体である。遺物は出土せず、時期も不明である。

ESB07 (第167図)

E区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間以上の南北棟に復元したが、南側の大部分が調査区外へ広がることから全容は不明である。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB06と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。規模は南北2.4m以上、

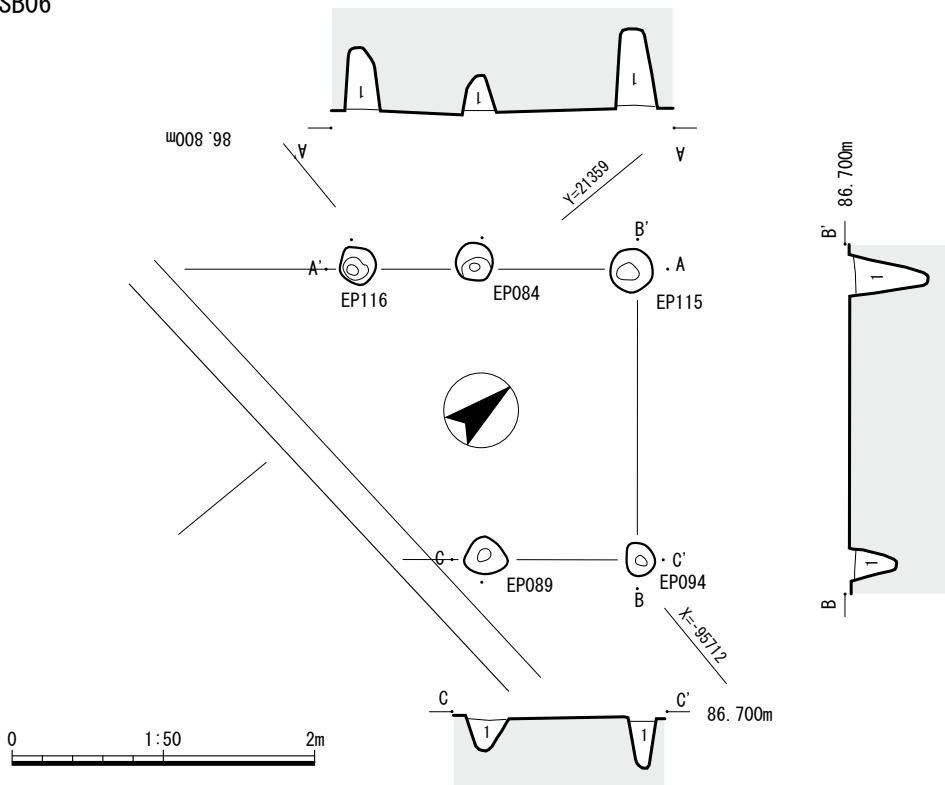


ESB05



ESB05			
EP075	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 5%を含む
EP077	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む
EP083	1	黒褐色シルト 10YR2/2	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 1%を含む
EP087	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む

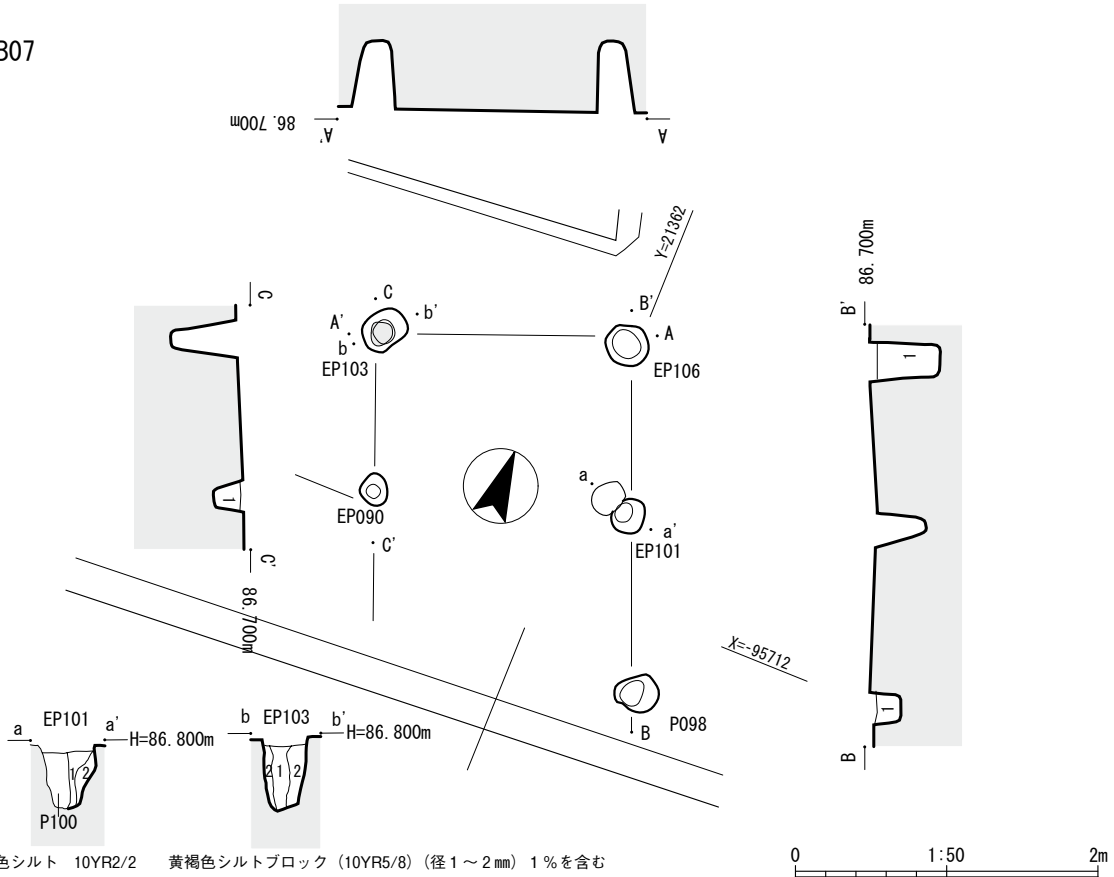
ESB06



ESB06			
EP084	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む
EP089	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む
EP094	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む
EP115	1	明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6	褐色シルトブロック (10YR4/6) (径3~5mm) 30%を含む
EP116	1	黒褐色シルト 10YR3/1	黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む

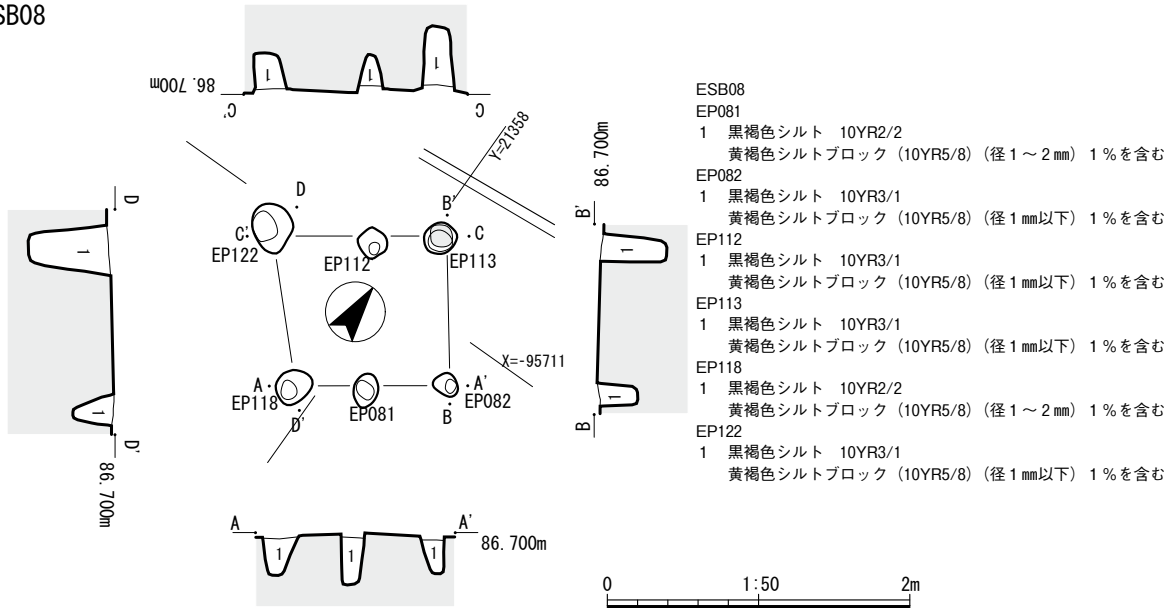
第166図 ESB05・06掘立柱建物跡

ESB07



- ESB07  
EP090  
1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 1%を含む  
EP098  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 5%を含む  
EP101  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む  
2 明黄褐色粘土質シルト 10YR6/8 と黄褐色シルトブロック (10YR5/8) との混合土  
EP103  
1 黒色シルト 10YR2/1 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) 1%以下を含む (柱痕跡)  
2 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 褐色シルトブロック (10YR4/6) (径3~5mm) 30%を含む  
EP106  
1 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 褐色シルトブロック (10YR4/6) (径3~5mm) 30%を含む

ESB08



- ESB08  
EP081  
1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 1%を含む  
EP082  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む  
EP112  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む  
EP113  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む  
EP118  
1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1~2mm) 1%を含む  
EP122  
1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む

第167図 ESB07・08掘立柱建物跡

東西1.7m、建物方位はN-22°-Wである。調査区内における柱間寸法は、梁行が1.7m、東側柱列を基準とすると桁行が北から1.2m・1.2mである。柱穴は5個確認しており、平面形は円形から楕円形を呈する。規模は直径が22～31cm、確認面からの深さが21～47cmである。堆積土は黒褐色シルトや明黄褐色粘土質シルトが主体である。EP103やEP100では柱痕跡が確認される。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### ESB08 (第167図)

E区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間の東西棟に復元した。検出は表土直下のIV層で行っている。ESB05と重複しているが、柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。規模は南北、東西とも1.0mである。建物方位はN-35°-Wである。柱間寸法は、梁行が1.0m、桁行が南側柱列を基準とすると、0.5mの等間である。柱穴は6個あり、平面形は円形から楕円形を呈する。規模は直径が17～33cm、確認面からの深さが26～54cmである。堆積土は黒褐色シルトが主体である。遺物はEP122から土師器の細片が5.9gのみ出土しているが、時期は不明となる。

#### FSB02 (第168図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行2間以上の南北棟と復元したが、南半分は調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB03、FSB10、FSD04、FSD07と重複関係にあるが、直接切り合いがないためいずれも新旧関係は不明である。規模は、南北3.4m以上、東西2.3mであり、建物方位はN-26°-Wである。柱間寸法は桁行1間分が2.2m、梁行は西から1.1m、1.2mである。建物跡を構成する柱穴は5個あり、いずれも不整形な楕円形状を呈する。規模は、径が18～34cmの範囲にあり、20cm前後と30cm前後の2種ある。深さは確認面から10～20cmと浅い。堆積土は黒～黒褐色を呈する粘土質シルトであるが、FP107のみ褐灰色を呈する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

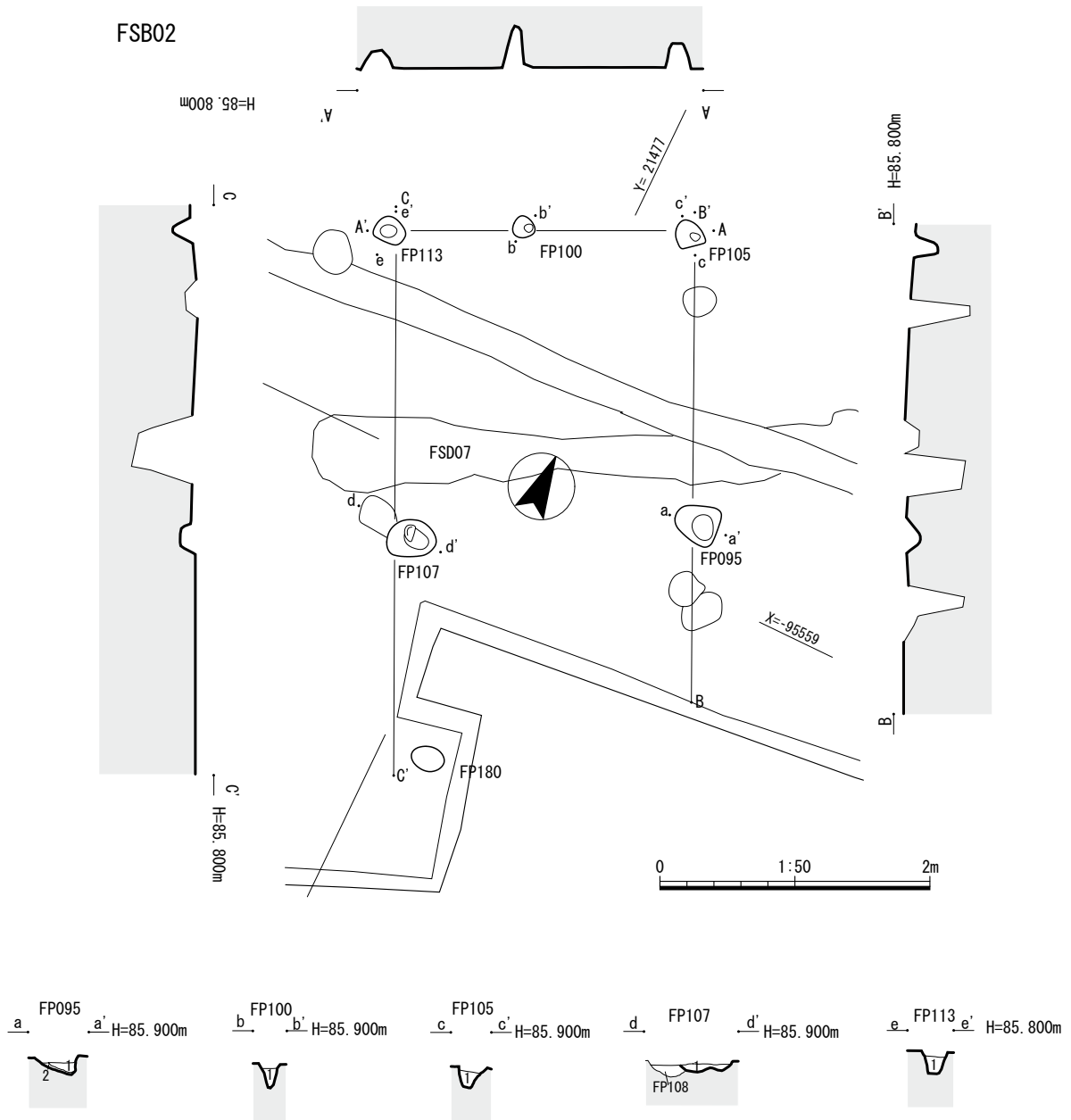
#### FSB03 (第169図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間以上の南北棟と復元したが、北側の大部分が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB02、FSB10、FSB01、FSD04と重複関係にあり、そのうちFSB01と切り合っており、本遺構の方が新しいが、それ以外の遺構とは直接切り合いがないためいずれも新旧関係は不明である。

規模は、南北3m以上、東西2.6mであり、建物方位はN-38°-Wである。柱間寸法は桁行が、南から2間分が1.3m、梁行が1.3m等間である。建物跡を構成する柱穴は調査区内に4個あり、いずれも円形を基調とする平面形である。柱穴規模は、径がいずれも20cm前後であり、深さは確認面から15cm前後であるが、FP97のみ平面規模、深さともに大きい。堆積土は黒～黒褐色や褐灰色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### FSB04 (第170・171図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行5間以上の東西棟と復元したが、北東側が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB05・06・08・11・12、FSI03、FSD04・05と重複関係にある。そのうち5棟の掘立柱建物とは空間的に重複しているが、各柱穴は直接切り合い関係にないため新旧関係は不明である。FSD04・05と



FSB02

FP095

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状10%を含む
- 2 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状40%を含む

FP100

- 1 黒褐色シルト 10YR3/2 褐色(10YR4/6)シルト粒1%含む

FP105

- 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/3 地山土斑状2%を含む

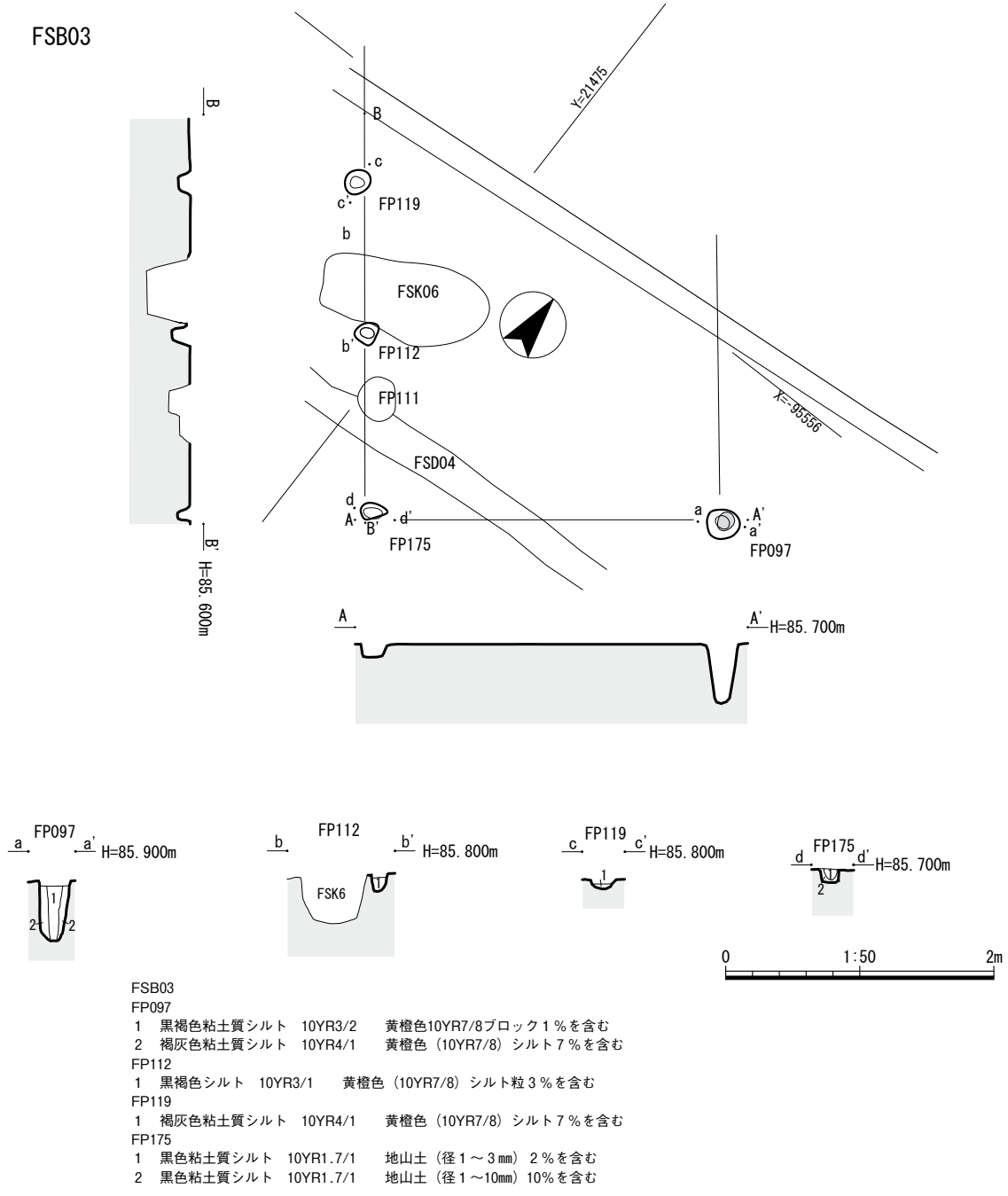
FP107

- 1 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 黄橙色シルト(10YR7/8)ブロック1%を含む

FP113

- 1 黒褐色シルト 10YR3/2 褐色(10YR4/6)シルト粒1%を含む

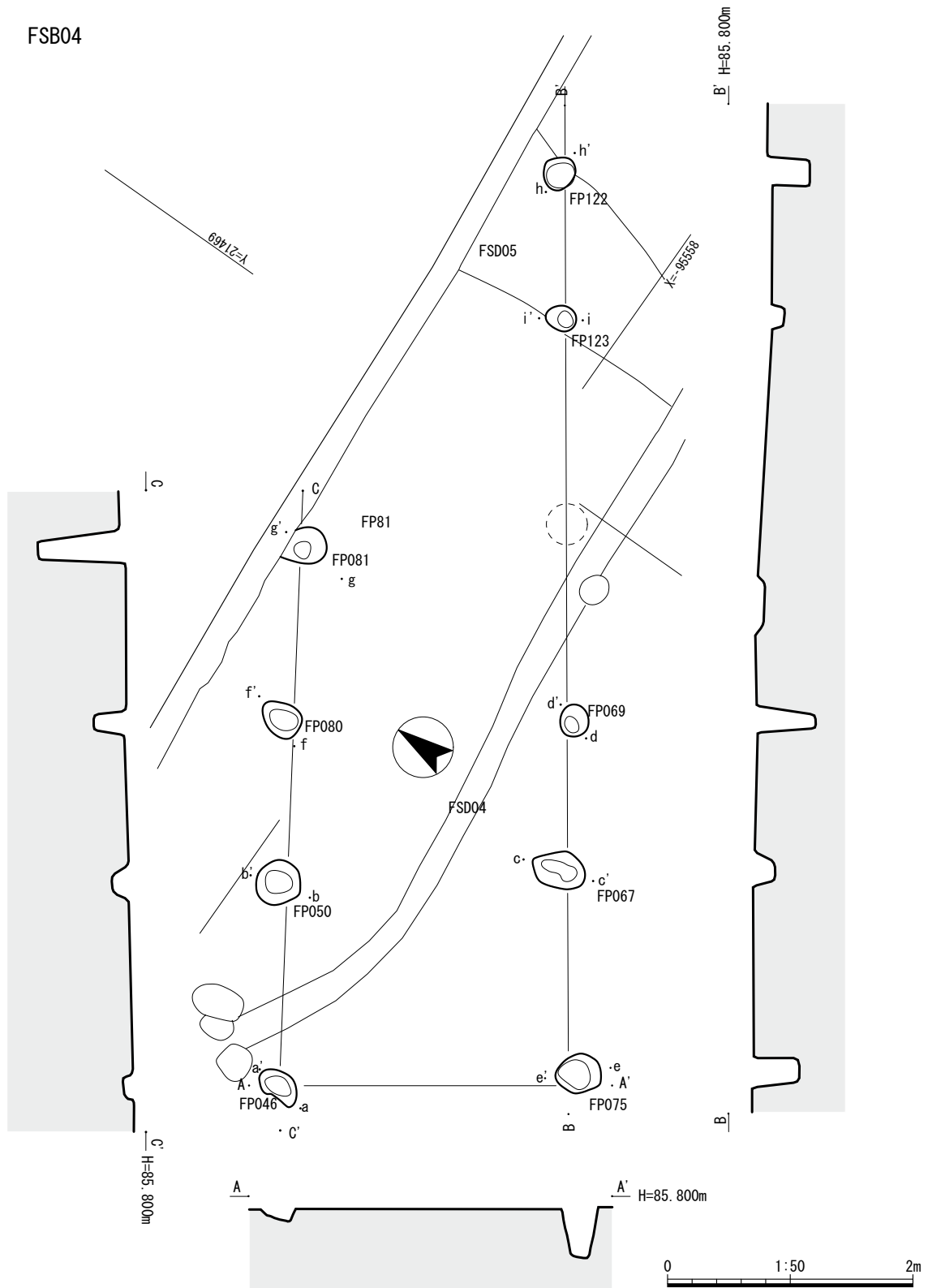
第168図 FSB02掘立柱建物跡



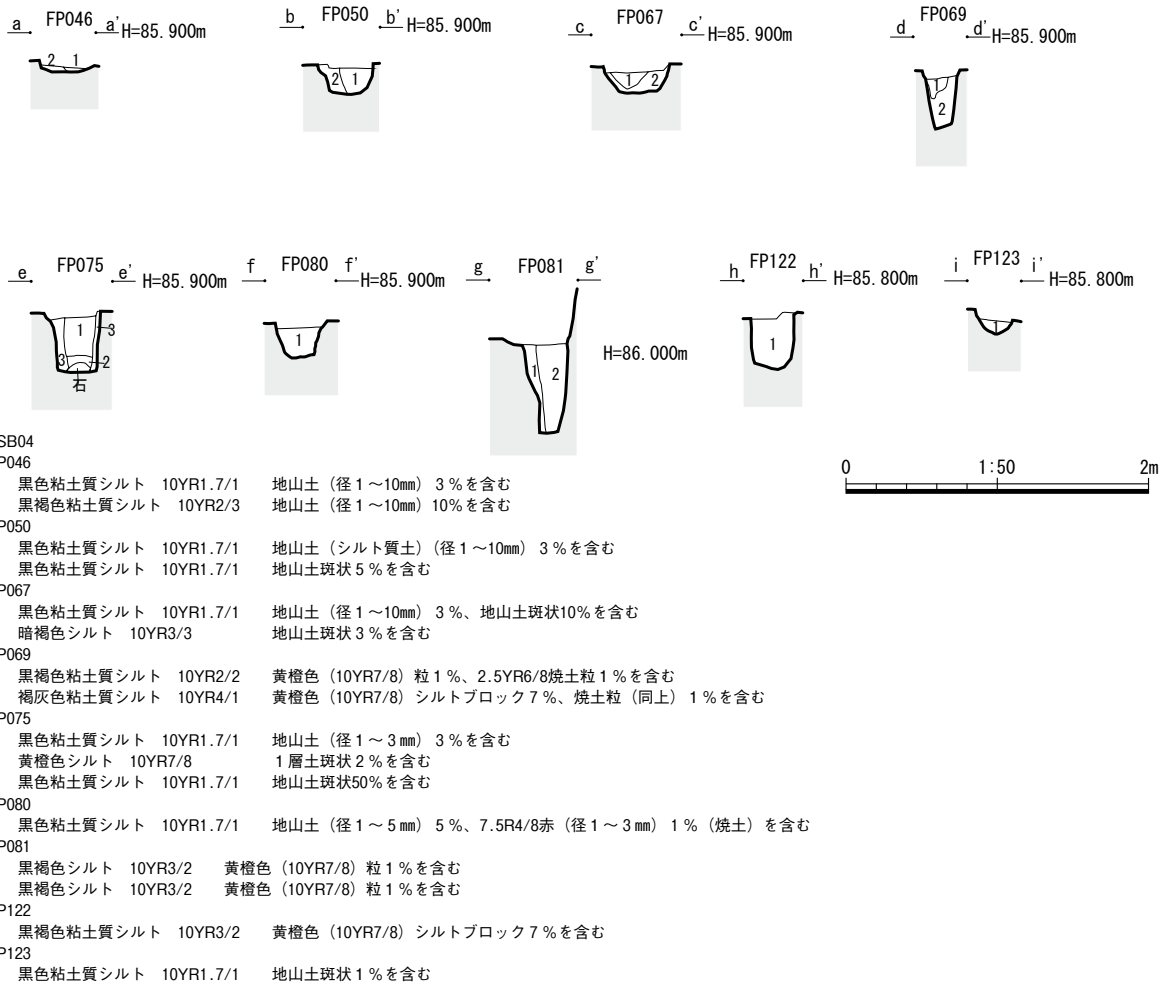
第169図 FSB03掘立柱建物跡

FSI03とは切り合い関係にあり、本遺構の方が新しい。

規模は、南北2.4m、東西8.2m以上であり、建物方位はN-35°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が西から1.7m・1.3m・1.3m・1.8m・1.3m、梁行が2.4mである。等間ではないものの1.3mを多用しており、柱間の配分には規則性が認められる。建物跡を構成する柱穴は調査区内に9個あり、1箇所が本来ある位置に存在していない。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は24~46cmの間にある。深さは10から58cmと幅があり一定していない。堆積土は黒~黒褐色や褐灰色を呈する粘土質シルトを基調とする。柱痕跡はFP50・81・75において明確に確認できている。



第170図 FSB04掘立柱建物跡 1



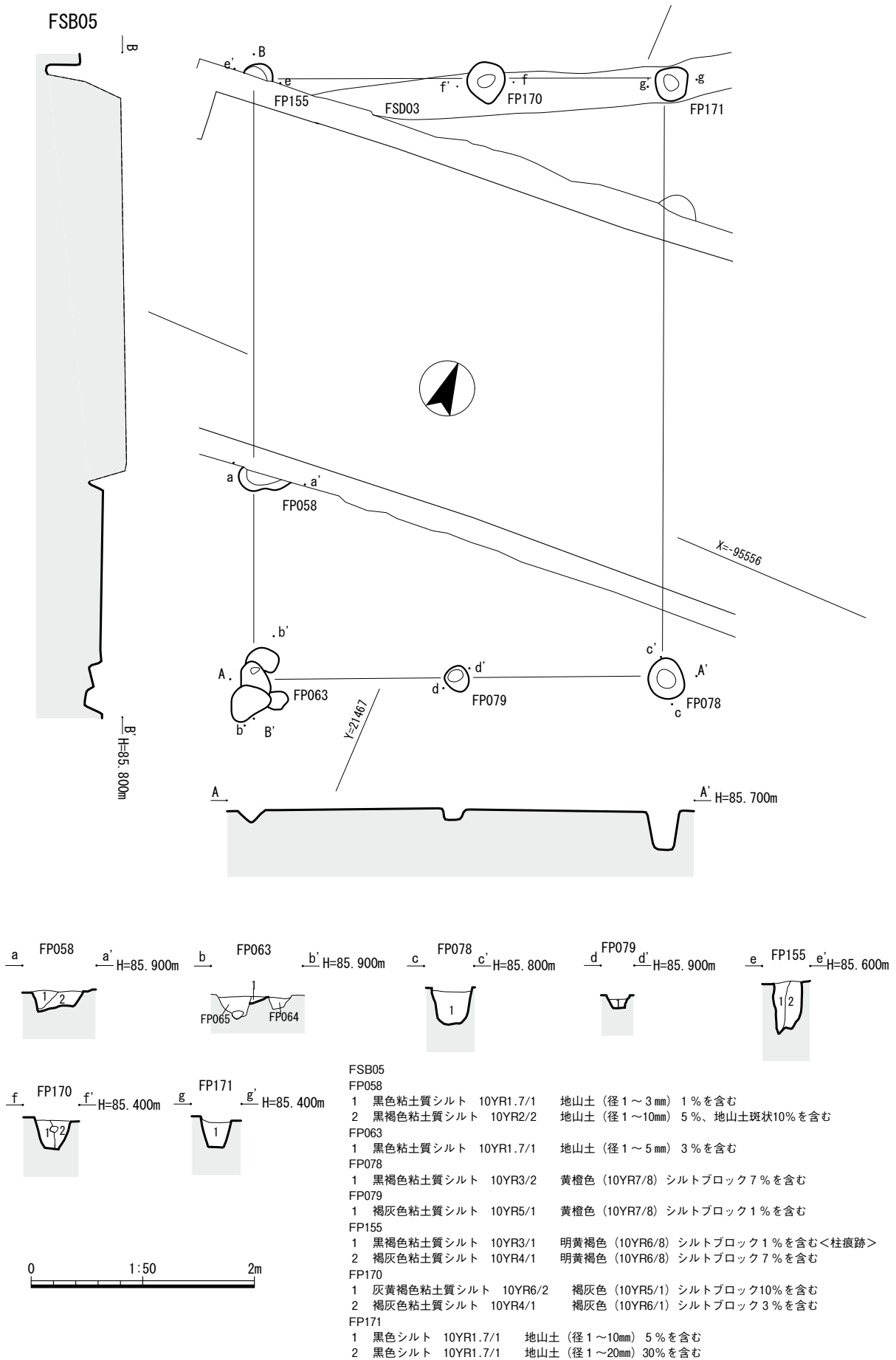
第171図 FSB04掘立柱建物跡 2

出土遺物はFP075から土師器甕の細片が20gのみ出土しているが混入かもしれない。時期は不明である。

#### FSB05 (第172図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行が推定で3間の南北棟と復元したが、中央が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB04・06・08・11、FSD03と重複している。切り合い関係を見ると、FSB06より古く、FSB11、FSD03よりは新しい。他の掘立柱建物とは空間的に重複しているが、各柱穴は直接切り合い関係にないため新旧関係は不明である。

規模は、南北5.46m、東西3.64mであり、建物方位はN-24°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.82m (1尺=30.3cmとすると6尺)と復元できるが、北側の梁行は西から2.12m・1.52mであり、1尺分ずれている。建物跡を構成する柱穴は調査区内に7個あり、平面形はいずれも円形～楕円形を基調とし、規模は24~38cmの間に収まり、比較的まとまっている。深さは10~50cmと幅があり一定していないが、30cm前後のものが多い。堆積土は黒～黒褐色や褐灰色を呈する粘土質シルトを基調とする。柱痕跡はFP155・170において明確に確認できる。遺物はFP175より土師器の細片がわずかに(0.8g)出土しているのみである。時期は不明である。



第172図 FSB05掘立柱建物跡



## FSB06 (第173図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行1間以上の南北棟と復元したが、北側が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB04・05・08・11・12、FSD04と重複関係にある。新旧関係はFSB05・11よりも新しいことが切り合い関係からわかるが、それ以外とは各柱穴は直接切り合い関係にないため不明である。

規模は、南北2m以上、東西4.6mであり、建物方位はN-16°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が1間分のみ復元でき、南から2.0mであり、梁行が西から2.0m・2.6mである。等間ではないものの、2.0mを多用している可能性がある。建物跡を構成する柱穴は調査区内に4個のみ確認している。平面形はいずれも不整な楕円形を基調とし、規模は32~40cmの間にある。深さは14~24cm前後と浅い。堆積土は黒~黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とする。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

多くの柱穴が調査区外にあり、建物跡の2辺のみからの復元であるため、あるいは建物跡ではないかもしれない。

## FSB07 (第174図)

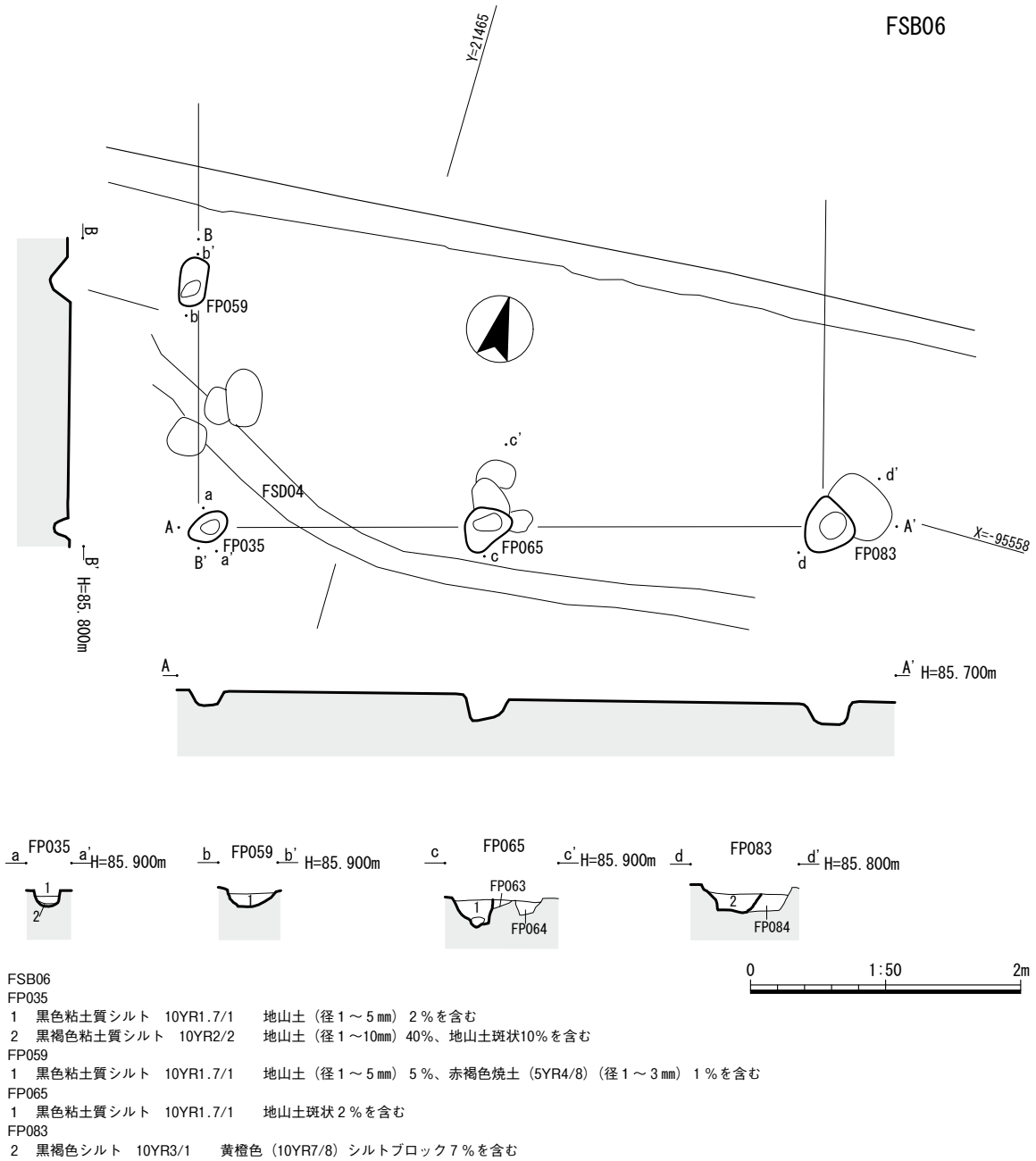
F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行3間の東西棟と復元した。調査区内において完結している。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB08・12・13、FSK04と重複関係にあるが、各柱穴は直接切り合い関係にないため新旧関係は不明である。

規模は、南北1.6m、東西3.6mであり、建物方位はN-68°-Wである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で1.21mの等間に、南側柱列は西から1.21m・1.0m・1.21mに復元でき、北と南側で寸法が異なっている。梁行が1.6mである。この寸法の異なりから、平面形は台形状を呈する。建物跡を構成する柱穴は8個を確認している。各柱穴の平面形はいずれも円形~楕円形を基調とし、規模は径15~30cmの間にありやや幅がある。おおよそ30cm前後のものが多い。深さは10~30cm前後とやや浅い。底面レベルも一定ではない。堆積土は黒~黒褐色を主体とする粘土質シルトがほとんどである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

## FSB08 (第175図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行4間以上の東西棟と復元したが、北東側が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB04・05・06・07・12の掘立柱建物跡やFSD04溝跡と重複関係にある。新旧関係は、前者とは各柱穴が直接切り合い関係にないため不明であるが、後者とは切り合い関係にあり、本遺構の方が新しいと判断している。

規模は、南北2.4m、東西5.4m以上であり、建物方位はN-26°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が、西から1.2m・1.4m(あるいは2.6m)・1.4m・1.4mであり、梁行が1.2mの等間である。1.2mと1.4mを基準としている。桁行である南側柱列では、FP022の次の柱穴が確認できなかったが、基準寸法を考慮して柱間寸法を復元している。2.0mを多用している可能性がある。建物跡を構成する柱穴は調査区内に6個のみ確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は26~36cmの間にある。確認面からの深さは14~70cm前後と幅があるが、20cm前後のものと40cm前後のものが多い。底面のレベルは一定ではない。堆積土は黒~黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とする。柱痕跡はFP017とFP022で明確に確認できる。遺物はFP076より土師器の非ロクロ甕などの細片が少量(36.1g)



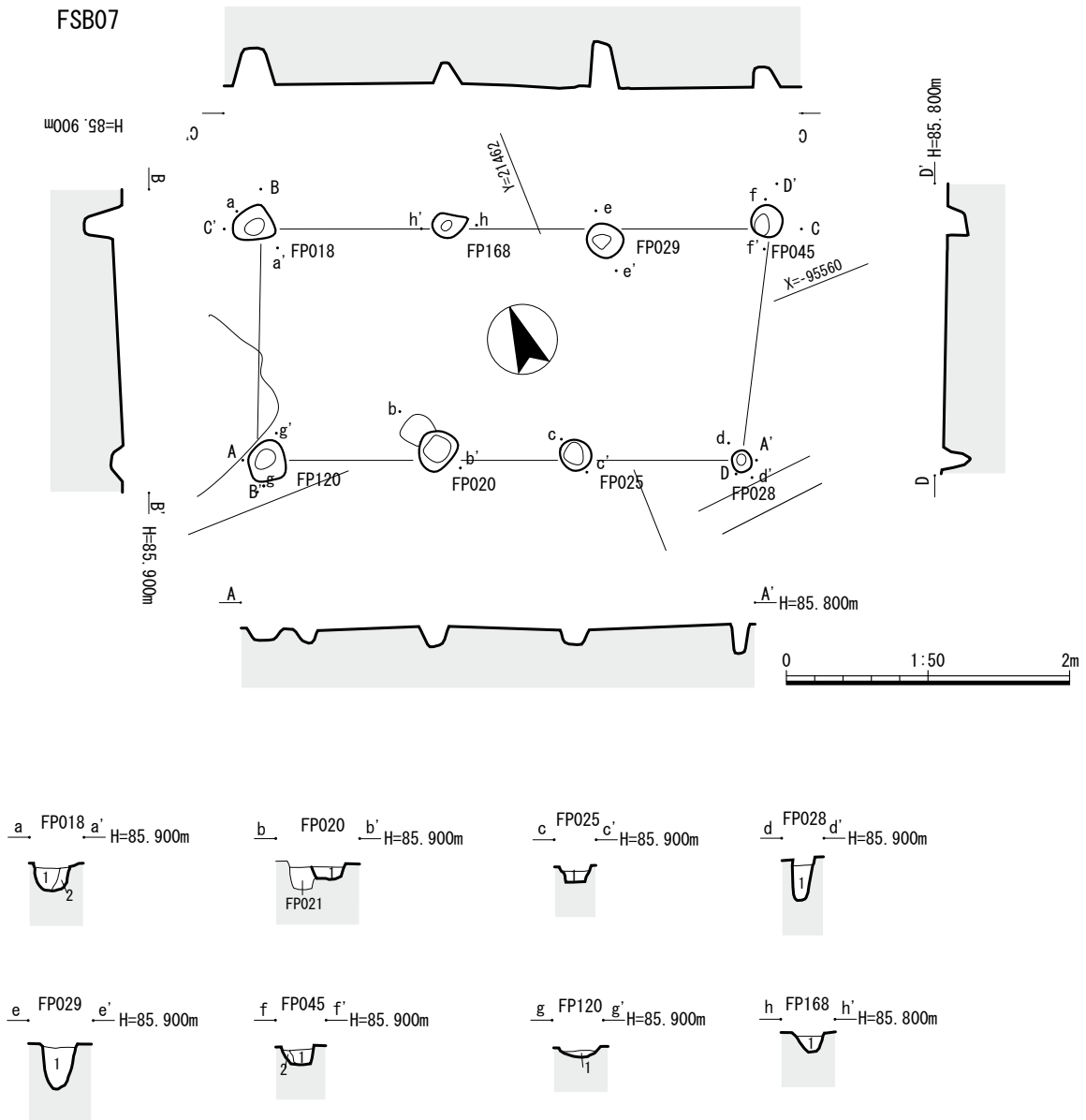
第173図 FSB06掘立柱建物跡

出土しているのみであるが、時期は不明としておく。

### FSB09 (第176図)

F区中央部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間の南北棟と復元したが、南側が調査区外に位置するため詳細は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っているが、表土である耕作土の削平が多く及んでいる。調査区内においては重複関係がない。

規模は、復元で南北は5.4m、東西は復元で4.0mであり、建物方位はN-65°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が調査区内では1.8mの等間に、梁行が東から1.8m・2.2mである。1.8mを基準としていると推定されるが、梁行1間分のみ2.2mとなる。調査区外にあると予想される柱穴は、



FSB07

FP018

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 5 mm) 2 %、炭化物 1 ~ 10mm 3 % を含む
- 2 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 30mm) 10% を含む

FP020

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 10mm) 10%、地山土斑状 3 %

FP025

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 5 mm) 5 % を含む

FP028

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 10mm) 2 % を含む

FP029

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状 5 % を含む

FP045

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1 ~ 3 mm) 2 % を含む
- 2 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状 10% を含む

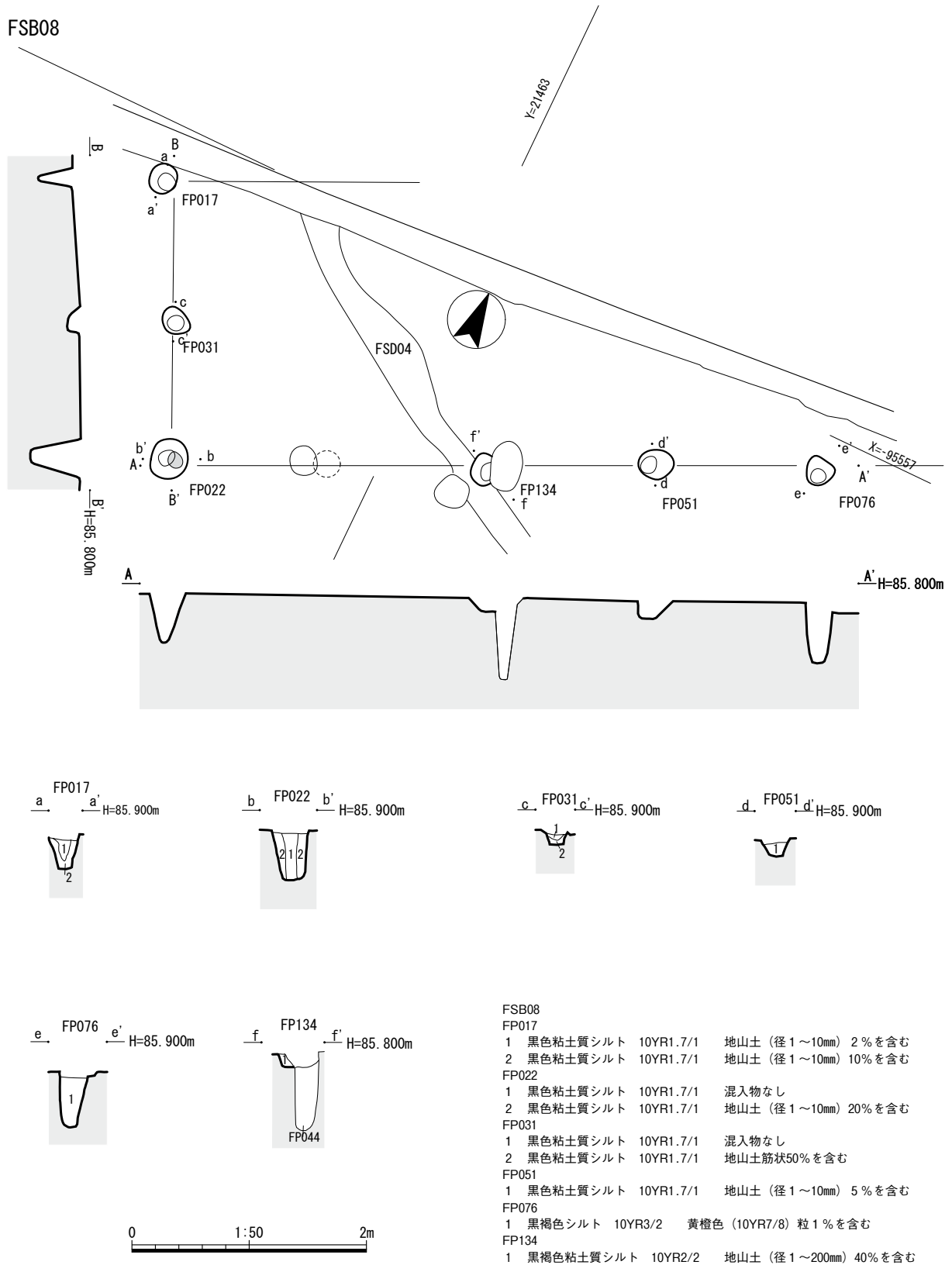
FP120

- 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 地山土斑状 2 %、地山土 (径 1 ~ 5 mm) 5 % を含む

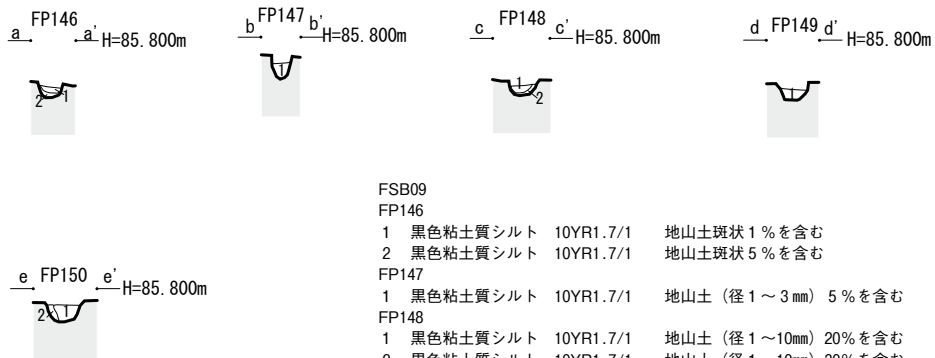
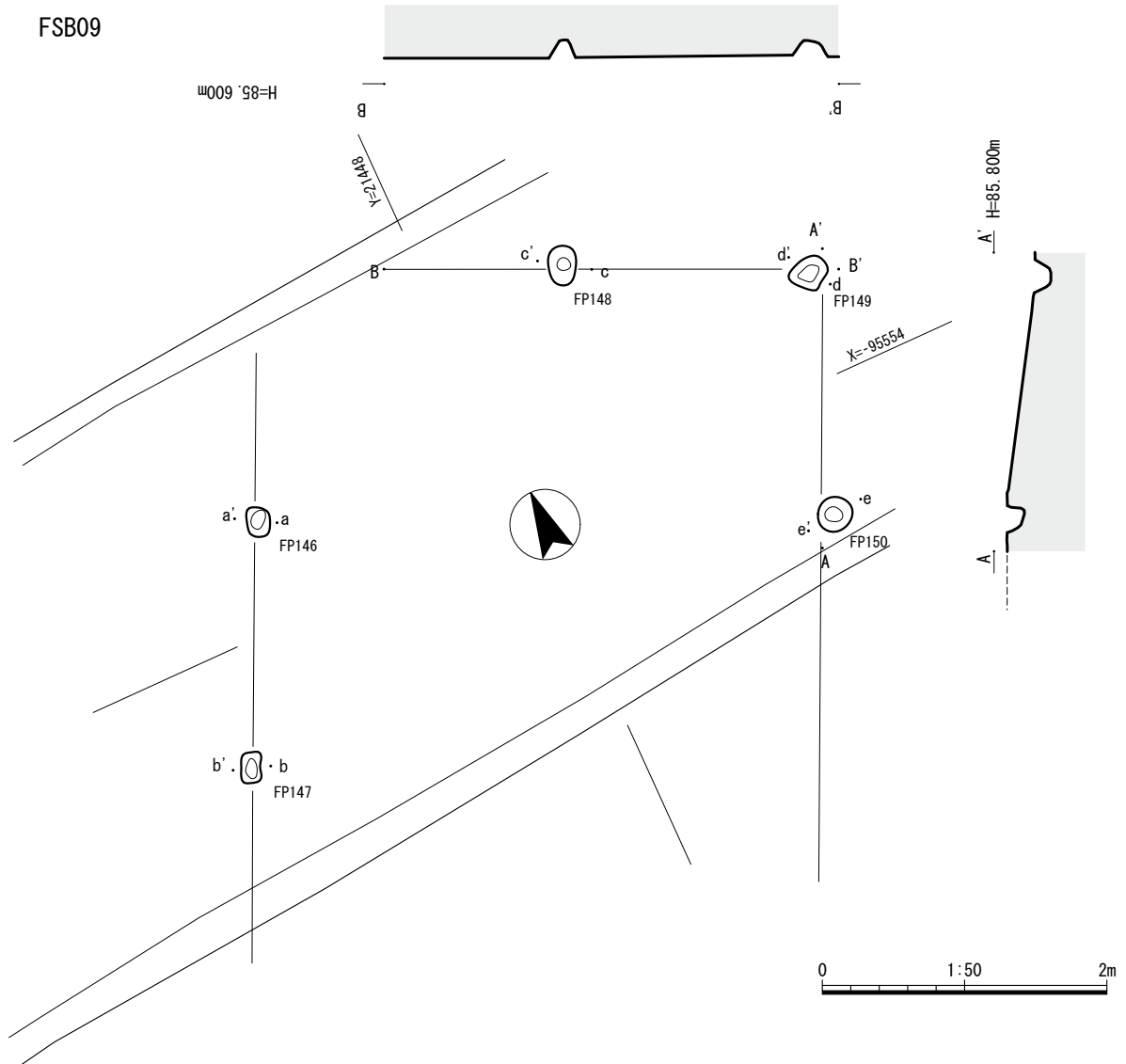
FP168

- 1 暗褐色シルト 10YR3/4 地山土 (径 1 ~ 10mm) 5 % を含む

第174図 FSB07掘立柱建物跡



第175図 FSB08掘立柱建物跡



FSB09

FP146

- 1 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状 1% を含む
- 2 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状 5% を含む

FP147

- 1 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~3mm) 5% を含む

FP148

- 1 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~10mm) 20% を含む
- 2 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~10mm) 30% を含む

FP149

- 1 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~5mm) 2% を含む

FP150

- 1 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~3mm) 3% を含む
- 2 黑色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径 1~5mm) 10% を含む

第176図 FSB09掘立柱建物跡

F区南側調査区には及んでいないことから桁行3間と復元したもので、桁行の柱間寸法も基準寸法を考慮した。建物跡を構成する柱穴は調査区内に5個のみ確認している。円形から楕円形を基調とするが、2個は方形を基調とする平面形である。規模は20～30cmの間にあり、確認面からの深さは10～14cm前後と削平のため浅い。堆積土は黒色を呈する粘土質シルトを基調とする。遺物は出土していない。建物方位の検討からも時期は不明である。

#### FSB10 (第177図)

F区東端部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行2間以上と復元したが、南側の一部が調査区外に位置するため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB02・03やFSD04、FSD01と重複関係にある。ただし、一部の柱穴はFSD07堀跡とFSB01門跡が同時期と想定すると本遺構とは直接切り合い関係にあり、これらより古いことがわかる。FSD04とはFSD07を介して新旧関係がわかることから、FSB10→FSB01+FSD07→FSD04の順に新しいことがわかる。FSB02とFSB03は各柱穴が直接切り合い関係にないため新旧関係は不明である。

規模は、南北4.4m以上、東西4.4mであり、建物方位はN-28°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が2.2mの等間、梁行も2.2mの等間である。いずれも2.2m前後の値を基準としており、規則性が高い。建物跡を構成する柱穴は調査区内に5個のみ確認している。一部の柱穴(FP191・196)は検出のみのため、詳細は不明である。平面形はいずれも楕円形を基調とし、規模は30～50cmの間にあり、周囲の建物よりもやや大きい。確認面からの深さは15～20cm前後と浅い。堆積土は黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とするが、褐灰色や暗褐色を呈するシルト層も含んでいる。遺物は出土していない。時期は不明である。

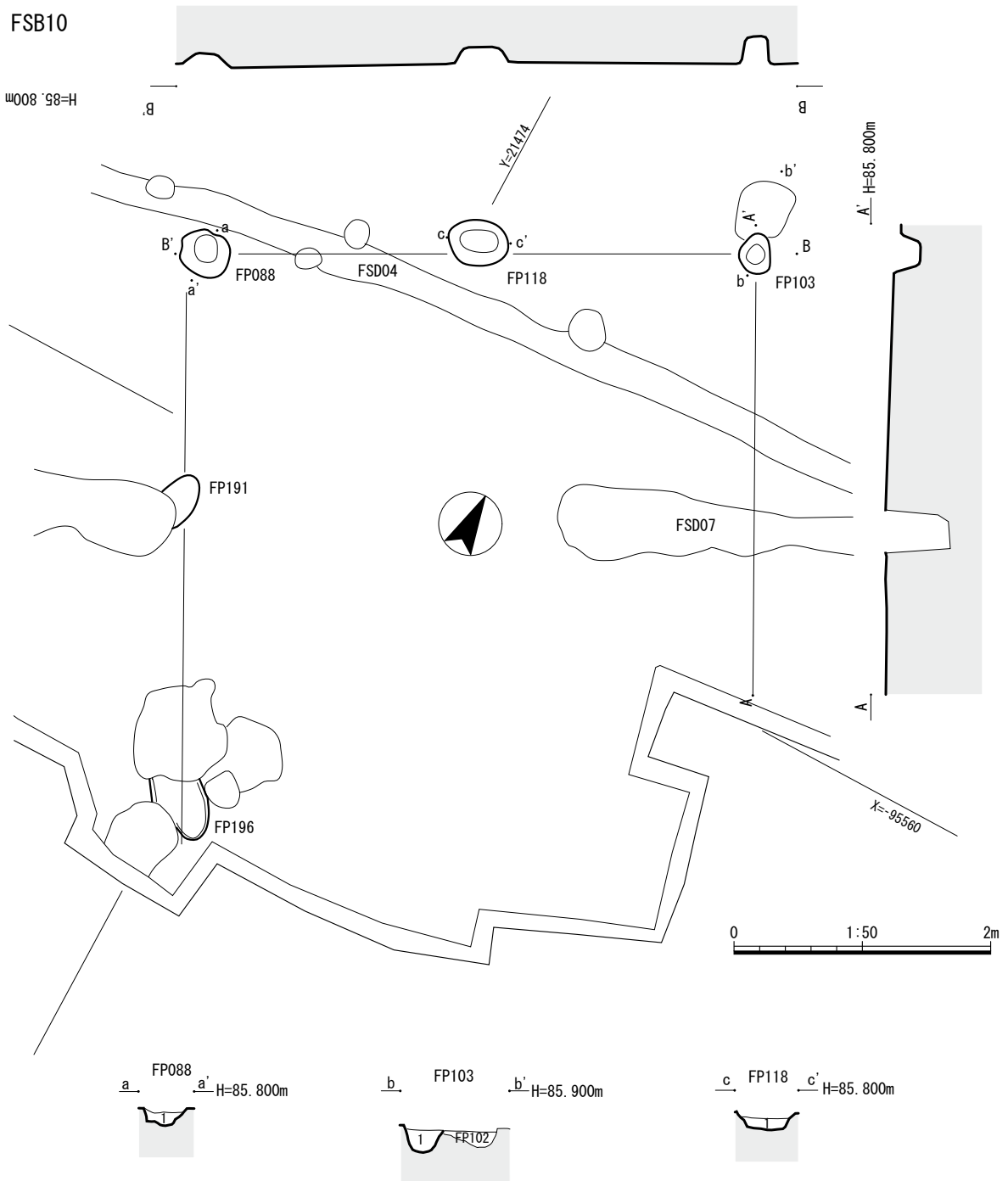
#### FSB11 (第178図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間の東西棟と復元したが、南側柱列の一部には柱穴がない箇所もあり、不明な部分もある。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB04・05・06やFSD04と重複関係にある。各建物の柱穴との切り合い関係からFSB04・05より古いことがわかるが、それ以外の遺構とは直接切り合い関係がないため新旧関係は不明である。規模は、南北2.2m、東西2.8mであり、建物方位はN-68°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が西から1.0m・1.0m・0.8m、梁行は1.1mの等間である。ある程度規則性はあるものの、柱筋は通らず、寸法も短い。建物跡を構成する柱穴は調査区内に8個を確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は20～40cmの間にある。確認面からの深さは10～20cm前後にあるが、FP071のみ60cmと他よりは深く、柱痕跡も確認できる。堆積土は黒～黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とするが、一部に褐灰色を呈する粘土質シルト層も含んでいる。遺物はFP172より土師器非口クロ杯などの細片が27.5g出土しているが、これは重複するFSI03からの混入の可能性がある。時期は、建物方位の検討からも不明である。

#### FSB12 (第179図)

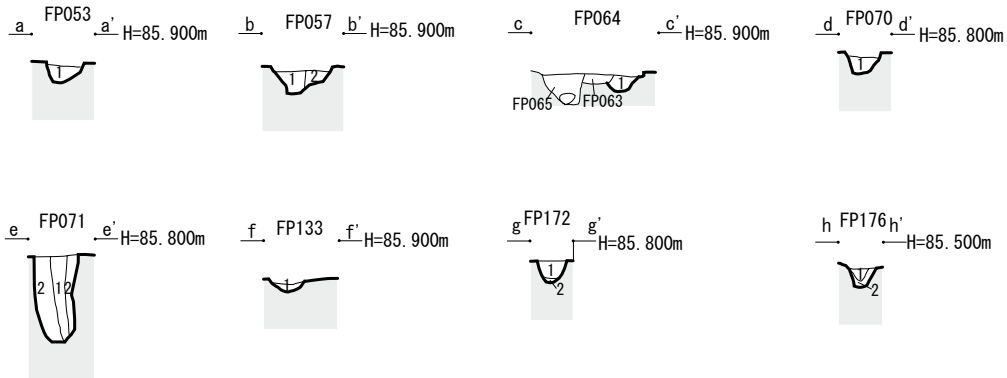
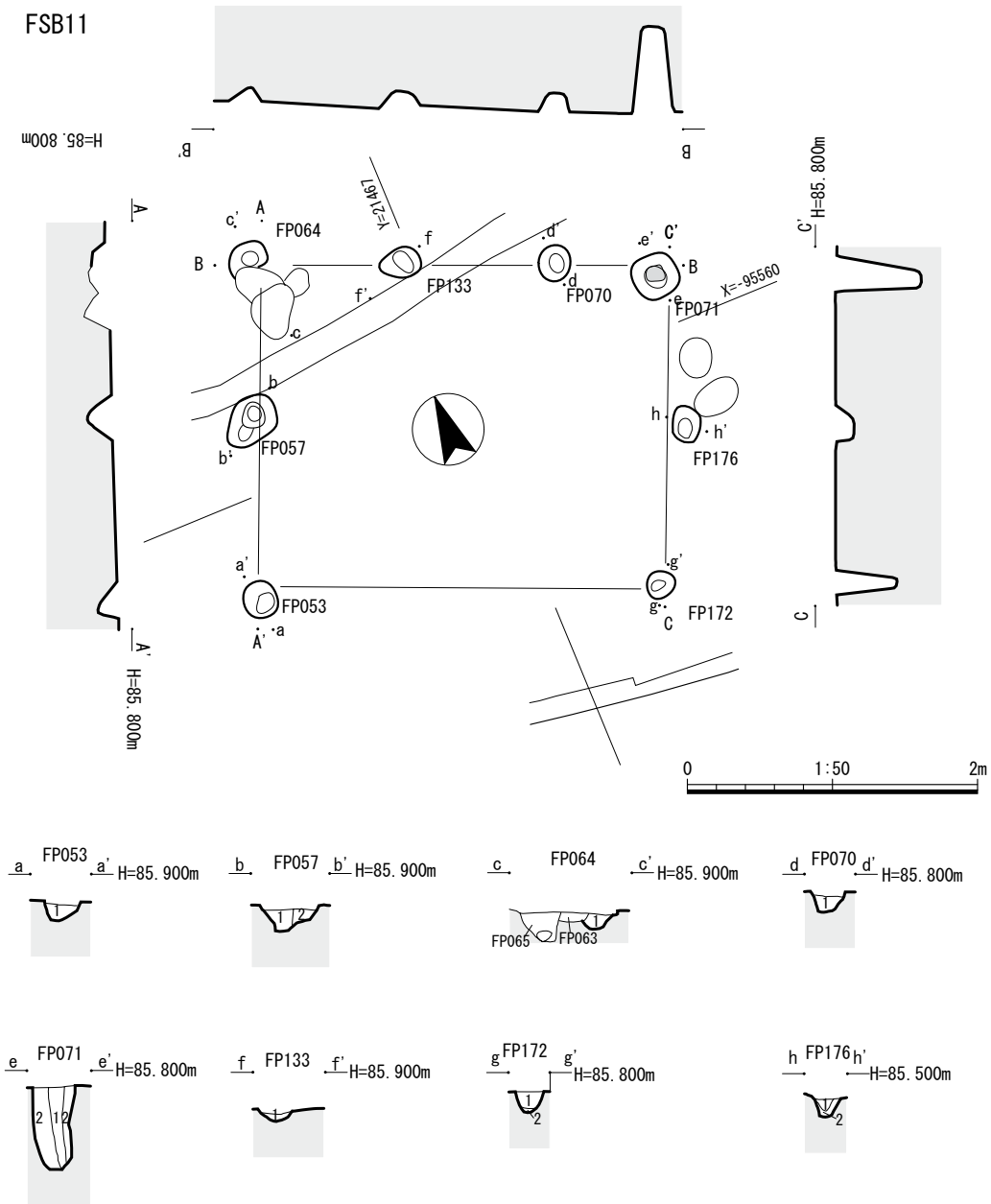
F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間の東西棟と復元しており、調査区内で完結する建物跡である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB04・06・07・08、FSD04と重複関係にあるが、いずれの遺構とも直接切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。

規模は、南北2.7m、東西2.4mであり、建物方位はN-65°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、



- FSB10  
 FP088  
 1 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 黄橙色シルト (10YR7/8) ブロック1%を含む  
 FP103  
 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 黄橙色 (10YR7/8) ブロック3%を含む  
 FP118  
 1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄橙色 (10YR7/8) シルト粒3%を含む

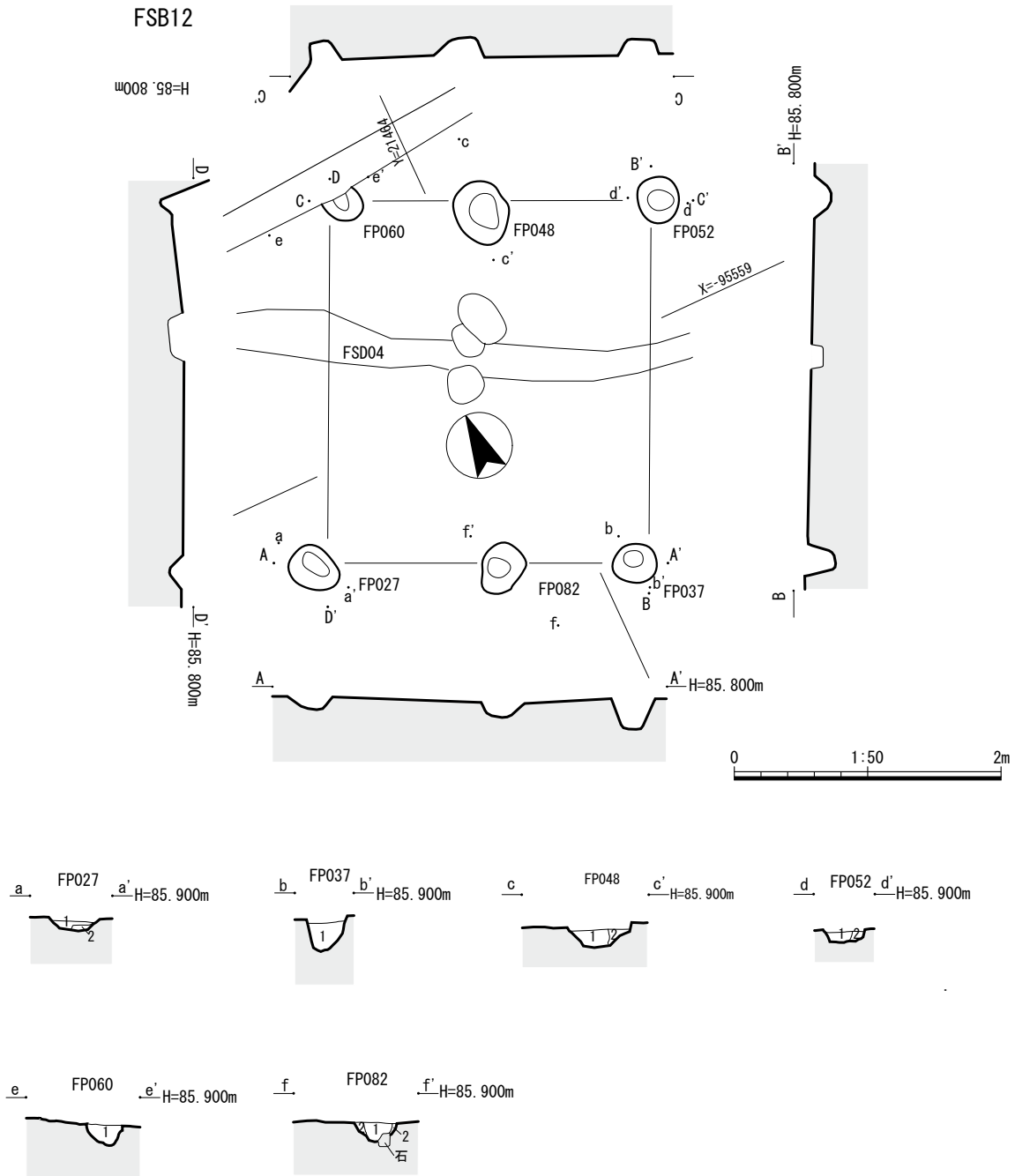
第177図 FSB10掘立柱建物跡



- FSB11
- FP053  
 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径1~30mm) 30%を含む
- FP057  
 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土斑状2%を含む  
 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 地山土斑状5%を含む
- FP064  
 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径1~3mm) 1%を含む
- FP070  
 1 黒褐色シルト 10YR3/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック3%を含む
- FP071  
 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック1%を含む  
 2 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック7%を含む
- FP133  
 1 褐灰色粘土質シルト 10YR5/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック1%を含む
- FP172  
 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 炭化物 (径1~2mm) 1%を含む  
 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/3
- FP176  
 1 黒色シルト 10YR1.7/1 地山土 (径1~10mm) 5%を含む  
 2 黒色シルト 10YR1.7/1 地山土 (径1~20mm) 30%を含む

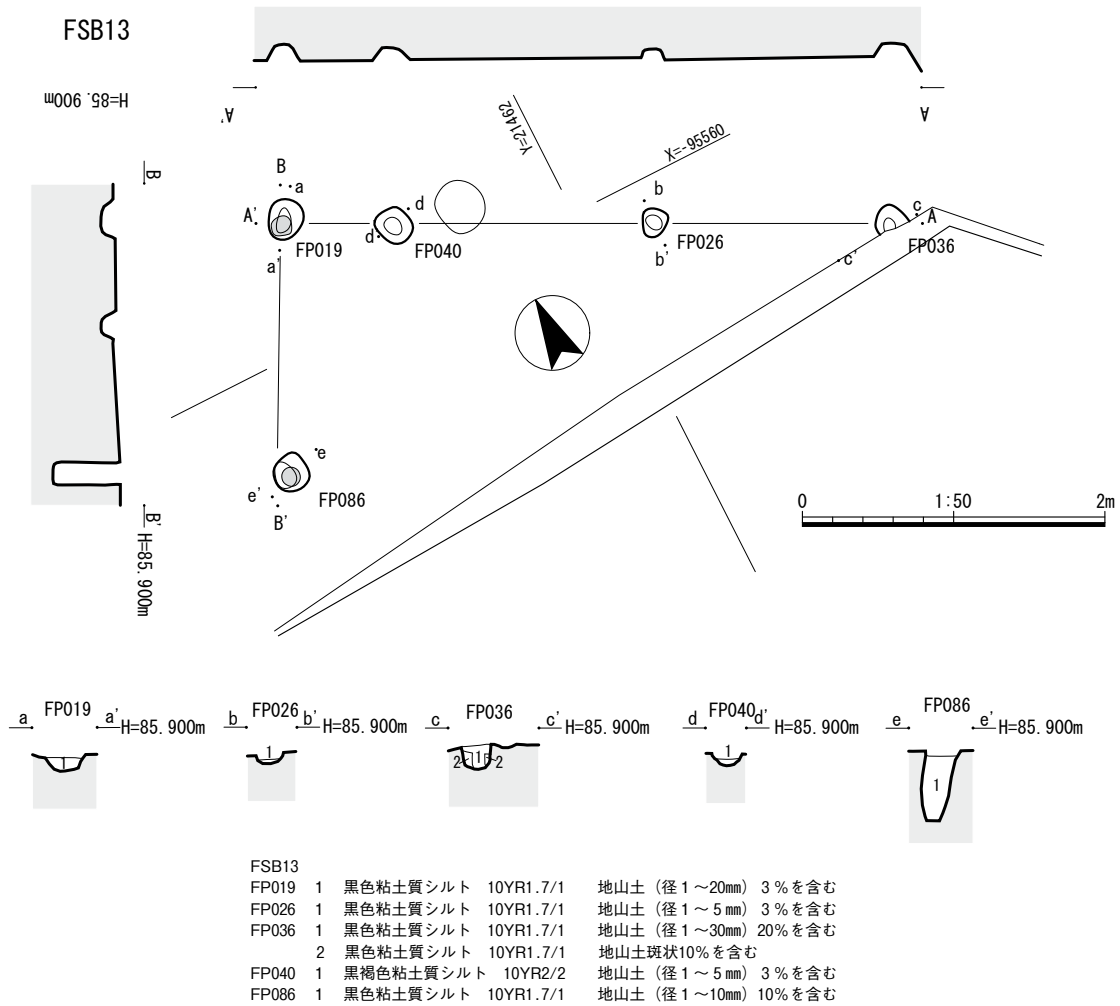
第178図 FSB11掘立柱建物跡





FSB12			
FP027			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~10mm) 5%を含む
2	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~10mm) 40%、地山土斑状10%を含む
FP037			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~2mm) 粒1%を含む
FP048			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~10mm) 3%を含む
2	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~20mm) 20%を含む
FP052			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~3mm) 1%を含む
2	黒褐色粘土質シルト	10YR2/2	地山土 (径1~10mm) 5%、地山土斑状10%を含む
FP060			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	地山土 (径1~5mm) 3%を含む
FP082			
1	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	混入物なし
2	黒褐色粘土質シルト	10YR3/3	地山土 (径1~3mm) 2%を含む

第179図 FSB12掘立柱建物跡



第180図 FSB13掘立柱建物跡

桁行が西から1.2mの等間に、梁行は2.7mに復元した。ある程度柱筋の通りはよく、寸法も規則的である。建物跡を構成する柱穴は調査区内に6個を確認している。平面形はいずれも円形～楕円形を基調とし、規模は34~50cmの間に、確認面からの深さは10~28cm前後にある。柱痕跡はFP027・048・052・082で確認できる。堆積土は黒～黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とし、柱痕跡は黒色を呈するものが多い。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

FSB13 (第180図)

F区東部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行3間以上の東西棟と復元しているが、大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。FSB07・08と重複関係にあるが、いずれの遺構ともに直接切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。規模は、南北1.7m以上、東西4.1m以上であり、建物方位はN-63°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が西から0.7m・1.7m・1.7mに、梁行は1.7mに復元した。桁行の柱間寸法が一部不規則な点があるが、1.7m前後を基準としている可能性がある。建物跡を構成する柱穴は調査区内に5個を確認している。平面形はいずれも円形～楕円形を基調とし、規模は19~27cmの間に、確認面からの深さは7~47cm前後にあり、FP086のみ深い。柱痕跡はFP036のみで確認できる。堆積土

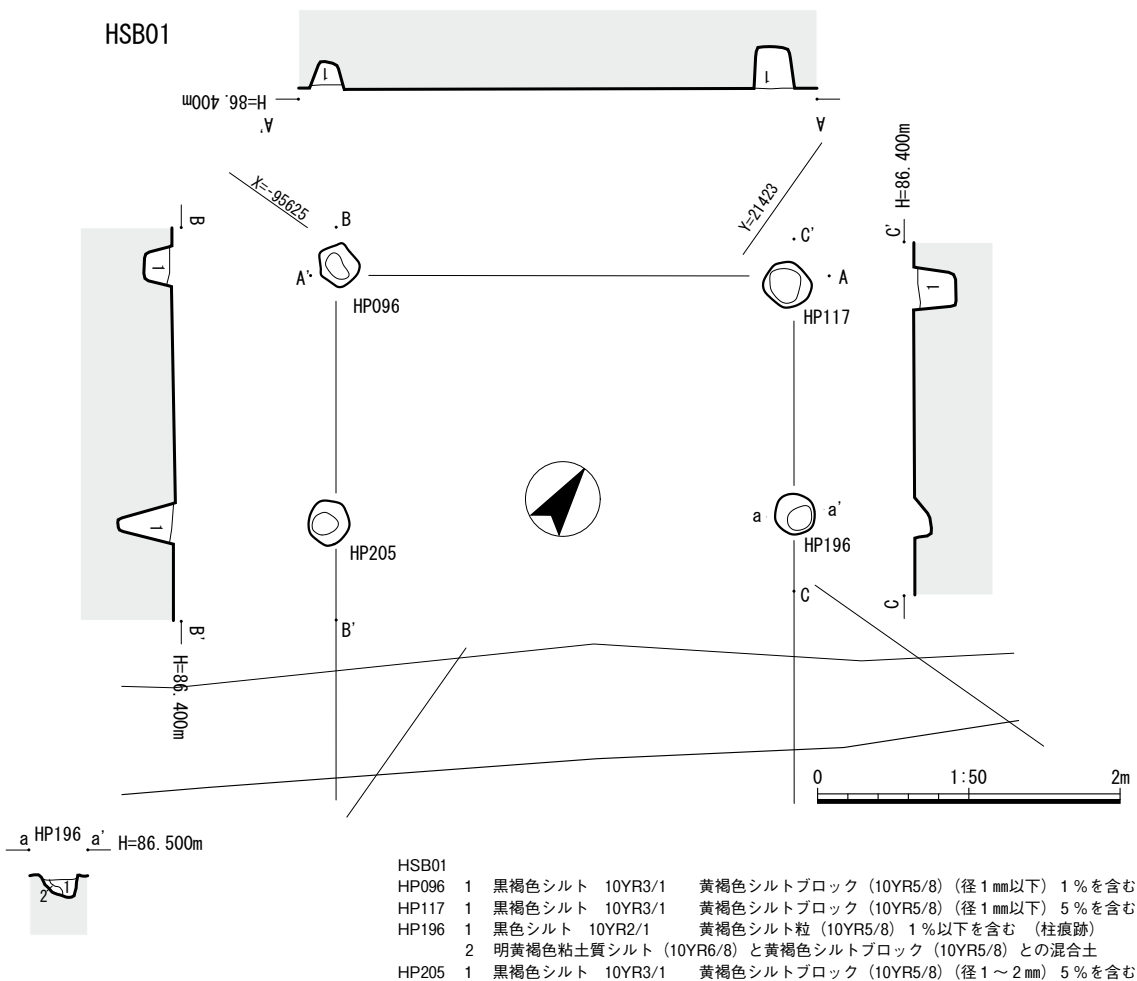
は黒～黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とする。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

### HSB01 (第181図)

H区中央部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行1間以上の南北棟と復元しているが南側が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。HSB02と空間的に重複しているが、柱穴の切り合い関係がないため新旧関係は不明である。調査区内における規模は、南北2.5m以上、東西3.0mであり、建物方位はN-35°-Wである。調査区内における柱間寸法は、桁行が1間分のみ1.6mに、梁行は3.0mに復元できる。建物跡を構成する柱穴は4個を確認している。柱穴の平面形はいずれも円形を基調とし、規模は直径が29～32cm前後、確認面からの深さが15～28cm前後にある。各柱穴の底面レベルをみるとばらつきが認められる。柱痕跡はHP030で確認している。堆積土は黒～黒褐色を呈するシルトを基調とする。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

### HSB02 (第182図)

H区中央部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間の南北棟と復元しているが、南側



第181図 HSB01掘立柱建物跡

は調査区内にあるため不明な点も残る。遺構の確認は、表土直下のⅣ層で行っている。HSB01と空間的に重複しているが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。一部が調査区外にあるが、規模は全容が復元でき、南北6.5m、東西5mであり、建物方位はN-73°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、西側柱列を基準にすると桁行が北から2.5m・2.0m・2.0mに、梁行は西から2.5m・2.5mに復元した。調査した範囲では2.0m、2.5mを基準としている。北東隅の柱穴など柱筋が通っていない箇所がある。建物跡を構成する柱穴は調査区内に6個を確認しているが、東側柱列の北から2番目の柱穴は、柱間寸法からみると本来あるはずであるが、確認できなかった。平面形はいずれも円形から楕円形を基調とし、規模は直径が25～43cmの間に、確認面からの深さが10～36cm前後にある。柱穴の底面レベルには、ばらつきが認められる。柱痕跡はどの柱穴でも確認できなかった。堆積土は黒褐色を呈するシルトを基調とし、掘方にはⅣ層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれている。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

#### MSB01 (第183図)

M区北部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間以上の東西棟と復元しているが西側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のⅣ層で行っている。MSB02と重複関係にあるが、各柱穴には直接切り合いがないため、新旧関係は不明である。

規模は、南北2.27m、東西3m以上であり、建物方位はN-66°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が東から1.82m・1.21mに、梁行は2.27mに復元した。調査した部分が少ないため基準となる寸法は不明であるが、柱筋はあまり通らないと予想される。建物跡を構成する柱穴は調査区内に5個を確認している。平面形はいずれも円形～楕円形を基調とし、規模は15～32cmの間に、確認面からの深さは10～24cm前後にある。柱痕跡はMP028で確認できる。堆積土は黒褐色や褐色を呈する粘土質シルトを基調とする。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

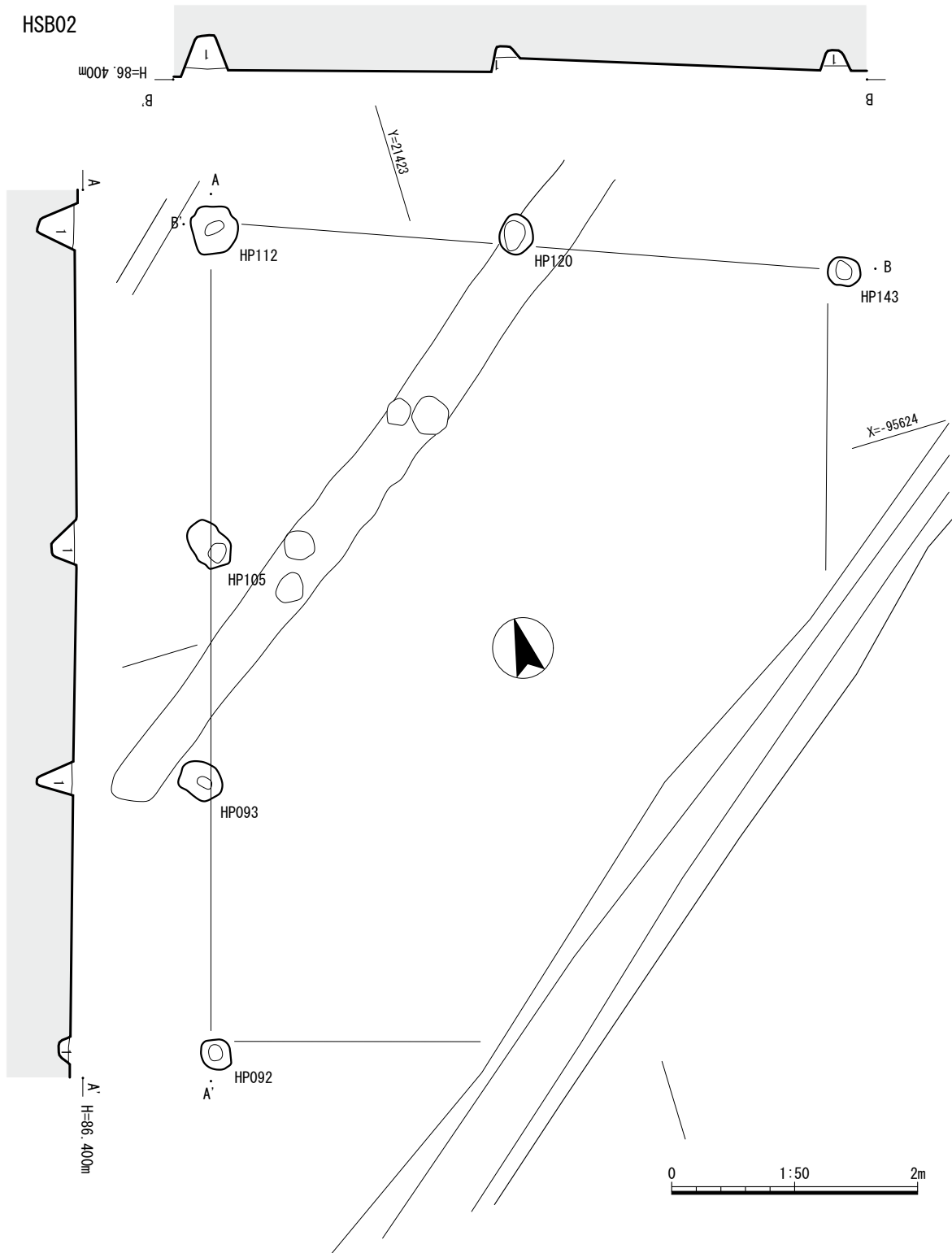
#### MSB02 (第184図)

M区北部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行3間以上の南北棟と復元しているが西・南側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のⅣ層で行っている。MSB01と重複関係にあるが、各柱穴には直接切り合いがないため、新旧関係は不明である。

規模は、南北4.8m以上、東西2.2m以上であり、建物方位はN-71°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が北から2.0m（あるいは1.0m+1.0mか）・1.0m・1.0mに、梁行は1.36mに復元した。調査した部分が少ないため基準となる寸法は不明であるが、桁行は1.0mを基準としているようである。柱筋は調査区内においては比較的通っている。建物跡を構成する柱穴は調査区内に5個を確認している。桁行の東側柱列の北から2個目は確認できなかったが、柱間寸法からみると存在した可能性が高い。平面形はいずれも円形～楕円形を基調とし、規模は26～35cmの間に、確認面からの深さは12～40cm前後にある。堆積土は黒褐色や褐色を呈する粘土質シルトを基調とする。遺物は出土せず、時期も不明である。

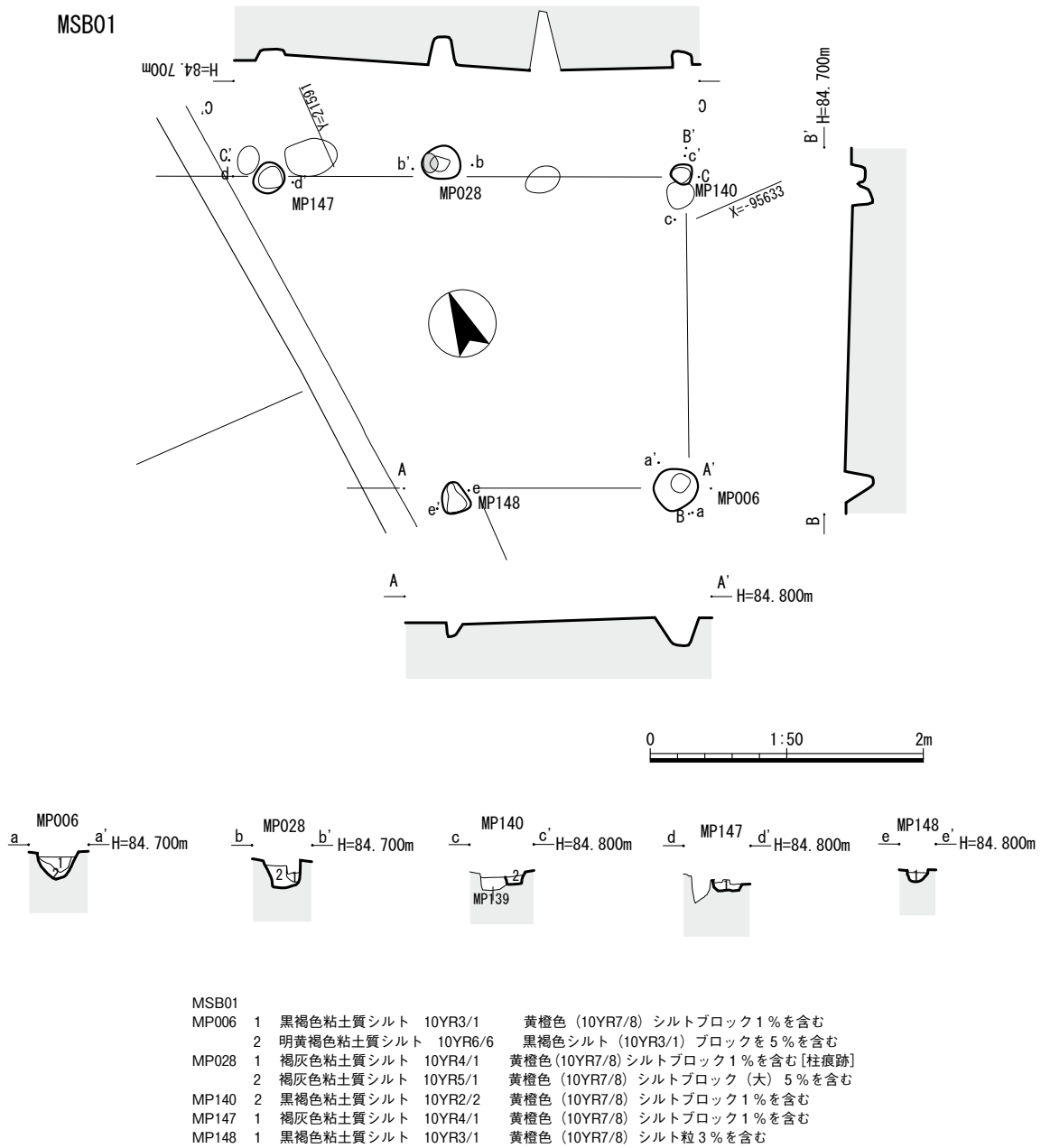
#### MSB03 (第185図)

M区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行3間（本来は4間か）の南北棟と復元しているが西側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のⅣ層で行っている。他遺構との重複は、建物跡に復元できない柱穴以外にはない。



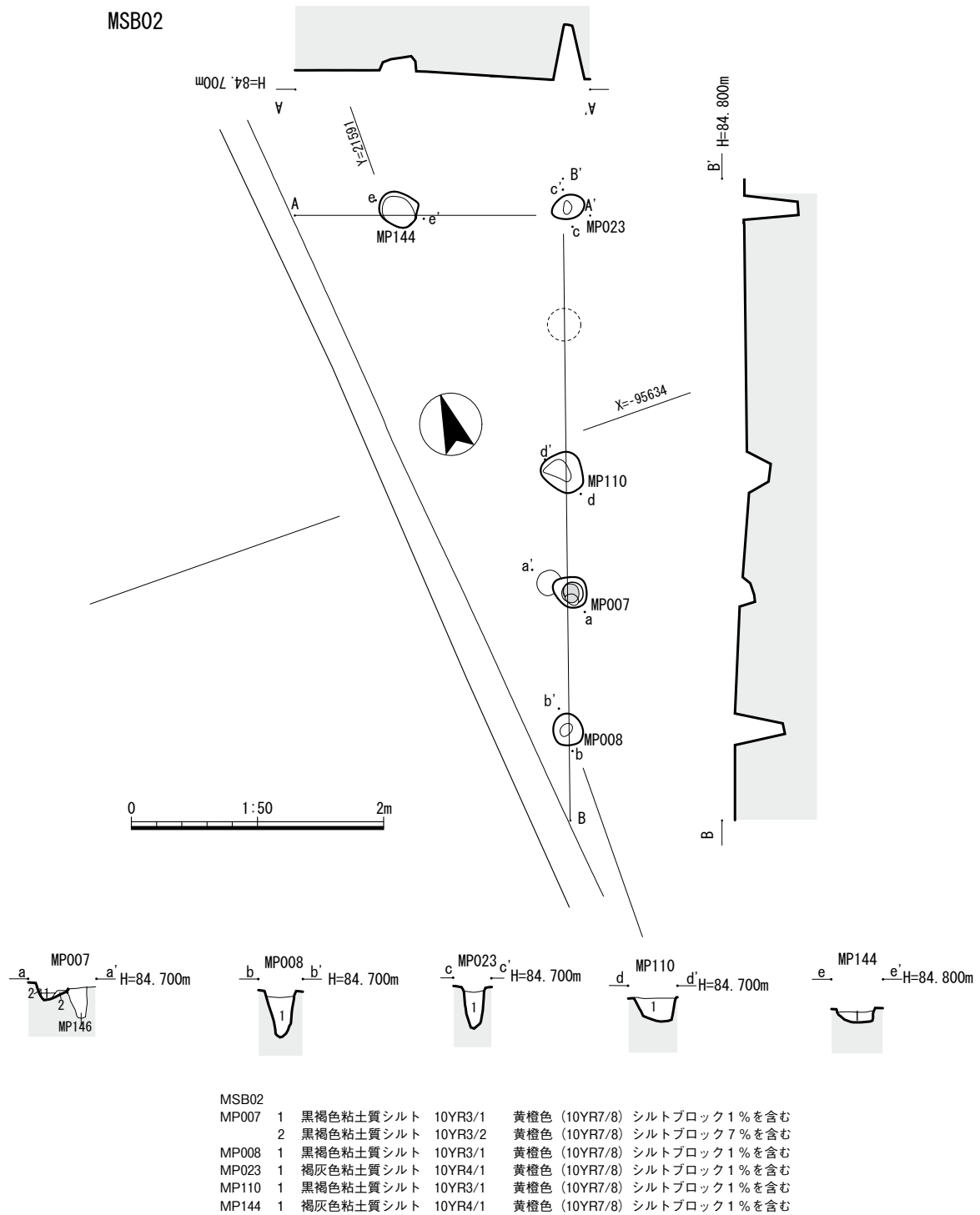
HSB02			
HP092	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1mm以下) 1%を含む
HP093	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1mm以下) 5%を含む
HP105	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1mm以下) 5%を含む
HP112	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1~2mm) 5%を含む
HP120	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1mm以下) 5%を含む
HP143	1	黒褐色シルト 10YR2/2	明黄褐色シルトブロック (10YR6/8) (径1mm以下) 1%を含む

第182図 HSB02掘立柱建物跡



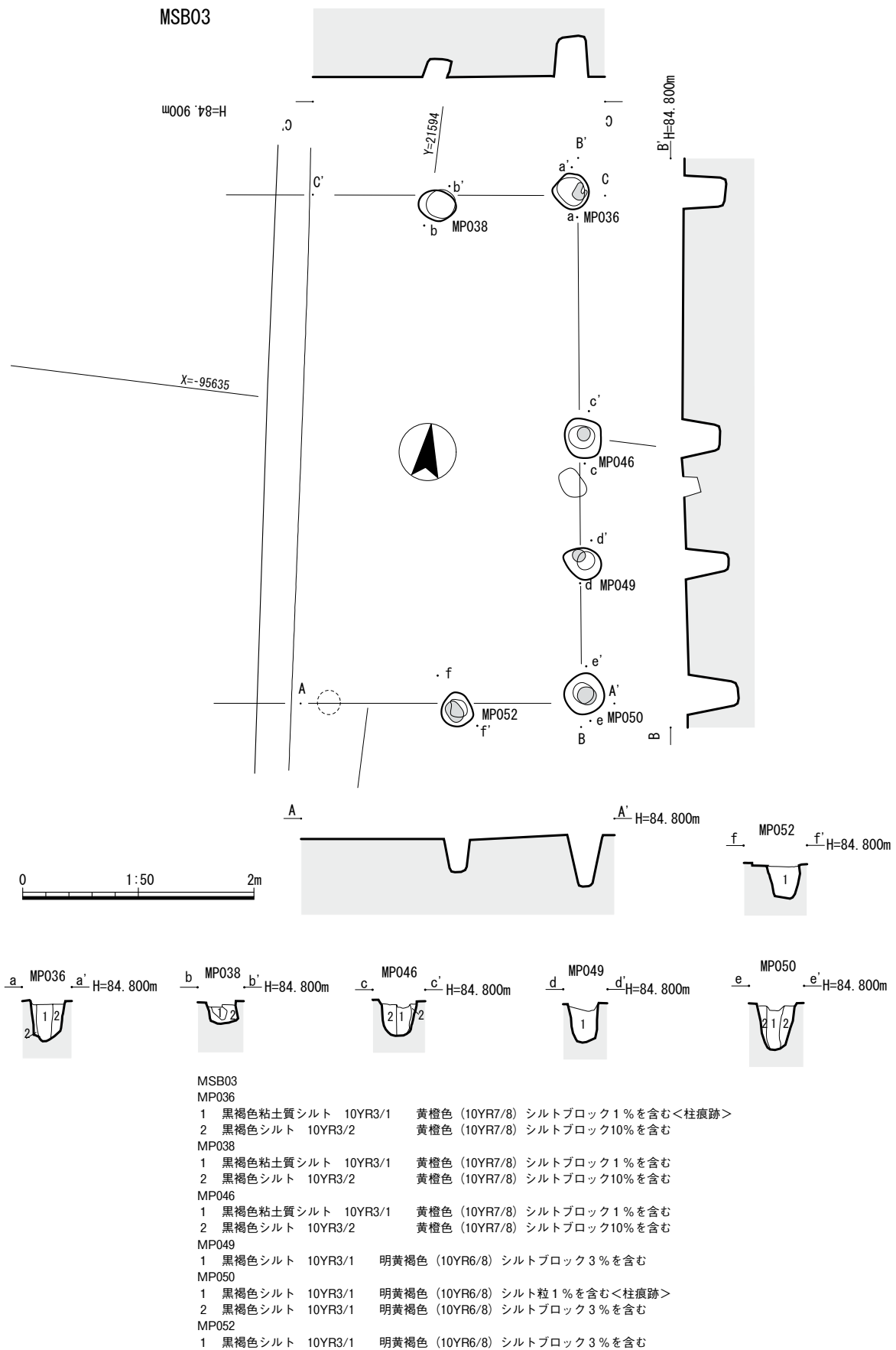
第183図 MSB01掘立柱建物跡

規模は、南北4.4m、東西2.5m以上であり、建物方位はN-7°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が北から2.2m (1.1m + 1.1mか)・1.1m・1.1mに、梁行は1.1mに復元した。調査した範囲では1.1mを基準としている可能性が高く、柱筋は比較的通っている。この柱間寸法からみると、東側柱列上では北寄りの箇所本来あるべき柱穴を確認できなかった。また、南側柱列においても、調査区際に1個の柱穴が存在すると考えられるが確認できていない。建物跡を構成する柱穴は調査区内に6個を確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は径が30～37cmの間に、確認面からの深さが17～44cm前後にあり、30cm代のものがほとんどである。底面レベルもばらつきが認められるものの比較的安定している。柱痕跡はMP036・046・050で確認できる。堆積土は黒褐色を呈する



第184図 MSB02掘立柱建物跡

粘土質シルトを基調とし、掘方にはIV層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれている。以上の諸特徴をみても付近にある掘立柱建物のなかでは、比較的正確に構築されている建物である。遺物はMP052から土師器細片がわずかに(1.8g)出土しているのみである。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。



第185図 MSB03掘立柱建物跡



## NSB01 (第186図)

N区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行3間の東西棟と復元しているが北側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。他遺構との重複はない。規模は、南北3.1m、東西1.0m以上であり、建物方位はN-86°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が西から1.1m・1.0m・1.0mに復元した。梁行は不明である。調査した範囲では1.0mの等間に近く、柱筋は調査区内では比較的通っている。建物跡を構成する柱穴は調査区内に4個を確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は直径が19~25cmの間に、確認面からの深さが7~23cm前後にある。底面レベルは東に向かって、浅くなっている。堆積土は黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とし、掘方にはIV層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれている。遺物は出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

## NSB02 (第186図)

N区西部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行1間以上の南北棟と復元しているが南側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。他遺構との重複はない。

規模は、南北1.5m以上、東西1.5mであり、建物方位はN-83°-Wである。柱間寸法は、桁行が1間分のみ復元でき、1.5mに、梁行が1.5mに復元した。調査した範囲では1.5mを基準としている可能性が高い。建物跡を構成する柱穴は調査区内に3個を確認している。平面形は方形を基調とする。規模は、長軸が28~29cm、短軸が25~27cmの間に、確認面からの深さが28~30cm前後にある。各柱穴とも規模は統一的であり、底面レベルもほぼ一定である。柱痕跡は確認できていない。堆積土は黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とし、掘方にはIV層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれている。遺物は出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

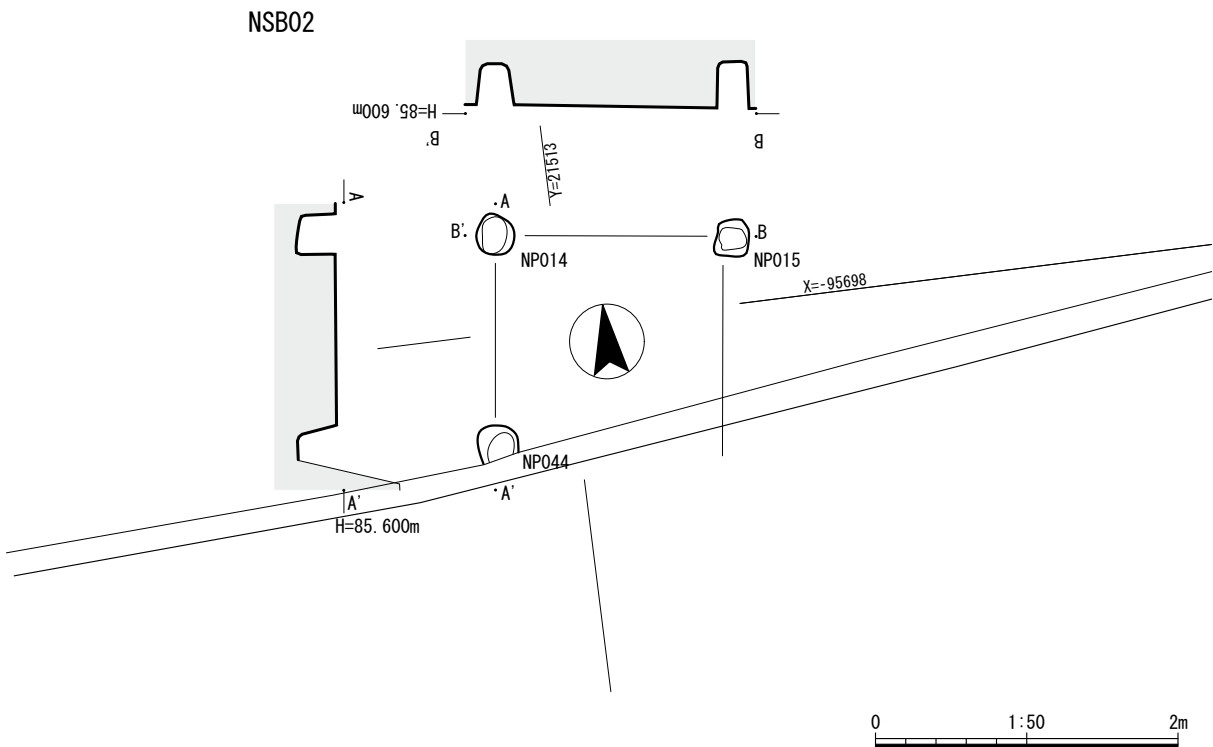
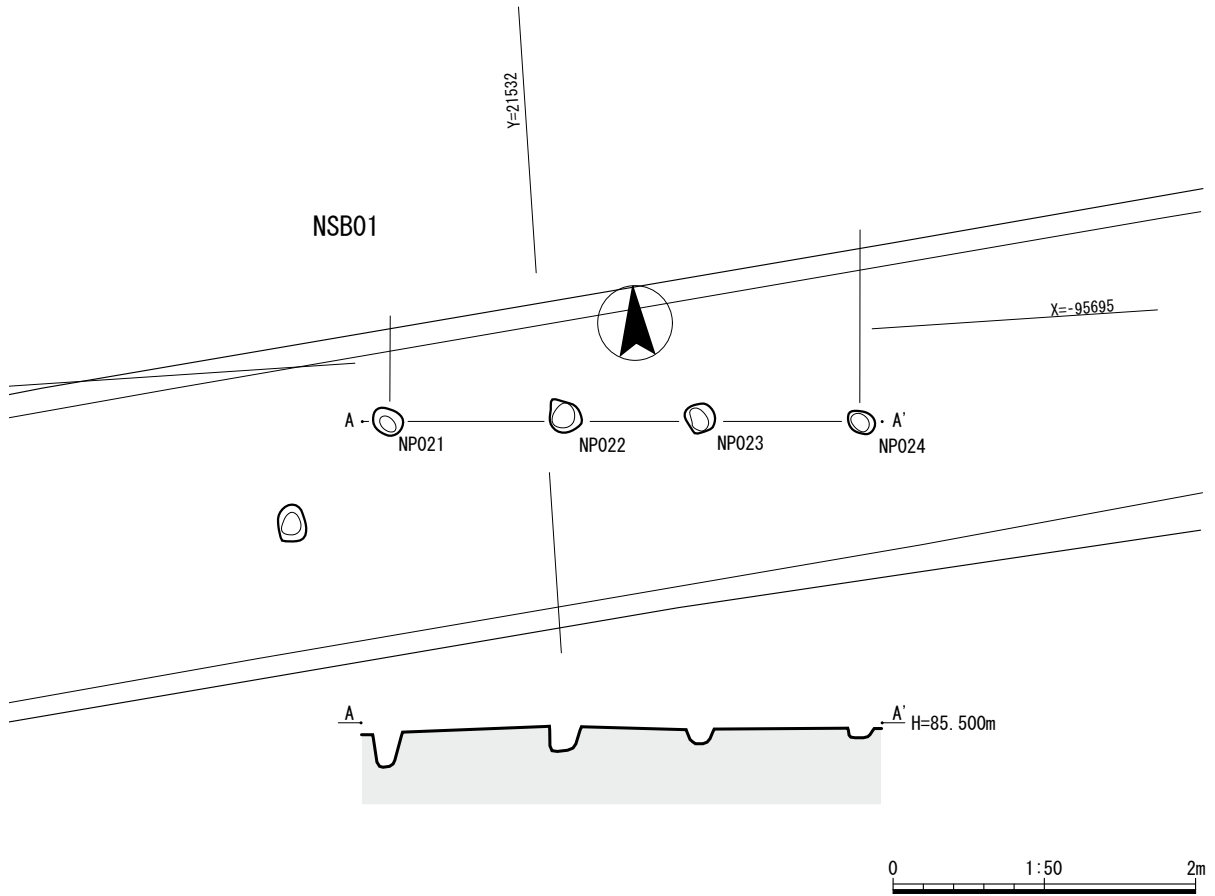
## OSB01 (第187図)

O区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行1間の建物と復元している。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。他遺構との重複はない。

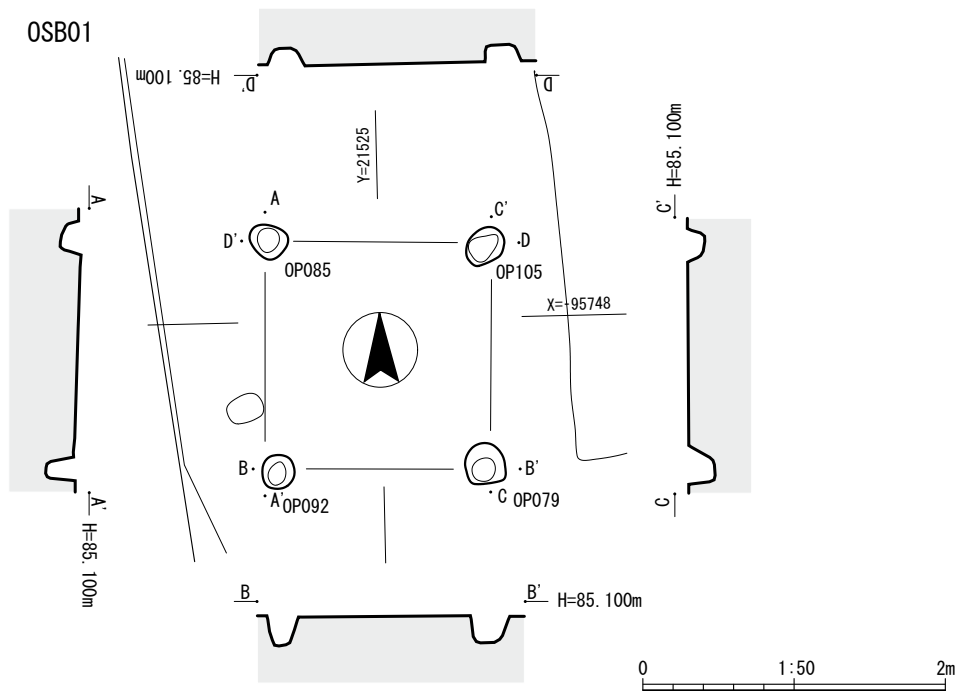
規模は、南北1.5m、東西1.5mであり、建物方位はN-89°-Wである。柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.5mに復元した。建物跡を構成する柱穴4個を確認している。平面形は円形を基調とする。規模は、長軸が25~35cm、短軸が22~24cmの間にあり、確認面からの深さが14~19cm前後にある。各柱穴とも規模は統一的であり、底面レベルもほぼ一定である。柱痕跡は確認できていない。堆積土は黒褐色を呈する粘土質シルトを基調とし、掘方にはIV層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれている。遺物はOP092・OP105から土師器の細片が少量(3g)出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

## OSB02 (第188図)

O区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間の南北棟と復元しているが東側が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSI02・OSI03とOSK07・08、OSB03と重複しており、切り合い関係からみると、OSB03以外よりは新しい遺構となる。OSB03とは直接柱穴の切り合いがないため不明である。規模は、南北6.0m、東西3.0m以上であり、建物方位はN-5°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、西側柱列を基準にすると桁行



第186図 NSB01・02掘立柱建物跡

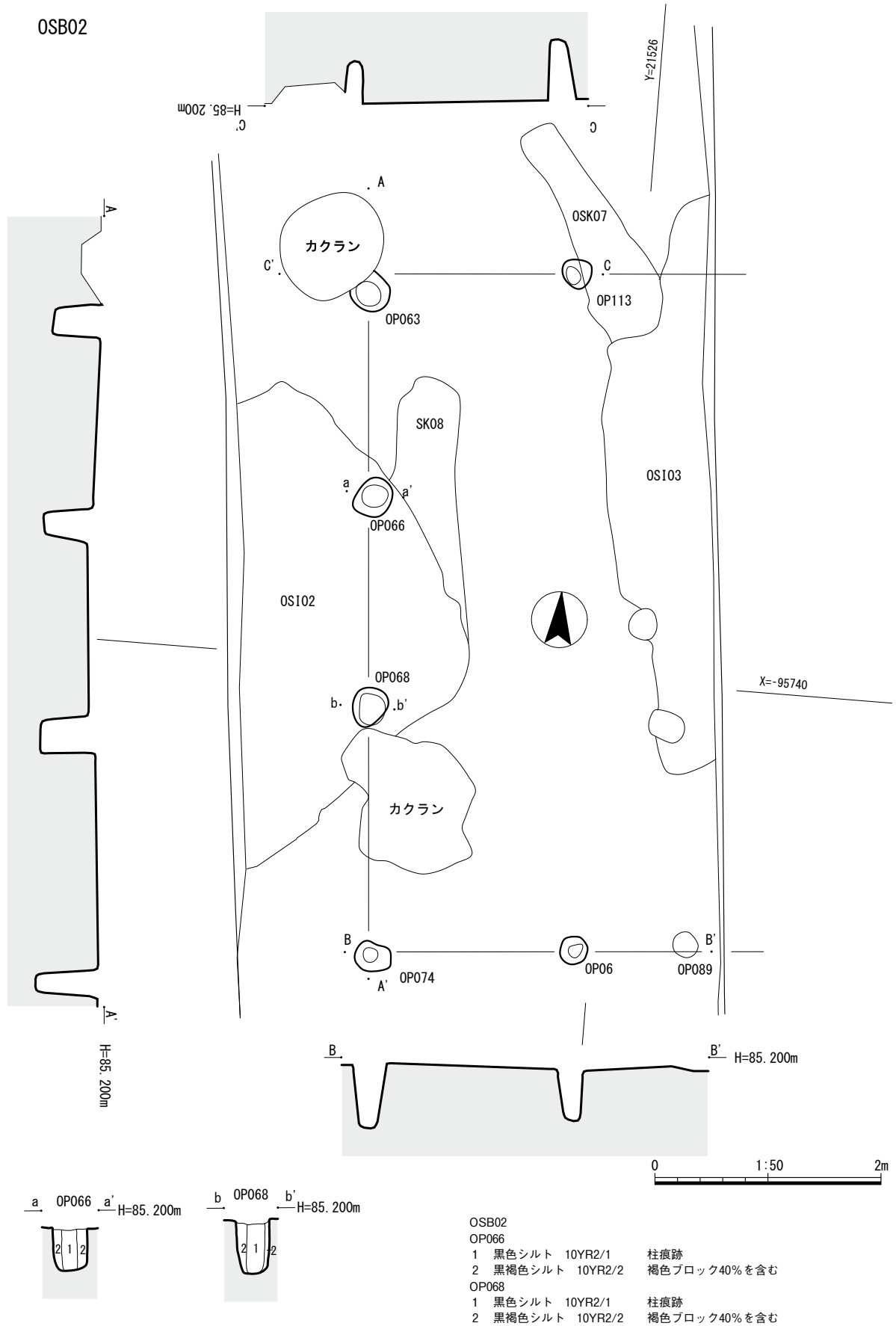


第187図 OSB01掘立柱建物跡

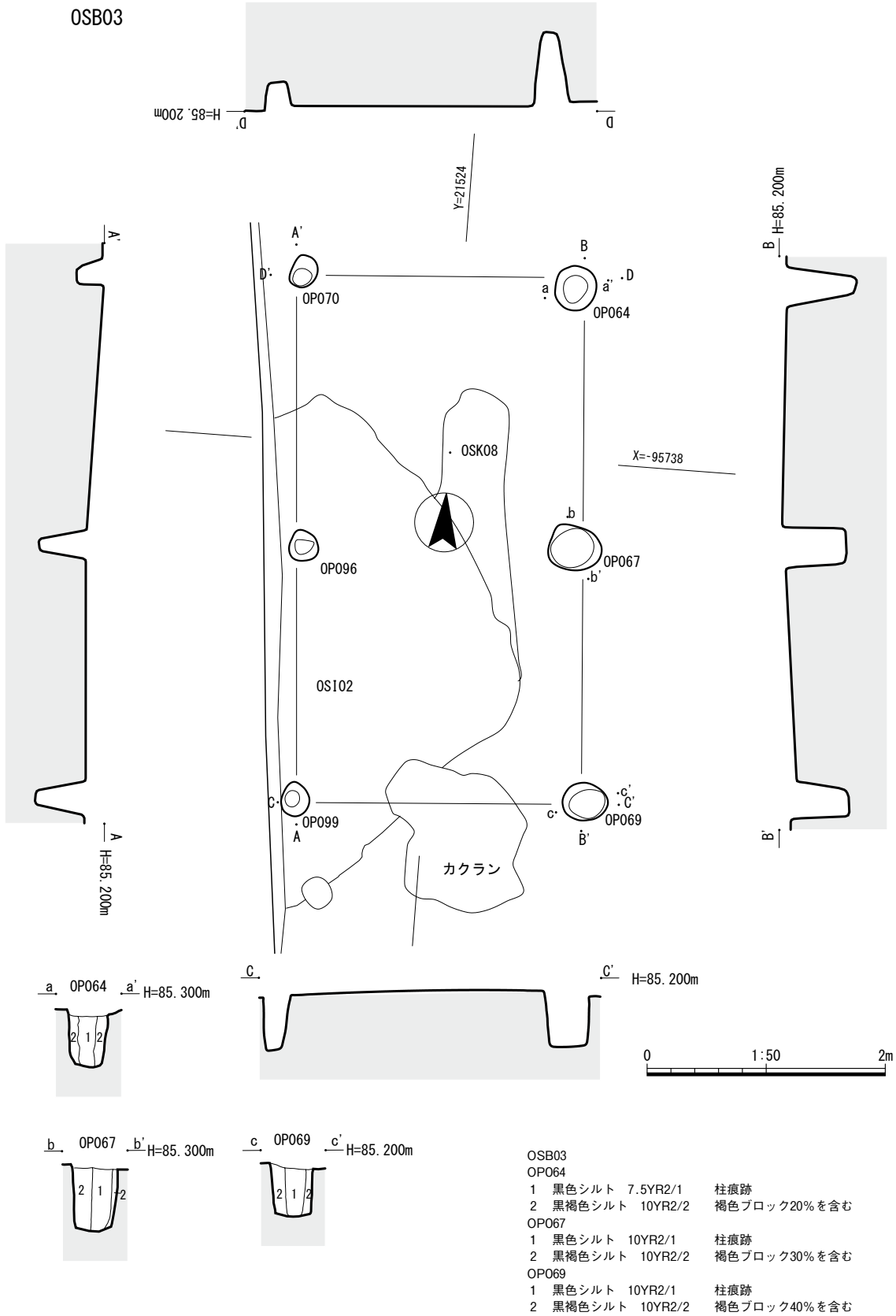
が2.0mの等間に、梁行は西から1.8mに復元した。調査した範囲では1.8m、2.0mを基準としており、柱筋は調査区内では比較的通っている。建物跡を構成する柱穴は調査区内に6個を確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は直径が25～37cmの間に、確認面からの深さが43～55cm前後にある。柱穴の底面レベルは、南に向かってやや深くなる傾向があるが、ほぼ一定といえよう。柱痕跡はOP066・OP068で確認している。堆積土は黒色を呈するシルトを基調とし、掘方にはIV層由来の褐色のシルトブロックが含まれている。遺物は、OP074・076・OP113から土師器の細片、石器剥片がわずかに出土している。遺物や建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

#### OSB03 (第189図)

O区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行2間の南北棟と復元しているが西側に広がる可能性がある。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSI02・OSB02・OSK08と重複しており、OSI02・OSK08よりは新しいことが切り合い関係から判断できるが、OSB02とは直接切り合い関係がないため新旧関係は不明である。規模は、南北4.4m、東西2.4mであり、建物方位はN-4°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が東側柱列を基準とすると、2.2mの等間に、梁行が2.4mに復元できる。建物跡を構成する柱穴6個すべてを確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は直径が27～38cmの間にあり、確認面からの深さが24～62cm前後にある。深さはばらつきがあるが、OP070以外は、おおむね50cm前後であり深い。底面レベルについてもOP070以外はおよそ一定の深さで統一される。柱痕跡はOP064・067・069で確認できる。堆積土は黒色を呈するシルトを基調とし、掘方にはIV層由来の褐色のシルトブロックが含まれている。遺物はOP067・069・096で少量(29.1g)出土している。遺物からは判断が難しいが、建物方位を重視すると漆町IV期の可能性がある。



第188図 OSB02掘立柱建物跡



第189図 OSB03掘立柱建物跡

## OSB04 (第190図)

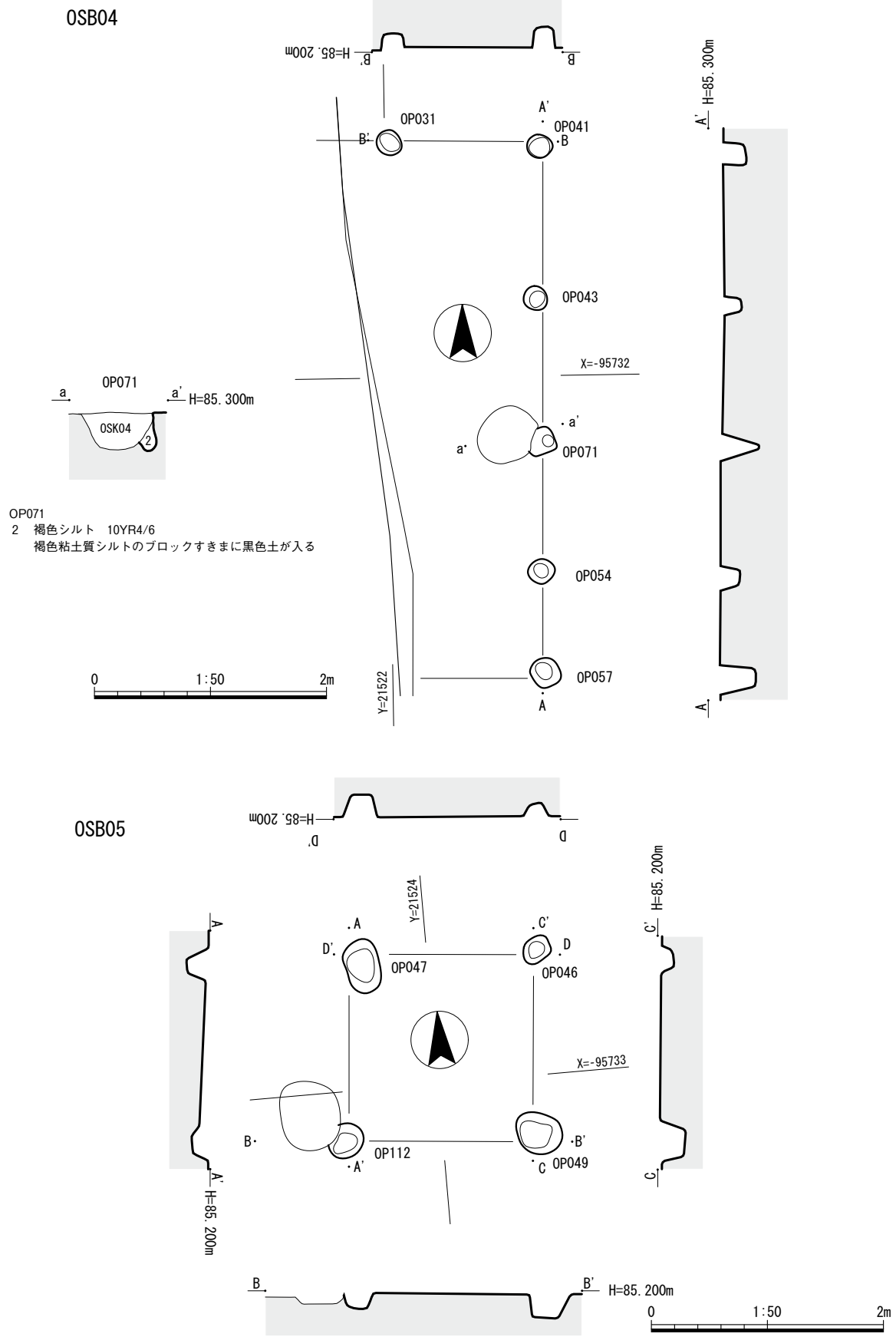
〇区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行4間の南北棟と復元しているが西側の約半分が調査区外にあるため全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSB05・07とは空間的に重なり併存しないが、直接切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。規模は、南北4.6m、東西1.8m以上であり、建物方位はN-89°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が北から1.3m・1.3m・1.0m・1.0mに、梁行が1間分のみの1.3mに復元できる。1.3mと1.0mが基準と考えられるが、かなり短い柱間寸法となる。建物跡を構成する柱穴を調査区内で6個確認している。平面形はいずれも円形を基調とし、規模は直径が22～27cmの間にあり、確認面からの深さが16cm前後と30cm前後の2者がある。深さには、ばらつきがあるが、東側柱列をみると、深さが浅い柱穴と深い柱穴が交互にある。したがって、柱間寸法が短いことと合わせると、桁行2間の柱間に半間分の位置に柱を立てることになり、構造的には桁行2間と復元した方がよいであろう。柱痕跡は確認できなかった。堆積土は黒色を呈するシルトを基調とし、掘方にはIV層由来の褐色のシルトブロックが含まれている。遺物はOP054・057で土師器の細片がわずかに出土しているのみである。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

## OSB05 (第190図)

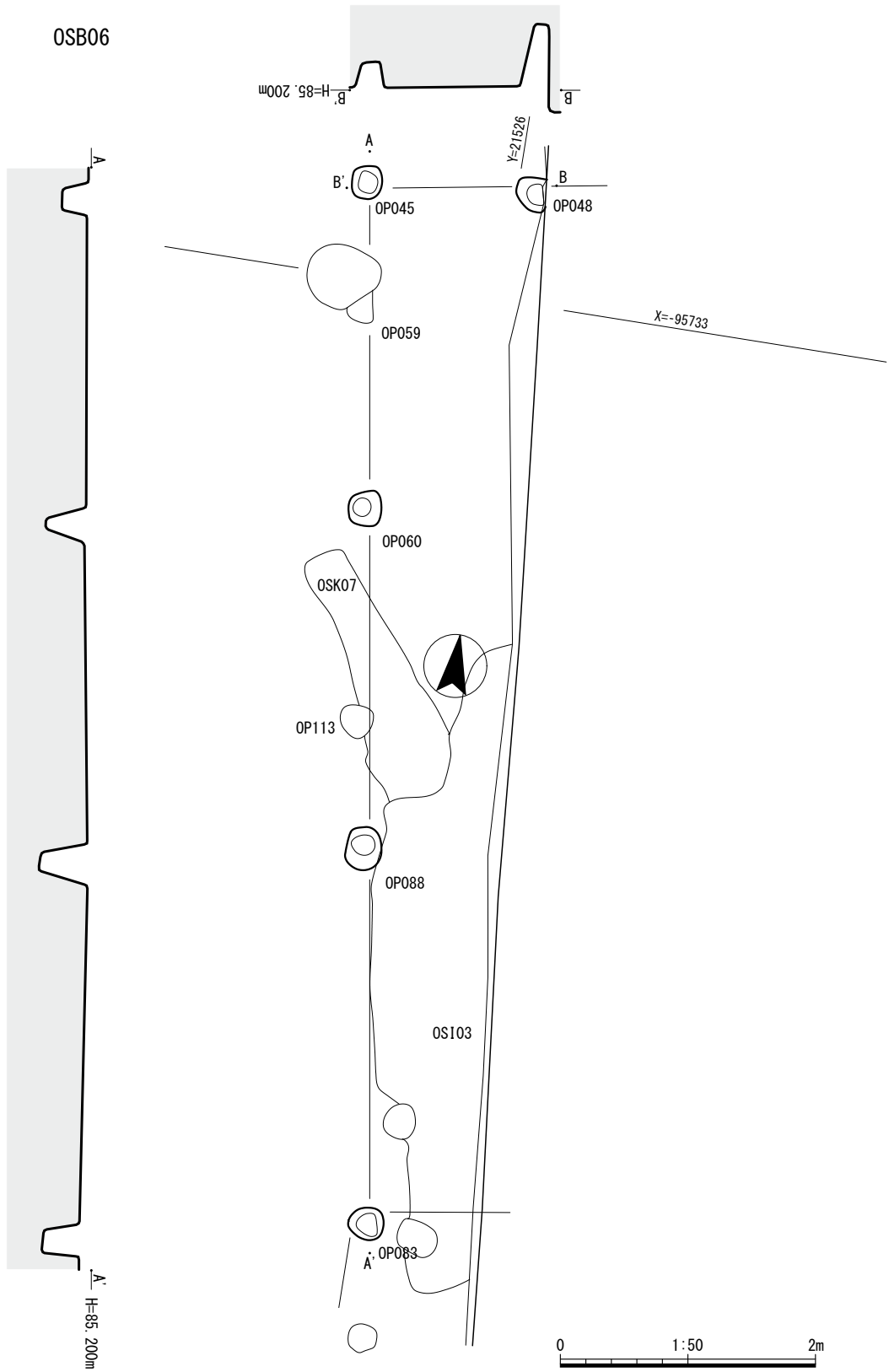
〇区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間、桁行1間の小型の建物と復元している。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSB04・OSB06と重複しているが、直接柱穴が切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。規模は、南北1.6m、東西1.6mであり、建物方位はN-85°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.6mである。建物を構成する柱穴4個すべてを確認している。平面形はいずれも楕円形から隅丸方形を基調とし、規模は、直径が27～47cm、確認面からの深さが13～22cm前後にある。柱痕跡は確認できなかった。堆積土は黒色を呈するシルトを基調とし、掘方にはIV層由来の褐色のシルトブロックが含まれている。遺物はOP047から土師器ロクロ杯や須恵器甕などの細片が少量(41.9g)出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

## OSB06 (第191図)

〇区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行1間以上、桁行3間の南北棟と復元しているが東側の調査区外に大部分が広がっており、全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSI03やOSK07と重複しているが、直接切り合い関係がないため新旧関係は不明である。規模は、南北8.0m、東西1.3m以上であり、建物方位はN-9°-Wである。調査範囲内における柱間寸法は、桁行が西側柱列を基準とすると、北から2.5m・2.5m・3.0mに復元でき、梁行は不明である。建物跡を構成する柱穴5個を確認している。OP059やOP113は柱筋にのっているが、寸法が合わないため、本遺構に伴わないと判断した。柱穴の平面形はいずれも円形を基調とするが、OP060・045などは方形を基調とする。規模は直径が28～32cm前後、確認面からの深さが21～40cm前後にある。深さはばらつきがあるが、底面レベルをみるとおおむね一定の深さに保たれている。柱痕跡は図示していないがOP065で確認している。堆積土は黒色を呈するシルトを基調とし、掘方にはIV層由来の褐色のシルトブロックが含まれている。遺物はOP083・088で土師器細片がわずかに出土している。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

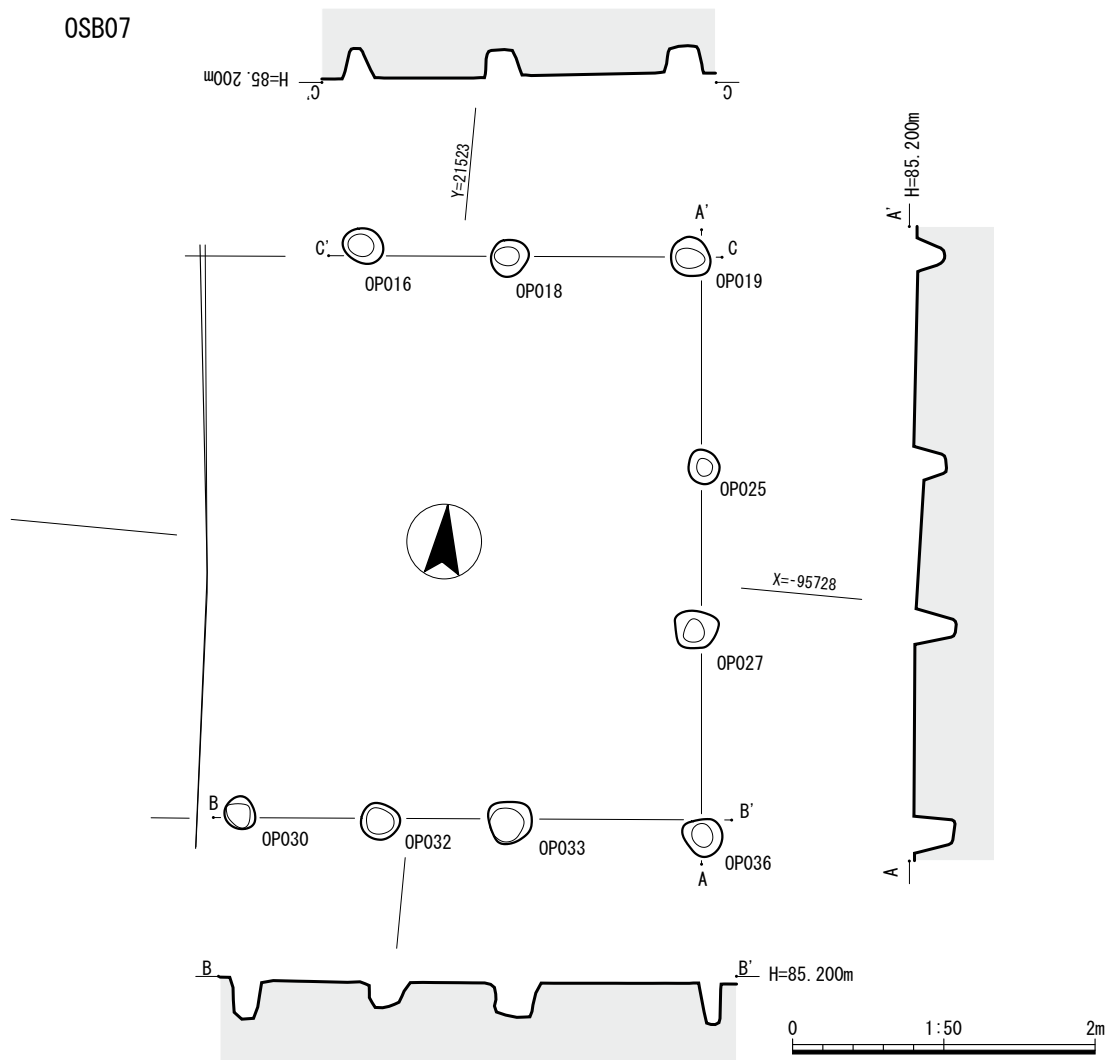


第190図 OSB04・05掘立柱建物跡



第191図 OSB06掘立柱建物跡





第192図 OSB07掘立柱建物跡

## OSB07 (第192図)

○区中央部に位置する掘立柱建物跡である。梁行3間、桁行3間以上の東西棟と復元しているが西側の調査区外に大部分が広がっており、全容は不明である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。OSB04と接しているが、柱穴が直接切り合い関係にないため、新旧関係は不明である。調査区内における規模は、南北3.7m、東西3.3m以上であり、建物方位はN-5°-Wである。柱間寸法は、桁行方向が南側柱列を基準にすると、東から1.3m・0.9m・0.9mに、梁行方向が北から1.4m・1.0m・1.3mである。基準寸法に統一感がなく、また寸法も短い。建物跡を構成する柱穴は9個を確認したが、北側柱列の西端に位置するはずの柱穴1個は確認できなかった。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、規模はいずれも直径22~31cm前後、確認面からの深さは18~29cm前後である。柱痕跡は図示していないが、OP030で確認している。堆積土は黒色を呈するシルト層を主体としている。遺物は、いずれの柱穴からも出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。

#### QSB01 (第193図)

Q区南端に位置する。桁行1間×梁行1間の掘立柱建物跡に復元した。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。他遺構との重複関係はない。規模は、南北1.52m、東西1.21mであり、床面積は1.8㎡、建物方位はN-8°-Eである。柱間寸法は、桁行方向が1.52m、梁行方向が1.21mである。

建物跡を構成する各柱穴掘方は、ほぼ円形を呈する。規模はいずれも直径30cm前後である。深さは22cm前後のもの2個と45cm前後のもの2個の2者がある。遺物は、いずれの柱穴からも出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。平面形式が特殊な建物跡である。

#### QSB02 (第193図)

Q区南部に位置する掘立柱建物跡である。桁行2間×梁行2間の東西棟と復元した。梁行中央の柱穴が北側に偏りがあるため、あるいは梁行1間で、北側に廂あるいは間仕切りが付設される形式かもしれない。遺構の確認は、表土直下のIV層で行っている。QSD05と重複関係にあるが、直接切り合いがないため新旧関係は不明である。規模は、東西4.2m、南北2.94m、床面積は矩形で計算すると12.3㎡である。建物方位はN-15°-Wである。柱間寸法は、桁行では、北列で2.1m等間、梁行では北から1.12m、1.82cmである。南側柱列は3.94mであり、北側柱列よりも短く、平面形は不整な矩形となる。建物跡を構成する柱穴は8個あり、いずれも円形から楕円形状を呈する。各柱穴の規模は18～30cmであり、深さは確認面から15～43cmである。遺物は出土せず、時期も不明である。

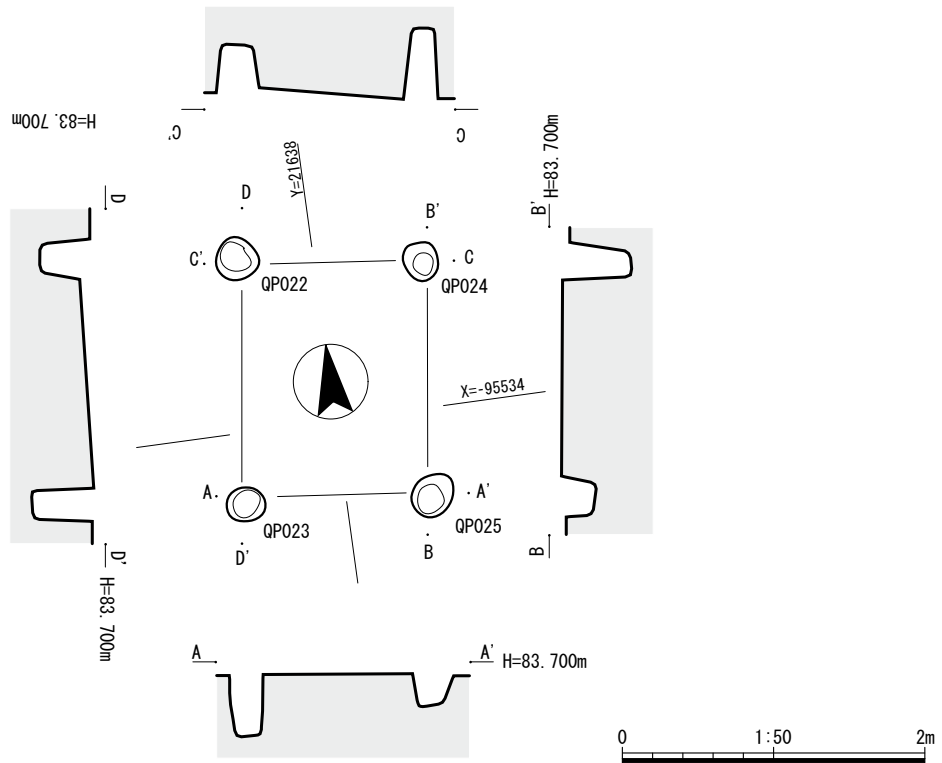
#### USB01 (第194図)

U区南部分に位置する。柱穴の検出はIV層上面である。USD01、USK05と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行を北東から南西方向、梁間を北西から南東方向とし、桁行3間以上×梁間2間の掘立柱建物跡として復元した。軸方向がN-51°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行方向が3間分の3.6m、梁間方向が2.8mである。南西側は調査区外へ延びると考えられるため、桁行の全長は不明である。桁行の柱間寸法は、南東側が南から1.15m、1.15m、1.3m、北西側が1間分で1.2mと復元した。梁間の柱間寸法は1.4mの等間である。復元に使用した柱穴はUP52・53・54・55・56・57・68の7個である。柱穴掘方の平面形は概ね隅丸方形から円形を呈し、一部は楕円形を呈する。規模はUP52が39cm×30cmで他と比べてやや大きいですが、それ以外は25cm前後の径でほぼ一定している。断面形は全てU字形を呈する。底面標高は全ての柱穴で約84.0mである。柱痕跡はUP53で確認された。検出面での直径は11cmである。UP53の堆積土は黒褐色シルトが主体であるが、柱痕跡部分では混入物が確認されなかった。他の柱穴の堆積土は黒色から黒褐色シルトが主体である。遺物は出土せず、時期も不明である。(鈴木)

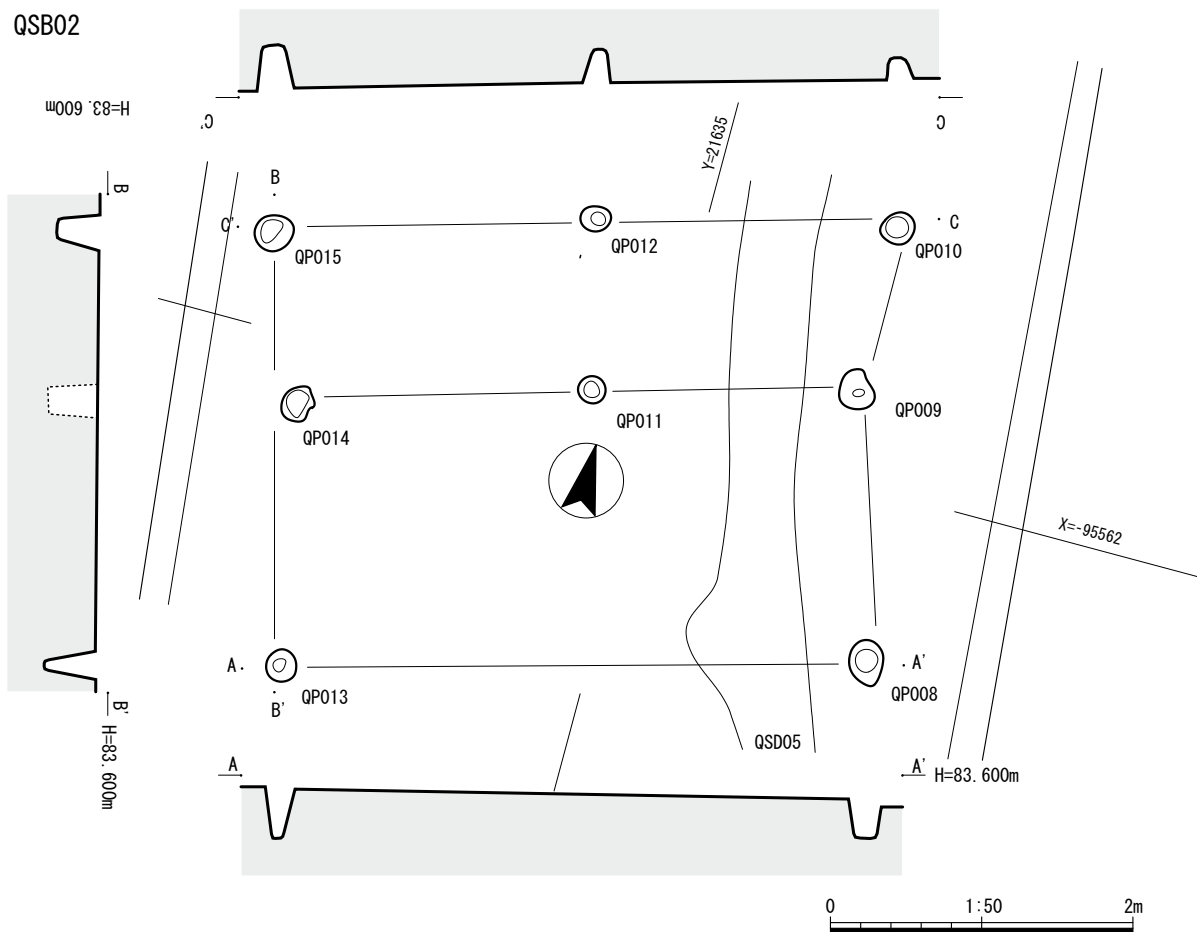
#### VSB01 (第195図)

V区中央からやや東寄りに位置する。柱穴の検出はIV層上面である。VSB02と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行を南北方向、梁間を東西方向とし、桁行1間以上×梁間2間の掘立柱建物跡として復元した。軸方向がN-11°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行方向が1間分の2.1m、梁間方向が4.2mである。北側は調査区外へ延びると考えられるため、桁行の全長は不明である。復元した桁行の柱間寸法は、確認できた1間分では東側が2.0m、西側が2.1mであり、東西で若干の差違が生じる。梁間の柱間寸法は2.1mの等間である。復元に使用した柱穴はVP035・037・041・042・044の5個である。柱穴掘方の平面形はいずれも円形から楕円形を呈し、規模はVP042の38cm×36cm

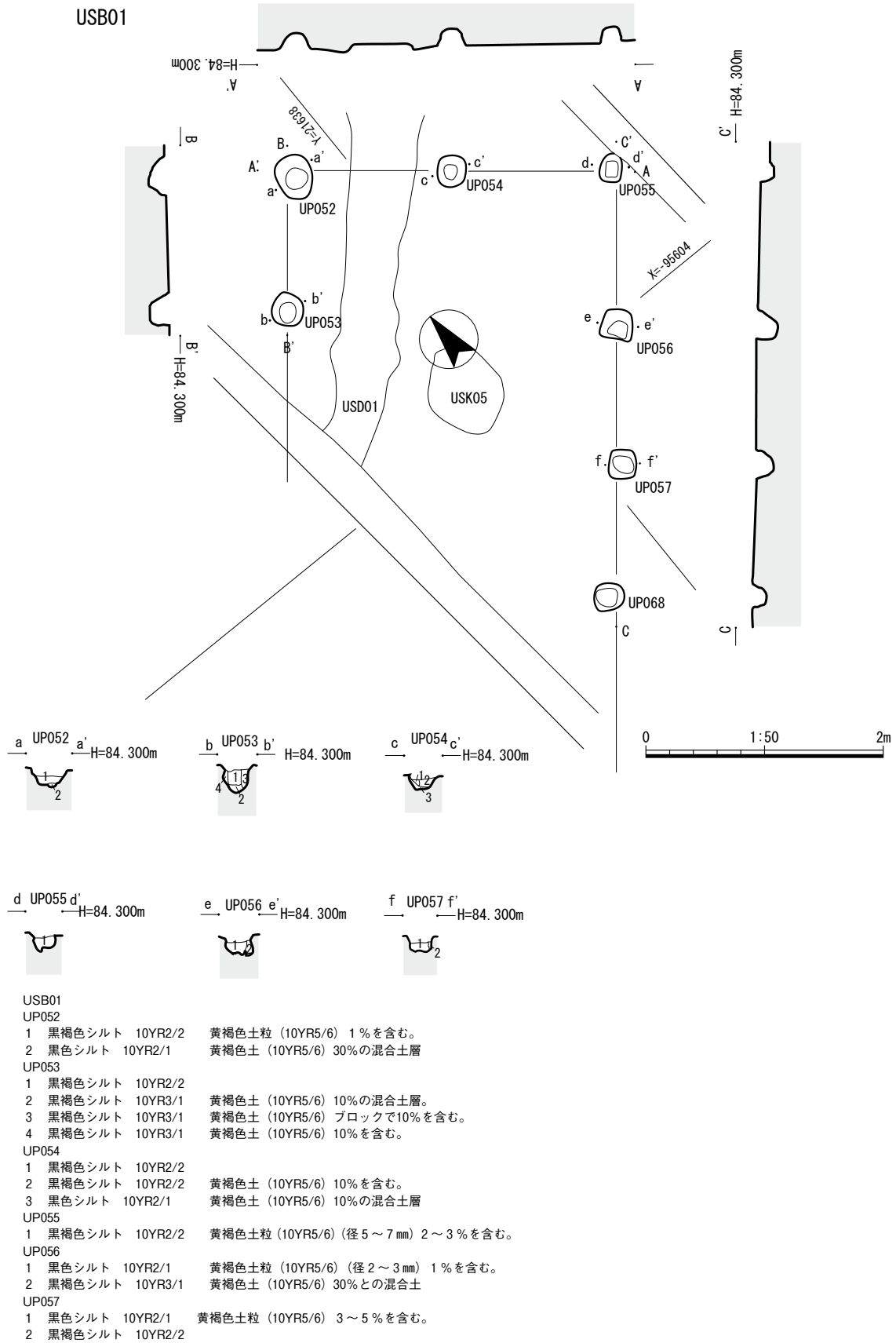
QSB01



QSB02

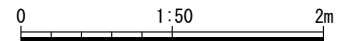
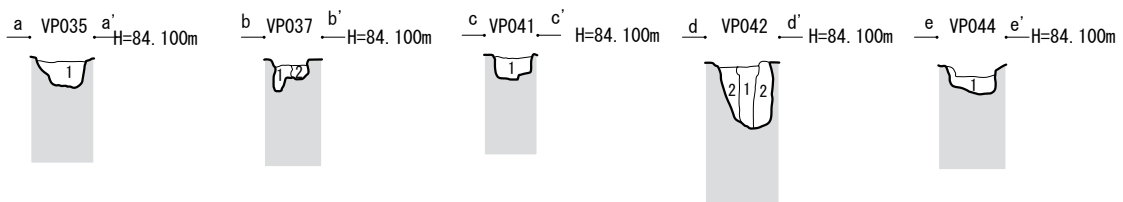
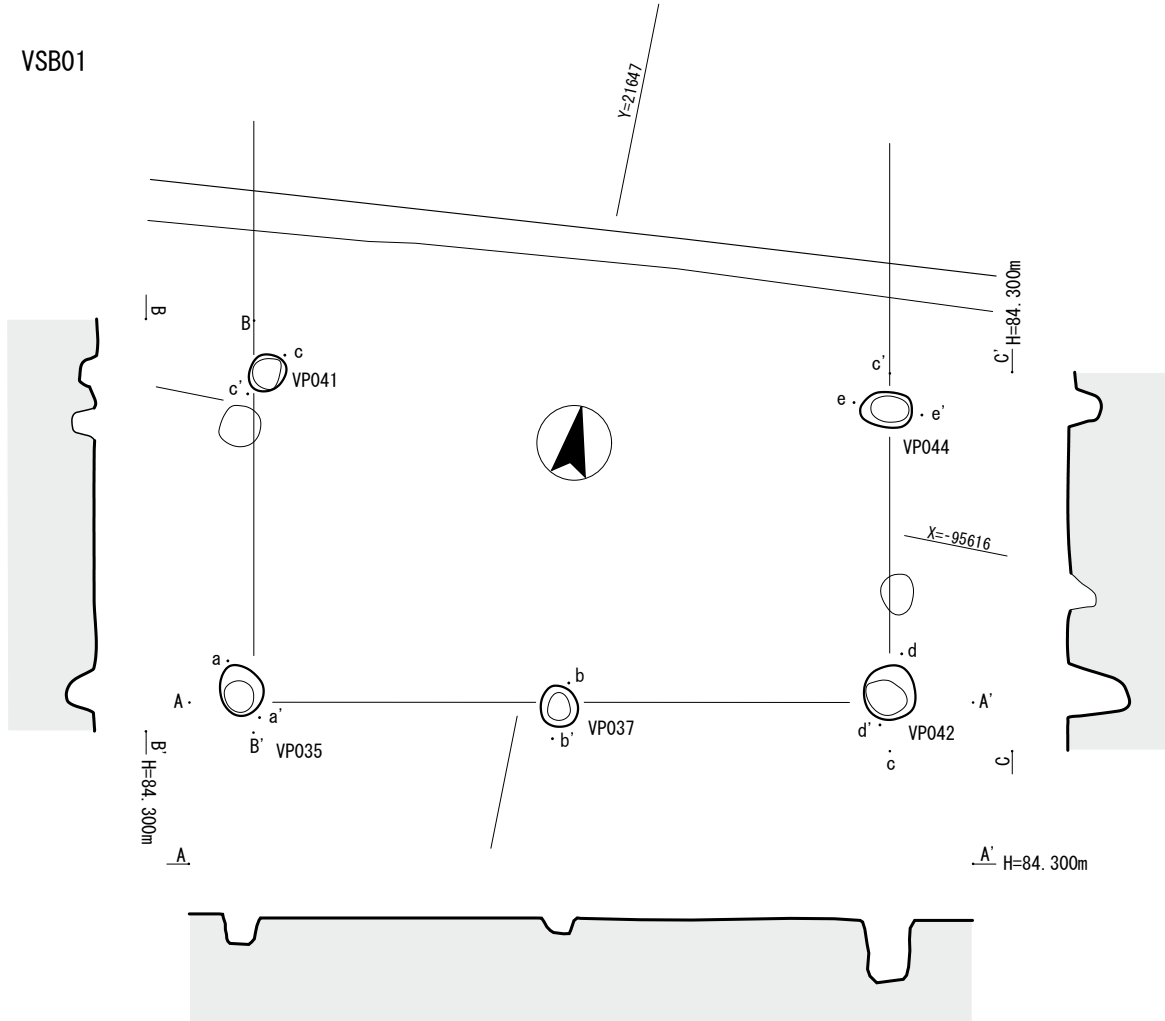


第193図 QSB01・02掘立柱建物跡



第194図 USB01掘立柱建物跡

VSB01



- VSB01
- VP035
- 1 褐灰色シルト 10YR5/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 5% を含む
- VP037
- 1 褐灰色粘質シルト 10YR4/1 黄橙色 (10YR7/8) ブロック 3%、炭化物粒 1% を含む
- 2 黄橙色シルト 10YR8/8 褐灰色 (10YR4/1) ブロック 2% を含む
- VP041
- 1 褐灰色シルト 10YR5/1 黄橙色 (10YR8/8) シルトブロック、黒褐色 (10YR3/1) シルトブロックを 5% ずつ混合する
- VP042
- 1 褐灰色粘質シルト 10YR4/1 黄橙色 (10YR7/8) ブロック 3%、炭化物粒 1% を含む
- 2 黄橙色シルト 10YR8/8 褐灰色 (10YR4/1) ブロック 2% を含む
- VP044
- 1 褐灰色シルト 10YR5/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 5% を含む

第195図 VSB01掘立柱建物跡

が最大で、VP037の27cm×25cmが最小である。断面形は全てU字形を呈する。底面標高は概ね83.7mから83.8mであるが、VP042は83.5mであり、他の柱穴よりも深い。柱痕跡はVP037とVP042で確認された。検出面での直径は、VP037が10cm、VP42が14cmである。いずれも、柱痕跡は炭化物をごくわずかに含む褐灰色粘土質シルト、掘方の堆積土は黄橙色シルトである。それ以外の柱穴の堆積土は、IV層（地山）由来のシルト塊を少量含む褐灰色シルトが主体である。遺物はVP042から土師器細片がわずかに（0.9g）出土しているのみである。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。（鈴木）

#### VSB02（第196図）

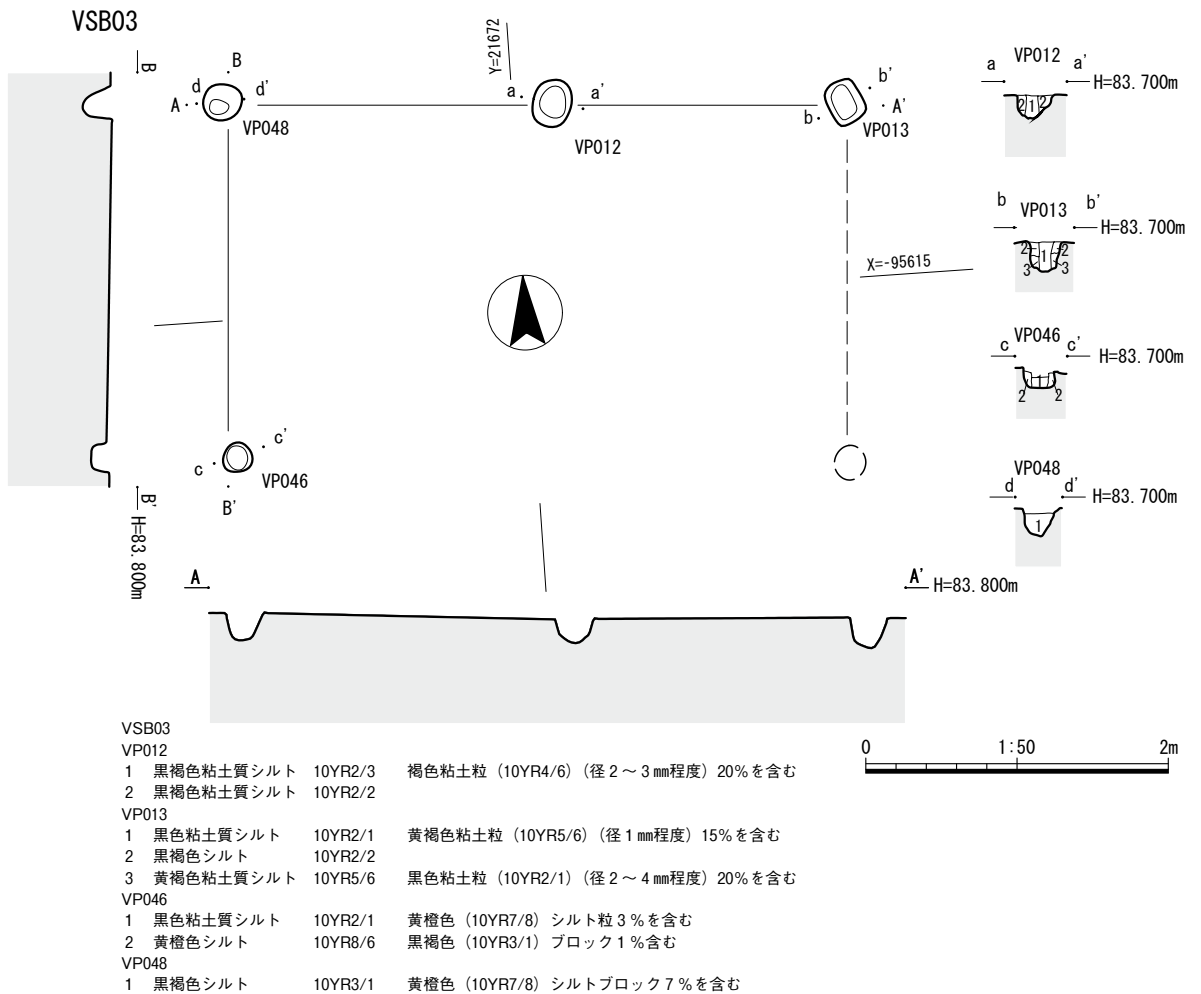
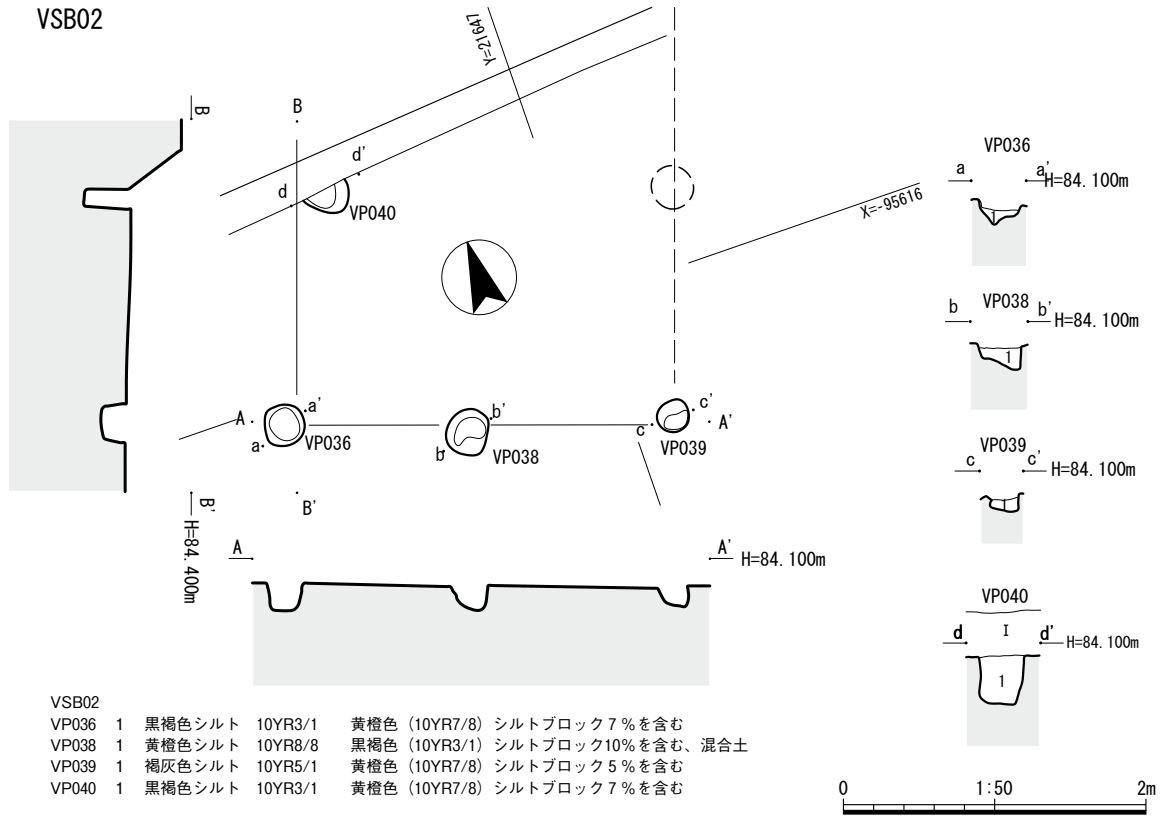
V区中央からやや東寄りに位置する。柱穴の検出はIV層上面である。VSB01と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行を南西から北東方向、梁間を北西から南東方向とし、桁行1間以上×梁間2間の掘立柱建物跡として復元した。軸方向がN-71°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行方向が1間分の1.5m、梁間方向が2.5mである。北側は調査区外へ延びると思われるため、桁行の全長は不明である。柱間寸法は、桁行が1.5m、梁間が西から1.2m、1.3mに復元した。北西の柱穴は失われているため、復元に使用した柱穴はVP036、038、039、040の4個である。柱穴掘方の平面形は概ね円形から楕円形を呈し、規模はVP036とVP038がほぼ同じ大きさで30cm×27cm、VP039が20cm×20cmである。VP040は半分が調査区外へ広がるため、平面形の規模は不明である。断面形は全てU字形を呈する。底面標高はVP040が83.7m、それ以外は83.8mである。いずれの柱穴でも柱痕跡は確認できなかった。堆積土はVP036とVP040がIV層（地山）由来のシルト塊を少量含む黒褐色シルト、VP038が黄橙色シルトと黒褐色シルトの混合土、VP039がIV層（地山）由来のシルト塊を少量含む褐灰色シルトで、全ての柱穴が単層である。遺物は出土せず、時期も不明である。（鈴木）

#### VSB03（第196図）

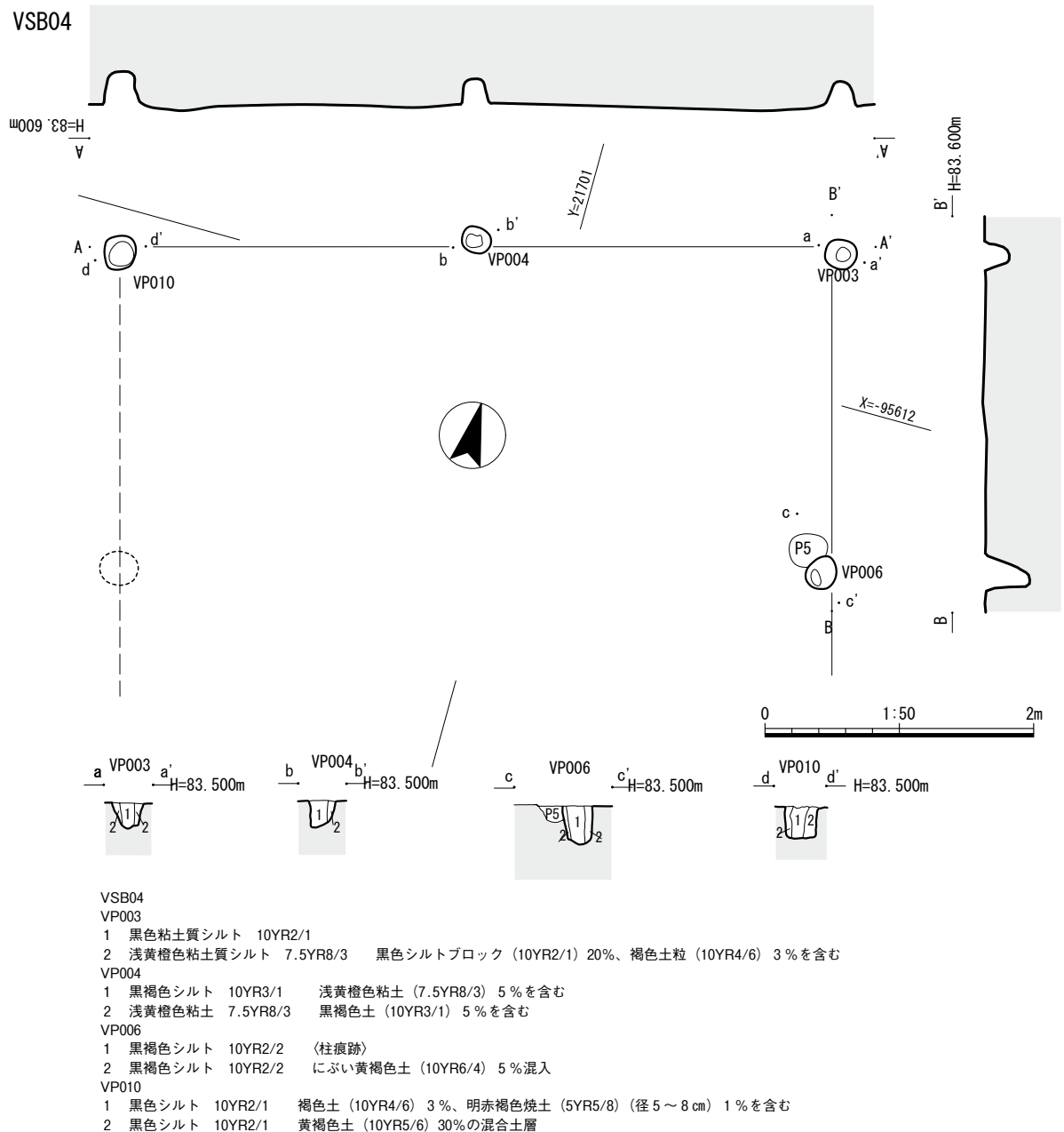
V区中央のVSK02の北に位置する。柱穴の検出はIV層上面である。桁行を南北方向、梁間を東西方向とし、桁行1間以上×梁間2間の掘立柱建物跡として復元した。軸方向がN-86°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行方向が1間分の2.3m、梁間方向が4.1mである。南東側及び、それ以南の柱穴は失われているため、桁行の全長は不明である。柱間寸法は、桁行が2.1m、梁間が2.05mの等間である。復元に使用した柱穴は、VP012、013、046、048の4個である。柱穴掘方の規模と平面形は、VP012が32cm×25cmの楕円形、VP013が29cm×23cmの隅丸方形、VP046が20cm×20cmの円形、VP048が26cm×23cmの円形を呈する。断面形は全てU字形を呈し、底面標高は83.4mから83.5mである。柱痕跡はVP012、VP013、VP046で確認した。検出面での直径は、VP012が8cm、VP013が9cm、VP046が11cmである。柱痕跡はVP012が黒褐色粘土質シルト、VP013とVP046が黒色粘土質シルトであり、いずれにもIV層（地山）由来のシルトが粒状に混入している。掘方の堆積土は、VP012が黒褐色シルトで、柱痕跡と近い色調を呈しているが混入物がない。VP013は上層が黒褐色シルト、下層がやや粘性のある黄褐色シルトが主体である。VP046は黄橙色が主体の堆積土である。VP048はIV層（地山）由来の黄橙色シルト塊を含む黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期は、建物方位の検討から、漆町IV期に位置づけた。（鈴木）

#### VSB04（第197図）

V区東部分のVSD04の東に位置する。柱穴の検出はIV層上面である。桁行を南北方向、梁間を東



第196図 VSB02・03掘立柱建物跡



第197図 VSB04掘立柱建物跡

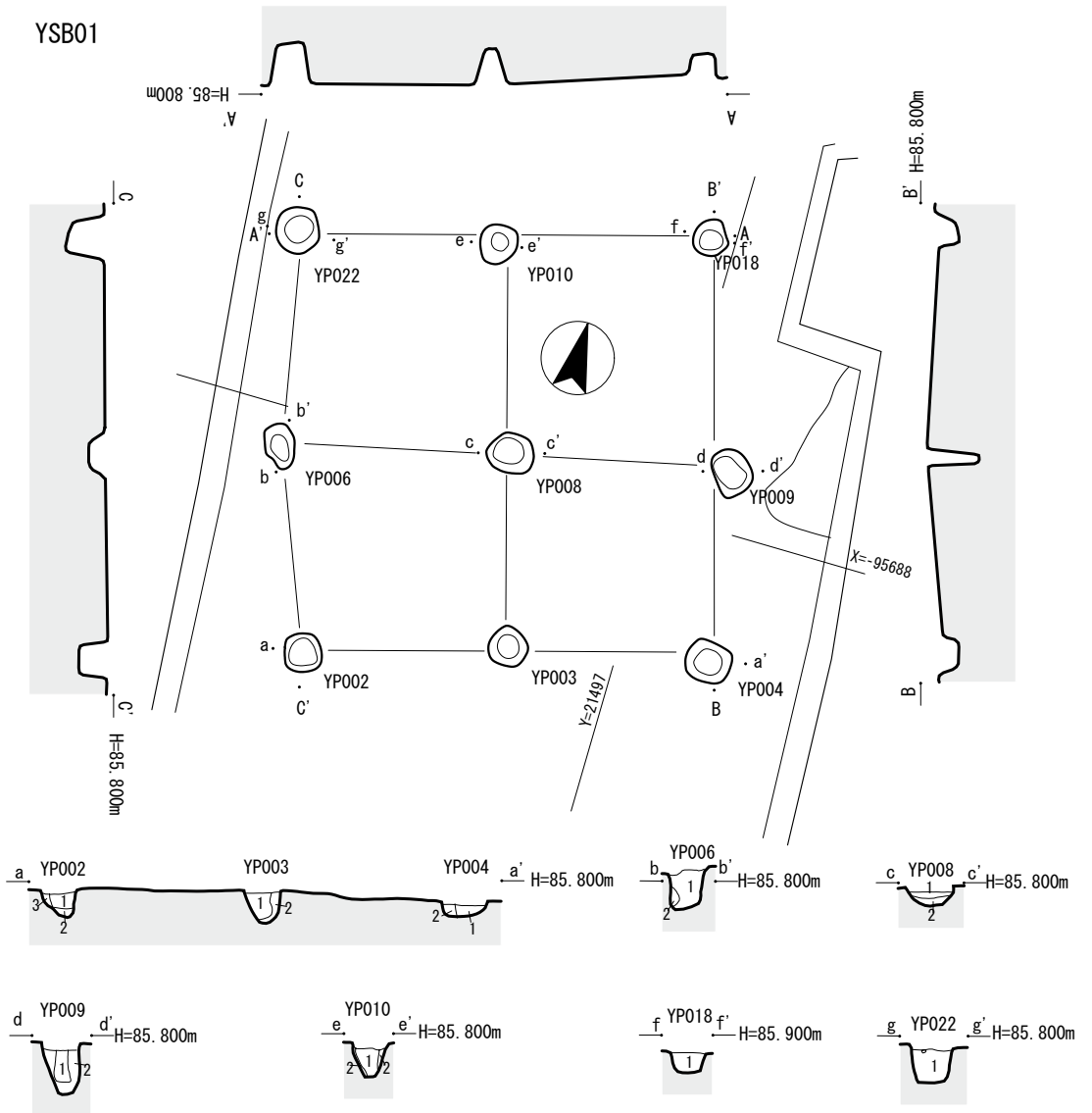
西方向とし、桁行1間以上×梁間2間の掘立柱建物跡として復元した。軸方向がN-15°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行方向が1間分の2.4m、梁間方向が5.3mである。南西側及び、それ以南の柱穴は失われているため、桁行の全長は不明である。柱間寸法は、桁行が2.4m、梁間が2.65mの等間である。復元に使用した柱穴は、VP003、004、006、010の4個である。柱穴掘方の規模と平面形は、VP003が23cm×23cmの円形、VP004が21cm×20cmの円形、VP006が25cm×21cmの楕円形、VP010が24cm×23cmの隅丸方形を呈する。断面形は全てU字形を呈し、底面標高は83.1mから83.2mである。柱痕跡は全ての柱穴で確認した。検出面での直径は、VP003が11cm、VP004が15cm、VP006が13cm、VP010が12cmである。柱痕跡はVP003とVP010が黒色、VP004とVP006が黒褐色を主体とした色調であり、いずれにもIV層（地山）由来のシルトが粒状から塊状で少量混入する。また、VP010の柱痕跡には焼土粒がごく少量混入する。掘方の堆積土は、VP003とVP004が粘性の強い浅黄橙色シ



ルトから粘土を主体とし、黒色から黒褐色シルト塊が混入する。VP006とVP010は柱痕跡と近い色調を呈しているが、IV層（地山）のにおい黄褐色から黄褐色シルトが塊状で混入する。遺物は出土せず、時期も不明である。（鈴木）

#### YSB01（第198図）

Y区南部に位置する掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行2間の総柱式の建物跡と復元している。調査区内で完結している数少ない建物である。遺構の確認は、表土直下のIV層で行った。他遺構との重複はないが、東側に近接してYSK02が位置する。規模は、南北2.8m、東西2.8m、床面積7.8㎡、建物方位はN-16°-Wである。柱間寸法は、桁行、梁行とも1.4mの等間に復元できる。柱筋の通りはあまりよくないが、基準寸法は統一的である。建物跡を構成する柱穴は9個すべてを確認した。平面形は円形を基調とするものと方形状を基調とするものが混在する。規模は長軸が25～32cmの間にあるが、30cm前後のものがほとんどである。確認面からの深さは14～35cm前後にあり、15cm前後と30cm前後の2者に分かれる。柱穴の底面レベルには、あまり統一感が認められない。柱痕跡はYP002、003、004、006、009、010で確認できる。堆積土は黒色を呈する粘土質シルトを基調とし、掘方にはIV層由来の明黄褐色のシルトブロックが含まれているものがほとんどである。遺物はいずれの柱穴からも出土していない。総柱で、2間×2間の建物跡であるため倉庫と想定される。時期は、建物方位の検討から、古代以降の中世や近世と考えたが、建物形式から古代である可能性も残る。



- YSB01
- YP002
- |                      |                                    |
|----------------------|------------------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1   | 地山ブロック (10YR7/6) (径 3 cm) を 5% を含む |
| 2 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 | 黒色土 (10YR2/1) を 20% を含む            |
| 3 黄褐色粘土質シルト 10YR5/6  | 黒色土 (10YR2/1) を 5% を含む             |
- YP003
- |                      |                           |
|----------------------|---------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1   | 地山ブロック (10YR7/6) を 5% を含む |
| 2 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 | 黒色土 (10YR2/1) を 20% を含む   |
- YP004
- |                      |                                    |
|----------------------|------------------------------------|
| 1 明黄褐色粘土質シルト 10YR7/6 | 黒色土 (10YR2/1) を 20% を含む            |
| 2 黒色粘土質シルト 10YR2/1   | 地山ブロック (10YR7/6) (径 3 cm) を 5% を含む |
- YP006
- |                     |                                    |
|---------------------|------------------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1  | 地山ブロック (10YR7/6) (径 3 cm) を 5% を含む |
| 2 黄褐色粘土質シルト 10YR5/6 | 黒色土 (10YR2/1) を 5% を含む             |
- YP008
- |                     |                                 |
|---------------------|---------------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1  | 地山粒 (10YR7/6) (径 5 mm) を 5% を含む |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 | 地山粒 (10YR7/6) (径 5 mm) を 5% を含む |
- YP009
- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1  | 地山粒 (10YR7/6) (径 1 cm) を 3% を含む        |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 | 地山ブロック (10YR7/6) (径 5~10 cm) を 15% を含む |
- YP010
- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1  | 地山ブロック (10YR7/6) (径 1 mm) を 3% を含む     |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 | 地山ブロック (10YR7/6) (径 5~10 cm) を 10% を含む |
- YP018
- |                    |                                    |
|--------------------|------------------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1 | 地山ブロック (10YR7/6) (径 3 cm) を 5% を含む |
|--------------------|------------------------------------|
- YP022
- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1 黒色粘土質シルト 10YR2/1 | 地山粒 (径 1~3 mm) を 10% を含む |
|--------------------|--------------------------|

0 1:50 2m

第198図 YSB01掘立柱建物跡

### (3) 大 溝 跡

大溝跡とした遺構は、2カ年に渡る調査において、計5地点（8調査区）で確認されたもので、連続して調査したものではない。しかし、その検出位置や断面形状、出土遺物、土層堆積状況などから、一連のひとつの遺構であると判断したものである。以下ではひとつの遺構ではあるが、調査地点ごとに記述する。なお、同一遺構であるが、調査地点ごとに個別の遺構名を付与している。

#### A地点（H区・I区）（第200図）

やや距離が南北に離れているが、H区とI区を合わせてA地点とする。全体の中では西側に位置する。

#### HSD05・ISD01（第201図）

HSD05は、H区中央付近に位置する。大溝跡北側でHSK09と重複しており、大溝の方が古い。検出は表土直下のIV層上面である。大溝の方向は、調査区内ではちょうど南北方向であり、南端でやや東に振れる。南北端ともに調査区外へ続き、北端はG区へ、南端はI区へ続くと思われ。調査区内での規模は、南北12m、上幅が最大で2.3m、深さが、確認面から0.72mである。断面形はゆるやかな逆台形状を呈している。底面の高さを見ると北から南方向にゆるやかに傾斜している。

堆積土はいずれも黄色味が強い色調を呈しており、他地点とは異なる様相を示す。堆積状況もレンズ状堆積が観察されることから自然堆積と考えられる。十和田aテフラは層中には含まれていない。

ISD01は、I区西端付近に位置し、他遺構との重複はない。検出は表土直下のIV層で行っている。I区は調査区幅が2m超しかないため、詳細な内容はほぼ不明となる。大溝の方向は、南北方向であり、HSD05との位置関係からみると、HSD05南端から若干西側に屈曲して接続するようである。I区での規模は、長さが1.9m、上幅が最大で1.6m、深さが確認面から0.8mである。堆積状況も自然堆積であり、十和田aテフラは含まれていない。

A地点は、遺跡内を半周する大溝の西側の一部となる。この付近は、他遺構も含めて、浅い遺構が多く、礫層が露出している場所もあり、削平が強く及んでいることがわかる。したがって、A地点で計測した規模は本来の規模を表してはいないと捉えられる。

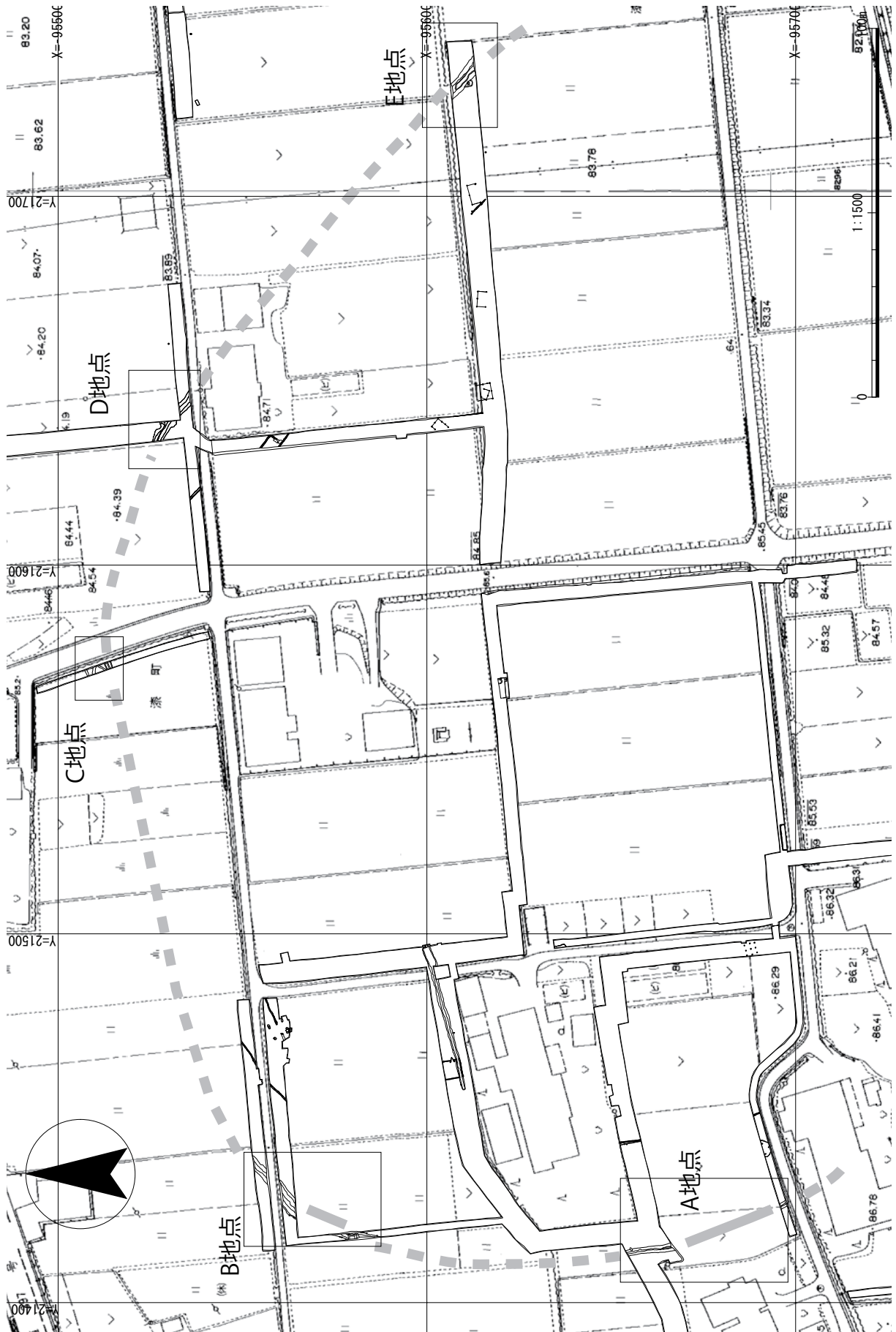
#### B地点（第202図）

大溝の北西隅部分に相当する地点であり、F区とG区を合わせてB地点とする。

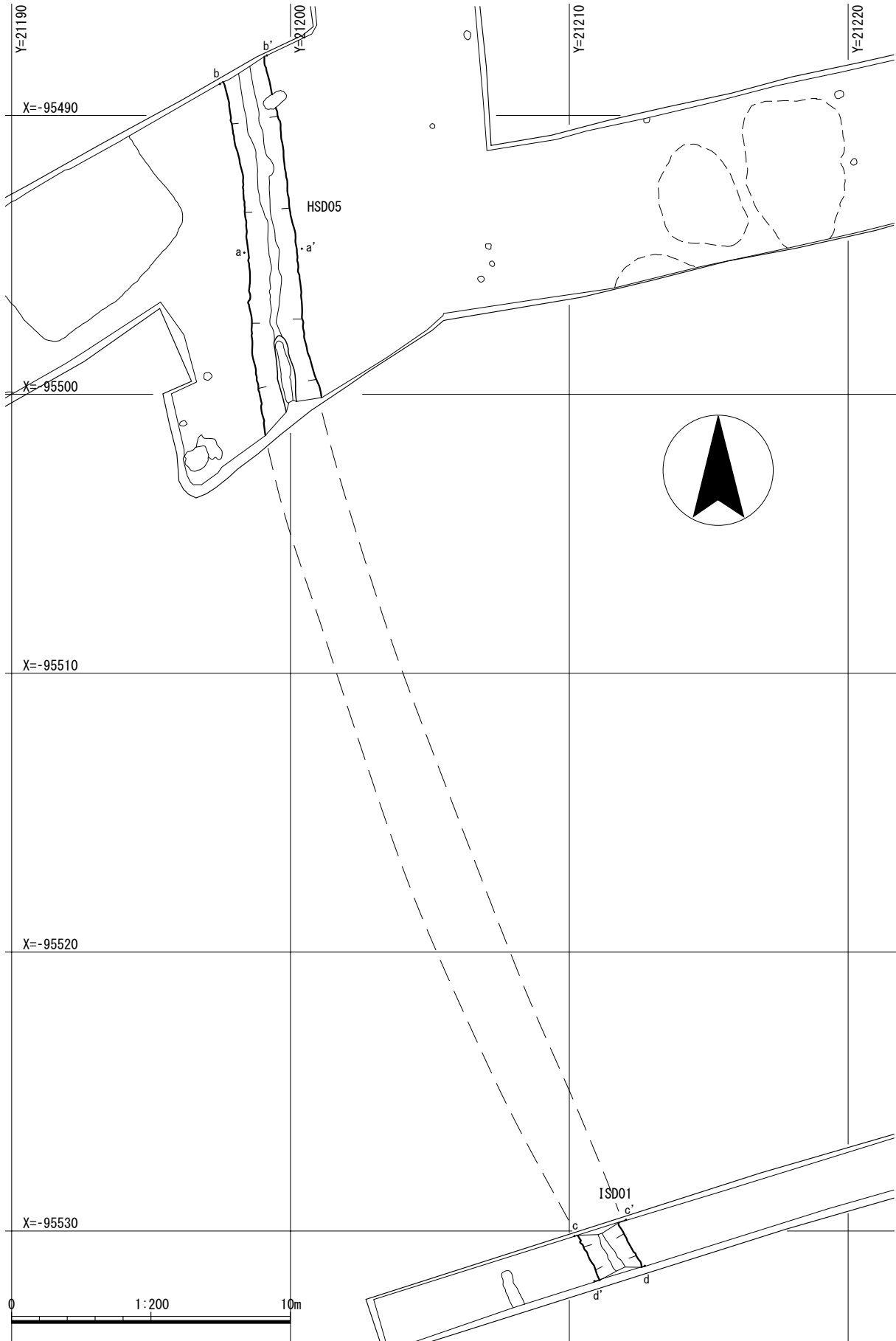
#### FSD01・GSD01（第203図）

FSD01はF区西端に位置する。重複は柱穴2個と重複するが、大溝跡の方が古い。検出はIII層～IV層で行った。方向は南西から北東方向であり、南端ではわずかに曲がりG区へと続く。規模は、長さが、調査区内では16m、上端が最大で4m、深さは確認面から1.46mである。断面形は逆台形状を呈し、底面がやや窪む。堆積土は11層が確認でき、灰黄褐色～黒褐色系の色調を呈する。断面図6層下面と7層上面を結ぶラインと11層では、異なる断面形が観察できる。堆積の段階を示すと考えられるが、大溝の掘り直し、あるいは浚渫の可能性もある。底面標高はほぼ変わらないが若干南側が低い傾向がある。また、底面より70～80cm上方に十和田aテフラの2次堆積が確認できる。

GSD01はG区北部にある。GSD03と柱穴5個と重複し、切り合い関係からみると、大溝は柱穴よりは古く、GSD03よりは新しい。方向は南西－北東方向であり、調査区に対し斜行している。規模は、調査区内の長さが約4m、上端は調査区内では計測できない。深さは確認面から1mである。断面形

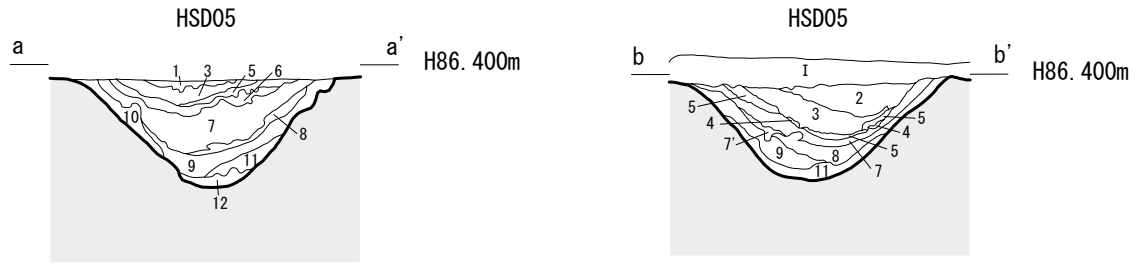


第199図 大溝跡全体図



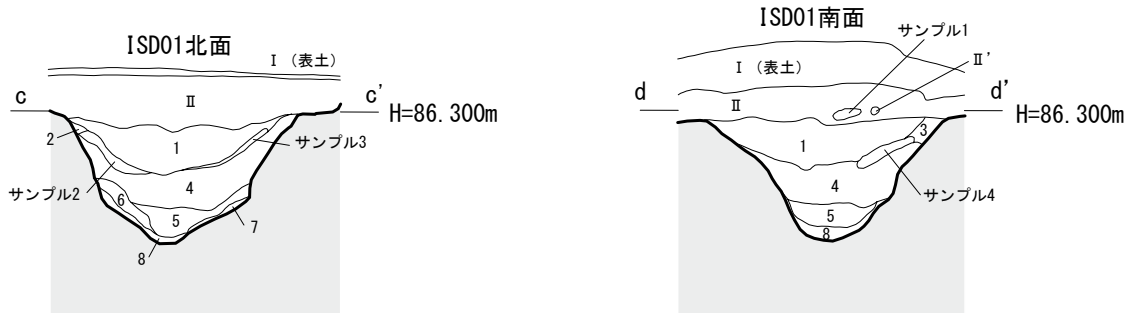
第200図 大溝跡A地点1

3 遺構と遺物



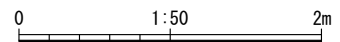
HSD05

- |    |            |          |  |
|----|------------|----------|--|
| 1  | 褐灰色シルト     | 10YR5/1  | 黄橙色 (7.5YR7/8) を呈する砂質シルト10%、黒褐色シルトブロック (10YR3/2) (径10mm) 5%を含む           |
| 2  | にぶい黄色砂質シルト | 2.5Y6/3  | 浅黄橙色 (7.5YR8/4) シルト (径20~30mm) を帯状に部分的に7%含む。                             |
| 3  | 黄褐色砂質シルト   | 2.5Y5/4  | 黄灰色 (2.5YR5/1) 粘土質シルトを2%含む   |
| 4  | 褐灰色シルト     | 10YR6/1  | 浅黄橙色 (7.5YR8/4) シルト粒を1%含む  |
| 5  | 浅黄橙色シルト    | 10YR8/4  | 褐灰色 (10YR4/1) シルト粒1%を含み、下位層との層界はやや粗く、砂粒状を呈する。                            |
| 6  | 黒褐色砂質シルト   | 10YR3/2  | 褐灰色 (10YR4/1) シルト粒を1%含み、下位層との層界はやや粗く、砂粒状を呈する。                            |
| 7  | 黄褐色砂質シルト   | 2.5Y5/4  | 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルトがラミナ状に含まれ、浅黄橙色 (7.5YR8/4) シルトブロック (径10mm程度) を下位に3%を含む |
| 7' | 灰黄褐色粘土質シルト | 10YR5/2  | 浅黄橙色 (7.5YR8/4) シルト粒を3%含む  |
| 8  | 褐灰色粘土質シルト  | 10YR5/1  | 黄橙色 (7.5YR7/8) 砂質シルト (地山由来) 1%を含む  |
| 9  | 褐灰色粘土質シルト  | 5YR4/1   | 明黄褐色 (10YR6/6) シルトブロック (径10mm以下) を1%、管状の斑鉄を全体的に含む                        |
| 10 | 黒褐色粘土質シルト  | 10YR3/1  | 明黄褐色 (10YR6/6) シルト粒5%を含む   |
| 11 | 黒褐色粘土質シルト  | 7.5YR3/1 | 明黄褐色 (10YR6/6) シルト粒を1%、酸化鉄粒を1%含む   |
| 12 | 明黄褐色シルト    | 10YR7/6  | 褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 7% 2~7層まではいずれもテフラを含む可能性がある                           |

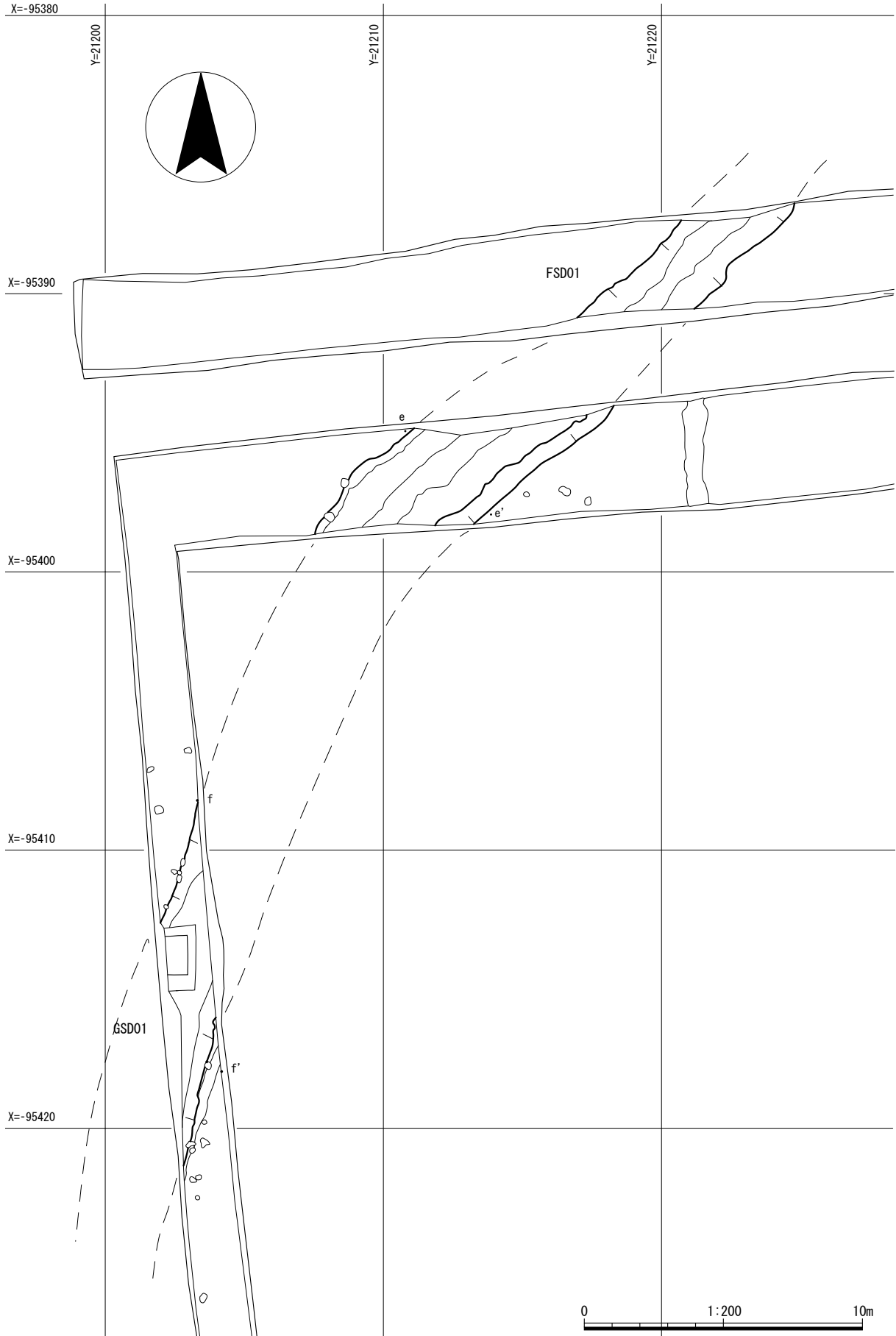


ISD01

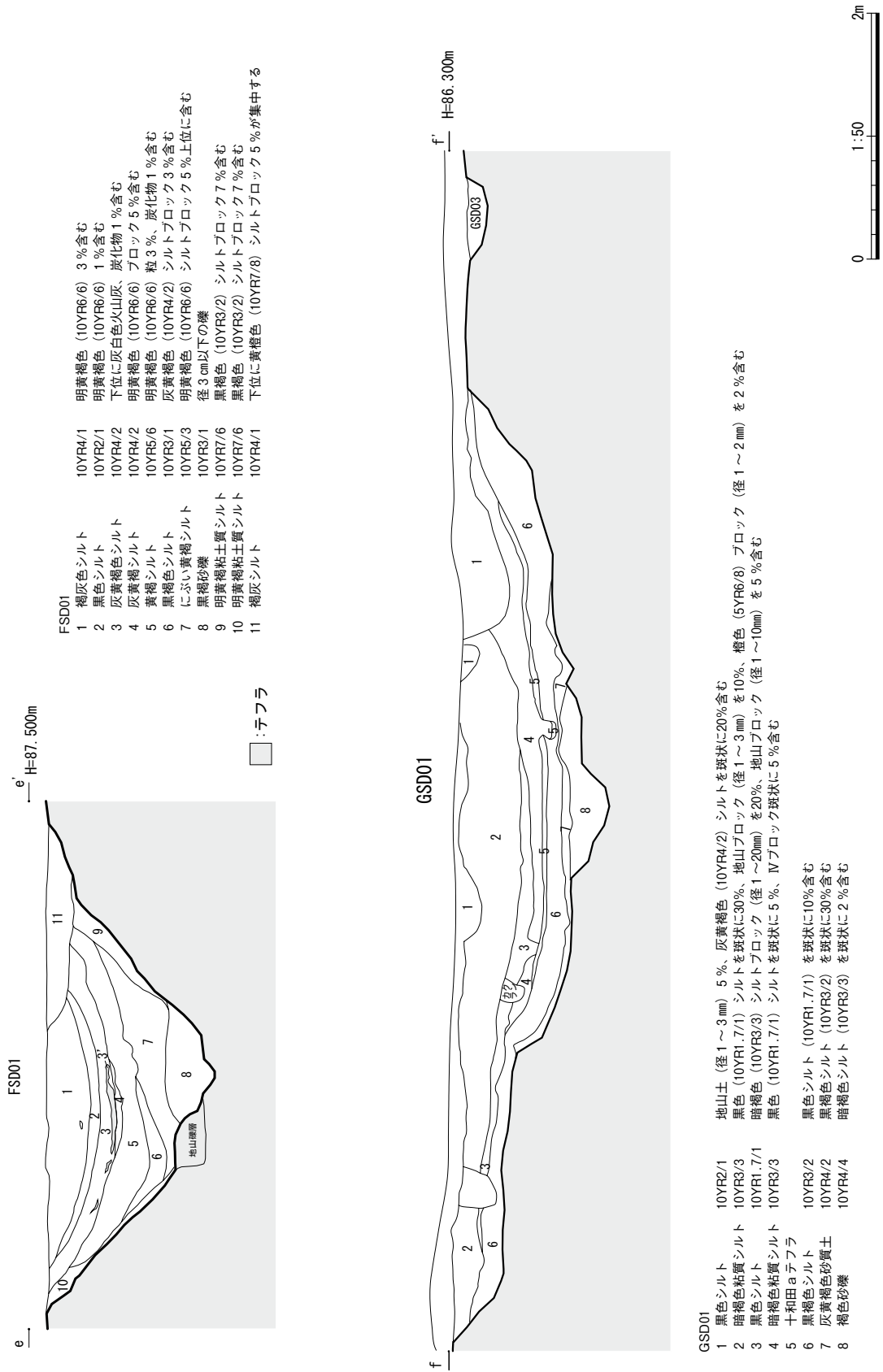
- |     |           |          |  |
|-----|-----------|----------|--|
| I   | 暗褐色シルト    | 10YR3/4  | 草根が多く含まれる [表土]                           |
| II  | 黒褐色シルト    | 10YR2/2  | 地山土粒 (10YR7/6) (径1cm) 3%を含む、耕作土          |
| II' | 浅黄橙色シルト   | 7.5YR8/4 |  |
| 1   | 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1  | 地山土粒 (10YR6/6) (明黄褐色径5mm) を5% 酸化鉄粒5%を含む  |
| 2   | 黄褐色シルト    | 2.5Y5/4  | サンプル採取                                   |
| 3   | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2  | 浅黄橙色 (7.5YR8/4) 砂質シルトを帯状に10%含む 火山灰サンプル採取 |
| 4   | 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/2  | 地山土粒 (10YR6/8) (径1cm) を5%、酸化鉄粒を5%含む      |
| 5   | 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1  | 地山土粒 (10YR6/8) (径1mm) を3%含む              |
| 6   | 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1  | 地山土粒 (10YR7/6) (径1~3mm) を20%含む           |
| 7   | 灰黄色粘土質シルト | 2.5Y6/2  | 黒色土 (5層か) を3%含む                          |
| 8   | 灰黄色粘土質シルト | 2.5Y6/2  | 黒色土 (5層か) を3%含む                          |



第201図 大溝跡A地点2



第202図 大溝跡B地点1



第203図 大溝跡B地点2



は逆台形状を呈している。堆積土は8つに分層でき、暗褐色から黒褐色系の色調を呈する。底面から上に30cmの位置に十和田 a テフラの2次堆積が確認できる。

B地点では、削平を受けるものの比較的良好に大溝が残存していた。

### C地点（J区）（第204図）

大溝推定範囲の北側に位置するJ区をC地点とする。J区では東西に延びる溝跡が複数あり、大溝とどの溝が対応するかやや不明確な部分もある。断面形状を重視して、JSD03が大溝跡であると想定している。

#### JSD03（第204図）

J区中央部付近に位置する溝跡である。平面図上に重複は見えないが、断面観察ではJSD05とした沢跡と重複し、これよりも古い遺構となる。また、隣接するJSD04とは、その方向から調査区外において重複する可能性が高い。検出は、Ⅲ層からⅣ層上面である。溝跡の方向は、北東から南東方向にほぼ直線的に延び、両端とも調査区外へ続いている。調査区内での規模は、長さが1.8m、上幅が最大で3.6mである。断面形はやや崩れてはいるが逆台形を呈し、確認面からの深さは50cmである。底面のほぼ中央は、溝状に一段下がっている。底面の高さは、調査区内においてはほぼ平坦である。堆積土は10層に分層できる。多くは黒褐色から黒色を呈する粘土や砂質土であり、ラミナ堆積のみられる層も存在することから水性堆積と考えている。

また、これらの上層には付近の遺構と同様にJSD05の堆積土が全体を覆っている。

この溝跡は堆積状況がやや異なるものの大溝跡と想定している遺構と断面形や規模などが類似していることから、一連の大溝と判断している。なお、近接して、同規模の溝跡JSD04もあり、作り替えや複数存在した可能性がある。

### D地点（第206図）

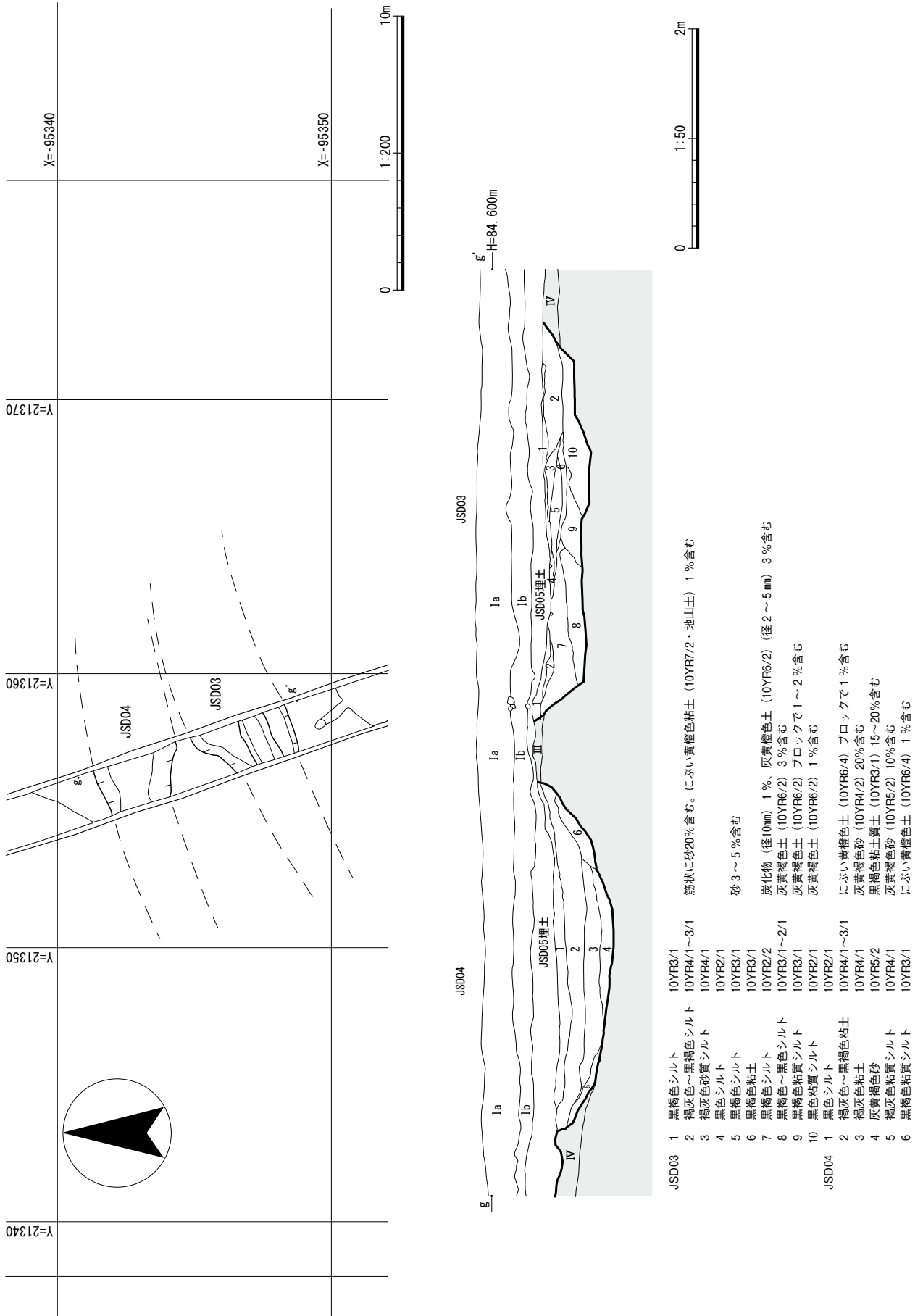
Q区とS区との接合箇所付近に位置するQSD03とSSD01をD地点とする。

QSD01とSSD01はほぼ近接しており、区別なく記載する。他遺構との重複は調査区内では確認できない。検出は、Ⅲ～Ⅳ層にかけてである。大溝の方向は、北西方向から湾曲しながら南東方向に向かう。規模はQSD03・SSD01合わせて、長さが15m、上幅が最大で3m、深さが、最大で0.8mである。断面形は、崩れた形があるもののおよそ逆台形状を呈する。堆積土は黒褐色から黒色を呈する色調の粘土質シルト～シルト層が主体である。底面から40cm上に十和田 a テフラの2次堆積が認められる。

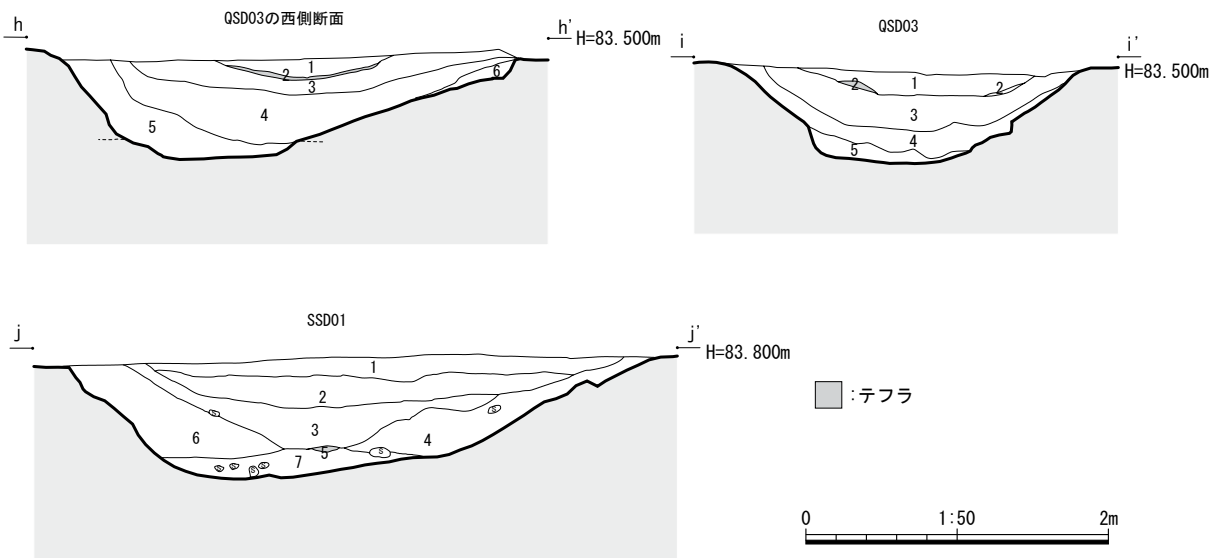
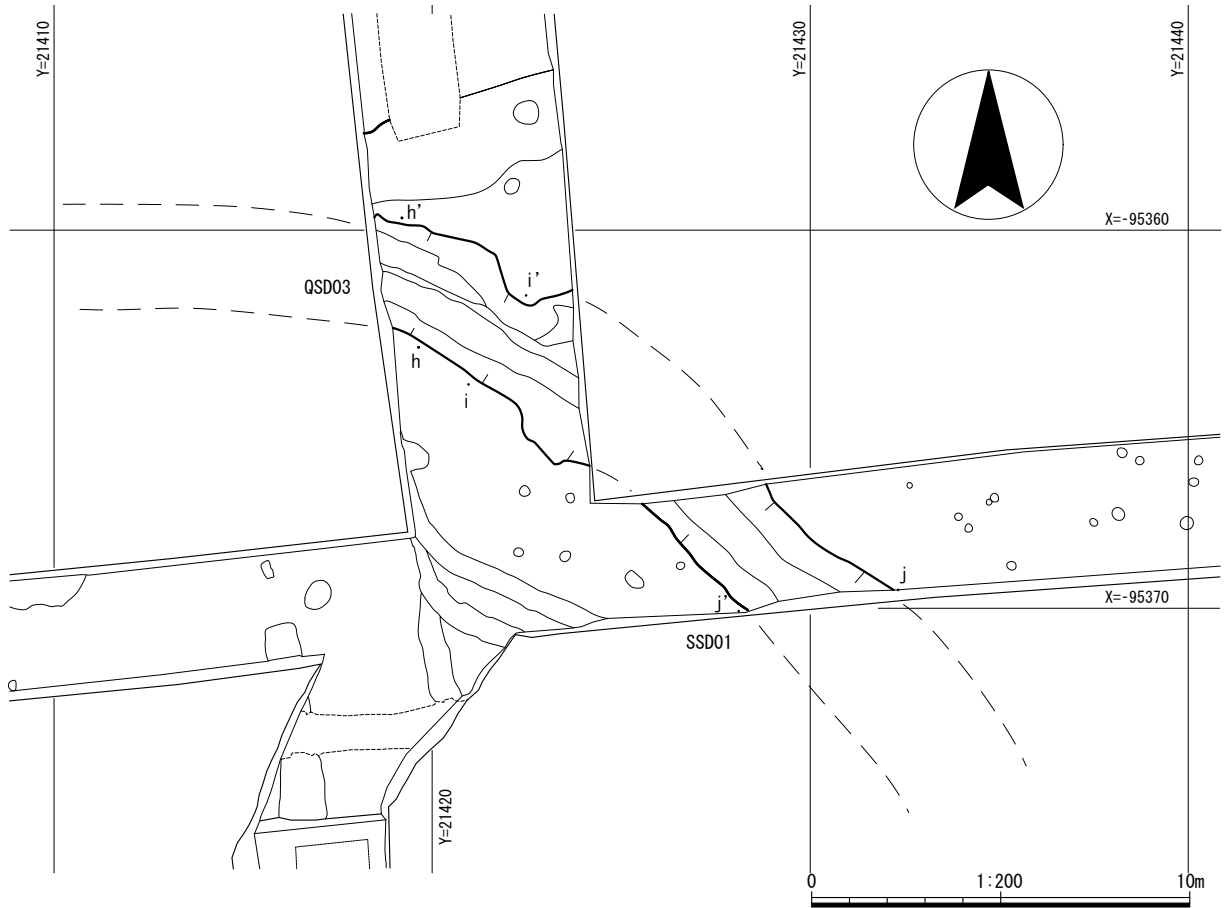
### E地点（第206・207図）

大溝の南東に相当するV区をE地点とする。

VSD01はV区の東端に位置する。他遺構との重複はないが、西側に土坑状の落ち込みがある。切り合い関係があり、大溝の方が新しい。別遺構の可能性もあるが、ここでは大溝に関連する遺構と捉えている。大溝の方向は北西から南東方向であり、この方向にほぼ直線的に延びている。南北端ともに調査区外へ続く。規模は、長さが9m、上幅が最大で3.7m、深さが確認面から1.37mである。断面形は逆台形状を基本とし、崩れて深い皿状を呈する部分もある。堆積状況は、三角堆積やレンズ状堆積が観察でき、自然堆積と考えられる。堆積土は黒褐色から黒色を呈する色調のシルトを基調とする。十和田 a テフラは底面から30～40cm上に二次堆積としてブロック状に含まれている。また、底面付近には、自然木が出土している。広がりから流木と想定できる。これらは加工痕の残るものはなく、樹



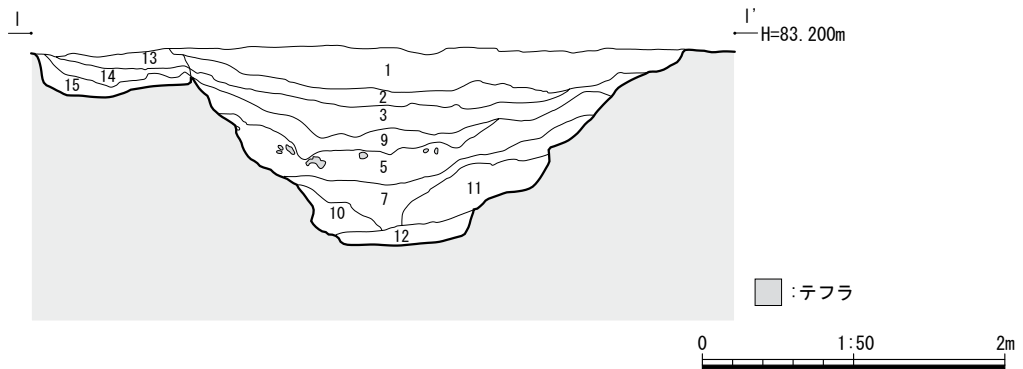
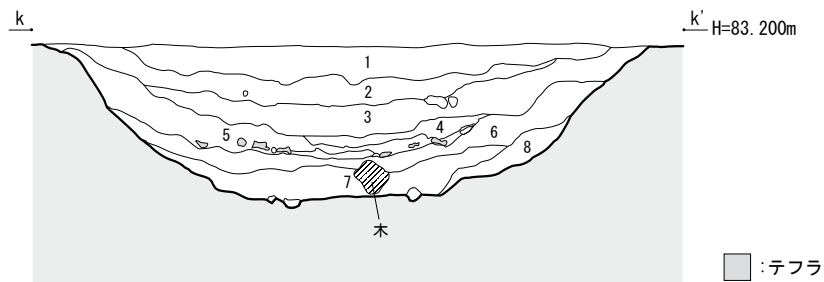
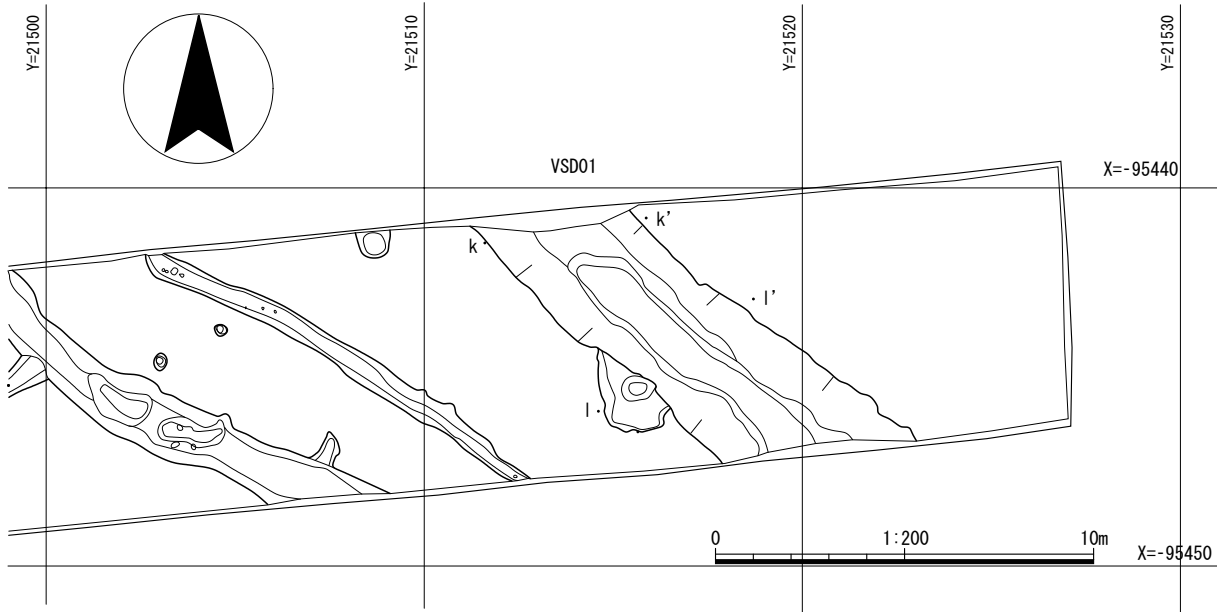
第204図 大溝跡C地点



- |       |   |                   |          |                                |
|-------|---|-------------------|----------|--------------------------------|
| QSD03 | 1 | 黒褐色粘土質シルト         | 10YR3/1  | 斑鉄多い                           |
|       | 2 | 1層下面のTo-aブロック二次堆積 |          |                                |
|       | 3 | 褐灰色砂土質シルト         | 10YR4/1  | ラミナ状。下部局所的に粒径大 粗砂~礫ブロック        |
|       | 4 | 黒褐色粘土質シルト         | 10YR3/1  | 下部砂質シルト~粗砂 最下部 礫層 下面 酸化鉄皮膜     |
|       | 5 | 黒色粘土質シルト          | 7.5YR2/1 |                                |
|       | 6 | 黒褐色粘土質シルト         | 7.5YR2/2 |                                |
| SSD01 | 1 | 黒褐色シルト            | 10YR3/2  | 地山土粒(径10mm)帯状に10%を含む           |
|       | 2 | 黒色シルト             | 10YR2/1  | 灰黄褐色土(10YR4/2)帯状に5%を含む         |
|       | 3 | 黒色シルト             | 10YR2/1  | 褐色シルトブロック(10YR4/4)(径50mm)3%を含む |
|       | 4 | 黒褐色砂質シルト          | 10YR3/2  | 地山由来砂粒15%を含む                   |
|       | 5 | 黄褐色火山灰            | 10YR8/6  | To-aテフラ、ほぼ水平に堆積。               |
|       | 6 | 黒褐色砂質シルト          | 10YR3/2  | 地山由来砂粒15%を含む                   |
|       | 7 | 黄褐色砂質シルト          | 10YR5/6  | 一部酸化鉄を帯状に5%を含む                 |

第205図 大溝跡D地点

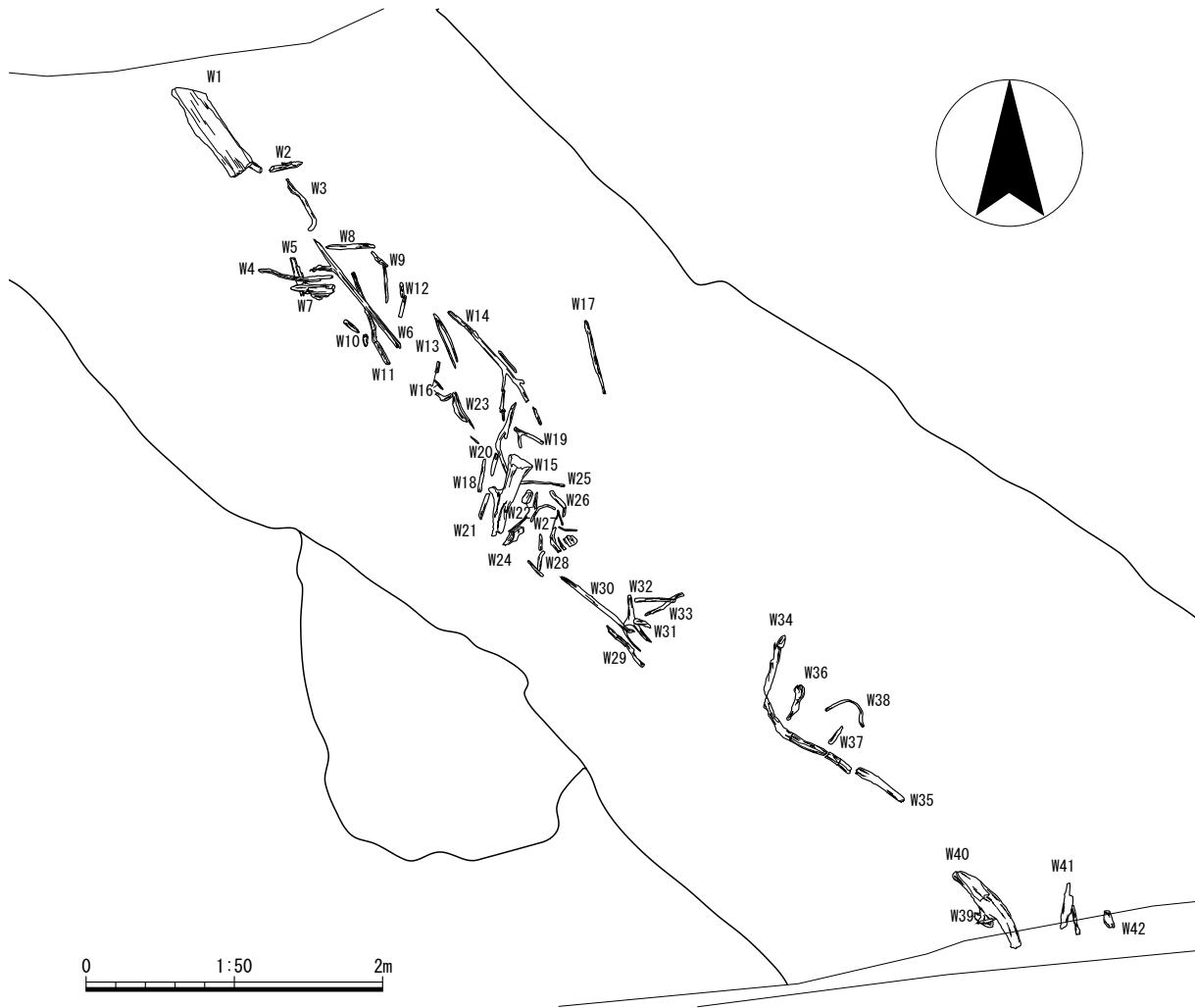
3 遺構と遺物



VSD01

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 1 黒褐色粘土質シルト 10YR2/3  | 黒色粘土粒 (10YR5/8) (径3~5mm程度) 50%、黒色粘土粒 (10YR2/1) (径1~4mm程度) 30%含む |
| 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2  | 黄褐色粘土粒 (10YR5/6) (径1~10mm程度) 15%、炭化物粒 (径2~4mm程度) 3%含む           |
| 3 黒色粘土質シルト 10YR2/1   | 酸化鉄粒50%含む   |
| 4 黒褐色シルト 10YR3/2     | 炭化物粒 (径2~5mm程度) 30%含む   |
| 5 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1  | 火山灰ブロック (径2~5mm程度) を50%含む                                       |
| 6 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2  | 酸化鉄粒50%含む   |
| 7 黒褐色シルト 10YR3/3     | にぶい黄褐色砂粒 (10YR4/3) (径2~6mm程度) 30%含む                             |
| 8 黒褐色シルト 10YR3/2     | 地山粒 5%含む  |
| 9 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3  | 地山粒 (径5~10mm) 30%、黒色粘土粒 (10YR2/1) (径2~5mm) 3%含む                 |
| 10 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 |   |
| 11 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3 | 酸化鉄ブロック (径15mm程度)、灰黄褐色シルト (10YR4/2) 50%含む                       |
| 12 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 | 黒褐色砂粒層 礫 (径3~5mm程度) 30%含む                                       |
| 13 黒色粘土質シルト 10YR2/1  |   |
| 14 黒褐色粘土質シルト 10YR2/3 | 褐色粘土粒 (10YR4/4) (径5~10mm程度) 15%、炭化物粒 3%含む                       |
| 15 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 | 灰黄褐色粘土ブロック (10YR4/2) (径2~3mm程度) 20%、炭化物粒 3%含む                   |

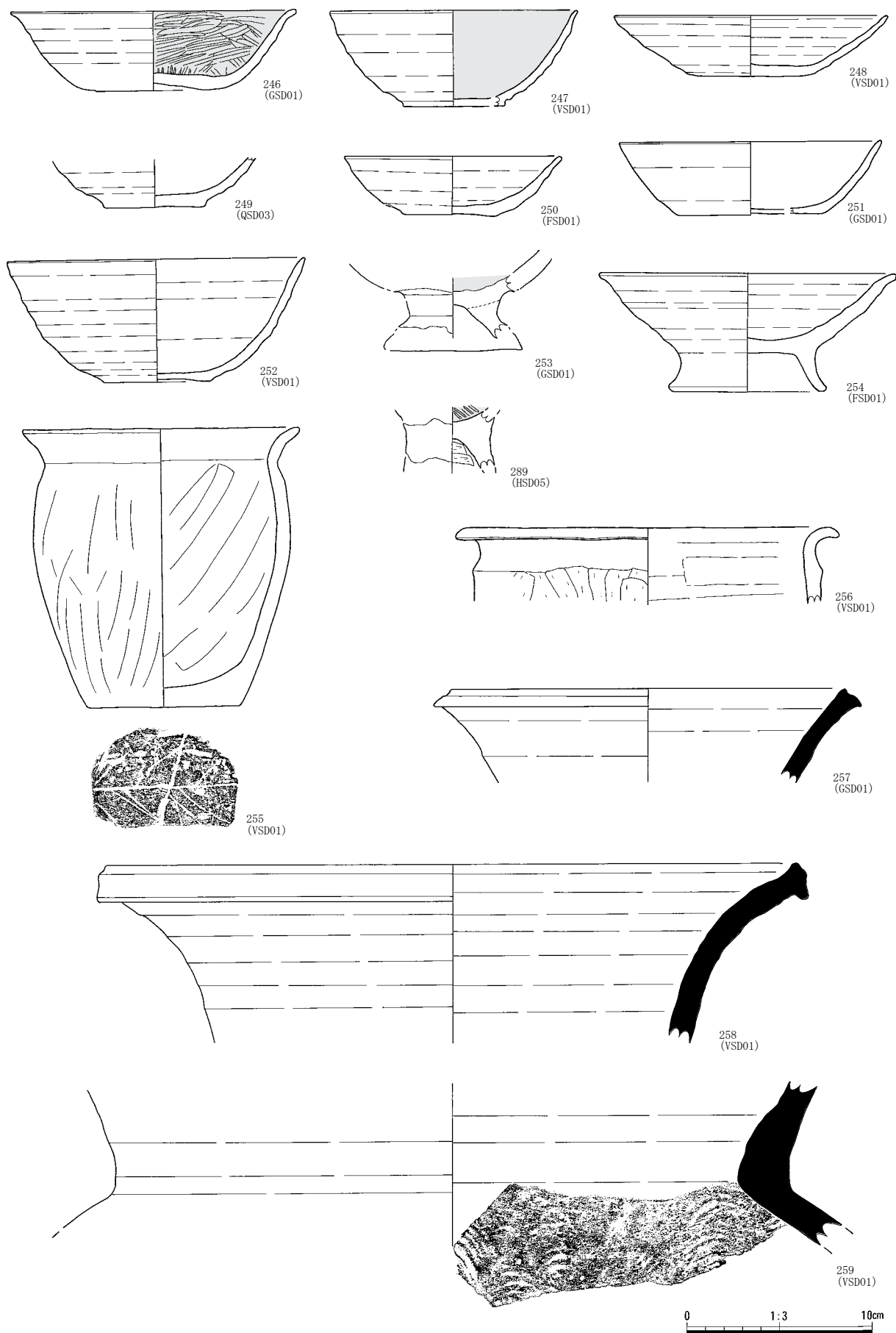
第206図 大溝跡E地点1



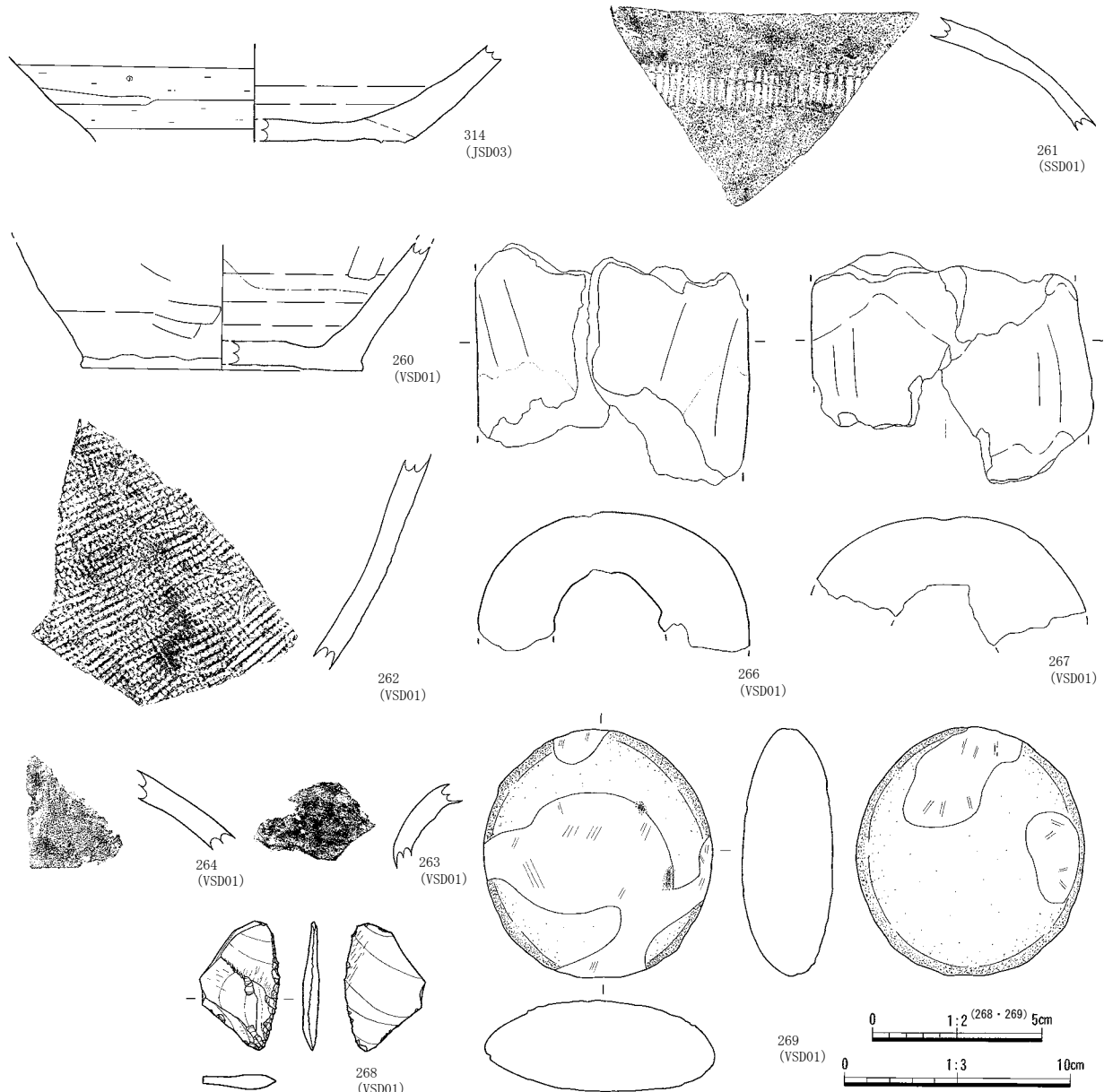
No.	樹種
W 1	ナラ
W 2	ウメ
W 3	サワクルミ
W 4	ヤマザクラ
W 5	ナラ
W 6	サワクルミ
W 7	イタヤカエデ
W 8	不明
W 9	カバ
W 10	カバ
W 11	クリ
W 12	カバ
W 13	カバ
W 14①	ヤマザクラ
W 14②	サワクルミ
W 15①	ヤマザクラ
W 15②	カバ
W 16	カバ
W 17	ヤマザクラ
W 18	カバ
W 19	カバ
W 20	イタヤカエデ
W 21	モミジイタヤ

No.	樹種
W 22	イタヤカエデ
W 23	クリ
W 24	ナラ
W 25	ヤマブドウのツル
W 26	イタヤカエデ
W 27	ブドウのツル
W 28	ナラ
W 30①	カバ
W 30②	ヤマブドウのツル
W 31①	ナラ
W 31②	モミジのコブ、ヤマブドウのツル
W 32	カバ
W 33①	カバ
W 33②	サワクルミ
W 34	ヤマザクラ
W 35	カバ
W 36	モミジイタヤ
W 37	ツル不明
W 38	フジ
W 39	ナラ
W 40	ミズナラ
W 41	カシワ
W 42	サワクルミ

第207図 大溝跡E地点2



第208図 大溝跡出土遺物 1



第209図 大溝跡出土遺物 2

種も様々であるが当時の植生の一端がわかる資料である（第207図）。

これら5地点で確認された大溝跡は、西からISD01、HSD05、GSD01、FSD01、JSD03（JSD04）、QSD03、SSD01、VSD01の順につながると想定される。それを推定線も含めてみると、遺跡内部の西・北・東を区画するように配置されている。規模を推定すると、総延長が600mにも及び、区画内は東西350m、南側は、今回の調査で確認できていないが小違水路付近を南限とすると、南北最大で270mである。

大溝跡の規模をまとめると、上幅が最大で4m、深さは最大で1.5mである。最小はHSD05であるが、この付近は削平が及んでいるため現状では下半部のみであり、規模が小さくなっていると推定される。断面形は基本的にいずれも逆台形状を呈しており、部分的に皿状ないし「U」字形を呈する。GSD01、FSD01、QSD03、SSD01、VSD01では、堆積土下位に灰白色テフラの2次堆積層が堆積する点で共通する。この灰白色テフラは科学分析の結果 To-a テフラと判断された（第V章第1節）。底

面より30～40cm上方に含まれるものが多く、50cm上方に含まれるものもある。埋没状況も比較的類似する可能性がある。

底面レベルをみると、A・B地点では、標高が85.0～85.7m前後、C地点では84m前後、D地点では83.0m前後、E地点では82m前後となる。高低差をみると西側に位置する大溝で底面レベルが高く、反対に東側の地点では低くなっていることがわかる。これは流路の方向というより、地表面の標高に影響を受けていると考えられる。したがって東西両地点とも同じような深度で大溝が掘削されていたことになる。また、地形的に低い場所に構築されているわけではなく、建物跡がある微高地と同じ標高の場所を大きく掘削して構築されている。

そのほか、JSD03やFSD01の堆積状況からみると、造り替えなどによって、複数大溝の存在が確認できる。広範囲を調査しないと正確に把握できないが、部分的に複数存在したか、あるいは造り替えが行われた可能性がある。今後の調査のための予想として上げておく点である。

遺物は各地点から出土している。合計で10.95kg出土している。個別の出土量については第26～32表に記載している。これらのうち図示したのは25点・3.73kg約34%である。各地点から出土しているが種類ごとに一括して記述する。

246～252は土師器杯である。このうち246・247の内面に黒処理が施され、それ以外には施されない。口径が大きく、器高も高い247・252や口径が大きく、器高が低い248・251がある。250は口径・器高ともに小さい。器形は、248は体部が直線的に外傾するが、それ以外はゆるやかに内彎する形態を呈する。253・289は高杯の脚部片である。脚部の残存状態からみるといずれも低めの脚部である。254は高台杯である。口径が16cmと比較的大きく、器高も6.2cmと大きい。253はGSD01、254はFSD01からの出土で、火山灰より上層からの出土である。255・256は、土師器甕片である。255は小型甕で底部に木葉痕が残る。257～259は須恵器大甕の口縁部片や頸部片である。260～264・314は、中世陶器の破片である。常滑窯産（260・261・263・264・314）や須恵器系陶器（262）に分かれる。266・267は、鞆羽口片である。いずれも推定外径は8cm前後である。そのほか、使用痕のある剥片（268）、磨石（269）などがある。遺物は調査面積の割には非常に少なく、異なる時期のものが多い。

遺構の時期を考えると、灰白色火山灰の存在や出土遺物から、この大溝跡の年代は平安時代（9世紀後半～10世紀中葉）と想定されるが、部分的な調査の出土遺物であり、時期も幅があるため不確かな点も残る。



#### (4) 材木堀跡

材木堀は、A～Dの4地点5調査区から検出している。部分的な検出のため、これらが同一遺構なのかは不明な点もあるが、それぞれ地点ごとに記述する。なお、今回検出した材木堀は、布掘の掘方に丸太材を密に並べる形式である。柱痕が残存している例はなく、縦断面観察から十分に柱痕跡を確認できない遺構も存在したが、掘方の形態や規模、方向などから同種の遺構と判断している。

##### A地点（I区・Z区）（第211・212図）

ISD04はI区西側に位置する。他遺構との重複は無い。検出は表土直下のIV層である。堀跡の方向は、南北方向であり、南北端とも調査区外へ続いている。調査区内での規模は、長さが1.9m、掘方の幅は最大で0.5mである。掘方の深さは確認面から55cmである。掘方底面は、一定ではなく小さな凹凸がある。堆積土は7層が確認でき、そのうち3・4・6・7層が柱痕跡と考えられるが、柱痕は残存していない。柱痕跡から推定すると柱径は18～20cm程度である。各柱材の間隔は一定ではなく、各柱が隣接する箇所や約20cmの間隔を空ける箇所もある。主軸の方位は、調査区内でN-20°-Wである。

ZSD02はZ区の西側に位置する。ZSD01と重複し、切り合い関係から、堀跡はそれよりも古い遺構となる。そのため、上部は削平を受けている部分がある。堀跡の方向は南北方向であり、両端とも調査区外へ続いている。調査した規模は、長さが5.7mで、掘方規模は、幅が0.4m、深さが0.4mである。掘方底面の状況は南側や他に比べ深く、細かな凹凸が確認できる。堆積土は6層が確認でき、2層が柱痕跡である（あるいは3層も含む）。柱痕跡の径は約20cmであり、確認面での平面形は円形であった。各柱の間隔は30～50cm前後である。主軸の方位は、調査区内のみでN-7°-Wである。遺物は、わずかに出土するのみである（ISD04から土師器細片が9.4g、ZSD02から土師器細片8.4g）。

##### B地点（F区）（第213・214図）

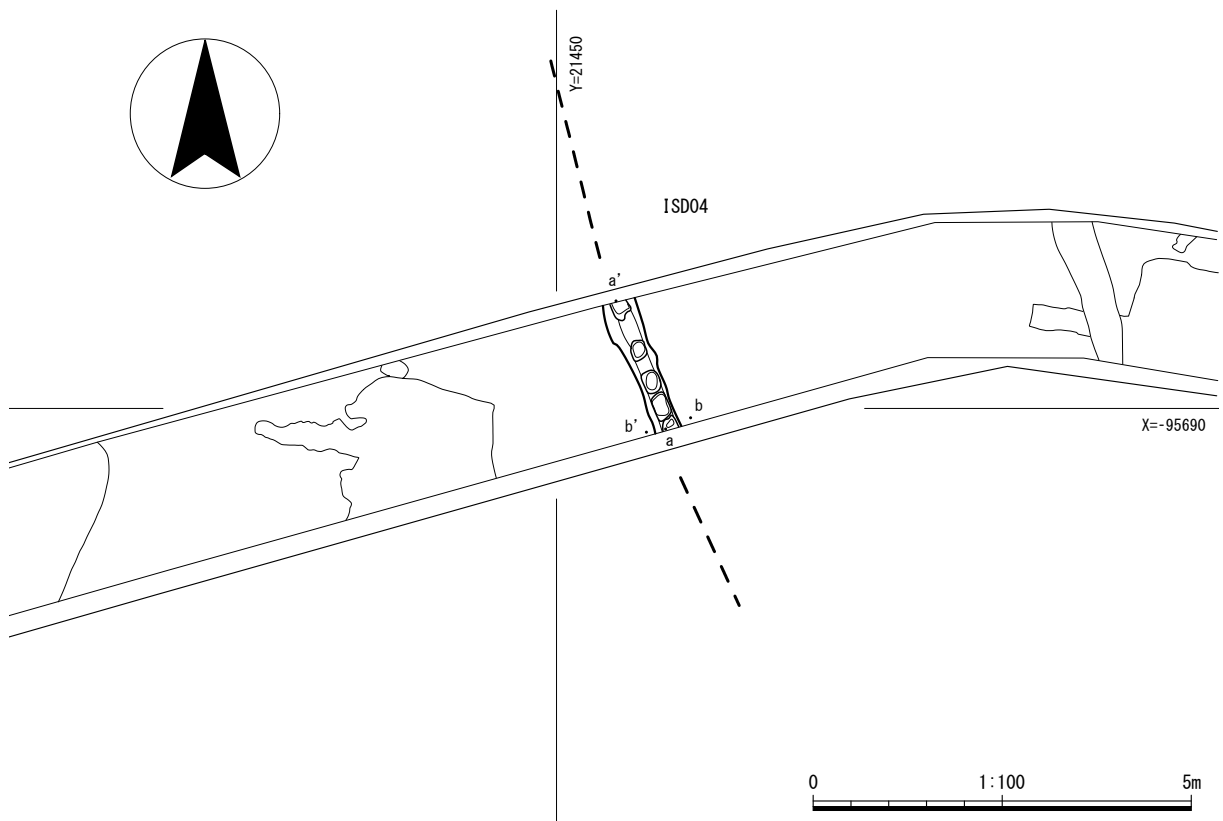
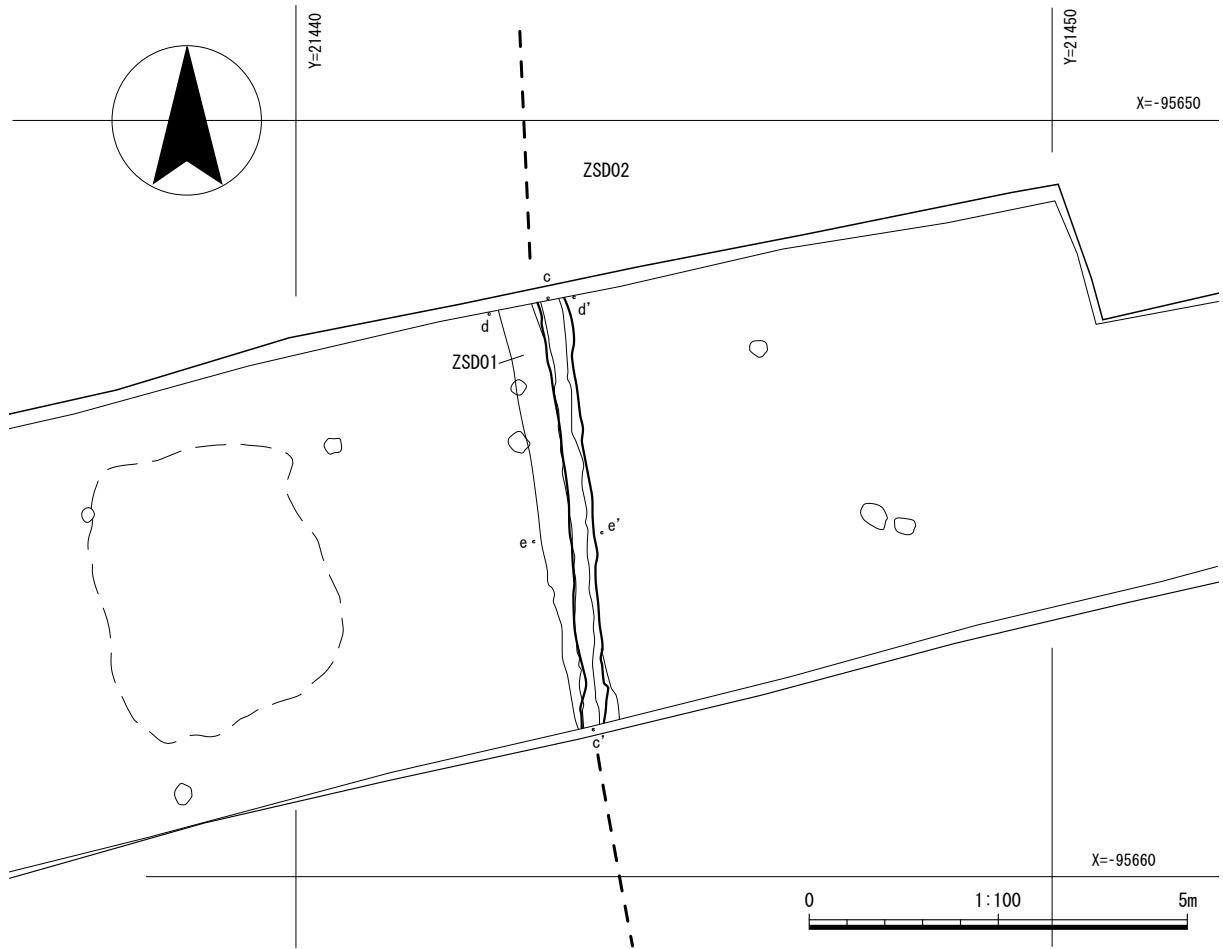
FSD03はF区東部に位置する。FSI01や柱穴と調査区内で重複する。FSD03はFSI01より新しく、柱穴よりは古い遺構となる。堀跡の方向は南西-北東方向であり、中央でやや北側に膨らみながら、おおよそ直線状に延びており、南北端ともに調査区外に続いている。主軸方位は、N-52°-Eである。調査した堀跡の長さは、4.7m（F区北側）、4.0m（F区南側）の合計8.7mである。掘方の幅は最大で40cm、深さは確認面から20cmと浅く、かなりの部分が削平を受けていると推定される。掘方の断面は、側面はほぼ垂直に底面まで掘削されており、底面は細かな凹凸が確認できる。堆積土は3層が確認でき、1層が柱痕跡と想定している。この層の位置をみると、20～30cmの間隔の部分が多いが、50cm以上間隔が空く部分もある。柱痕跡を確認した位置が底面に近く、柱痕跡の位置を確認できなかったためと考えられる。観察できる部分での柱痕跡の直径は20cm前後、平面形は円形と確認している。

FSD07もF区東部に位置し、FSD03より南10m平行に移動した位置にある。FSD04やいくつかの柱穴と重複する。切り合い関係からみると、FSD07よりFSD04の方が古い。堀跡の方向は、南西-北東方向であり、調査した規模は、長さが7.4m、掘方の幅が最大で0.3m、掘方の深さが0.48mである。主軸方位は、おおよそN-65°-Eである。断面形は他とほぼ同様であり、堆積土は4つに区分される。そのうち、1と2層が柱痕跡である。柱痕跡の間隔は30cm前後であり、底面に達しない柱痕跡もある。柱痕跡の直径は10～20cm、平面形は確認できた部分では円形である。

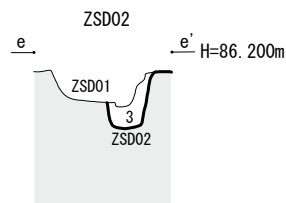
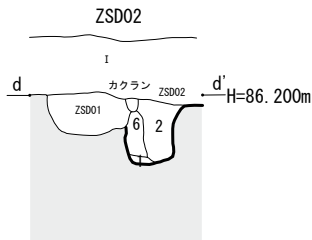
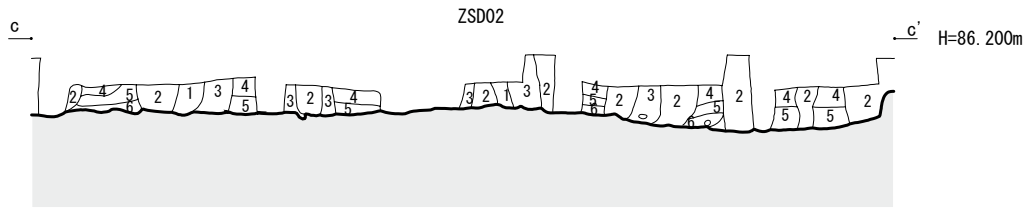
遺物は、FSD03から土師器ロクロ杯（内黒）片や非ロクロ甕片など64.4g、FSD07からは須恵器杯（278）のほか、土師器非ロクロ甕など細片が165.5g出土している。



第210図 材木堀跡全体図

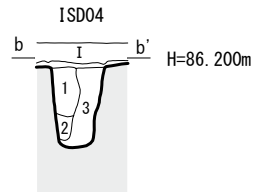
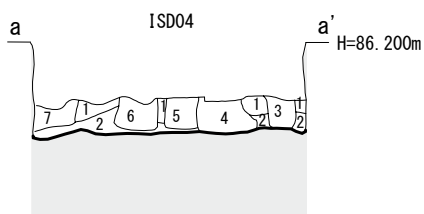


第211図 材木堀跡 A地点 1



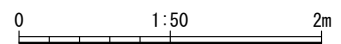
ZSD02

- |              |         |                                      |
|--------------|---------|--------------------------------------|
| 1 褐色粘土質シルト   | 10YR4/4 | 地山ブロック (10YR7/6) (径 5 cm) 30%を含む     |
| 2 黒褐色粘土質シルト  | 10YR3/2 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 1%を含む弱 (柱痕跡) |
| 3 暗褐色粘土質シルト  | 10YR3/3 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10%を含む含む     |
| 4 黒褐色粘土質シルト  | 10YR2/2 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 cm) 5%を含む        |
| 5 灰黄褐色粘土質シルト | 10YR4/2 | 地山土粒 (10YR7/6) (径10cm) 3%を含む         |
| 6 暗褐色粘土質シルト  | 10YR3/3 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 cm) 5%を含む        |

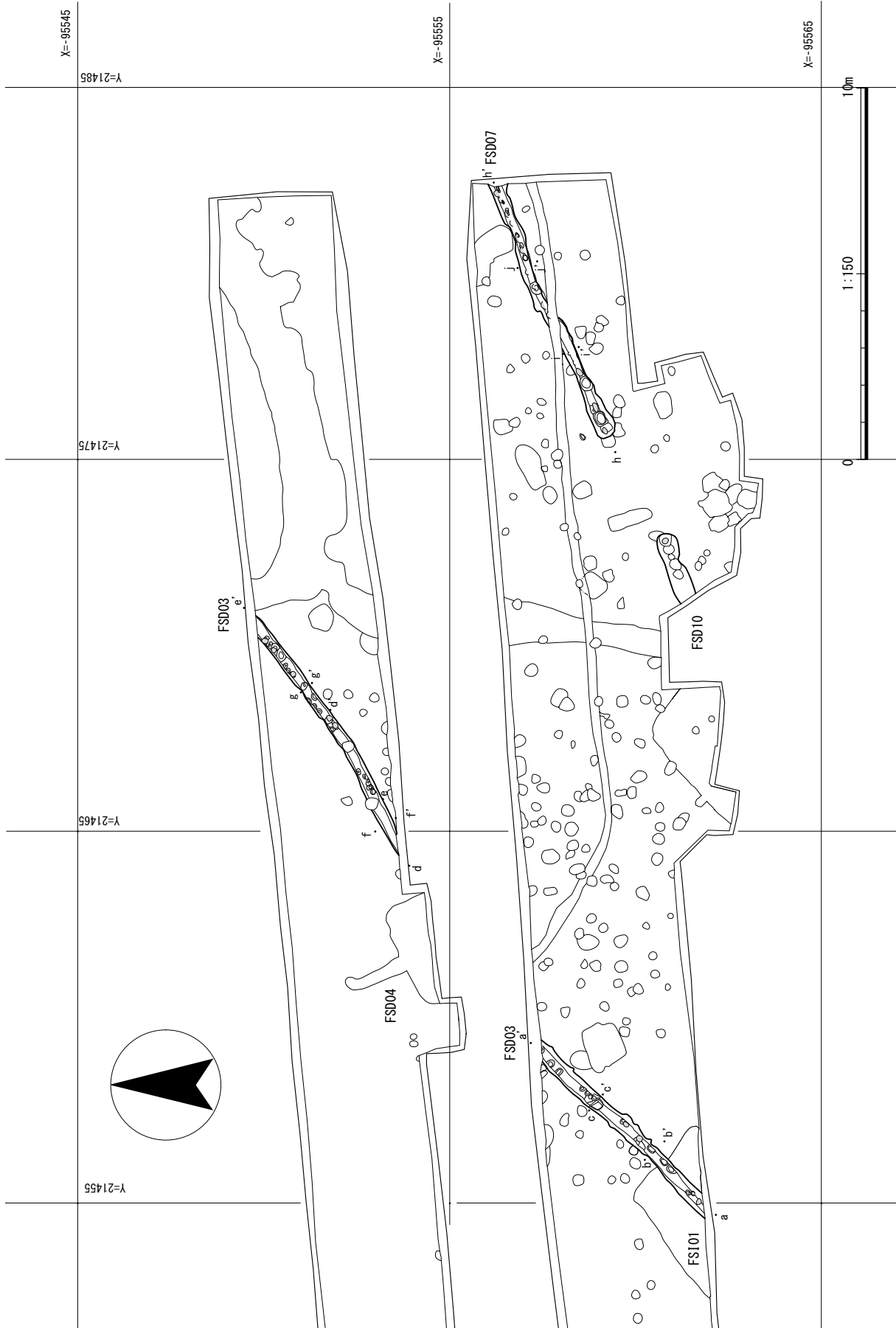


ISD04

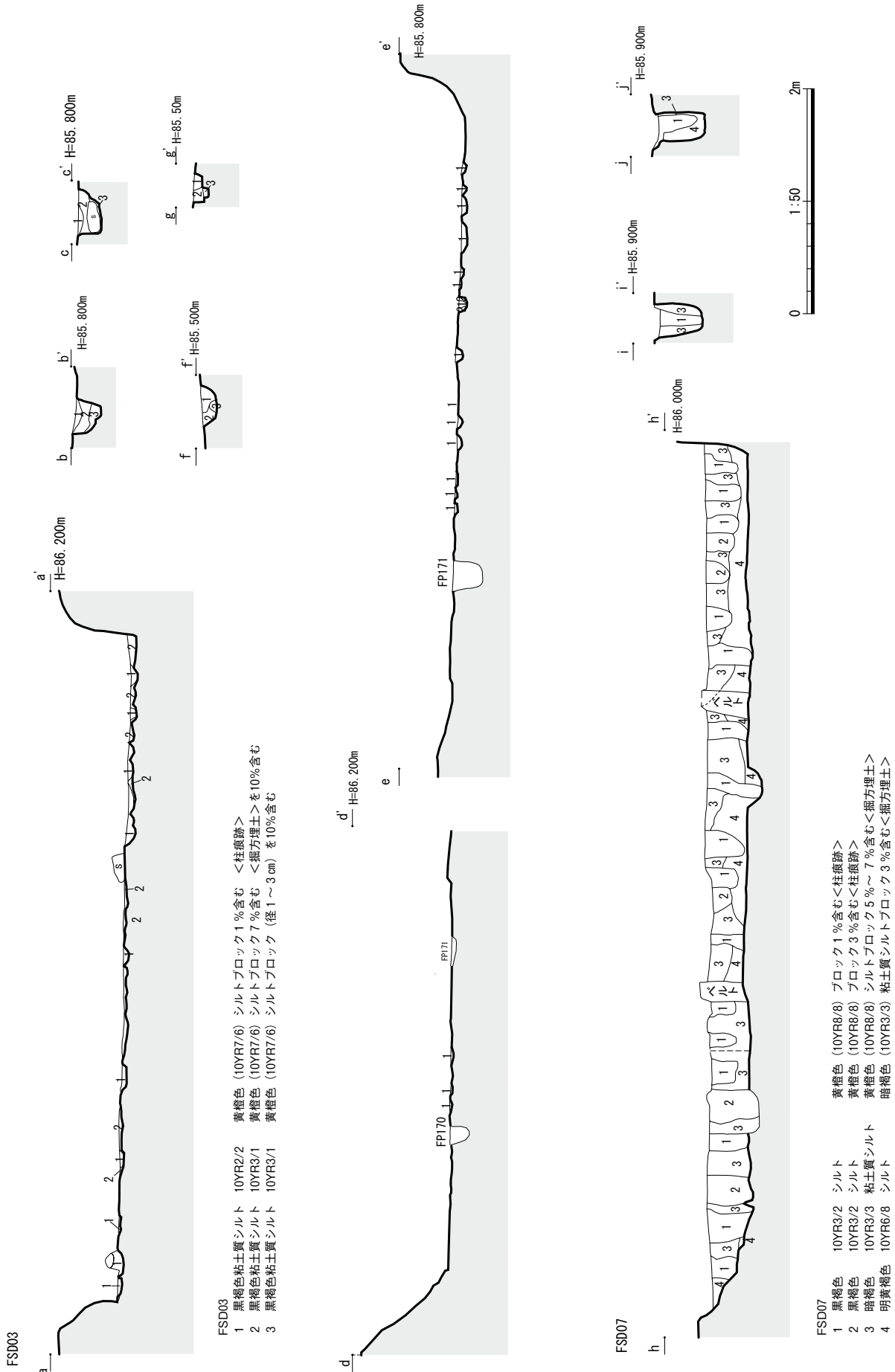
- |              |         |  |
|--------------|---------|--|
| 1 明黄褐色粘土質シルト | 10YR7/6 | 黒褐色土 (10YR3/1) 15%を含む  |
| 2 黒褐色粘土質シルト  | 10YR3/2 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10%を含む                                 |
| 3 黒褐色シルト     | 10YR3/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 5%を含む炭化物粒 (径 1 cm) 1%を含む               |
| 4 黒褐色シルト     | 10YR3/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 15%を含む 地山ブロック (10YR7/6) (径 5 cm) 1%を含む |
| 5 黒褐色シルト     | 10YR3/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10%を含む                                 |
| 6 黒色シルト      | 10YR2/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10%を含む                                 |
| 7 黒褐色シルト     | 10YR3/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10%を含む 地山ブロック (10YR7/6) (径 5 cm) 5%を含む |



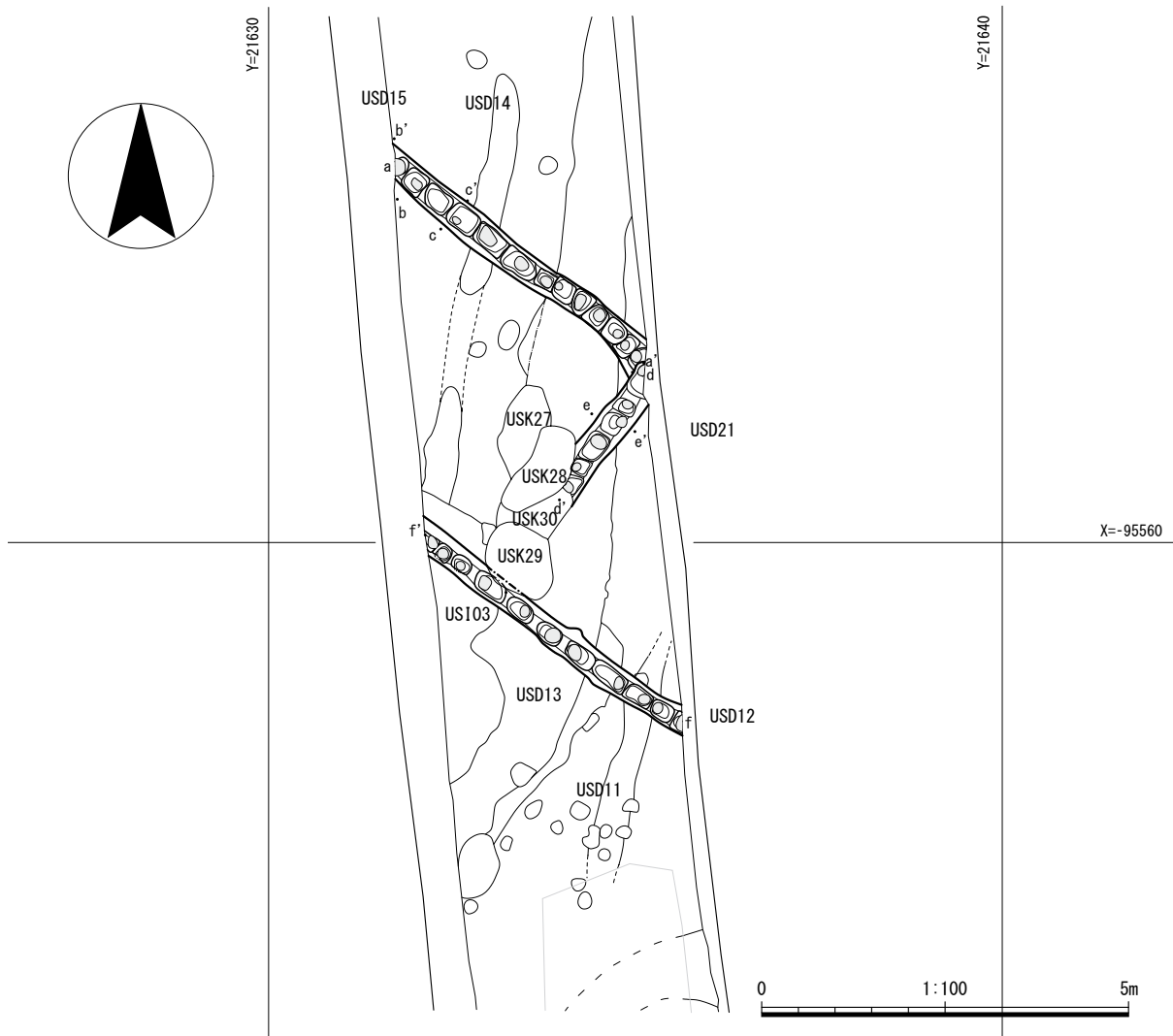
第212図 材木堀跡 A地点 2



第213図 材木堀跡B地点1



第214図 材木堀跡B地点2



第215図 材木堀跡C地点1

### C地点（U区）（第215・216・218図）

この地点の堀跡の検出面は、削平されたIV層である。3者の重複関係をみると、USD15とUSD21は直接重複し、USD21の方が新しい。USD21とUSD12は土坑を介在して間接的に重複するものの、USK30とUSD12との関係が不明のため、USD21とUSD12の新旧関係は不明となる。したがって、USD15とUSD21は同時には存在しないが、USD15とUSD21、あるいはUSD21とUSD12の関係については同時存在の可能性もあり得る。

USD15は、USD14、USD13、USD21と重複し、USD14よりは新しく、USD13・USD21よりも古い遺構である（第215図上では煩雑のためUSD13を隠している）。堀跡の方向は北東-南西方向であり、調査した規模は長さが4.4mである。主軸方位は、N-52°-Wである。掘方の幅は42cm、深さは52cmである。掘方底面は平坦ではなく、凹凸が確認できる。これは、柱掘方に対応すると考えている。堆積土は、7つに区分され、そのうち1層が柱痕跡である。観察できる部分は少ないが、柱痕跡の間隔は20~30cm、柱痕跡の直径は20cm、平面形は円形である。

USD21は、USD15と直行する堀跡である。USD21とUSK28・29・30、USD13と重複し、USD15よりは新しく、USK28・29・30、USD13よりは古い遺構となる。調査した規模は、長さが2.0mであり、



第216図 材木堀跡C地点2



USD12を超えて南には続かないが、北端側は調査区外へ延びている。主軸方位は、N-37°-Eである。掘方の幅は最大で40cm、深さは48cmである。底面はかなり凹凸が確認でき、壺掘りの柱掘方が連続していると考えられる。堆積土は7つに区分される。そのうち1層は柱痕跡と考えられるが、とくに縦断面の2や4層は柱痕跡の可能性があるが、柱痕跡と明確に区別できなかった。したがって、柱痕跡の間隔は、縦断面からは想定できないが、平面図の壺掘りの柱掘方の中心間の距離を計測すると30～40cmである。柱痕跡の直径は18～20cmである。

USD12は、USD15から南3.5mの位置に平行して位置する堀跡である。USI03、USD11・13、USK29と重複する。USD12は、切り合い関係からみると、USI03、USD11より新しく、USD13、USK29よりは古い遺構である。調査した規模は、長さが4.4mであり、両端とも調査区外へ続く。掘方幅は40cmであり、深さは確認面から50cmである。主軸は、USD15と類似し、N-54°-Wである。掘方底面は明瞭に凹凸が確認でき、それぞれ壺掘りの柱掘方と考えられる。堆積土は2つに区分でき、そのうち1層が柱痕跡である。これから判断すると、柱痕跡は30～50cmの間隔で配置され、直径は20～50cmである。USD15からは須恵器系陶器の破片(271)が出土している。

#### D地点 (V区) (第217図)

VSD04は、V区東部に位置する。検出は削平されたIV層である。他遺構と直接の重複はないが、VSB04と空間的に重複する可能性がある。当初堀跡として認識しておらず、通常の溝跡として調査したため、柱痕跡の情報は得られていない。堀跡の方向は、北西-南東方向であり、調査した長さは5.6mである。主軸は、N-45°-Wである。南北両端とも削平により、それ以上延びていない。掘方幅は最大で50cm、深さは24cmである。底面の状況は、柱掘方あるいは、柱あたりが、20～80cmの間隔で位置し、したがって、凹凸がある。これらの柱掘方の直径は20～40cmである。これらの状況を総合して材木堀と考えた。遺物は内黒杯や鉢など土師器細片が51.4gのみが出土している。

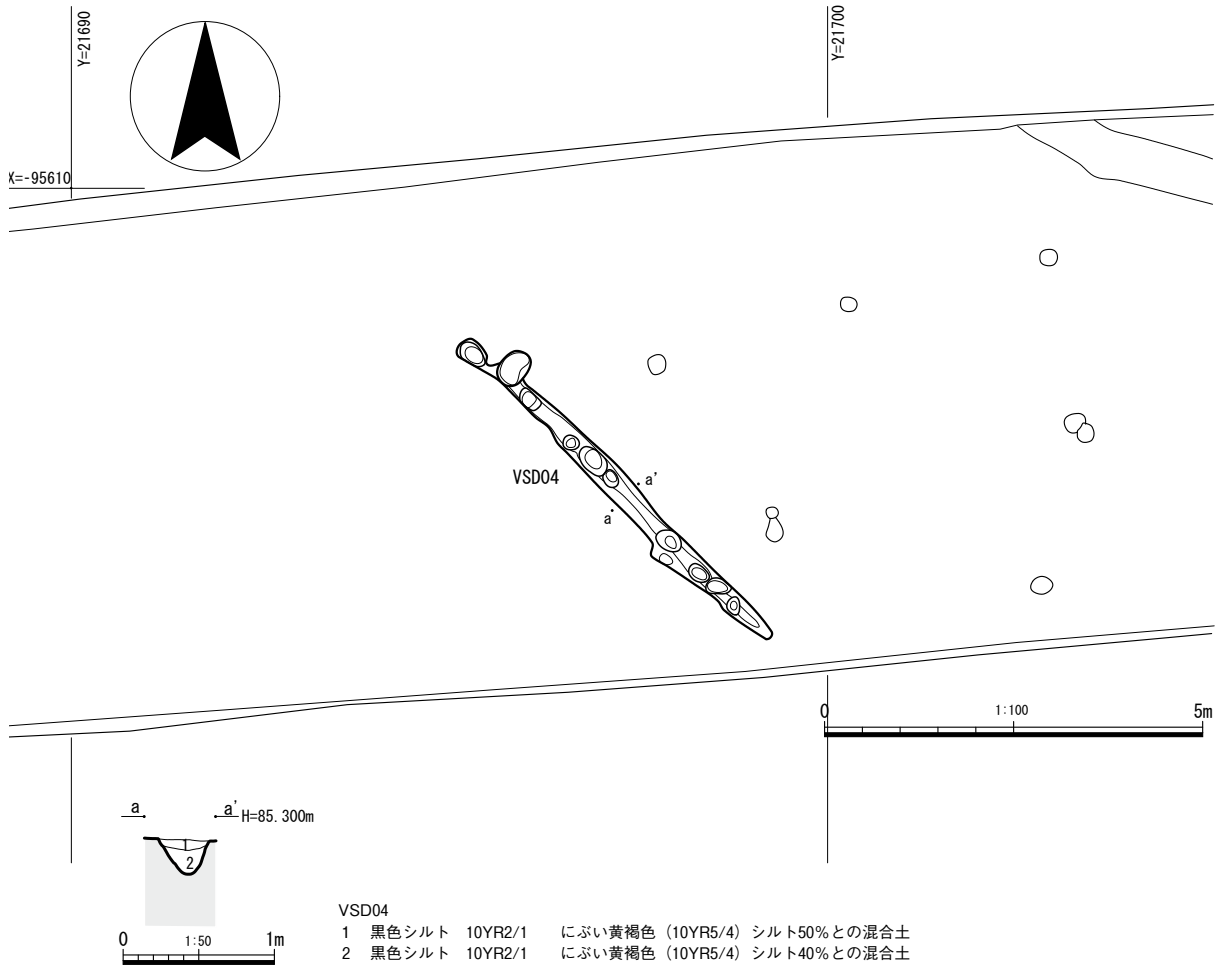
以上、4地点をまとめると、布掘の掘方幅がいずれも40～50cmであり、断面形状も同形態を呈している。柱痕跡から推定すると、平面形は円形であり、直径は20cmのものがほとんどである。掘方底面には柱掘方の痕跡が残る遺構もあり、布掘りのほかにさらに壺掘りの柱掘方を掘削している状況になる。柱位置や高さの調整のための可能性があるが、こういった例がC地点を中心に確認できる。

全体を見れば、A地点とB地点とでは、H区に材木堀の存在が推定できるが、この範囲では確認できなかった。これは、この範囲では、礫層が露出するなどかなりの高さが削平されたためと考えられる。本来存在した可能性は否定できない。B地点とC地点では、2ないし3条の堀跡が確認できる。B地点では、FSD07(10)に付設される門の前面にFSD03が位置することから、両者は併存しない可能性が高い。また、C地点では、USD15がFSD03と、USD12がFSD07(10)と同一遺構と想定するならば、直接の切り合い関係などからUSD21とも併存せず、3条の材木堀は、時期差であると推定される。しかしながら、各地点の材木堀は、地点間の距離が離れていることから、連続する2ないし3条の同一遺構と現時点では明確には判断することはできない。C地点とD地点とでは、比較的距離も近く、連続する可能性が高いと推定でき、さらに、その位置から内側の材木堀であるUSD12と連続する可能性がある。

各地点の材木堀は検出規模が小さいながらも、大溝跡の方向とほぼ平行する。また、これら大溝と平行する材木堀のほか、USD21のように平行しないものもあり、これは内部に区画があった可能性を示唆する。

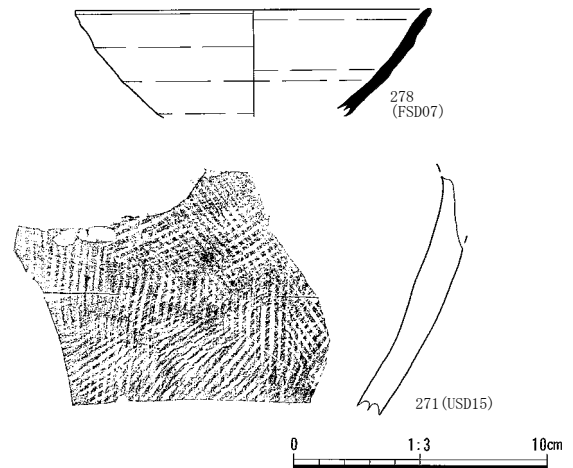
時期は、図化できる遺物は須恵器杯(278)、須恵器杯陶器片(271)のみであり、全体をみてもわ

3 遺構と遺物



第217図 材木堀跡D地点

ずかな出土量である。そのため遺物から明確に時期を決定することは難しいが、下限を12世紀代とし、上限は、奈良あるいは平安時代の可能性は想定できる。大溝との親和性を重視すると漆町IV期に位置づけられようか。



第218図 USD15出土遺物

## (5) 門 跡

材木堀（FSD07とFSD10）が途切れている箇所位置する建物を門跡とし、F区より1棟検出した。

## FSB01（第219図）

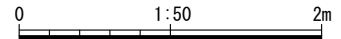
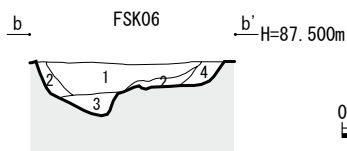
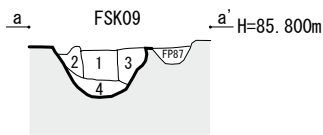
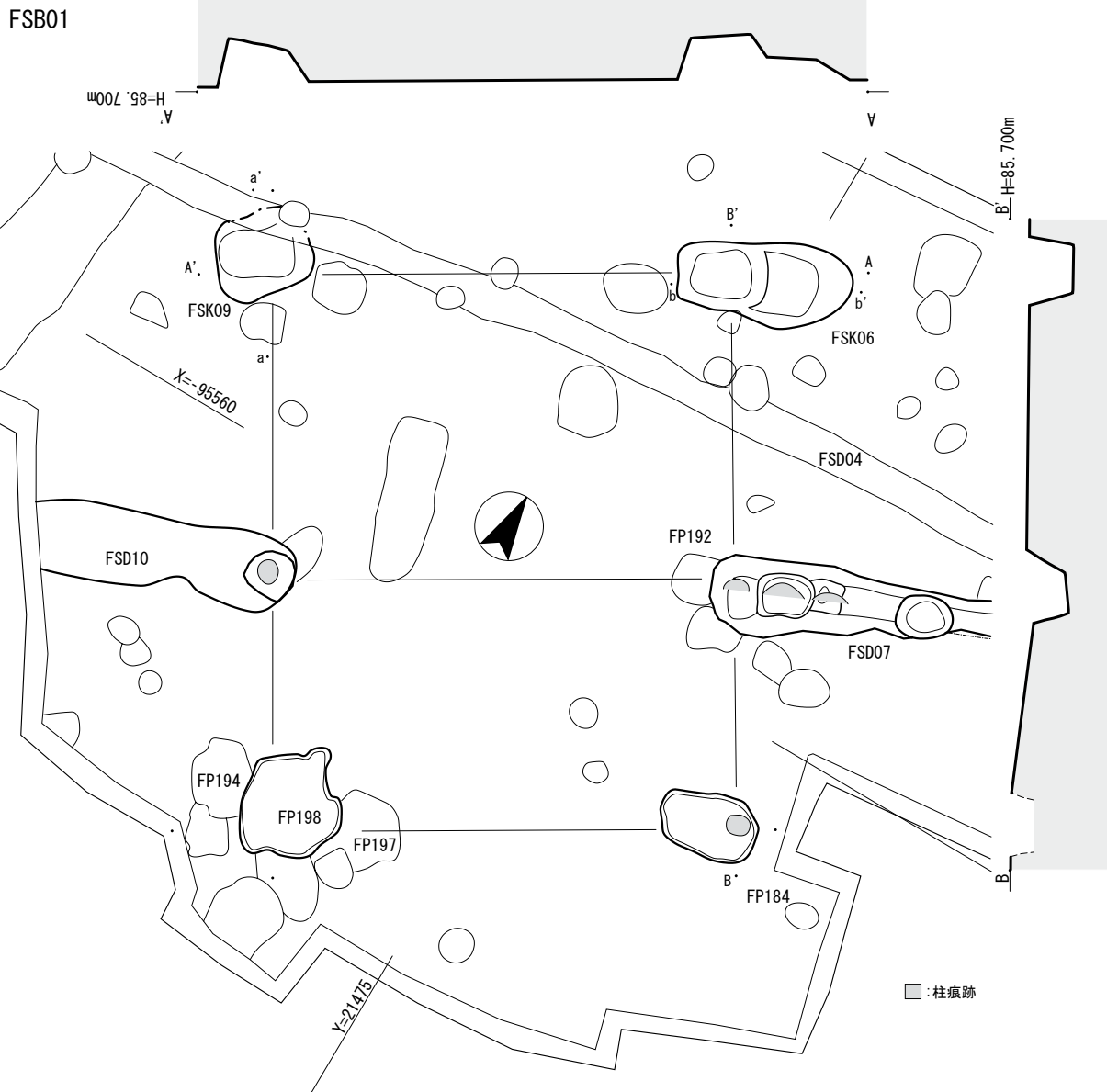
FSB01は、F区東部にあり、表土直下の削平されたIV層面で確認した。当初単独の土坑や柱穴と認識していたが、材木堀（FSD07）が途切れていることを確認し、あわせて調査区外を拡張した結果、門跡と確認した。他遺構との重複は、FSD04、FSB10、FSB03やその他柱穴などで確認できる。新旧関係からみるとFSD04よりは古く、FSB10よりは新しく、FSB03とは不明となる。門を構成する6個の柱穴のうち3個のみを断ち割りまで行い、FP184、FP198、FSD10（の端部）については調査区外からの検出ということもあり、遺構の確認までしか行っていない。

FSB01は、FSK06・FSK09・FP198・FP184を使用した4本柱の門に復元した。そのほかFSD07と重複するFP192を使用する復元や材木堀の端部2箇所を使用する四脚門などいくつか復元が可能であるが、柱痕跡を重視して上記案を採用した。梁行中央に材木堀が取り付けられている。門と接する材木堀の端部は、別の柱穴掘方（本柱の掘方）の可能性はあるが、材木堀掘方との区別はできなかった。FSD10については断ち割りを行っていないため詳細な内容は不明である。また、両脇に取り付けている材木堀は復元した建物平面形とはやや異なり約4°東に振れている。復元した柱間寸法は、梁行が北から4.0mであり、桁行が3.3mである。材木堀は梁行の中心に位置せず、北から2.2m、また南からだ1.8mの箇所に位置する。建物の方向は、西側柱列を基準にするとN-31°-Wである。断ち割りを行った柱穴をみると、FSK06については抜き取りが行われていた可能性があるが、FSK09については柱痕跡が残存しているのが断面図で確認できる。これによると直径は24cmである。柱掘方の平面形はFSK06・FSK09は方形を基調とし、FP198とFP184は方形を基調とするようであるが、重複があり判然としない。柱掘方の規模は、一辺が50cm～70cm、確認面からの深さが35cmである。

遺物はFSK06より非ロクロ甕片など土師器細片が少量（23.6g）出土するのみであり、図化できるものはない。遺物からは時期決定が困難であるが、建物方位や材木堀、大溝との関連から、漆町IV期（平安時代）に位置づけられる可能性がある。

## (6) 柱穴・ピット（小穴）（第220図）

今回の調査では、合計1,350個の柱穴もしくはピットを調査した。このうち、225個を使用し、掘立柱建物跡や門跡を合計43棟復元したが、残りの柱穴については、建物復元には至らなかった。これらは、柱列として確認できるものを含むが、調査区幅が狭いこともあり、明確に建物跡として認定できなかったものである。今後隣接地を調査すれば建物跡などに復元できる可能性がある。これらの詳細な記述は省略し、規模等の情報は第33表にまとめて記載している。なお、遺物については、第220図・第32表を参照されたい。



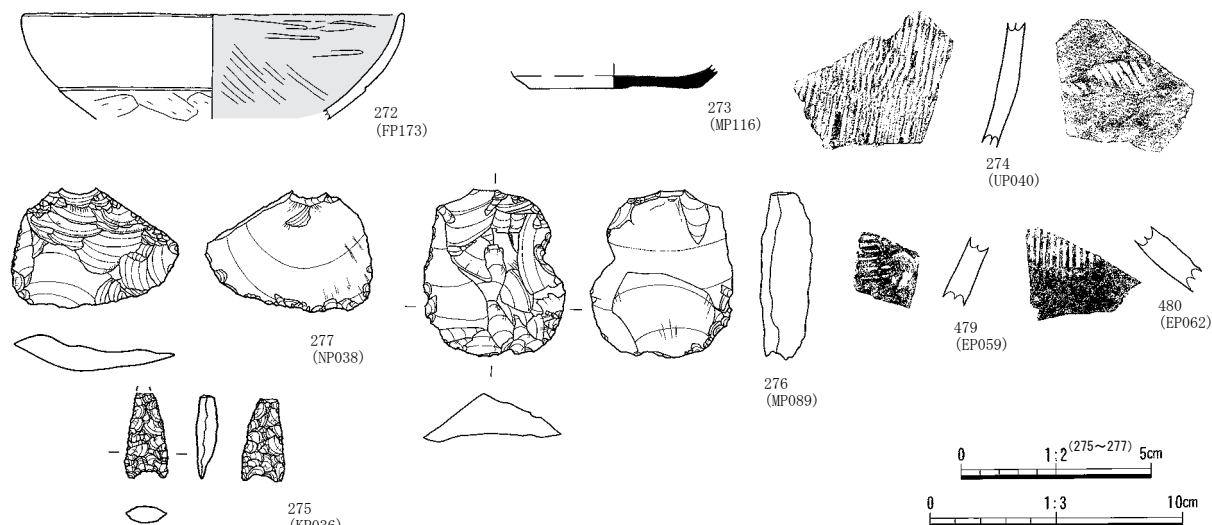
FSK09

- |              |         |                                    |
|--------------|---------|------------------------------------|
| 1 褐灰色粘土質シルト  | 10YR4/1 | 黄橙色 (10YR7/8) ブロック1%、炭化物1%含む (柱痕跡) |
| 2 褐灰色粘土質シルト  | 10YR5/1 | 黄橙色 (10YR7/8) シルト粒5%含む             |
| 3 灰黄褐色粘土質シルト | 10YR6/2 | 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック10%含む         |
| 4 褐灰色粘土質シルト  | 10YR5/1 | 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック10%含む         |

FSK06

- |          |         |  |
|----------|---------|--|
| 1 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 地山土粒 (径1~10mm) 10%、地山ブロック (径2~5cm) 5%を含む |
| 2 暗褐色シルト | 10YR3/4 | 地山ブロック (径2cm~) 40%を含む                    |
| 3 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 地山ブロック (径2cm) 5%を含む                      |
| 4 暗褐色シルト | 10YR3/3 | 地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む                      |

第219図 FSB01門跡



第220図 柱穴出土遺物

## (7) 溝 跡

## ASD01 (第221・224図)

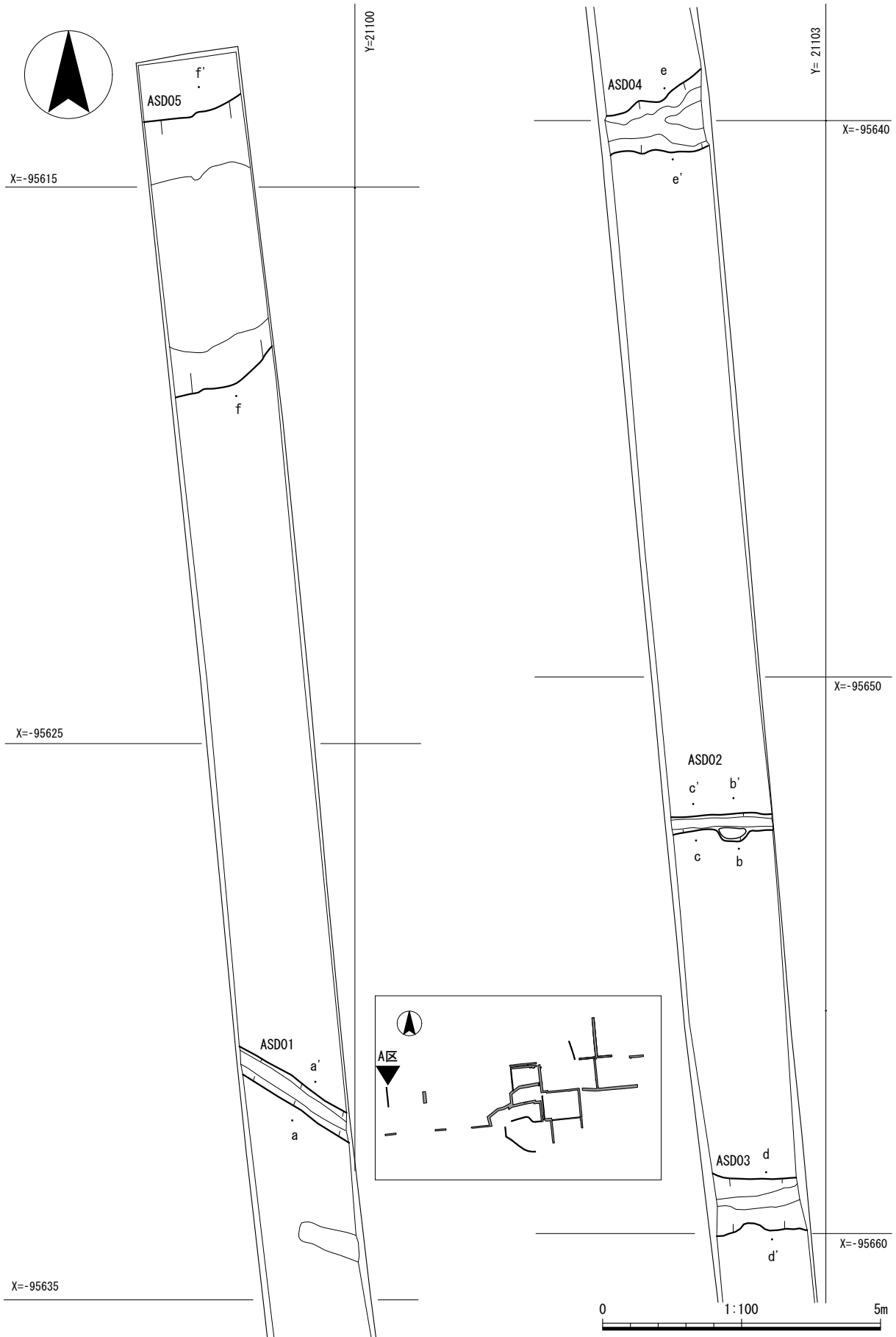
A区中央部に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は北西から南東であり、ほぼ直線的に伸びる。両端とも調査区外へ続く。検出長は2.2m、上幅は50cm、深さは40cmである。断面形は逆台形状を呈している。堆積土は3つに細分され、黒色から黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は、土師器の非ロクロ甕片などが出土している(計138.2g)。時期は、出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられよう。

## ASD02 (第221・224図)

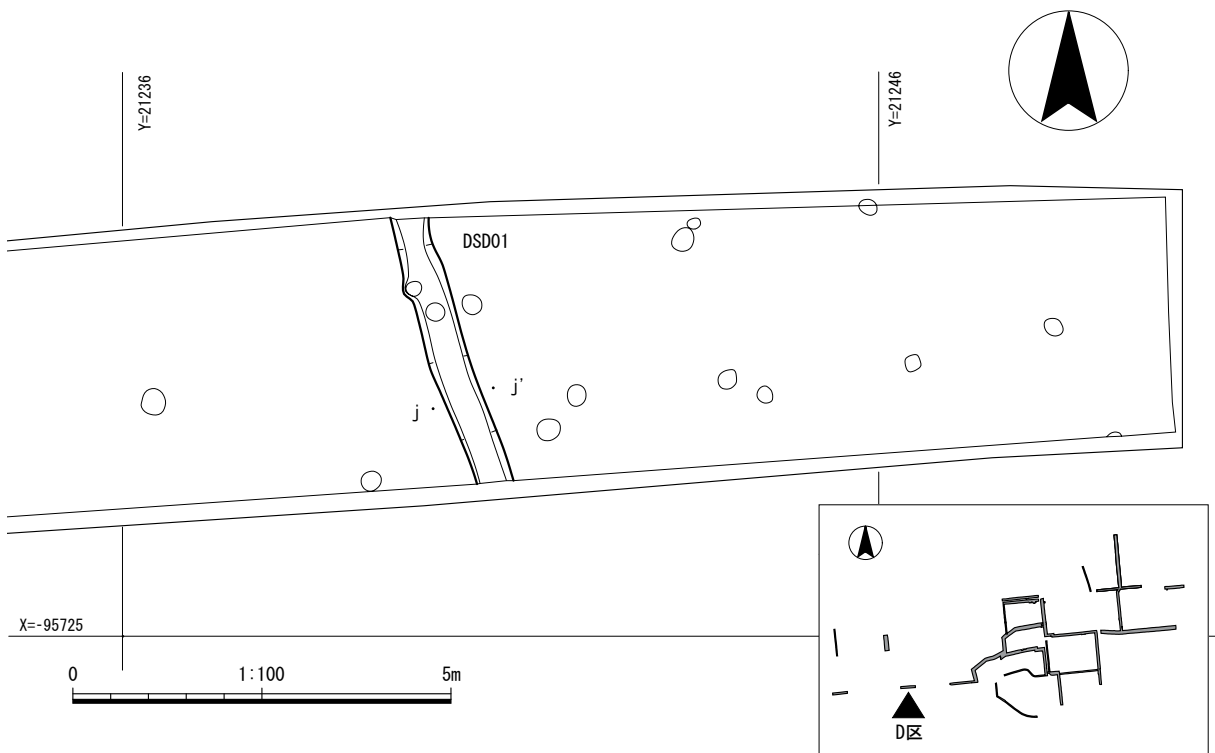
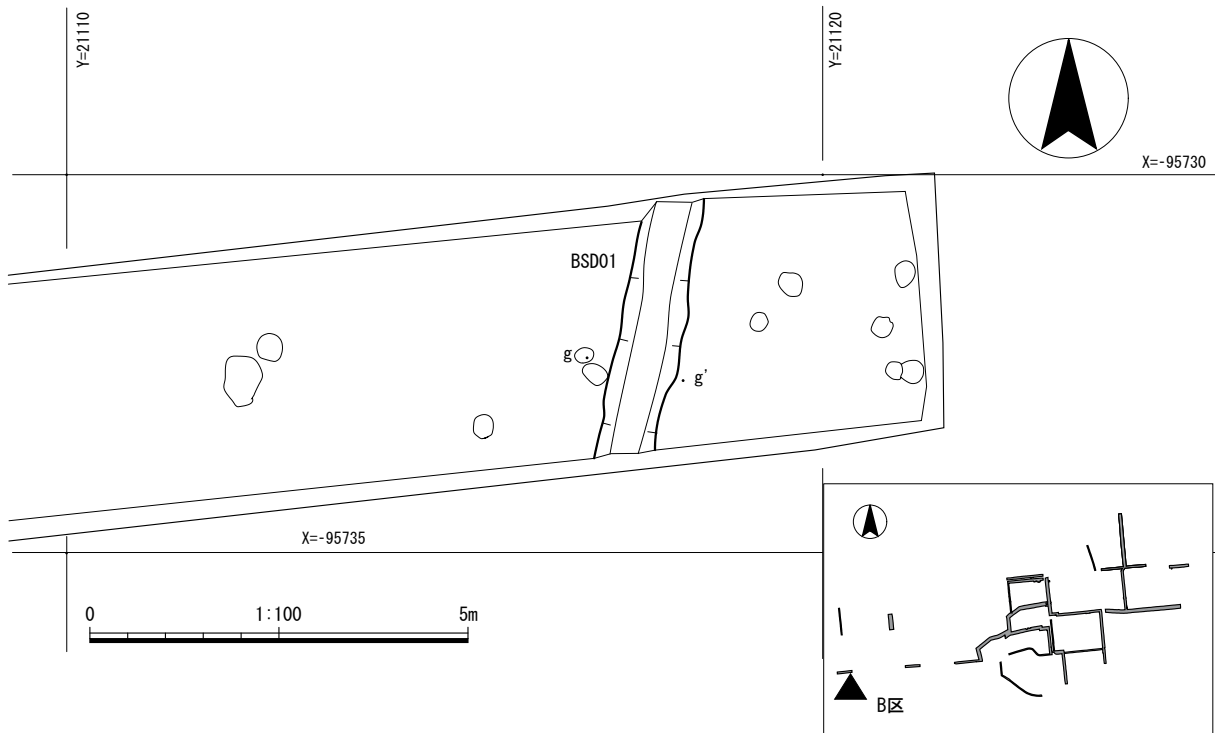
A区の南側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝は東西方向にほぼ直線的に伸びており、両端とも調査区外へ続く。調査区内の中程で、土坑状の膨らみがある。別遺構の可能性はあるがここでは一体として捉えた。検出長は1.8m、上幅は30cm、深さは25cmである。断面形は緩やかな箱形を呈している。堆積土は4つに細分され、黒色や黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明とする。

## ASD03 (第221・224図)

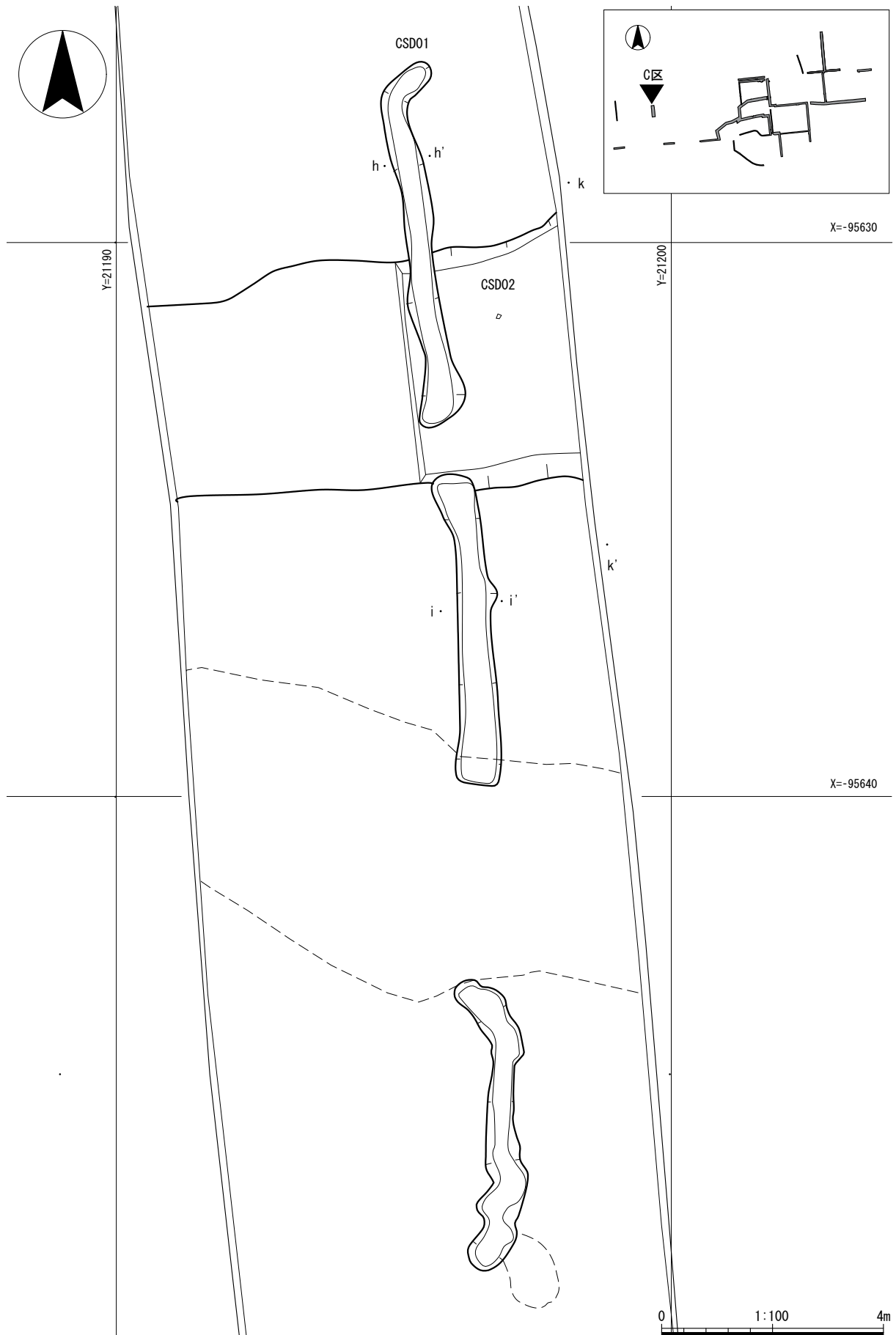
A区の南側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝は、東西方向にほぼ直線的に伸びているが、調査区が狭小のため全容は不明である。両端とも調査区外へ続く。検出長は1.5m、上幅は1.0mであり、深さは12cmと浅い。断面形は浅い皿形を呈している。堆積土は5つに細分され、褐色や黄褐色を呈する砂質シルトが主体である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土するのみである(計19.6g)。時期は、出土遺物からみると、古代の可能性はある。



第221図 溝跡1 A区

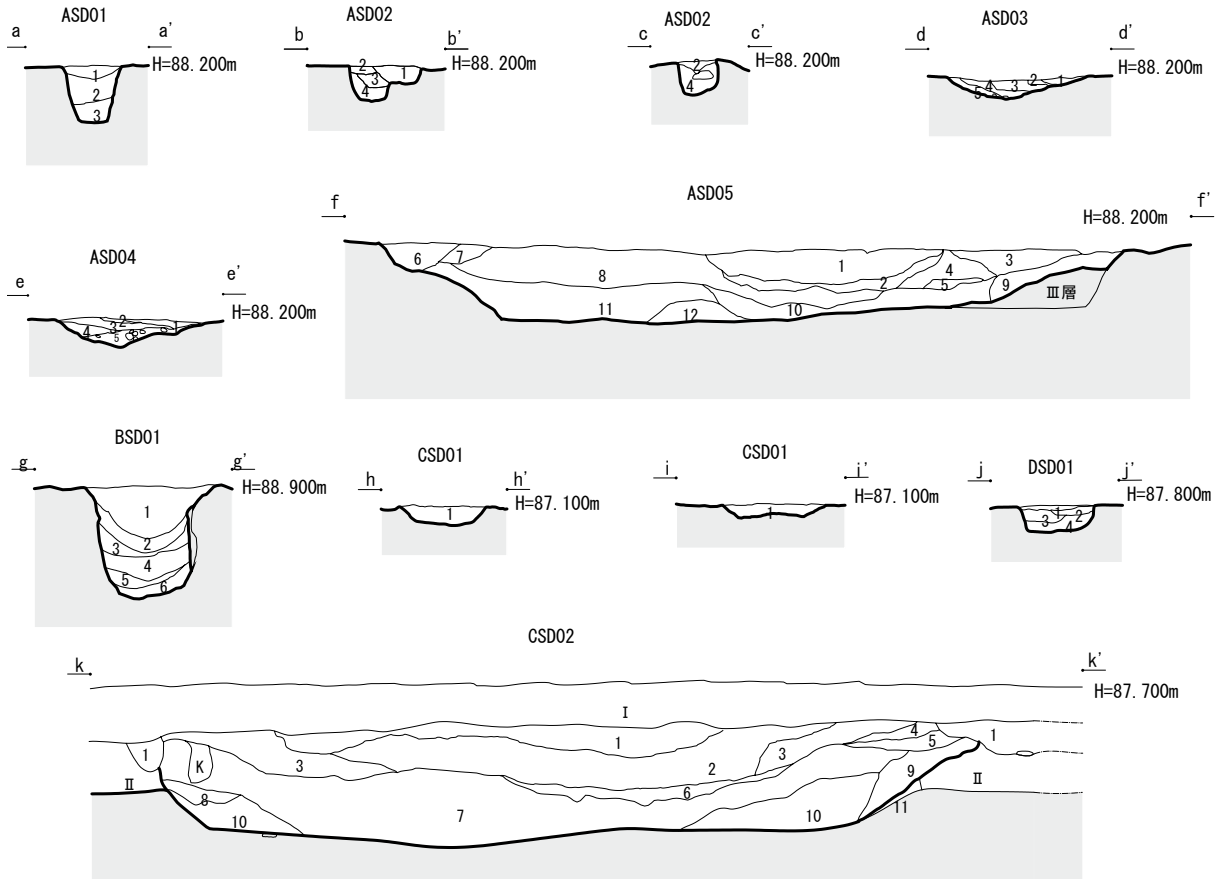


第222図 溝跡 2 B区・D区

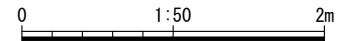


第223図 溝跡 3 C区





ASD01	1	黒色粘土質シルト	10YR2/1	黒褐色粘土粒 (10YR3/2) 20%を含む
	2	黒色粘土質シルト	10YR1.7/1	酸化物粒 5%を含む
	3	黒褐色粘土質シルト	10YR2/2	
ASD02	1	黒色粘土質シルト	10YR2/1	にぶい黄褐色粘土粒15%を含む
	2	黒褐色粘土質シルト	10YR2/2	
	3	褐色粘土質シルト	10YR4/6	にぶい黄褐色粘土粒50%を含む
	4	黒色粘土質シルト	10YP2/1	にぶい黄褐色粘土粒 5%を含む
ASD03	1	褐色砂質シルト	10YR4/6	黒褐色シルト質 (10YR3/1) 3%を含む、酸化鉄粒を含む
	2	黄褐色砂質シルト	10YR5/8	酸化鉄粒 3%を含む
	3	にぶい黄褐色シルト	10YR4/3	酸化鉄粒10%を含む
	4	褐色砂質シルト	10YR4/6	酸化鉄粒10%を含む
	5	黒褐色シルト	10YR3/1	酸化鉄粒10%を含む、褐色砂粒 (10TR4/6) を 5%を含む
ASD04	1	褐色砂質シルト	10YR4/4	
	2	黄褐色砂質シルト	10YR5/8	荒い砂粒を50%を含む
	3	褐色砂質シルト	10YR4/6	
	4	にぶい黄褐色砂質シルト	10YR4/3	
	5	黄褐色砂質シルト	10YR5/8	黒褐色粘土 (10TR3/1)、5%、(径3~4cm)の小礫を含む
ASD05	1	黒色粘土質シルト	10YR2/1	黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) 10~15%を含む
	2	灰色砂礫	N/5	砂礫層。礫粒 (8~10mm程度) を含む。水酸化鉄多い。
	3	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1	黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) 5~7%を含む
	4	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1	褐色砂 (10YR5/1) 40%の混合土層
	5	明黄褐色シルト	10YR6/6	黒褐色土 (10YR2/2) 10%の混合土層。炭化物粒微量を含む。
	6	黒色粘土質シルト	10YR2/1	にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 1~2%を含む
	7	黒色粘土質シルト	10YR2/1	にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 1~2%を含む (6層とほぼ同じ)
	8	褐灰色砂	10YR5/1	黒褐色土 (10YR3/1) 綿状に10%堆積
	9	褐灰色シルト	10YR4/1	灰黄褐色土 (10YR5/2) 40%の混合土層
	10	黒褐色シルト	10YR3/1	褐色砂 (10YR5/1) 10%を含む
	11	黒色粘土	10YR2/1	
	12	黄灰色砂	2.5Y4/1	
BSD01	1	黒色シルト	10YR2/1	明黄褐色土粒 (10YR6/6) (径1~2mm) 3%を含む。
	2	黒色シルト	10YR2/1	明黄褐色土 (10YR6/6) 50%の混合土層。
	3	明黄褐色シルト	10YR6/6	黒色土 (10YR2/1) 40%の混合土層。
	4	黒色シルト	10YR2/1	明黄褐色土 (10YR6/6) 20%混合土層。筋状で互層になっている。
	5	明黄褐色シルト	10YR6/6	黒褐色土 (10YR2/2) 10%の混合土層。炭化物粒微量を含む
	6	黒褐色シルト	10YR2/2	明黄褐色土 (10YR6/6) 5~7%を含む
CSD01	1	黒色シルト	10YR1.7/1	にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 1~2%を含む
CSD02	1	にぶい黄褐色シルト	10YR4/3	
	2	灰黄褐色砂	10YR4/2	酸化鉄粒 5%、褐色砂粒 (10YR5/1) ブロック15%を含む
	3	黒褐色粘土	10YR2/2	
	4	灰黄褐色シルト	10YR4/2	
	5	暗褐色粘土	10YR3/3	
	6	黒褐色シルト	10YR3/2	
	7	灰黄褐色シルト	10YR5/2	酸化鉄粒20%、褐色砂粒 (10YR4/4) 30%を含む
	8	黒褐色粘土	10YR2/3	灰黄褐色シルト (10YR5/2) 20%含む
	9	暗褐色シルト	10YR3/3	酸化鉄粒 5%、黒色粘土小ブロック (10YR2/1) 1%を含む
	10	褐色砂	10YR4/4	酸化鉄粒 5%、暗褐色粘土粒 (10YR2/3) 1%を含む
	11	灰黄色砂	10YR4/2	
DSD01	1	黒色粘土	10YR2/1	
	2	暗褐色粘土	10YR3/4	
	3	黒色粘土	10YR2/1	にぶい黄褐色粘土粒 (10YR4/3) (径2mm程度) 10%を含む
	4	暗褐色粘土	10YR3/3	酸化鉄粒 5%、にぶい黄褐色粘土粒 (10YR4/3) (径1~2mm程度) 10%を含む。



第224図 溝跡4 A~D区断面

**ASD04 (第221・224図)**

A区中央部に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。両端とも調査区外へ続く。調査区が狭小のため、全容は不明である。検出長は1.7m、上幅は最大で1.2m、深さは20cmである。断面形は浅い皿状を呈している。堆積土は5つに細分でき、褐色から黄褐色を呈する砂質シルトが主体である。遺物は、土師器の非ロクロ甕片、杯片などが出土している(計121.2g)。時期は、出土遺物からみると、古代の可能性はある。

**ASD05 (第221・224図)**

A区最北端に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。両端とも調査区外へ続く。調査区が狭小のため全容は不明である。検出長は1.8m、上幅は4.9m、深さは50cmである。断面形は逆台形状を呈している。堆積土は12層に細分される。黒色や灰色を呈する砂や砂礫層が多く、水性堆積の様相を示している。遺物は、土師器の非ロクロ甕片などが少量出土している(計35.6g)。時期は、出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられよう。

**BSD01 (第222・224図)**

B区東側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は東にやや偏っているが、南北方向であり、ほぼ直線的に延びる。南北両端とも調査区外へ続く。検出長は3.4m、上幅は90cm、深さは70cmである。断面形はゆるやかな箱形状を呈している。堆積土は6つに細分され、黒色から黒褐色を呈するシルトが主体である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

**CSD01 (第223・224図)**

C区に位置する溝跡である。調査区内ではCSD02と重複しており、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、ほぼ南北方向であり、2箇所途切れる部分がある。南北端とも調査区外へは続かない可能性がある。検出長は(連続した状態で)22m、上幅は40~70cm、深さは40cmである。断面形は逆台形状を呈している。堆積土は1層のみ確認し、黒色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる材料がないため不明である。

**CSD02 (第223・224・264図)**

C区北側に位置する溝跡である。調査区内ではCSD01とであり、本遺構の方が古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。両端とも調査区外へ続く。検出長は7.4m、上幅は4.5m、深さは0.7mである。断面形は逆台形状を呈している。堆積土は11層に細分され、黒色や灰黄褐色、暗褐色を呈する粘土や砂が多い。遺物は、須恵器系陶器片(303)のみ出土している(計104.5g)。時期は、出土遺物は少なく判断できる証拠がないため不明であるが、平安時代末頃(12世紀)の可能性もある。

**DSD01 (第222・224図)**

D区東側に位置する溝跡である。調査区内ではDP009・010と重複し、これよりも古い遺構である。

検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向はやや西に傾いた南北方向で、直線的に延びる。南北両端とも調査区外へ続く。検出長は3.6m、上幅は0.6m、深さは0.2mである。断面形は箱形状を呈している。堆積土は4つに細分され、黒色や暗褐色を呈する粘土層が主体である。遺物は出土していない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### FSD02 (第225図)

F 区の中央やや西寄りに位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向は南北方向で、直線的に延びる。南端は調査区外へ続くが、北側は削平されており確認できない。検出長は3.5m、上幅は1.0m、深さは0.2mである。断面形は逆台形状を呈している。堆積土は3つに細分でき、褐灰色や灰黄褐色を呈するシルトや砂質シルトである。遺物は出土していない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### FSD04 (第225・226図)

F 区の西側に位置する溝跡である。調査区内ではFSD05溝跡やFSD07材木堀跡、その他掘立柱建物と重複するが、いずれよりも新しい遺構である。検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向は、基本的に東西方向であるが、西側でやや北西方向に屈曲する。北や東側は、調査区外へ続いている。検出長は21.5m、上幅は0.4mである。深さは5～10cmである。断面形は、浅い逆台形状を呈している。堆積土は1層のみ残存し、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器の非ロクロ杯やロクロ杯片などが少量出土している（計213g）。出土遺物が混在しているため時期を決定できず、時期不明としておく。

#### FSD05 (第225・226図)

F 区の西側に位置する溝跡である。調査区内ではFSD04溝跡やFSB04建物跡と重複しており、いずれよりも古い。検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向は南北方向で、ほぼ直線的に延びる。南端は調査区外へ続くが、北側はFSD08と合流する。新旧関係があるか明確にできなかった。検出長は9.7m、上幅は最大で1.4m、深さは0.1mである。断面形は浅い皿状を呈している。堆積土は1層のみ確認でき、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、FSD08と同時期なら近現代の可能性はある。

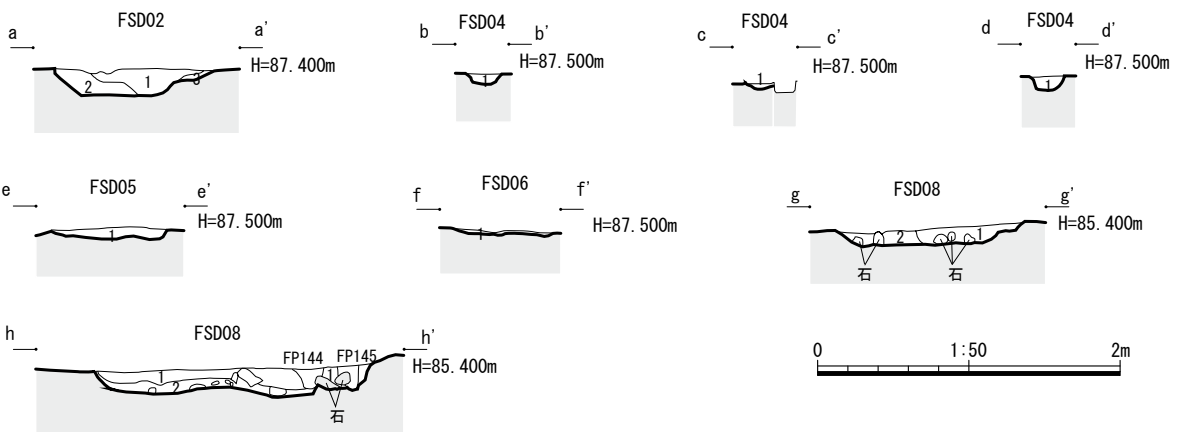
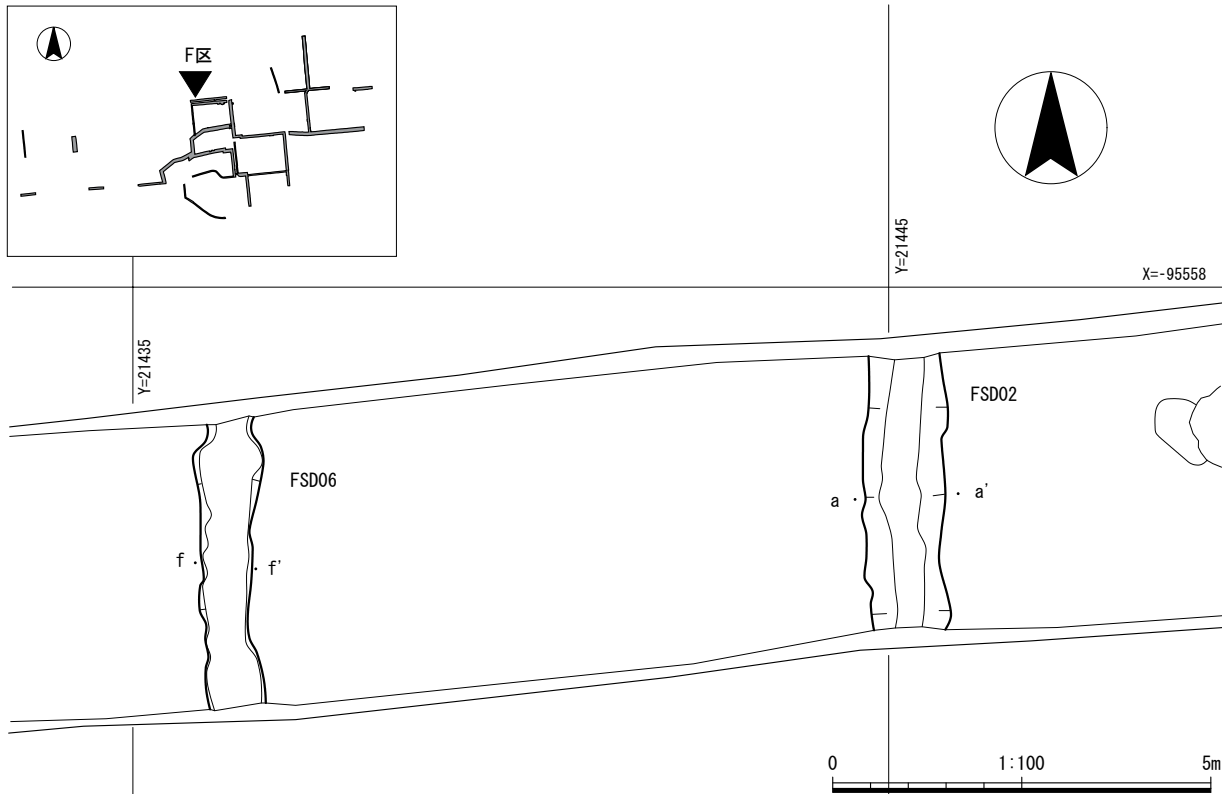
#### FSD06 (第225図)

F 区の西側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向は、南北方向で直線的に延びる。南端は調査区外へ続くが、北側は削平されており確認できない。検出長は3.7m、上幅は1.0mである。深さは0.2m程度である。断面形は浅い皿状を呈している。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである（計9.4g）。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

#### FSD08 (第225・226・263・269図)

F 区の西側に位置する溝跡である。調査区内ではピット以外との重複はない。検出は現耕作土である I 層除去後の IV 層面で行った。溝の方向は東西方向であるが、西側では北に大きく屈曲する。北端と東端はそれぞれ調査区外へ続いている。検出長は10.5m、上幅は1.8m、深さは0.2mである。断面

3 遺構と遺物



FSD02

- |             |         |                       |
|-------------|---------|-----------------------|
| 1 褐灰色シルト    | 10YR4/1 | 酸化鉄 5% を含む            |
| 2 灰黄褐色砂質シルト | 10YR4/2 | 酸化鉄 3% を含む            |
| 3 灰黄褐色砂質シルト | 10YR4/2 | 地山ブロック (径50mm) 5% を含む |

FSD04

- |          |         |  |
|----------|---------|--|
| 1 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 地山土粒 (径1~10mm) 5%、地山ブロック (径2cm) 5% を含む |
|----------|---------|--|

FSD05

- |          |         |                   |
|----------|---------|-------------------|
| 1 黒褐色シルト | 10YR3/2 | 黒色土10%、酸化鉄 3% を含む |
|----------|---------|-------------------|

FSD06

- |          |         |                          |
|----------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 地山ブロック (径1~10cm) 15% を含む |
|----------|---------|--------------------------|

FSD08

- |             |          |  |
|-------------|----------|--|
| 1 黒褐色粘土質シルト | 7.5YR3/1 | 炭化物粒 (1~5mm) 2%、地山土 (径1~30mm) 3% (グライ化した地山土) を含む |
| 2 黒褐色シルト    | 7.5YR3/1 | 地山土 (径1~10mm) 5%、地山土筋状 2%、礫 (径1~300mm) 2% を含む    |

第225図 溝跡 5 F区 1



第226図 溝跡6 F区2

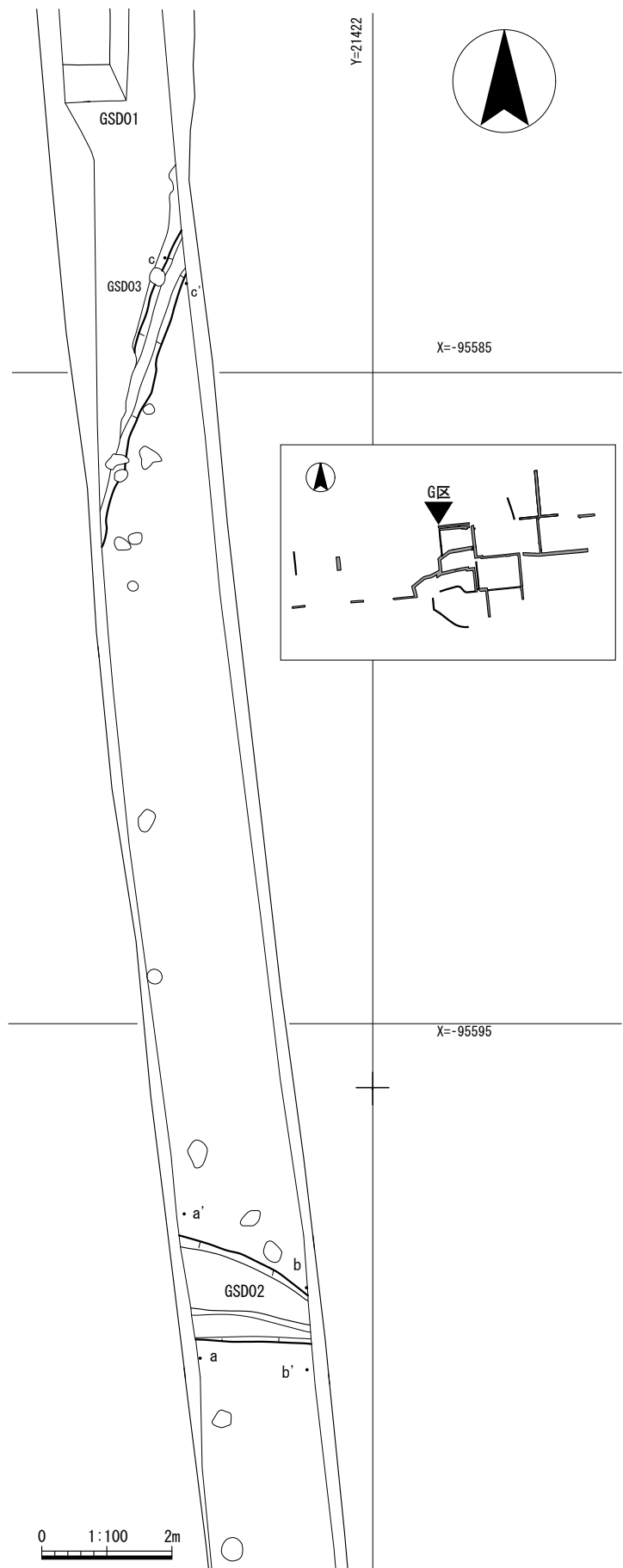
形は逆台形状を呈している。堆積土は3つに細分でき、褐灰色や灰黄褐色を呈するシルトや砂質シルトである。遺物は、土師器や須恵器の細片、常滑大甕片(307)、近代の陶磁器、砥石(389・390)が出土している(計899.5g)。時期は、もっとも新しい出土遺物からみると、近代に位置づけられる可能性が高い。

**GSD02 (第227・233図)**

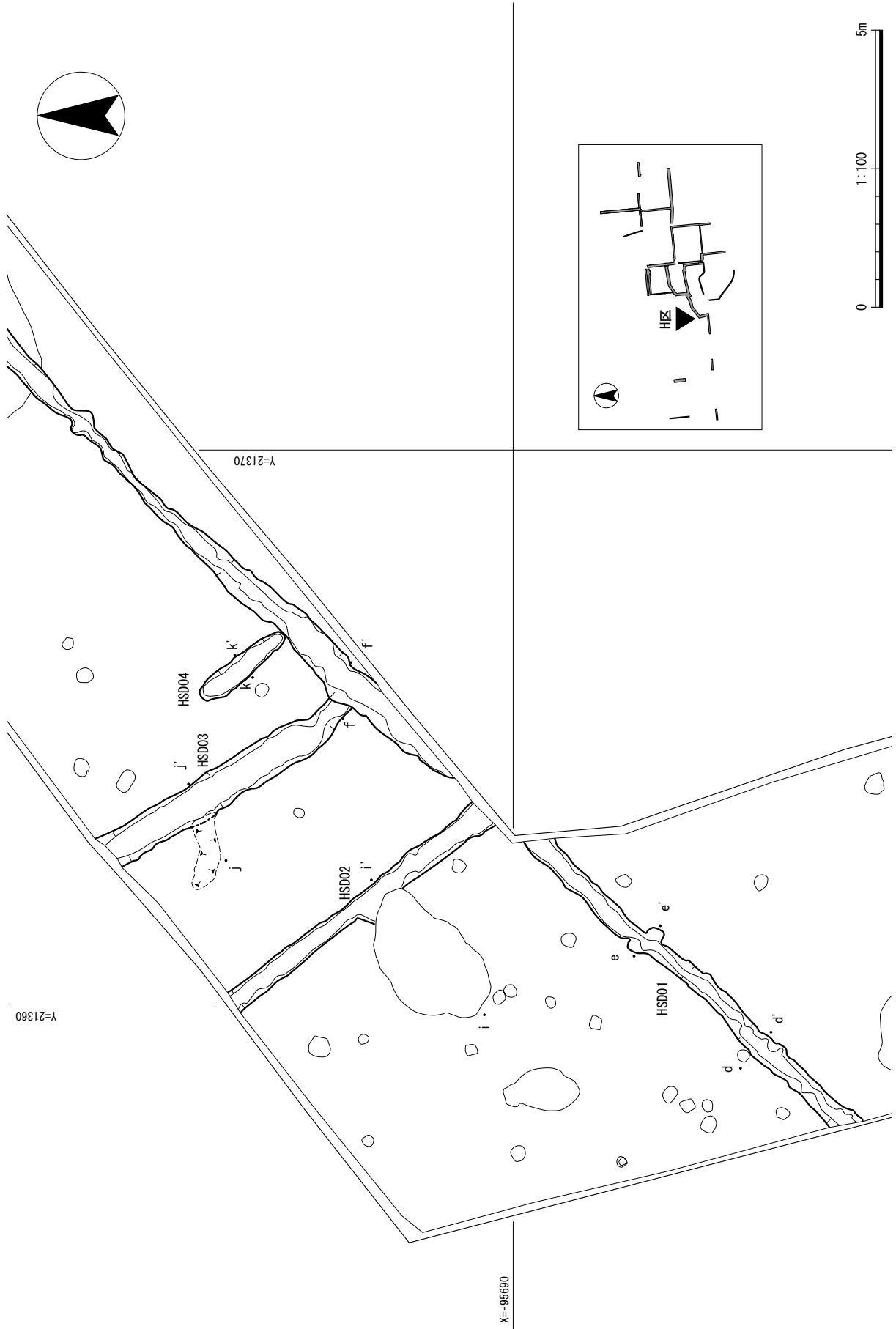
G区の南側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、やや湾曲しながらに延びる。東西両端とも調査区外へ続く。検出長は1.8m、上幅は1.5mである。深さは10cm程度である。断面形は浅い逆台形状を呈している。堆積土は5つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計19g)。時期は、判断できる証拠が少ないため不明とする。

**GSD03 (第227・233図)**

G区の北側に位置する溝跡である。GSD01大溝跡と重複しており、それよりも古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南東方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続く。検出長は4.8m、上幅は40cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い皿形状を呈している。堆積土は1つのみ確認でき、黒色を呈する粘土質シルト層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から古代のなかに位置づけられよう。



第227図 溝跡7 G区1



第228図 溝跡8 H区1

#### HSD01 (第228・229・233図)

H区の西側から中央に位置する溝跡である。HSD03溝跡、HSI03竪穴建物跡と重複し、いずれよりも新しい溝跡である。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続く。検出長は39m、上幅は70cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い皿状を呈するものが多い。堆積土は2つに細分でき、黒色や黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器非ロクロ甕片、球胴甕片、須恵器杯片や近代磁器やガラスなどが出土している(計995g)。時期は、出土遺物から、近代に位置づけられる可能性が高い。

#### HSD02 (第228・233図)

H区の西側に位置する溝跡である。HSK02土坑と重複し、それよりも古い遺構である。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、ほぼ直線的に延びる。また、HSK02との重複箇所で分岐している可能性がある。南北両端とも調査区外へ続いているため全容は不明である。検出長は5.6m、上幅は0.5mである。深さは5cm程度である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は1つのみ確認し、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器非ロクロ杯片などがわずかに出土している(計8.8g)。時期は、出土遺物や重複から古代の可能性はある。

#### HSD03 (第228・233図)

H区の西側に位置する溝跡である。HSD01溝跡と重複し、それよりも古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、ほぼ直線的に延びる。南北両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は5.0m、上幅は70cmである。深さは13cm程度である。断面形は浅い箱形状を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や褐色を呈する粘土質シルト～シルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみであり(13g)、時期も不明である。

#### HSD04 (第228・233図)

H区の西側に位置する溝跡である。調査区内では他遺構との重複はないが、南側でHSD01溝跡と近接する。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、ほぼ直線的に延びるが短い。長さは1.8m、幅は50cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は1層のみで、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

#### HSD06 (第229・233図)

H区の中央に位置する溝跡である。HSK07と重複し、それよりも古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、ほぼ直線的に延びるが、調査区内で収束している。全長は4.7m、上幅は80cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(13.5g)。時期は、重複や出土遺物から古代の中に位置づけられる。

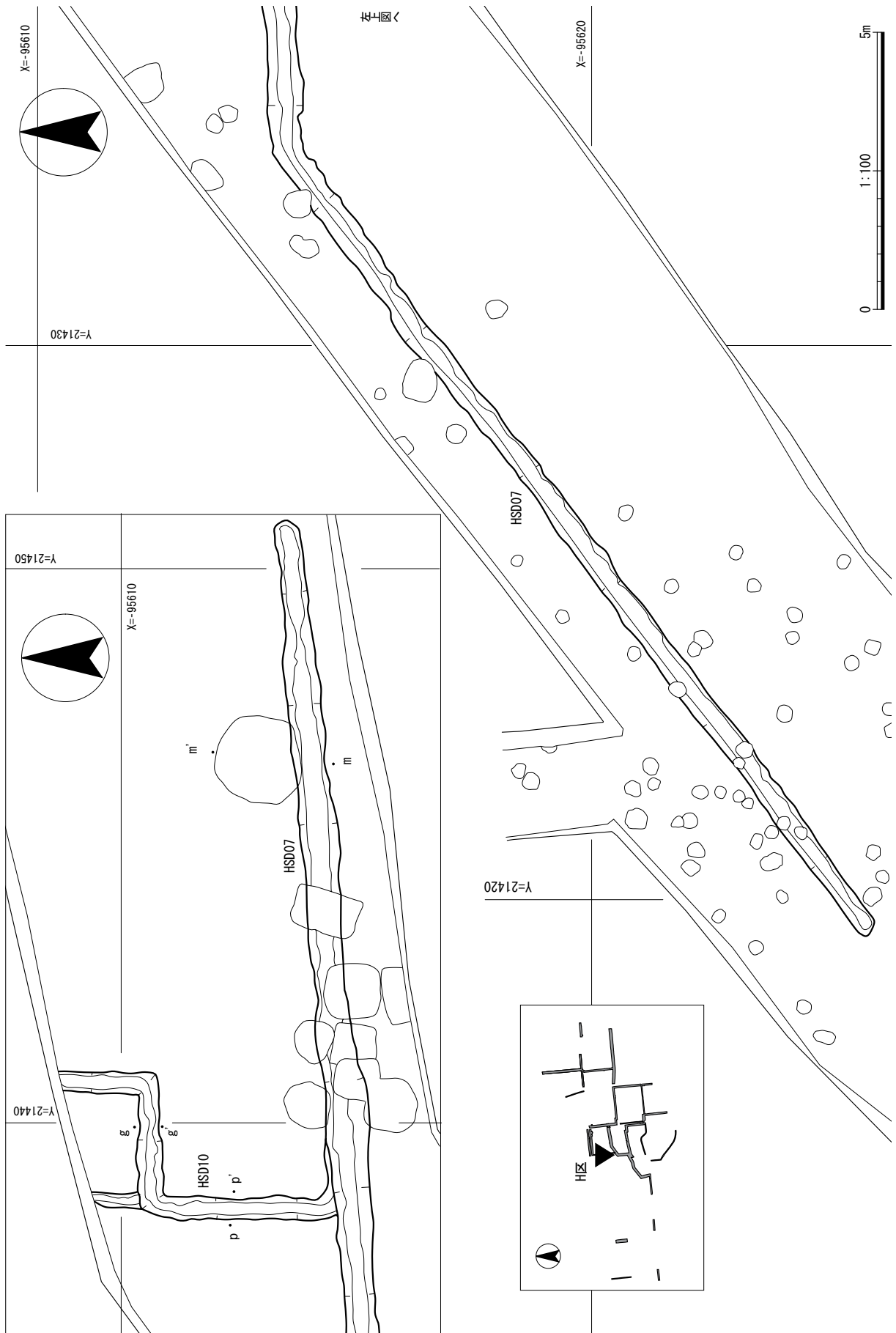
#### HSD07 (第230・233図)

H区の東側に位置する溝跡である。ピット群を除き、HSD10溝跡、HSK25ほかの近世墓群と重複し、いずれよりも新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、西側は北東





第229図 溝跡9 H区2



第230図 溝跡10 H区3



第231図 溝跡11 H区4



第232図 溝跡12 H区5

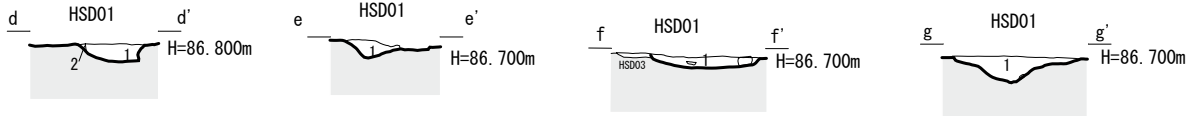


GSD02

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 地山土 (径1~3mm) 2%を含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2 地山土 (径1~60mm) 50%を含む
- 3 黒褐色シルト 10YR2/2 地山土 (径1~10mm) 5%を含む
- 4 黒褐色シルト 10YR2/3 地山土 (径1~10mm) 10%を含む
- 5 黒褐色シルト 10YR2/3 地山土 (径1~30mm) 20%を含む

GSD03

- 1 黒色粘土質シルト 10YR1.7/1 地山土 (径1~5mm) 2%、暗褐色シルト (10YR3/4) 10%を含む



HSD01

- 1 黒色シルト 10YR2/1 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~5mm) 5%を含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~3mm) 3%を含む

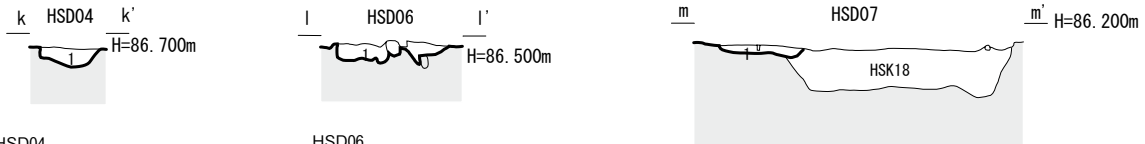


HSD02

- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~3mm) 3%を含む

HSD03

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色 (10YR4/6) シルト粒 2%を含む
- 2 褐色粘土質シルト 10YR4/6 黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトブロック (径40×40mm) 10%を含む



HSD04

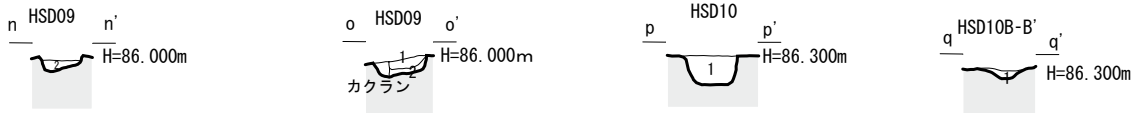
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3

HSD06

- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 黄褐色粘土質シルトブロック (10YR5/6) 20%を含む

HSD07

- 1 褐灰色砂質シルト 10YR4/1 円礫 (径10~20mm) 10%を含む

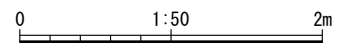


HSD09

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~3mm) 3%を含む
- 2 黒色シルト 10YR2/1 にぶい黄褐色粘土質シルトブロック (10YR5/4) 7%を含む、同シルト粒 (径1~3mm) 5%を含む

HSD10

- 1 黒褐色砂質シルト 10YR3/1 円礫 (径50mm) 5%を含む、黄褐色シルトブロック (10YR8/8) 1%を含む



第233図 溝跡13 G区2・H区6

から南西方向であるが、途中で東に向きを変えて延びていく。東西端とも調査区内で収束する。検出長は35m、上幅は70cmである。深さは5～8cm程度である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層であり、褐灰色を呈する砂質シルトである。遺物は近代の陶磁器が出土している（計305.5g）。時期は出土遺物からみると、近代に位置づけられる。

#### HSD08 (KSD01) (第231～234・262図)

H区の西側からK区に位置する溝跡である。2箇年に渡り別々の調査区で調査を行った遺構であるが、同一遺構と判断した。HSI07・08・HSK17・HSI09・10竪穴建物跡、HSK22～24土坑と重複する。新旧関係をみると、HSI09よりも古く、それ以外とは本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。西端は調査区内から始まるが、東端はK区の東側の調査区外へ続いていく。検出長は40.5m、上幅は1.6～2.2mである。深さは45cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は1～19層に細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は土師器非ロクロ甕片・非ロクロ杯片、須恵器杯片、ミニチュア土器片(299)などが多く出土している(2.88kg)。時期は、出土遺物や重複から、漆町Ⅳ期を含むそれ以前に位置づけられる。

#### HSD09 (第231・233図)

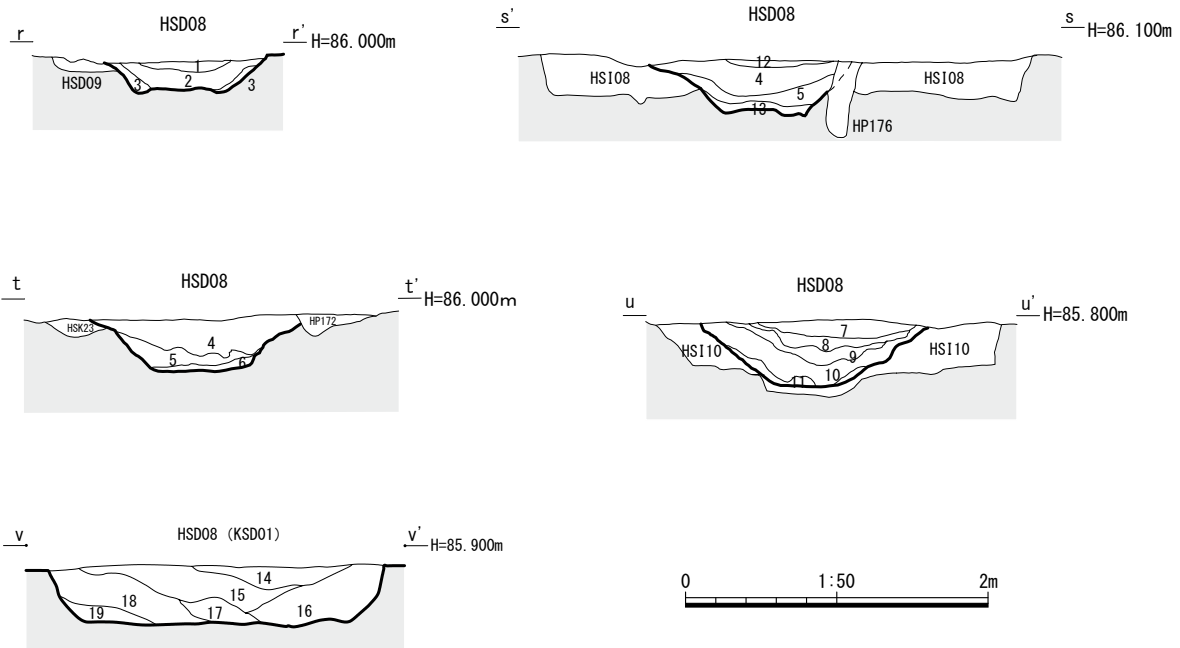
H区の西側に位置する溝跡である。HSD08溝跡やHSI08竪穴建物跡と重複し、それらよりも古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面や、各遺構の底面で行った。溝の方向は、西側が北西から南東方向であるが、中央ではほぼ東西方向、東側で大きく南に方向を変える。蛇行しながら延びる溝で、南北両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は16.4m、上幅は40cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い箱形を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や黒色を呈するシルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(39g)。時期は、重複関係からみて、漆町Ⅲ期かあるいはそれ以前である。

#### HSD10 (第230・233図)

H区の西側に位置する溝跡である。HSD07溝跡と重複し、それよりも古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北側をみると、南北方向から東西方向とクランク状に屈曲しながら延びている。北端は調査区外へ続くが、南端はHSD07と重複し、消失している。検出長は8.2m、上幅は50cmである。深さは5～20cmである。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する砂質シルト層である。遺物は土師器非ロクロ甕の細片がわずかに出土するのみである(24.8g)。時期は、重複関係からみると幅があるが、近代以前に位置づけられる。

#### ISD02 (第235・237図)

I区の西側に位置する溝跡である。ISI03竪穴建物跡と重複し、それよりも新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、南北方向であり、やや西側に傾いている。南北端ともに調査区外へ続く。検出長は1.9m、上幅は50cmである。深さは20cmである。断面形は箱形を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は土師器非ロクロ甕の細片が少量出土する(計184g)。時期は、重複関係や遺物からみると漆町Ⅱ期以降である。



## HSD08

1 黒褐色シルト	10YR2/2	暗灰黄色粘土質シルト粒 (2.5Y5/2) (径1~5mm) 3%を含む、炭化物微量
2 黒褐色シルト	10YR2/2	暗灰黄色粘土質シルト粒 (2.5Y5/2) (径1~10mm) 10%を含む
3 黒褐色シルト	10YR2/2	暗灰黄色粘土質シルトブロック (2.5Y5/2) 10%を含む
4 黒褐色シルト	10YR2/2	明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~3mm) 3%を含む
5 黒褐色シルト	10YR2/3	明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~5mm) 15%を含む
6 明黄褐色粘土質シルト	10YR6/8	
7 黒色シルト	10YR2/1	明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~3mm) 1%を含む
8 黒褐色シルト	10YR2/2	明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~10mm) 7%を含む =住居由来の土
9 にぶい黄褐色粘土質シルト	10YR5/4	黒褐色シルト (10YR2/2) 20%を含む、10YR6/8明黄褐色シルト粒 (径1~5mm) 10%を含む =住居由来の土
10 明黄褐色シルト	10YR2/2	明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~5mm) 5%、炭化物 (径1~5mm) 1%を含む
11 黒褐色シルト	10YR2/3	にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 5%を含む、明黄褐色シルト粒 (10YR6/8) (径1~10mm) 5%を含む
12 黒褐色シルト	10YR2/2	明黄褐色 (10YR6/8) シルトブロック15%、同シルト粒 5%を含む
13 黒褐色シルト	10YR2/3	明黄褐色 (10YR6/8) シルト粒 1%を含む

## HSD08 (KSD01)

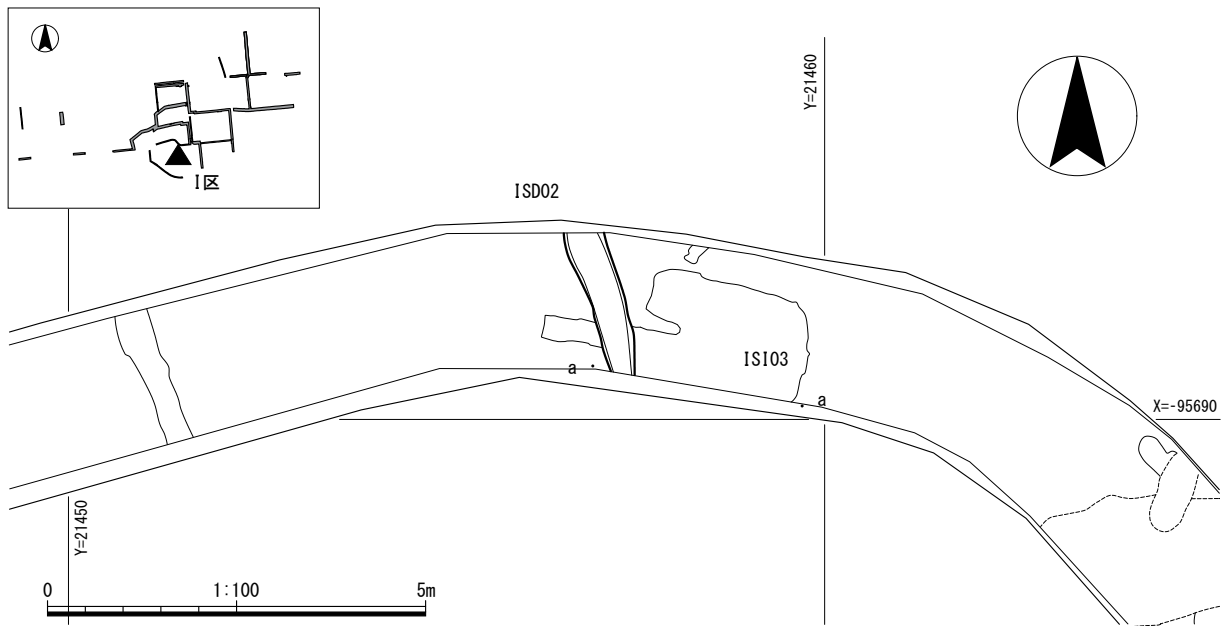
14 黒色シルト	10YR1.7/1	地山土粒 (径1~10mm) 1%
15 黒色シルト	10YR1.7/1	地山土粒 (径1~10mm) 5%、地山ブロック (径5cm) 3%
16 黒色シルト	10YR2/1	地山土粒 (径1~5mm) 3%
17 黒褐色シルト	10YR2/2	地山ブロック (径10cm) 20%
18 黒褐色シルト	10YR2/2	地山土粒 (径1~5mm) 10%、地山ブロック (径10cm) 5%、焼土粒 (径1~5mm) 3%
19 黒褐色シルト	10YR2/2	地山土粒 (径1~5mm) 10%

第234図 溝跡14 G区3・H区7

## JSD01 (第236・237・263・264図)

J区北端付近に位置する溝跡である。JSI02とJSD05と重複し、この両者よりも新しい遺構である。検出はI層を除去後、JSD05の堆積土上層面で行っている。溝跡の方向は北東から南西方向であり、北東端は調査区外に延長し、南西端は調査区内において収束する。調査区内では3.3mのみを確認し、上幅は最大で55cmである。断面形は、ゆるやかな半円状を呈し、確認面からの深さは10cmと浅い。東壁断面図をみると、I b層が直上に存在することから、近年の盛土の際に削平され、下部のみ残存していることがわかる。南西端でこの溝跡が収束することは、このI b層による削平と考えられ、本来は調査区外へ続いていることが予想される。底面レベルをみると北東側の方が約3cm高いことから、北東側から南西方向に流路方向が想定できる。堆積土は3層が確認でき、下層に黒褐色粘質土(3層)が、上層に灰黄褐色を呈する砂層(1層)が堆積することから、水性堆積と考えられる。

遺物は、土師器や須恵器の細片や須恵器系陶器甕片(300)、中国産白磁碗(308)、常滑大甕片(309)



第235図 溝跡15 I区

～311)、渥美甕片 (312) が出土している (計300g)。時期は、出土遺物からみると、平安時代 (漆町IV期) 以降が想定される。

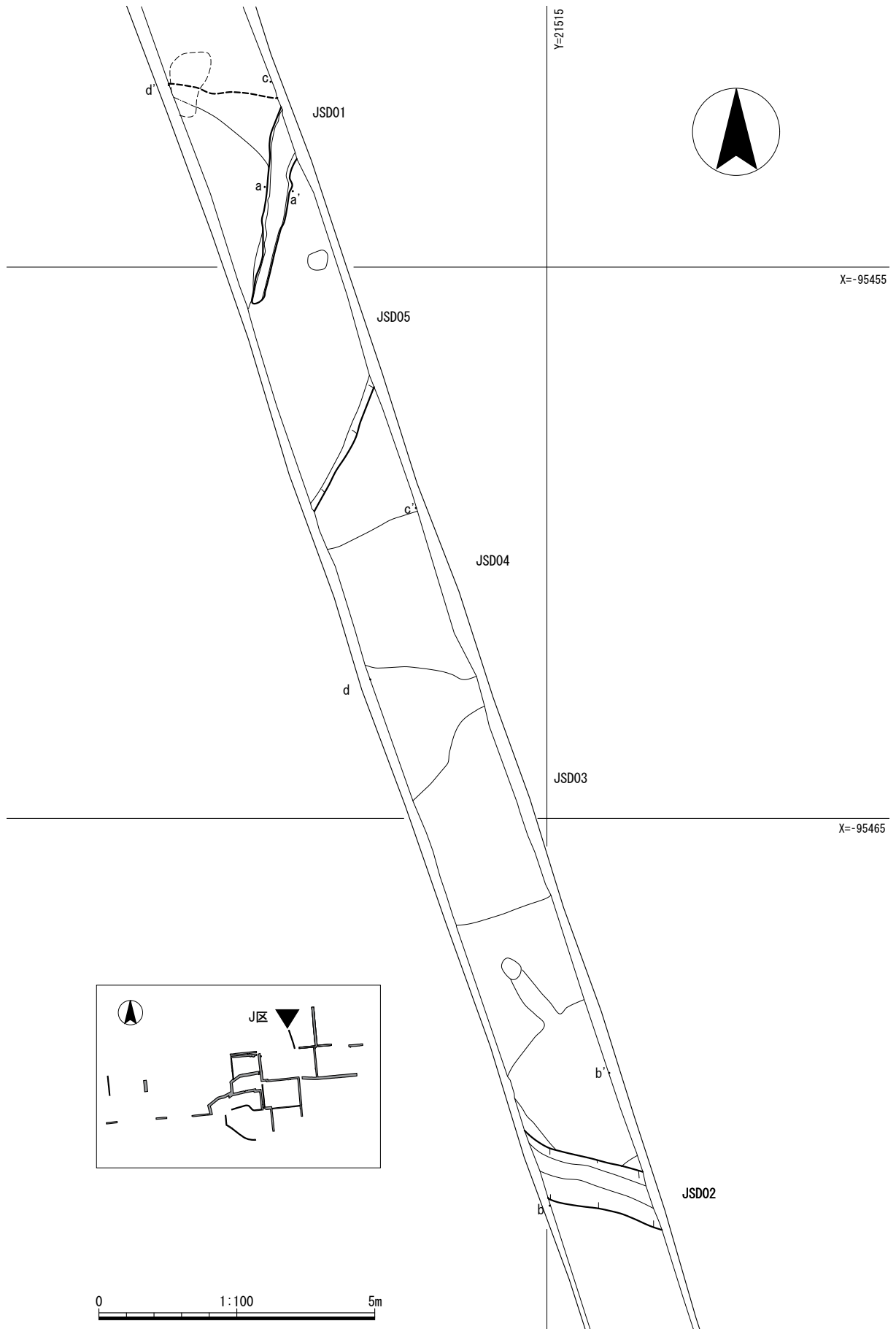
#### JSD02 (第236・237・263図)

J区中央部付近に位置する溝跡である。JSI01と重複し、これよりも新しい遺構である。I層除去後のIV層上面で確認している。溝跡の方向は北西から南東方向にかけてであり、両端とも調査区外へと延びる。調査区内における規模は長さ2.1m、直線で2.1m、上幅が最大で90cmである。断面形は緩やかなU字形を呈し、深さは確認面から18cmと浅い。底面の高さをみると、調査区内ではほぼ平坦であるが、南東側がわずかに高い。堆積土は2層が確認でき、黒褐色を呈する砂質シルトや褐灰色シルトとの互層である砂質土があり、水性堆積を示している。遺物は、土師器の細片や常滑大甕片 (313) が出土する (計175g)。時期は、重複関係や出土遺物から、古代のうちに位置づけられる。

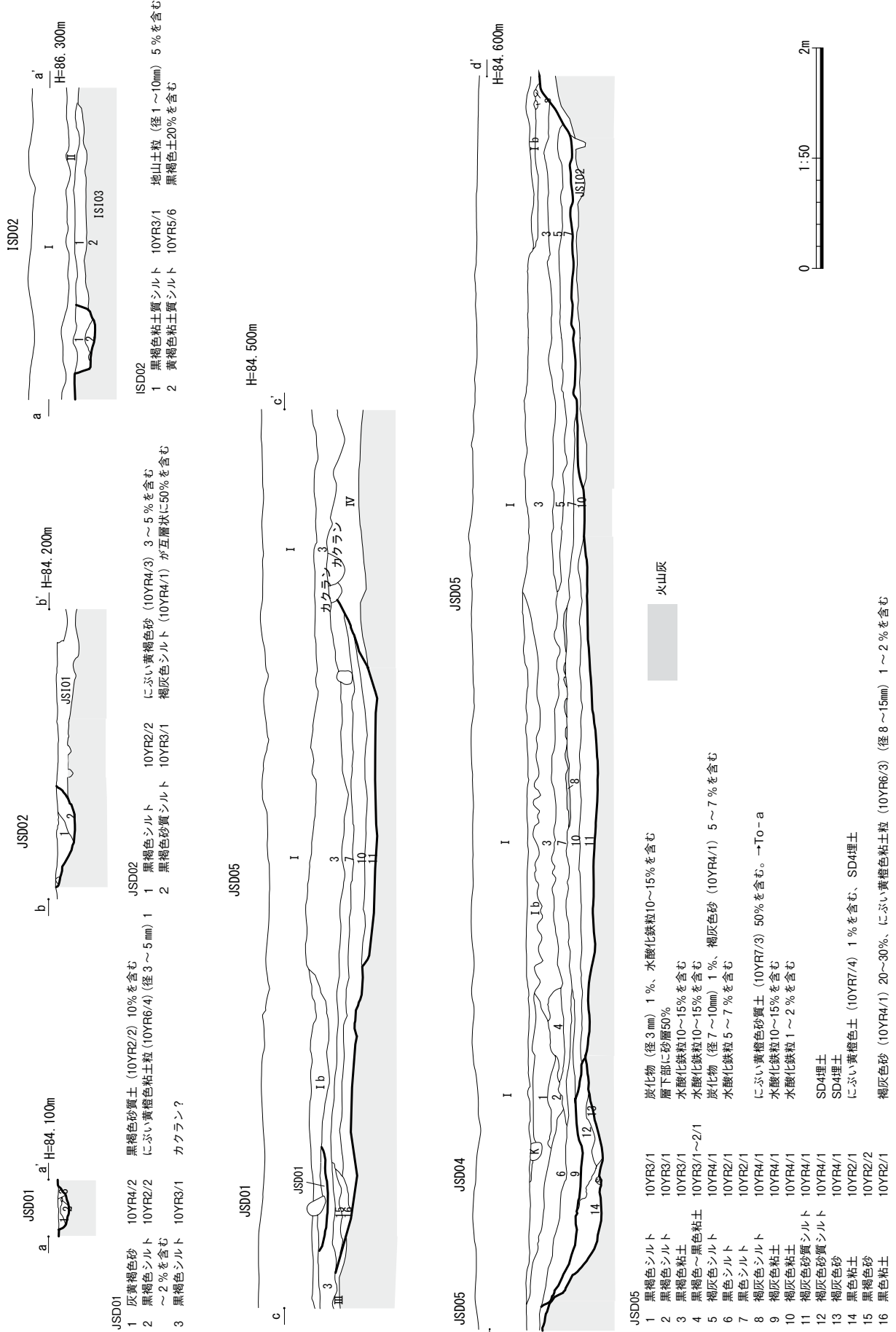
#### JSD04 (第236・237図)

J区中央部付近に位置する溝跡である。平面図上に重複は見えないが、JSD03と同様にJSD05とした沢跡と重複し、これよりも古い遺構となる。また、隣接するJSD03とは、その方向から調査区外において重複する可能性が高い。検出は、Ⅲ層からIV層上面である。溝跡の方向はほぼ東西方向であるが、わずかに北西から南東方向に傾いており、北西、南東端ともに調査区外へ続いている。調査区内における規模は、長さ1.8m、上幅が最大で3.1mである。断面形状はゆるやかなU字形を呈し、確認面からの深さは60cmである。底面の高さはほぼ平坦であり、調査区内においてはあまり傾斜がない。堆積土は6層に分層できる。基本的に黒褐色を呈する粘土や粘土質シルトと灰色系の粘土から粘土質シルトが交互に堆積している。いわゆる三角堆積やレンズ状堆積が観察できることからいずれも自然堆積と考えられる。また、これら堆積土の上層には沢跡と想定するJSD05の堆積土が覆っている。遺物は土師器非ロクロ甕片、ロクロ甕片、かわらけ片などが少量出土している (計78g)。時期は出土





第236図 溝跡16 J区1



第237図 溝跡17 J区2

遺物から平安時代のなかに位置づけられる。

この溝跡は、断面形状や堆積状況が異なっているが、位置や方向などからJSD03と同様に大溝跡と考えられる。Q区などで観察されたように大溝は部分的に2時期が確認できる。本溝跡はこの2時期ある大溝のいずれかに対応する可能性がある。

#### JSD05 (沢跡) (第236・237図)

J区北端付近に位置する溝跡(沢跡)である。人工的な遺構というよりは沢跡として考えているが、周辺の遺構と重複関係にあるため、JSD05として遺構と同様に記載する。

JSI02・JSD04・JSD01と重複し、前2者より新しく、JSD01よりは古い沢跡となる。検出はIV層上面なるが、この付近では広い範囲において、JSD05の堆積土や、J区北部全体を覆う層(3層)が広がっており、最終的に沢跡として確認できたのが堆積土の中位付近(8~10層)である。したがって、本来の検出面よりもかなり下がった状況で確認したことになる。このため、平面図上に示した範囲は、本来の上端を表しておらず、確認できた中位付近の上端を示していることになる。溝跡の方向はおおよそ東西方向であるが、東西両壁面の断面によると、北東から南西方向ととらえることができるかもしれない。東西両端とも調査区外へと続き、周辺にも広がっていることが想定される。調査区内において確認できる規模は、長さが約1.8m、上幅は方向が不明瞭のため、斜距離の可能性もあるが11m以上である。深さは本来の確認面からみると60cmである。堆積土は13層に区分され、黒褐色から黒色を呈する色調と褐灰色を呈する色調があり、いずれも粘土から砂質土までを含んでいる。8層はにぶい黄橙色を呈する砂質土を含んでおり、これは十和田aテフラ(To-a)と考えられる。

遺物は出土していない。時期は重複関係からみて、平安時代(漆町IV期)のあいだに位置づけられる。

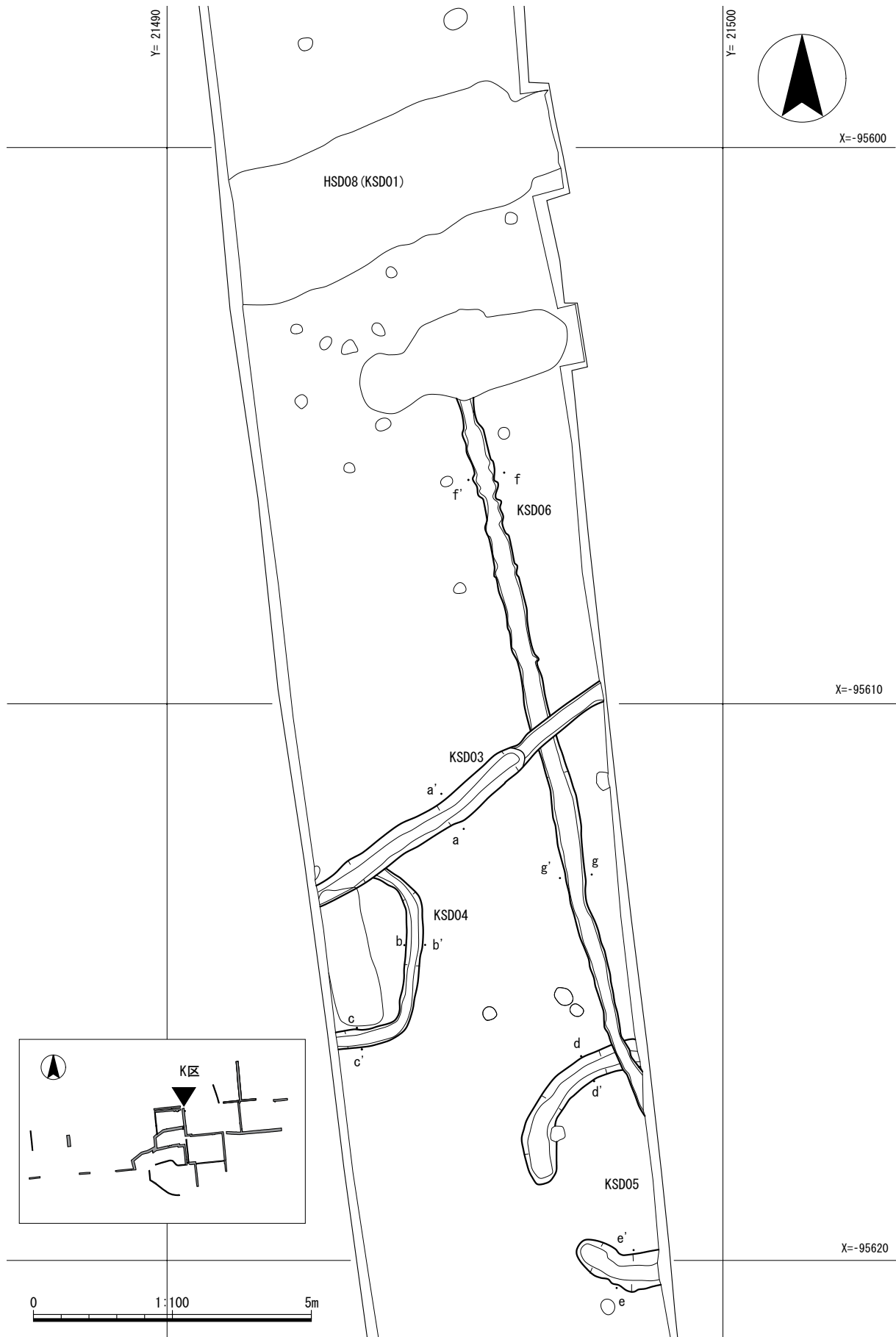
堆積状況からみると、このJSD05は、JSD03・JSD04・JSI02が埋没後にこれらの遺構を削ってこの沢跡が堆積している。この沢跡の堆積土はかなり広範囲に広がっていることや、堆積土が自然堆積であり、砂質土を含んだ流路の堆積土であることから、人工的な遺構ではなく、自然の沢跡として捉えた。また、遺構を削平して堆積していることから洪水などにより強い水流があった可能性もある。

#### KSD03 (第238・239図)

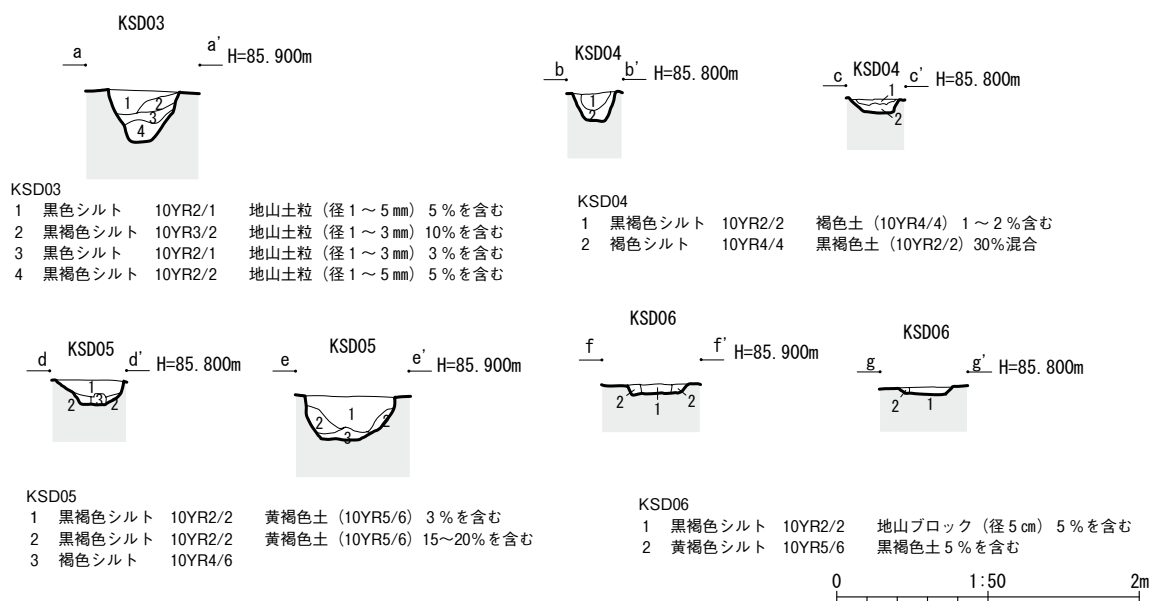
K区の南側に位置する溝跡である。重複する遺構はKSD04・06溝跡、KSK01であるが、いずれの遺構よりも本遺構が新しい。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、ほぼ直線的に延びている。東西両端とも、調査区外へ続く。検出長6.4m、上幅50cmである。深さは、西側で深く34cm、東側で浅く2cmである。断面形は、逆台形状を呈する。底面の標高は東側が高く、西側が低いいため水は東から西へ流れていたと推定される。堆積土は4つに区分した。いずれも黒色から黒褐色シルトであり、自然に堆積したものと判断している。遺物は出土していない。時期は、重複関係からみて、古代以降の可能性はある。(巴)

#### KSD04 (第238・239・262図)

K区の南側に位置する溝跡である。KSD03と重複するが、本遺構のほうが古い。遺構の検出はI層除去後のIV層上面で行った。遺構の西側が調査区外に延びるため、全容は不明である。調査区内では、円形周溝状に巡る。周溝状の遺構とすると、直径は3.2m程である。上端幅は20~30cmであり、深さは20cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2つに区分した。黒褐色シルトを基調とし褐色土を含む1層と、褐色シルトを基調とし黒褐色土を含む2層である。2層は地山由来土を基調として



第238図 溝跡18 K区1



第239図 溝跡19 K区2

いる。また南側では、2層が厚く堆積している。遺物は、土師器の甕底部片 (279) やその他の細片が出土するのみである (計68.3g)。時期は、遺物からみると古代に位置づけられる可能性がある。

(巴)

## KSD05 (第238・239図)

K区の南側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行っている。KSD06・KP056と重複し、いずれの遺構より古い。東側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、調査区外も含めて推定すると南西方向が開くC字状の平面形を呈すると予想され、円形周溝の可能性が考えられる。規模は、直径4.15m程度であり、周溝の上幅は40~60cmである。深さは、16cm~29cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土するのみである (28.1g)。時期は、出土遺物からみると古代に位置づけられる可能性があるが、詳細な時期決定はできない。

(巴)

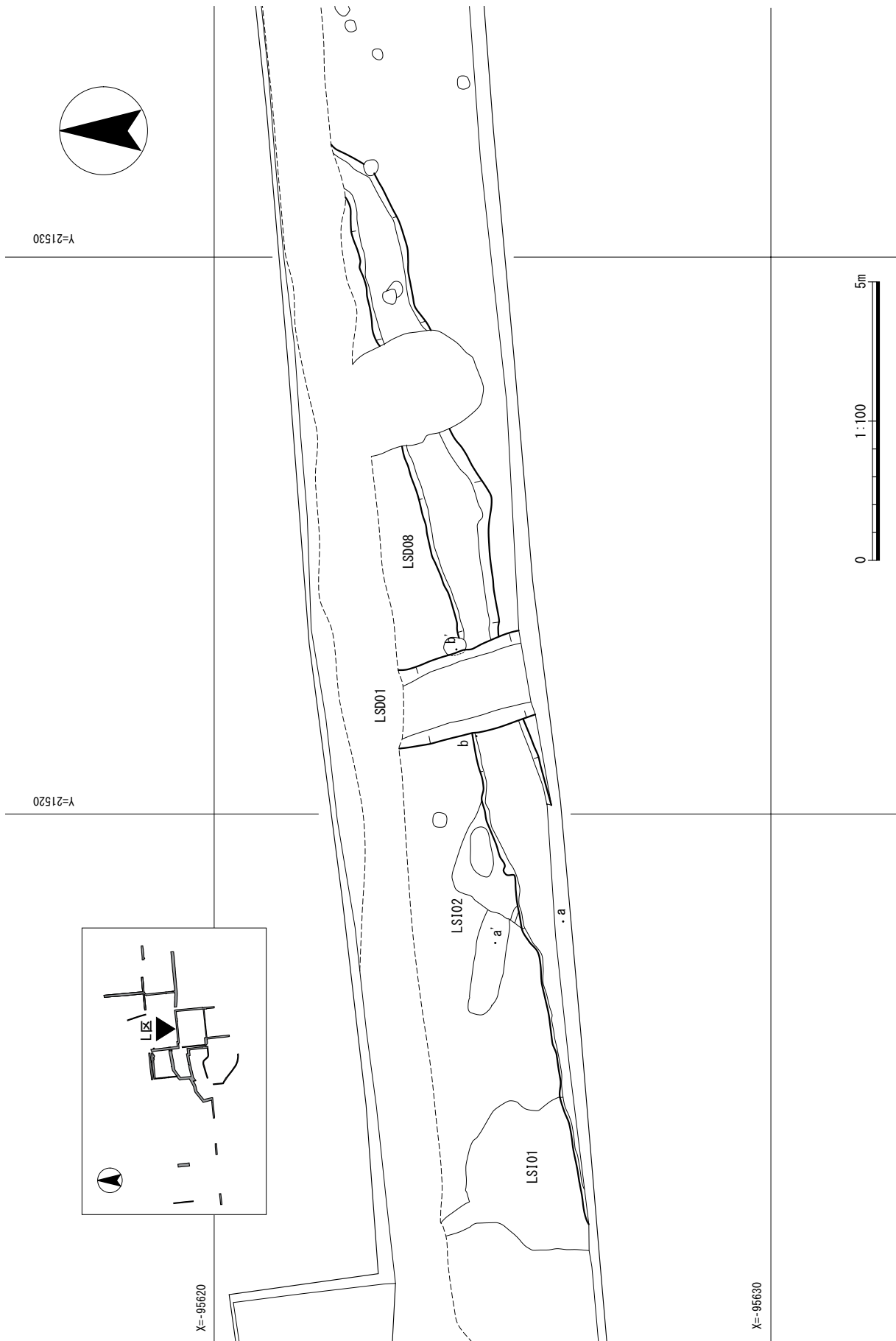
## KSD06 (第238・239図)

K区の南寄りに位置する溝跡である。遺構の検出はI層除去後のIV層上面で行った。KSD02・03・05と重複し、前2者よりは古く、KSD05より新しい。KSD02より北側には続かないが、南端は調査区外に続く。溝の方向は、やや西に偏する南北方向であり、直線的に延びている。検出長は12.9m、上幅20~50cmである。深さは約7cmと浅い。断面形は浅い逆台形状を呈する。底面の深さは北から南へと進むにしたがってわずかに低くなる。堆積土は2つに区分した。1層は黒褐色シルトであり、地山ブロックを含み、2層は黄褐色シルトであり、黒褐色シルトを含んでいる。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、古代に含められよう。

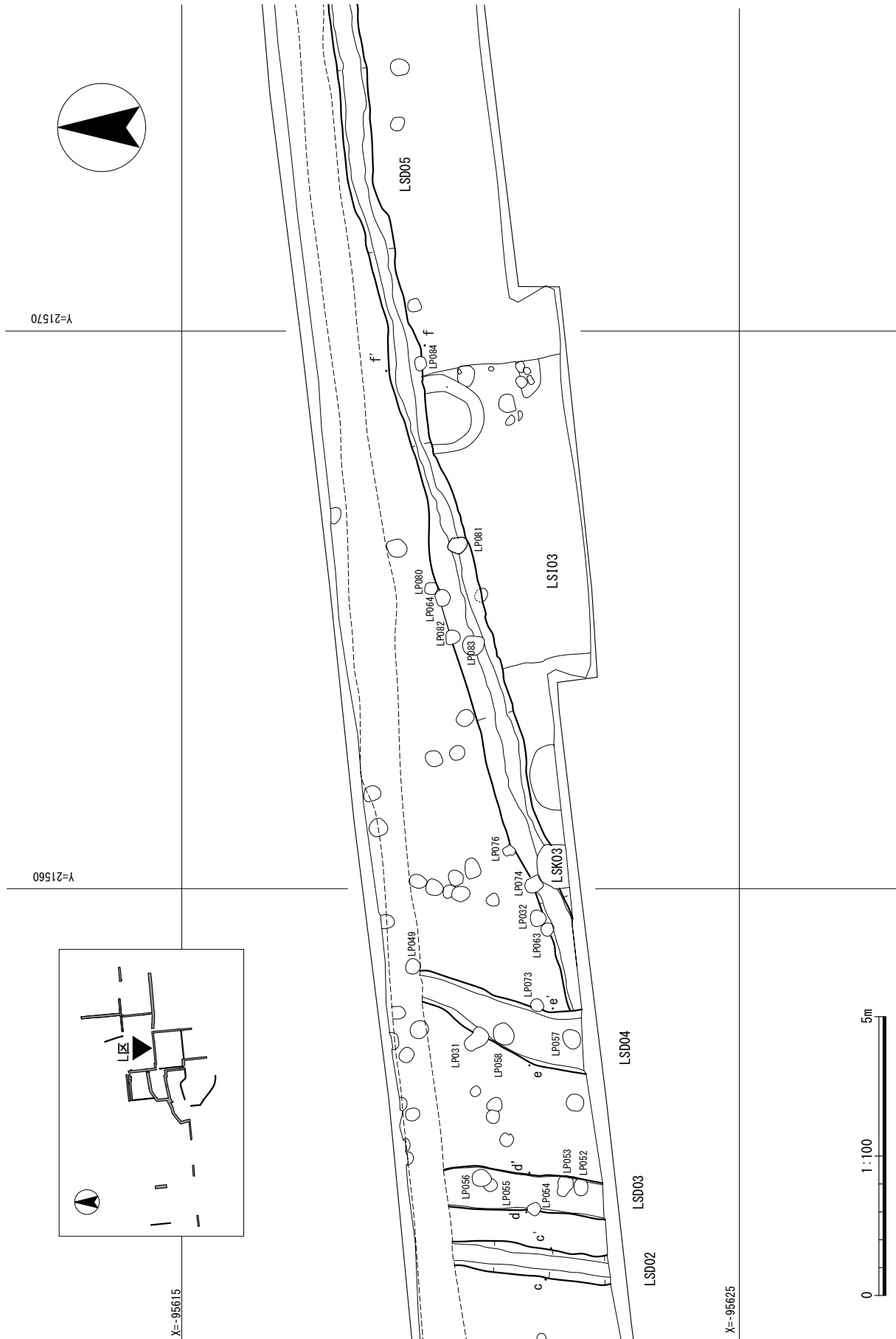
(巴)

## LSD01 (第240~242・244図)

L区の西側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。LSD08・LP062と重



第240図 溝跡20 L区1



第241図 溝跡21 L区2

複し本遺構が新しい。溝の方向は南北方向であり、北側は攪乱を受け破壊されており、南側は調査区外へ続いている。検出長2.3m、上幅1.5mである。深さは14cmである。断面形は、緩やかな逆台形状を呈している。堆積土は3層に区分した。1層は3層由来と考えられるにぶい黄褐色砂を含む褐灰色シルトである。2層も3層由来と考えられるにぶい黄褐色砂を含む黒褐色粘土である。3層はにぶい黄褐色砂である。各層位に砂が含まれていることから、水性堆積であると考えられる。遺物は出土していない。時期は、判断する証拠がないため不明である。(巴)

#### LSD02 (第241・244図)

L区の中央に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。重複する遺構はないが、北側が攪乱を受け破壊されている。溝の方向は、南北方向であり、ほぼ直線的に延びている。検出長2.86m、上幅0.57mである。深さは11cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で褐色土を少量含む褐灰色シルトである。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。(巴)

#### LSD03 (第241・244図)

L区の中央に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LP052～056と重複し、いずれの遺構よりも古い。溝の方向は、南北方向で、直線的に延びる。検出長2.83m、上幅0.78mである。深さは6cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で褐色土を微量含む黒褐色シルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。(巴)

#### LSD04 (第241・244図)

L区の中央に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LSD05溝跡、LP031・057・058・073柱穴跡と重複し、LSD05より新しく、柱穴群よりは古い。溝の方向は、南北方向であるが、北に向かってやや東にゆるやかに屈曲している。検出長3.08m、上幅0.56～1.14mである。断面形は浅い逆台形状を呈する。深さは12cmである。堆積土は単層で、褐色土を少量含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。したがって、時期も不明である。(巴)

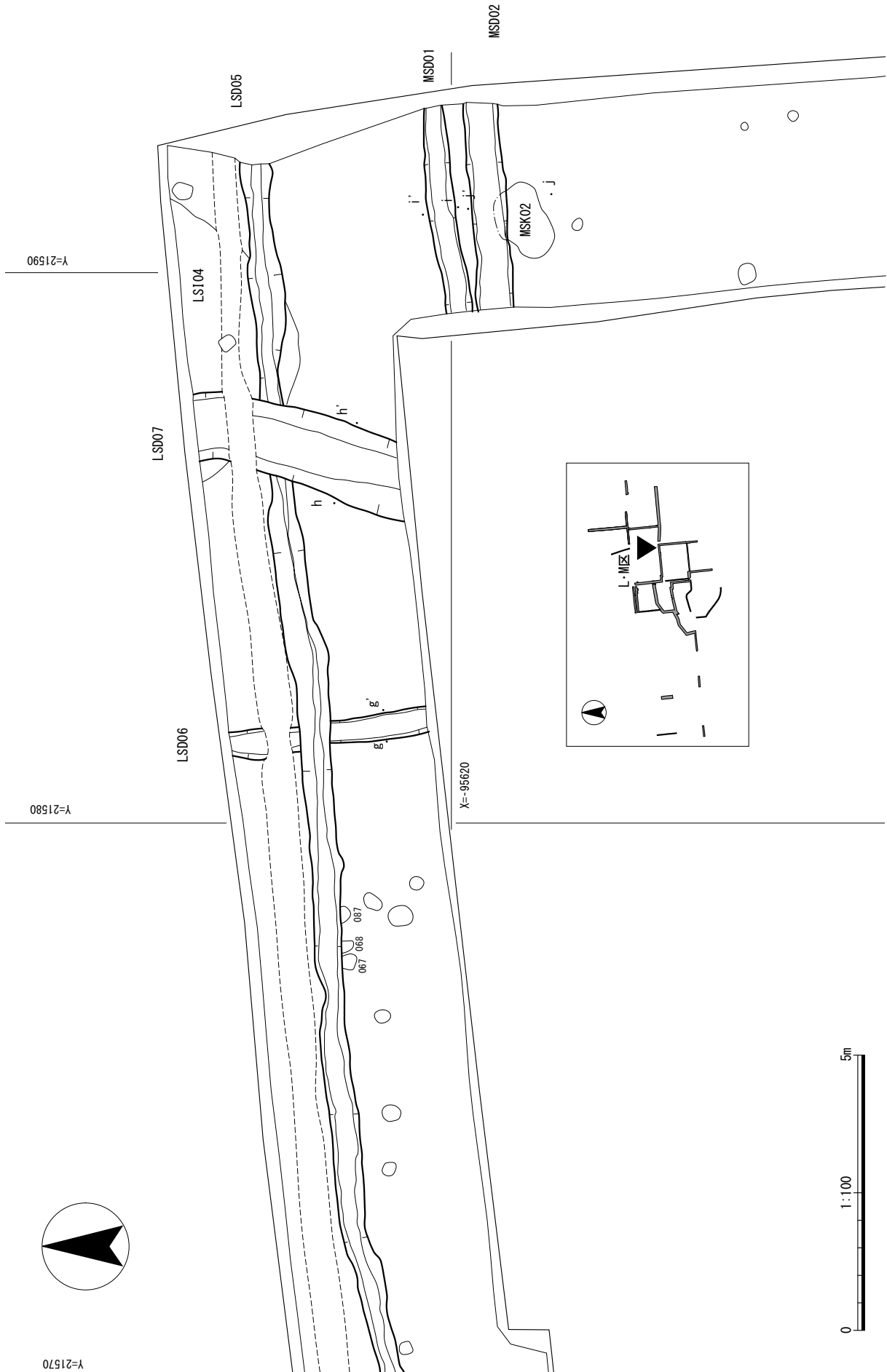
#### LSD05 (第241・242・244・262図)

L区中央から東側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。東西に長い溝跡のため重複する遺構が多い。LSK03土坑・LSD04・07溝跡、LP032・063・064・074・076・081・082よりは古く、LSI03・04竪穴建物、LSD06溝跡・LP067・068・083・084・086・087よりは新しい。溝跡の方向は、東西方向であり、西側でゆるやかに南に偏している。検出長33.4m、上幅30～80cmである。深さは21cmで、断面形は皿形を呈する。堆積土は2層に区分した。いずれも黒褐色を呈するシルト層であるが、2層にのみ褐色土が含まれており、この褐色土が壁面の崩落土の可能性はある。いずれも自然堆積と考えられる。遺物は須恵器ロクロ杯(280)やロクロ甕片、非ロクロ甕片、須恵器杯・甕片などが出土する(計1.2kg)。時期は、出土遺物をみると平安時代に位置づけられる。(巴)

#### LSD06 (第242・244図)

L区の東側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LSD05と重複し、本遺構が古い。南北端とも調査区外へ続く。溝の方向は南北方向であり、直線的に延びる。検出長3.55





第242図 溝跡22 L区3

m、上幅51cmである。深さは10cmで、断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2層に区分した。いずれも黒～黒褐色呈するシルト層であり、2層にのみ褐色土粒を含む。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計12.8g) 時期は、わずかな遺物を重視すると古代のなかに位置づけられる可能性がある。(巴)

#### LSD07 (第242・244・262図)

L区の東側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LSD05溝跡、LSI04竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。南北端とも調査区外へ続くが、北側で一部攪乱を受けている。溝跡の方向は、南北方向であり、北に向かって、東に緩やかに曲がる。検出長3.82m、上幅1.44mである。深さは16cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で褐色土を微量含んでいる。出土遺物は、土師器甕の底部片(284)やその他の細片が出土している(計149g)。時期は、出土遺物から見ると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。(巴)

#### LSD08 (第240・244図)

L区の西側に位置する溝跡である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。南北端とも調査区外へ続くため全容は不明である。溝跡の方向は、東西方向であり、東に向かって北に偏している。北側の一部が攪乱を受けている。LSD01溝跡・LSK01土坑・LSI02竪穴建物跡と重複し、LSD01、LSK01よりは古く、LSI02より新しい。規模は、検出長14.15m、上幅0.71～1.34mである。深さは22cmで、断面形は浅い皿状を呈するが、一部底面に凹凸がある。堆積土は3層に区分した。1層は褐灰色シルト、2層は地山由来土と考えられるにぶい黄褐色土を微量含む黒褐色シルト、3層は黒褐色土を含むにぶい黄褐色シルトである。遺物は、土師器非ロクロ甕片などが少量出土している(計140g)。時期は、重複や出土遺物からみて、古代のうちに位置づけられる可能性がある。(巴)

#### MSD01 (第242・244図)

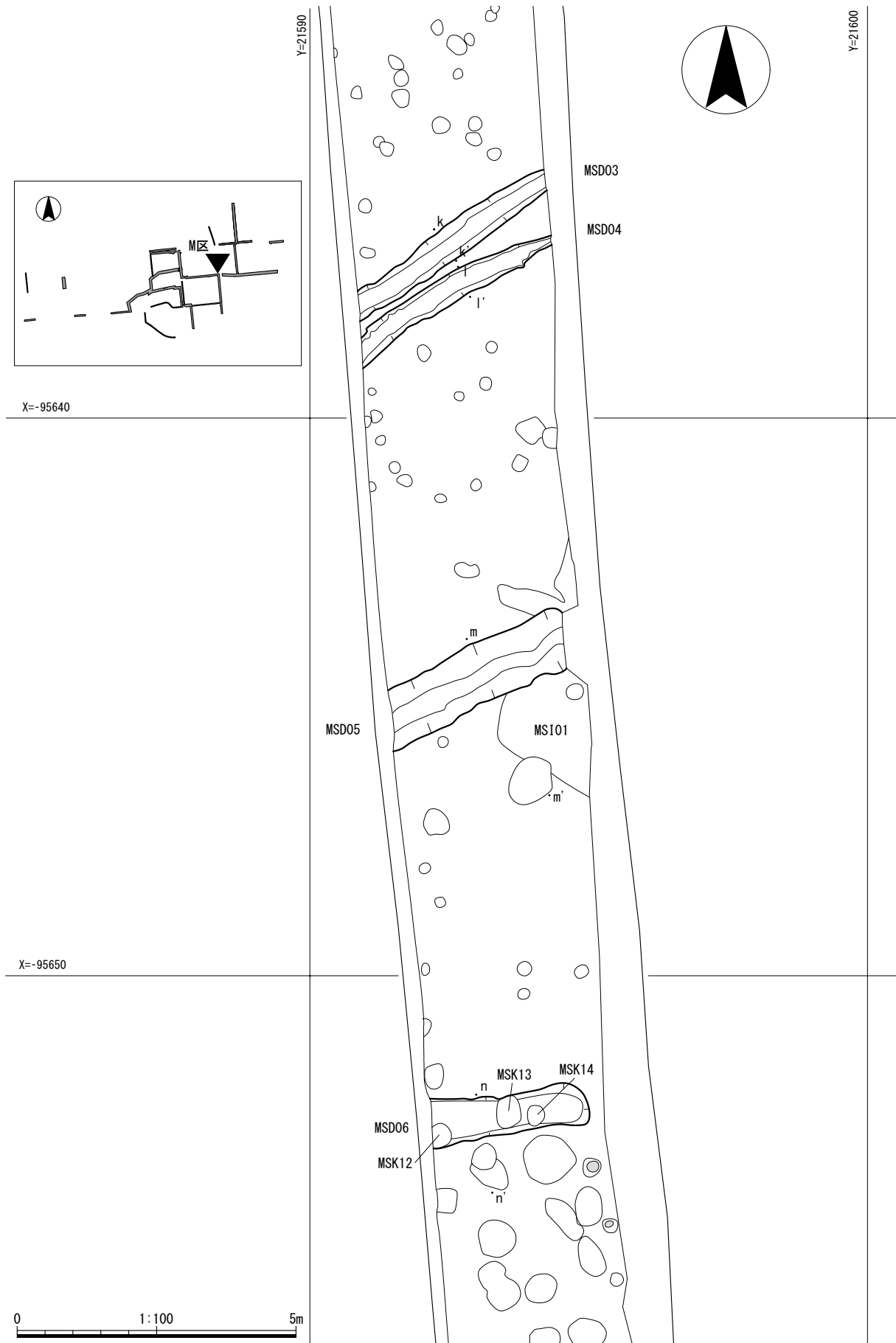
M区の北側に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。また南に隣接してMSD02がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は3.8m、上幅は50cmである。深さは14cm程度である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明とする。

#### MSD02 (第242・244図)

M区の北側に位置する溝跡である。重複は、MSK02土坑とであり、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は3.8m、上幅は70cmである。深さは10cm程度である。断面形は逆台形状から箱形状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明とする。

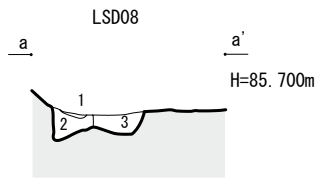
#### MSD03 (第243・244図)

M区の中央に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はないが、南に隣接してMSD04がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、

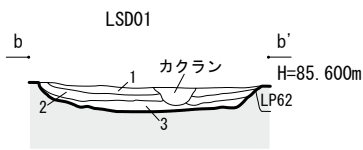


第243図 溝跡23 M区1

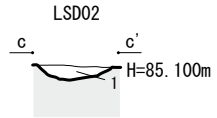
3 遺構と遺物



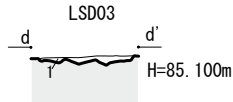
- LSD08  
 1 褐灰色シルト 10YR4/1  
 2 黒褐色シルト 10YR2/2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 1~2%を含む  
 3 にぶい黄褐色粘土 10YR5/4 黒褐色土 (10YR2/2) 5~7%を含む



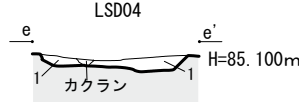
- LSD01  
 1 褐灰色シルト 10YR4/1 にぶい黄褐色砂 (10YR4/3) 10%を含む  
 2 黒褐色粘土 10YR3/1 にぶい黄褐色砂 (10YR4/3) 1~2%を含む  
 3 にぶい黄褐色砂 10YR4/3 黒褐色 (10YR3/1) 20%の混合土層



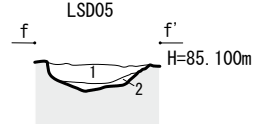
- LSD02  
 1 褐灰色シルト 10YR4/1 褐色土 (10YR4/4) 3~5%を含む



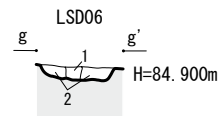
- LSD03  
 1 黒褐色シルト 10YR3/1 褐色土 (10YR4/4) 1%を含む



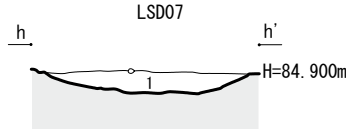
- LSD04  
 1 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色土 (10YR4/4) 3~5%を含む



- LSD05  
 1 黒褐色シルト 10YR2/2  
 2 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色土 (10YR4/4) 3~5%を含む



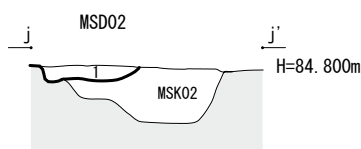
- LSD06 (W-E)  
 1 黒色シルト 10YR2/1  
 2 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色土 (10YR4/4) 1%を含む



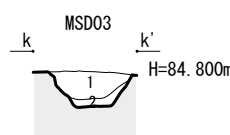
- LSD07  
 1 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色土 (10YR4/4) 1%を含む



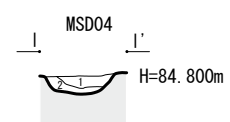
- MSD01  
 1 黒色シルト 10YR2/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 1%を含む



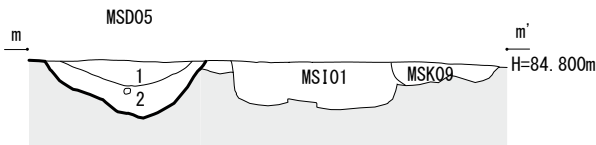
- MSD02  
 1 黒色シルト 10YR2/1 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 3%を含む



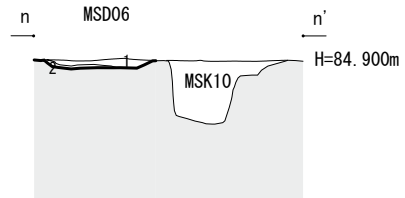
- MSD03  
 1 黒褐色シルト 10YR3/2 黄褐色シルト (10YR7/8) 粒 2%を含む  
 2 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR7/8) 5%を含む



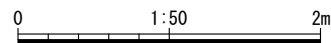
- MSD04  
 1 黒褐色シルト 10YR3/2 黄褐色シルト (10YR7/8) 粒 2%を含む  
 2 黒褐色シルト 10YR3/1 黄褐色シルトブロック (10YR7/8) 5%を含む



- MSD05  
 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 黄橙色 (10YR8/8) 粒 1%を含む  
 2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 黄橙色 (10YR8/8) 粒 5%、円礫 (径 2cm) 1%を含む



- MSD06  
 1 黒褐色粘土質シルト 10YR3/3 黄褐色粘土粒 (10YR5/6) 20%、炭化物粒 3%、明黄褐色粘土粒 (10YR6/8) 5%を含む  
 2 褐色粘土質シルト 10YR3/6



第244図 溝跡24 L区4・M区2

ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は4.1m、上幅は0.6mである。深さは24cm程度である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は土師器鉢片などがわずかに出土している（計91g）。時期は、出土遺物を重視すると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

#### MSD04（第243・244図）

M区の中央に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はないが、北に隣接してMSD03がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、わずかに湾曲しながら延びており、MSD03溝跡と同様である。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は4.0m、上幅は0.5mである。深さは12cm程度である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないが、MSD03と同様の方向を示すことから、あるいは同様の時期かもしれない。

#### MSD05（第243・244・262図）

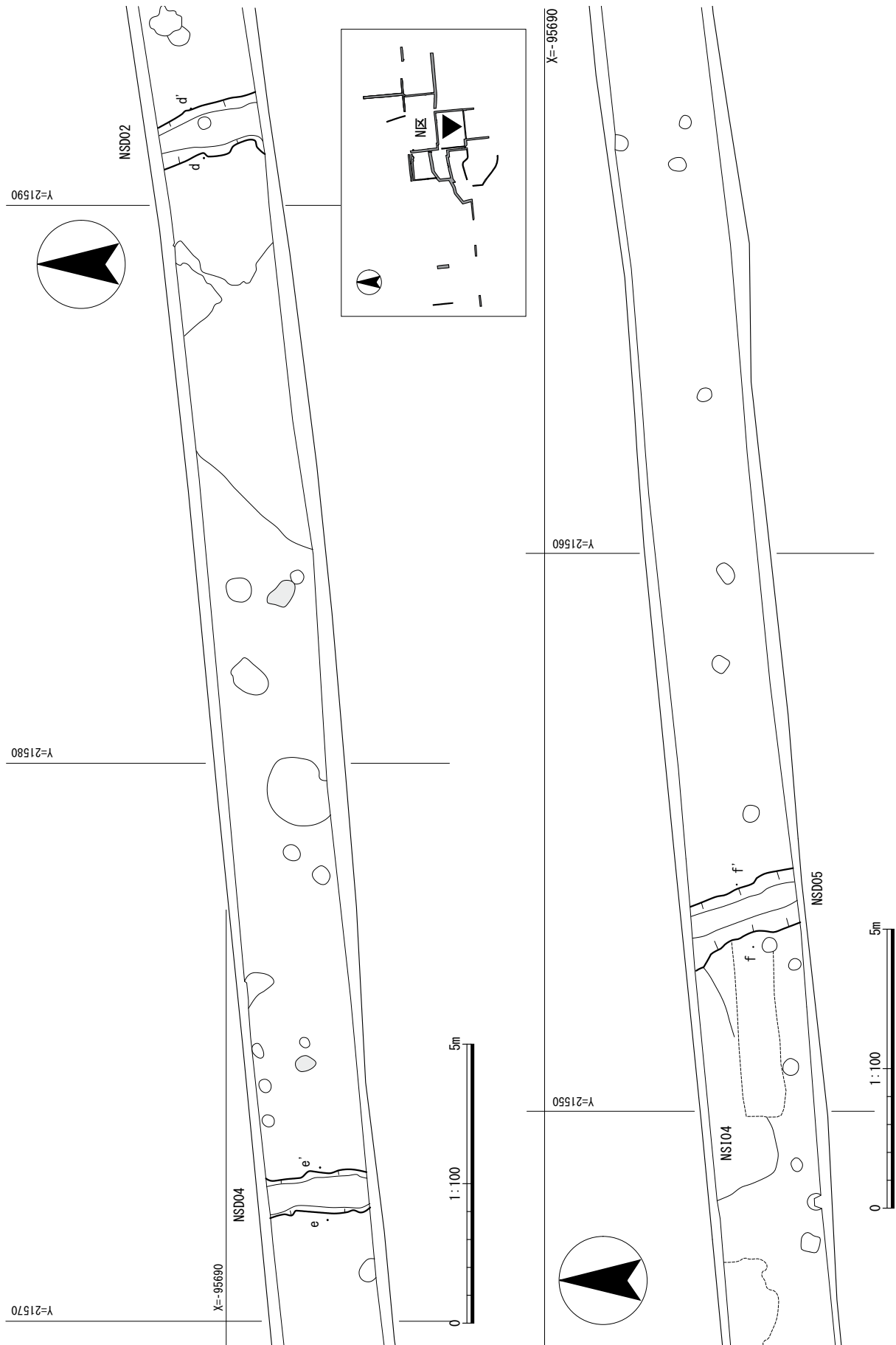
M区の中央に位置する溝跡である。MSI01竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は3.4m、上幅は1.0mである。深さは40cm程度である。断面形は深いU字形を呈する。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、土師器非ロクロ甕の細片や須恵器杯（281）・甕の細片が出土している（計347g）。時期は、重複関係や出土遺物から、古代のなかに位置づけられる。

#### MSD06（第243・244・262図）

M区の中央に位置する溝跡である。MSK12・13・14土坑と重複し、それらよりも古い遺構である。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東端は調査区内で収束し、西端は調査区外へ続く。検出長は2.8m、上幅は0.9mである。深さは8cm程度である。断面形は逆台形状を呈する推定されるが、浅いため不確かである。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は、土師器のロクロ杯（282）、ロクロ甕・高台杯の破片が出土している（計324g）時期は、出土遺物から、漆町Ⅳ期（平安時代）に位置づけられる。

#### NSD01（第246・247・262図）

N区の西側に位置する円形周溝状の遺構である。NSK03重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝は、円形に全周するもので、平面形は南北方向にやや長い楕円形状を呈する。北側は調査区外にある。規模は、直径は5.4m、上幅は0.6mである。深さは10cm程度である。断面形は逆台形状や箱形を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や黒色を呈するシルト層である。1層には焼土粒や炭化物を含む箇所もある。遺物は、図示可能なものはないが、土師器非ロクロ杯、壺、ロクロ甕（いわゆるタタキ甕）（283）、ロクロ高台杯などの破片が出土している（計387g）時期は、もっとも新しい出土遺物からみると、平安時代（漆町Ⅳ期）に位置づけられる。



第245図 溝跡25 N区1

## NSD02 (第245・247図)

N区の東側に位置する溝跡である。遺構の検出はIV層で行い、黒褐色土の広がりで確認した。

調査区内には重複する遺構はないが、西側に近接してNSI01竪穴建物跡がある。溝跡の方向は南北方向であり、ほぼ直線的に延びている。南北端とも調査区外へ続く。検出長は1.9m、上幅は最大で1.0mである。断面形は皿形を呈する。堆積土は3層に区分した。暗褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計35g)。時期は、少ない遺物を手がかりとすると、古代のうちに位置づけられるかもしれない。(巴)

## NSD04 (第245・247・262図)

N区の中央に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、南北方向であり、ほぼ直線的に延びる。南北両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は1.8m、上幅は80cmである。深さは10cm程度である。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、石器の剥片、鉄釘片(305)が出土している(計26.4g)。時期は、判断できる証拠が少ないため不明とする。

## NSD05 (第245・247図)

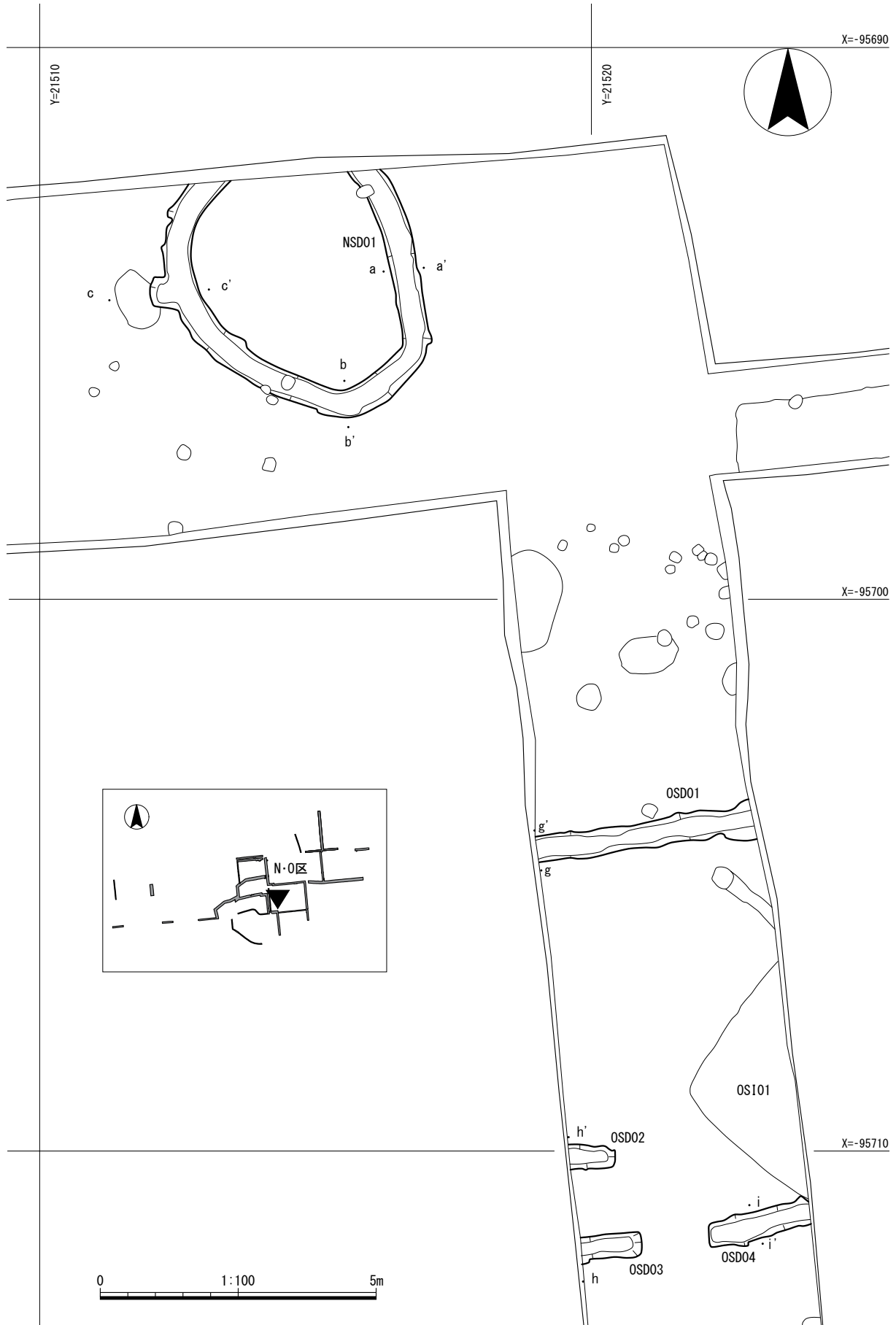
N区の中央に位置する溝跡である。NSI04竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、南北方向であり、やや西に偏しながら直線的に延びる。南北両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は2.0m、上幅は0.9mである。深さは25cm程度である。断面形はU字状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器ロクロ杯や磨石が出土している(計42.4g)。時期は、重複や出土遺物から、平安時代を含むそれ以降とする。

## OSD01 (第246・247・269図)

O区の北側に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はないが、南に近接してOSI01竪穴建物跡がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は4.0m、上幅は0.7mである。深さは12cm程度であり、断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ杯や甕の細片や須恵器杯・甕等の破片、削器(391)、石器剥片が出土している(計75.8g)。時期は、混入の可能性があるが出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

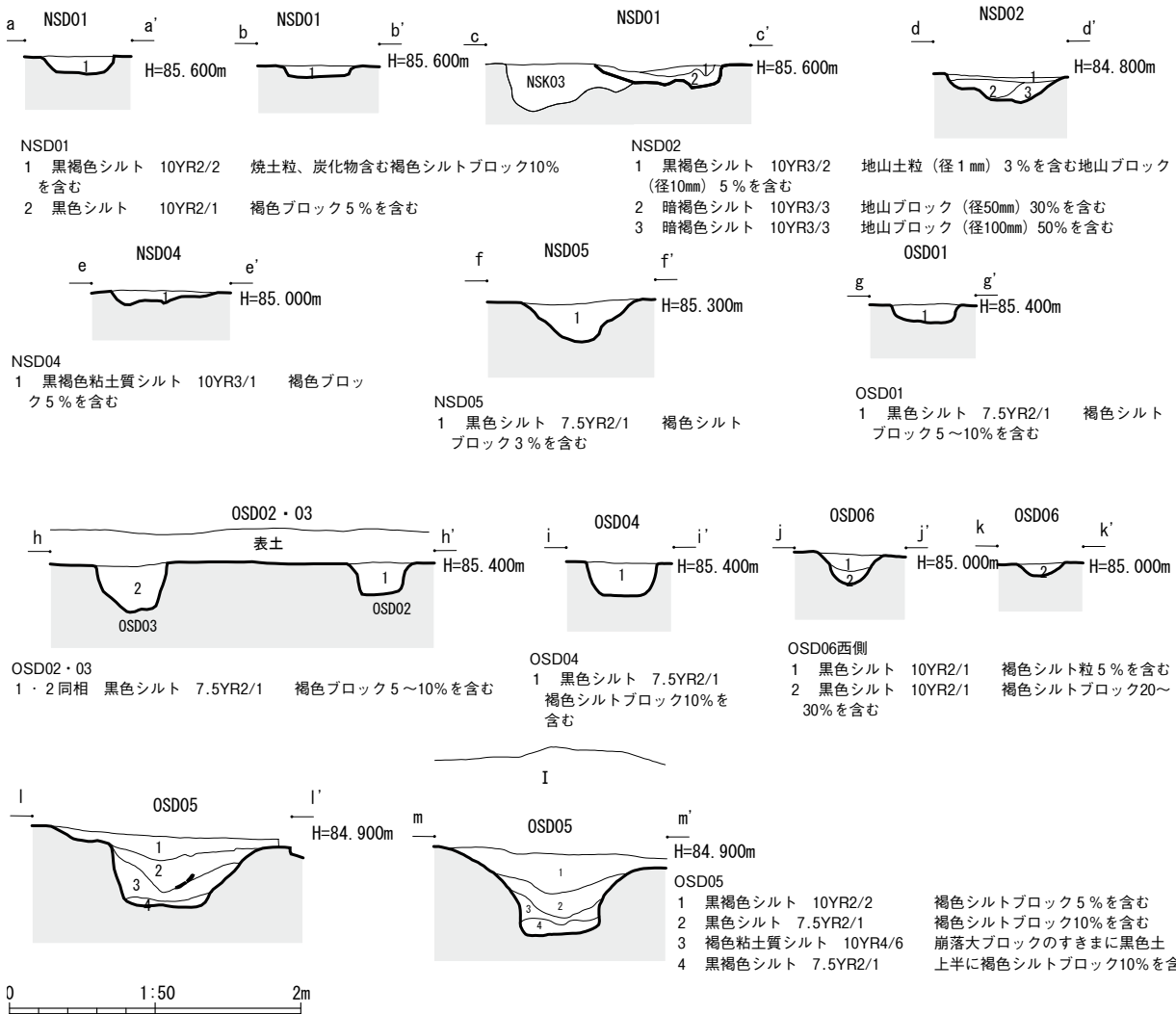
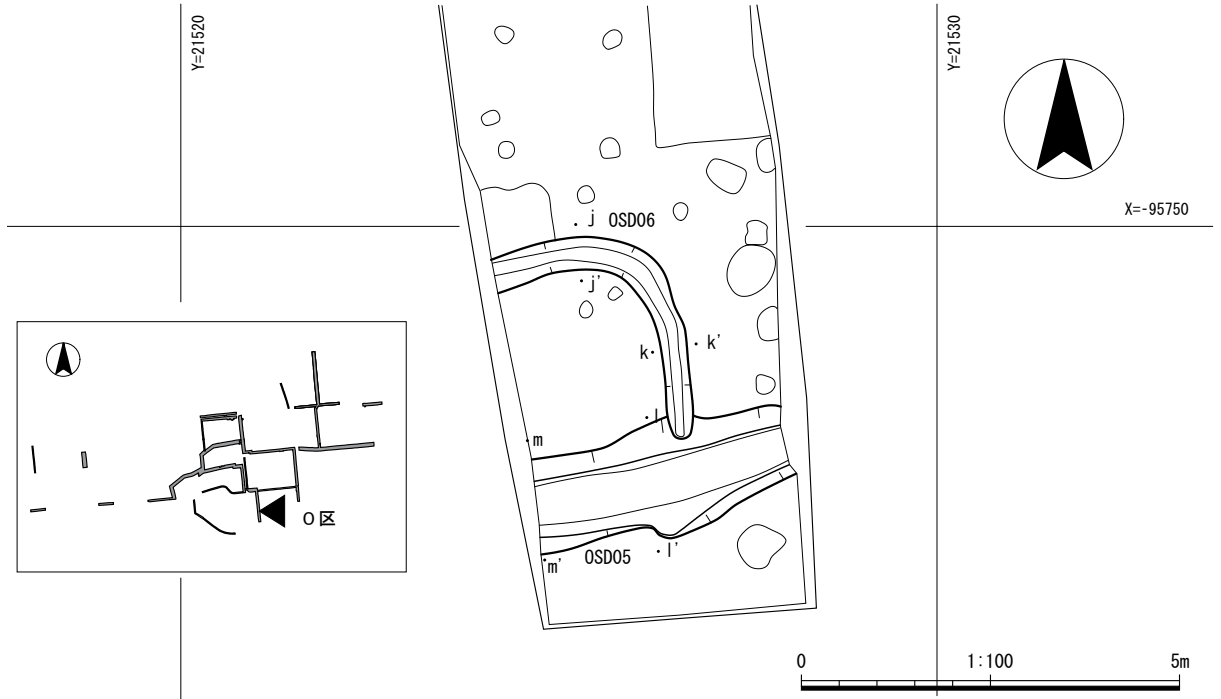
## OSD02 (第246・247図)

O区の北側に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はないが、付近には同様の溝跡であるOSD03・04がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東端は調査区内で収束するが、西端は調査区外へ続く。検出長は90cm、上幅は40cmである。深さは20cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ甕、須恵器杯などの細片がわずかに出土している(24g)。時期は、混入の可能性があるが、出土遺物からみると古代のなかに位置づけられる可能性がある。



第246図 溝跡26 N区2・O区1





第247図 溝跡27 O区2

## OSD03 (第246・247図)

O区の北側に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はないが、付近には同様の溝跡であるOSD02・04がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東端は調査区内で収束するが、西端は調査区外へ続く。検出長は1.1m、上幅は40cmである。深さは30cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ甕、須恵器杯などの細片がわずかに出土している(28g)。時期は、混入の可能性があるが出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

## OSD04 (第246・247図)

O区の北側に位置する溝跡である。OSI01竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しいと判断した。また、付近には同様の溝跡であるOSD02・03がある。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。西端は調査区内で収束するが、東端は調査区外へ続く。検出長は1.9m、上幅は0.5mである。深さは22cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。OSD03と04は一連の溝跡であり、幅1.2mの開口部分とみることもできる。遺物は、土師器非ロクロ甕、須恵器杯などの細片がわずかに出土している(22g)。時期は出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

## OSD05 (第247・262・269図)

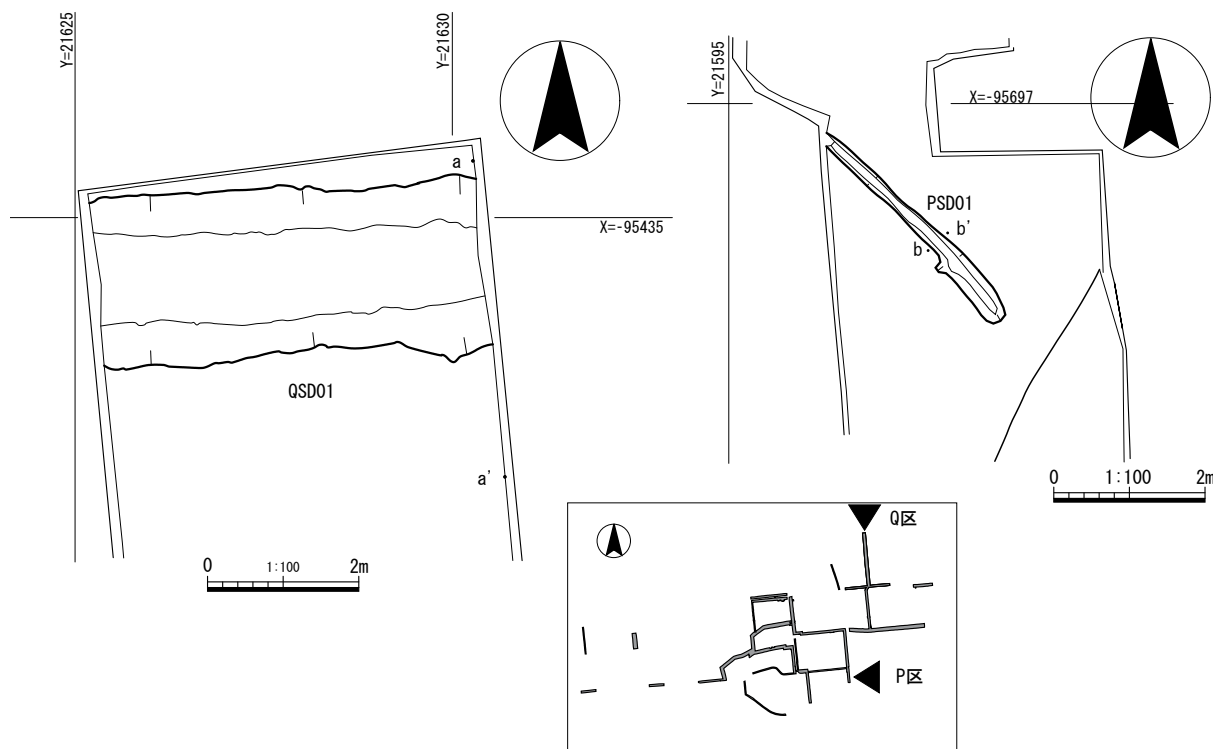
O区の南端に位置する溝跡である。OSD06溝跡と重複し、本遺構の方が古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端とも調査区外へ続くと推定される。検出長は3.4m、上幅は1.5mである。深さは55cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は4つに細分でき、黒褐色や黒色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器の非ロクロ調整の杯(285・286)・ロクロ調整の杯、非ロクロ甕、鉢(287)、須恵器杯・甕などの細片、縄文土器片、石鏃(392・393)、石器の剥片や台石や磨石などの礫石器が出土している(6.1kg)。時期は、最も新しい時代の出土遺物を重視すると、漆町IV期(平安時代)に位置づけられる可能性がある。

## OSD06 (第247・269図)

O区の南側に位置する溝跡である。OSD05溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向(西側)から南北方向(中央)に変化するもので、L字状に屈曲している。西端は調査区外へ続くと推定され、南端はOSD05上で削平のため消失している。検出長は4.2m、上幅は0.4mである。深さは10~22cm程度である。断面形はU字状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器ロクロ杯(非内黒)片や台石や敲石、磨石(394・395)などの礫石器、縄文土器の細片が出土している(計4.83kg)。時期は、最も新しい時代の出土遺物から、漆町IV期(平安時代)に位置づけられる可能性がある。

## PSD01 (第248・252図)

P区の北側に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向で、ほぼ直線的に延びている。北端は調査区外へ続くと推定されるが、南東端は調査区内で収束している。検出長は3.3m、上幅は30cmである。



第248図 溝跡28 P区1・Q区1

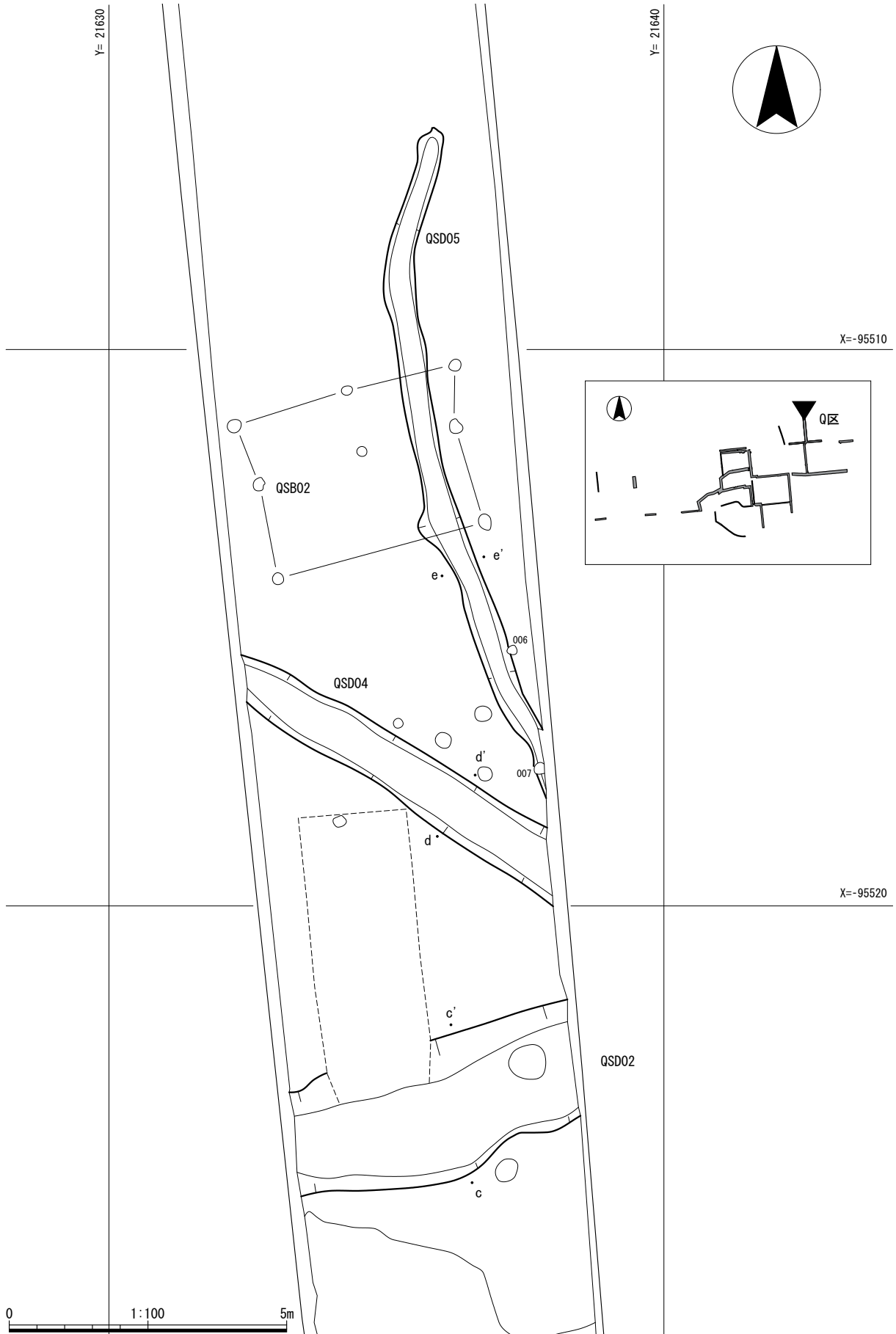
深さは10cm程度である。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。したがって、時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### QSD01 (第248・252・262・268・269図)

Q区の北端に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であり、ほぼ直線的に延びている。東西両端は調査区外へ続く。検出長は5.0m、上幅は2.2mである。深さは58cm程度である。断面形はU字状を呈する。堆積土は6つに細分でき、黒褐色を呈するシルトや砂質シルトが主体である。遺物は、土師器甕（非ロクロ調整）片、須恵器の細片、常滑甕片（315）、渥美甕片（316）、石錐片（396）、砥石（398）、近世陶器（383）、近世染付磁器（384～386）、近代の醤油瓶と考えられる陶器（382）、ガラス片などが出土している（3.5kg）。時期は、最も新しい時代の出土遺物から、近代に位置づけられる。

#### QSD02 (第249・252・262・263・269図)

Q区の中央に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、東西方向であるが、やや北に偏している。東西両端は調査区外へ続く。検出長は5.2m、上幅は2.5mである。深さは30cm程度である。断面形は皿形を呈する。堆積土は2つに細分でき、黒褐色を呈するシルトや暗褐色砂質シルトが主体である。遺物は、土師器杯（ロクロ調整）や甕（ロクロ調整）の細片、高杯片（294）、手づくねかわらけ（288・290～293）、須恵器大甕片、壺類の底部片（295）、中国産青白磁碗片（387）、常滑甕片（317～320・322）、渥美甕片（321）、スクレイパー（397）、黒曜石の剥片などが出土している（計2.65kg）。時期は、出土遺物からみると、



第249図 溝跡29 Q区2

平安時代（12世紀代を含む）に位置づけられる可能性がある。

#### QSD04（第249・252図）

Q区の中央に位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、ほぼ直線的に延びる。東西両端は調査区外へ続く。検出長は6.4m、上幅は1.1mである。深さは15cm程度である。断面形は皿形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器杯（非ロクロ調整）や甕（非ロクロ調整）の細片が少量出土する（計391g）。時期は、出土遺物だけで判断すると、奈良時代の可能性がある。

#### QSD05（第249・252図）

Q区の中央に位置する溝跡である。調査区内ではQSB02、QP006・007と重複し、後者よりは古く、前者とは不明である。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、およそ南北方向であるが、東に向かってゆるやかな弧状を呈する。南端は調査区外へ続くが、北端側は調査区内で収束する。検出長は、直線距離で11.5m、上幅は60cmである。深さは10cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ甕片などがわずかに出土している（計44g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### QSD06（第250・252図）

Q区の中央北寄りに位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であり、ほぼ直線的に延びている。北東端は調査区外へ続くが、南西端は調査区内で収束する。検出長は10.4m、上幅は50cmである。深さは12cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ甕の細片がわずかに出土している（計20g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### QSD07（第250・252図）

Q区の中央北寄りに位置する溝跡である。調査区内では重複する遺構はない。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北東から南西方向であるが、弧状に湾曲しながら延びている。北東端・南西端ともに調査区外へ続く。調査区中央付近では、二又に短く分岐する。検出長は、直線距離で12m、上幅は最大で1.5mである。深さは10cm程度である。断面形は皿形を呈する。堆積土は単層であり、灰黄褐色を呈する砂質シルトである。遺物は、土師器・須恵器の細片や近代の磁器などがわずかに出土している（計64g）。時期は、最も新しい時代の出土遺物から、近代に位置づけられよう。

#### RSD01（第251・252・264図）

R区の東端に位置する溝跡である。SSD03溝跡と重複し、本遺構の方が古い。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、南北方向であり、ほぼ直線的に延びている。南端は調査区外へ続くが、北端は重複により不明である。検出長は2.5m、上幅は0.7mである。深さは28cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、



第250図 溝跡30 Q区3

土師器甕などの細片、常滑甕片（323・324）、石器の剥片が出土するのみである（計138g）。時期は、少ない出土遺物からみると、平安時代（12世紀を含む）のなかに位置づけられる可能性がある。

#### RSD02（第251・252図）

R区の中央に位置する溝跡である。RSX02竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、ほぼ直線的に延びている。南北端とも調査区外へ続いている。検出長は3.8m、上幅は0.6mである。深さは12cmである。断面形はややいびつな逆台形状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器甕（非ロクロ）などの細片がわずかに出土するのみである（計97g）。時期は、出土遺物が少なく判断できないため不明とする。

#### RSD03（第251図）

R区の東端からU区北端に位置する溝跡である。調査区内で重複する遺構はない。検出は現耕作土や道路盛土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、南北方向であり、ほぼ直線的に延びている。北端は調査区内で収束し、南端（U区側）は削平によって確認できない。検出長は5.2m、上幅は1.2mである。深さは6cm程度である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土するのみである（計11.4g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明とする。

#### SSD02（第251・252図）

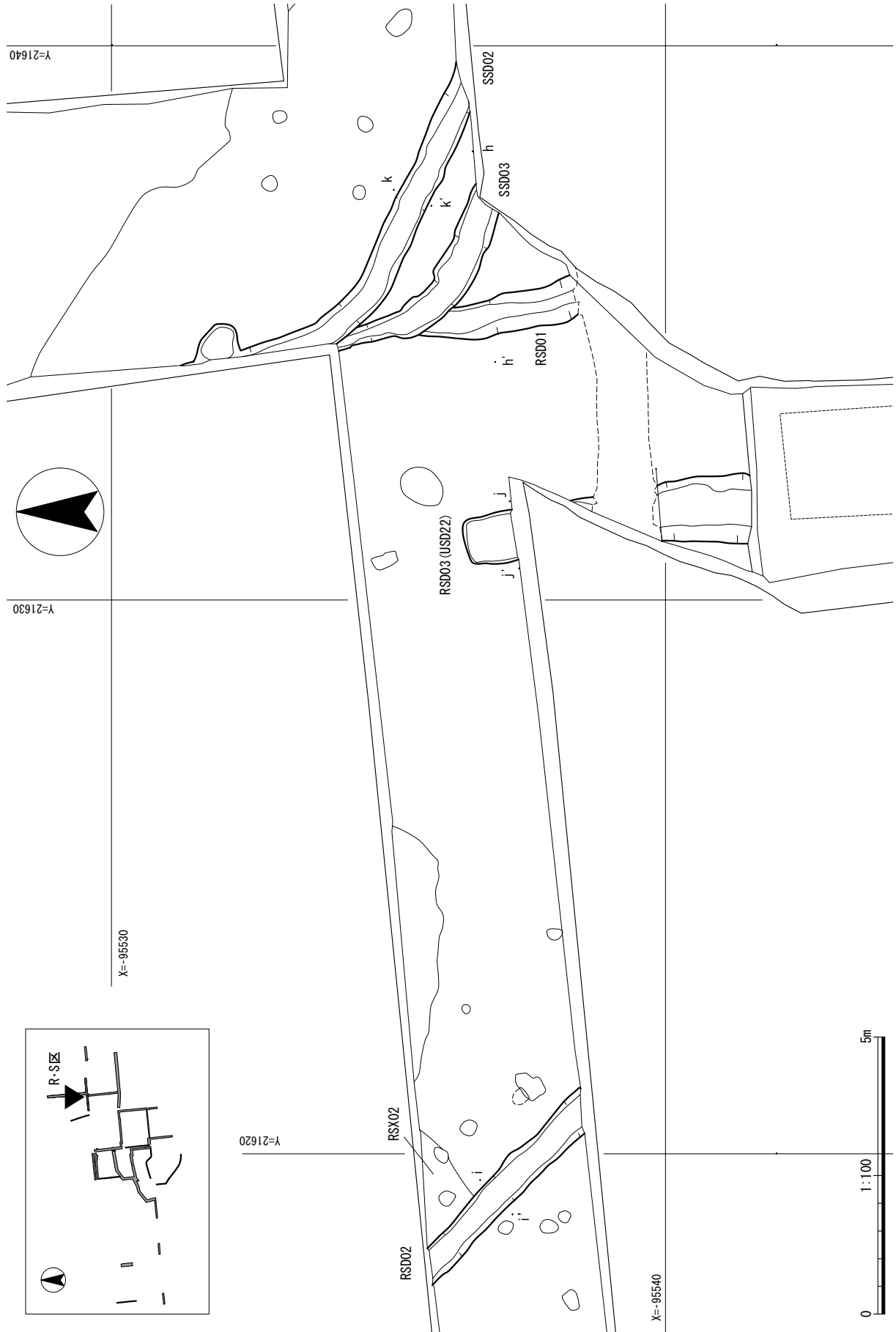
S区の西端に位置する溝跡である。SSD03溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、南側に湾曲しながら延びている。南東端・北西端ともに調査区外へ続く。検出長は、直線距離で7.2m、上幅は0.5mである。深さは20cm程度である。断面形は箱形を呈する。堆積土は5つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器の細片や須恵器甕片などがわずかに出土している（計83g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明とする。

#### SSD03（第251・252図）

S区の西端に位置する溝跡である。SSD02・RSD01溝跡と重複し、前者よりも古く、後者より新しい。検出は現耕作土であるI層除去後のIV層面で行った。溝の方向は、北西から南東方向であり、南側に湾曲しながら延びている。南東端は調査区外へ続くが、北西端は重複のため確認できない。検出長は、直線距離で3.8m、上幅は0.6mである。深さは30cm程度である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は単層であり、黒色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土するのみである（計1.6g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

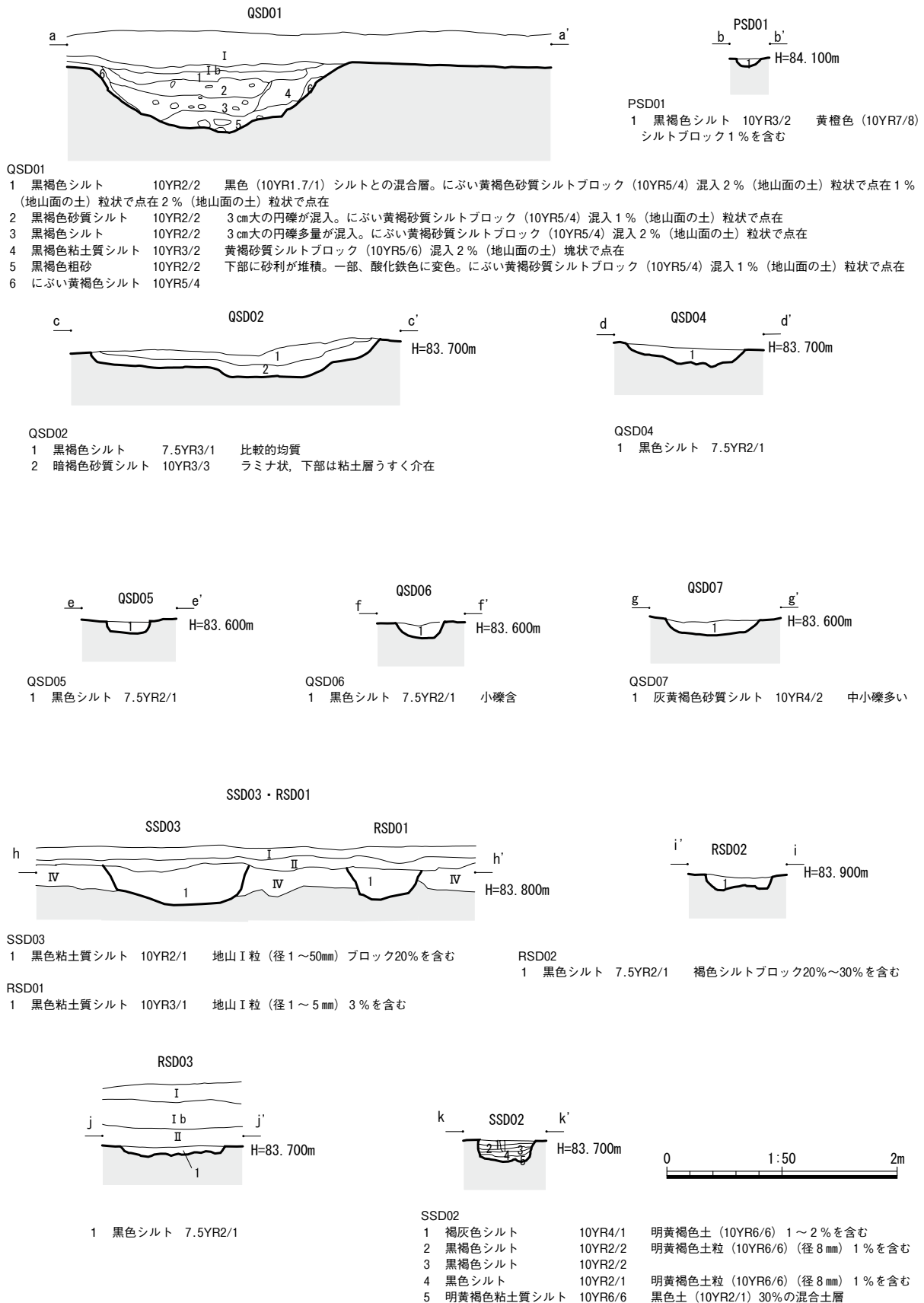
#### USD01（第253・256図）

U区南側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USB01と重複しているが、新旧関係は不明である。溝の方向は南西から北東へほぼ直線的に延び、両端とも調査区外へ続く。底面の高さはほぼ平坦であり、流路方向は不明である。調査区内での規模は、長さが4.4m、上幅が南西側の調査区際で0.44m、北東側の調査区際で1.32mである。南西から北東に向けて次第に広がっている。断面



第251図 溝跡31 R区1・S区1





第252図 P区2・Q区4・R区2・S区2

形は皿状を呈し、深さは検出面から11cmである。堆積土はIV層（地山）由来のシルトが粒状に混じる暗褐色シルトの単層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである（計38g）。時期は、遺物が少なく、明確に判断することができないことから不明とする。（鈴木）

#### USD02（第253・256図）

U区中央付近に位置する溝跡である。検出はIV層上面で、重複する遺構はない。溝の方向は東西方向で、直線的に延びる。両端とも調査区外へ続く。検出長が3.4m、上幅が最大で0.9mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から10cmである。堆積土はIV層（地山）由来のシルトが粒状に混じる暗褐色シルトの単層である。遺物は土師器の細片が少量出土している（計45.3g）。時期は、古代の可能性はあるが明確ではない。（鈴木）

#### USD03（第254・256図）

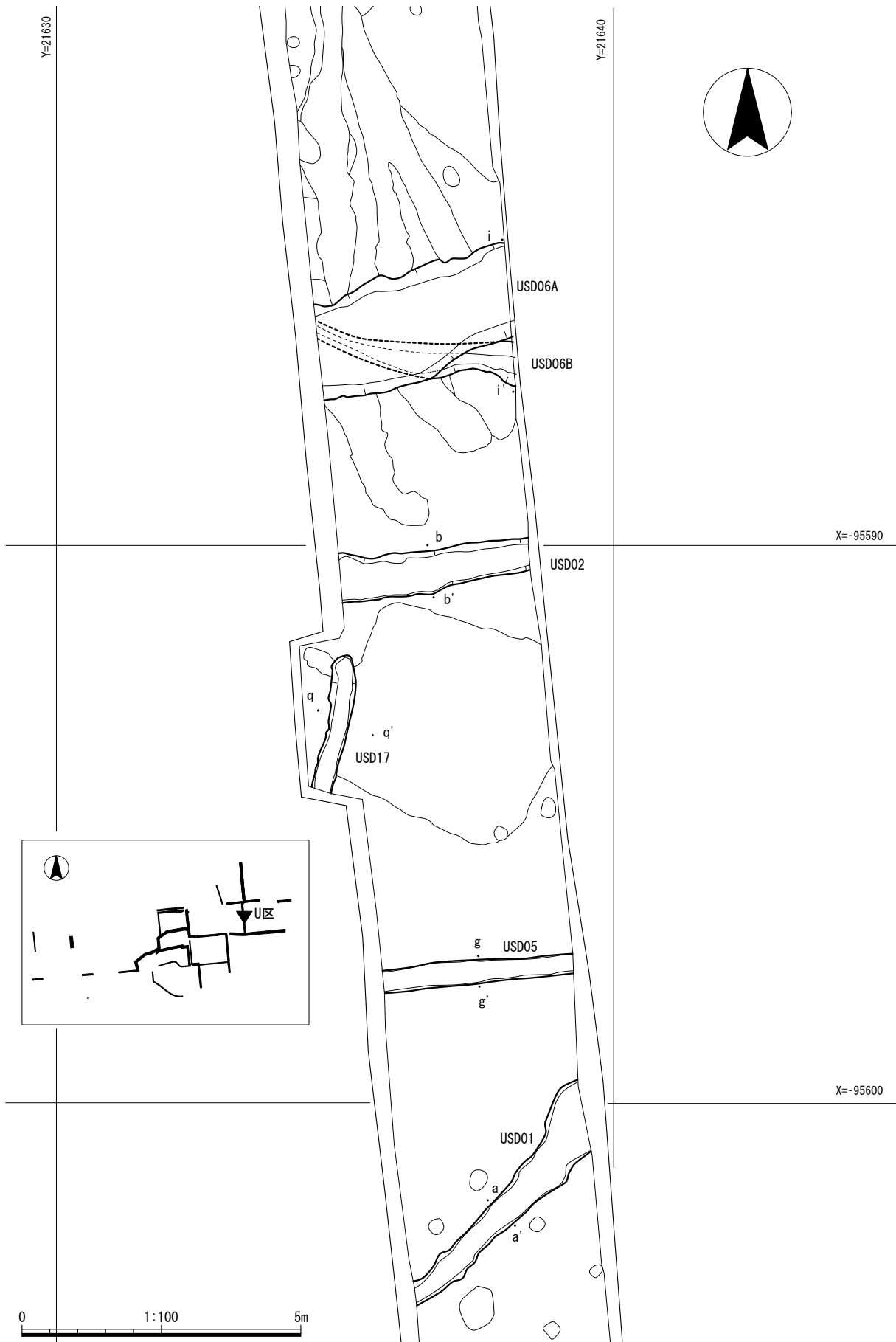
U区中央に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。調査区内を南北に縦断しているため、非常に多くの遺構と重複しているが、USD06・08・09、USK06・07が本遺構よりも新しく、それ以外は古い遺構と考えられる。溝の方向は、前記のとおり北から南にほぼ直線的である。南端は調査区内で途切れており、さらに続くか不明である。北端は試掘トレンチにより削平されており、この北側に位置するUSD11溝跡までつながる可能性がある。調査区内での規模は、検出長が19m、上幅が最大で0.9mである。断面形は概ね皿状を呈し、深さは南側で検出面から10cm前後、北側で15cm前後である。堆積土は4層に分層でき、南側は黒褐色粘質シルトが主体で、北側は褐灰色シルトが主体となる。遺物は、土師器や須恵器の細片が出土するのみである（計73.3g）。時期は、重複関係や出土遺物から古代のなかに位置づけられる可能性がある。（鈴木）

#### USD05（第253・256図）

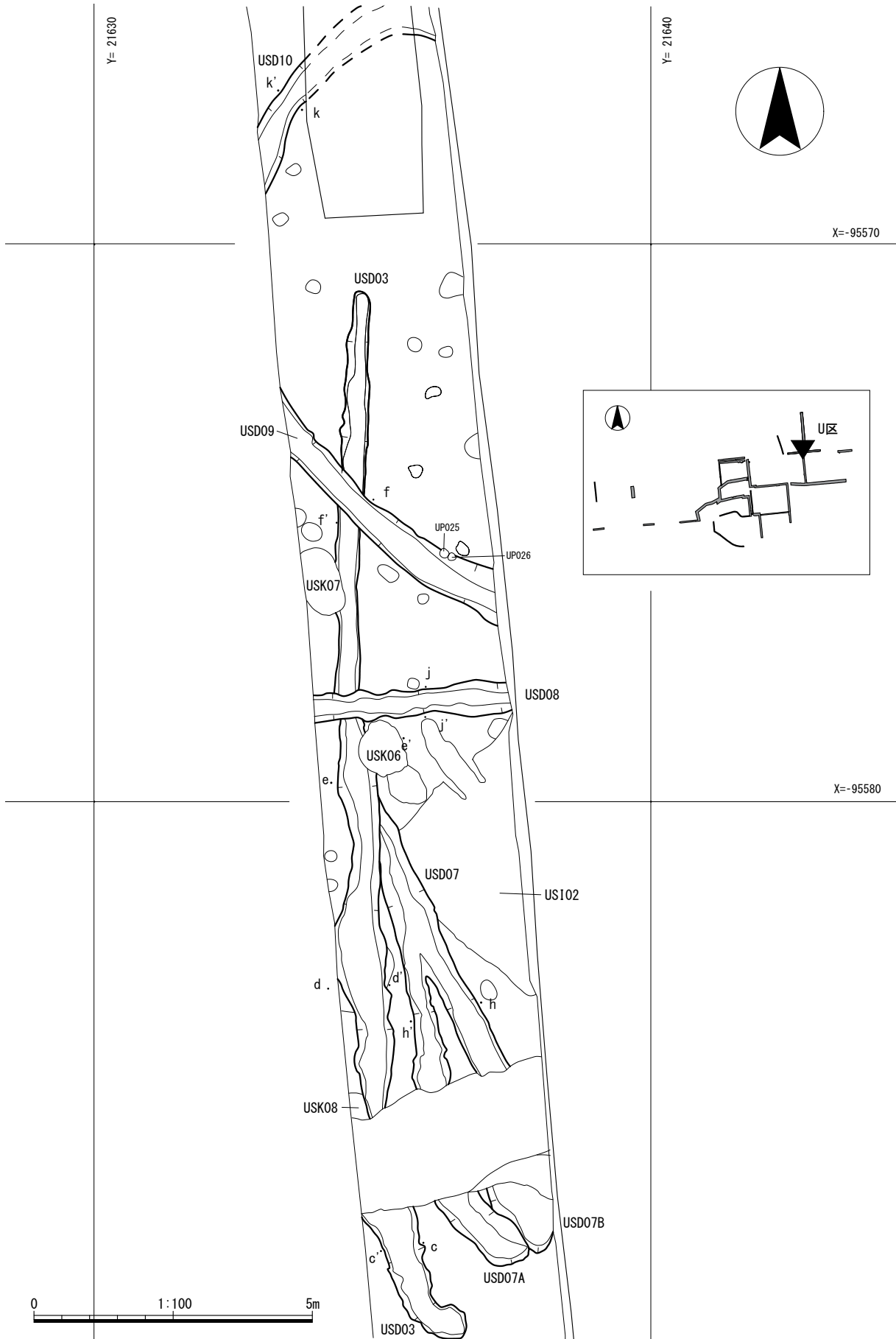
U区の南側に位置する溝跡である。検出はIV層上面で、重複する遺構はない。溝の方向は東西に直線的で、両端とも調査区外へ続いていく。調査区内での規模は、検出長が3.4m、上幅が最大で0.45mである。断面形は箱形を呈し、深さは検出面から12cmである。堆積土は褐色粘質シルトが主体の単層で、IV層（地山）由来の明黄褐色シルトが塊状に多く混じる。遺物は出土していない。時期は、判断する根拠がないため不明である。（鈴木）

#### USD06（A・B）（第253・256・264・268図）

U区の中央に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD03・07溝跡、USK08土坑と重複しており、本遺構がもっとも新しい。また、当初は1つの遺構と認識して掘り下げを行ったが、調査区際の断面観察により本遺構は2条の溝がほぼ並行している遺構であることを確認した。以下、上幅の広い溝をUSD06A、狭い溝をUSD06Bとする。両遺構の新旧関係は、USD06Aの方が新しい。溝の方向はUSD06Aが北東から南西、USD06Bが北西から南東で、いずれも調査区外へ延びる。調査区内での規模は、長さは共に3.6m、上幅はUSD06Aが最大で2m、USD06Bが最大で0.7mである。断面形はUSD06Aが皿状、USD06BがU字状を呈し、深さはともに検出面から25cmである。堆積土はそれぞれ2層に細分できる。USD06Aはにぶい黄褐色シルトが主体で、黒色シルトが三角堆積状に堆積する。USD06Bは灰黄褐色シルトが主体で、黒褐色シルトが三角堆積状に堆積する。遺物は、土師器・須恵器の細片や須恵器系陶器片（301・302・304）、近世の染付磁器（388）、近代の陶器や磁器が出土



第253図 溝跡33 U区1



第254図 溝跡34 U区2

している（計226g）。時期は、もっとも新しい遺物からみると、近代に位置づけられる。（鈴木）

#### USD07（第254・256・262図）

U区の中央付近に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USI02竪穴建物跡、USD03・06A・06B溝跡と重複しており、USI02より新しく、USD03・USD06A・Bより古い。溝の方向は北西から南東に直線的であるが、USI02とUSD06A・Bとの間で2条に分かれる。検出時は2条の溝と認識していたが、合流地点において、平面と断面のいずれでも切りあいが確認できなかったことから同一の溝とした。北西側はUSD03により削平されている。また、南東側はUSD06A・Bの南側で途切れているため、それ以南に延びるか不明である。底面の高さは、北西側が若干低くなっており、南東から北西方向の流路が想定される。調査区内での規模は、検出長8m、上幅は最大で87cmである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から12cmである。堆積土は、西側が黒褐色シルト、東側が明黄褐色粘質シルト、USI02との重複部分では褐色シルトが主体となり、いずれも単層である。遺物は土師器甕の底部片（296・297）やその他の細片がわずかに出土している（計67.6g）。時期は、重複関係や出土遺物から、古代のなかに位置づけられる。（鈴木）

#### USD08（第254・256図）

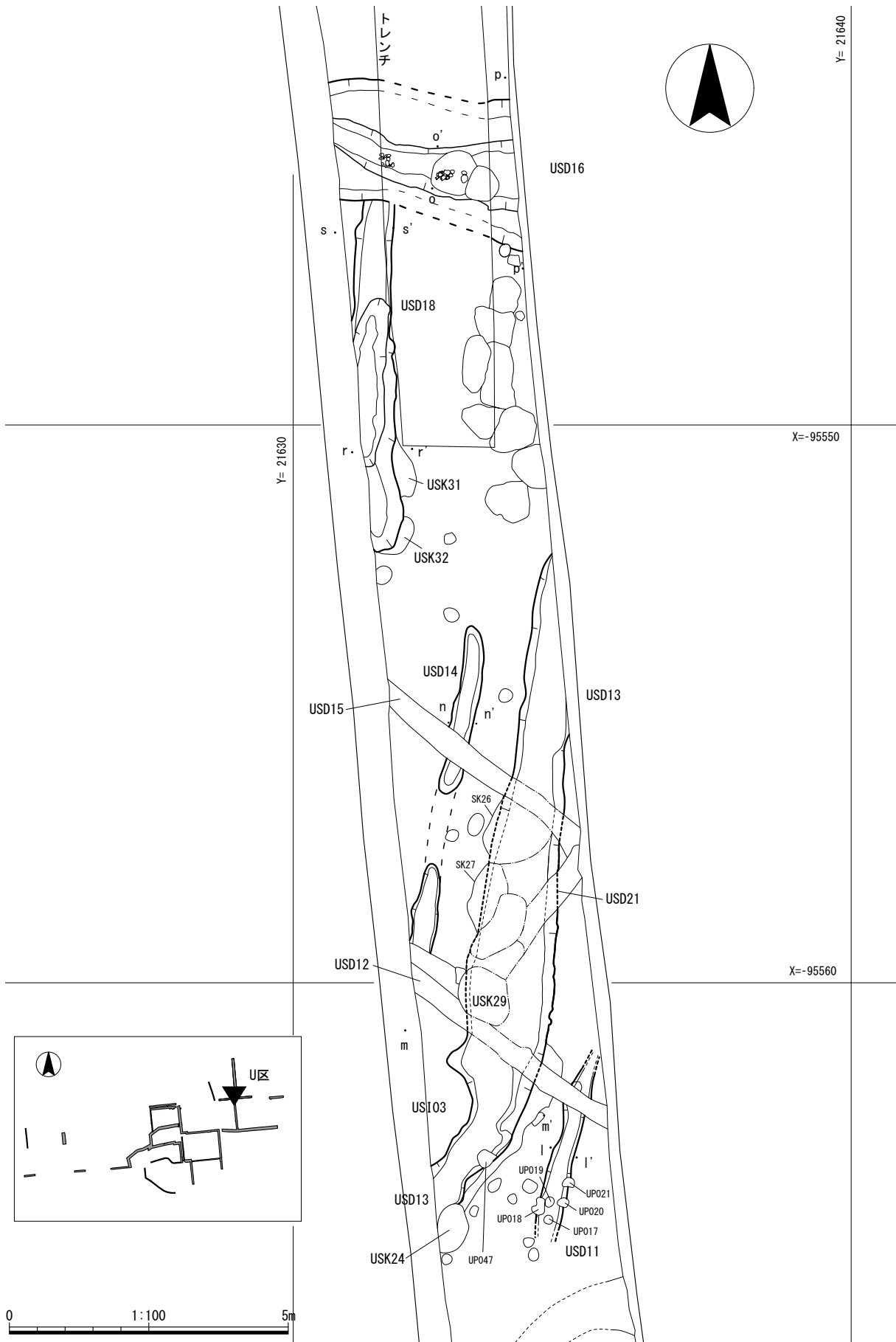
U区の中央付近に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD03溝跡と重複しており、本遺構が新しい。溝の方向は東から西に直線的で、両端とも調査区外へ延びる。調査区内での規模は、長さ3.5m、上幅は最大で0.67mである。断面形は浅いU字形を呈し、深さは検出面から13cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器ロクロ調整の杯などの細片がわずかに出土する（11.9g）。時期は、出土遺物が少なく判断できないため、不明である。（鈴木）

#### USD09（第254・256図）

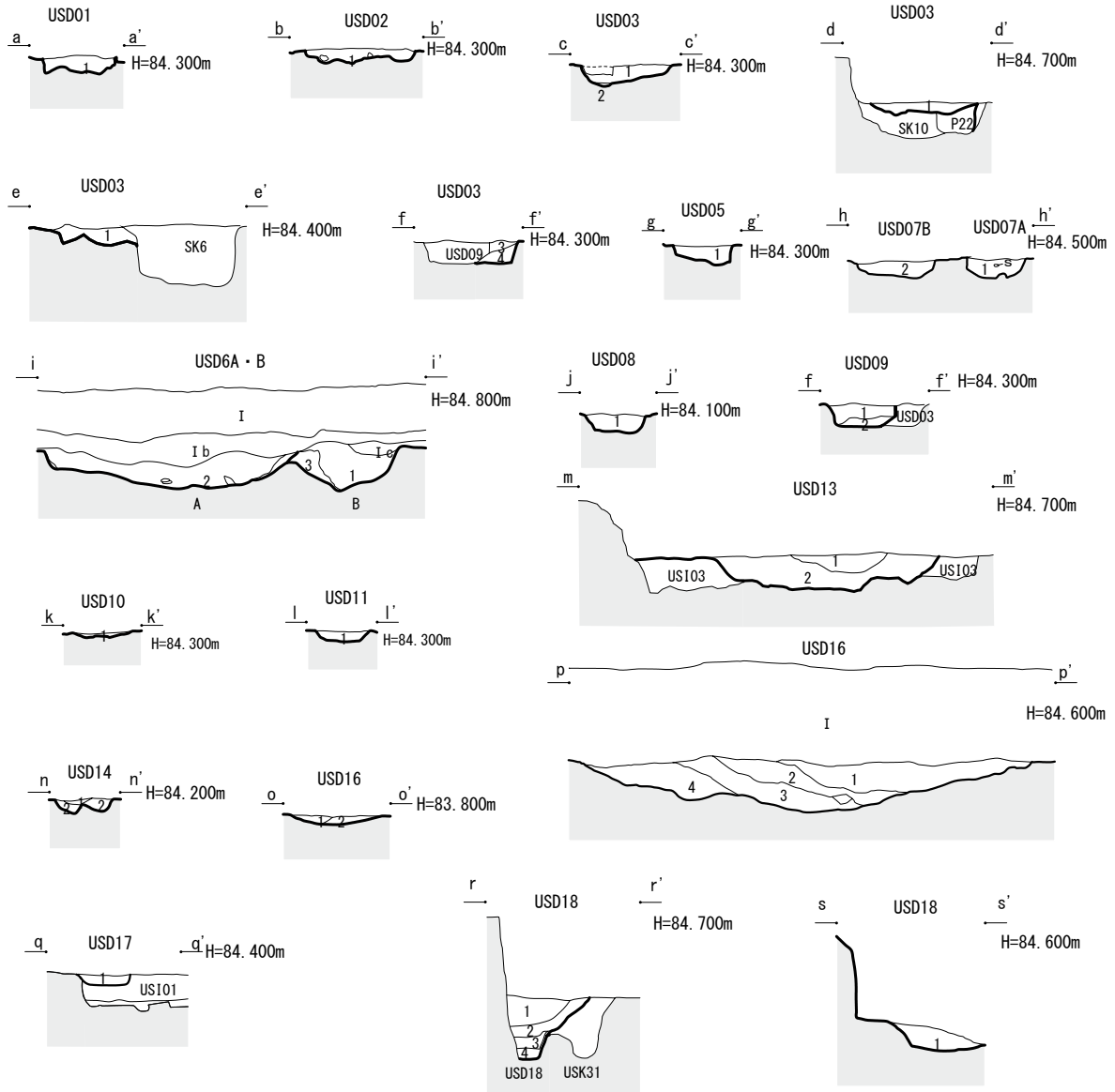
U区の中央やや北寄りに位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD03溝跡、UP025・026柱穴と重複しており、USD03より新しく、UP025・026より古い。溝の方向は北西から南東で、緩く湾曲しており、両端とも調査区外へ続く。底面の高さは、北西側が約10cm高いことから、北西から南東へ向かう流路が想定される。調査区内での規模は、長さ5m、上幅が最大で0.94mである。断面形は浅い箱形を呈し、検出面からの深さは18cmである。堆積土は上層がIV層（地山）由来の黄橙色シルト粒をわずかに含む黒褐色シルト、下層がIV層（地山）由来の黄橙色シルト塊が多く混じる黒褐色シルトである。遺物は土師器の細片のみが出土している（計16.3g）時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。（鈴木）

#### USD10（第254・256図）

U区の中央やや北寄りに位置する溝跡である。検出はIV層上面である。重複する遺構はないが、本遺構の中央は試掘トレンチにより削平されており、検出できなかった。溝の方向は南西から北東で緩く湾曲しており、両端とも調査区外へ延びる。調査区内での規模は、長さ4.3m、上幅が最大で0.96mである。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは7cmである。確認できた堆積土はIV層（地山）由来の黄橙色シルト粒をわずかに含む黒褐色シルトの単層である。遺構の遺存状況は悪い。遺物は出土しておらず、したがって、時期も不明である。（鈴木）



第255図 溝跡35 U区3



USD01	1	暗褐色シルト	10YR3/3	地山ブロック (径10mm) 10%を含む
USD02	1	暗褐色シルト	10YR3/3	地山ブロック1%を含む
USD03	1	黒褐色粘土質シルト	10YR2/2	地山ブロック1%を含む
	2	褐灰色粘土質シルト	5YR5/1	地山ブロック1%を含む
	3	褐灰色シルト	10YR4/1	黄橙色シルト (10YR7/6) ブロック3%を含む
	4	黄橙色シルト	10YR7/6	黒褐色シルト (10YR3/1) ブロック1%を含む
USD05	1	明黄褐色粘土質シルト	10YR6/6	褐色シルト (10YR4/4) との混合 (6 : 4)
	2	灰黄褐色粘土質シルト	10YR5/2	地山ブロック1% (SD 6 B)
USD06	1	にぶい黄褐色シルト	10YR5/4	地山ブロック1% (SD 6 A)
	2	黒褐色シルト	10YR3/1	灰黄褐色ブロック2%を含む
	3	黒褐色シルト	10YR2/2	シルト地山ブロック3%を含む
USD07 A	1	黒褐色シルト	10YR2/2	褐色粘土質シルト (10YR4/4) との混合 (6 : 4)
USD07 B	2	明黄褐色粘土質シルト	10YR6/6	地山ブロック15%を含む
USD08	1	黒褐色シルト	10YR2/3	黄橙色シルトブロック1%を含む
	2	黒褐色シルト	10YR3/1	黒褐色 (10YR3/1) ブロック5%を含む
USD09	1	黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色シルトブロック1%を含む
	2	黄橙色シルト	10YR7/6	地山土粒 (径10mm) 3%を含む
USD10	1	黒褐色シルト	10YR3/1	地山土粒 (径2mm) 10%を含む
	2	黒褐色シルト	10YR2/1	黒色土 (7.5YR1.7/1) 5%を含む
USD11	1	黒褐色シルト	10YR2/1	地山土粒 (径10mm) 3%を含む
	2	明黄褐色シルト	10YR6/8	黒褐色土 (7.5YR3/1) 3%を含む
USD13	1	黒色シルト	7.5YR1.7/1	地山土粒 (径1~10mm) 15%を含む
	2	明黄褐色シルト	10YR6/8	褐色土ブロック (10YR4/4) 5%を含む
	3	黒褐色シルト	10YR2/2	地山土粒 (径1~5mm) 10%、炭化物粒 (径10mm) 3%を含む
	4	黒褐色シルト	10YR2/2	地山土粒 (径1~5mm) 10%、地山ブロック (径20mm) 1%、炭化物粒 (径1mm) 1%を含む
USD14	1	黒褐色シルト	10YR2/3	黄橙色 (10YR7/8) シルト粒1%を含む
	2	明黄褐色シルト	10YR6/8	地山土粒 (径1~5mm) 3%を含む
USD16	1	黒褐色シルト	10YR2/2	炭化物 (径10mm) 1%、地山土粒 (径1~5mm) 5%を含む
	2	黒褐色シルト	10YR2/3	地山ブロック (径100mm) 15%を含む
	3	黒褐色シルト	10YR2/2	黒色土 (7.5YR1.7/1) 3%を含む
	4	黒褐色シルト	10YR2/3	
USD17	1	黒褐色シルト	10YR2/3	
USD18	1	黒色シルト	7.5YR1.7/1	
	2	黒色シルト	7.5YR1.7/1	
	3	灰黄褐色粘土質シルト	10YR4/2	
	4	明黄褐色シルト	10YR6/8	

第256図 溝跡36 U区4

## USD11 (第255・256図)

U区の北側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD12溝跡、UP017～021柱穴と重複しており、いずれよりも古い。溝の方向は北東から南西にはほぼ直線的である。南側は試掘トレンチにより削平されており、以南の状況は不明である。また、北側でも上部は削平されていると推定され、途中で消滅している。調査区内での規模は、長さ2.8m、上幅は最大で0.45mである。断面形は浅い逆台形状を呈し、検出面からの深さは8cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層で、IV層(地山)由来のシルト粒が少量混じる。遺物は出土しておらず、したがって時期も不明である。(鈴木)

## USD13 (第255・256・264・270図)

U区の北側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USI03竪穴建物跡をはじめ、非常に多くの遺構と重複しているが、本遺構よりも新しいものはUSK24土坑とUP47柱穴のみである。溝の方向は北東から南西にはほぼ直線的であり、両端とも調査区外へ延びる。調査区内での規模は、長さ10m、上幅が最大で1.7mである。断面形は皿状から逆台形状を呈し、検出面からの深さは、22～24cmである。堆積土は黒色シルトを主体とし、下層ではIV層(地山)由来の明黄褐色シルト粒がやや多く混じる傾向が見受けられる。全体的には自然堆積の様相を呈する。遺物は、土師器非ロクロ甕や須恵器甕などの細片、常滑広口壺口縁部片(325)、甕類の頸部片(326)、須恵器系陶器大甕片(270)、鉄製縁金具片(306)、スクレイパー(399・400)が出土している(計266.6g)。時期は、出土遺物や重複関係などから、12世紀代のなかに位置づけられる可能性がある。(鈴木)

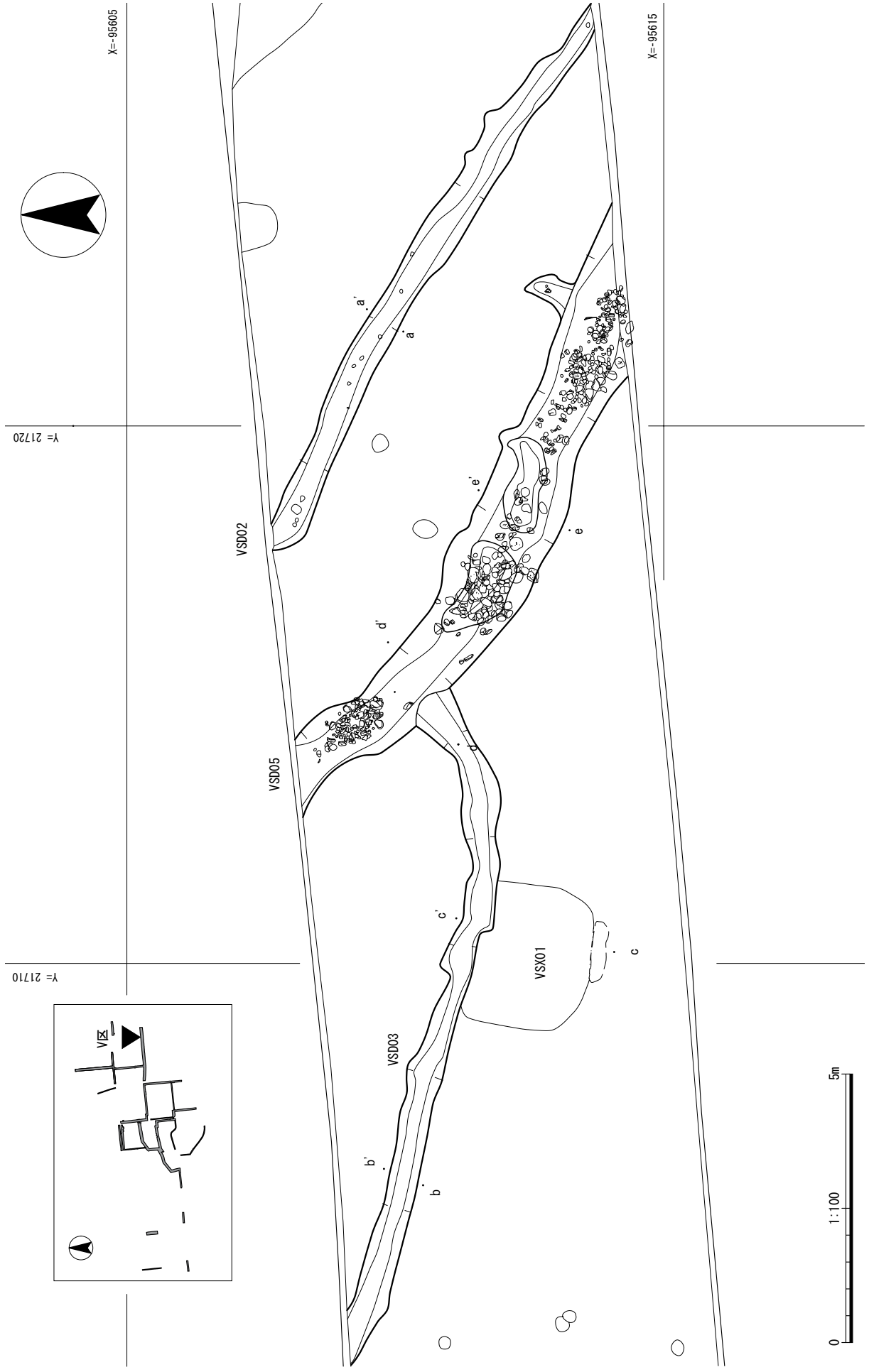
## USD14 (第255・256図)

U区の北側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD15溝跡、USI03竪穴建物跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。溝の方向は北東から南西にはほぼ直線的であり、南端はUSI03により削平されている。北端は調査区内で収束しているものと推定される。なお、USD15とUSI03との間で一部途切れるが、北側と南側の溝では堆積土に大きな相違がないことや、軸方向が同じであることから、両者を同一の遺構と判断している。底面の高さは、南側が若干高いことから、南から北への流路が想定される。調査区内での規模は、長さ5.8m、上幅が最大で0.5mである。断面形は中央がふくらんだ皿状を呈し、検出面からの深さは5cmと非常に浅い。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、漆町I期以前と想定できる。(鈴木)

## USD16 (第255・256・264図)

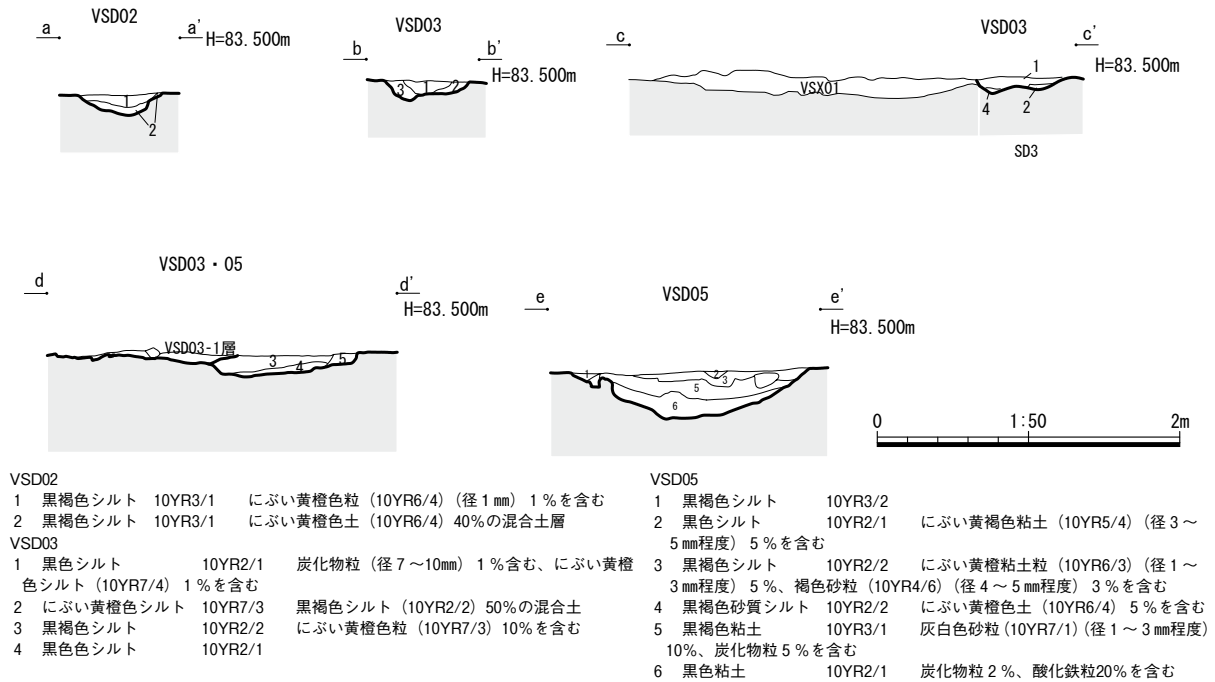
U区の北端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD18溝跡と重複しており、本遺構が新しい。また、本遺構の中央部は試掘トレンチにより上部が削平されており、遺存状況は悪い。溝の方向は、東から西に直線的であり、両端とも調査区外へ続く。調査区内での規模は、長さ3.3m、上幅が最大で2.2mである。断面形は概ね皿状を呈するが、溝の中央付近が一段下がる部分がある。検出面からの深さは35cmである。堆積土は4層に分層でき、黒褐色シルトが主体となる。土坑状に一段下がる部分では、一部に砂層とシルトのラミナ状堆積が認められ、水性堆積の様相を呈する。埋土下層から、土師器非ロクロ杯や甕片、須恵器甕片かわらけ片、常滑産陶器片(327～331)、渥美産陶器片(332～334)、台石などが出土しており(計3.09kg)、その年代観から12世紀代の遺構と考えられる。(鈴木)





第257図 溝跡37 V区1

### 3 遺構と遺物



第258図 溝跡38 V区2

#### USD17 (第253・256図)

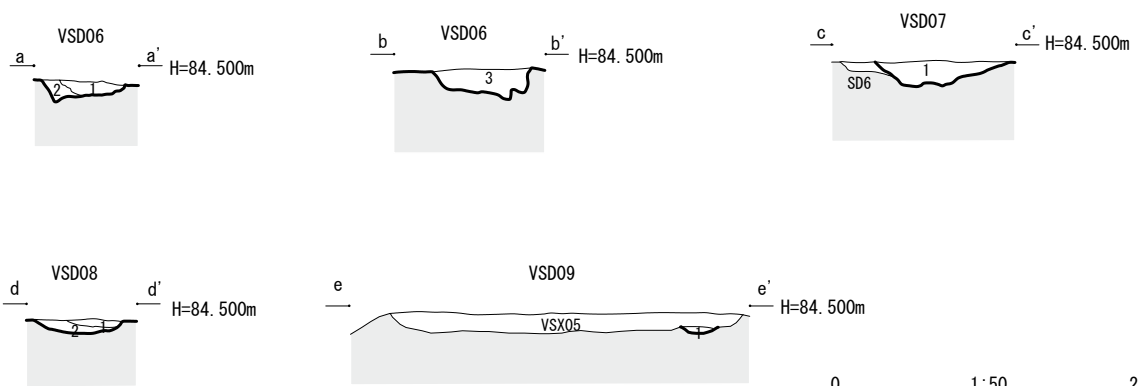
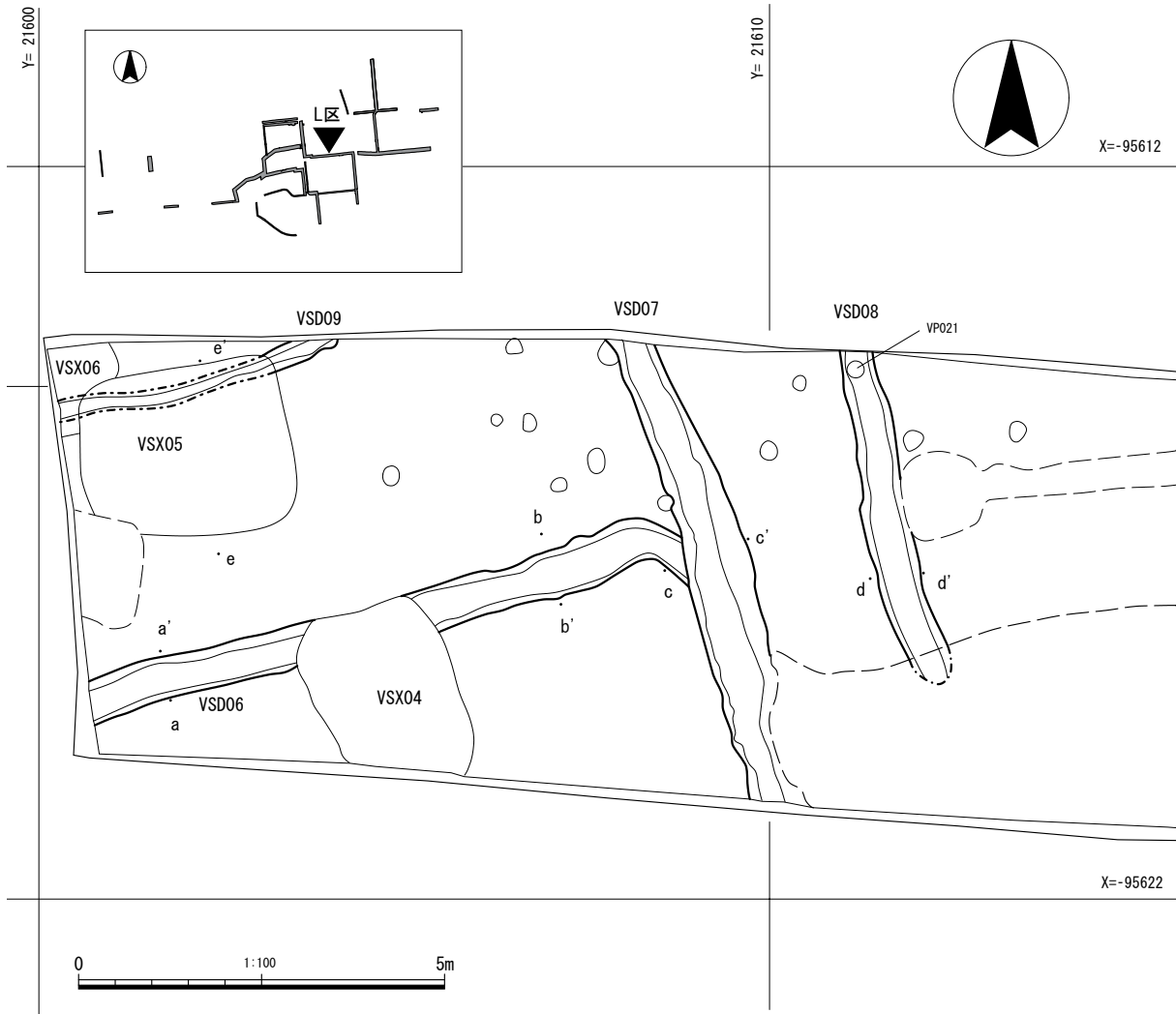
U区の南側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USI01竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が新しい。溝の方向は、北東から南西に直線的であり、南西側は調査区外へ続き、北東端は調査区内で収束する。底面の高さは南側が約5cm高いことから、南から北への流路が想定される。調査区内での規模は、長さ2.5m、上幅が最大で0.44mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは7cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、漆町II期以降となる。(鈴木)

#### USD18 (第255・256図)

U区の北端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。USD16溝跡、USK31・32土坑と重複しており、USD16より古く、USK31・32より新しい。溝の方向は南から北に直線的であり、北側はUSD16により削平されている。南端は調査区外へ続くと推定される。底面の高さは南側と北側で大きな差はないが、中央部分では底面に落ち込みがみられる。調査区内での規模は、長さ6.3m、上幅が最大で0.65mである。断面形はおおむね皿状を呈すが、落ち込み部分はU字形を呈する。検出面からの深さは20cmであるが、落ち込み部分では43cmである。堆積土は黒色シルトが主体であり、北側の一部では灰黄褐色粘土質シルトがラミナ状に堆積している。また、落ち込み部分の堆積は、IV層(地山)由来の明黄褐色シルト塊が多く混じる。遺物は土師器の細片のみが出土している。時期は、重複関係から、古代のなかに位置づけられる。(鈴木)

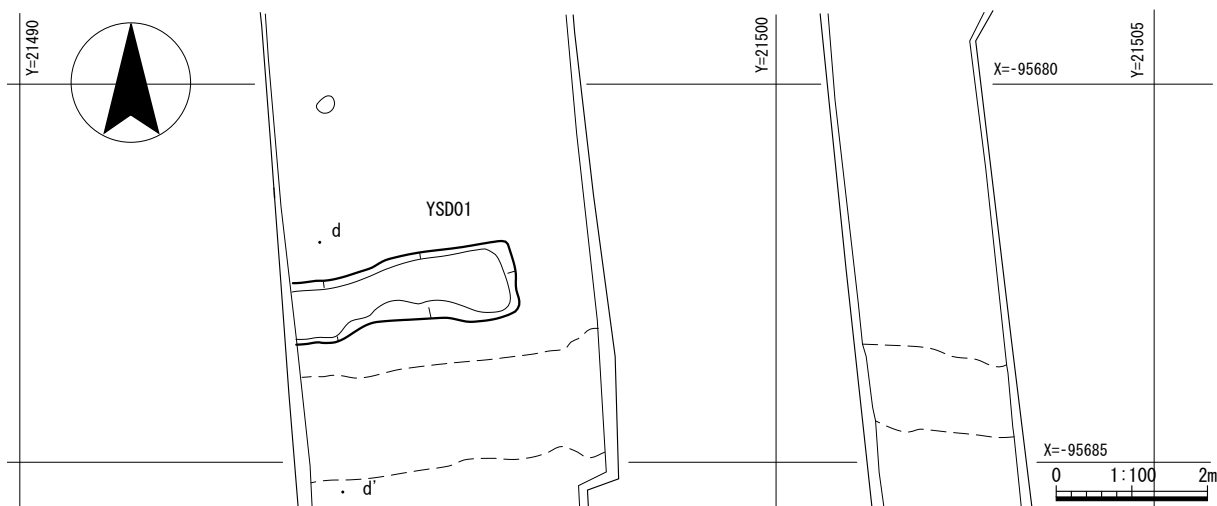
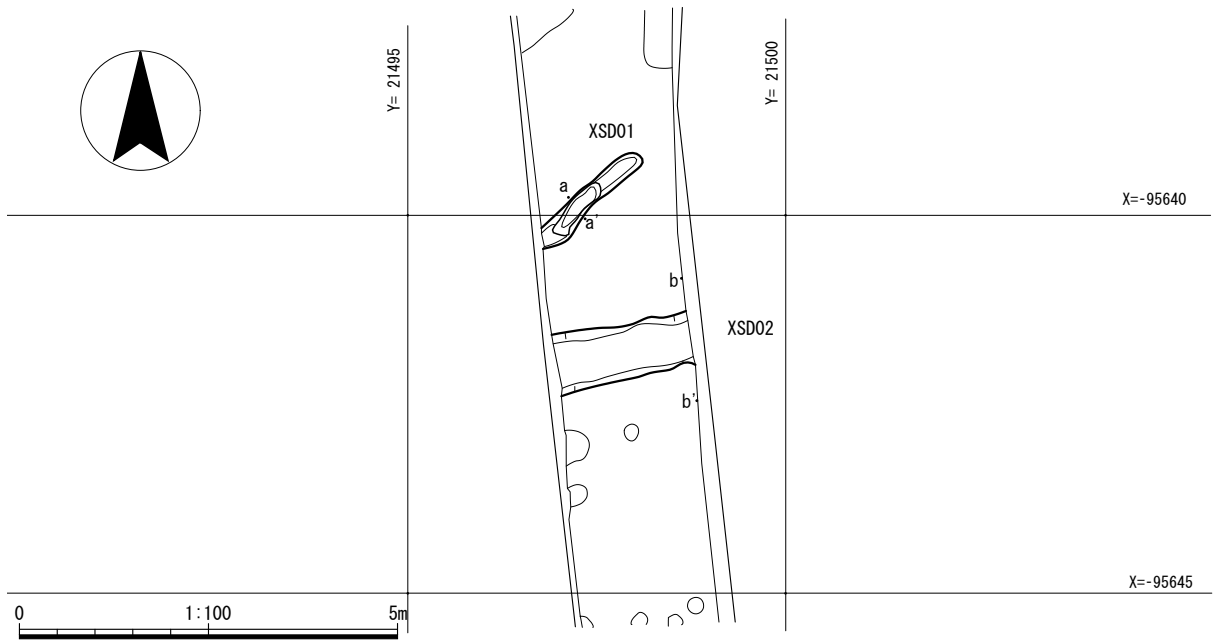
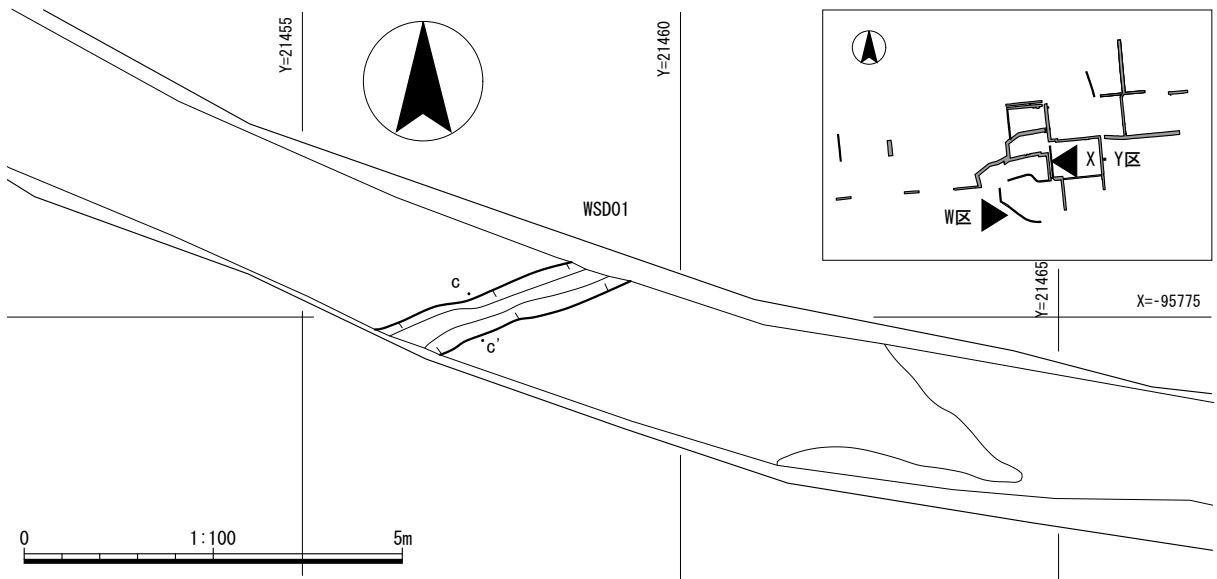
#### VSD02 (第257・258・264図)

V区の東側に位置する溝跡である。検出はIV層上面で、重複する遺構はない。溝の方向は北西から南東へほぼ直線的に延び、両端とも調査区外へ続く。底面の高さは北西側が約10cm高いことから、北

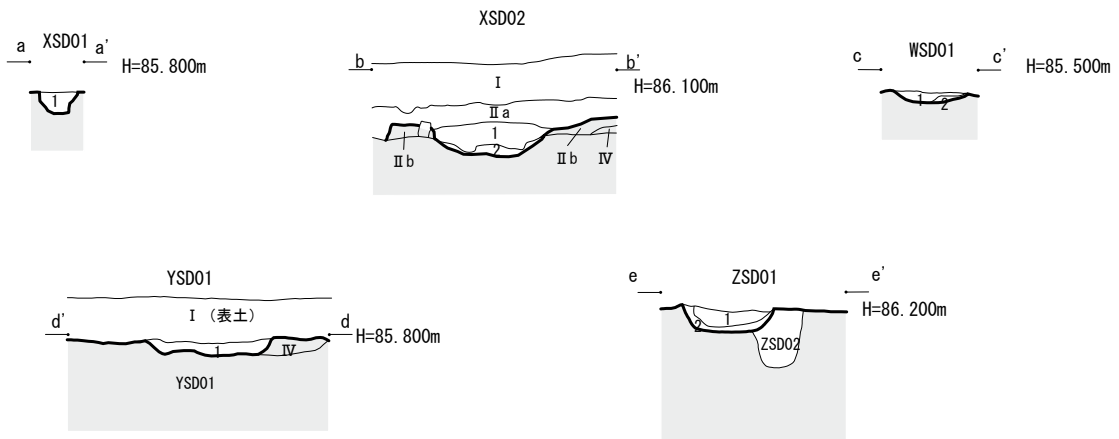
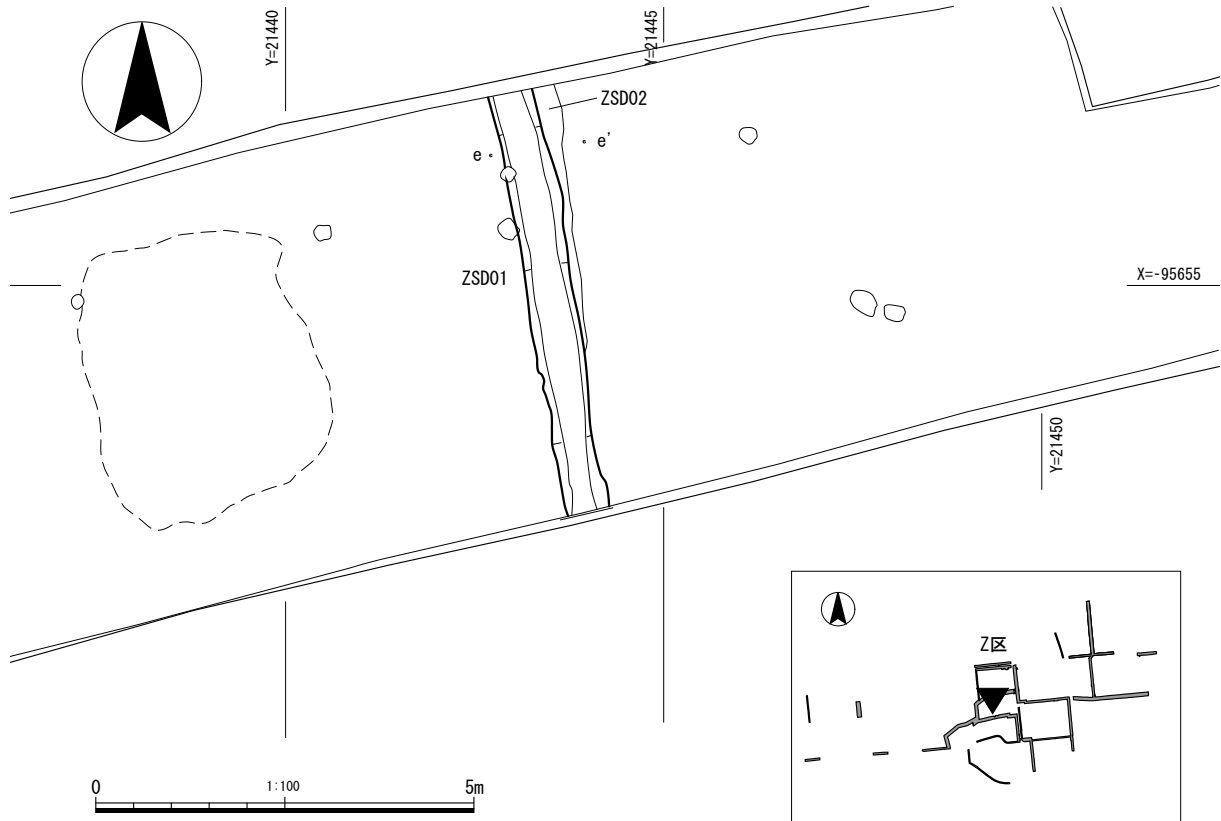


- |       |           |   |
|-------|-----------|---|
| VSD06 |           |   |
| 1     | 褐灰色シルト    | 10YR6/1 黄褐色 (10YR7/8) シルトブロック 5% を含む    |
| 2     | 褐灰色粘土質シルト | 10YR5/1 浅黄橙色 (10YR8/3) シルトブロック 20% を含む  |
| 3     | 黒褐色シルト    | 10YR3/2 にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルトブロック 3% を含む |
| VSD07 |           |   |
| 1     | 黒褐色シルト    | 10YR3/2 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 7% を含む    |
| VSD08 |           |   |
| 1     | 褐灰色粘土質シルト | 10YR4/1 黄橙色 (10YR7/8) シルト粒 1% を含む       |
| 2     | 黒褐色シルト    | 10YR3/2 黄橙色 (10YR7/8) シルトブロック 3% を含む    |
| VSD09 |           |   |
| 1     | 褐灰色粘土質シルト | 10YR4/1 浅黄橙色 (10YR8/4) シルトブロック 2% を含む   |

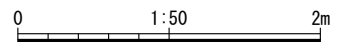
第259図 溝跡39 V区3



第260図 溝跡40 W区1・X区1・Y区1



- |             |         |                                 |
|-------------|---------|---------------------------------|
| WSD01       |         |                                 |
| 1 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 5% を含む  |
| 2 黒褐色粘土質シルト | 10YR2/2 | 地山土粒 (10YR7/6) (径 1 mm) 10% を含む |
| XSD01       |         |                                 |
| 1 黒褐色シルト    | 10YR2/3 | 黄褐色土粒 1% 小礫 (径 1 cm) 1% を含む     |
| XSD02       |         |                                 |
| 1 黒褐色シルト    | 10YR2/3 | 黄褐色土粒 1% 小礫 (径 1 cm) 1% を含む     |
| 2 黒褐色シルト    | 10YR3/2 | 黄褐色土粒 5%                        |
| YSD01       |         |                                 |
| 1 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2 | 地山土粒 (径 1 cm) 10% を含む           |
| ZSD01       |         |                                 |
| 1 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 | 酸化鉄 10%、地山土粒 (径 5 mm) 3% を含む    |
| 2 褐灰色粘土質シルト | 10YR4/1 | 酸化鉄 5%、炭化物粒 1% を含む              |



第261図 溝跡41 W区2・X区2・Y区2・Z区

西から南東へ向かう流路が想定される。調査区内での規模は、長さが11m、上幅が最大で0.8mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から14cmである。堆積土は2層に分層でき、いずれも黒褐色を主体としたシルトで、2層はIV層（地山）由来の粘土が塊状に多く混じる。堆積の状況から、自然堆積であると考えられる。遺物は、土師器非ロクロ甕片や須恵器の細片、常滑甕片（335）、須恵器系陶器の大甕片（336）などが出土している（計189g）。時期は、もっとも新しい遺物から、12世紀代に位置づけられる。（鈴木）

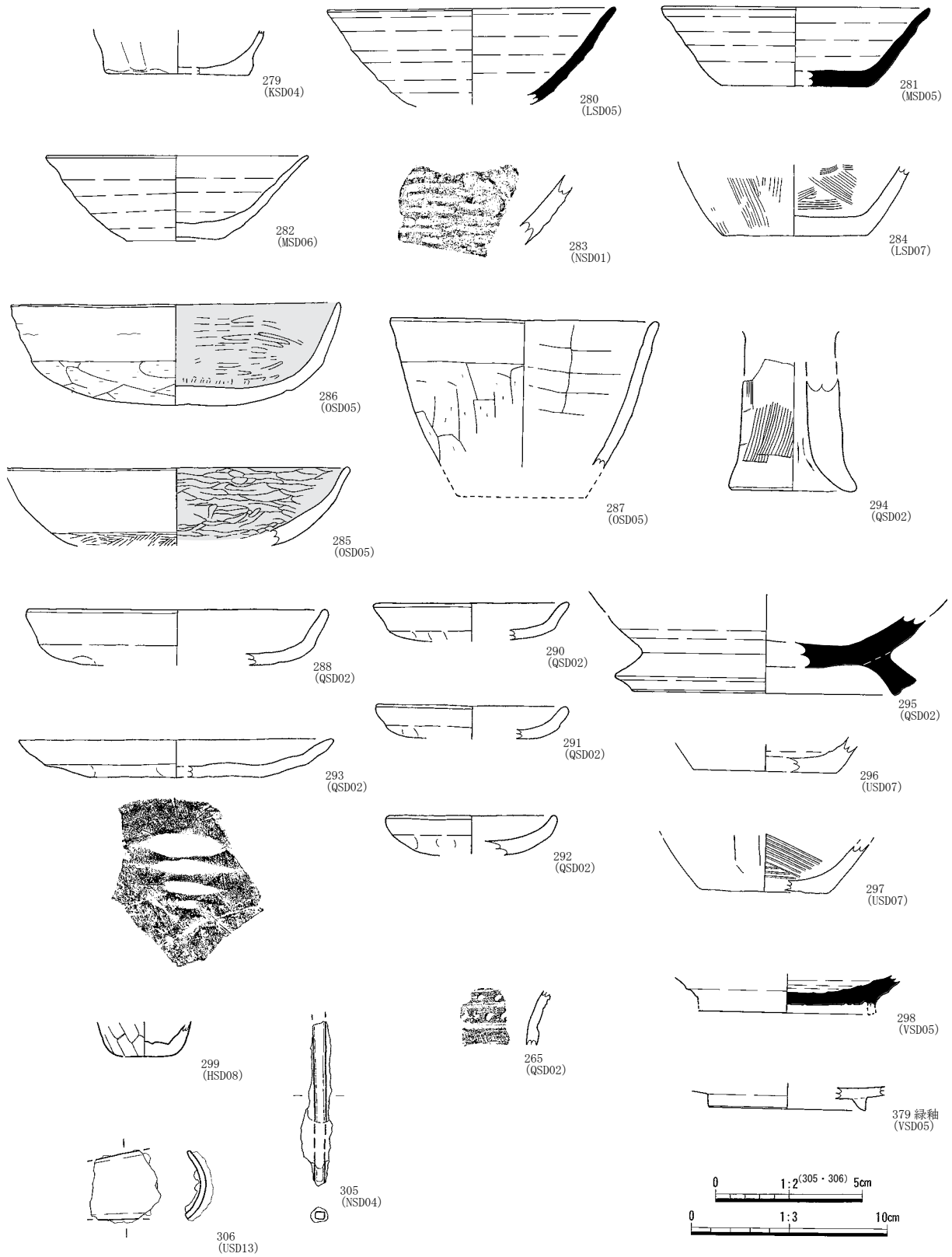
#### VSD03（第257・258・271図）

V区の東側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。VSX01竪穴建物跡とVSD05溝跡と重複しており、新旧関係は、VSX01より新しく、VSD05とは同時期の可能性がある。溝の方向は、調査区際からVSX01付近までは北西から南東で、そこからVSD05に向かって南西から北東方向に変わる。底面の高さは北西側がVSD05との合流地点よりも約15cm高いことから、北西からVSD05へ向かう流路が想定される。北西側は調査区外へ続く。調査区内での規模は、長さが13m、上幅が最大で0.75mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から15cmである。堆積土は4層に分層でき、1層の黒色シルトが主体となる。2層と3層はいわゆる三角堆積で、地山（IV層）由来の粘土が多く混じる。堆積の状況は、自然堆積の様相を呈する。堆積状況ではVSD03がVSD05よりも新しいように見えるが、VSD03の堆積土がVSD05との合流地点で途切れており、他の地点においてもVSD05が他の遺構に削平されている状況を確認できなかったため、VSD03はVSD05に流れ込む同時期の溝であると判断した。遺物は、土師器の細片、磨石（401）が出土している（計443.4g）。時期は、VSD05と同時期とすると、12世紀代に位置づけられる。（鈴木）

#### VSD05（第257・258・265・266・271・272図）

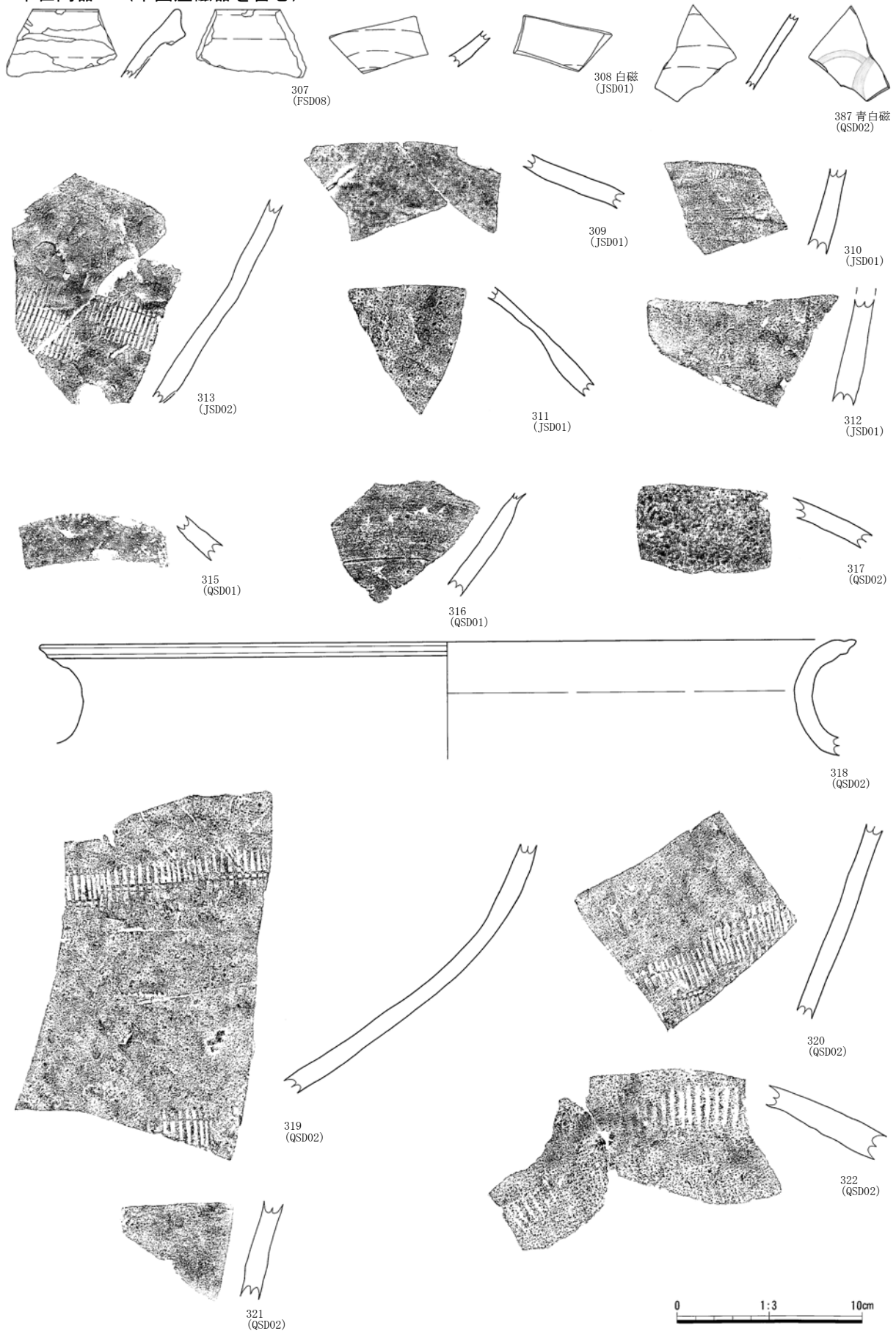
V区の東側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。VSD03溝跡と重複している可能性があるが、同時期と判断している。溝の方向は北西から南東にほぼ直線的で、両端とも調査区外へ延びる。底面の高さは北西側が約10cm高いことから、北西から南東へ向かう流路が想定される。調査区内での規模は、長さが11m、上幅が最大で1.7mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から30cmである。堆積土は6層に分層でき、黒褐色を呈する色調を主体とする。1・2層は後世の水田耕作による攪乱と思われる。底面近くの一部では水性堆積の様相を呈する。底面には拳～人頭大の礫がほぼ全体に分布する。この分布には規則性がなく、人工的な敷石とは言い難い。なお、この礫層からは常滑産など陶器片が出土している。堆積状況ではVSD03がVSD05よりも新しいように見えるが、VSD03の堆積土がVSD05との合流地点で途切れており、他の地点においてもVSD05が他の遺構に削平されている状況を確認できなかったため、VSD03はVSD05に流れ込む同時期の溝であると判断した。遺物は、土師器高台杯片、甕片やかかわりけ片、常滑産陶器片（340～363）や渥美産陶器片（364～375）、須恵器系陶器片（376～378・380）、中国産白磁碗（381）、緑釉陶器碗の底部片（379）のほか、台石（405・408・411・412・414）、敲石（404・407）、凹み石（403・406）、磨石（409・410）、砥石（413）などが多量に出土している（土師器・須恵器2.4kg、中世陶磁器1.83kg、石器11.8kgの計16kg）。時期は、古代の遺物と中世の遺物が混在しているが、もっとも新しい出土遺物から、12世紀代に位置づけられる。（鈴木）

土師器・須恵器・緑釉陶器・かわらけ・金属製品



第262図 溝跡出土遺物 1

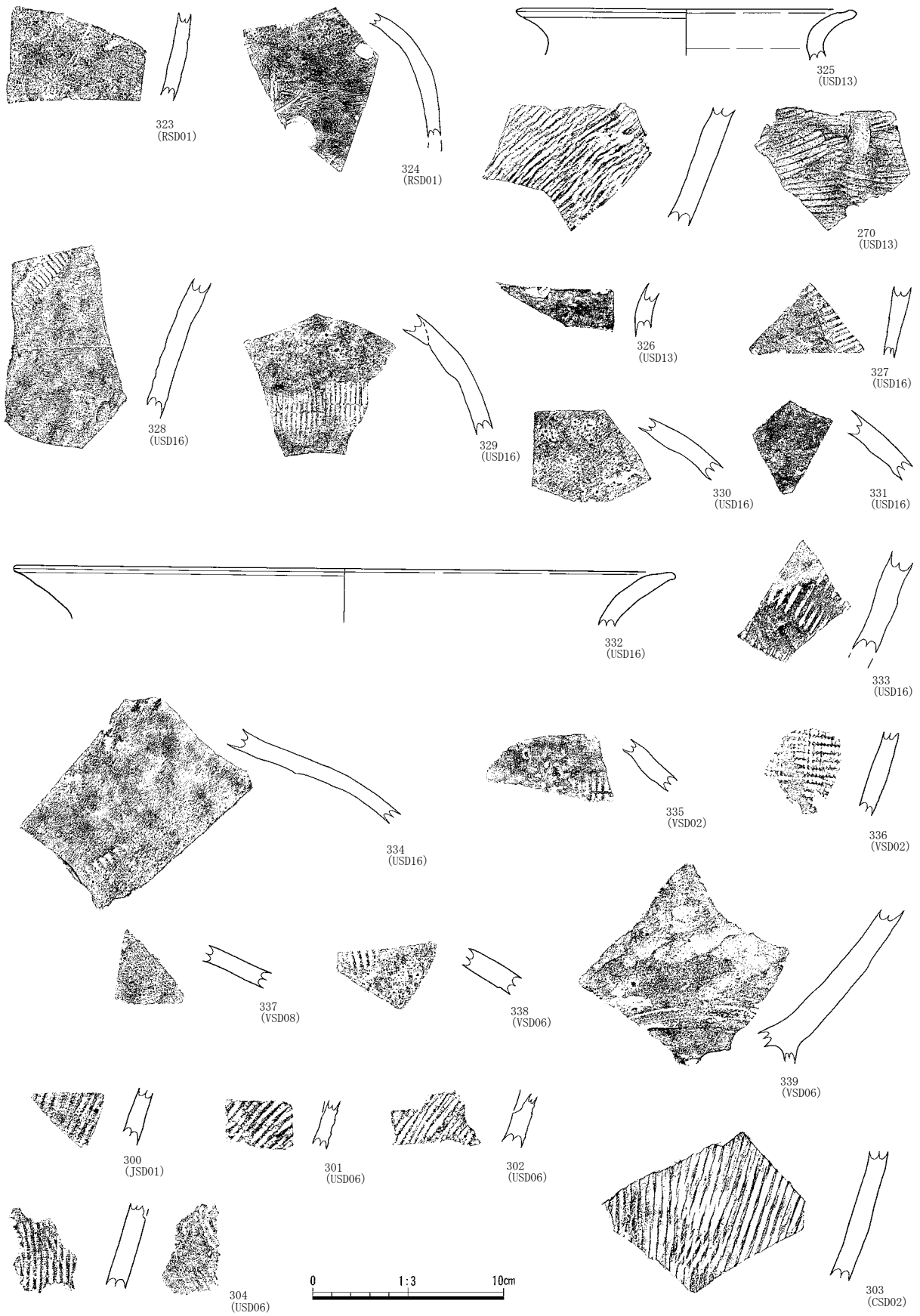
中世陶器 1 (中国産磁器を含む)



第263図 溝跡出土遺物 2

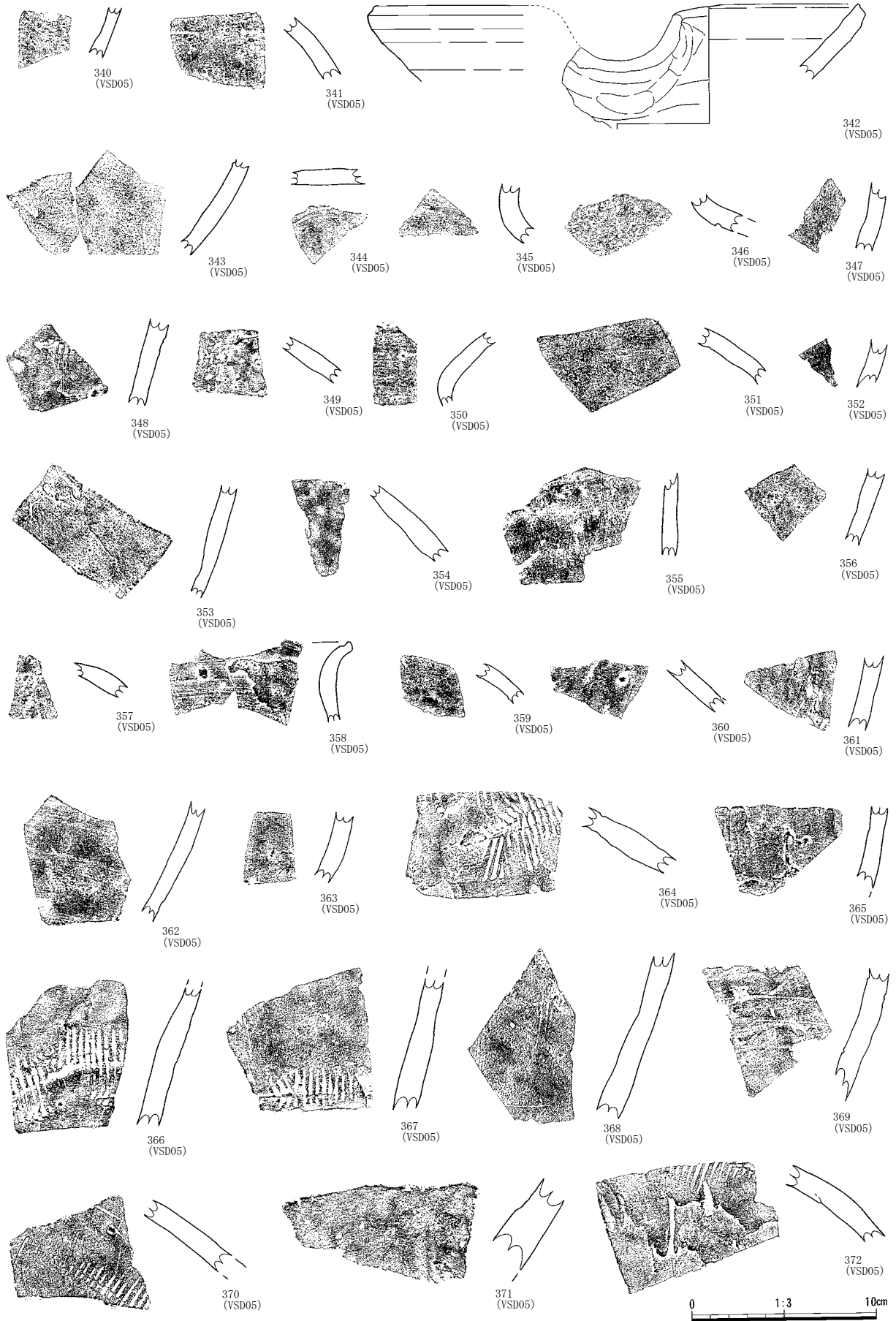


中世陶器 2



第264図 溝跡出土遺物 3

中世陶器 3 (VSD05)



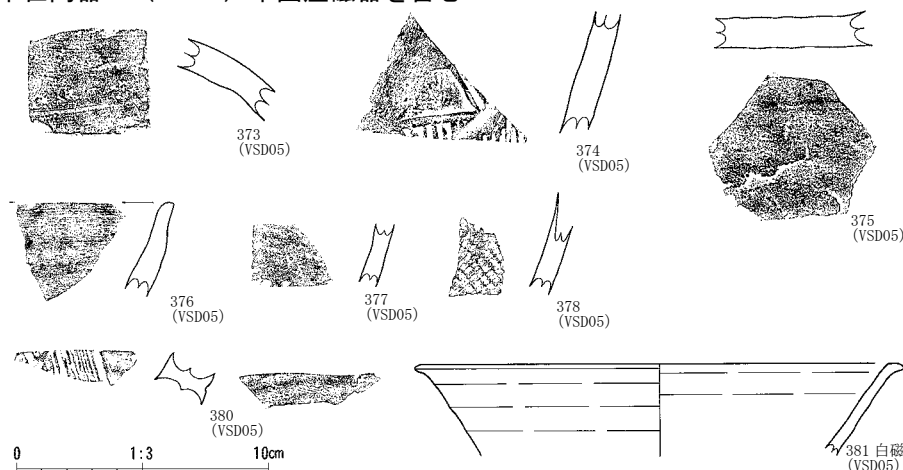
第265図 溝跡出土遺物 4

## VSD06

(第259・260図)

V区の西端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。VSD07溝跡、VSX04土坑と重複しており、両者よりも古い遺構である。調査区内での溝の方向は南西から北東で直線的に伸び、VSD07の手前で南

## 中世陶器 4 (VSD04) 中国産磁器を含む



第266図 溝跡出土遺物 5

東へ曲がる。西端は調査区外へ伸び、東端はVSD07によって削平されている。調査区内での規模は、長さ8.5m、上幅は最大で0.67mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から15cmである。堆積土は3層に分層できるが、VSX04を挟んだ東側と西側では様相が異なる。東側は黒褐色シルトの単層であり、西側はそれよりもやや明るい褐灰色を呈する色調を主体とする堆積土である。遺物は、土師器や須恵器の細片や常滑産陶器片(338・339)が出土するのみである(計184g)。時期は、出土遺物や重複関係から古代のなかに位置づけられる可能性がある。(鈴木)

## VSD07 (第259図)

V区の西端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。VSD06溝跡と重複しており、これよりも新しい。また、南東部は後世の攪乱によって削平されている。溝の方向はほぼ南から北で、両端ともに調査区外へ伸びる。調査区内での規模は、長さ6.5m、上幅は最大で0.9mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から18cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器口クロ杯片、甕片などが出土している(計59.7g) 時期は、出土遺物からみると、古代のうちに位置づけられる可能性があるが、明確ではない。(鈴木)

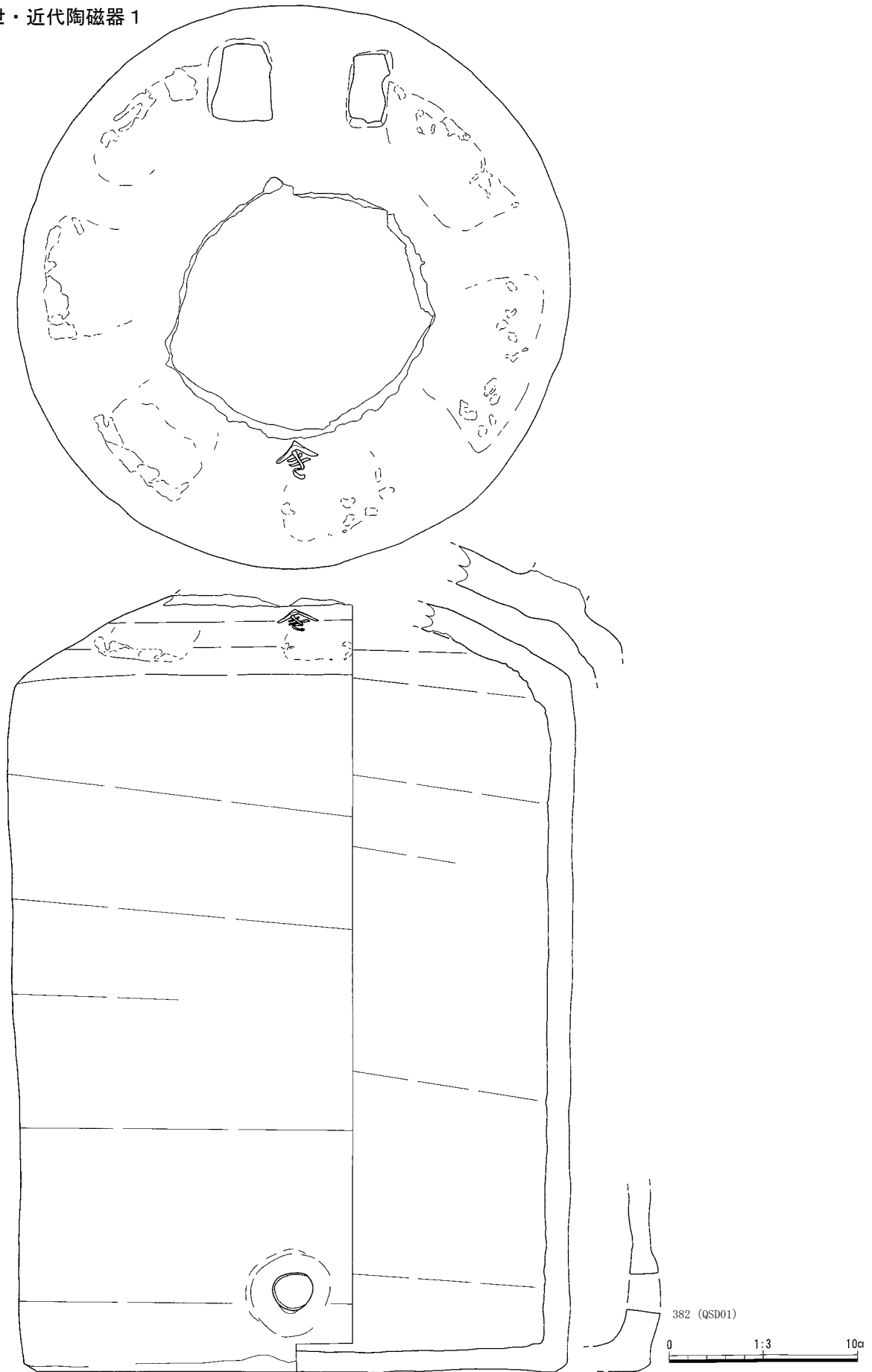
## VSD08 (第259・262図)

V区の西端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。重複する遺構として、北端部の底面でVP021を検出した。溝の方向はほぼ南から北で、北側は調査区外へ伸びるが、南側は後世の攪乱により削平されている。調査区内での規模は、長さ4.2m、上幅は最大で0.64mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から10cmである。堆積土は2層に分層でき、黒褐色～褐灰色が主体の色調を呈する。遺物は、土師器の細片や須恵器高台杯の底部片(298)が出土している(計47.6g) 時期は、出土遺物から、平安時代の可能性があるが、明確ではない。(鈴木)

## VSD09 (第259図)

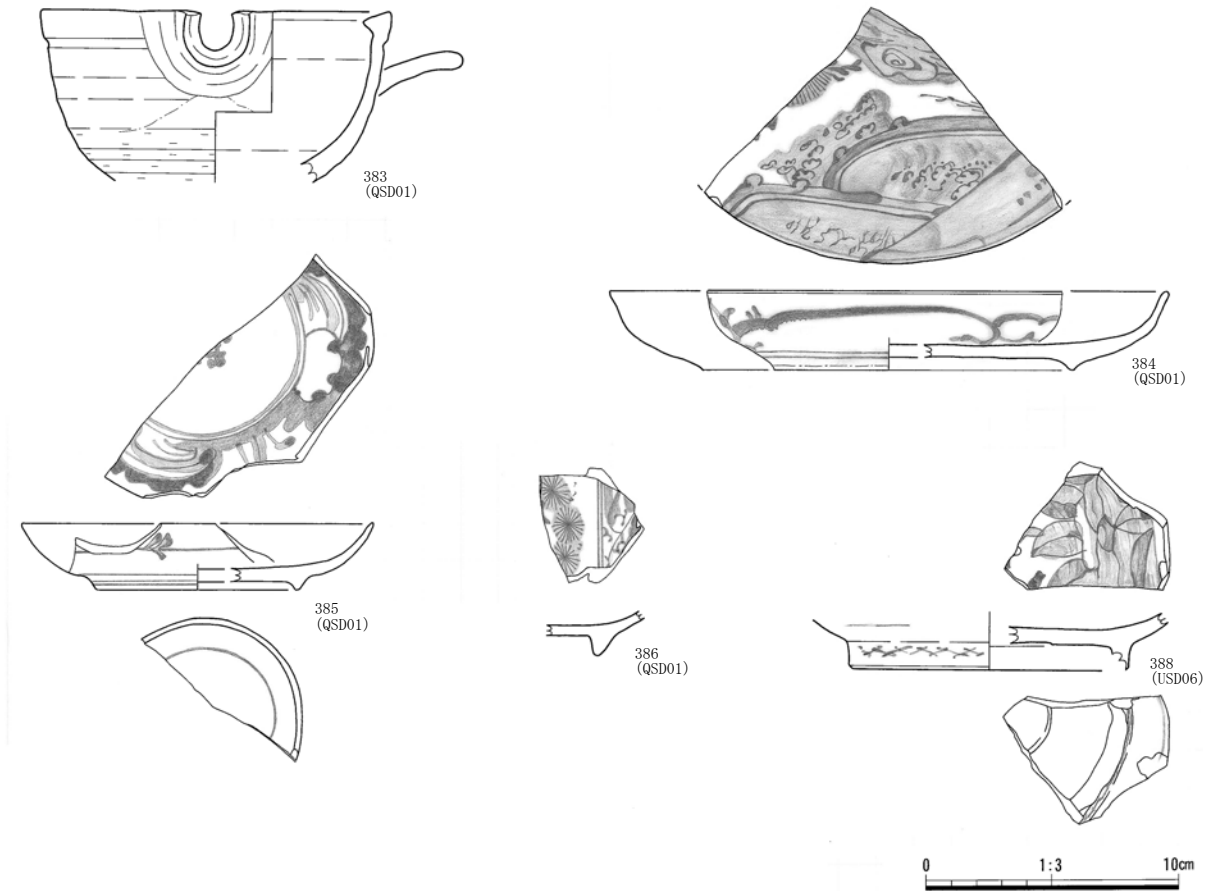
V区の西端に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。VSX05・VSX06竪穴建物跡と重複し、それらよりも古い。いずれの遺構にも削平されているため、調査区内での遺存状況は悪い。溝の方向は南西から北東で両端とも調査区外へ伸びる。底面の高さは、北東側がわずかに高いことから、北東

近世・近代陶磁器 1



第267図 溝跡出土遺物 6

## 近世・近代陶磁器 2



第268図 溝跡出土遺物 7

から南西へ向かう流路が想定される。調査区内での規模は、長さ3.7m、削平されていない部分での上幅が最大で0.33mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは14cmである。堆積土は褐灰色粘土質シルトの単層で、IV層（地山）由来の浅黄橙色シルトブロックをわずかに含む。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、古代のうちに位置づけられる可能性がある。（鈴木）

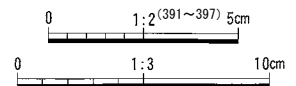
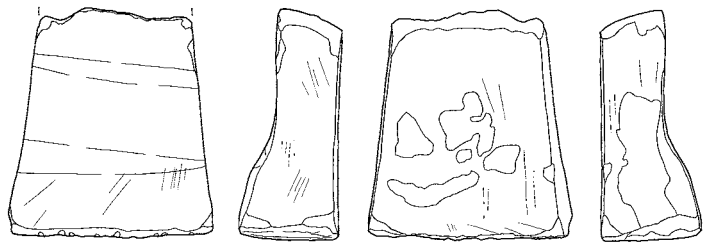
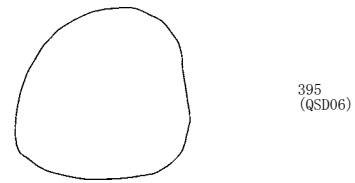
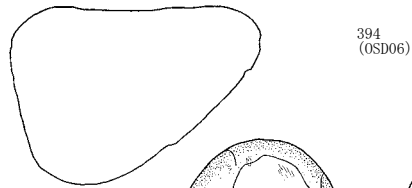
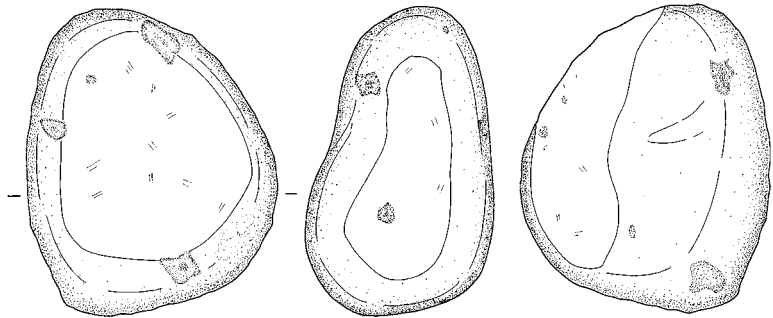
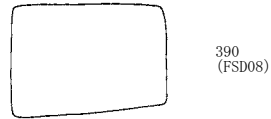
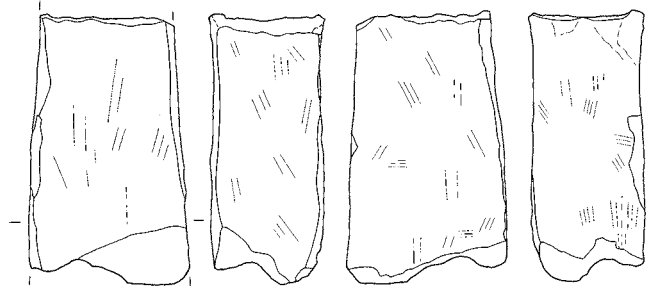
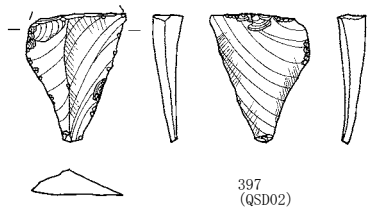
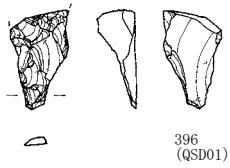
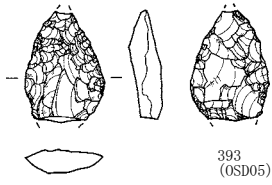
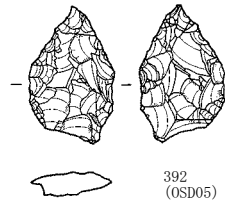
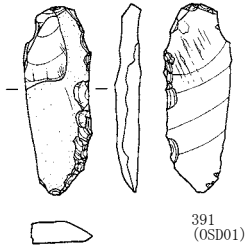
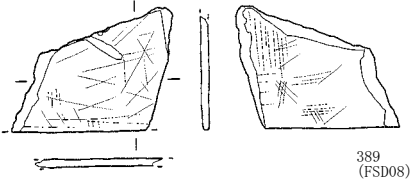
## WSD01（第260・261図）

W区の東側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。調査区内では他遺構との重複はない。溝の方向は北東から南西で、ほぼ直線的に延びている。両端とも調査区外へ続く。調査区内での規模は、検出長が2.7m、上幅が0.6mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは8cmである。堆積土は2つに細分でき、黒色や黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土していない。時期は、判断できる根拠がないため不明である。

## XSD01（第260・261図）

X区の北側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。調査区内では他遺構との重複はない。溝の方向は北東から南西で、ほぼ直線的に延びている。北端は調査区内で収束するが、南西端は調査区外へ続く。調査区内での規模は、検出長が1.7m、上幅が0.3mである。断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは12cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土して

石器・石製品 1



第269図 溝跡出土遺物 8



第270図 溝跡出土遺物 9

いない。時期は、判断できる根拠がないため不明である。

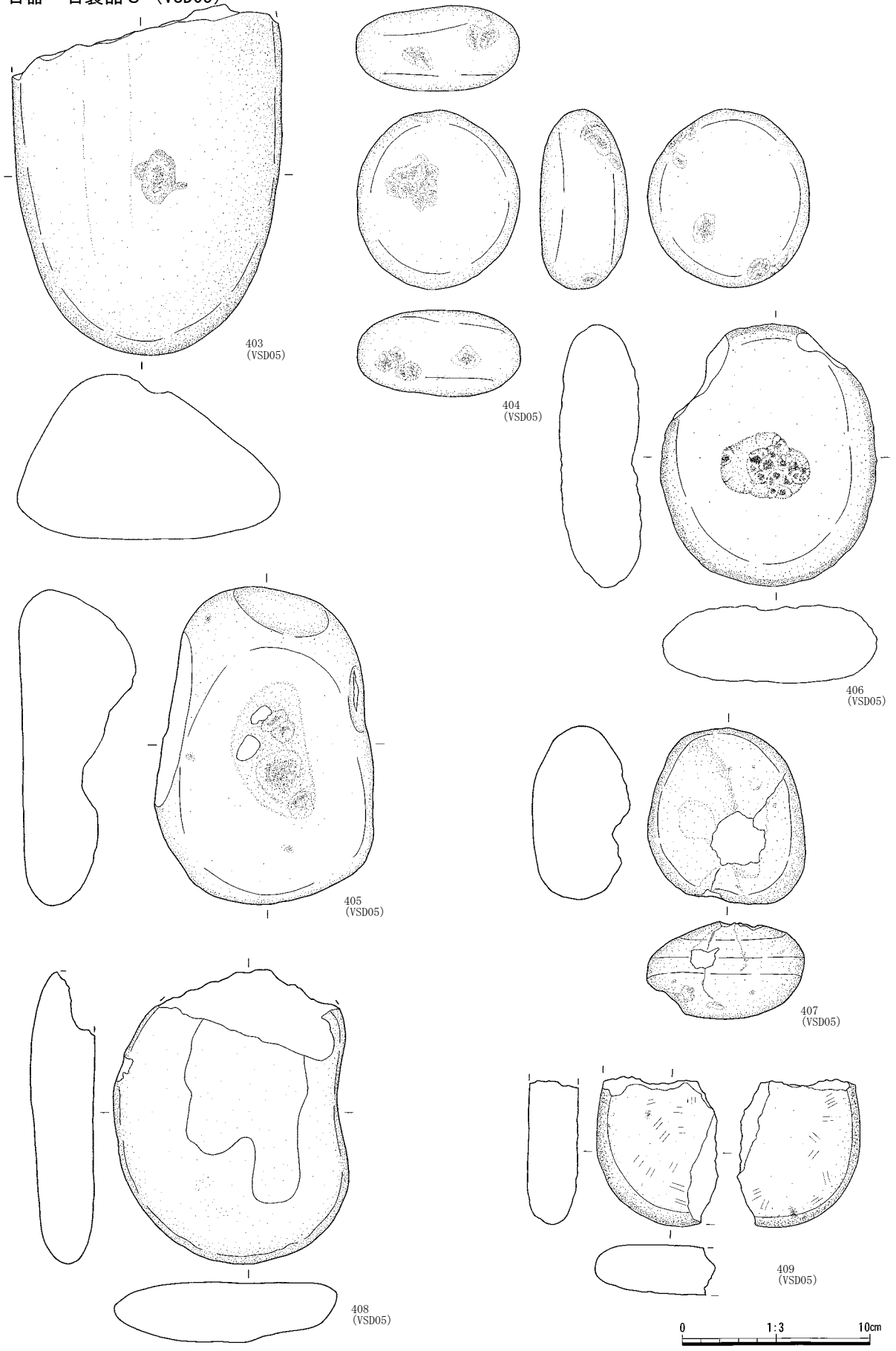
#### XSD02 (第260・261図)

X区の北側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。調査区内では他遺構との重複はない。溝の方向は東西で、ほぼ直線的に延びている。東西両端とも調査区外へ続く。調査区内での規模は、検出長が1.8m、上幅が0.8mである。断面形は緩やかな逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる根拠がないため不明である。

#### YSD01 (第260・261図)

Y区の南側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。調査区内では他遺構との重複はない。

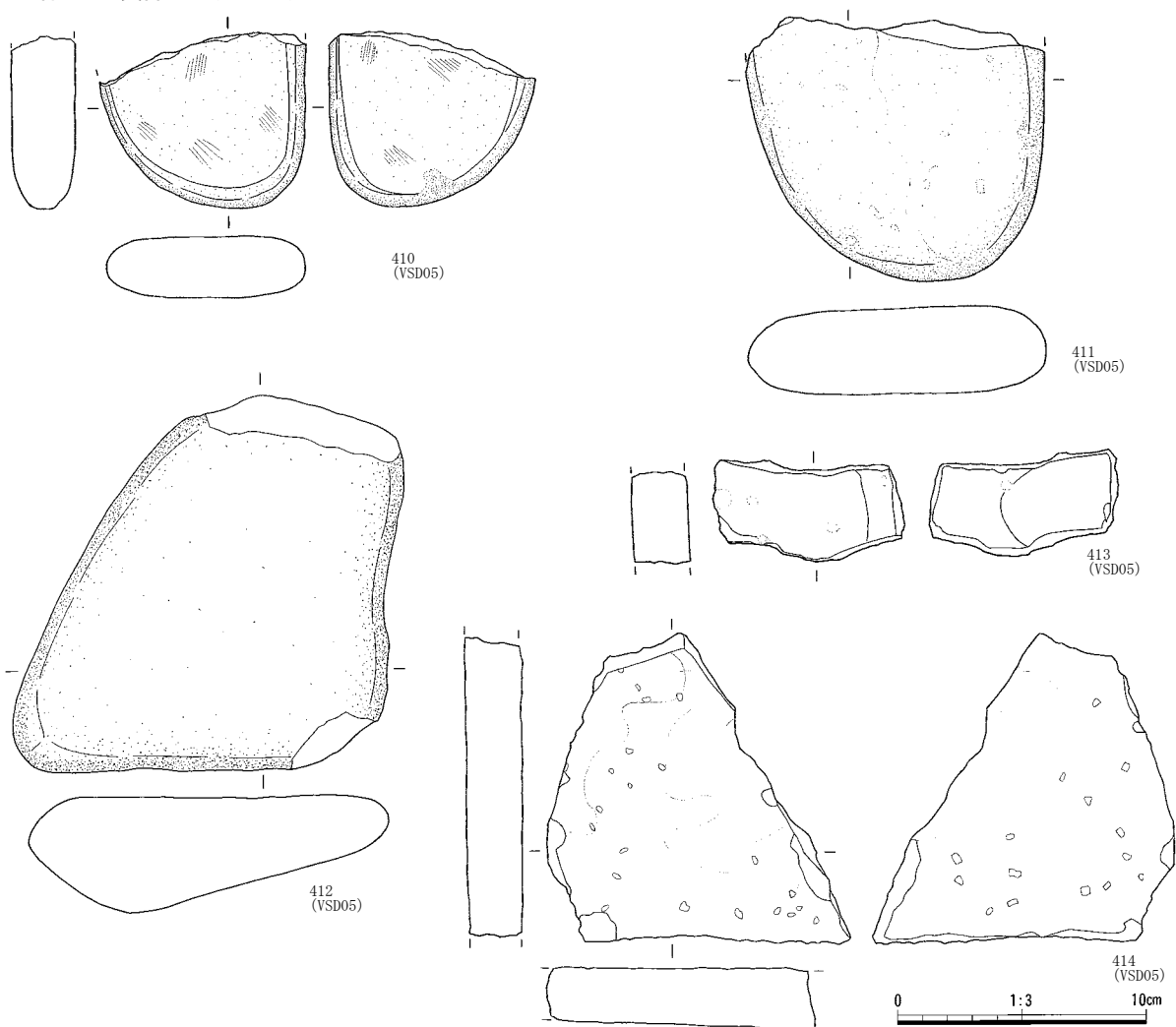
石器・石製品 3 (VSD05)



第271図 溝跡出土遺物10



## 石器・石製品 4 (VSD05)



第272図 溝跡出土遺物11

溝の方向は、東西方向で、ほぼ直線的に延びている。西端は調査区内で収束するが、東端は調査区外へ続く。調査区内での規模は、検出長が3.0m、上幅が1.0mである。断面形は、浅い逆台形状を呈し、検出面からの深さは10cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる根拠がないため不明である。

## ZSD01 (第261図)

Z区の西側に位置する溝跡である。検出はIV層上面である。ZSD02材木堀跡と重複し、それよりも新しい遺構である。溝の方向は、南北方向であり、ほぼ直線的に延びている。南北両端とも調査区外へ続く。調査区内での規模は、検出長が5.6m、上幅が0.7mである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは15cmである。堆積土は単2つに細分でき、黒褐色を呈する粘土質シルトや褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計10.4g)。時期は、判断できる根拠に乏しいため不明とする。

(8) 土 坑

**BSX01 (第273・290図)**

B区西側に位置する。BSX02と重複しており、本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層で行っている。平面形は東西方向に長い楕円形状を呈し、規模は長軸3.1m、短軸1.8mである。断面形は浅い皿形を呈し、深さは35cmである。堆積土は5つに細分され、黒色～黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は常滑産陶器の甕類の破片(475・476・478)、須恵器系陶器の甕類片(477)が出土している。BSX02と同様の形態を呈することから、同様の機能を有していた可能性がある。時期は遺物からみると12世紀の可能性はある。

**BSX02 (第273図)**

B区西側に位置する土坑である。西側の大部分が調査区外にあるため、全容は不明であるが、おおよそBSX01に類似する土坑と考えられる。一部調査区外も広げて確認した箇所もある。調査区内における検出規模は、長さが2.1m、幅が最大で1.2m程度である。断面形は浅い皿形を呈し、深さは40cmである。堆積土は5つに細分され、黒褐色を呈する粘土が主体であり、褐色粘土や暗褐色粘土が一部にある。遺物の出土はないが、BSX01と同様12世紀の可能性はある。

**FSK01 (第273・290図)**

F区西側に位置する土坑である。重複はFSK02とであり、本遺構の方が新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸1.15m、短軸1.1mである。断面形は皿形を呈し、深さが25cmである。底面には、2箇所が円形に窪み、もっとも深いところで40cmある。堆積土は4つの層があり、いずれも黒褐色を主体とする粘土質シルトであり、自然堆積である。遺物は、非ロクロ甕や非ロクロ杯などの土師器片、縄文土器片(415)が出土している(計163g)。時期は、遺物からみると、古代のうちに位置づけられる可能性があるが明確ではない。

**FSK02 (第273図)**

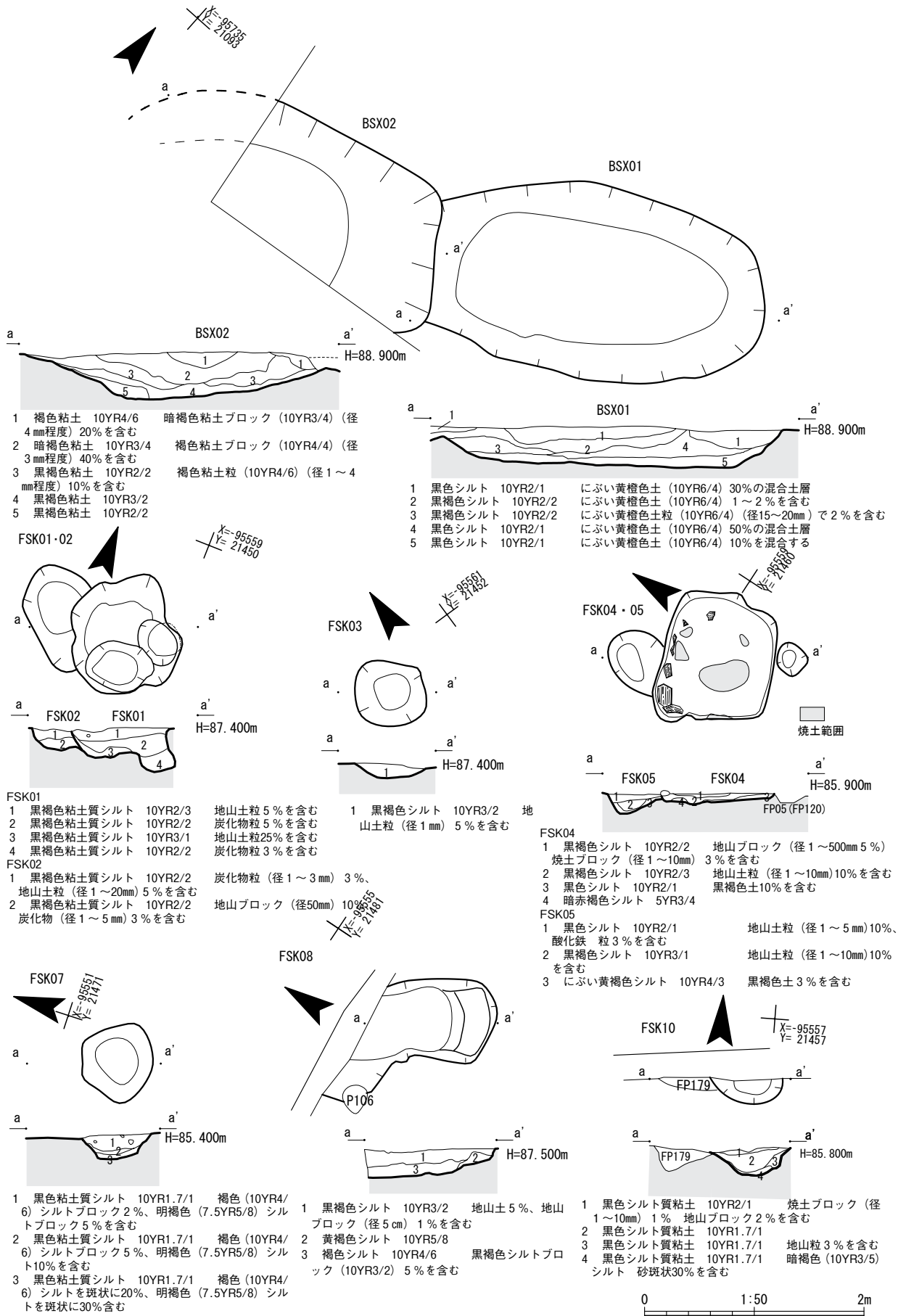
F区西側に位置する土坑である。重複はFSK01とであり、本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈すると想定されるが、FSK01によって一部が壊されているため、不明な点も多い。現存規模は、長さが1.0m、幅が0.65mである。断面形は皿形を呈し、深さが20cmである。堆積土は2つの層があり、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は土師器の細片がわずか6.6g出土するのみである。

**FSK03 (第273図)**

F区西側に位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は隅丸の方形形状を呈し、規模は、一辺が60～65cmである。断面形は浅い皿形を呈し、深さが15cmである。堆積土は単層があり、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

**FSK04 (第273図)**

F区中央部に位置する土坑である。重複はFSK05とであり、本遺構の方が新しい。検出はI層除去



第273図 土坑1 B区・F区1

後のIV層面で行っている。平面形は方形状を呈する。規模は、一辺が1～1.1m四方である。断面形は、浅い皿形を呈し、深さが10cm程度である。堆積土は4つに細分でき、黒～黒褐色を呈するシルト層が主体である。底面には、炭化材や焼土が複数箇所広がっている。遺物は土師器の細片がわずか6.6g出土するのみである。時期は、古代の可能性はあるが詳細は不明である。

#### FSK05 (第273図)

F区中央部に位置する土坑である。重複はFSK04とであり、本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈し、規模は、径60×50cm、深さが20cmである。堆積土は3つの層があり、黒色～黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は出土していない。時期は不明であるが、重複から古代の可能性はある。

#### FSK07 (第273図)

F区東側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、南側でFSD05と近接する。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、長軸が70cm、短軸が65cmであり、深さが確認面より25cmである。堆積土は3つに細分でき、いずれも黒色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、時期不明である。

#### FSK08 (第273図)

F区西側に位置する土坑である。FP106と重複し、本遺構の方が古い。また南側で材木堀FSD07と近接する。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、やや不整な長方形を呈すると想定されるが、遺構の北側は調査区外にあるため、全容は不明である。規模は、調査区内の現状で、長さが1.2m、幅が0.7mである。西側が一部崩落によるためか膨らんでいる。断面形は、南から二段落ちするもので、深さは、確認面から20cmである。堆積土は3つに細分でき、黒褐色、黄褐色、褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである（計23.2g）。時期は不明である。

#### FSK10 (第273図)

F区中央部に位置する土坑である。重複はFP179とであり、本遺構の方が新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈すると想定されるが、遺構の北側が調査区外に広がることから、全容は不明である。規模は、調査区内の現状で、長軸65cm、短軸20cmである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から25cmである。堆積土は4つに細分でき、いずれも黒色を呈するシルト質粘土である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである（計19.1g）。時期は不明である。

#### FSK11 (第274図)

F区東側に位置する土坑である。重複はFSD05とであり、本遺構の方が古い。また、遺構南側の一部は調査区外に位置する。検出はI層除去後のIV層面で行った。平面形は円形状を呈すると想定されるが、遺構の南側が調査区外に広がることから、全容は不明である。規模は、調査区内の現状で長さ70cm、幅50cm程度である。断面形はゆるやかなV字形を呈し、深さが確認面から25cmである。堆積土は単層で、黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

## FSK12 (第274図)

F区東側に位置する土坑である。直接の重複はないが、空間的（間接的）にFSB01門跡とFSB10建物跡と重複する。新旧関係は不明である。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は長い楕円形状を呈し、長軸1.2m、短軸0.4mの規模である。断面形状は浅い皿形を呈し、底面までの深さは、10cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

## GSK01 (第274図)

G区南側に位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈し、規模は、長軸60cm、短軸50cmである。断面形は、浅い皿状を呈し、深さが確認面から10cmである。堆積土は単層であり、黒色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期も判断する根拠がないため不明である。

## HSK01 (第274図)

H区西側に位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈し、北側が少し膨らんだ形態である。規模は、長軸1.35m、短軸0.8mである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から20cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土しない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

## HSK02 (第274図)

H区西側に位置する土坑である。本遺構自体2遺構の重複の可能性があるが、断面観察では確認できなかったため、ここではひとつの遺構として捉えている。HSD02と重複し、本遺構の方が新しい。検出はI層除去後のIV層面で行った。平面形は長い楕円形状を呈する。規模は、長軸が2.7m、短軸が1.7mである。断面形は北側が浅く、南側が深い段差を有するが、堆積は一体的である。底面までの深さは最大で、50cmである。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計13.6g)。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

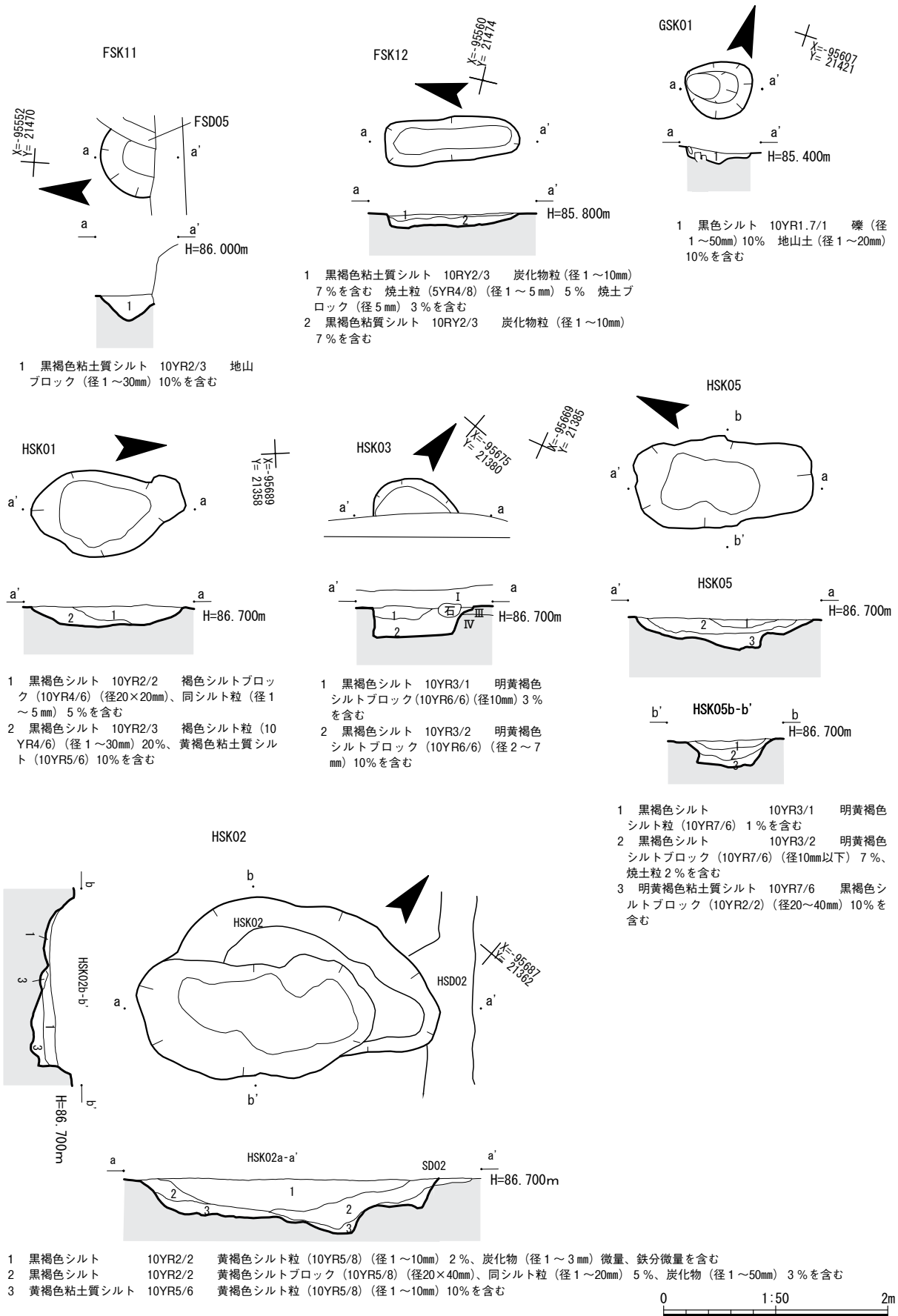
## HSK03 (第274図)

H区西側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、南側は調査区外に広がる。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈すると予想される。規模は、調査区内の現状で長さ70cm、幅30cmである。断面形は箱形を呈するたて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは、25cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土しない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

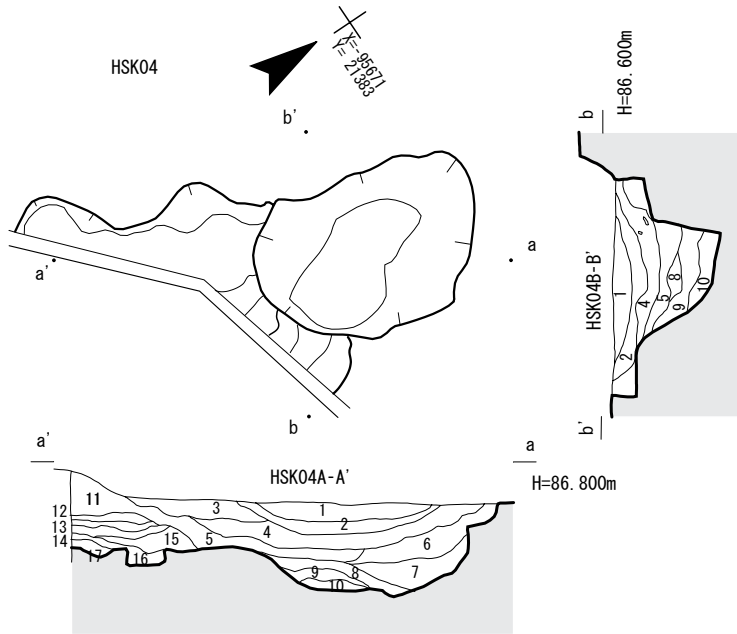
## HSK04 (第275・290図)

H区中央部付近に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、東にHSK05がある。また、遺構の南側は調査区外にあるため、全容は不明である。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は不整形なもので、楕円形状のものが2基重複するように見える。全容が不明のため、形状や構造が判然としない。調査区内での現状規模は、長さが3m、幅が1m程度の範囲である。断面形は基本的にはU字形を呈するが、段差があり、北側の方がより深くなる。深さは、確認面から最大で60cmで

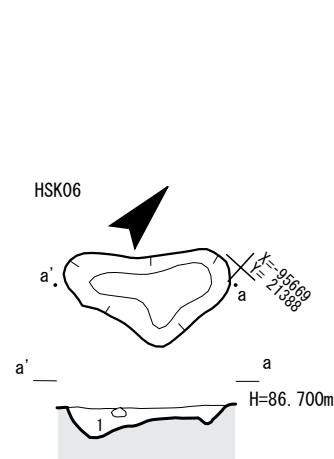
3 遺構と遺物



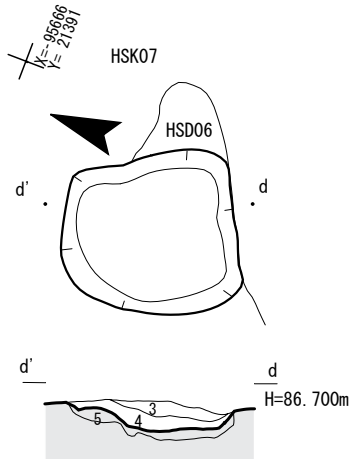
第274図 土坑2 F区2・H区1



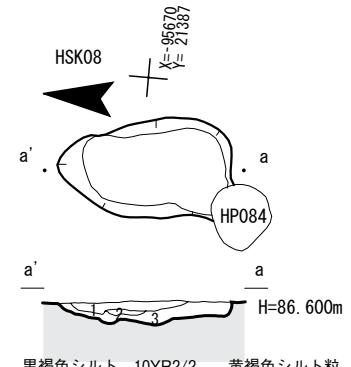
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1mm以下) 1%を含む
- 2 暗褐色粘土質シルト 10YR3/3 にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/3) 7%、黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1mm以下) 微量を含む
- 3 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~2mm) 2%、炭化物 (径1~5mm) 1%を含む
- 4 黒褐色シルト 10YR2/3 炭化物 (径1~5mm) 1%、黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1mm以下) 微量を含む
- 5 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) とにぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/4) との混合土 (1:1)
- 6 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 褐色粘土質シルト (10YR4/6) 7%を含む
- 7 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 褐色粘土質シルト (10YR4/6) 20%、にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR6/4) 3%を含む
- 8 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 3%を含む
- 9 黒褐色粘土質シルト 10YR2/2 にぶい黄褐色粘土ブロック (10YR5/4) (径5~20mm) 3%を含む
- 10 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4
- 11 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~10mm) 2%を含む
- 12 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~10mm) 5%を含む
- 13 黒褐色シルト 10YR2/2 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~5mm) 3%を含む
- 14 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルトブロック (10YR4/6) 20%を含む
- 15 褐色シルトブロック 10YR4/6 黒褐色シルト (10YR2/3) 10%を含む
- 16 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルトブロック (10YR4/6) 10%を含む
- 17 黒褐色シルト 10YR2/3 褐色シルト粒 (10YR4/6) (径1~10mm) 3%を含む



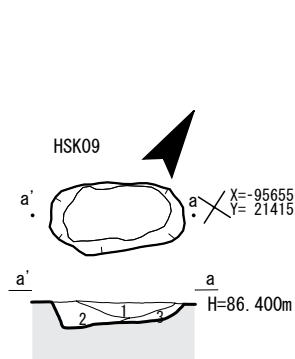
- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm) 3%を含む



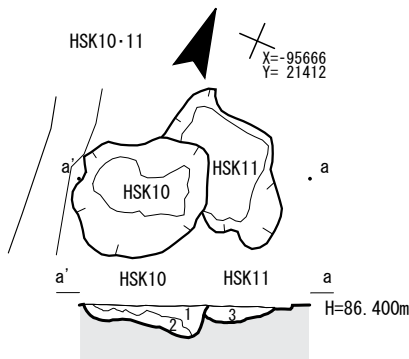
- 3 黒褐色シルト 10YR3/1 焼土粒 1%、土器片を含む
- 4 褐灰色シルト 7.5YR4/1 焼土粒 3%、明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) 1%を含む
- 5 褐灰色シルト 10YR5/1 明黄褐色シルトブロック (10YR7/6) (径20~30mm) 20%を含む (HSD06)



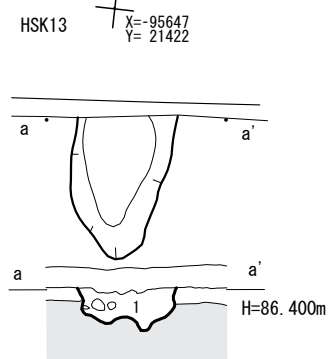
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~5mm) 3%、炭化物 (径1~5mm) 2%、赤褐色焼土粒 (5YR4/8) (径1~3mm) 微量を含む
- 2 黒色シルト 10YR2/1 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~3mm) 3%、炭化物 (径1~3mm) 1%を含む
- 3 黒褐色シルト 10YR2/3 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径10~20mm)、同シルト粒 (径1~5mm) 20%、



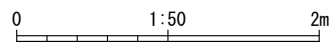
- 1 黒色シルト 10YR2/1 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径5~20mm) 5%を含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2 明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~10mm) 2%を含む
- 3 黒褐色シルト 10YR2/2 明黄褐色シルトブロック (10YR6/6) (径5~30mm)、明黄褐色シルト粒 (10YR6/6) (径1~5mm) 10%を含む



- HSK10
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~5mm)、同シルトブロック (径5~10mm) 5%を含む
  - 2 黒褐色シルト 10YR2/3 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) (径10~30mm) 30%を含む
- HSK11
- 1 黄褐色シルトブロック (10YR5/8) と、黒褐色シルト (10YR2/3) との混合土 (1:1)



- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/8) (径1~3mm) 1%、礫混入 (径10~50mm)



第275図 土坑 3 H区 2

ある。堆積土は17層に細分できる。黒褐色を呈するシルト層や粘土質シルト層が主体である。遺物は土師器非ロクロ杯、非ロクロ甕、高杯片（416）などが出土している（計927g）。時期は、遺物からみると漆町Ⅰ期～Ⅲ期に位置づけられる。

#### HSK05（第274図）

H区中央部付近に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、東にSK08、西にSK04が並んでいる。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は、長さが1.6m、幅が0.9mである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から25cmである。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器の細片がわずかに出土するのみである（計29.1g）。時期は、出土遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性があるが明確ではない。

#### HSK06（第275図）

H区中央部付近に位置する土坑である。他遺構との重複はないが付近にはHSK08土坑やHSD06溝跡がある。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸が1.1m、短軸0.6mである。断面形は、浅い皿状を呈し、深さが確認面から20cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土しない。時期は、判断できる証拠が無いため不明である。

#### HSK07（第275・290・292図）

H区中央部付近に位置する土坑である。HSD06溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は不整な方形を呈する。規模は、一辺が1.1m前後である。断面形は、浅い皿状を呈し、深さは、確認面から20cmである。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や褐色を呈するシルト層である。遺物は、土師器非ロクロ杯（417）や非ロクロ甕（418～420）、尖頭器（447）などが出土する（計1.54kg）。時期は、出土遺物から、漆町Ⅳ期以前に位置づけられる。

#### HSK08（第275図）

H区中央部付近に位置する土坑である。HP084と重複し、本遺構の方が古い。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は、長軸1.15m、短軸0.65mである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から15cmである。堆積土は3つに細分でき、いずれも黒色～黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は出土しない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

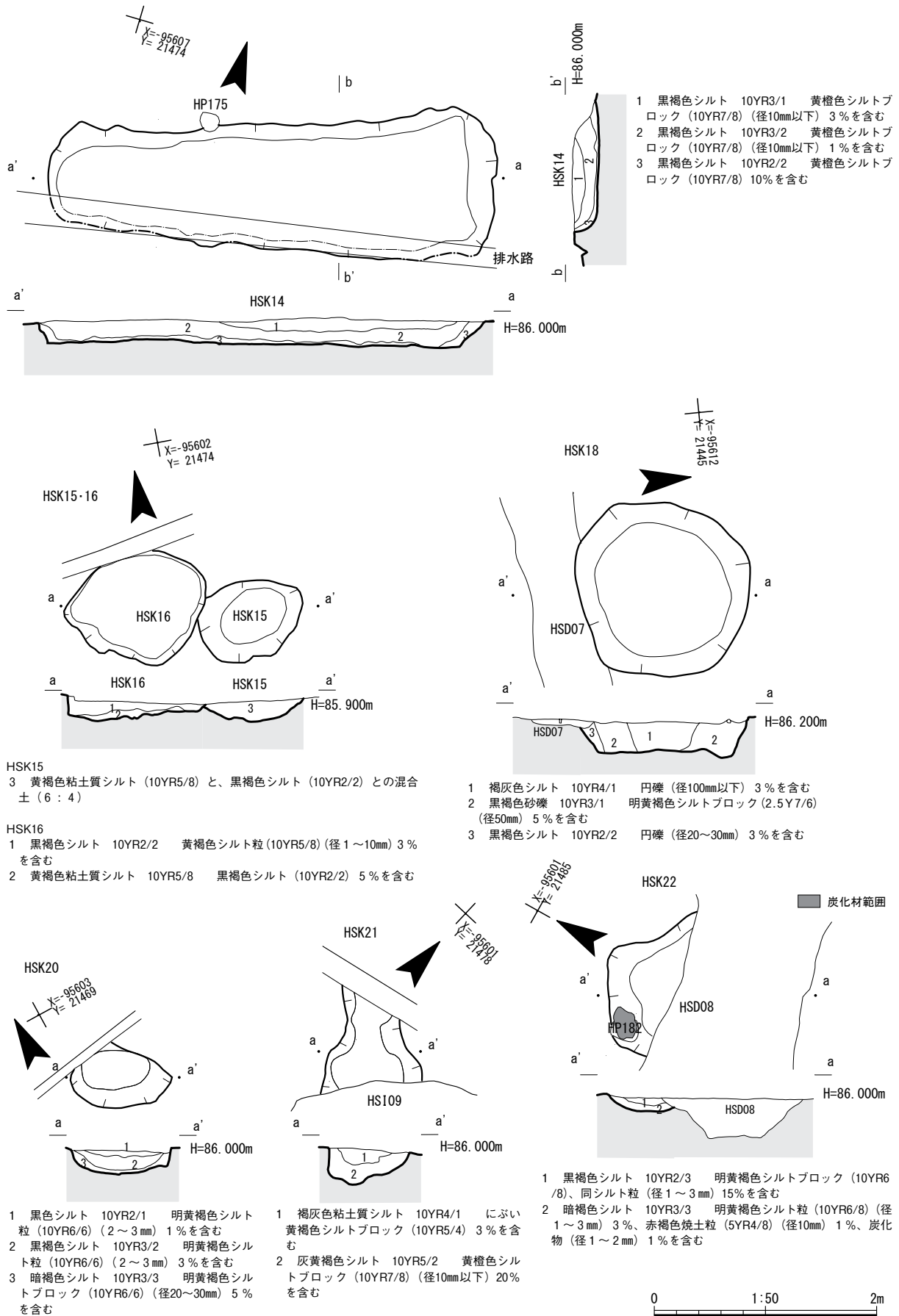
#### HSK09（第275図）

H区中央部に位置する土坑である。HSD05大溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は、長軸90cm、短軸45cmである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から20cm程である。堆積土は3つに細分でき、いずれも黒色から黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土しない。時期は、重複関係から、漆町Ⅳ期以降である。

#### HSK10（第275図）

H区中央部に位置する土坑である。HSK11と重複しており、本遺構の方が新しい。検出はⅠ層除





第276図 土坑4 H区3

去後のⅣ層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、長軸90cm、短軸75cmである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から20cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。遺物は土師器非ロクロ甕などの細片が出土している（計195g）。時期は、遺物からみると、古代のうちに位置づけられよう。

#### HSK11（第275図）

H区中央部に位置する土坑である。HSK10と重複しており、本遺構の方が古い。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、長軸1.1m、短軸0.5～0.6mである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から10cm程度である。堆積土は単層で、黄褐色と黒褐色を呈するシルト層の混合土である。遺物は土師器の非ロクロ甕の細片66gが出土している。時期は出土遺物が少なく判断できないため不明である。

HSK12は欠番

#### HSK13（第275図）

H区中央部に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、東側が調査区外に広がる。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は、楕円形状を呈すると予想される。規模は、調査区内の現状で、長さ1.0m、幅0.7mである。断面形はU字形を呈するが、凹凸が大きい。深さは、確認面から25cmである。堆積土は単層で、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

#### HSK14（第276図）

H区東側に位置する土坑である。HP175柱穴と重複しており、本遺構の方が古い。また、南側は現代の排水路によって一部が破壊されている。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は東西に長い隅丸形状を呈する。規模は、長軸4m、短軸1.2mである。断面形は逆台形状を呈し、深さが確認面から25cm程度である。堆積土は3つに細分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層である。堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は土師器の細片がわずかに出土している（43g）。時期は、出土遺物が少なく判断できないため不明である。

#### HSK15（第276図）

H区東側に位置する土坑である。HSK16と重複しており、本遺構の方が古い。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は、長軸1m、短軸0.7mである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から15cm程度である。堆積土は単層で、黄褐色と黒褐色を呈する粘土シルト層の混合土である。遺物は土師器の細片がわずかに出土しているのみである（1.4g）。時期は、重複からみて、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

#### HSK16（第276図）

H区東側に位置する土坑である。HSK15と重複しており、本遺構の方が新しい。検出はⅠ層除去後のⅣ層面で行っている。平面形は、正方形～楕円形状を呈する。規模は、1m×1mである。断面形は皿状を呈するが、西側のみ壁が立つ。深さは確認面から15cm程度である。堆積土は2つに細分で

き、黒褐色と黄褐色を呈するシルトや粘土質シルト層である。遺物は土師器の非ロクロ甕の細片などが出土している（129g）。時期は、遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

#### HSK18（第276・290図）

H区中央部に位置する土坑である。HSD07溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形はやや不整な円形を呈する。規模は、長軸1.5mである。断面形は逆台形状を呈し、深さが確認面から25cmである。堆積土は3つに細分でき、褐灰色や黒褐色を呈するシルトや礫層である。遺物は、土師器細片や近世磁器、常滑甕片（423・424）などが出土している（計216g）。時期は、異なる時期の異物が混入しており判断が難しいが、もっとも新しい遺物から近世の可能性はある。

HSK19は欠番

#### HSK20（第276図）

H区東側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、北側の一部が調査区外にある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は、長軸90cm、短軸50cmである。断面形は皿状を呈し、深さが、確認面から20cmである。堆積土は3つに細分でき、黒色、黒褐色、暗褐色を呈するシルト層がある。遺物は出土していない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### HSK21（第276・290図）

H区東側に位置する土坑である。HSI09竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が古い。また、北側の一部が調査区外にある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、調査区内の現状で、長さが70cm、幅が70cmである。断面形は皿状を呈し、深さが確認面から35cm程度である。堆積土は2つに細分され、褐灰色や灰黄褐色を呈する粘土質シルトやシルト層である。遺物は土師器非ロクロ甕（421・422）や非ロクロ杯片などが出土している（計1.92kg）。時期は、重複関係や出土遺物から、古代のうちに位置づけられる。

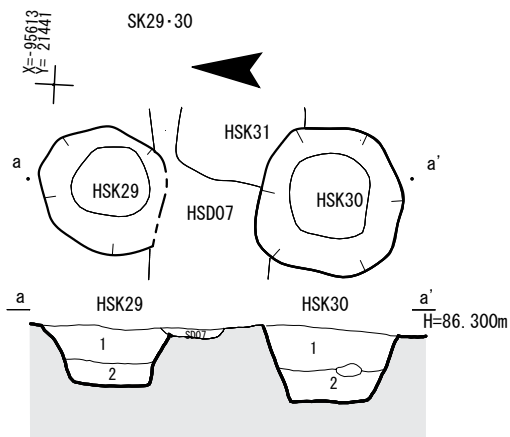
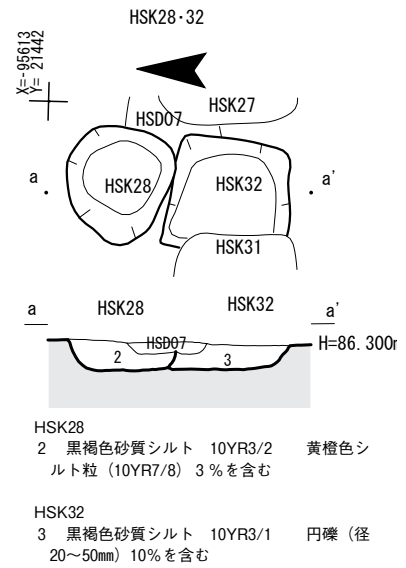
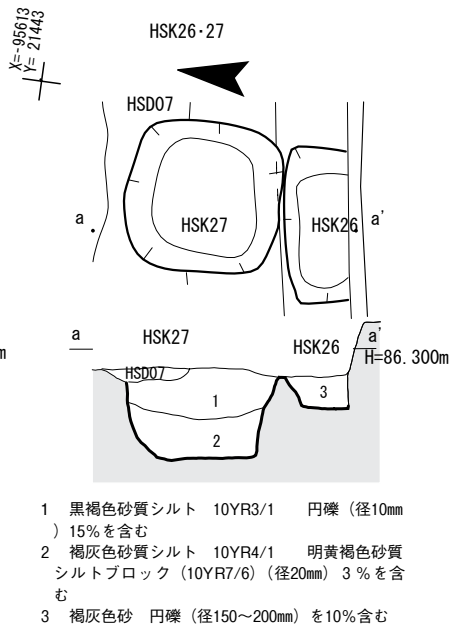
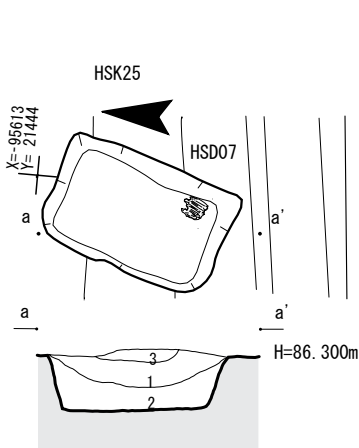
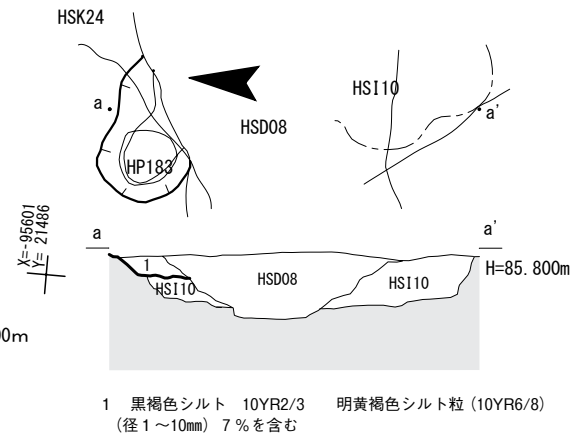
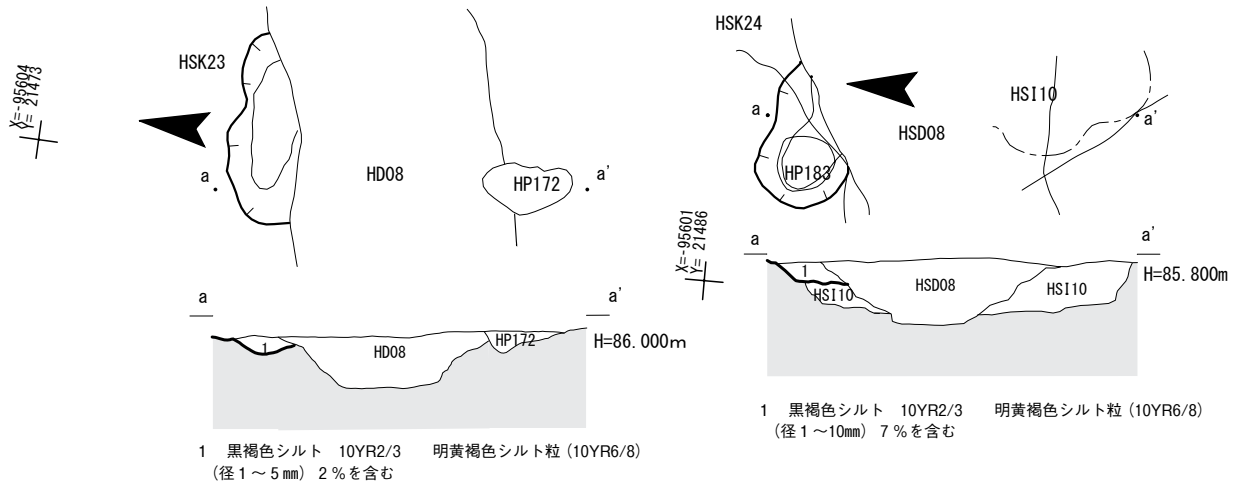
#### HSK22（第276図）

H区東側に位置する土坑である。HSD08溝跡とHP182柱穴と重複しており、いずれよりも本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は不整な方形形状を呈する。規模は、現状で、長さが1.4m、幅が0.7mである。断面形は浅い皿状を呈し、深さが確認面から10cm程度である。底面の一部には炭化物が30×20cmの範囲で広がっている。堆積土は2つあり、黒褐色や暗褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から漆町IV期以前に位置づけられる。

#### HSK23（第277図）

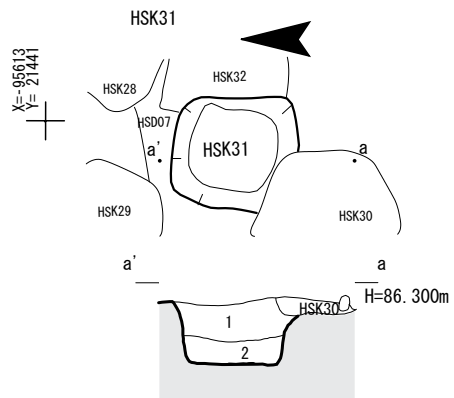
H区東側に位置する土坑である。HSD08溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は、長軸1.3m、短軸0.5mである。断面形は浅い皿状を呈し、深さが確認面から10cm程度である。堆積土は単層で、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から漆町IV期以前に位置づけられる。

3 遺構と遺物

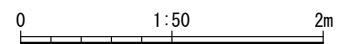


HSK29  
1 黒褐色シルト 10YR2/3 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~10mm) 3%、炭化物微量を含む  
2 黒褐色シルト 10YR2/3 円礫 (径20~40mm) 7%、黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~3mm) 1%を含む

HSK30  
1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~3mm) 1%を含む  
2 黒褐色シルト 10YR2/2 円礫 (径20~170mm) 5%、黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1mm以下) 微量を含む



1 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色シルト粒 (10YR5/6) (径1~5mm) 3%を含む  
2 黒褐色シルト 10YR2/2 円礫 (径10~50mm) 5%、黄褐色シルト粒 (10Y5/6) (径1~5mm) 1%を含む、底面に木製品、棺桶の残骸か



第277図 土坑5 H区4

**HSK24 (第277図)**

H区東側に位置する土坑である。HSI10竪穴建物跡、HSD08溝跡、HP183柱穴と重複しており、本遺構はHSI10より新しく、HSD08・HP183よりは古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は不整な楕円形状を呈すると推定されるが、重複により大部分が破壊されており、全容は不明である。現状での規模は、長軸70cm、短軸60cmである。断面形は逆台形状を呈すると予想され、深さは、確認面から15cm程度である。堆積土は単層で、黒褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は、重複関係から漆町IV期以前に位置づけられる。

**HSK25 (第277図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は隅丸の方形形状を呈する。規模は、長軸1.2m、短軸0.8mである。断面形は箱形を呈し、深さは、確認面から40cmである。堆積土は3つに細分でき、褐灰色を呈する粘土質シルト、シルトが主体である。遺物は出土していないが、底面には棺材の一部が遺存していた。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。また、付近の現代水路からは近世の銭貨が出土しており、HSK25からHSK31までのいずれかから出土したものと想定できる。

**HSK26 (第277図)**

H区東側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、北に近接してHSK27がある。また、上部には現代の排水路があり、削平を受けている。検出はI層除去後のIV層面で行っている。南側半分が調査区外にあるが、平面形は隅丸の正形状を呈すると推定する。規模は、一辺1m四方と予想される。断面形は箱形を呈し、深さは、確認面から20cmである。堆積土は単層であり、褐灰色を呈する砂礫層である。遺物は出土していないが、形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK27 (第277・290図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。また、南側に近接してHSK26がある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は隅丸の正形状を呈する。規模は、一辺が1mである。断面形は箱形を呈し、深さは、確認面から60cmである。堆積土は、2つに細分でき、黒褐色や褐灰色を呈する砂質シルトで、人為堆積である。遺物は常滑産大甕片(425)のみが出土しているが、混入であろう。遺構の形態や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK28 (第277図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡、HSK32と重複しており、前者より古く、後者より新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、やや不整な円形状を呈する。規模は、直径75cm前後である。断面形は皿形を呈し、深さは、確認面から20cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する砂質シルトである。遺物は土師器の細片がわずかに6g出土しているが混入と考えられる。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK29 (第277・293図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡と重複しており、本遺構の方が古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、不整な円形状を呈する。規模は、直径が90cmである。断面形は逆台形状を呈し、深さは、確認面から40cmである。堆積土は2つに細分でき、黒褐色を呈するシルト層であり、人為堆積である。遺物はキセル片(459)が出土するのみである。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK30 (第277・293図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡、HSK31と重複しており、前者より古く、後者よりは新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、ややいびつであるが、隅丸の正方形形状を呈する。規模は、一辺が90cm四方である。断面形は逆台形状を呈し、深さは、確認面から50cmである。堆積土は2つに区分でき、いずれも黒褐色を呈するシルト層で、人為堆積である。遺物は鉄釘片が2点(457・458)、銭貨(466)が出土している。466は、9枚が癒着しているもので、銭種は不明だが、銅銭8枚、鉄銭1枚である。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK31 (第277・293図)**

H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡、HSK30・HSK32土坑と重複しており、HSD07・HSK30よりは古く、HSK32よりは新しい。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は隅丸の正方形形状を呈する。規模は、一辺が70cm四方である。断面形は箱形を呈し、深さは、確認面から40cmである。堆積土は2つに区分でき、黒褐色を呈するシルト層で、人為堆積である。遺物は鉄釘片が2点(455・456)出土している。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSK32 (第277図)**

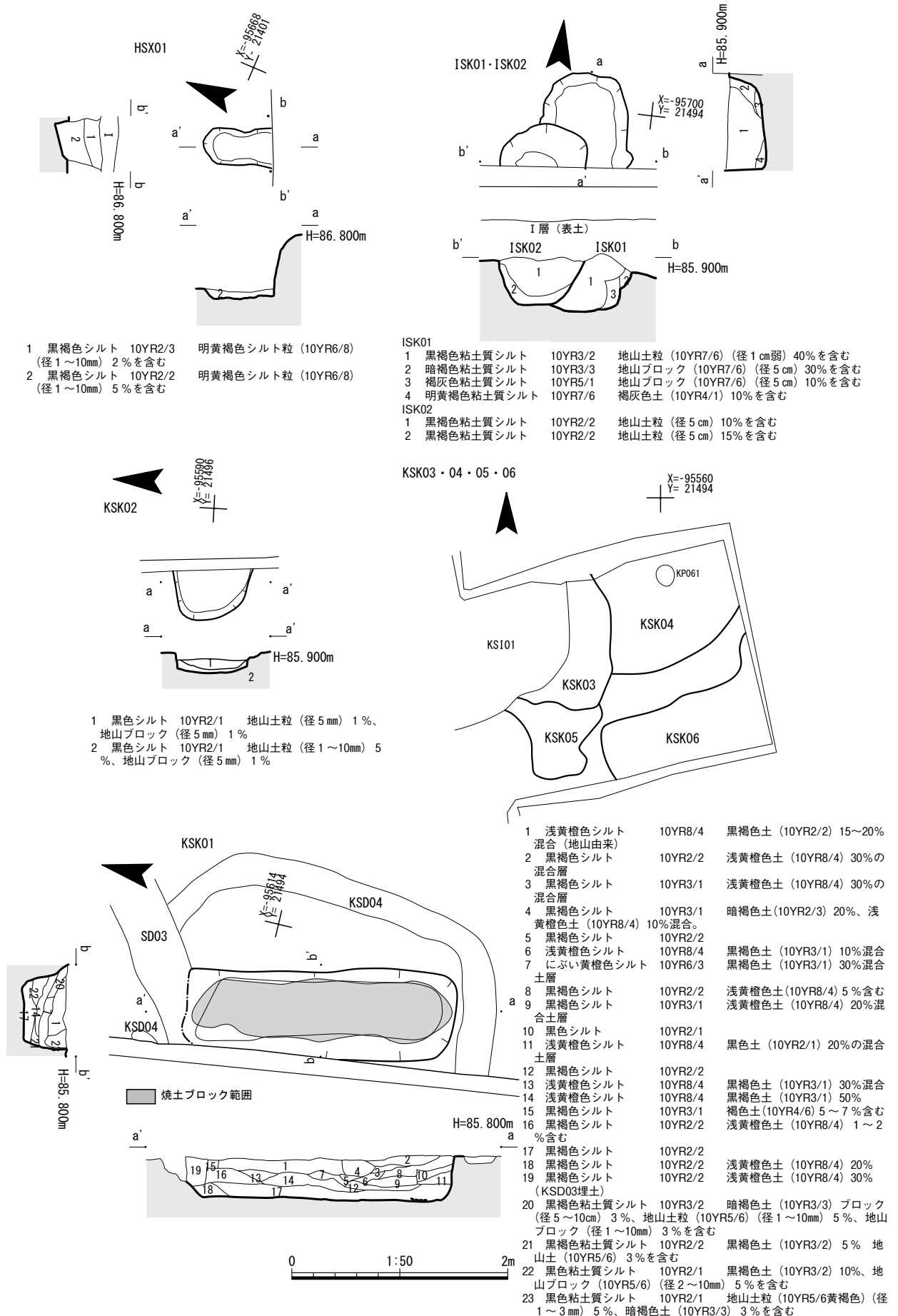
H区東側に位置する土坑である。HSD07溝跡、HSK28・HSK31近世墓と重複しており、本遺構の方がいずれよりも古い。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は正方形形状を呈する。規模は、一辺が80cm四方である。断面形は逆台形状を呈し、深さは確認面から20cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する砂質シルトである。遺物は出土していない。形状や付近に同様の遺構が集中することから、近世墓と想定している。

**HSX01 (第278図)**

H区中央に位置する土坑である。HSI06と重複しており、本遺構の方が新しい。検出はHSI06の堆積土掘削中に確認した。南側は調査区外に続き、調査区内には一部しか存在しないため全容は不明である。平面形は溝状あるいは楕円形状を呈すると予想される。規模は、調査区内の現状で、長さが65cm、幅34cm前後である。断面形は逆台形状を呈し、深さは確認面から40cmである。堆積土は2つが確認でき、いずれも黒褐色を呈するシルトである。遺物は出土していない。形状から、竪穴建物跡の煙道先端と推定しているが、不明の点も多い。時期は、古代のなかに含まれる可能性がある。

**ISK01 (第278・293図)**

I区東側に位置する土坑である。ISI01竪穴建物跡、ISK02土坑と重複する。切り合い関係からみる



第278図 土坑6 H区5・I区・K区

と、本遺構は、ISI01より新しく、ISK02よりも古い遺構である。検出はISI01の精査中に黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は隅丸形状を呈すると推定されるが、重複や調査区外に広がることから全容は不明である。現状での規模は、長さが90cm、幅が80cm程である。断面形は逆台形状を呈し、深さは、確認面から50cm程度である。堆積土は4つに細分され、黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は、堆積土中から銭貨6枚が出土した(460~465)。462以外は永楽通宝で、北側の底面よりやや上の黒褐色土に地山土粒を含む層から出土した。462は、残存状態が悪く、観察ができないが、嘉祐元寶の可能性がある。銭貨を含むことから墓壙であると考えられるが、骨・歯などは確認できない。時期は、おおまかには中世に位置づけられる。(巴)

#### ISK02 (第278図)

I区の東側に位置する。遺構の検出は、ISI01の精査中に黒褐色土の広がりをもって確認した。本遺構はISI01・ISK01と重複し、いずれの遺構よりも新しい。遺構の南側は調査区外に位置するため全容は不明である。平面形は、調査区外を含めて推定すると、楕円形もしくは隅丸形状を呈すると考えられる。確認面からの深さは40cmである。堆積土は2層に区分した。いずれも黒褐色を呈する粘土質シルトで、自然に堆積したものと考えられる。遺物は出土しなかった。時期は、重複関係から、古代を含むそれ以降と考えられる。(巴)

#### KSK01 (第278図)

K区南側に位置する土坑である。北側でKSD03と重複し、本遺構の方が古い。また重複はしていないが本遺構を囲むようにKSD04が位置している。遺構はI層除去後のIV層上面で確認した。遺構西辺の一部が調査区外に位置する。平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は長軸2.5m、短軸0.6m、確認面からの深さは0.45mである。壁の立ち上がりは場所によって異なるが、垂直に近い角度で立ち上がる。底面には焼土ブロックが広がっている。主軸方向は、N-13°-Wである。堆積土は23層に区分した。黒~黒褐色土を基調とする地山を含むシルトや地山由来によるにぶい黄褐色~浅黄橙色シルトを主体とし、黒褐色を含むシルト層が互層をなしている。遺物は土師器の細片が少量出土しているのみである(113g)。時期は、遺物などから古代のうちに位置づけられる可能性がある。(巴)

#### KSK02 (第278図)

K区のはほぼ中央に位置する土坑である。重複する遺構はなく、西側にKSI03がある。遺構はI層除去後のIV層上面で確認した。遺構の東側が調査区外にあるため、全容は不明である。平面形は、調査区外も含めて推定すると楕円形~隅丸形状を呈する。調査区内に残存する範囲で長さが68cm、幅が48cmである。確認面から底面までの深さは17cmであり、壁の立ち上がりはほぼ垂直で、断面形は箱形を呈する。堆積土は2つに区分した。いずれも黒色を呈するシルト層であり、地山土粒や地山ブロックを含む。遺物は出土しておらず、時期も不明である。(巴)

#### KSK03 (第278図)

K区の北側に位置する土坑である。KSI01の南東隅を確認するために拡張した範囲内でI層除去後のIV層上面で平面プランを確認した。KSI01竪穴住居跡、KSK04・05と重複し、KSI01より古く、KSK04・05よりも新しいとしたが、平面プランの確認だけのため、異なるかもしれない。平面形は、調査区外や重複により不明であるが、円形もしくは楕円形状を呈すると考えられる。現状での規模は、



長さが20cm以上、幅が60cm以上である。時期はKSI01よりも古いことから、漆町Ⅲ期以前となる。

#### KSK04 (第278図)

K区の北側に位置する土坑である。KSI01の南東隅を確認するために拡張した際に、I層除去後のIV層上面で平面プランを確認した。KSI01、KSK03、KP61と重複し、本遺構がいずれよりも古い。平面形は、重複や一部が調査区外にあるため全容は不明であるが、円形もしくは楕円形状を呈すると考えられる。現状での規模は、長さが60cm以上、幅が50cm以上である。検出のみのため、堆積状況などは不明である。時期はKSI01よりも古いことから、漆町Ⅲ期以前となる。(巴)

#### KSK05 (第278図)

K区の北側に位置する土坑である。KSI01の南東隅を確認するために拡張した際に、I層除去後のIV層上面で確認した。KSI01、KSK03と重複し、いずれよりも本遺構の方が古い。平面形は重複のため全容は不明であるが、不整楕円形もしくは不整円形を呈すると考えられる。現状での規模は、長さが35cm以上、幅が40cm以上である。調査は、確認のみのため堆積状況など詳細は不明である。時期はKSI01よりも古いことから、漆町Ⅲ期以前となる。(巴)

#### KSK06 (第278図)

K区の北側に位置する。KSI01の南東隅を確認するために拡張した際に、I層除去後のIV層上面で確認した。重複する遺構はないが、南側が調査区外に位置する。そのため、平面形の全容は不明であるが、確認できた範囲から隅丸方形形状を呈すると考えられる。現状での規模は、長さが80cm以上、幅が50cm以上である。平面形状の確認のみのため、堆積状況などは不明である。時期は不明である。(巴)

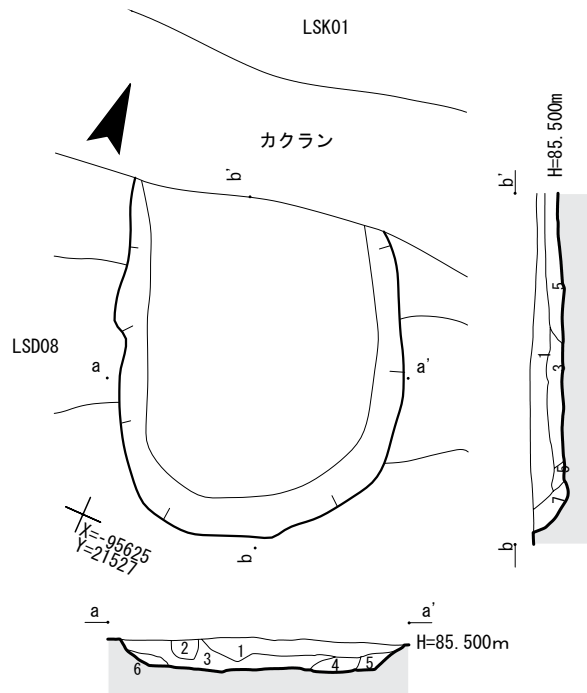
#### LSK01 (第279図)

L区の中央部やや西寄りに位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LSD08と重複し、本遺構の方が新しい。また、北側の一部が攪乱を受けて破壊されている。

平面形は、攪乱を受けた範囲も含めて推定すると、隅丸方形形状を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は、長軸2.2m、短軸1.9mであり、確認面からの深さは23cmである。断面形状は逆台形を呈する。底面は凹凸が少なく滑らかである。堆積土は7つに区分した。5層以外はいずれも黒～黒褐色土を基調とし褐色シルトを含んでいる。5層は灰褐色土を50%含む土であり、おもに南東側に堆積している。4層以下が斜堆積をしていることから自然に堆積していると推定できる。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、古代以降の可能性はある。(巴)

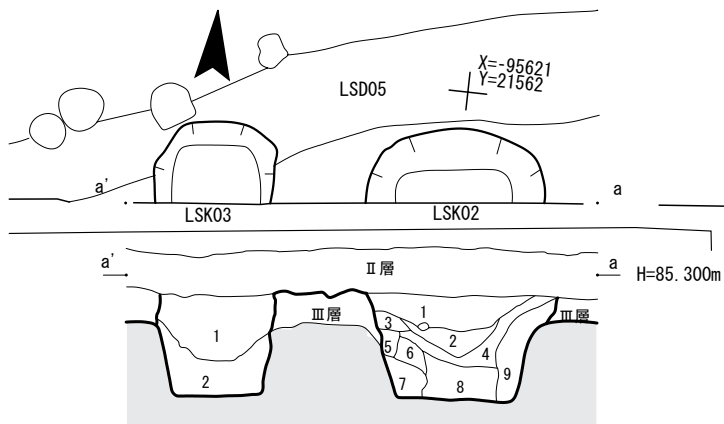
#### LSK02 (第279図)

L区の中央部に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。重複する遺構はなく、周辺にLSI03・LSK03・LSD05がある。遺構の南半分が調査区外に位置するため、全容は不明である。調査区外も含めて推定すると、平面形は楕円形か隅丸方形を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は、長軸1.2m、短軸0.5mである。確認面からの深さは52cmで、断面形状は逆台形を呈する。底面は平坦であるが西側がやや高くなる。堆積土は10層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とし、1・2層は黄褐色シルトを含み、3～6層は黄褐色シルトとの混合土である。7～9

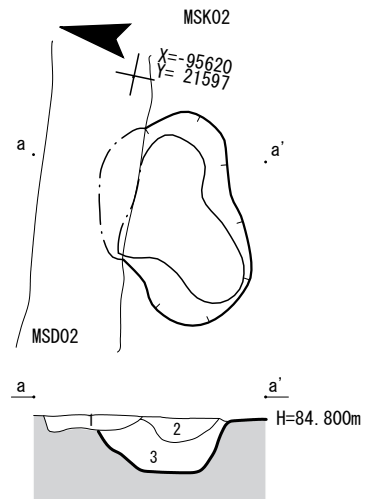


- |   |         |         |                |          |
|---|---------|---------|----------------|----------|
| 1 | 黒褐色シルト  | 10YR2/2 | 褐色土 (10YR4/4)  | 10%を含む   |
| 2 | 黒褐色シルト  | 10YR2/2 | 褐色土 (10YR4/4)  | 1~2%を含む  |
| 3 | 黒色シルト   | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4)  | 3%を含む    |
| 4 | 黒色シルト   | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4)  | 1%を含む    |
| 5 | 褐色粘質シルト | 10YR4/4 | 灰褐色土 (10YR4/1) | 50%の混合土層 |
| 6 | 黒褐色シルト  | 10YR2/2 | 褐色土 (10YR4/4)  | 1%を含む    |
| 7 | 黒色シルト   | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4)  | 1%を含む    |

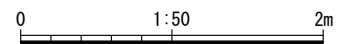
LSK02-03



- LSK02
- |   |        |         |                |           |
|---|--------|---------|----------------|-----------|
| 1 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 10~15%を含む |
| 2 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 10~15%を含む |
| 3 | 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 30%の混合土層  |
| 4 | 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 40%の混合土層  |
| 5 | 黄褐色シルト | 10YR5/6 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 20%の混合土層  |
| 6 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 50%の混合土層  |
| 7 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 褐色土 (10YR4/4)  | 10%を含む    |
| 8 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 褐色土 (10YR4/4)  | 50%の混合土層  |
| 9 | 黒色シルト  | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4)  | 3%を含む     |
- LSK03
- |   |       |         |               |       |
|---|-------|---------|---------------|-------|
| 1 | 黒色シルト | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4) | 3%を含む |
| 2 | 黒色シルト | 10YR2/1 | 褐色土 (10YR4/4) | 3%を含む |



- MSK02
- |   |        |         |               |         |                 |
|---|--------|---------|---------------|---------|-----------------|
| 1 | 黒色シルト  | 10YR2/1 | 黄橙色 (10YR7/8) | シルトブロック | 3%を含む           |
| 2 | 黒褐色シルト | 10YR2/2 | 黄橙色 (10YR7/8) | シルトブロック | 1%を含む=SK02      |
| 3 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黄橙色 (10YR7/8) | シルトブロック | (径5cm程度) 10%を含む |



第279図 土坑7 L区1・M区1

層は褐色シルトとの混入と混合土層である。遺物は、須恵器甕片や近代磁器片などがわずかに出土するのみである（計34.7g）。したがって、時期も不明である。（巴）

#### LSK03（第279図）

L区の中央に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。LSD05と重複し、本遺構が新しい。また遺構の南半分が調査区外に位置している。東側に隣接してLSK02がある。遺構の南側が調査区外にあるため全容は不明であるが、平面形は楕円形か隅丸方形を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は、長軸81cm、短軸54cmで、確認面からの深さは43cmである。断面形状は箱形を呈する。堆積土は上下2層に区分した。いずれも黒色土を基調としており、2層にのみ褐色シルトが微量確認できる。遺物は出土していない。時期は、重複関係から、漆町IV期以降である。（巴）

#### LSK04（第280図）

L区の中央よりやや西に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。当初、本遺構は円形周溝状の遺構と考えていたが、調査を進めていく段階で土坑と確認した。本遺構と重複する遺構はないが、周辺にLSD02が位置する。遺構の南半分が調査区外に位置している。調査区外を含めて推定すると、平面形は不整楕円形もしくは隅丸方形を呈すると考えられる。確認できた範囲で長軸8.8m、短軸2.0mである。断面形は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、西側が20cm程下がっている。深さは東側が20cm、西側の低い箇所が40cmである。堆積土は18層に細分できる。西から東に向かって斜堆積が確認できるため、自然堆積であると考えられる。遺物は土師器の細片や須恵器甕片などが出土している（計263.6g）。時期は、遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。（巴）

#### MSK01（第280図）

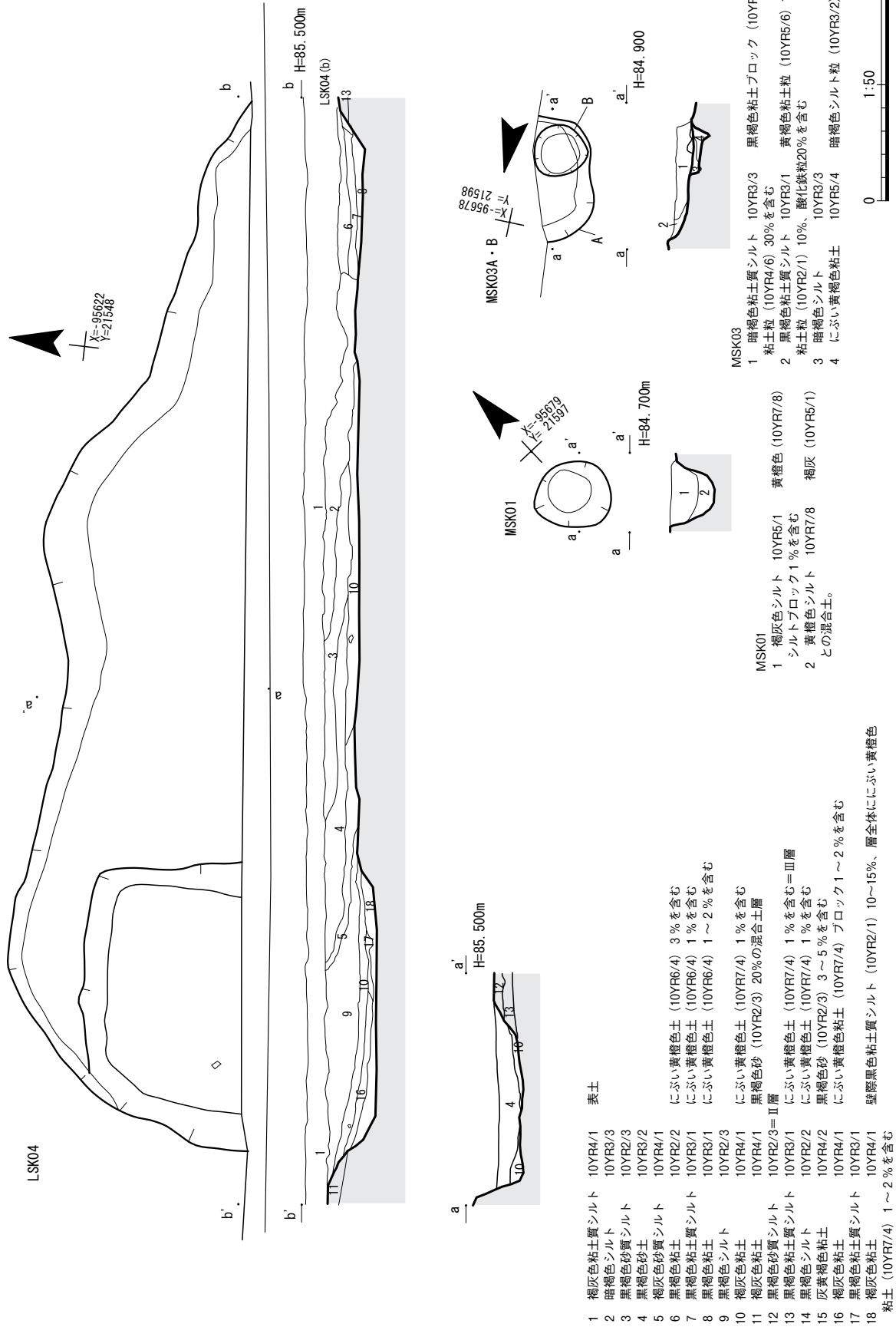
M区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。重複する遺構はない。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、径が65×60cm、深さが40cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は2つに細分できる。褐灰色や黄橙色を呈するシルト層である。遺物は土師器の非ロクロ甕片が少量出土している（計89.8g）。時期は、遺物からみると古代に位置づけられる可能性があるが、明確ではない。

#### MSK02（第279図）

M区北部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。MSD02と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は、径が1.4×0.9m、深さが0.4mである。断面形は皿状を呈する。堆積土は2つに細分できる。いずれも黒褐色を基調とするシルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

#### MSK03A・B（第280図）

M区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。上下に重複し、上位に位置する（新しい）ものをMSK03A、下位に位置するもの（古い）をMSK03Bとする。MSK03Aは、東半分が排水路によって破壊されており全容は不明である。平面形は、楕円形状を呈すると推定される。現状での規模は、長さが1.1m、幅が0.5mである。深さは10cm程度である。堆積



第280図 土坑8 L区2・M区2

土は2つに細分でき、暗褐色から黒褐色を呈する粘土質シルトである。MSK03Bは、MSK03Aよりも古い遺構であり、平面形は円形を呈する。規模は、径46cm、深さが10cmである。堆積土は、堆積土は2つに細分でき、暗褐色シルトやにぶい黄褐色粘土である。遺物は土師器の細片が27.3g出土している。時期は、いずれも遺物が少なく判断できないため不明である。

#### MSK04 (第281図)

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はないが、北にMSK05、東にMSK16が隣接する。平面形は8の字状を呈し、規模は、長軸が90cm、短軸が60cm、深さが20cmである。断面形は箱形を呈する。堆積土は4つに細分できる。暗褐色や黒褐色を呈する粘土質シルトが主体であり、焼土粒や炭化物を含む層が多い。遺物は土師器ロクロ杯（内黒、非内黒）片やロクロ甕片など551gが出土している。時期は、出土遺物からみると、漆町IV期に位置づけられる。

#### MSK05 (第281・290・292図)

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はないが、南に隣接してMSK04がある。平面形は、円形を呈し、規模は、直径が70cm、深さが確認面から30cmである。断面形は底面がやや凹む箱形を呈する。堆積土は3つに細分できる。黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は土師器の非内黒ロクロ杯(427・428)や内黒のロクロ杯(426)や、ロクロ甕、非ロクロ甕片、磨石(452)などが出土している(計967g)。時期は、出土遺物からみると、漆町IV期に位置づけられる。

#### MSK06A (第281図)

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。MSK06Bと重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸58cm、短軸42cm、深さが確認面から18cmである。断面形はやや深い皿状を呈する。堆積土は3つに細分できる。暗褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は、MSK06Bと合わせて、土師器ロクロ杯片などが出土している(計48g)。時期は、出土遺物からみると、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

#### MSK06B (第281図)

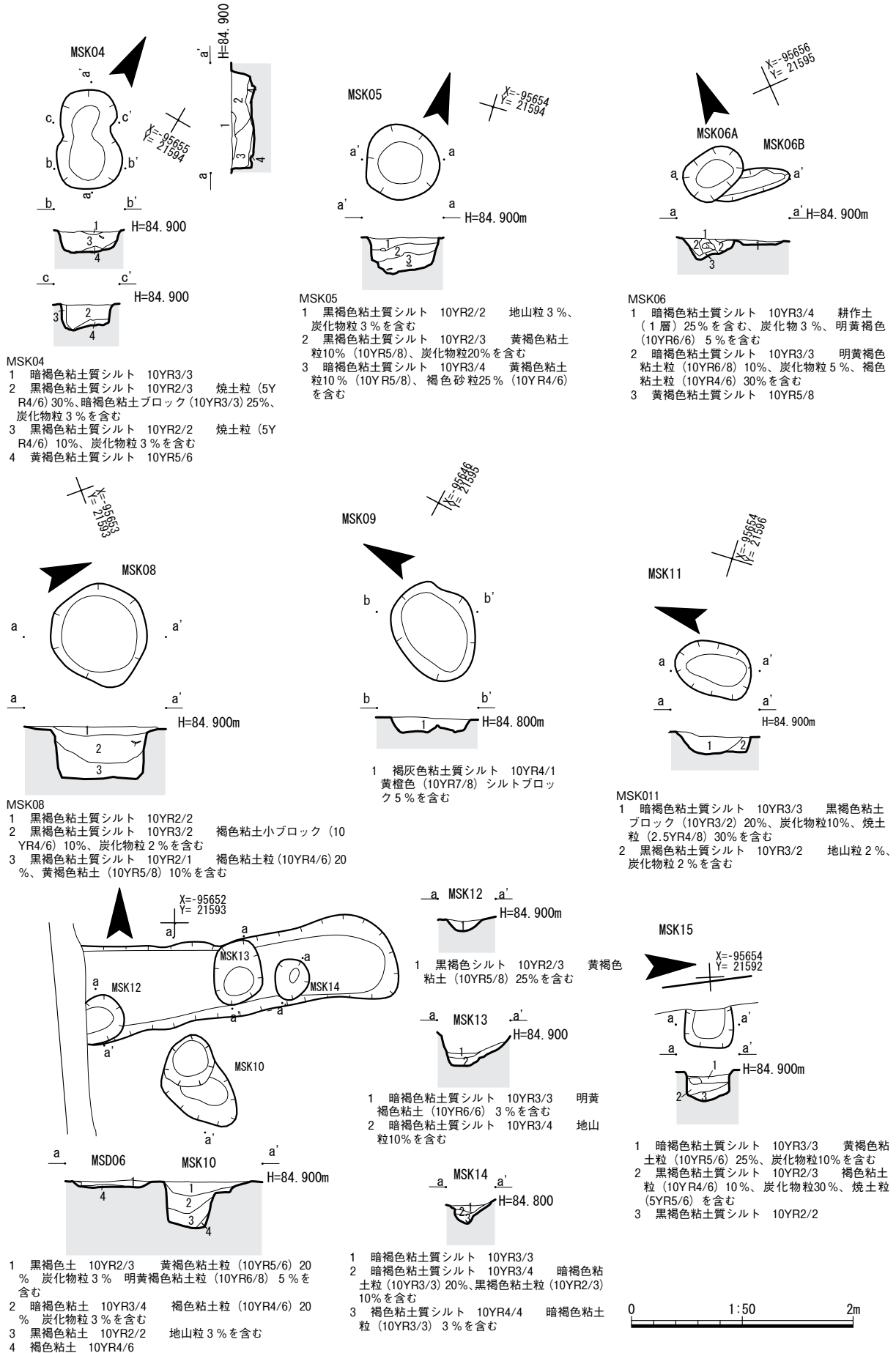
M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。MSK06Aと重複しており、本遺構の方が古い、切り合い関係はわずかである。平面形は、細長い楕円形状を呈し、規模は、長さが54cm、幅が25cmであり、深さが確認面から8cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層であり、暗褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、MSK06Aと合わせて、土師器ロクロ杯片(47.5g)が出土している。時期は、出土遺物からみると、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

#### MSK07→欠番

#### MSK08 (第281図)

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との

3 遺構と遺物



第281図 土坑9 M区3

重複はないが、北側に近接してMSD06がある。平面形は、円形状を呈し、規模は、直径90cmであり、深さが確認面から48cmである。堆積土は3つに細分できる。断面形は箱形を呈する。いずれも黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は、土師器ロクロ杯片（非内黒）、ロクロ甕片など259g出土している。時期は、出土遺物からみると、漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。

#### MSK09（第281図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。MSI01と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸94cm、短軸78cm、深さ15cmである。断面形は、底面がやや盛りあがるが逆台形状を呈する。堆積土は単層であり、褐灰色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土していないため、明確な時期は不明である。

#### MSK10（第281図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はないが、北に近接してMSD06がある。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸90cm、短軸58cm、深さが確認面から40cmである。堆積土は4つに細分できる。黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。底面は、浅い皿状の部分とそれよりも深い部分がある。遺物は、土師器ロクロ杯やロクロ甕などが236g出土している。時期は、出土遺物からみると、漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。

#### MSK11（第281図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はないが、MSK20と西側で隣接している。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸70cm、短軸48cm、深さが確認面から14cmである。断面形はおもに逆台形状を呈する。堆積土は2つに細分でき、暗褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は土師器の細片がわずか4.4g出土するのみである。時期は、遺物が少なく明確ではないが、付近の土坑と同様の、漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。

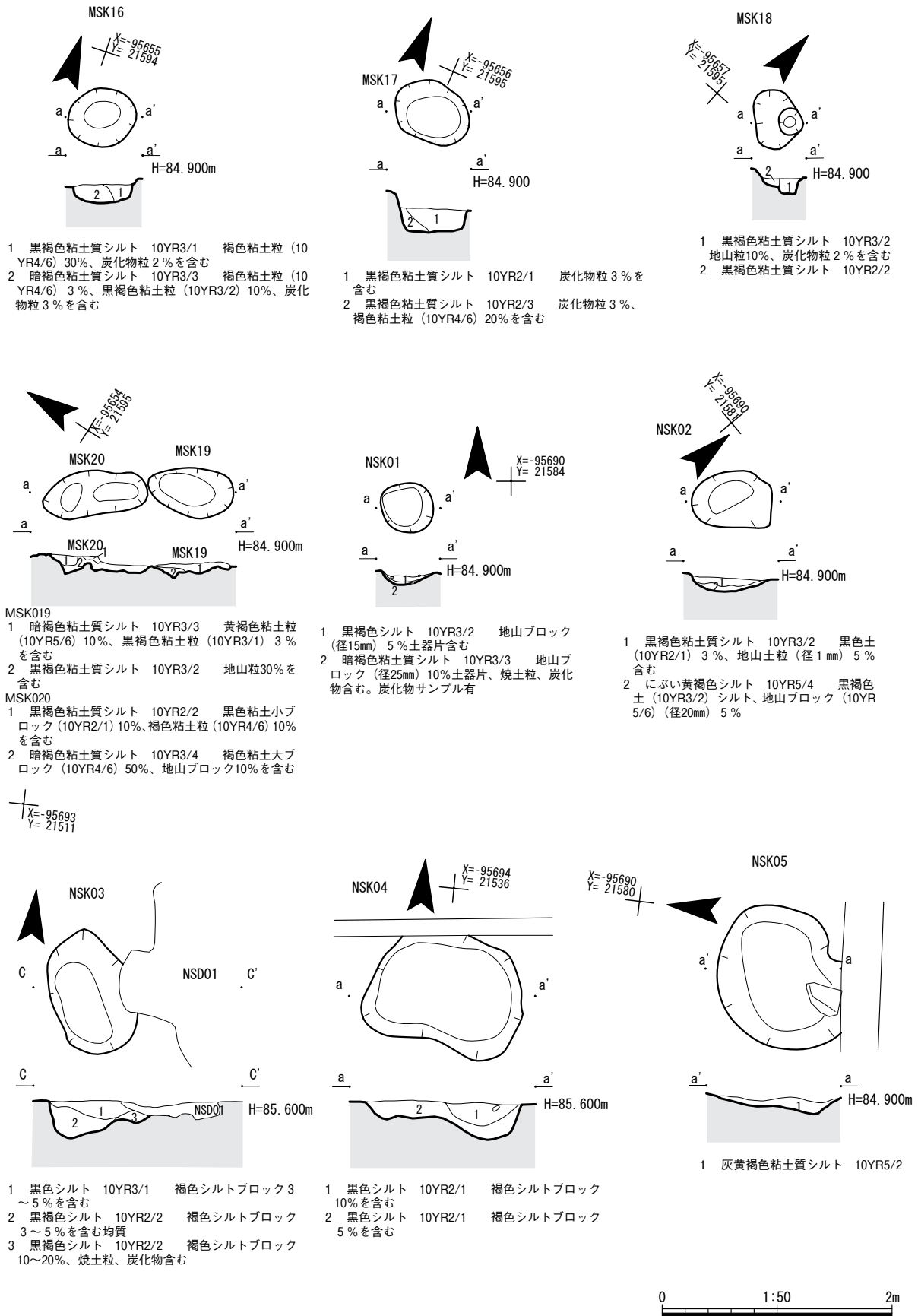
#### MSK12（第281図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。MSD06と重複しており、本遺構の方が新しい。西側の一部が調査区外にある。平面形は、円形状を呈すると推定でき、規模は、径が40cm、深さが確認面から10cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土していない。時期は、重複や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町Ⅳ期に位置づけることが可能であるが明確ではない。

#### MSK13（第281図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。MSD06重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸55cm、短軸42cm、深さが確認面から30cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2つに細分できる。暗褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は出土していない。時期は、重複や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町Ⅳ期の可能性があるが明確ではない。

3 遺構と遺物



第282図 土坑10 M区 4



**MSK14 (第281・290図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。MSD06と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸40cm、短軸30cm、深さが確認面から20cmである。断面形はゆるやかなV字形を呈する。堆積土は3つに細分できる。暗褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は須恵器杯の底部片(433)が出土している。時期は、重複や出土遺物から、漆町IV期に位置づけられる。

**MSK15 (第281・290図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。西側の一部が調査区外にあるため、全容は不明である。平面形は、隅丸方形形状を呈すると推定され、現状での規模は、長さが34cm、幅が44cm、深さが確認面から30cmである。断面形は箱形を呈する。堆積土は3つに細分できる。黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は、土師器ロクロ杯(429~432)やロクロ甕片が出土している(計487g)。時期は、遺物からみて、漆町IV期に位置づけられる。

**MSK16 (第282図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はないが、西に近接してMSK04がある。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸60cm、短軸50cm、深さが確認面から20cmである。断面形はゆるやかな箱形を呈する。堆積土は2つに細分できる。黒褐色や暗褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は土師器ロクロ杯など細片が出土している(計36.3g)。時期は、遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

**MSK17 (第282図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸70cm、短軸50cm、深さが確認面から30cmである。堆積土は2つに細分できる。断面形は箱形を呈する。黒褐色を呈する粘土質シルトが主体である。遺物は土師器ロクロ杯やロクロ甕の細片が出土している(計107g)。時期は、遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことなどから、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

**MSK18 (第282図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はないが、北西側にMSK17がある。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸52cm、短軸40cm、深さが確認面から12cmである。断面形は浅い皿形を呈するが、西側の一部が円形に窪んでいる。堆積土は2つに細分できる。黒褐色を呈する粘土質シルトを主体とする。遺物は土師器ロクロ杯片や鉢片が出土している(計63g)。時期は、遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことなどから、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

**MSK19 (第282・292図)**

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重

複はないが、北側に隣接してMSK20がある。平面形は、細長い楕円形状を呈し、規模は、長軸73cm、短軸42cm、深さが確認面から10cm程度である。断面形は浅い皿形を呈し、底面はやや凹凸がある。堆積土は2つに細分でき、暗褐色や黒褐色を呈する粘土質シルトがある。遺物は、土師器ロクロ杯片、磨石（454）などが出土している（計583g）。時期は、出土遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。

#### MSK20（第282図）

M区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はないが、南に隣接してMSK19がある。平面形は、細長い楕円形状を呈し、規模は、長軸90cm、短軸40cm、深さが確認面から15cmである。断面形は浅い皿形を呈するが、底面は北側と南側の双方に凹みがある。堆積土は2つに細分できる。暗褐色や黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は、土師器ロクロ杯片、ロクロ甕片などが259g出土している。時期は、出土遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。

#### NSK01（第282・290図）

N区の東側で確認した。遺構の検出はⅣ層で、黒褐色土の広がりでも確認した。重複する遺構はなく、周辺にはNSI01やNSL01がある。平面形は、円形を呈し、規模は、直径44cm、深さ10cmである。断面形は、浅い皿状を呈する。堆積土は2層に区分する。黒褐色や暗褐色を呈するシルト層で、土器を含んでいる。2層は焼土や炭化物を含み、地山ブロックも1層に比べてやや多い。自然に堆積したものと考えられる。遺物はロクロ甕底部片（434）や細片が出土している（計180g）。時期は出土遺物から漆町Ⅳ期の可能性がある。（巴）

#### NSK02（第282図）

N区の東側に位置する土坑である。遺構の検出はⅣ層で行い、黒褐色土の広がりでも確認した。重複する遺構はなく、周辺にはNSK01やNSL01がある。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸70cm、短軸50cm、深さ15cmである。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は上下2層に区分した。1層は黒褐色粘土質シルトで、黒色土や地山土粒を含んでいる。2層は地山土（Ⅳ層）に似たにぶい黄褐色シルトで、1層や地山ブロックを多く含んでいる。遺物は、土師器の細片がわずかに出土しているのみである（計26.3g）。時期は、遺物を重視すると漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。（巴）

#### NSK03（第282図）

N区の西側に位置する土坑である。遺構の検出はⅣ層で行った。NSD01と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸110cm、短軸70cm、深さ30cmである。断面形は皿形を呈する。底面は西が深く東が浅い。堆積土は3つに細分できる。黒色から黒褐色を呈するシルト層である。遺物は、磨石（515g）が出土するのみである。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### NSK04（第282図）

N区の中央に位置する土坑である。遺構の検出はⅣ層で行い、黒色土の広がりでも確認した。重複する遺構はなく、北側の一部が調査区外にある。平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.3mである。断面形は浅い皿形を呈するが、東側が深くなっている。堆積土は2つ

に細分できる。いずれも黒色を呈するシルト層である。遺物は、土師器ロクロ甕・非ロクロ甕片や須恵器杯片が出土している（計99.7g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### NSK05（第282図）

N区の東側に位置する土坑である。遺構の検出はIV層で行い、灰黄褐色の広がりを確認した。重複する遺構はないが、南側の一部が調査区外にある。平面形は、不整な楕円形状を呈する。規模は、長軸1.3m、短軸1.0mである。深さは、確認面から14cmと浅く、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は1層のみ確認し、灰黄褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は土師器の細片や須恵器杯片、剥片が少量出土している（計61.4g）。時期は遺物が少なく判断できないため不明である。（巴）

#### NSK06（第283図）

調査区としてはP区に位置するが、N区と同一に調査を行ったため、N区に含めている。遺構の検出は、道路盛土層除去後のIV層で行っている。他遺構との重複はない。平面形は、円形状を呈し、規模は直径60cm、深さ12cmである。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は、黒褐色を呈する粘土質シルト層のみである。遺物は、土師器ロクロ甕片などの細片が少量出土しているのみである（計65.3g）。時期は、遺物が少なく明確に判断できないため不明である。

#### NSK07（第283図）

調査区としてはP区に位置する土坑である。N区と同一に調査を行ったため、N区に含めている。遺構の検出は、道路盛土層除去後のIV層で行っている。他遺構との重複はない。平面形は、円形状を呈し、規模は直径64cm、深さ15cmである。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は、2つに細分でき、1層は黒色を呈するシルト層、2層は褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は、土師器ロクロ甕片などの細片が27.3g出土しているのみである。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### NSK08（第283図）

P区に位置する土坑である。N区と同一に調査を行ったため、N区に含めている。遺構の検出は、道路盛土層除去後のIV層で行っている。NP048・049と重複し、本遺構の方が新しい。西側の一部が調査区外にあるため全容は不明である。平面形は、長い楕円形状を呈すると推定できる。現状での規模は長軸1.4m、短軸0.9mである。深さは、10cmと浅い。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は、黒褐色を呈するシルト層のみである。遺物は、土師器の細片がわずか出土しているのみである（計21.6g）。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

#### NSK09（第283図）

P区に位置する土坑である。N区と同一に調査を行ったため、N区に含めている。遺構の検出は、道路盛土層除去後のIV層で行っている。他遺構との重複はないが、東側の一部が調査区外にある。平面形は、楕円形状を呈すると推定される。現状での規模は、直径60cm、深さ12cmである。断面形は皿形から箱形状を呈する。堆積土は、黒色を呈するシルト層のみである。遺物は、土師器ロクロ杯片、ロクロ甕片などが118g出土している。時期は、遺物が少なく明確でないが、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

OSK01 (第283・290～292図)

〇区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。平面形は、隅丸方形から楕円形状を呈し、規模は、長軸1.3m、短軸1mであり、深さが確認面から0.4mである。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈する。堆積土は2つに細分できる。黒色や黒褐色を呈するシルト層である。遺物は、土師器ロクロ杯片、ロクロ甕(437)、須恵器杯(436)・甕片、石器の剥片、ミニチュア土器(435)、磨石(450)などが出土している(計1.9kg)。時期は、出土遺物や付近の遺構と同様の様相を示すことから、漆町IV期に位置づけられる。

OSK02 (第283図)

〇区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長軸1.3m、短軸0.6mである。深さが確認面から30cmで、断面形は箱形を呈する。土坑の東端は袋状に掘り込まれている。堆積土は2つに細分できる。黒色や黒褐色を呈するシルト層である。遺物は、土師器の細片や石器の剥片など計6.5gのみ出土している。時期は、出土遺物が少なく他に情報がないため不明である。

OSK03 (第283図)

〇区中央北寄りに位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。平面形は、楕円形状を呈し、規模は長軸80cm、短軸64cm、深さが確認面から28cmである。断面形は、皿状を呈する。堆積土は、黒褐色を呈するシルト層のみである。遺物は、土師器高台杯片が11.8gのみ出土する。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

OSK04 (第283・291図)

〇区中央南寄りに位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。OSB04を構成する柱穴OP071と重複しており、それよりも新しい遺構である。平面形は、円形状を呈し、規模は、径50cm程度である。深さは、確認面から32cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は黒色を呈するシルト層のみである。遺物は、土師器の内黒杯(439)や非内黒ロクロ杯(438)やロクロ甕(440・441)などが出土している(867g)。時期は、出土遺物を重視すると、漆町IV期(平安時代)に位置づけられる。

OSK05 (第283・292図)

〇区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はないが、東に隣接してOSI04がある。平面形は、長い隅丸方形を呈し、規模は、長軸2.2m、短軸0.8mであり、南側の一部が崩落によるためか張り出している。深さは、確認面から22cmである。断面形は箱形状を呈している。堆積土は2つに細分できる。黒色や暗褐色を呈するシルト層である。遺物は、土師器ロクロ杯片、非ロクロ甕片、石器剥片、磨石(453)などが出土している(1.52kg)。時期は、出土遺物を重視すると、漆町IV期に位置づけられる。

OSK06 (第284図)

〇区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。OSI02堅穴建物跡、OP100と重複するが、いずれよりも新しい。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸1.5m、

短軸1.2mである。深さは、確認面から30cmである。断面形は、逆台形状を呈している。堆積土は単層で、黒色を呈するシルトである。遺物は、土師器ロクロ杯片、ロクロ甕片など460g出土している。時期は、出土遺物を重視すると、漆町Ⅳ期に位置づけられる。

#### OSK07 (第284図)

〇区南部に位置する陥し穴状の土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。OSI03竪穴建物跡と重複するが、本遺構はそれよりも古い遺構である。遺構の南東側は調査区外にある。平面形は、細長い楕円形状を呈すると推定される。規模は現状で、長軸3.3m、短軸0.7mである。深さは、確認面から1mである。断面形は、V字形を呈している。堆積土は3つに細分され、黒色シルトや黄褐色粘土層があり、自然堆積と考えられる。遺物は、土師器の細片3.3gや石器剥片2.6gのみ出土している。時期は、遺構の形状から縄文時代に位置づけられると推定している。

#### OSK08 (第284・292図)

〇区南部に位置する陥し穴状の土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。OSI02竪穴建物跡と重複するが、本遺構はそれよりも古い遺構である。平面形は、細長い楕円形状を呈する。規模は、長軸3m、短軸0.8mである。深さは、確認面から1.1mである。断面形は、V字形を呈している。堆積土は4つに細分され、黒色シルトや黄褐色粘土層などがあり、自然堆積と考えられる。遺物は、土師器のロクロ甕の細片18.5gや凹み石(449)が出土している(計835g)。時期は、遺構の形状から縄文時代に位置づけられると推定している。

#### OSK09 (第284図)

〇区中央の北寄りに位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はないが、東側の大部分が調査区外にある。平面形は、楕円形状を呈すると推定できるが、詳細は不明である。規模は現状で、長軸94cm、短軸20cmである。深さは、確認面から28cmである。断面形は、皿形を呈している。堆積土は単層で、黒色を呈するシルトである。遺物は出土していない。時期は、判断できる根拠がないため不明である。

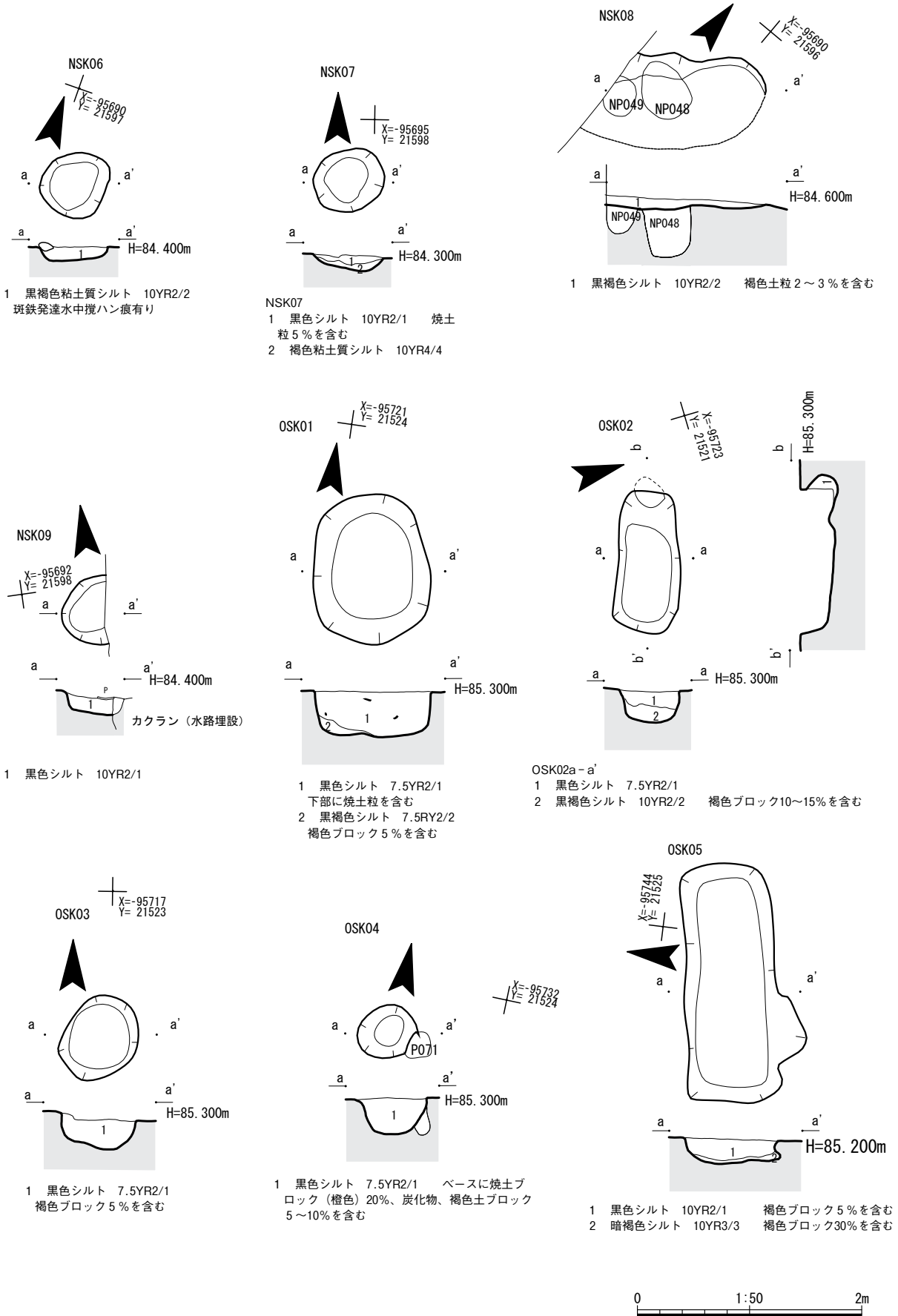
#### OSK10 (第284図)

〇区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。OSD06溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は、方形を呈すると予想されるが、西側が調査区外にあることや、重複により全容は不明である。規模は、調査区内の現状で、長軸90cm、短軸90cmである。深さは、確認面から10cm前後である。断面形は、浅い皿状を呈すると推定している。堆積土は確認できなかった。遺物は、出土していない。時期は、重複関係からみると古代のなか(漆町Ⅳ期以前)に位置づけられる。

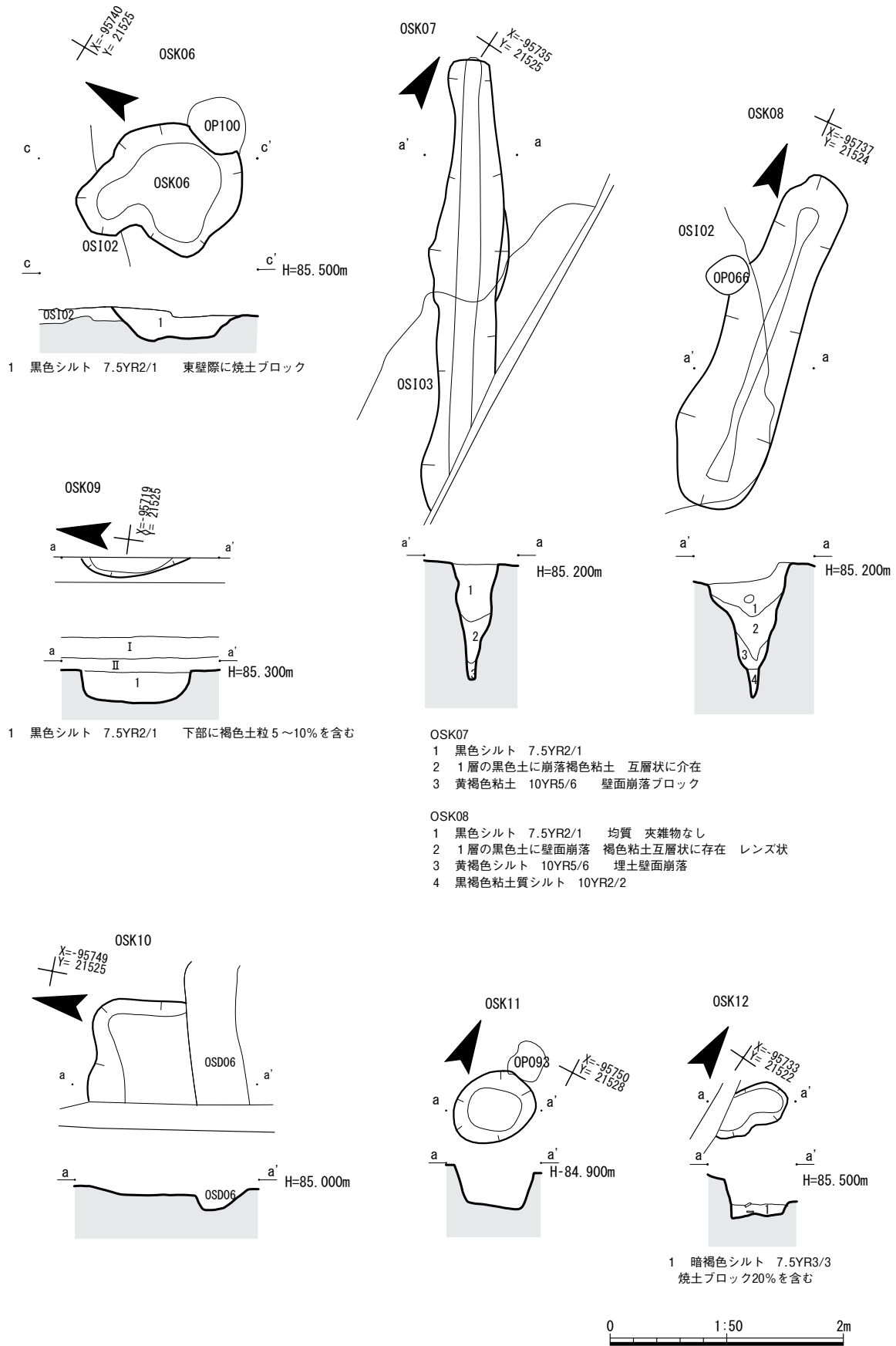
#### OSK11 (第284・291図)

〇区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はないが、北側でOP093と接する。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸70cm、短軸60cmである。深さは、確認面から30cmである。断面形は、逆台形状を呈している。堆積土は確認していない。遺物は、土師器ロクロ杯(442)、ロクロ甕(443)などが出土している(316g)。時期は、出土遺物を重視すると、

3 遺構と遺物



第283図 土坑11 N区・O区1



第284図 土坑12 O区2

漆町Ⅳ期（平安時代）に位置づけられよう。

**OSK12（第284図）**

〇区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。OSB04掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、西側の一部が調査区外にあるため、全容は不明である。平面形は、不整な楕円形状を呈すると推定され、規模は、調査区内での現状で、長軸70cm、短軸が38cmである。深さは、確認面から10cmであり、断面形は、逆台形状を呈している。堆積土は単層で、暗褐色を呈するシルトで、焼土ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。時期は、判断する証拠がほとんどないため不明である。

**OSK13（第285図）**

〇区北部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。OP118と重複するが、本遺構はそれよりも古い。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸1.1m、短軸0.6mである。深さは、確認面から36cmである。断面形は、箱形を呈している。堆積土は単層で、黒色を呈するシルトである。遺物は、石器の剥片が0.8gのみ出土している。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

**QSK01（第285図）**

Q区南部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。SSD02溝跡と重複し、本遺構の方が古いと判断している。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸80cm、短軸70cmである。深さは、確認面から20cmである。断面形は、逆台形状を呈している。堆積土は確認できなかった。遺物は、手づくねかわらけ片が41.3g出土している。時期は、出土遺物を重視すると、12世紀後半代に位置づけられる。

**QSK02（第285図）**

Q区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はない。遺構の東半分が調査区外にあるため全容は不明である。平面形は、楕円形状を呈すると推定され、規模は、現状で長軸1.5m、短軸40cmである。深さは、確認面から55cmである。断面形は、中央が凹む皿形を呈している。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や黒色を呈するシルトや粘土質シルトである。遺物は、土師器の細片（4.6g）が出土するのみである。時期は、遺物が少なく判断できないため不明である。

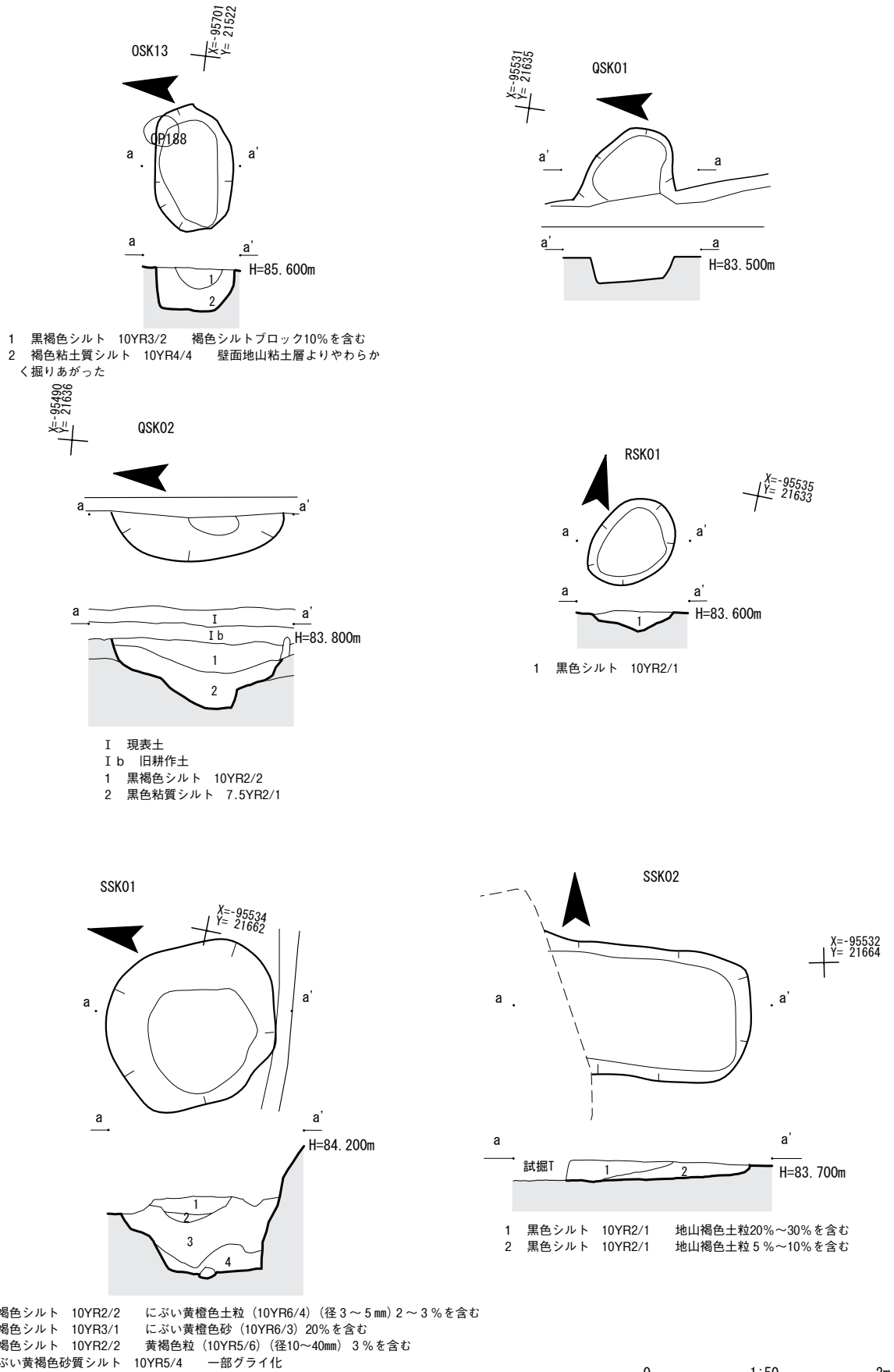
**RSK01（第285図）**

R区西部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複はない。平面形は、楕円形状を呈し、規模は、長軸85cm、短軸64cmである。深さは、確認面から18cmである。断面形は、浅い皿状を呈している。堆積土は単層で、黒色シルト層である。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠が無いため不明である。

**SSK01（第285・291図）**

S区東部に位置する土坑である。遺構の確認は、Ⅰ層除去後のⅣ層上面で行った。他遺構との重複





第285図 土坑13 O区3・Q区・R区・S区

はない。平面形は、不整な円形状を呈し、規模は、直径1.4m、深さ0.7mである。断面形は、崩れているが逆台形状を呈している。堆積土は4つに細分できる。黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器の細片や手づくねかわらけ小皿(444)がわずかに出土するのみである(計29g)。時期は、出土遺物から古代や12世紀に属する可能性があるが、明確に判断できない。

#### SSK02 (第285・292図)

S区東部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。西側の一部がカクランによって破壊されており、全容は不明である。平面形は、長方形を呈すると推定している。規模は、現状で長軸1.6m、短軸1.1mである。深さは、確認面から15cmである。断面形は、皿状を呈している。堆積土は2つに細分され、いずれも黒色を呈するシルト層である。遺物は、須恵器甕片、砥石(451)が出土している(計623g)。時期は、出土遺物を重視すると、漆町IV期(平安時代)に位置づけられる可能性がある。

#### TSK01 (第286図)

T区中央部に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。他遺構との重複はない。北側の一部が調査区外にあるため全容は不明である。平面形は、方形あるいは台形状を呈すると推定される。規模は、調査区内の現状で長さ90cm、幅90cmである。深さは、確認面から32cmである。断面形は、中央が凹む箱形を呈している。堆積土は4つに細分でき、黒色や黒褐色を呈するシルト層が主体である。遺物は、土師器非ロクロ甕片などが出土している(計57g)。時期は、出土遺物が少なく判断できないため不明である。

#### USK01 (第286図)

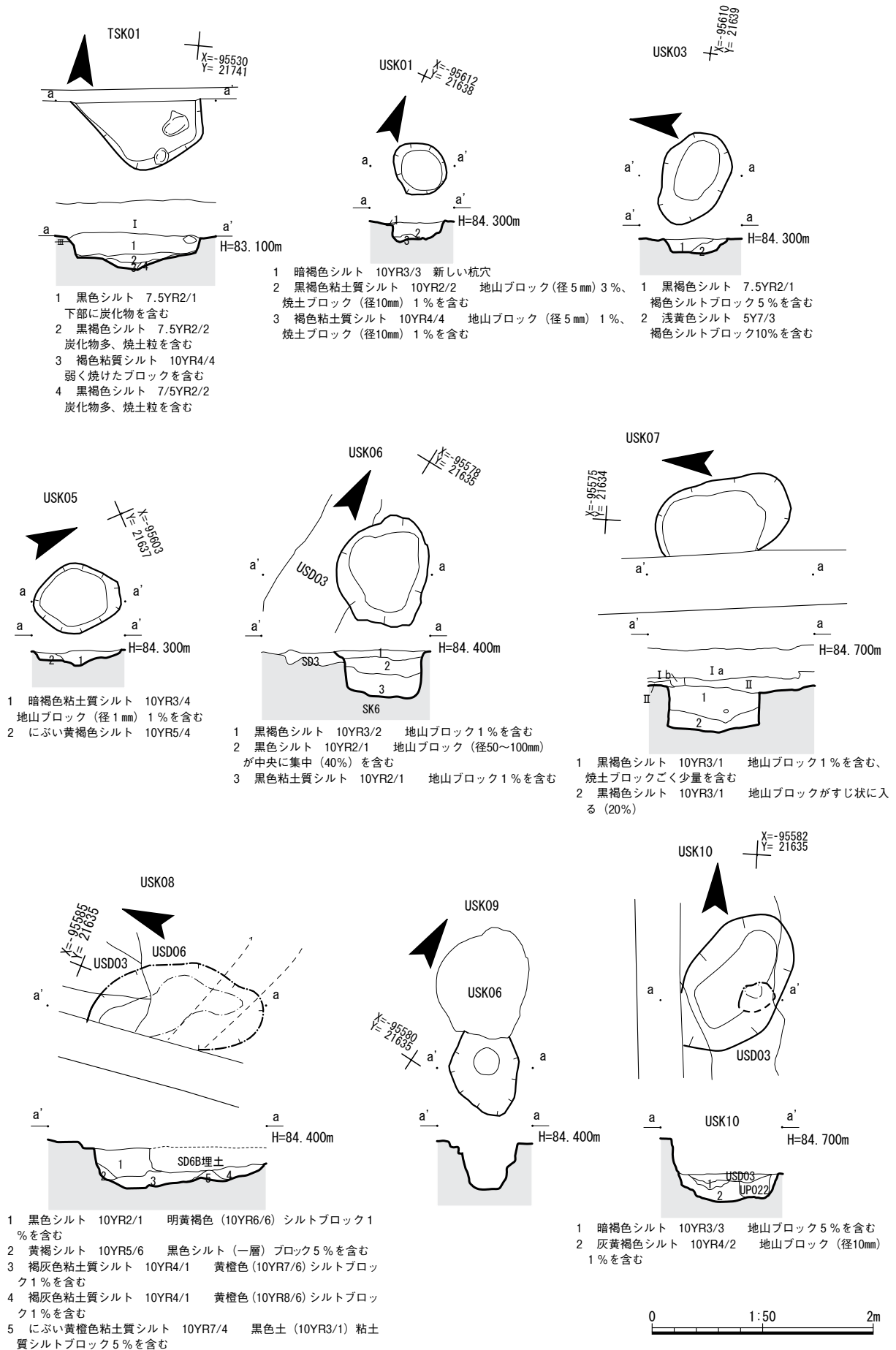
U区の南側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。重複する遺構はなく、南側にUSK34が位置する。規模は長軸52cm、短軸44cmである。平面形は楕円形状を呈する。確認面からの深さは19cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3層に区分した。1層は杭痕であると考えられる。2・3層は黒褐色や褐色を呈する粘土質シルトで、地山ブロックと焼土ブロックを含む。遺物は出土しない。時期は、判断できる材料がないため不明である。(巴)

USK02→欠番

#### USK03 (第286図)

U区の南側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。重複する遺構はないが、周辺にはUSK01が位置する。平面形は、楕円形状を呈し、規模は長軸88cm、短軸59cmである。確認面からの深さは14cmで、断面形状は逆台形状を呈する。堆積土は2つに区分した。1層は黒褐色、2層は浅黄色を呈するシルト層である。斜堆積であるため自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。時期は、判断できる材料がないため不明である。(巴)

USK04→欠番



第286図 土坑14 T区・U区1

#### USK05 (第286図)

U区の南側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。重複する遺構はないが、周辺にはUSB01、USD01が位置する。平面形は、楕円形状を呈し、規模は長軸78cm、短軸64cmである。確認面からの深さは13cmで、断面形状は浅い皿状を呈する。底面には凹凸があり、中央部がくぼむ。堆積土は2層に区分した。1層は暗褐色粘土質シルトで地山土粒を含む。2層はにぶい黄褐色シルトで混入物は確認できなかった。遺物は出土していない。時期は、判断できる材料がないため不明である。(巴)

#### USK06 (第286図)

U区のはほぼ中央に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。遺構の南西側でUSD03と重複し、本遺構が新しい。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は長軸98cm、短軸81cmである。確認面からの深さは44cmである。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈する。堆積土は3つに区分でき、黒褐色や黒色を呈するシルト層が多い。遺物は出土していない。時期は、判断できる材料がないため不明である。(巴)

#### USK07 (第286図)

U区のはほぼ中央に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層で行った。東側でUSD03と重複し、本遺構の方が新しい。北西端が調査区外に位置する。平面形は、楕円形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸70cmである。確認面からの深さは40cmで、断面形、壁が垂直に立ちあがる箱形を呈する。堆積土は2層に区分した。いずれも黒褐色土を基調とするシルトで、1層はごく少量の焼土を含んでいる。2層は多量の地山ブロックを含んでいる。遺物は土師器の細片や須恵器杯片などがわずかに出土している(計18.7g)。時期は、遺物をみると、古代の可能性はあるが断定できない。(巴)

#### USK08 (第286図)

U区の中央よりやや南側に位置する土坑である。遺構の確認はUSD03・06の精査終了後に行った。USD03・06と重複しており、本遺構の方が古い。遺構の北西部分が調査区外にある。確認できた範囲平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は長軸1.6m、短軸0.8mで。確認面からの深さは35cm、断面形状は深い皿形を呈する。重複するUSD03・06によって本来の上端は消失している。底面には細かい凹凸があり、北に向かって傾斜している。堆積土は5つに区分した。3～5層が底面に堆積しており、3・4層は黄橙色シルトを少量含む褐灰色土である。2層は壁際に堆積した地山土と考えられる。堆積状況から自然堆積であると考えられる。遺物は土師器の細片や須恵器壺片などが少量出土している(計35.2g)。時期は、重複関係から古代に位置づけられる可能性がある。(巴)

#### USK09 (第286図)

U区の中央付近に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK06と重複し、本遺構が古い。重複のため全容は不明であるが、平面形状は楕円形状を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は、長軸73cm、短軸64cmである。確認面からの深さは45cmで、断面形は、逆台形状を呈する。底面は僅かな凹凸があるものの平坦である。堆積土は確認できなかった。遺物は出土していない。時期は、判断できる材料がないため不明である。(巴)

## USK10 (第286図)

U区のはほぼ中央付近に位置する土坑である遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USD03、USK19・20、UP22と重複し、いずれの遺構よりも古い。西端の一部が調査区外に位置するため、全容は不明である。平面形は楕円形状を呈する。確認できた範囲での規模は、長軸1.4m、短軸は0.7mである。確認面からの深さは22cmである。断面形は、ゆるやかな逆台形状を呈する。堆積土は2層に区分した。1層は暗褐色シルト、2層は灰黄褐色シルトであり、地山ブロックを含んでいる。いわゆるレンズ状堆積が確認できるため、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。時期は、重複関係から古代に位置づけられる可能性がある。(巴)

USK11→欠番

## USK12 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK13と重複するが、本遺構のほうが新しい。東端が調査区外にある。平面形は、楕円形状を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は長軸77cm、短軸59cmである。確認面からの深さは23cmであり、断面形は深い皿形を呈する。堆積土は3層に区分した。地山土粒を含む黒色土と明黄褐色が交互に堆積しており、人為堆積であると考えられる。遺物は出土していない。時期は判断できる材料がないため不明である。(巴)

## USK13 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK12と重複し、本遺構が古い。平面形は、USK12と北東隅で重複するが、南西隅の一部がくぼむ楕円形を呈する。規模は長軸84cm、短軸70cmである。確認面からの深さは11cmである。底面はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。堆積土は2つに区分した。1層は黒色シルト、2層は明黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。時期は判断できる材料がないため不明である。(巴)

## USK14 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK15・16と重複し、いずれの遺構よりも新しい。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸1m、短軸0.5m、確認面からの深さは46cmである。断面形はゆるやかな逆台形状である。堆積土は上下2層に区分した。1層は黒色シルト、2層は明黄褐色シルトである。遺物は出土していない。時期は判断できる材料がないため不明である。(巴)

## USK15 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK14・16・18・25と重複し、切り合い関係からみると、USK14・25より古く、USK16・18より新しい。平面形は、不整な隅丸方形形状を呈し、規模は長軸1.17m、短軸0.62mである。確認面からの深さは21cmである。断面形は皿形を呈している。堆積土は6層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とし、各層とも地山土粒を含むが、4・6層は地山ブロックの混入が認められる。自然堆積と考えられる。遺物は土師器の細片が出土するのみである(計8.36g)時期は、遺物の出土が少なく判断できないため不明で

ある。 (巴)

#### USK16 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK14・15・17と重複し、USK14・15より古く、USK17よりも新しい。平面形は、不整な楕円形状を呈する。規模は長軸74cm、短軸52cm、確認面からの深さ46cmである。断面形は上部がやや浅く開く逆台形状を呈する。堆積土は4つに区分した。上2層が灰色系、下2層が黒褐色系を呈するシルトや粘土質シルト層である。緩やかなレンズ状堆積であるため、自然堆積であると考えられる。遺物は出土していない。時期は不明である。 (巴)

#### USK17 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK16と重複しており、本遺構が古い。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、長軸68cm、短軸57cm、確認面からの深さは27cmである。断面形は深い皿形である。堆積土は4層に区分した。黒褐色や黒色シルトと明黄褐色シルトが交互に堆積し、レンズ状堆積であるため自然堆積であると考えられる。遺物は出土していない。時期は不明である。 (巴)

#### USK18 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK15・25と重複しており、いずれの遺構よりも古い。平面形は楕円形状を呈する。確認できた範囲での規模は、長軸68cm、短軸57cm、確認面からの深さ18cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は2層に区分した。黒色～黒褐色を呈するシルト層である。堆積状態から自然堆積であると考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。 (巴)

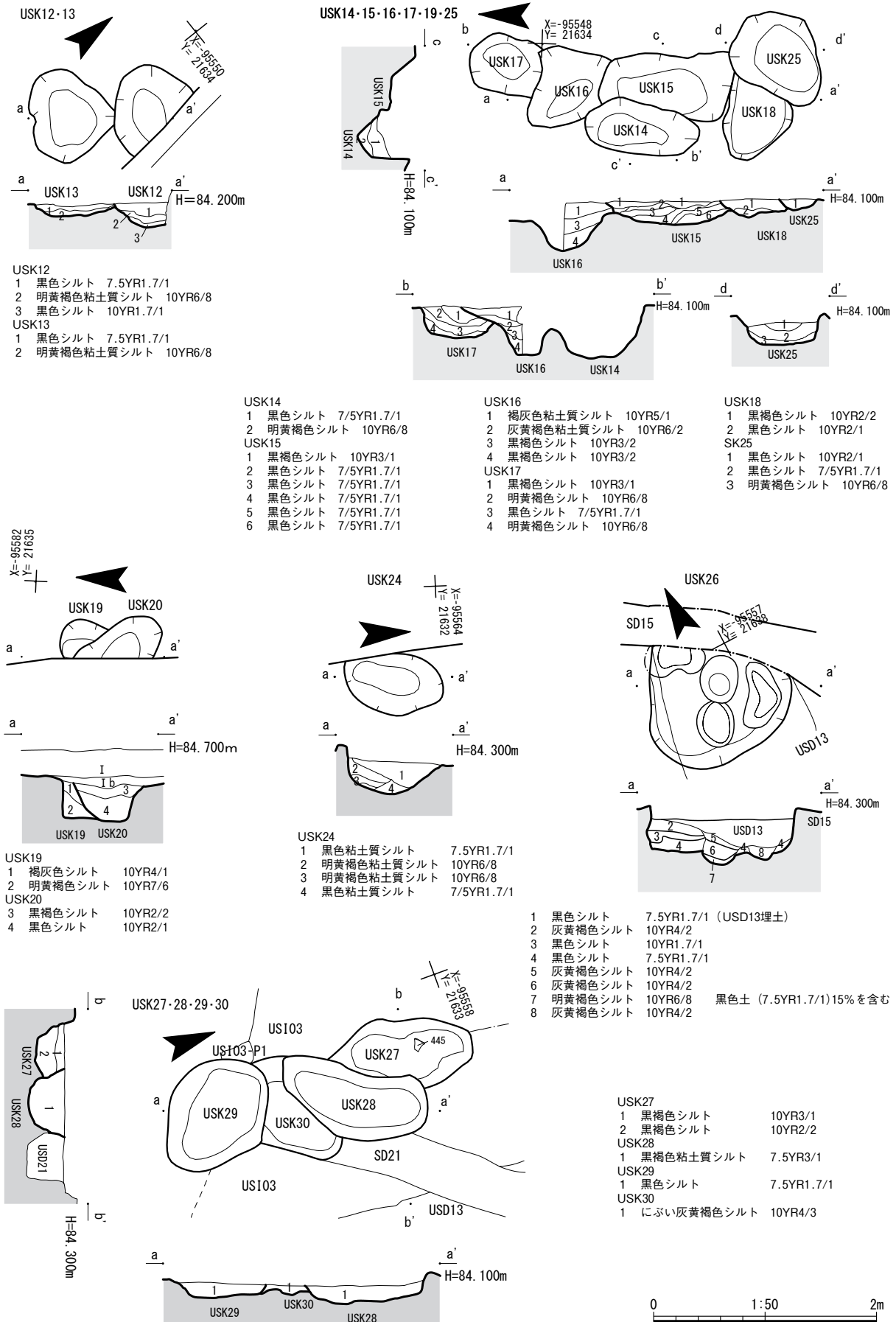
#### USK19 (第287図)

U区のほぼ中央に位置する土坑である。遺構の確認はUSD03完掘後に確認した。USD03、USK20と重複しており、いずれの遺構よりも古く、南東半分は重複するUSK20によって壊されている。平面形は楕円形状を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は長軸26cm、短軸42cmである。確認面からの深さは34cmで、断面形は箱形である。堆積土は2つに分け、褐灰色や明黄褐色を呈するシルト層で、地山土粒やブロックの混入が認められる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。 (巴)

#### USK20 (第287図)

U区のほぼ中央に位置する土坑である。遺構の確認はUSD03完掘後に行った。USD03、USK19と重複し、USD03より古く、USK19より新しい。北東部は調査区外に位置するため全容は不明である。平面形は、楕円形状を呈すると考えられる。確認できた範囲での規模は長軸49cm、短軸44cmである。確認面からの深さは28cmで、断面形は北側が緩やかに、南側は途中で外傾しながら立ち上がる逆台形状を呈する。堆積土は上下2層に区分した。黒色や黒褐色を呈するシルト層でいずれも地山土粒・ブロックを含んでいる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。 (巴)

USK21→欠番



第287図 土坑15 U区2

USK22→欠番

USK23→欠番

#### USK24 (第287・292図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USI03・USD13と重複し、いずれよりも本遺構の方が新しい。遺構の南西端が調査区外に位置する。平面形は不整な楕円形状を呈する。確認できた範囲での規模は、長軸91cm、短軸56cm、確認面からの深さ28cmである。断面形は北側が外傾、南側がほぼ垂直に立ち上がる逆台形状を呈する。堆積土は4層に区分した。1・4層は黒色を主体とする粘土質シルト、2・3層は明黄褐色シルトを主体とし、黒色土を含んでいる。斜堆積が確認できるため、自然堆積で南側から埋没したと考えられる。遺物は、石篋(448)が1点のみ出土している。時期は判断する根拠に乏しいため不明である。(巴)

#### USK25 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK15・18と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は長軸96cm、短軸76cm、確認面からの深さ30cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3層に区分した。黒色を呈するシルト層が主体である。レンズ状堆積であるため自然堆積と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。(巴)

#### USK26 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。USD13・15と重複し、いずれよりも古い。遺構は多くが重複によって消失している。平面形は不整な楕円形を呈する。残存する範囲での規模は長軸1.3m、短軸1.1mである。確認面からの深さは31cmである。断面形は箱形を呈するが、底面にはピットがあり、凹凸が確認できる。堆積土は8層に区分した。黒色や灰黄褐色を呈するシルト層が主体である。このうち1層はUSD13の2～4層が本遺構の、5～8層はピットの堆積土である。ピットには重複関係があり、別遺構の可能性もある。遺物は出土しておらず、時期は不明である。(巴)

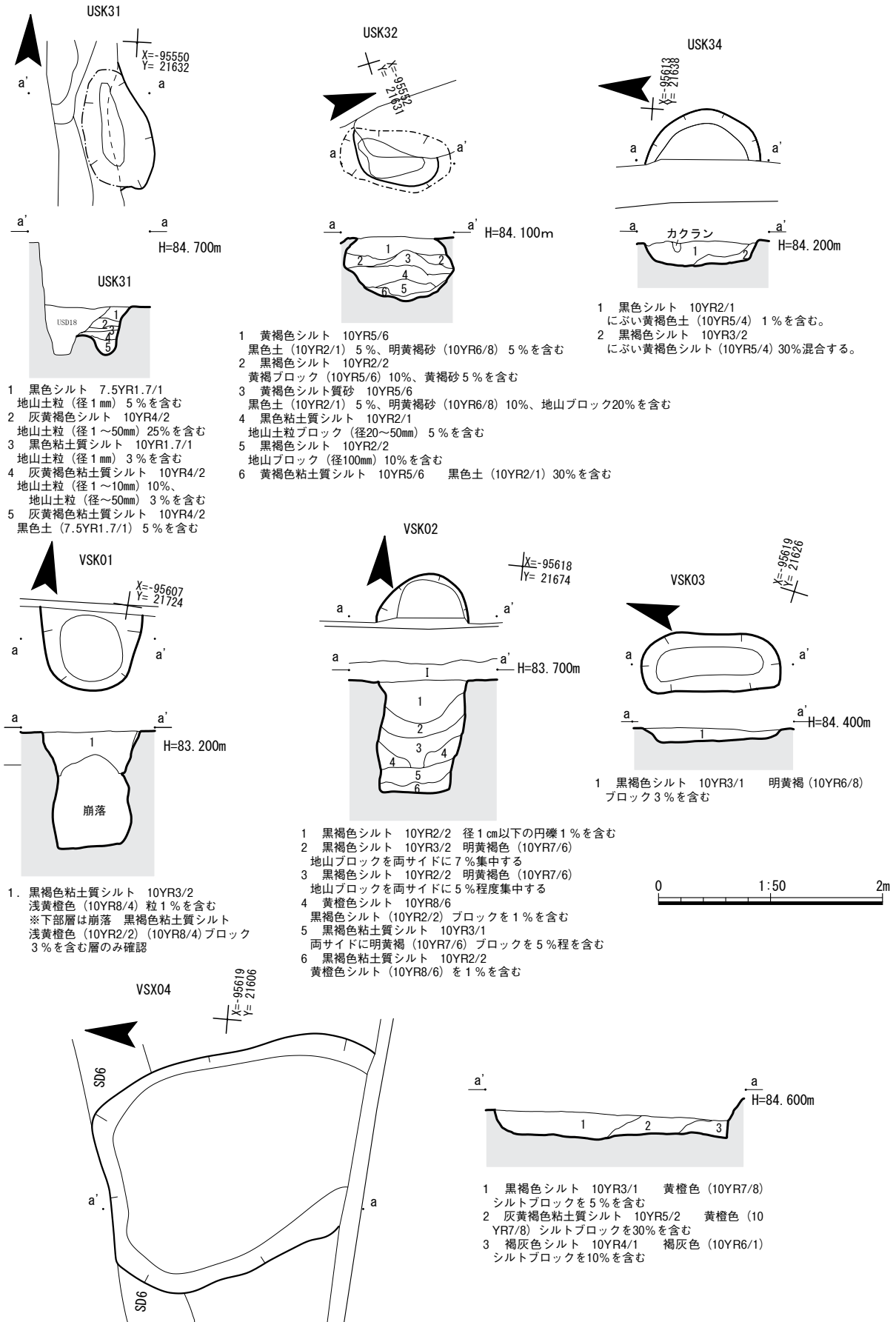
#### USK27 (第287・291図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USD13、USK28と重複しており、いずれの遺構よりも古い。USK28と南側で重複するため、全容は不明である。平面形状は楕円形状を呈し、規模は確認できた範囲で、長軸1.1m、短軸0.6mである。確認面からの深さは25cmで、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は上下2層に区分した。2層とも黒褐色シルトで地山を含む。遺物は常滑甕片(445)のみ出土している。時期は、重複関係や出土遺物から12世紀の可能性はある。(巴)

#### USK28 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認は、I層除去後のIV層上面で行った。USD13、USK27・30、USD21と重複し、USD13よりは古く、他の遺構より新しい。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.3m、短軸0.6mである。確認面からの深さは20cmである。断面形はゆるやかな逆台形状を呈する。堆積土は地山土粒やブロックを微量含む黒褐色粘土質シルトの単層である。遺物





第288図 土坑16 U区3・V区

は出土していない。時期は、古代の遺構であるUSD21材木堀跡よりも新しいが、詳細な時期は不明である。(巴)

#### USK29 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK30、USI03、USD12・USD13と重複し、USD13よりは古く、他よりは新しい。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸91cmで、確認面確認面からの深さは15cmである。断面形はゆるやかな逆台形状を呈する。堆積土は地山土粒と炭化物を含む黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期は重複により古代の遺構よりは新しいと考えられるが、詳細は不明である。(巴)

#### USK30 (第287図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USK28・29、USD13・21と重複し、USD13、USK28・29よりは古く、USD21よりは新しい。平面形状は楕円形を呈すると考えられるが重複により全容は不明である。確認できた範囲での規模は長軸1.1m、短軸0.5mである。確認面からの深さは7cmで、で底面には凹凸が確認できる。断面は浅い皿状を呈する。堆積土は、地山土粒や地山ブロックを多量含む灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期は、重複から古代の遺構よりは新しいと考えられるが、詳細は不明である。(巴)

#### USK31 (第288図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。USD18と重複し本遺構が古い。平面形は、不整な楕円形状を呈する。確認できた範囲での規模は、長軸1.1m、短軸0.6mである。確認面からの深さは43cmで、断面形は「U」字形を呈している。堆積土は4層に区分した。灰黄褐色を呈するシルト層が主体で、2層に地山土粒を多量に含んでいる。遺物は出土していない。時期は、重複関係から古代の可能性が高いが断定できない。(巴)

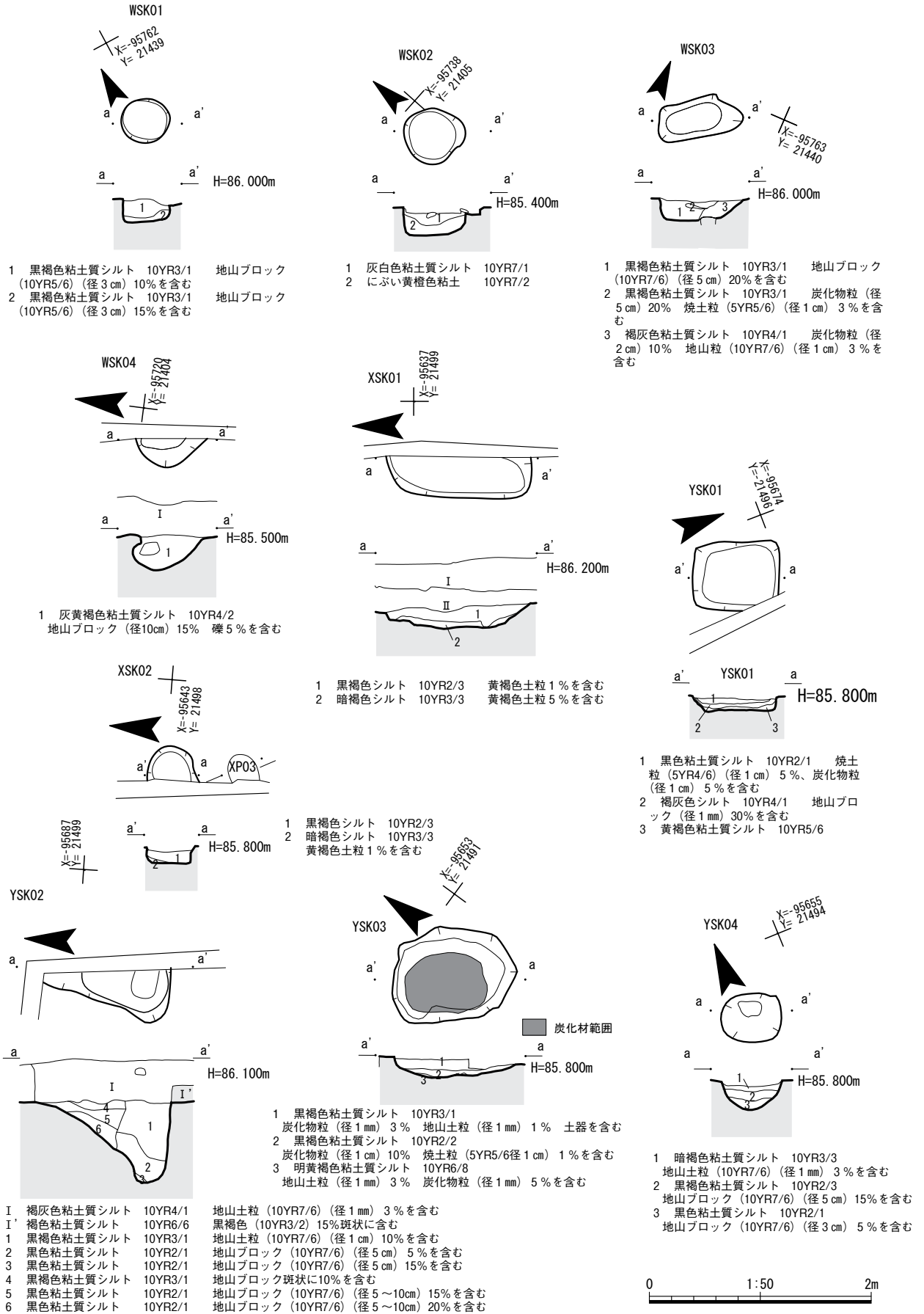
#### USK32 (第288図)

U区の北側に位置する土坑である。遺構の確認はUSD18の精査終了後に行った。USD18と重複し本遺構が古い。平面形は、楕円形状を呈する。確認できた範囲での規模は長軸98cm、短軸54cmである。確認面からの深さは59cmで、断面形は円形に近く、壁の中央が大きく膨らむ。堆積土は6層に区分した。黄褐色シルトや砂が交互に堆積しており、自然堆積であると考えられる。遺物は土師器の細片がわずかに出土するのみである(計2.8g)。時期は遺物が少なく判断できないため不明である。(巴)

USK33→欠番

#### USK34 (第288図)

U区南側に位置する土坑である。遺構の確認はI層除去後のIV層上面で行った。東側が調査区外に位置する。平面形は、円形もしくは楕円形を呈すると推定される。確認できた範囲での規模は直径1.0m、検出幅0.45mである。確認面からの深さは22cmで、断面形は、南側が緩やかであるが、逆台形状を呈する。堆積土は2層に区分した。2層とも黒や黒褐色を基調とするシルトで、1層には地山土粒が微量含まれている。自然に埋没したと考えられる。遺物は出土していない。時期は、判断できる証



第289図 土坑17 W区・X区・Y区

抛がないため不明である。

(巴)

#### VSK01 (第288図)

V区東端のVSD01の西に位置する土坑である。遺構の構造からみて、井戸と想定した。検出はIV層上面で、北側の4分の1程度は調査区外にある。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、開口部径は81cmである。断面形は中央にやや括れをもつ逆台形を呈し、深さは検出面から1mである。調査時に断面の下部が崩落したため、堆積状況の詳細は不明であるが、黒褐色粘土質シルトを主体とする堆積を上層で確認した。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

(鈴木)

#### VSK02 (第288図)

V区中央のVSB03の南に位置する土坑である。遺構の構造からみて井戸と想定した。検出はIV層上面で、南半分は調査区外へ広がると思われる。重複する遺構はない。平面形は円形を呈すると推定され、開口部径は確認できる範囲で82cmである。断面形は逆台形を呈し、深さは検出面から1mである。堆積土は黒褐色を呈する色調を主体とし、下層には粘性がやや強いシルトが堆積している。4層には三角堆積がみとめられ、自然堆積の様相を示す。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため不明である。

(鈴木)

#### VSK03 (第288図)

V区の東側、VP024などの柱穴群の北西に位置する土坑である。検出面はIV層上面で、重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.5mである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から12cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、IV層(地山)由来の粘土が塊状に少量混じる。遺物は出土していない。したがって時期は不明である。

(鈴木)

#### VSX04 (第288図)

V区西端に位置する土坑である。検出はIV層上面である。VSD06と重複しており、本遺構が新しい。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸2.3m、短軸1.9mであるが、南側は調査区外へ広がるため、長軸の数値は調査区内におけるものである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から23cmである。堆積土は3層に分層できる。やや粘性のある黒褐色シルトが主体で、全体にIV層(地山)由来の粘土塊が混じる。自然堆積の様相を呈する。遺物は、土師器甕片や須恵器長頸瓶の破片などが出土している(計260.3g) 時期は、遺物からみて、漆町IV期に位置づけられる可能性がある。

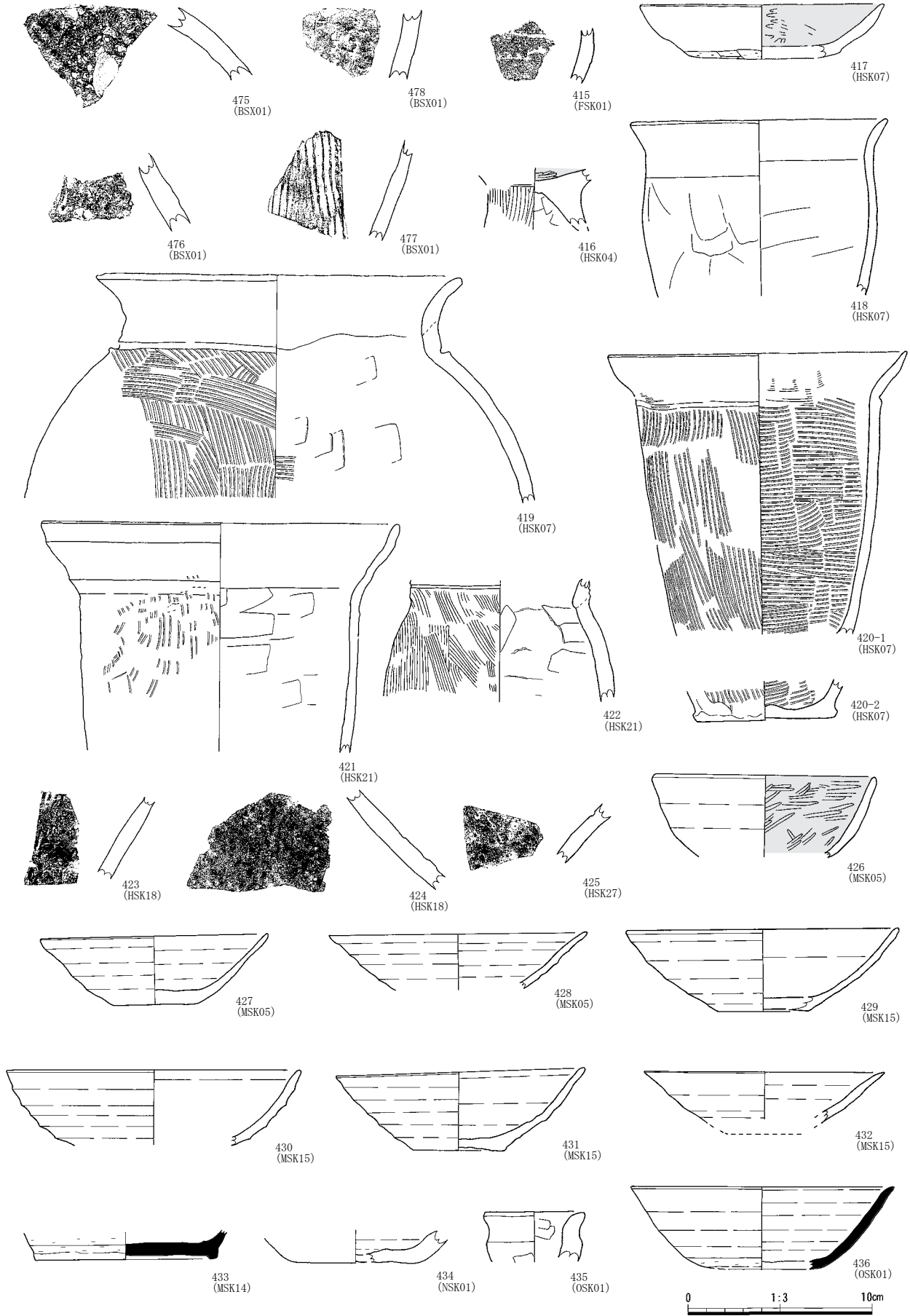
(鈴木)

#### WSK01 (第289図)

W区の中央部やや東寄りに位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は円形を呈し、規模は直径44cmである。断面形は箱形を呈する。確認面からの深さは22cmである。堆積土は2つに細分でき、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルト層である。遺物は出土しない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### WSK02 (第289図)

W区の西側に位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行ってい



第290図 土坑出土遺物 1

る。平面形は円形を呈するが、南東側が若干広がる。規模は、直径50cmである。断面形は箱形を呈し、確認面からの深さは22cmである。堆積土は2つに細分でき、灰白色粘土質シルトやにぶい黄褐色粘土層がある。遺物は出土しない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### WSK03 (第289図)

W区の中央部やや東寄りに位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は、不整な楕円形状を呈し、規模は、長軸80cm、短軸34cmである。断面形は箱形あるいは逆台形状を呈する。確認面からの深さは18cmである。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈する粘土質シルト層が主体である。遺物は、土師器の非ロクロ甕片や非ロクロ杯片などが出土している(計148.1g)。時期は、遺物からみると、古代のなかに位置づけられる可能性がある。

#### WSK04 (第289図)

W区の北側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、東側の大部分が調査区外にあるため全容は不明である。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形を呈すると予想され、規模は現状で、長軸40cm、短軸34cmである。断面形はU字形を呈するが、北側にややえぐれる。深さは確認面から30cmである。堆積土は、灰黄褐色を呈する粘土質シルトの単層である。遺物は出土せず、時期も不明である。

#### XSK01 (第289図)

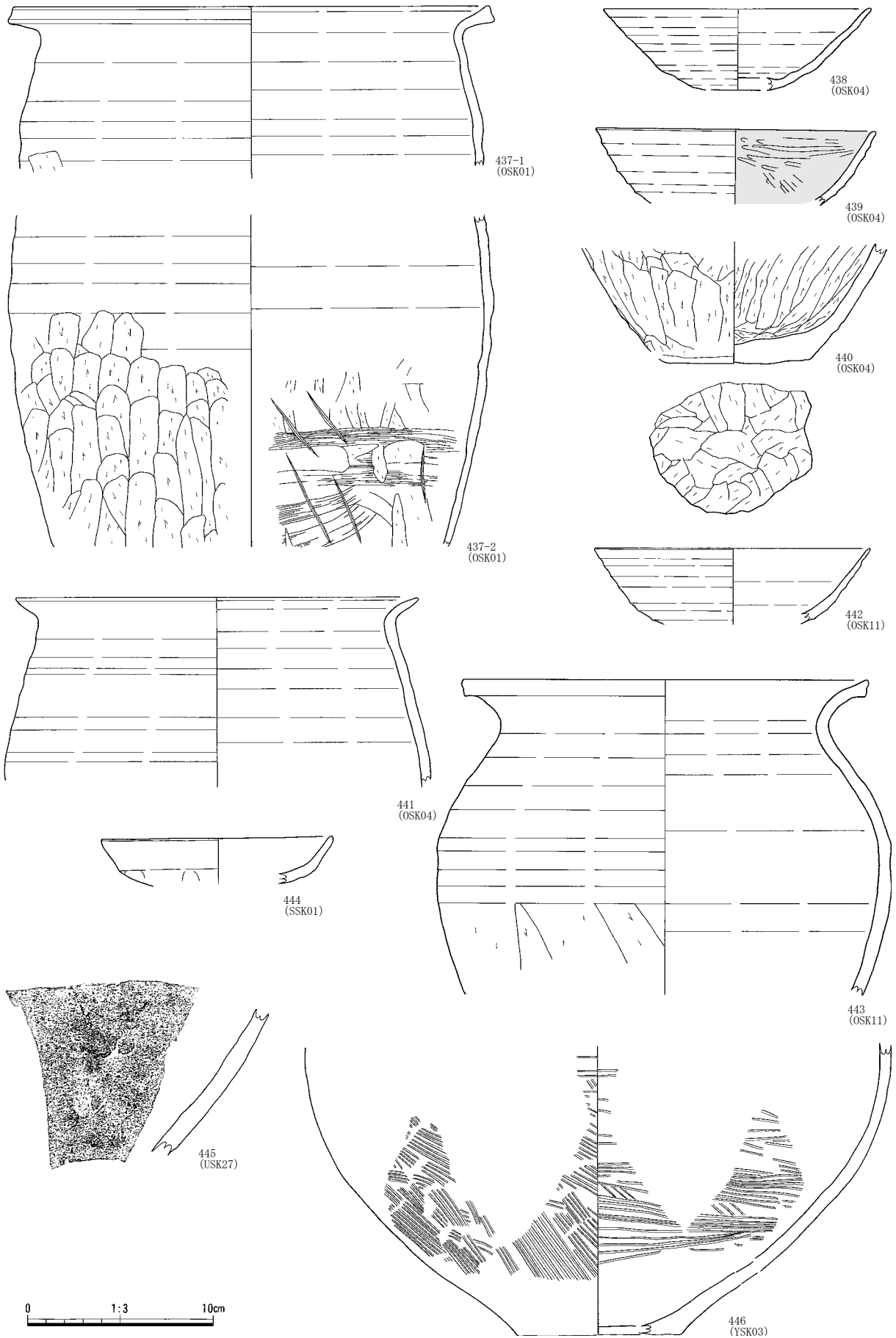
X区の北部に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、東側約半分が調査区外にある。検出はI・II層除去後のIV層面で行っている。平面形は隅丸方形形状を呈すると推定され、規模は、長軸1.3m、現状での短軸0.4mである。断面形は浅い皿形を呈し、確認面からの深さは20cmである。堆積土は2つに細分でき、黒褐色や暗褐色を呈するシルト層である。遺物は出土していない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

#### YSK01 (第289図)

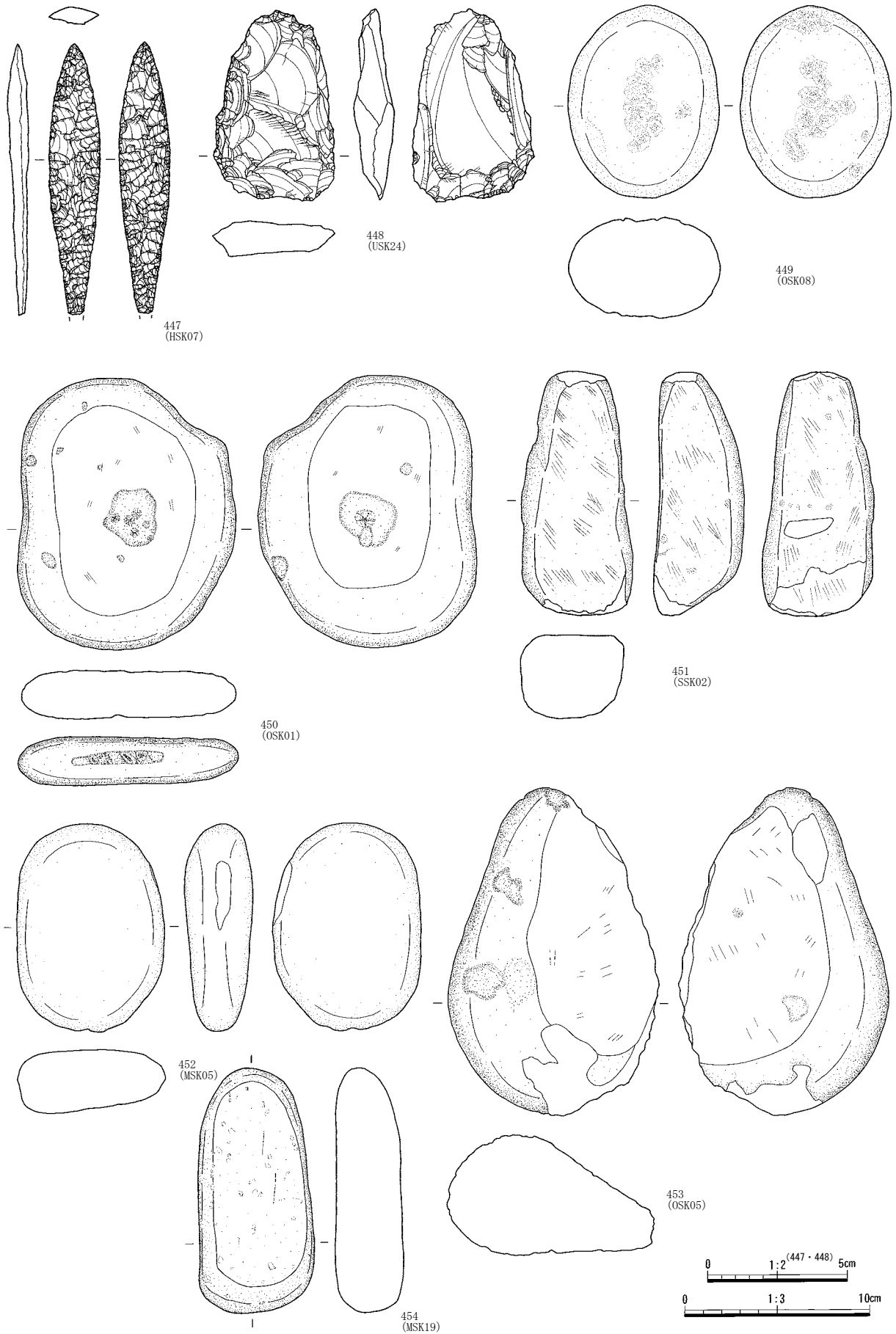
Y区の中央部に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、一部が調査区外にある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は方形を呈し、規模は、長軸78cm、短軸60cmである。断面形は箱形を呈し、深さは10cmである。堆積土は3つに細分でき、黒色を呈する粘土質シルトや褐灰色シルト、黄褐色粘土質シルト層がある。遺物は出土していない。時期は、判断できる証拠がないため、不明である。

#### YSK02 (第289図)

Y区の南側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、大部分が調査区外にある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は方形形状を呈すると予想されるが、全容は不明である。調査区内での規模は、長軸方向が1.2m、短軸方向が0.5mである。断面は、南側が深く、北に向かって浅くなる。確認面からの深さは最大70cmである。堆積土は6つに細分でき、いずれも黒色～黒褐色を呈する粘土質シルト層が主体である。1～3層は、あるいは柱痕跡かもしれない。したがって、大型の柱を立てるための掘方の可能性がある。遺物は出土していない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

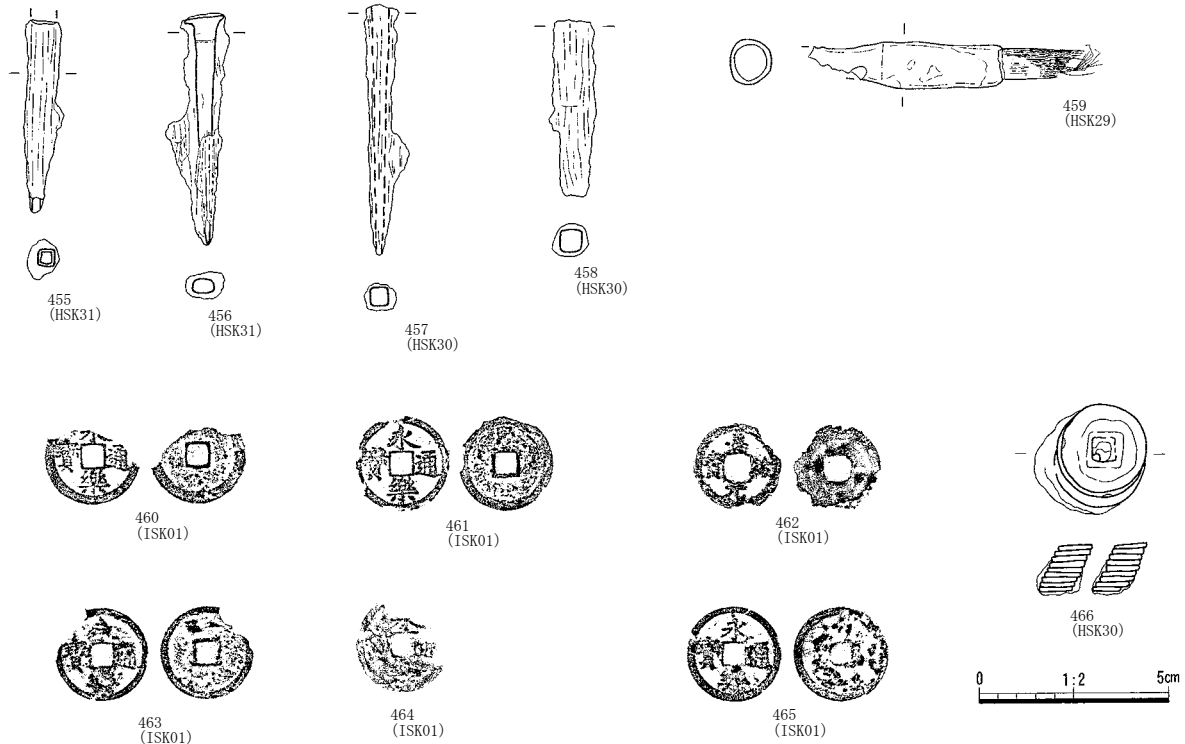


第291図 土坑出土遺物 2



第292図 土坑出土遺物 3





第293図 土坑出土遺物 4

## YSK03 (第289・291図)

Y区の北側に位置する土坑である。他遺構との重複はない。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.9mである。確認面からの深さは18cmで、断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈する粘土質シルト層が主体である。底面には炭化物が広がっていた。遺物は土師器球胴甕(446)や非ロクロ調整甕の破片などが出土している(計823g)。時期は遺物からみて、古代(漆町I~III期)に位置づけられる。

## YSK04 (第289図)

Y区の北側に位置する土坑である。他遺構との重複はないが、南側の近接してYSI01竖穴建物跡がある。検出はI層除去後のIV層面で行っている。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸55cm、短軸45cmである。断面形は深い皿形を呈する。確認面からの深さは30cmである。堆積土は3つに細分でき、黒褐色を呈する粘土質シルト層が主体である。遺物は出土しない。時期は判断できる証拠がないため不明である。

(9) 焼土・焼成遺構

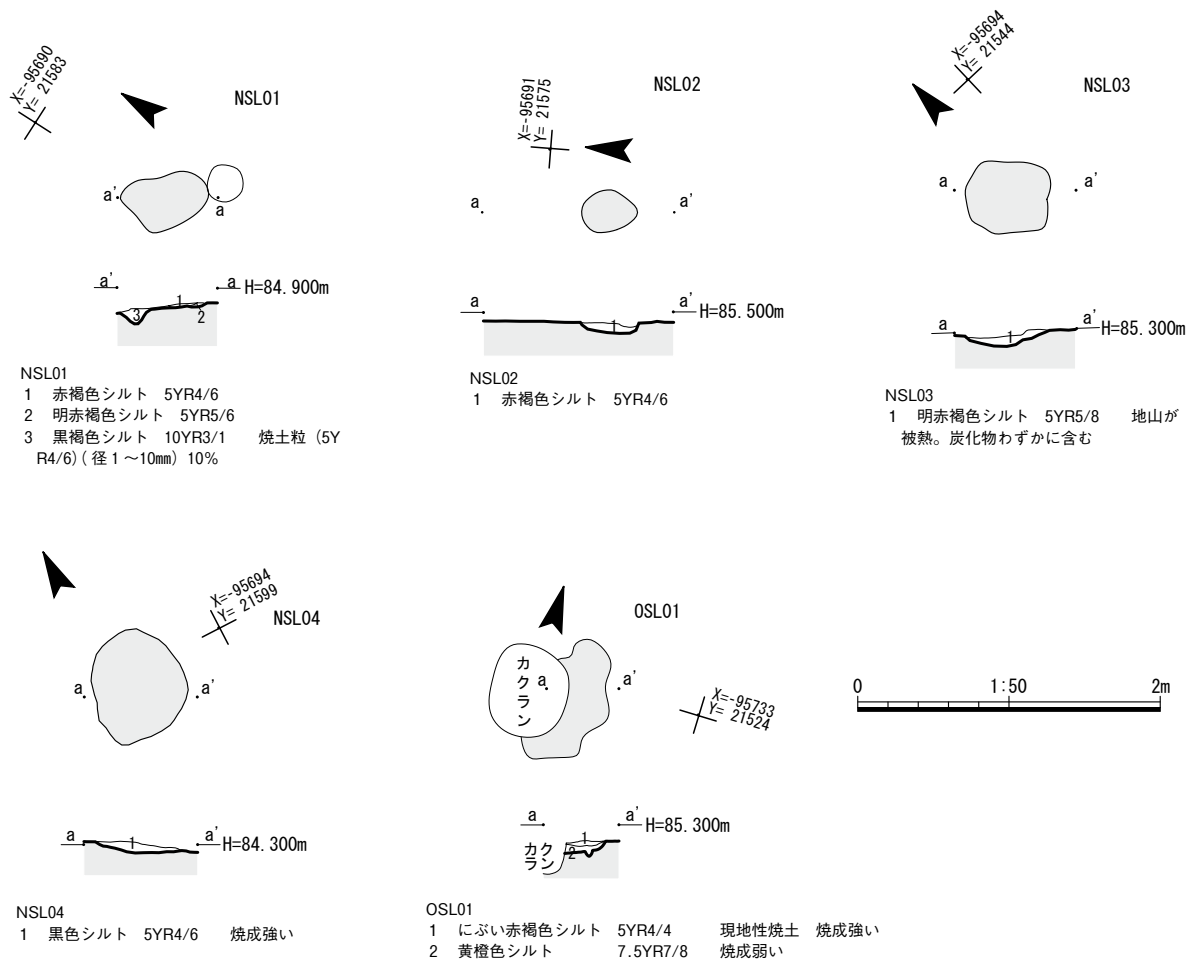
単独で検出した焼土は、合計5基ある。これらは、本来から単独の焼土として存在したものや、カマドや炉であったものが、削平により焼土のみ残存したものなどが含まれていると考えられる。また、焼成遺構としたものは、土器焼成あるいは炭窯などを想定しているが、調査では不明確であったため、広い意味で捉えたものである。

NSL01 (第294図)

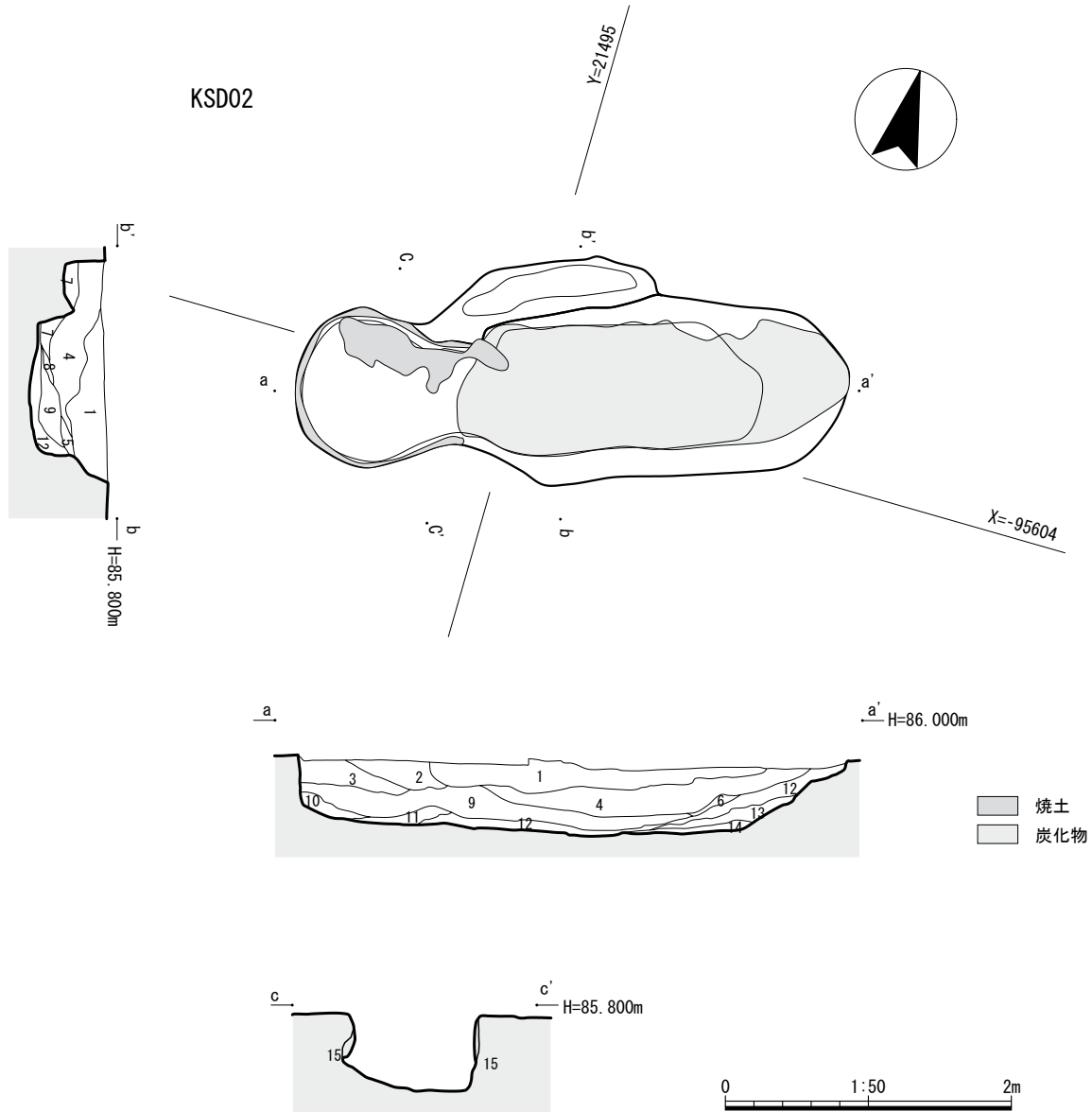
N区の東側に位置する焼土である。検出はIV層で行っている。重複する遺構はないが、隣接してNP042ピットがある。平面形は不整な楕円形状を呈し、長軸58cm、短軸34cmである。時期は不明である。

NSL02 (第294図)

N区の東側に位置する焼土である。検出はIV層で行っている。他遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸38cm、短軸28cmである。時期は不明である。



第294図 焼土・焼成遺構 1



KSD02

1	褐灰色粘土質シルト	10YR5/1	黄橙色 (10YR8/8) シルトブロック (径3~5cm) を10%含む
2	褐灰色粘土質シルト	10YR4/1	黄橙色 (10YR8/8) シルトブロック (径1~2cm) を3%含む
3	褐灰色粘土質シルト	10YR5/1	黄橙色シルト粒を全体に30%混合する、焼土粒1%含む
4	褐灰色粘土質シルト	10YR4/1	黄橙色シルトブロック (径2cm) 40%程度混合する
5	褐灰色粘土質シルト	10YR4/1	黄橙色 (10YR8/8) シルトブロック (径1~2cm) を3%含む
6	褐灰色粘土質シルト	10YR4/1	黄橙色シルトブロックを1%含む
7	暗灰黄色粘土質シルト	2.5Y4/2	焼土粒1%を含む
8	暗灰黄色粘土質シルト	2.5Y4/2	焼土粒5%を含む
9	黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色シルトブロック (径10~20cm) を10%含む
10	暗赤褐色粘土質シルト	5YR3/4	灰黄褐色シルトブロックを5%含む
11	灰黄褐色粘土質シルト	10YR4/2	焼土粒 (径1~5mm) を10%含む
12	黒色粘土質シルト	10YR2/1	炭化物、焼土ブロック20%含む
13	暗灰黄色粘土質シルト	2.5YR4/2	焼土粒1%含む
14	褐灰色粘土質シルト	10YR5/1	黄橙色シルトブロック (径3~5cm) 5%含む
15	赤褐色シルト	5YR4/8	地山が被熱変色したものの

第295図 焼土・焼成遺構 2

#### NSL03 (第294図)

N区の中央に位置する焼土である。検出はNSI03の浅い堆積土上で行っている。NSI03竪穴建物と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整な方形状を呈し、規模は一辺が50cm程である。NSI03の床面よりも上位で検出したため、単独の焼土として捉えたが、あるいはNSI03竪穴建物跡に伴う焼土の可能性がある。

#### NSL04 (第294図)

N区の東端に位置する焼土である。検出はIV層で行っている。他遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸58cmである。時期は不明である。

#### OSL01 (第294図)

O区南側に位置する焼土である。検出はIV層で行っている。OSB04・05掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、攪乱によって一部が破壊されている。平面形は、不整な楕円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸30cmである。時期は不明である。

#### KSD02 (第295図)

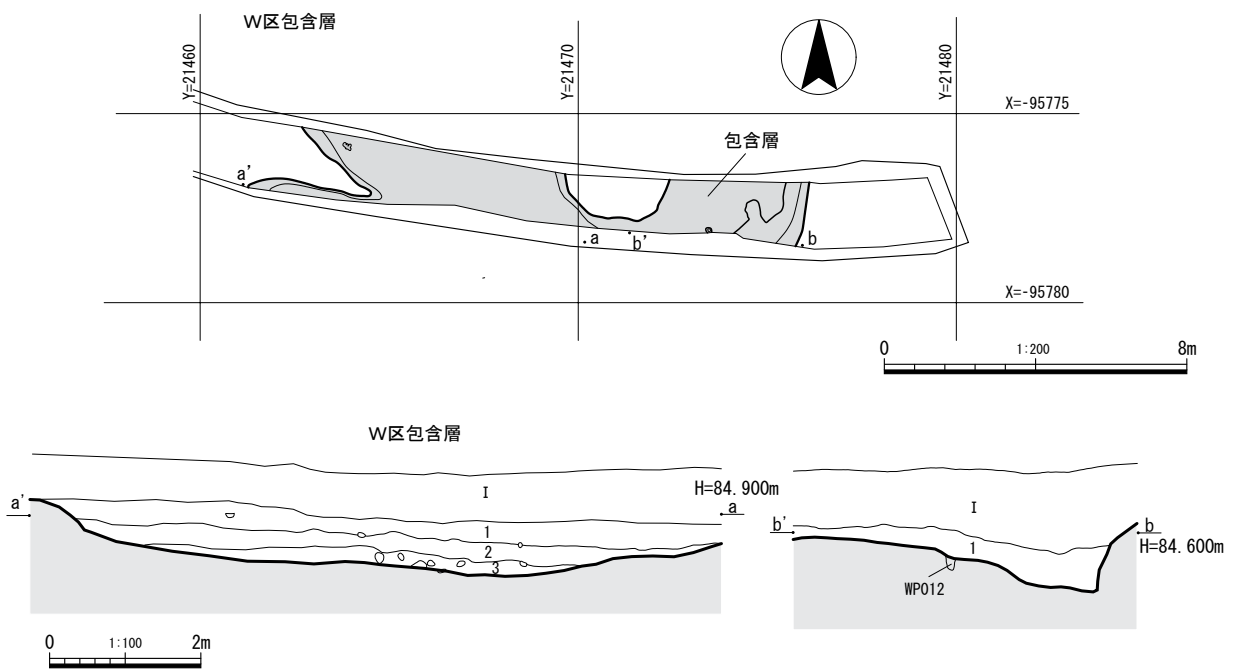
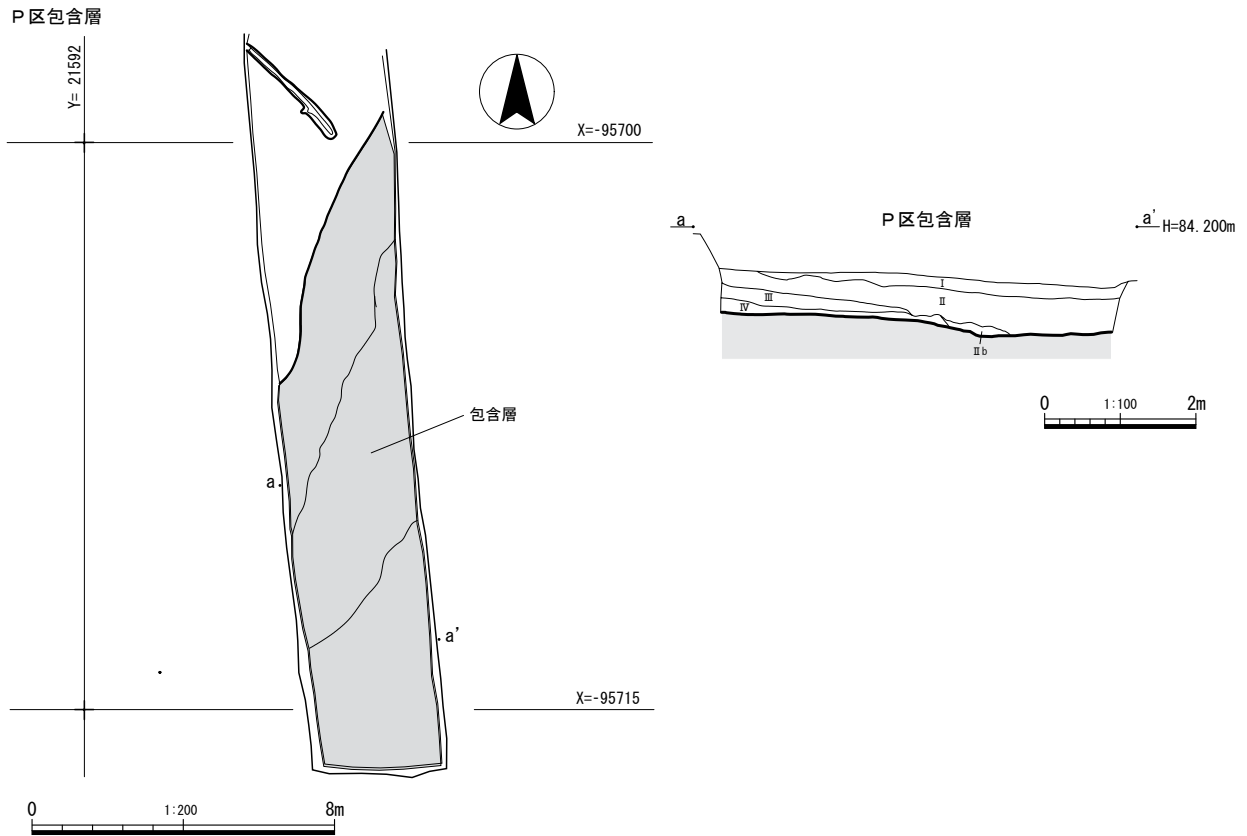
K区の南側に位置する焼成遺構である。遺構の確認は、表土であるI層除去後にIV層面で行っている。他遺構との重複はない。平面形は、長細い楕円形状を基本とするが、西側は円形状に近い。規模は、長軸3.9m、短軸は西で1.1m、東で1.3m程である。深さは確認面から50cmである。堆積土は15層あり、上層は褐灰色粘土質シルトであり、下層は黒褐色、暗灰黄色粘土質シルトが主体である。横断面形は、フラスコ状を呈し、両側縁は強く赤変している。縦断面形は、逆台形状を呈するが、西端側はほぼ垂直に立ち上がる。焼土あるいは赤変箇所は、西側の円形部分の周囲から側縁にあり、底面には炭化物が広がっていた。このことから、西側の円形部分が焚き口であり、東側が焼成室と捉えることができる。焼成痕の残る土器がないことから、炭窯の可能性が高いと考えられる。しかし、この遺構内の土壌を水洗選別によって、種子等を検出した結果、コメやムギなどの穀物が多く含まれていることがわかった(第V章第3節)。炭窯と断定はできないため、ここでは、広い意味で焼成遺構として捉えた。遺物の出土はなく、したがって時期も不明であるが、C<sup>14</sup>炭素年代によれば、中世の可能性はある。(第V章第6節)

#### (10) 遺物包含層

まとまった遺物包含層としては、P区とW区など遺跡南端側の斜面にある落ち込みがあげられる。ここでは、遺構としてではなく、広義の遺物包含層として捉えている。以下その概要を調査区ごとにまとめる。

#### P区包含層 (第296図)

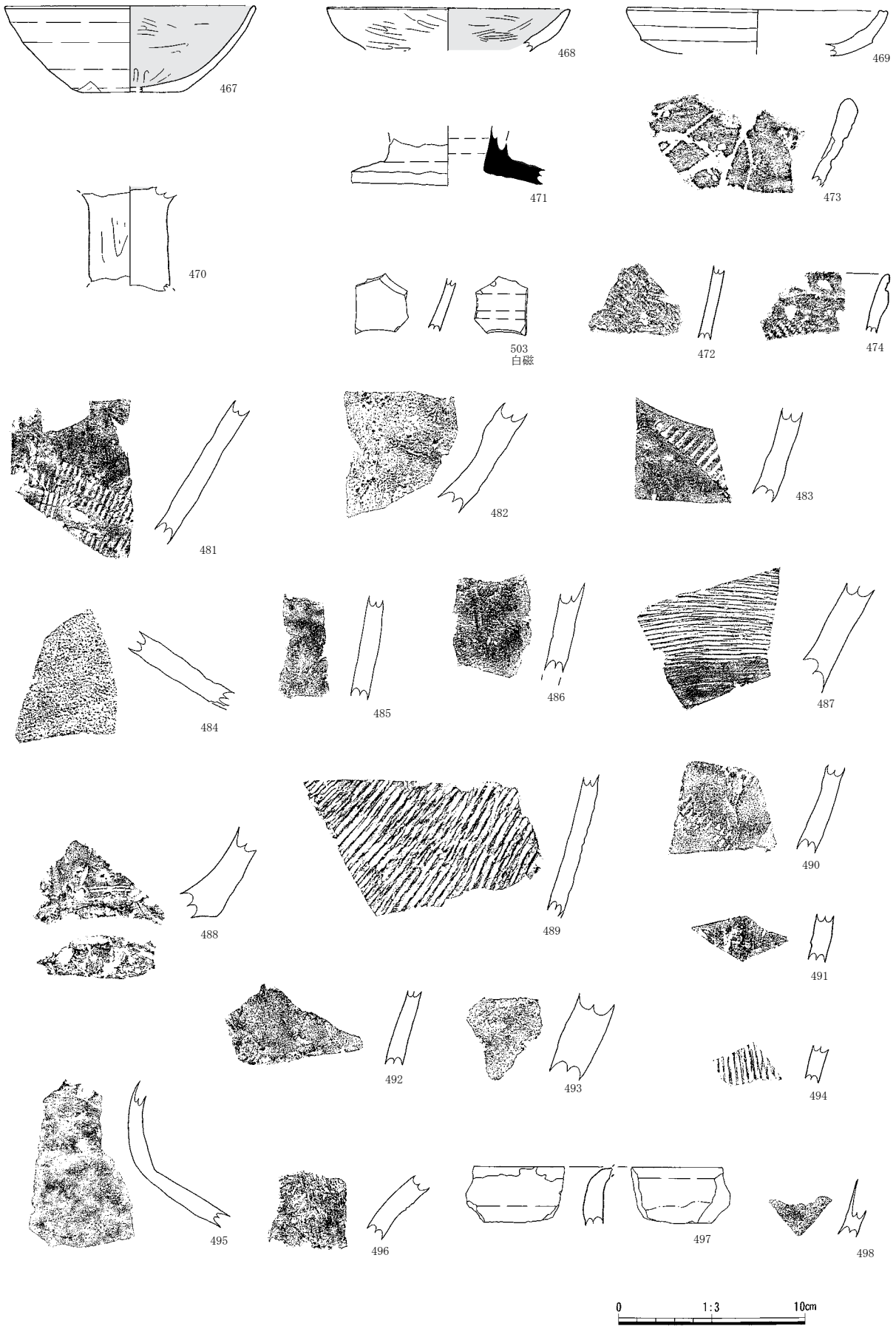
P区の南端に位置する。IV層地山面の落ち込みにII層の黒色シルト層が堆積した状況を検出した。このII層中に古代の遺物を中心に遺物が包含していた。調査区内における面積は47.5㎡であり、調査区外とくに南側に広がっていくことが予想される。この状況から、IV層の落ち込む境界付近が、遺跡の南端と考えられ、それ以南は、現小違水路付近まで低地が広がると推定される。出土遺物としては、古代の土器を中心に、縄文から中世までの遺物が混在している。これらは、地形的にみて、北側の遺



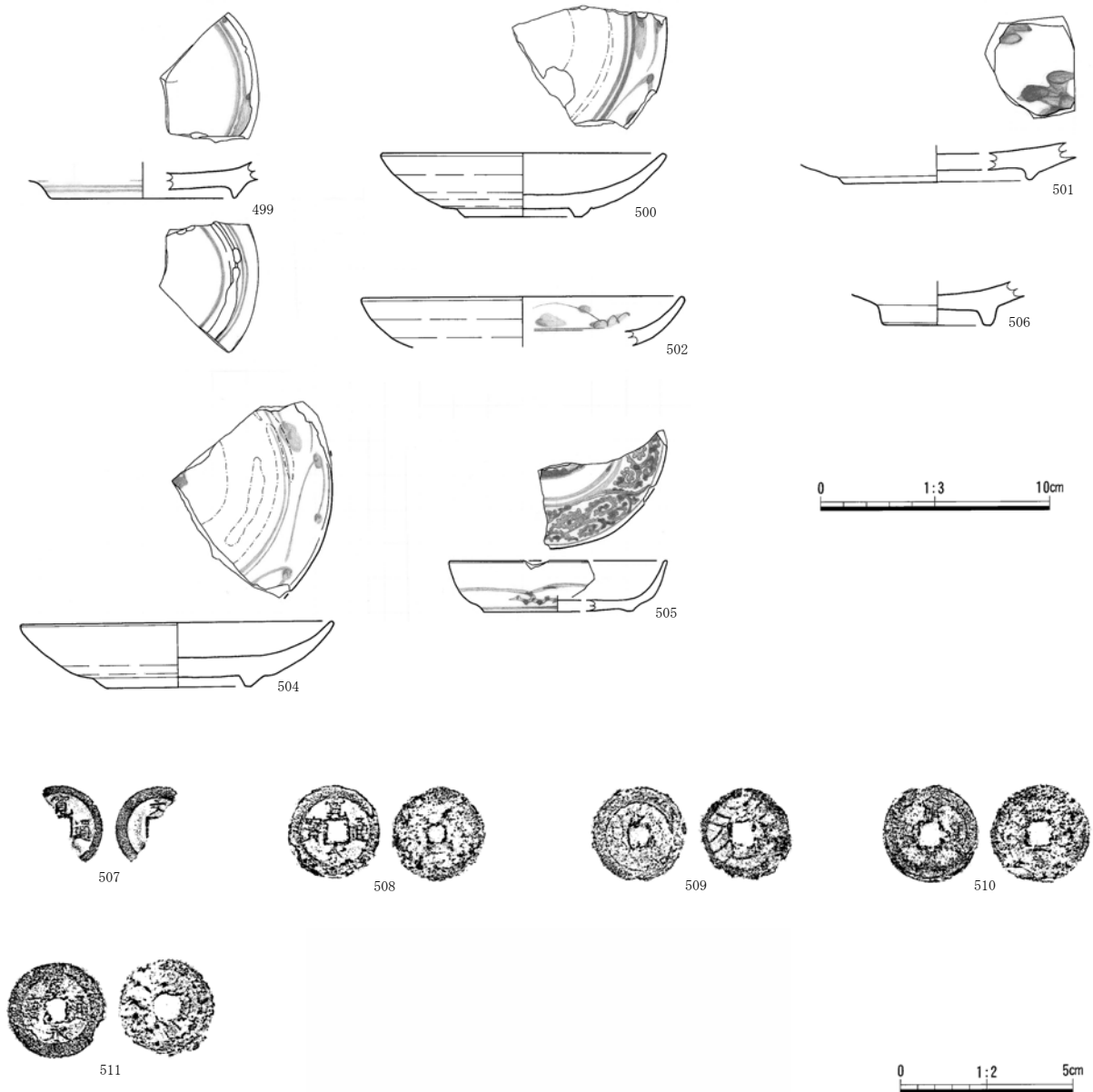
W区

- |   |           |         |                  |
|---|-----------|---------|------------------|
| 1 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/1 | 酸化鉄粒20%          |
| 2 | 黒褐色粘土質シルト | 10YR3/2 | 小礫(拳大)10% 酸化鉄10% |
| 3 | 黒色粘土質シルト  | 10YR2/1 | 炭化物3%            |

第296図 包含層 (P区・W区)



第297図 遺構外出土遺物 1



第298図 遺構外出土遺物 2

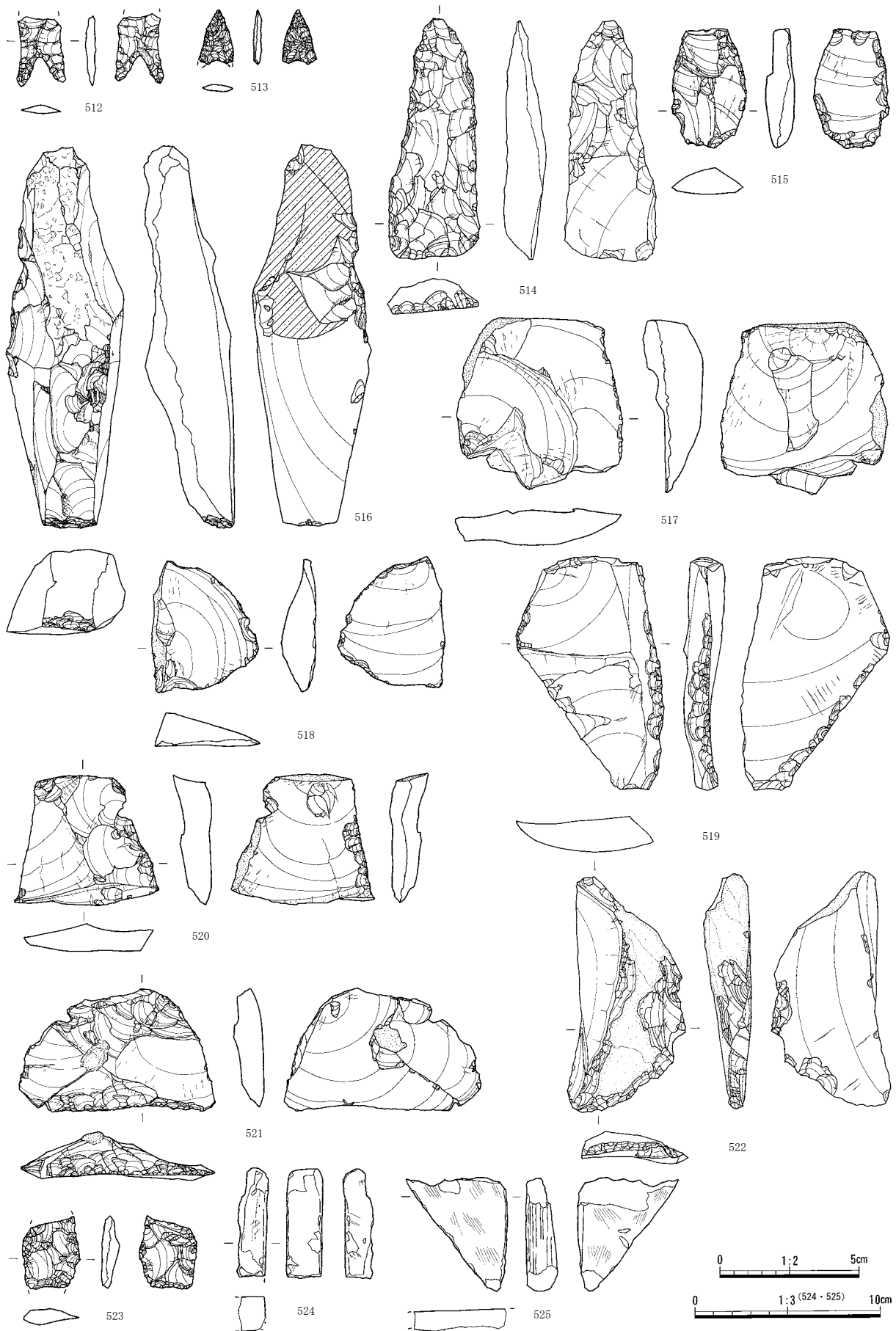
跡内からの流れ込みと考えられる。

#### W区包含層（第296図）

W区の西端に位置する。IV層の地山面の落ち込みに黒褐色粘土質シルトが堆積した状況で確認した。堆積層は3つに細分でき、黒色から黒褐色を呈する粘土質シルト層である。調査区内における面積は19㎡である。南側は調査区外へ広がっていると予想される。出土遺物は、古代の土器が中心である。

##### (1) 遺構外出土遺物（第297～299図）

各調査区の遺構以外からも遺物が出土している。多くは検出中に発見されたものであり、現表土である耕作土の攪拌によって、遺構から巻き上げられた遺物も含まれていると想定している。以下、種



第299図 遺構外出土遺物 3



別ごとに記載する。なお、これらの遺物は不掲載分も含めて合計31.1kg出土している。

土師器には、杯(467・468)、高杯(470)があり、須恵器には、壺類(471)がある。また、かわらけ(469)もP区包含層から出土している。

縄文土器には、472から474があり、いずれも小破片のため詳細は不明であるが、F区、N区、P区から出土している。

481～498は、常滑や渥美といった中世陶器である。いずれも破片のため詳細は不明であるが、押印や釉薬の状態から12世紀代に位置づけられるであろう。503は中国産の白磁碗の破片である。12世紀に属する遺物についても、遺跡内の各地からの出土があるが、とくに遺跡の北東側に多い傾向がある。499～502、504～506は、近世を中心とする陶磁器類である。F区の北側や、H区の水路付近からの出土が多い。507～511は銭貨で、5点とも寛永通宝である。

512～525は、石器や石製品である。石鏃(512・513)、石篋(514～516)、スクレイパー類(517～522)、尖頭器(523)、砥石(524・525)等の種類がある。多くは縄文時代に位置づけられると想定している。なお、これら縄文時代に属する遺物は、遺跡の南側によりおおく集中しており、遺構の分布とも対応している。



## V 自然科学分析

### 1 火山灰分析

#### (1) はじめに

東北地方北部胆沢扇状地とその周辺には、焼石、栗駒、鳴子、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、浅間、榛名、御岳、洞爺、阿蘇、始良、鬼界など中部地方、北海道、九州の火山に由来する後期更新世以降のテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる（町田・新井、1992、2003など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの層位関係を考古遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際に層位や年代が不明な遺構が認められた奥州市漆町遺跡でも、地質調査を実施して、土層やテフラ層の層相を記載するとともに、高純度の分析試料を採取し、実験室内でのテフラ分析（テフラ検出分析、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、電子線マイクロアナライザによる火山ガラスの主成分分析）を行って、指標テフラの検出同定を実施した。

調査分析の対象となった試料は、FSD01・VSD01・HSD05・ISD01・HSI07の5遺構の試料である。

#### (2) 土層の層序

##### HSD05A-A' セクション（第300図）

HSD05A-A' セクションにおける HSD05溝状遺構の覆土は、下位より黄灰色粘質土に富む灰褐色土（層厚7cm）、やや黒みがかった灰褐色土（層厚7cm）、黄灰色土粒子混じり暗灰褐色土（層厚10cm）、やや黒みがかった暗褐色土（層厚5cm）、葉理が細かく発達した黄褐色砂層（層厚25cm）、暗灰褐色土（層厚2cm）、葉理が認められる灰褐色砂層（層厚6cm）、黄白色シルト質砂層（層厚3cm）、粒径がそろった黄灰色砂層（層厚8cm）、黄白色シルト質砂層（層厚4cm）、暗灰色泥層（層厚3cm）からなる。

##### HSD05B-B' セクション

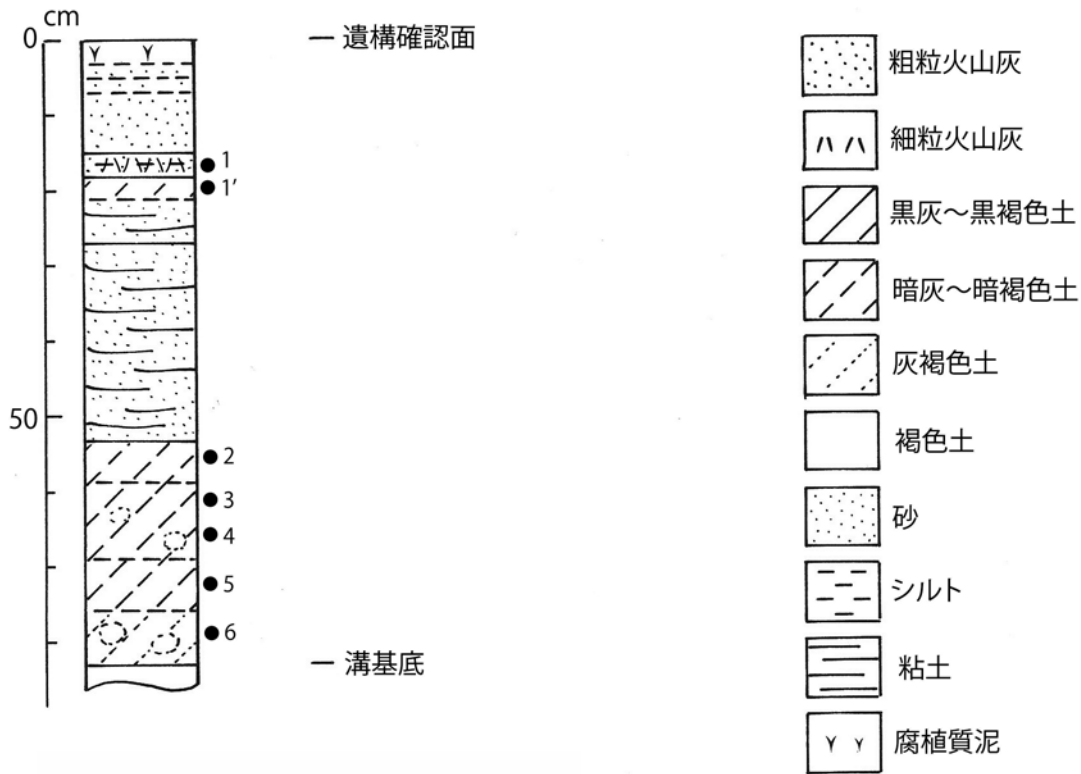
HSD05B-B' セクションでは溝状覆土の中に、細粒火山灰が2層レンズ状に認められる。下位は黄色（層厚1cm）、上位は黄灰色（層厚0.8cm）である。

##### ISD01（第302図）

ISD01溝状遺構の覆土は、下位より黄白色粘土ブロック混じり灰色泥層（層厚5cm）、黒灰色泥層（層厚5cm）、黒灰色泥層（層厚18cm）、黄灰色粘土質シルト層（層厚2cm）、砂混じりで黒みがかった暗灰色泥層（層厚18cm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚2cm）、砂混じり黒灰褐色土（層厚22cm）、黒灰褐色土（層厚5cm）、黒みがかった暗灰色土（層厚10cm）、暗灰褐色土（層厚16cm）からなり、最上部に灰色水田作土（層厚13cm）が形成されている。

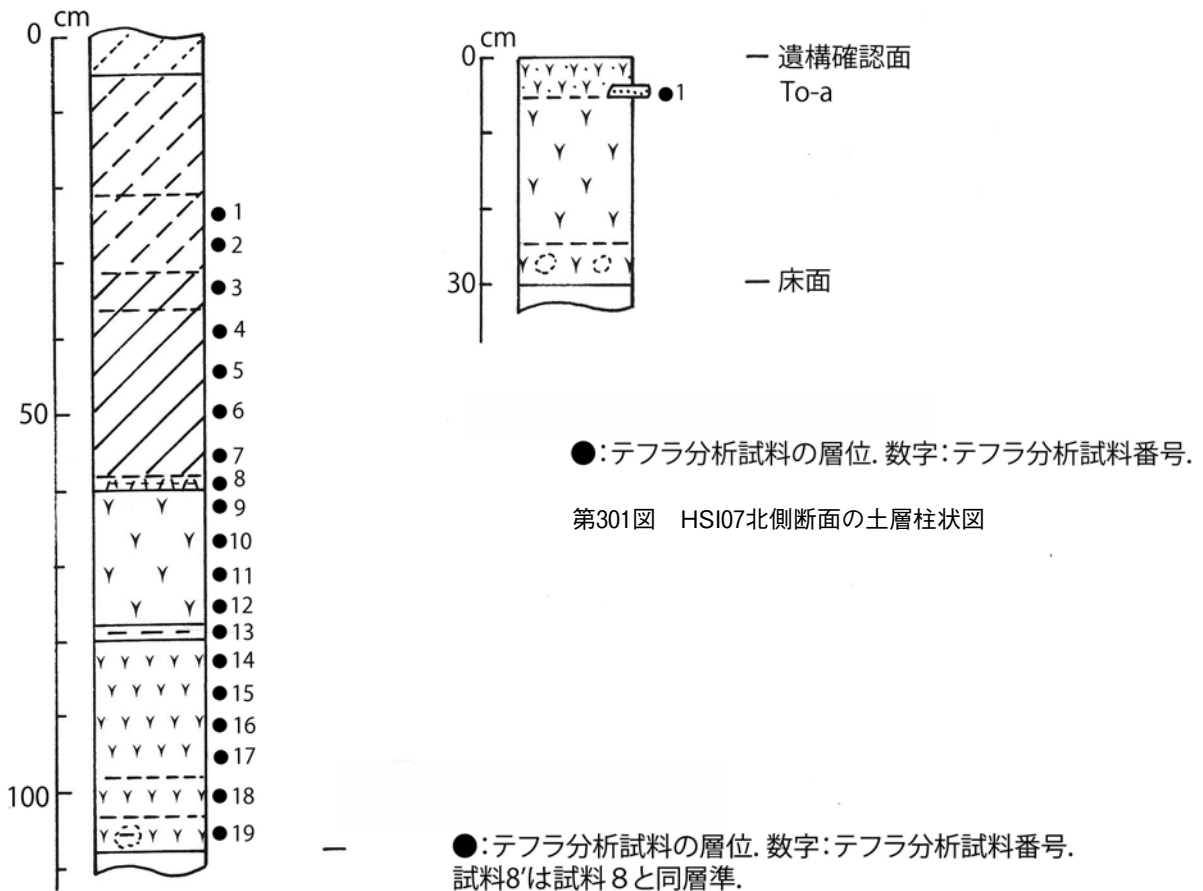
##### HSI07（第301図）

HSI07住居址の覆土は、下位より灰色粘質土ブロック混じり暗灰色泥層（層厚5cm）、暗灰色泥層（層厚19cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）、砂混じり黒色泥層（層厚5cm）からなる。



●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析試料番号.

第300図 HSD05・A-A'セクションの土層柱状図



●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析試料番号.

第301図 HSI07北側断面の土層柱状図

●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析試料番号.  
試料8'は試料8と同層準.

第302図 ISD01土層柱状図

### (3) テフラ検出分析

#### 分析試料と分析方法

現地において、層界を避けて基本的に厚さ5cmで設定し採取された試料のうち22点と、発掘調査担当者により採取送付された2試料を含む24点を対象に、軽石、スコリア、火山ガラスなどのテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を、次の手順で実施した。

- 1) 砂分の含有程度により6～8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

#### 分析結果

テフラ検出分析の結果を第3表に示す。いずれの試料でも2mmより粗粒の軽石やスコリアは認められないものの、火山ガラスを検出できた。HSD05A-A'セクションでは、いずれからも無色透明や繊維束状ガラスが検出された。ほかに、淡褐色や褐色の平板状のバブル型や分厚い中間型ガラスを含む試料もあり、試料5でやや含まれる火山ガラスの量が多いものの、顕著な火山ガラスの濃集層準は認められない。また、HSD05B-B'セクションの試料2および試料1でも同じような傾向にある。

ISD01でも検出される火山ガラスの特徴は、HSD05のA-A'セクションやB-B'セクションで検出される火山ガラスのそれと類似している。ここでの火山ガラスは、試料13および試料8より上位の試料に比較的多く含まれている。これらの試料とは異なって、HSI07北側試料1、HSI07南側試料1、また発掘調査担当者により試料が採取されたH区HSI06C-C'セクションやH区HSI06ベルトの火山灰には、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは、白色のスポンジ状軽石型、無色透明や淡褐色の繊維束状軽石型ガラスである。

### (4) 火山ガラス比分析

#### 分析試料と分析方法

発掘調査担当者によりFSD01・FP017とVSD01で採取された火山灰試料について、火山ガラスの形態別含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。
- 5) 分析篩を用いて1/4～1/8mmと1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 6) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mm粒径の250粒子を観察し、火山ガラスの形態別含有率、軽鉍物および重鉍物の含有率を求める。

#### 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第303図に、その内訳を第4表に示す。FSD01・FP017火山灰試料には、火山ガラス、軽鉍物、重鉍物が、順に55.6%、15.2%、4.0%含まれており、火山ガラスの含有率が高い。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型(40.4%)、

第3表 テフラ検出分析結果

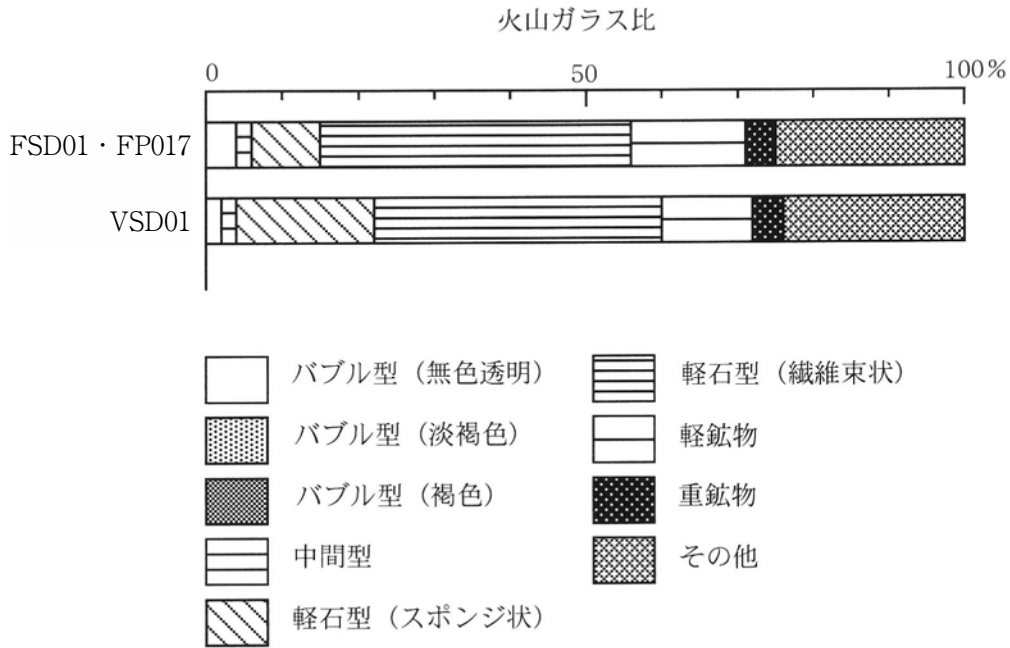
地 点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
HSD05・A-A' セクション	1				*	pm(fb)	cl, pb
	1'				*	pm (fb)	cl
	2				*	pm(fb)>bw,md	cl, pb, br
	3				*	pm(fb)	cl
	4				*	pm (fb)	cl
	5				**	pm (fb) >bw	cl, pb, br
HSD05・B-B' セクション	1				*	pm (fb), md	cl, pb
	2				*	pm (fb), bw	cl, pb, br
ISD01	2				**	pm (fb)	cl
	3				**	pm (fb) >bw	cl
	6				**	pm (fb) >bw	cl, pb
	7				**	pm (fb)	cl, pb, br
	8				**	pm (fb) >bw	cl, pb
	8'				*	pm (fb)	cl
	10				*	pm (fb)	cl
	13				**	pm (fb) >bw	cl, pb, br
	16				*	pm (fb)	cl
	18				*	pm (fb)	cl, pb, br
	19				*	pm (fb)	cl, pb
HSI07北側	1				***	pm (sp, fb)	wh, cl, pb
HSI07南側	1				***	pm (sp, fb)	wh, cl, pb
H区 HSI06C-C' セクション	火山灰				***	pm (sp, fb)	wh, cl, pb
H区 HSI06ベルト	火山灰				***	pm (sp, fb)	wh, cl, pb

\*\*\*: とくに多い, \*\*: 多い, \*: 中程度, \*: 少ない, bw: バブル型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状発泡, fb: 繊維束状発泡, cl: 無色透明, wh: 白色, pb: 淡褐色, br: 褐色.

第4表 火山ガラス比分析結果

地点・試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
FSD01・SP17	9	0	0	5	24	101	38	10	63	250
VSD01	6	0	0	6	44	95	31	11	57	250

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数.



第303図 火山灰試料の火山ガラス比ダイアグラム

スポンジ状軽石型 (9.6%)、無色透明のバブル型 (3.6%)、分厚い中間型 (2.0%) である。

一方、VSD01火山灰試料には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物が、順に60.4%、12.4%、4.4%含まれており、やはり火山ガラスの含有率が高い。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型 (38.0%)、スポンジ状軽石型 (17.6%)、無色透明のバブル型および中間型 (各2.4%) である。

#### (5) 屈折率測定 (火山ガラス)

##### 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、FSD01・FP017とVSD01において発掘調査担当者により採取された火山灰2試料と、テフラ検出分析対象試料のうちのテフラ層やみかけ上テフラを多く含む可能性があった4試料の合計6試料に含まれる火山ガラスを対象に、温度変化型屈折率測定装置 (古澤地質社製MAIOT) により、屈折率測定を実施した。測定対象は、分析篩による篩別で得られた1/8-1/16mm粒径の粒子の中の火山ガラスである。

##### 測定結果

屈折率測定の結果を第5表に示す。この表には、岩手県南部周辺に降灰する後期更新世以降のおもな指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。FSD01・FP017とVSD01の火山灰試料に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、それぞれ1.501-1.509 (28粒子) と1.505-1.508 (30粒子) である。

HSD05A-A' セクションの試料1に含まれる火山ガラス30粒子の屈折率 (n) の range は1.495-1.506で、実際には n : 1.495-1.497 (13粒子) と、n : 1.502-1.506 (17粒子) の bimodal 組成となっている。HSD05B-B' セクションの試料1に含まれる火山ガラス29粒子の屈折率 (n) の range は1.495-1.504で、実際には n : 1.495-1.498 (22粒子) と、n : 1.503-1.504 (7粒子) の bimodal 組成となっている。さ

第5表 屈折率測定結果

測定試料	火山ガラス		おもな文献
	屈折率 (n)	測定粒子数	
漆町遺跡FSD01・FP017	1.501-1.509	28	本報告
漆町遺跡VSD01	1.505-1.508	30	本報告
漆町遺跡HSD05A-A' セクション・試料 1	1.495-1.506 (1.495-1.497, 1.502-1.506)	30 (13, 17)	本報告
漆町遺跡HSD05B-B' セクション・試料 1	1.495-1.504 (1.495-1.498, 1.503-1.504)	29 (22, 7)	本報告
漆町遺跡ISD01・試料 8'	1.495-1.504 (1.495-1.498, 1.503-1.504)	30 (26, 4)	本報告
漆町遺跡HSI07南側・試料 1	1.501-1.507	30	本報告
岩手県南部とその周辺の後期更新世以降の指標テフラ			
白頭山苫小牧 (B-Tm, 10世紀)	1.511-1.522 (1.515-1.520)		町田・新井 (2003)
十和田 a (To-a, 915AD) <sup>1</sup>	1.500-1.508		町田・新井 (2003)
榛名二ツ岳伊香保 (Hr-FP, 6世紀中葉)	1.500-1.503		町田・新井 (2003)
十和田中堰 (To-Cu, 6ka)	1.508-1.512		町田・新井 (2003)
(安家火山灰, 岩手県岩泉町)	1.507-1.513		早田ほか (1988)
(吾妻火山灰, 福島県東吾妻)	1.507-1.512		早田ほか (1988)
鬼界アカホヤ (K-Ah, 7.3ka)	1.508-1.516		町田・新井 (2003)
肘折尾花沢 (Hj-O,11-12ka) <sup>2</sup>	1.499-1.504		町田・新井 (2003)
十和田八戸 (To-H, 15ka)	1.505-1.509		町田・新井 (2003)
浅間草津 (As-K, 15-16.5ka)	1.501-1.503		町田・新井 (2003)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 15-16.5ka)	1.501-1.505		町田・新井 (2003)
鳴子湯沼上原 (NK-U)	1.492-1.500		町田・新井 (2003)
始良 Tn (AT, 28-30ka)	1.499-1.501		町田・新井 (2003)
十和田大不動 (To-Of, ≥32ka)	1.505-1.511		町田・新井 (2003)
鳴子柳沢 (Nr-Y, 41-63ka)	1.500-1.503		町田・新井 (2003)
阿蘇 4 (Aso-4, 85-90ka)	1.509-1.512		町田・新井 (2003)
鳴子荷坂 (Nr-N, 90ka)	1.500-1.502		町田・新井 (2003)
肘折北原 (Hj-Kth, 90-100ka)	1.499-1.501		町田・新井 (2003)
御岳第 1 (On-Pm1, 100ka)	1.500-1.503		町田・新井 (2003)
三瓶木次 (SK, 110-115ka)	1.495-1.498		町田・新井 (2003)
洞爺 (Toya, 112-115ka)	1.496-1.498		町田・新井 (2003)

\*1: 岩手・秋田地域での屈折率特性. \*2: <sup>14</sup>C 年代. ( ): modal range. ka: 1,000年前.

らに、ISD01の試料 8' に含まれる火山ガラス30粒子の屈折率 (n) の range は1.495-1.504で、実際には n : 1.495-1.498 (26粒子) と、n : 1.503-1.504 (4粒子) の bimodal 組成となっている。

HSI07南側の試料 1 に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (n) は1.501-1.507で、FSD01・FP017とVSD01の試料に含まれる火山ガラスと同じような屈折率特性をもつ。

## (6) 火山ガラスの主成分分析 (EPMA 分析)

### 分析試料と分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるため、VSD01の火山灰試料とHSD05A-A' セクションの試料 1 に含まれる火山ガラスを対象に、電子線マイクロアナライザ (EPMA) により、1/4-1/8 mm粒径の火山ガラスの主成分組成を明らかにした。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01μA、ビーム径10μmの条件で行った。また、補正にはOxideZAF法を用いた。

### 分析結果

分析結果を表 6 ~10 に示す。VSD01の火山灰試料に含まれる火山ガラスの主成分組成には共通し



第6表 VSD01火山灰試料に含まれる火山ガラスの主成分分析結果

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
1	77.16	0.36	12.63	1.49	0.03	0.40	1.87	4.57	1.44	0.05	100.00
2	77.29	0.32	12.83	1.57	0.08	0.44	1.90	4.34	1.16	0.07	100.00
3	77.36	0.42	12.61	1.66	0.13	0.41	1.84	4.44	1.08	0.05	100.00
4	76.88	0.42	12.78	1.70	0.08	0.43	2.06	4.56	1.09	0.00	100.00
5	76.81	0.31	12.73	1.93	0.06	0.45	1.98	4.44	1.17	0.12	100.00
6	77.15	0.36	12.78	1.64	0.06	0.36	2.04	4.60	1.01	0.00	100.00
7	77.15	0.30	12.78	1.72	0.13	0.47	1.85	4.41	1.13	0.06	100.00
8	77.33	0.41	12.61	1.58	0.14	0.41	1.93	4.42	1.08	0.07	100.00
9	78.17	0.34	12.34	1.42	0.10	0.43	1.88	4.18	1.09	0.06	100.00
10	77.11	0.43	12.70	1.68	0.06	0.43	1.86	4.51	1.15	0.07	100.00
11	78.87	0.30	12.75	1.63	0.13	0.36	2.04	2.80	1.10	0.03	100.00
12	77.23	0.30	12.58	1.82	0.01	0.44	2.06	4.49	1.03	0.03	100.00
平均	77.37	0.36	12.68	1.65	0.09	0.42	1.94	4.31	1.13	0.05	100.00

無水に換算.

第7表 HSD05A-A' セクション試料1に含まれる火山ガラスの主成分分析結果

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
3-1	78.73	0.20	11.50	1.67	0.12	0.21	1.40	3.77	2.35	0.04	100.00
3-2	78.49	0.21	11.77	1.21	0.11	0.16	1.03	3.85	3.19	0.00	100.00
3-3	78.65	0.07	11.75	1.35	0.01	0.00	0.69	1.74	5.74	0.00	100.00
3-4	79.07	0.03	12.06	1.00	0.00	0.00	0.27	1.12	6.43	0.01	100.00
3-5	78.54	0.07	11.52	2.30	0.09	0.11	1.20	4.05	2.12	0.00	100.00
3-6	78.85	0.06	12.08	0.78	0.00	0.00	0.34	1.73	6.17	0.00	100.00
3-7	78.24	0.03	11.97	1.03	0.11	0.02	0.36	1.63	6.47	0.15	100.00
3-8	79.88	0.19	11.65	1.34	0.10	0.22	1.29	3.09	2.23	0.01	100.00
3-9	78.65	0.07	11.91	0.86	0.00	0.00	0.27	2.29	5.94	0.00	100.00
3-10	78.41	0.23	11.99	1.51	0.13	0.16	0.99	4.30	2.26	0.03	100.00
3-11	78.60	0.03	12.07	1.11	0.04	0.00	0.63	3.56	3.96	0.00	100.00
平均	78.74	0.11	11.84	1.29	0.06	0.08	0.77	2.83	4.26	0.02	100.00

無水に換算.

第8表 HSD05A-A' セクション試料1・タイプAの火山ガラスの主成分組成

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
3-1	78.73	0.20	11.50	1.67	0.12	0.21	1.40	3.77	2.35	0.04	100.00
3-2	78.49	0.21	11.77	1.21	0.11	0.16	1.03	3.85	3.19	0.00	100.00
3-8	79.88	0.19	11.65	1.34	0.10	0.22	1.29	3.09	2.23	0.01	100.00
3-10	78.41	0.23	11.99	1.51	0.13	0.16	0.99	4.30	2.26	0.03	100.00
平均	78.88	0.21	11.73	1.43	0.12	0.19	1.18	3.75	2.51	0.02	100.00

無水に換算.

第9表 HSD05A-A' セクション試料1・タイプBの火山ガラスの主成分組成

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
3-3	78.65	0.07	11.75	1.35	0.01	0.00	0.69	1.74	5.74	0.00	100.00
3-4	79.07	0.03	12.06	1.00	0.00	0.00	0.27	1.12	6.43	0.01	100.00
3-6	78.85	0.06	12.08	0.78	0.00	0.00	0.34	1.73	6.17	0.00	100.00
3-7	78.24	0.03	11.97	1.03	0.11	0.02	0.36	1.63	6.47	0.15	100.00
3-9	78.65	0.07	11.91	0.86	0.00	0.00	0.27	2.29	5.94	0.00	100.00
3-11	78.60	0.03	12.07	1.11	0.04	0.00	0.63	3.56	3.96	0.00	100.00
平均	78.68	0.05	11.97	1.02	0.03	0.00	0.43	2.01	5.79	0.03	100.00

無水に換算.

第10表 HSD05A-A' セクション試料1・タイプCの火山ガラスの主成分組成

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
3-5	78.54	0.07	11.52	2.30	0.09	0.11	1.20	4.05	2.12	0.00	100.00

無水に換算.

第11表 漆町遺跡テフラ試料と代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分組成

測定番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	文献
VSD01火山灰試料	77.60	0.35	12.63	1.64	0.09	0.42	1.94	4.16	1.10	0.05	本報告
HSD05A-A'・試料1タイプA	78.88	0.21	11.73	1.43	0.12	0.19	1.18	3.75	2.51	0.02	本報告
HSD05A-A'・試料1タイプB	78.68	0.05	11.97	1.02	0.03	0.00	0.43	2.01	5.79	0.03	本報告
HSD05A-A'・試料1タイプC	78.54	0.07	11.52	2.30	0.09	0.11	1.20	4.05	2.12	0.00	本報告
岩手県南部の代表的なテフラ											
To-a	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34		1)
To-Cu	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29		1)
K-Ah	75.24	0.53	12.85	2.42	0.08	0.47	2.02	3.32	3.00		1)
Hj-O	77.79	0.16	12.76	1.05		0.44	1.09	3.61	3.10		2)
To-H (pf) 上部	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30		3)
To-H (pf) 下部	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24		3)
As-YP	78.15	0.27	11.99	1.33	0.04	0.26	1.30	3.72	2.89		1)
Nr-KU	77.98	0.22	12.28	1.22		1.01	1.59	4.23	1.47		1)
AT	78.25	0.13	12.14	1.26	0.04	0.11	1.09	3.41	3.56	0.02	2)
To-Of (pf)	77.82	0.36	12.45	1.88	0.08	0.33	1.87	3.97	1.25		3)
Nr-Y	78.11	0.17	12.98	1.28		0.43	1.52	3.57	1.93		2)
Aso-4	71.71	0.38	15.51	1.44	0.05	0.54	1.04	4.32	5.02		2)
Nr-N	78.01	0.12	12.93	1.29		0.37	1.28	4.12	1.88		2)
Hj-Kth	76.99	0.07	13.37	0.61		0.32	0.70	3.43	3.89		2)
On-Pml	75.34	0.13	14.61	0.91		0.52	1.56	3.48	3.46		2)
Toya	78.10	0.07	13.47	0.89	0.08	0.22	0.37	3.84	2.95		2)
Nr-It	76.99	0.15	13.07	1.93		0.53	1.86	4.26	1.21		1)

無水に換算。1) 八木 (未公表)。2) 八木・早田 (1989)。3) 青木・新井 (2000)。

た特徴が認められた。一方、HSD05A-A' セクションの試料1には、主成分組成上3種類の火山ガラスが含まれていることが明らかになった(表5~7)。ここでは、A~Cタイプに区分することにする。それらと指標テフラとの比較のために表11を作成した。なお、分析結果はいずれも無水に換算して表示している。

## (7) 考 察

VSD01火山灰試料に含まれる火山ガラスは、形態、色調、屈折率特性、主成分組成から、915年に十和田火山から噴出した十和田aテフラ (To-a、大池ほか、1972、町田ほか、1981、町田・新井、1992、2003) に同定される。また、FSD01・FP017火山灰試料に含まれる火山ガラスも、形態、色調、屈折率特性から、To-aに由来する可能性が高いと考えられる。

また、HSI07北側試料1およびHSI07南側試料1が採取された火山灰層、また発掘調査担当者により試料が採取されたH区HSI06C-C' セクションやH区HSI06ベルトの火山灰層も、火山ガラスの形態や色調などから同一テフラに由来すると考えられる。このテフラは、HSI07南側試料1に含まれる火山ガラスの屈折率特性を合わせると、To-aに同定される可能性が高い。したがって、HSI07やH区HSI06については、To-aより下位の遺構と推定される。

ほかの屈折率測定対象の試料が採取された堆積物は、火山ガラスの屈折率特性が bimodal 組成となっていることから、複数のテフラに由来する火山ガラスを含む二次堆積物と考えられる。そのうち、屈折率が高い方の火山ガラス (n : 1.502-1.506) に関しては To-a に由来する可能性を否定できないものの、屈折率特性からみてもっとも含まれる可能性が高い HSD05A-A' セクションの試料1における主成分分析で、To-a に由来する火山ガラスが検出されなかったことから、いずれの試料に

も To-a が含まれているとは言い難い。

なお、HSD05A-A' セクションの試料 1 には、最近岩手県南部でも検出されはじめている約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP、新井、1962、町田・新井、2003など）をはじめとする浅間系テフラに類似した主成分組成をもつ火山ガラスが含まれているらしい（タイプ A）。さらに、EPMAによる分析点数を増やしてチェックすることも考えられるが、現段階において HSD05 および ISD01 については To-a より下位にあると考えられよう。

#### (8) ま と め

奥州市漆町遺跡において、地質調査を実施して土層やテフラ層の層相観察を行うとともに、高純度で採取した試料と、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分分析）を行った。その結果、十和田 a テフラ層（To-a、915年）のほか、複数のテフラに由来する火山ガラスを検出できた。発掘調査で検出された HSI06 および HSI07 は To-a より下位にあることはほぼ確実で、HSD05 および ISD01 に関しても、今回得られたデータをもとにすると To-a より下位にあると推定される。

(株)火山灰考古学研究所 早田勉

#### 文献

- 新井房夫 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79.  
青木かおり・新井房夫 2000 三陸沖海底コア KH94-3、LM-8の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究、39、p.107-120.  
町田洋・新井房夫 1992 火山灰アトラス. 東京大学出版会、276p.  
町田洋・新井房夫 2003 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会、336p.  
町田洋・新井房夫・森脇広 1981 日本海を渡ってきたテフラ. 科学、51、p.562-569.  
大池昭二 1972 十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究、11、p.232-233.  
早田勉・八木浩司・西城潔・新井房夫・高田将志 1988 縄文時代の示標テフラー吾妻火山灰（演旨）. 東北地理、40、p.231  
八木浩司・早田勉 1989 宮城県中部および北部に分布する後期更新世広域テフラとその層位. 地学雑、98、p.871-885.

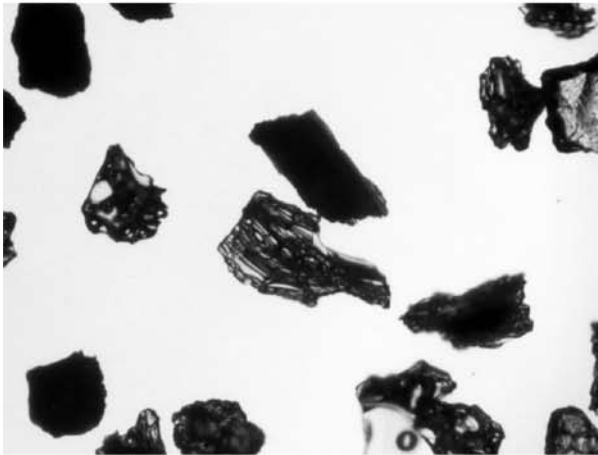
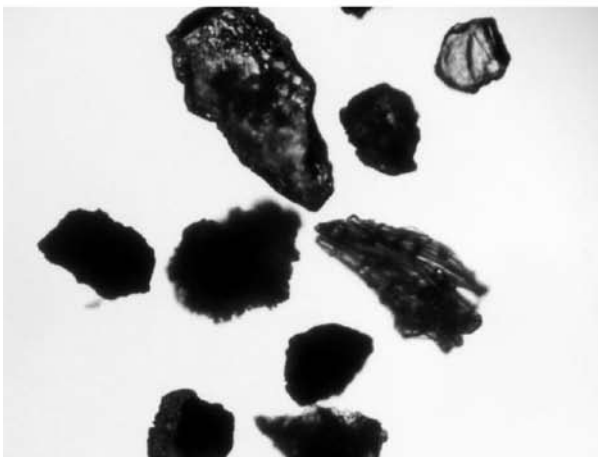


写真1 FSD01・FP017  
繊維束状軽石型ガラス  
(中央上下・中央右下)



写真2 FSD01・FP017  
無色透明バブル型ガラス (中央上)  
繊維束状軽石型ガラス (中央左下)  
スポンジ状軽石型ガラス (中央右下)



0.2mm

写真3 VSD01  
繊維束状軽石型ガラス (中央右)  
スポンジ状軽石型ガラス (中央左)

## 2 花粉分析

### (1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては、遺構内の堆積などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

漆町遺跡は、奥州市胆沢区南都田字漆町に所在する。平成24～25年度に実施された発掘調査において、平安時代の竪穴住居、掘立柱建物跡、溝等が検出された。ここでは花粉分析をおよび採取された堆積物の観察等から、植生の変遷を主に環境の推定復原を行う。

### (2) 試料

分析試料は、平安時代の集落を囲う堀と考えられる遺構2ヶ所より採取された15点と、平安時代の溝2ヶ所より採取された12点である。下表に試料一覧を記す。

第12表 分析試料一覧

調査区	遺構名	サンプル層位	性 状
F区	SD01	1層	暗黒(灰) 褐色シルト粘土
		2層	暗黒(灰) 褐色粘土
		3層	褐色粘土
		4層	褐色粘土
		5層	黒褐色粘土
		6層	黒褐色粘土
		7層	褐色微砂シルト
V区	SD01	1層	暗黒色有機質粘土
		2層	黒(灰) 褐色有機質粘土
		3層	黒(灰) 褐色有機質粘土
		4層	暗灰褐色有機シルト粘土
		5層	暗灰褐色シルト粘土
		6層	灰褐色シルト粘土
		7層	灰褐色微砂
		8層	灰褐色粘土
H区	HSD05A-A'	①	暗(灰) 褐色微砂
		②	暗(灰) 褐色シルト粘土
		④	暗(灰) 褐色シルト粘土
		⑤	暗(灰) 褐色シルト粘土
		⑥	(黄灰) 褐色シルト粘土
I区	ISD01	②	暗黒灰色シルト粘土
		③	暗黒灰色シルト粘土
		⑥	暗黒灰褐色有機質粘土
		⑩	暗黒灰褐色有機質粘土(微砂混)
		⑬	暗黒灰褐色有機質粘土
		⑱	暗黒灰褐色有機質粘土
	⑲	(暗)(黄) 灰褐色有機質粘土(微砂混)	

H区・I区では堆積物の粒度組成調査を行った（第305図）。H区では、最上部の①'は砂の占める割合が高く、中粒砂ないし細粒砂にピークをもち、水流の淘汰によって生成された堆積物である。②層、④層、⑤層、⑥層は泥（シルト・粘土）が約70%以上を占め、砂粒も細粒に偏る。著しく滞水せず、水の動きのない湿った程度から乾燥した環境下で風成によって生成された堆積物である。I区では、同様に砂粒は細粒に偏り、泥（シルト・粘土）が約70%以上を占める。淘汰を受けずに細粒堆積物が風成によって堆積したもので、水の流れのない湿った程度の環境が示唆される。

### (3) 方 法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を実施
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

### (4) 結 果

#### 分類群

##### 1) F区・V区

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉23、シダ植物孢子2形態の計51である。これらの学名と和名および粒数を第13表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第306、307図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

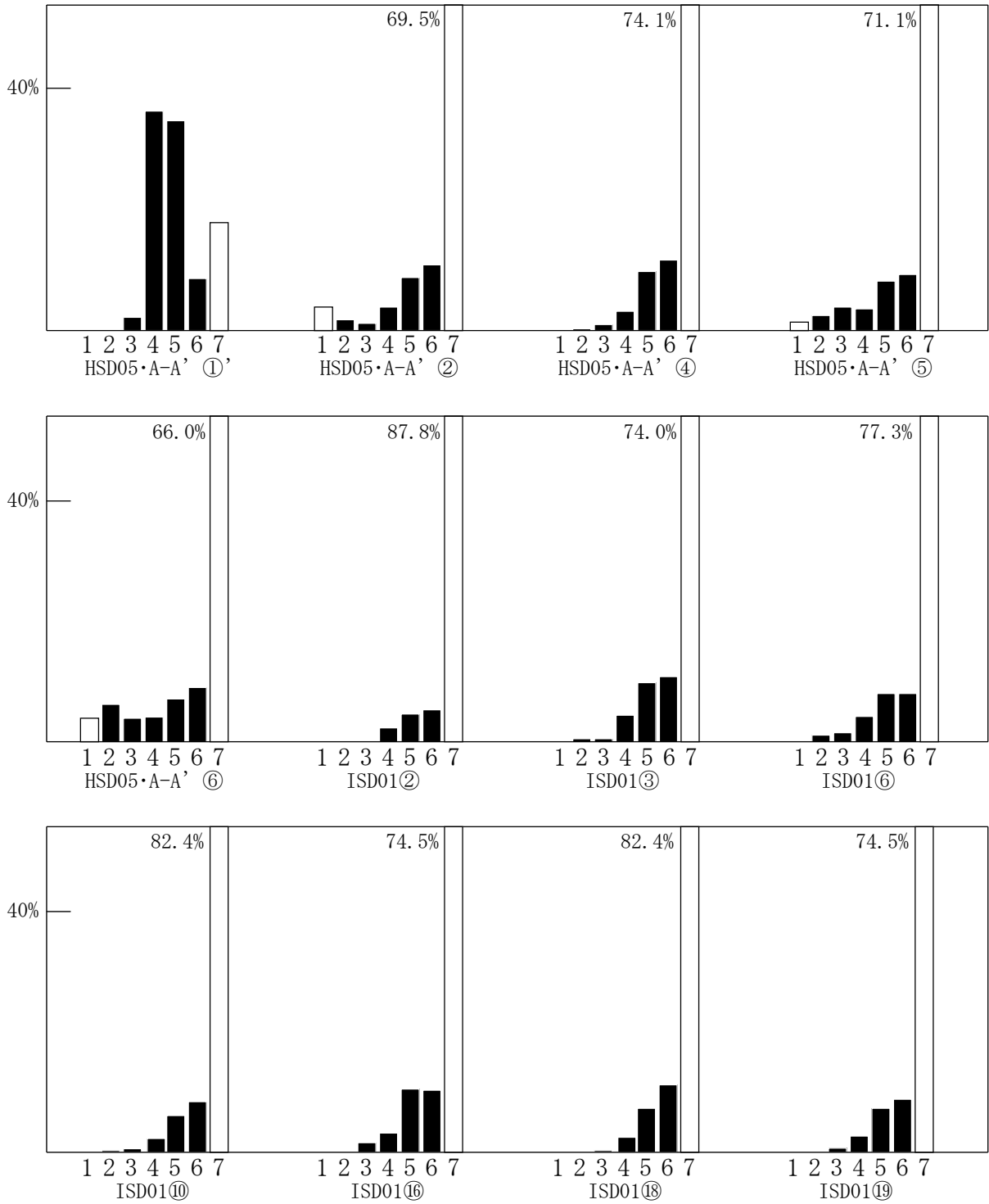
#### 〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

2 花粉分析



1 : 礫 (～2mm)    2 : 極粗粒砂 (1～2mm)    3 : 粗粒砂 (1～1/2mm)  
 4 : 中粒砂 (1/2～1/4mm)    5 : 細粒砂 (1/4～1/8mm)  
 6 : 極細粒砂 (1/8～1/16mm)    7 : シルト・粘土 (1/16mm～)

第305図 漆町遺跡：試料（堆積物）粒度組成

## 〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ユリ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、キアカバナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

## 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

## 2) H区・I区

出現した分類群は、樹木花粉14、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉14、シダ植物孢子2形態の計35である。これらの学名と和名および粒数を第14表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第309・310図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

## 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ、サンショウ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属

## 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

## 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、アブラナ科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

## 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

## 花粉群集の特徴

## 1) FSD01 (第306図)

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を設定した。以下に分帯ごとに特徴を記載する。

## ・ F－I帯 (7層～5層)

花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、ヨモギ属などが連続してわずかに出現する。

## ・ F－II帯 (4層、3層)

草本花粉の占める割合が高く、68.5%～72.5%を占める。草本花粉のヨモギ属が優占し、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われ、3層ではソバ属が出現する。他にカラマツソウ属やアブラナ科、クワ科－イラクサ科が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属がやや高率で、トチノキも比較的多い。

## ・ F－III帯 (2層、1層)

草本花粉が86.5%～89.0%を占めるようになる。ヨモギ属が卓越し、イネ科の出現率も高い。キク亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科が低率に出現し、1層ではカラマツソウ属が増加する。樹木花粉は、



2 花粉分析

第13表 漆町遺跡における花粉分析結果1

分類群		FSD01							VSD01							
学名	和名	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層
Arborealpollen	樹木花粉															
Abies	モミ属									1				1		1
Pinussubgen.Diploxylon	マツ属複雑管束亜属					1			1	3	1	1	2	2	1	5
Pinussubgen.Haploxylon	マツ属単維管束亜属												2	4		
Cryptomeriajaponica	スギ		2			1			26	16	23	32	26	35	1	33
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1										1		1	1	1
Salix	ヤナギ属	1		1										1		10
Juglans	クルミ属													1		
Pterocaryarhoifolia	サワグルミ			1							1	2		2		
Alnus	ハンノキ属	2	2			1			1	6	1	8		9	7	13
Betula	カバノキ属								1	1				1	1	
Carpinus-Ostryajaponica	クマシデ属-アサダ						1		1	1	3	2	1	2		
Castaneacrenata	クリ	4	1	2	4		1		10	6	5	10	6	30	297	24
Fagus	ブナ属	1	1		2	1		1	3	7	2	8	3	6	1	5
Quercussubgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	4	9	19	15	8	3		23	27	20	26	11	37	2	27
Ulmus-Zelkovaserrata	ニレ属-ケヤキ			1					4	4	2	2	1	4		6
Phellodendron	キハダ属													1		
Ilex	モチノキ属									1						
Acer	カエデ属															2
Aesculusturbinata	トチノキ	1	3	10	2	3			4			2	1	2	2	8
Vitis	ブドウ属									1		1				1
Fraxinus	トネリコ属													2		
Arboreal・Nonarborealpollen	樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	1	5	1		2		35	17	248	39	43	19	3	49
Rosaceae	バラ科										1					
Leguminosae	マメ科								1	2	3	6		5		
Araliaceae	ウコギ科			1		1	2									
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属				2									13		13
Nonarborealpollen	草本花粉															
Gramineae	イネ科	54	68	34	21	7	13	1	144	125	77	137	100	194	1	60
Oryzatype	イネ属型			1						2	1		1	1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	9	15	5	5	2		17	16	12	30	42	31	1	13
Liliaceae	ユリ科											1				
Polygonum	タデ属			1	1											
Polygonumsect.Persicaria	タデ属サナエタデ節												1			
Rumex	ギンギン属										2	2				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3							2	3	5	2	2	1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科			2						1	2					1
Ranunculus	キンボウゲ属										1	1				
Thalictrum	カラマツソウ属	36		4	5											
Cruciferae	アブラナ科		1	1	2				1	5	5	2		1		2
Impatiens	ツリフネソウ属			1										2		
Onagraceae	アカバナ科													1		
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	1							2							
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1						1						
Apioidae	セリ亜科	2	2	2	2			1	2	2		1	4	5		8
Plantago	オオバコ属													1		
Valerianaceae	オミナエシ科										1					
Lactuoidae	タンポポ科	6	3	5	1		5		8	6	5	1	5	6		3
Asteroidae	キク亜科	4	8	10	2	5	2		14	14	6	10	5	11	6	6
Artemisia	ヨモギ属	191	221	103	37	23	14	3	226	464	167	163	158	99	2	83
Fernspore	シダ植物胞子															
Monolatetypespore	単条溝胞子	6	19	5	6	4	13		7	13	8	13	19	15	1	18



2 花粉分析

分類群		HSD05A-A'					ISD01						
学名	和名	①'	②	④	⑤	⑥	②	③	⑥	⑩	⑬	⑱	⑲
Fernspore	シダ植物胞子												
Monolatetypespore	単条溝胞子		2	3		3	11	16	8	19	11	15	13
Trilatetypespore	三条溝胞子		2		1		127	113	159	113	10	17	
Arborealpollen	樹木花粉	1	2	7	3	1	34	70	93	78	37	34	25
Arboreal・Nonarborealpollen	樹木・草本花粉			1			17	8	5	7	1	2	
Nonarborealpollen	草本花粉	2	24	37	22	3	318	263	344	228	111	94	83
Totalpollen	花粉総数	3	26	45	25	4	369	341	442	313	149	130	108
Pollenfrequenciesof1cm3	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	2.4 ×10	2.2 ×10 <sup>2</sup>	2.7 ×10 <sup>2</sup>	1.5 ×10 <sup>2</sup>	2.8 ×10	1.1 ×10 <sup>4</sup>	7.8 ×10 <sup>3</sup>	9.0 ×10 <sup>3</sup>	2.5 ×10 <sup>2</sup>	1.2 ×10 <sup>3</sup>	7.9 ×10 <sup>2</sup>	8.7 ×10 <sup>2</sup>
Unknownpollen	未同定花粉		2				4	5	10	5	4	2	1
Fernspore	シダ植物胞子		4	3	1	3	138	129	167	132	21	32	13
Helmintheeggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woodsfragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(++)	(< +)	(+)	(+)	(+++)	(+++)	(+++)	(++)	(++)	(+)	(+)
Fernspore	シダ植物胞子												
Monolatetypespore	単条溝胞子	6	19	5	6	4	7	13	8	13			19

前帯より極めて低率になり、コナラ属コナラ亜属、クリが低率に出現する。

2) VSD01 (第307図)

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を設定した。以下に分帯ごとに特徴を記載する。また、Ⅲ帯では草本花粉の変化からⅢ-a、Ⅲ-b、Ⅲ-cの亜帯に細分した。

・V-I帯(8層)

樹木花粉が31.5%、草本花粉が40.5%、樹木・草本花粉が14.5%、シダ植物胞子が13.5%を占め、優占種はない。草本花粉ではヨモギ属、イネ科を中心にカヤツリグサ科、セリ亜科、キク亜科が出現し、クワ科-イラクサ科がやや低率に出現する。樹木花粉ではスギ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、ヤナギ属、トチノキ、ニワトコ属-ガマズミ属などが出現する。

・V-II帯(7層)

樹木花粉が95.5%を占め、クリが90%以上の高率で優占する。ハンノキ属やキク亜科が低率に伴われ、それら以外は極めて低率である。

・V-III帯(6層~1層)

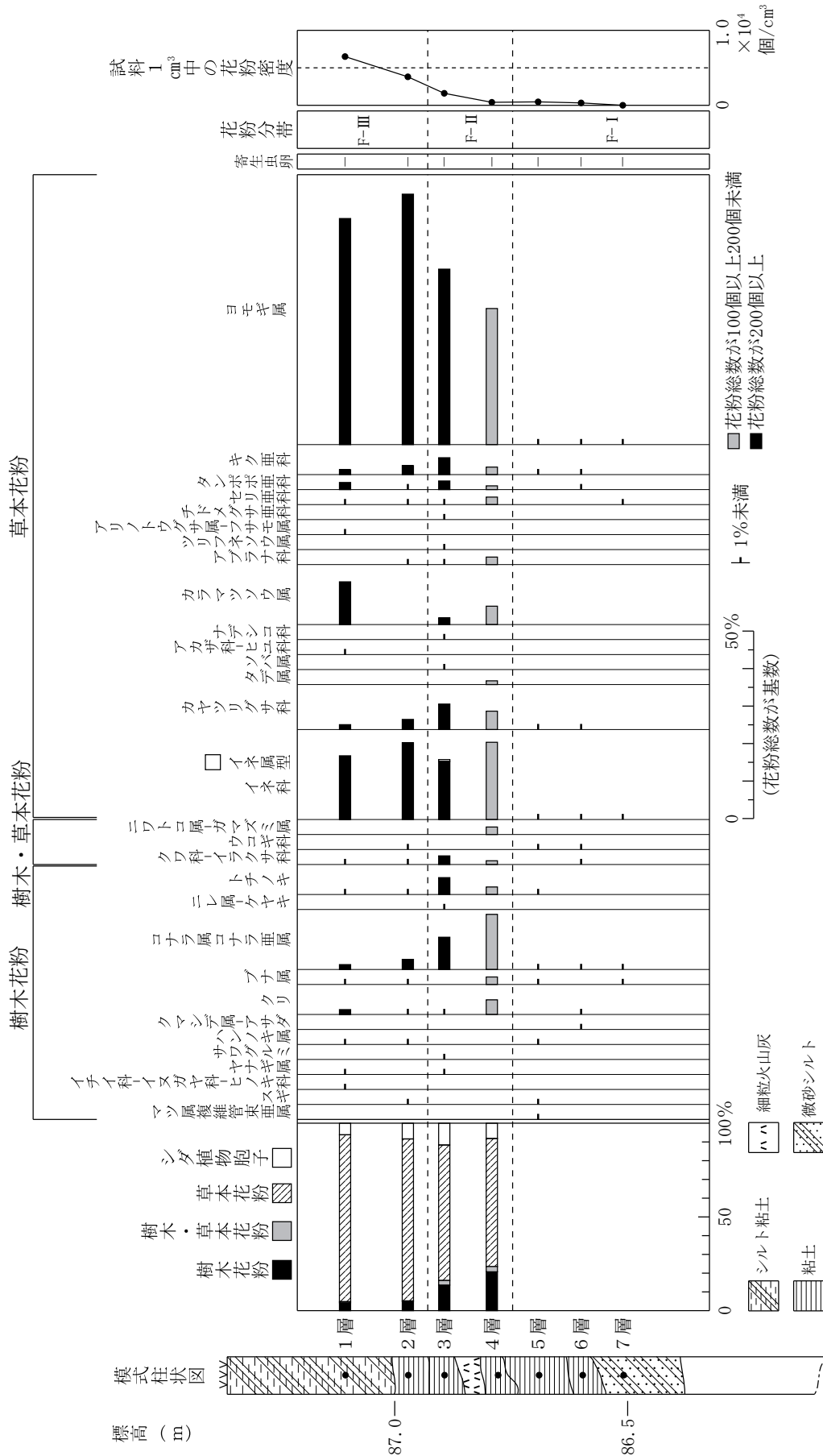
樹木花粉の占める割合が低くなり、24.5%~9.5%になる。Ⅲ-a亜帯ではイネ科、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、キク亜科が伴われる。Ⅲ-b亜帯では、クワ科-イラクサ科が特徴的に増加し、イネ科、カヤツリグサ科が減少する。Ⅲ-c亜帯ではヨモギ属、イネ科が増加し、クワ科-イラクサ科が激減する。本帯では樹木花粉は低率で、スギ、コナラ属コナラ亜属を主にクリ、ブナ属、ハンノキ属がわずかに出現する。

3) HSD05A-A' (第308図)

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されない。下部の試料⑥では、コナラ属コナラ亜属、カヤツリグサ科、ヨモギ属が、試料⑤では、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、ヨモギ属が、試料④ではハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、マメ科、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が、試料②では、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、ヨモギ属が、試料①'では、ハンノキ属、イネ科がそれぞれわずかに出現する。

4) ISD01 (第309図)

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より2帯の花粉分帯を設定した。以下に分帯ごとに特徴を記



第306図 漆町遺跡：FSD01における花粉ダイアグラム



載する。

・ I - I 帯 (試料⑥、⑩、⑬、⑱)

草本花粉の占める割合が高く、70%~50%を占める。草本花粉では、ヨモギ属が高率に出現し、次にイネ科が多い。他にキク亜科、タンポポ亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科が出現し、試料⑬からソバ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、トチノキなどが伴われる。

・ I - II 帯 (試料②、③)

コナラ属コナラ亜属の減少、スギの増加が特徴である。草本は、前帯と同様にヨモギ属が高率に出現し、次にイネ科が多く、キク亜科、タンポポ亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科が出現する。試料②からソバ属が出現し、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が連続して出現する。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

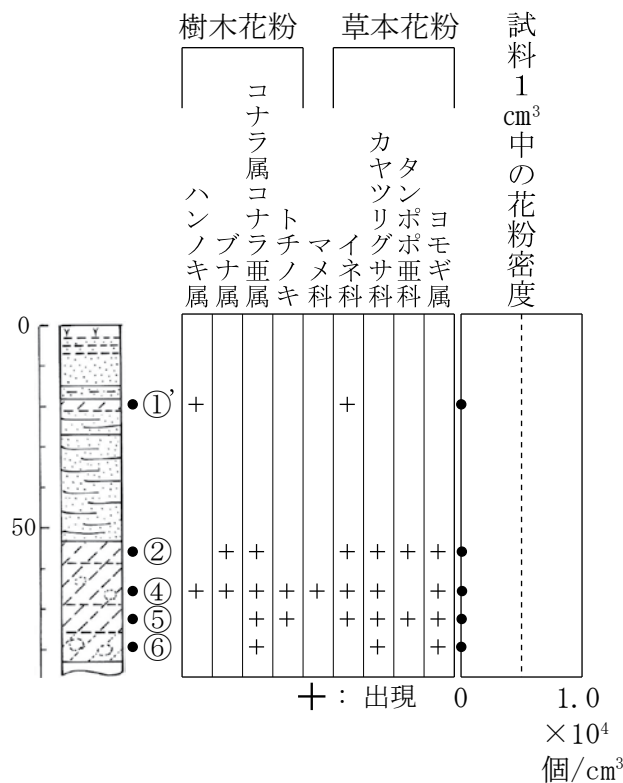
FSD01

1) F - I 帯期 (7層~5層)

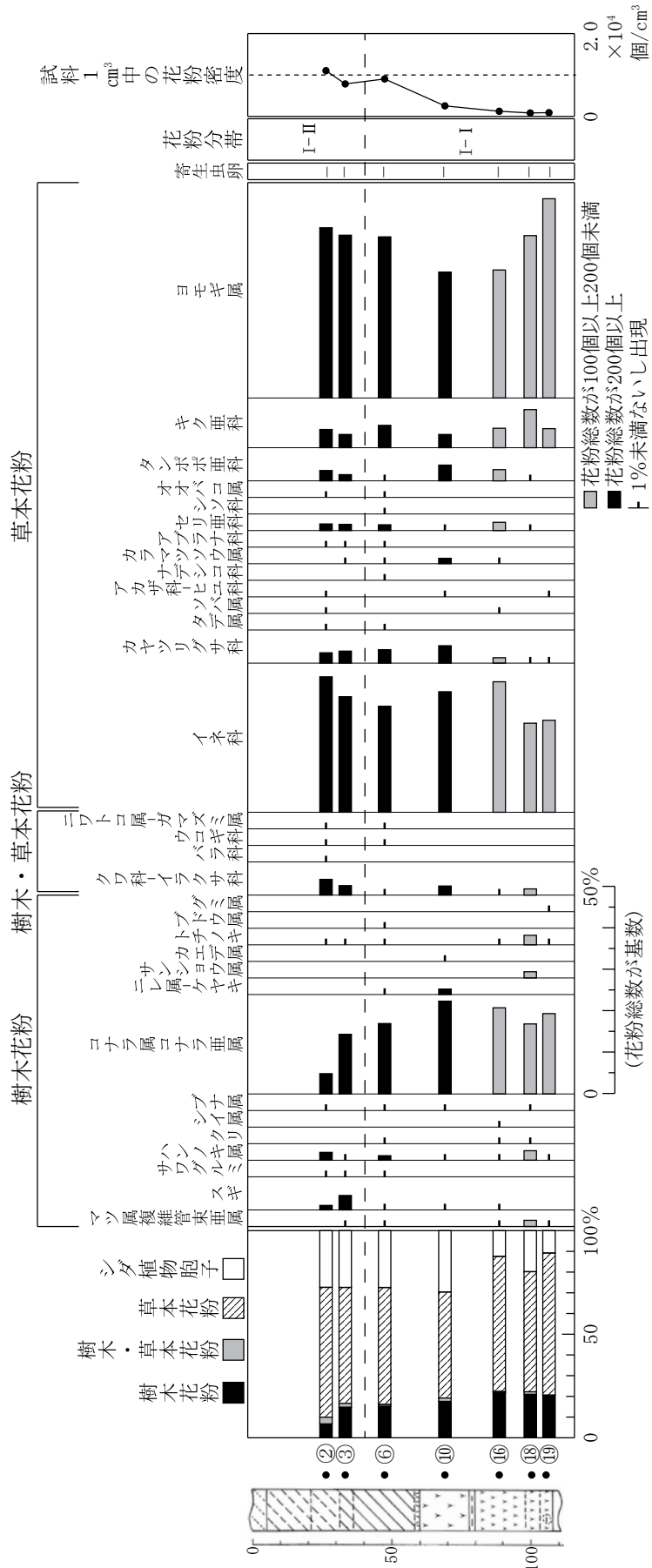
花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されない。堆積速度が速いか、花粉などの有機遺体が分解される乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境が推定される。コナラ属コナラ亜属やイネ科、ヨモギ属など連続して出現し、主要な植生の構成要素であったとみなされる。

2) F - II 帯期 (4層, 3層)

ヨモギ属が優占し、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科、カラマツソウ属、アブラナ科などが伴われ、これら草本の繁茂が示唆される。優占するヨモギ属やキク亜科は比較的乾燥を好む草本であり、やや乾燥した環境が示唆される。明らかな水生植物が出現せず、堀は滞水していなかった可能性が高い。3層からソバ属が検出され、優勢な草本は畑作雑草の性格ももつことから、周囲に畑の分布も推定さ



第308図 漆町遺跡：HSD05A-A'における花粉ダイアグラム



第309図 漆町遺跡：ISD01における花粉ダイアグラム

れる。近隣には森林は分布しないが、やや遠方にコナラ属コナラ亜属の林やトチノキなどが分布する。

### 3) F-Ⅲ帯期 (2層、1層)

ヨモギ属を中心にイネ科も多く、キク亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科などの草本が周辺に分布する。1層の時期にはカラマツソウ属も増加する。乾燥を好むヨモギ属が優勢で、明らかな水生植物はなく、上部であることから堀が埋没する時期であったと推定される。樹木花粉は極めて低率で、近隣に森林は分布せず、樹木はほとんど生育していなかった。

## VSD01

### 1) V-I帯期 (8層)

ヨモギ属、イネ科を中心にカヤツリグサ科、セリ亜科、キク亜科の草本やクワ科-イラクサ科が分布していた。樹木では、花粉の生産量と散布性の低い虫媒花植物のクリやニワトコ属-ガマズミ属が周囲に生育していたと推定されるが、スギ、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属などは周辺地域で多い樹木であったと考えられる。草本が優勢であり優占種がないことから、人為改変を受けた状態が示唆される。

### 2) V-II帯期 (7層)

クリが極めて高率で優占することから、周囲にクリ林が分布していた。クリは典型的な二次林種で、花粉散布性の低い虫媒花植物である。比較的狭い範囲で二次林を形成することから、周囲の土地利用が一時的に停滞した時期であったと推定される。

### 3) V-Ⅲ帯期 (6層から1層)

ヨモギ属とイネ科の草本が優勢であるが、Ⅲ-b帯期にクワ科-イラクサ科が特徴的に増加し、カナムグラ等の雑草の増加が認められる。Ⅲ-c帯期にはヨモギ属、イネ科が増加する。いずれの時期もやや乾燥を好む草本が多く、比較的乾燥した環境が推定される。水生植物が検出されず、堀は滞水していなかった可能性がある。周辺地域にはスギ、コナラ属コナラ亜属を主にブナ属、ハンノキ属の樹木ないし森林が分布する。

## HSD05 A-A'

いずれの試料も花粉はほとんど検出されず、試料①'では淘汰、試料②~⑥では分解によって低密度となったとみなされる。粒度組成からも著しく滞水せず、水の動きのない比較的湿った状況から乾燥した環境下で風成による生成が推定され、有機物が分解される環境であった。複数の層準で検出されるコナラ属コナラ亜属、ブナ属、ハンノキ属、トチノキの樹木、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科、タンポポ科の草本は周囲の植生の主要な構成要素であったとみられる。

## ISD01

### 1) I-I帯期 (試料⑥、⑩、⑬、⑱、⑲)

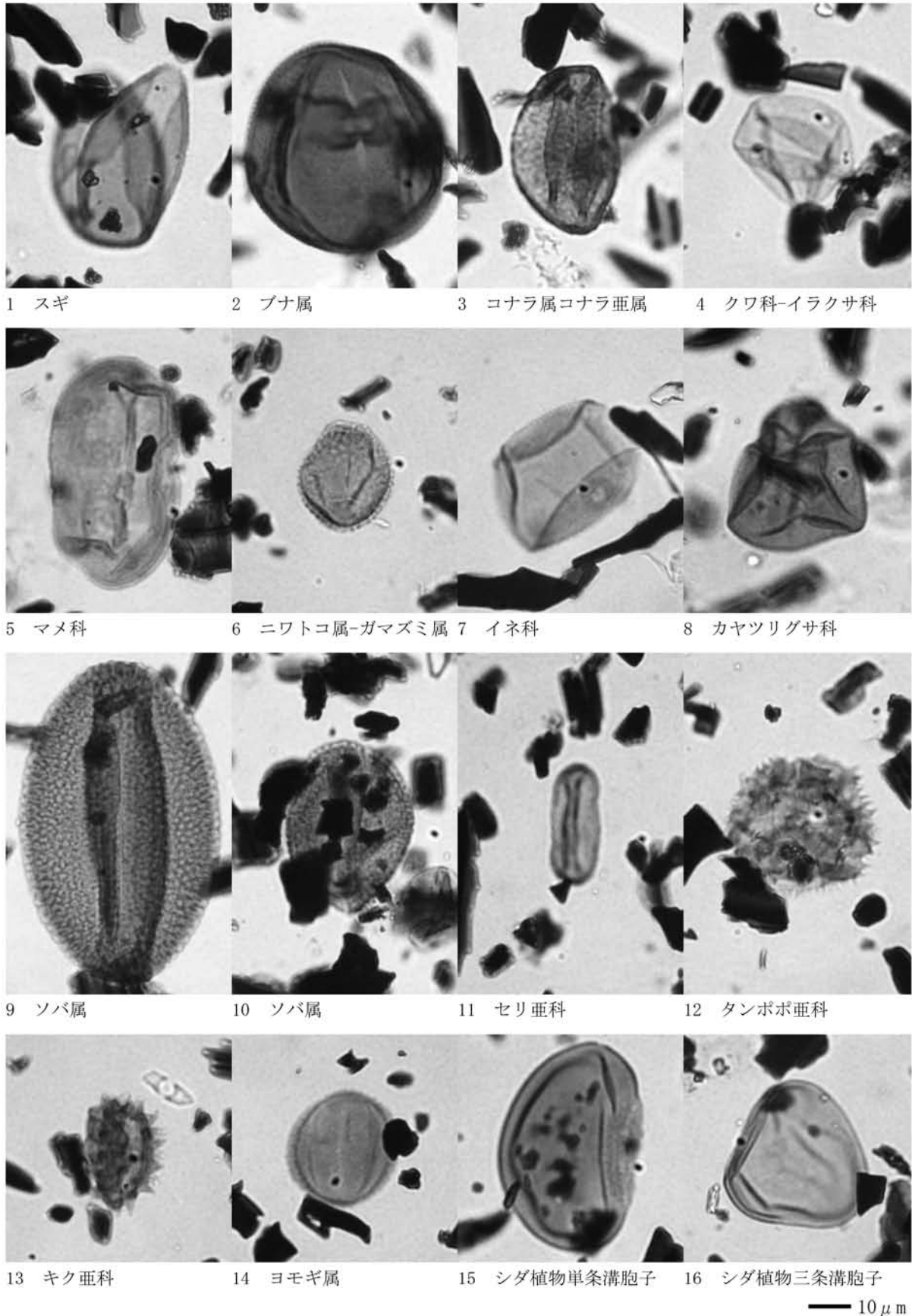
ヨモギ属およびイネ科が多く分布し、キク亜科、タンポポ科、カヤツリグサ科、セリ亜科が伴われることから、周囲は比較的乾燥した環境であった。試料⑬からはソバ属が出現し、畑作の分布が示唆される。周辺にはコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が分布し、局部的にハンノキ属、トチノキの湿地性の樹木も分布していた。

### 2) I-II帯期 (試料②、③)

スギ林が特徴的に分布し、降水量の増加が示唆される。コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が減少



漆町遺跡の花粉・孢子



第310図 漆町遺跡の花粉・孢子

し、ヨモギ属やイネ科の草本域が拡大する。試料②からソバ属が出現し、畑が拡大した可能性が高い。

#### (6) ま と め

漆町遺跡において花粉分析を行った結果、FSD01では、下部7層から5層（F-I帯）は花粉密度が極めて低く、堆積速度が速いか分解の行われる乾燥ないし乾湿を繰り返す環境が推定された。上位に向けて4層から1層（F-II帯、F-III帯）では、ヨモギ属とイネ科が主に分布しやや乾燥した環境であり、周囲にソバ属などの畑も分布していたと推定された。コナラ属コナラ亜属の林やトチノキなど樹木が分布するが、上位に向かい減少した。FSD01では、3層と4層の間に火山灰層を挟むが、植生の大きな変化はなく影響は認められない。VSD01では、同様にヨモギ属とイネ科を中心とする草本が優勢して分布する環境が示唆されたが、7層（V-II帯）でクリの二次林の極めて優勢な分布があり、土地利用の一時的な停滞が推定された。HSD05 A-A'では、花粉の分解が認められ、乾燥か乾湿を繰り返すような堆積環境であった。ISD01では、下部の試料⑥、⑩、⑬、⑱、⑲（I-I帯）では、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹が分布するが、上部の試料②、③（I-II帯）ではコナラ属コナラ亜属は減少し、スギ林が分布する。コナラ属コナラ亜属のみが優勢な森林の時期が下部で、スギ林も分布する時期が上部であると考えられる。このことから、FSD01が下部で、VSD01が上部という堆積状況が推定される。

いずれの地区も下部と上部においてもヨモギ属とイネ科が優勢であり、やや乾燥した人為改変地の分布が示唆され、散見されるソバ属から畑の分布も推定された。堀や溝は水生植物が検出されず、安定した水域をもたず、比較的湿った程度から乾燥した環境が支配的であったと推定される。森林植生からみると、下部ではコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林の優勢な冷温帯の気候が示唆され、上部ではスギ林が分布し湿潤化が推定された。  
(株)古環境研究所

#### 参考文献

- 土質工学会編 1979 土質試験法, p.2-5-1~2-5-23, 4-2-1~4-3-11.  
 中村 純 1967 花粉分析. 古今書院, p.82-102.  
 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.  
 中村 純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.  
 中村 純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.  
 中村 純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.  
 金原正明・金原正子 2013 植生と農耕における土壌層分析の実証的研究、日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集、p.112-113.

## 3 漆町遺跡から出土した種実

## (1) はじめに

漆町遺跡は奥州市胆沢区南都田に位置する平安時代を中心とした集落跡で、遺構からはかわらけや青白磁など様々な遺物が見つかり、奥州藤原氏の影響が強く及んでいたと考えられる地域である。この集落の住居跡や柱穴などからは炭化種実が、溝跡からは未炭化の種実が検出されたため当時の植物質食料などの利用状況を把握する目的でこれら種実の調査をおこなった。分析に供した試料は水洗選別済み計44試料で、双眼実体顕微鏡で観察した結果31試料から同定可能な種実等が確認された。

## (2) 同定結果

本遺跡から出土した種実を第15～18表に示す。溝跡からは未炭化のオニグルミ、モモが検出されたが最も多かったのはKSD02に堆積した焼土中の炭化イネで、ヒエ及びヒエ属も多く、ダイズ属、マメ科などが確認されいずれも炭化していた。住居や土坑などではHSK17試料から炭化イネを多量に出土したものの、他遺構では比較的出土数が少なく利用植物ではムギ類、ヒエ属、ブドウ属を、利用植物以外では針葉樹のスギ、サワラや草本のメヒシバ属、スズメノヒエ属、ホタルイ属、スベリヒユ、サナエタデ近似種、タンポポ属、オナモミなどが出土した。以下に特筆すべき分類群の記載をおこなう。

ブナ科 (Fagaceae)：果皮は暗褐色でやや光沢があり縦方向に規則的な筋があることからブナ科とした。破片が小さいためクリ属かブナ属かコナラ属かの区別はできない。

ムギ類 (Hordeum and/or Triticum)：炭化種子は3.5mmとやや小さく、本来円筒型の種子が縦半分

第15表 漆町遺跡から出土した種実 1

分類群	区遺構出土部位/層位	V SD01 埋土上部 (413)	V SD01 ベルト埋土上部 (火山灰より上) (414)	V SD01 埋土上部 (412-2)	K SD02 焼土	F SD02 埋土 (83)	S SD02 埋土 (261)	Q SD07 埋土 (234)	F SD08 埋土 (504)
オニグルミ	内果皮完形	-	-	-	-	1	-	-	1
	内果皮完形食痕	-	-	-	-	-	-	-	1
	内果皮風化	-	-	-	-	-	-	1	-
モモ	核完形	1	-	-	-	-	-	-	1
	核完形食痕	-	1	2	-	-	-	-	-
	核半分	-	-	1	-	-	-	-	-
	核半分食痕	-	-	1	-	-	-	-	-
	核破片	-	-	1	-	-	-	-	-
	核風化	-	-	-	-	-	1	1	-
ブドウ属	炭化種子	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ	炭化穎付き胚乳	-	-	-	42	-	-	-	-
	炭化胚乳完形	-	-	-	310	-	-	-	-
	炭化胚乳破片	-	-	-	300+	-	-	-	-
	炭化未熟胚乳	-	-	-	31	-	-	-	-
ヒエ	炭化種子	-	-	-	28	-	-	-	-
ヒエ属	炭化種子	-	-	-	116	-	-	-	-
スズメノヒエ属	穎果	-	-	-	1	-	-	-	-
ホタルイ属	炭化果実	-	-	-	1	-	-	-	-
イヌタデ属	炭化果実	-	-	-	9	-	-	-	-
ダイズ属	炭化種子	-	-	-	4	-	-	-	-
マメ科	炭化種子	-	-	-	30	-	-	-	-
	炭化種子破片	-	-	-	11	-	-	-	-
オナモミ	炭化総ほう	-	-	-	1	-	-	-	-
不明	炭化果皮	-	-	-	2	-	-	-	-
	炭化種実	-	-	-	1	-	-	-	-

第16表 漆町遺跡住居跡及び土坑から出土した種実 2

分類群	区 遺構 出土部位 / 層位	A SI01カマド 煙道部	K SI01カマド 炭化物層	K SI02 焼土	L SI03カマド 焼土	M SK04 埋土	M P101 埋土	U SI01カマド 燃焼部
スギ	種子	-	1	-	-	-	-	-
	雄花序	-	-	-	-	-	-	-
	葉	-	-	-	-	-	-	-
サワラ	葉	-	-	-	-	-	-	
ブナ科	果皮破片	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	炭化種子	-	-	1	-	-	-	
	炭化種子破片	-	-	2	-	-	-	
イネ	炭化胚乳完形	1	-	3	-	3	1	-
	炭化胚乳破片	-	-	4	-	5	3	-
	炭化未熟胚乳	-	-	-	-	-	-	-
	穎破片	-	-	-	-	-	-	1
ムギ類	炭化種子破片	-	-	-	-	-	-	
ヒエ属	炭化種子	-	-	-	-	1	2	-
	穎果	-	-	-	-	-	-	-
	内穎破片	-	-	-	-	-	-	-
メヒシバ属	穎果	-	-	-	-	-	-	
イネ科	炭化種子	-	-	-	1	-	-	
イネ科	穎果	-	-	-	-	-	-	1
ホタルイ属	炭化果実破片	-	-	-	-	-	-	
スベリヒユ	種子	-	-	-	-	-	-	
サナエタデ近似種	果実	-	-	-	-	-	-	
シソ科	炭化果実	-	-	-	-	1	-	
タンポポ属	果実	-	-	-	-	-	-	
不明穀類	炭化塊	-	-	-	-	-	-	
不明	炭化果皮	-	-	-	-	-	-	
	炭化種実	1	-	-	4	-	2	-

第17表 漆町遺跡住居跡及び土坑から出土した種実 3

分類群	区 遺構 出土部位 / 層位	H HSI05 燃焼部	H HSI07 竈焼土	H HSI08 焼土1	H HSI08 床面焼土2	H HSI10 埋土	H HP182 埋土	H HSK17 最下層	H HSK22 埋土
スギ	種子	-	-	2	-	-	-	-	-
	雄花序	-	-	-	-	-	2	2	1
	葉	-	-	-	-	1	1	1	-
サワラ	葉	6	-	-	-	-	-	-	
ブナ科	果皮破片	-	-	-	1	-	-	-	
ブドウ属	炭化種子	-	-	-	1	-	-	-	
	炭化種子破片	-	-	-	1	-	-	-	
イネ	炭化胚乳完形	-	2	-	-	1	3	57	-
	炭化胚乳破片	1	-	-	-	7	4	250	1
	炭化未熟胚乳	2	-	-	-	-	-	-	-
	穎破片	-	-	-	-	-	-	-	1
ムギ類	炭化種子破片	-	-	-	-	-	-	-	
ヒエ属	炭化種子	-	-	-	-	-	1	-	-
	穎果	-	-	-	-	1	-	-	3
	内穎破片	-	-	2	-	1	5	5	1
メヒシバ属	穎果	-	-	-	-	1	2	-	2
イネ科	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	穎果	-	-	-	-	1	-	2	2
ホタルイ属	炭化果実破片	-	-	-	-	-	-	1	-
スベリヒユ	種子	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタデ近似種	果実	-	-	-	-	-	-	-	
シソ科	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	
タンポポ属	果実	1	-	-	-	-	-	1	-
不明穀類	炭化塊	-	-	2	-	-	-	-	
不明	炭化果皮	-	-	-	-	-	-	-	
	炭化種実	-	-	-	-	-	-	-	1

第18表 漆町遺跡住居跡及び土坑から出土した種実 4

分類群	区 遺構 出土部位 / 層位	I ISI02 PP01内土	I ISI03 カマド	I ISI04 焼土	N NSI01 カマド焼土	Y YSK03 1層	Y YSK03 2層	Y YSK03 3層	Y YSI01 土器03内土
スギ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-
	雄花序	-	-	-	-	-	-	-	-
	葉	-	1	-	-	-	-	-	-
サワラ	葉	-	-	-	-	-	-	1	-
ブナ科	果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	1
	炭化種子破片	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	炭化胚乳完形	-	-	-	-	-	1	-	-
	炭化胚乳破片	-	-	-	-	-	-	-	-
	炭化未熟胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-
	穎破片	-	-	1	1	2	-	2	-
ムギ類	炭化種子破片	-	-	-	-	-	-	1	-
ヒエ属	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-
	穎果	-	-	-	2	-	-	-	-
	内穎破片	-	-	-	-	-	-	-	-
メシバ属	穎果	1	-	-	-	-	-	4	-
イネ科	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	穎果	1	-	-	-	-	-	1	-
ホタルイ属	炭化果実破片	-	-	-	-	-	-	-	-
スベリヒユ	種子	-	-	-	-	-	-	2	-
サナエタデ近似種	果実	-	-	-	-	-	1	-	-
シソ科	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
タンボポ属	果実	-	-	-	-	-	1	-	-
不明穀類	炭化塊	-	-	-	1	2	1	-	-
不明	炭化果皮	-	-	-	-	1	-	-	-
	炭化種実	-	-	-	-	-	-	-	-

に割れている形状であるが基部に棒状の突起があり、片面に溝のような痕跡が見られる。

ヒエ (*Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz) とヒエ属 (*Echinochloa*): ヒエの炭化種子は1.6-1.9 mmのやや角張った円形で胚は種子長の3分の2より大きく広く、へそは基部が広い三角形である。明確に栽培ヒエと同定できる炭化種子は28粒であったがヒエ属と同定した縦に長いタイプも形態の変化が連続的であり、粒径の大きいタイヌビエとの境界を区別するのが難しい。ヒエは現在でも他の雑草ヒエ属と交雑してさまざまな形態を持つ。本遺跡ではヒエと同定した以外の種子は2 mmを超える長く大きいタイヌビエのようなタイプが見られた。

イネ科 (Gramineae): 属などの同定ができない種実をまとめてイネ科とした。炭化種子はやや幅の広い球形で径1.2mmで楕円形の胚のようなくぼみがあり、アワの焼け膨れ種子の可能性もある。未炭化の穎果は長さ5 mmで芒が長い、混入の可能性も考えられる。

ダイズ属 (*Glycine*): マメ科の種子は完形と見られるものは7-10mm前後で焼け膨れて伸びていた。マメ科のうちへそが焼け残っている種子が4粒あり、へそが種子のほぼ中央付近についていることと、へその形は長楕円形で中央に溝が確認され膜で覆われた形跡がないことからダイズ属と同定した。

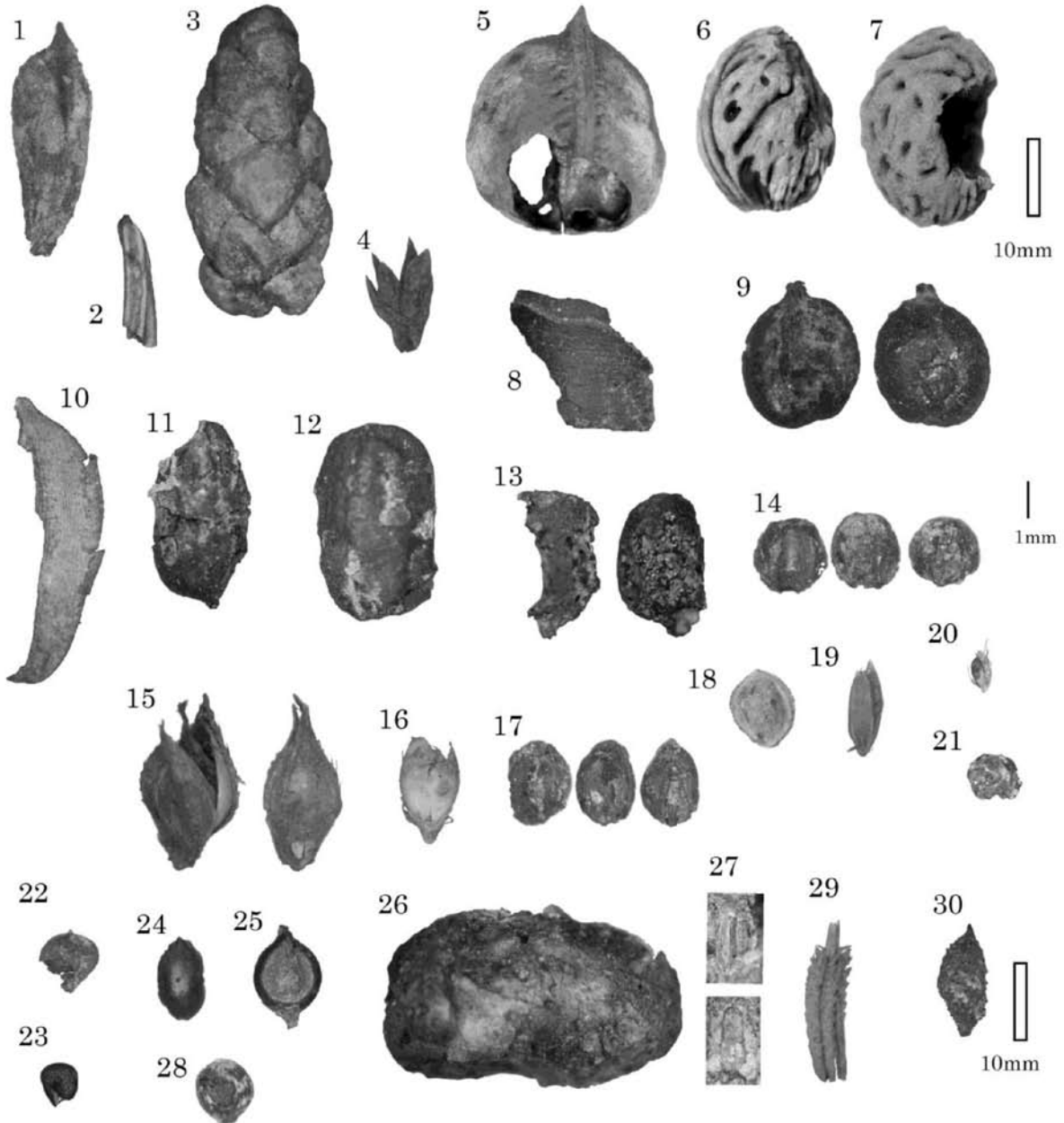
### (3) 考 察

本遺跡では炭化したイネを最も多く出土し、次いで炭化したヒエ及びヒエ属もやや多かった。他の雑穀類の出土はほとんど見られなかったことから本集落での利用の主体はイネであったと考えられる。本遺跡で炭化イネを最も多く出土したのはKSD02焼土の試料であるが、炭化胚乳に穎が一部付

着したものが多く、未熟な胚乳も多く見られる。同一資料にはヒエ、ヒエ属、ダイズ属、マメ科の炭化種実も多く、イヌタデ属などの雑草種実も確認された。また、HSK17最下層の試料からも炭化胚乳が多く出土し、この試料では未熟な胚乳や穎は見られなかった。そのほかHP182やHSI10など多くの遺構でもイネが確認されその他の雑穀はムギ類1個をのぞいて出土していない。全体の試料を通してイネが検出されているが住居跡のカマドや燃焼部、柱穴などからの出土数は比較的少なく、溝跡と土坑から多く出土することから、当時のカマドやその周囲は清掃が頻繁に行われており、溝や土坑に焼却後の残渣を廃棄していたと考えられる。溝跡からはオニグルミとモモが出土しているが、オニグルミ、モモともに完形あるいはネズミによる食痕があり、人間により割られた痕跡は認められなかった。また未炭化のスギ、サワラなども出土していることからこれらは当時遺構の周囲に生育していた可能性がある。これらには比較的しっかり堆積物がこびりついていたため混入の可能性は低いと思われる。

吉川純子（古代の森研究舎）

3 漆町遺跡から出土した種実



1. スギ、種子 (HSI08焼土1) 2. スギ、葉 (HSK17最下層) 3. スギ、雄花序 (HP182) 4. サワラ、葉 (HSI05燃焼部)  
 5. オニグルミ、内果皮食痕 (FSD08埋土) 6. モモ、核 (SSD02埋土) 7. モモ、核食痕 (VSD01埋土上部) 8. ブナ科、  
 果皮 (HSI08焼土2) 9. ブドウ属、炭化種子 (YSI01土器03内) 10. イネ、穎破片 (YSK03-3層) 11,12. イネ、炭化胚乳 (HSK17  
 最下層) 13. ムギ類、炭化種子 (YSK03-3層) 14. ヒエ、炭化種子 (KSD02焼土) 15. ヒエ属、外穎果 (HSI10) 16. ヒエ属、  
 内穎果 (No.5) 17. ヒエ属、炭化種子 (KSD02焼土) 18. スズメノヒエ属、穎果 (KSD02焼土) 19. メヒシバ属、穎果 (HSI10)  
 20. イネ科、穎果 (HSK17最下層) 21. イネ科、炭化種子 (SI03カマド焼土) 22. ホタルイ属、炭化果実 (KSD02焼土)  
 23. スベリヒユ、種子 (YSK03-3層) 24. イヌタデ属、炭化果実 (KSD02焼土) 25. サナエタデ近似種、果実 (YSK03-2層)  
 26. ダイズ属、炭化種子 (KSD02焼土) 27. ダイズ属、へそ部分 28. シソ科、炭化果実 (MSK04埋土) 29. タンポポ属、  
 果実 (HSI05) 30. オナモミ、炭化総ほう (KSD02焼土) スケールは1mm (ただし5-7,30は10mm)

第311図 漆町遺跡から出土した種実

## 4 漆町遺跡出土玉類の分析

### はじめに

滑石とは超苦鉄質岩の熱水変質物として、またある種の広域変成岩の主成分として産し、ドロマイト（苦灰岩）の熱変成によってもつくられる（加藤・岩崎2000）。この中で超苦鉄質岩や変成岩のうちの塩基性凝灰岩などという言葉は地質学における岩石名である。これらは本来火成岩に由来するものであり、分析は火成岩の分析としておこなわなければならない。滑石には大きく分けて超塩基性岩の蛇紋岩から変質してなるものと高圧型で低温領域の環境で塩基性凝灰岩が変質してなるものがあり、両者の化学組成は異なるのが一般的である。

### (1) 岩石学的分類とは

火成岩の分類とは第19表火成岩分類表のSiO<sub>2</sub>の量によって分類される。岩石の分類は主要元素である珪素（Si）の酸化物濃度で分析値を出さないとい何岩を分析しているのかわからないのである。分析者がかってにサヌカイトであるといい、Ca/Kのような比で出すような分析結果では正当な分析ではない。現在の蛍光X線分析装置では岩石の主要元素を指定し、酸化物か元素かを指定すれば酸化物濃度や元素濃度を瞬時にソフトが計算してくる。蛇紋岩は超塩基性岩であり、第19表には記載されていない。超塩基性岩とはSiO<sub>2</sub>が45%以下のものを言うのである。これらの関係は第312図火成岩分類図に示してある。

岩石学的に分類するという事は図に示すようにSiO<sub>2</sub>が何%であるかを出さない限り分類できないことは明瞭である。

### (2) 実験条件

北海道、大阪府、京都府、兵庫県の小玉と原石及び岩手県の玉類と原石の分析は以下の実験条件で分析した。

1) 分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており、<sub>6</sub>C～<sub>92</sub>Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30kV、4mA）の採用で微量試料～最大290mmφ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料で

第19表 火成岩分類表

SiO <sub>2</sub> の量 (重量%)		多 ← 6.6	→ 5.2 小
色 指 数		淡色 ← 1.0	→ 3.5 暗色
ガラス質 ↑ 粗粒 ↑ (結晶の大きさ) ↓ 粗粒 ↓ 完晶質 ↓	火山岩 (噴出岩)	流紋岩	安山岩
	半深成岩	石英斑岩	ひん岩
	深成岩	花崗岩	閃緑岩
			玄武岩
			輝緑岩
			斑れい岩

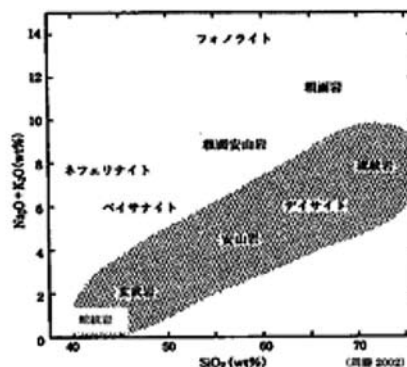


図4.2 火山岩の分類の一例 (Hall, 1996を一部改定)  
斜をかけた部分はアルカリ岩、それ以外の左上部のものはアルカリ岩である

第312図 火山岩の分類の一例



は16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクF P法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

2) 分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は岩石の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量％を100％にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量％では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量％）でSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、SiO<sub>2</sub>-MgO、K<sub>2</sub>O-CaOの各相関図を作成した。

### (3) 遺跡出土滑石系製品と結晶片岩系製品の分析例

遺跡出土遺物としての化学分析は平成2年～5年にわたって、大阪府文化財センターの池島遺跡（池島、神並、佐堂、府教委を総合した呼称）の遺物と和歌山系の滑石の原石、平成6年の京都府埋蔵文化財調査研究センターの下植野南遺跡・桑飼上遺跡出土遺物と八鹿系と大江山系の原石を分析した。当初は大阪府と京都府のデータは別々に分析したものであり、対比はおこなわなかった。その後、池島遺跡の遺物と下植野南遺跡・桑飼上遺跡の遺物を対比し、原石との関連性を検討した。

分析結果に基づいて第313図、第314図、第315図に示すように遺跡出土遺物と原石図を作成した。

1) 第313図に示すようにSiO<sub>2</sub>が30～50%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が10～35%の領域には遺跡出土遺物が集中し、その領域は変成岩に由来する領域にあり、三波川系かあるいは御荷鉾系の塩基性凝灰岩と推察される。この領域には大阪府の池島・神並・佐堂遺跡の遺物と京都府の下植野南・桑飼上遺跡の遺物が共存し、同じ原石のルートから供給されたものと推察される。八鹿系の原石はSiO<sub>2</sub>が55～65%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が0～10%の領域に分布し、池島遺跡の小玉、石製品がこの領域にあり、原石と石製品との関連性が認められる。和歌山系原石はSiO<sub>2</sub>が40～60%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が0～10%、大江山系の原石はSiO<sub>2</sub>が40～50%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が0～5%の領域に分布し、遺跡出土石製品との関連性は認められない。SiO<sub>2</sub>が55～70%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が20～30%の領域には池島小玉H2、SiO<sub>2</sub>が65～80%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が12～18%の領域には池島小玉H3があり、これら2つの領域は池島遺跡の石製品でのみ検出されるタイプである。

2) 第314図に示すようにSiO<sub>2</sub>が30～50%、MgOが10～40%の領域には変成岩に由来する緑色岩類の遺跡出土遺物が集中する。SiO<sub>2</sub>が40～60%、MgOが20～35%の領域には和歌山系の滑石の原石、SiO<sub>2</sub>が40～50%、MgOが45～50%の領域には大江山系の原石が分布する。第313図では両者は近い領域にあったが第314図では両者の領域は異なり、異なる原石であることがわかる。SiO<sub>2</sub>が55～75%、MgOが20～35%の領域には遺跡出土遺物と八鹿系の原石が共存する。SiO<sub>2</sub>が55～70%、MgOが0～2%の領域には池島小玉H2、SiO<sub>2</sub>が65～85%、MgOが0～2%の領域には池島小玉H3が分布し、その組成が異なることがわかる。

3) 第315図に示すように八鹿系、和歌山系、大江山系の各原石はK<sub>2</sub>Oが微量か検出されないものが多い。塩基性凝灰岩系の遺跡出土遺物はK<sub>2</sub>Oが0～3%、CaOが1%以下の領域、K<sub>2</sub>Oが2.7～4.5%、CaOが1～7%の領域に分布し、前者は塩基性凝灰岩系1、後者を塩基性凝灰岩系2として分類した。

## (4) 漆町遺跡出土玉類と原石等の分析結果

第21表化学分析表には分析結果を記載したものである。第20表は分析一覧表である。

1) 漆町遺跡出土丸玉は第20表に示す岩手県内の蛇紋岩と比較対比した。化学組成的にはどの蛇紋岩とも組成が異なり、さらに、北海道と近畿地方の滑石とも組成が異なり、原産地は不明である。

2) 勾玉はメノウ製で組成的にはSiO<sub>2</sub>の値が98.8%と高く、秋田県のメノウと対比下は有意な差がなく、原産地を特定できない。

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

第20表 分析一覧表

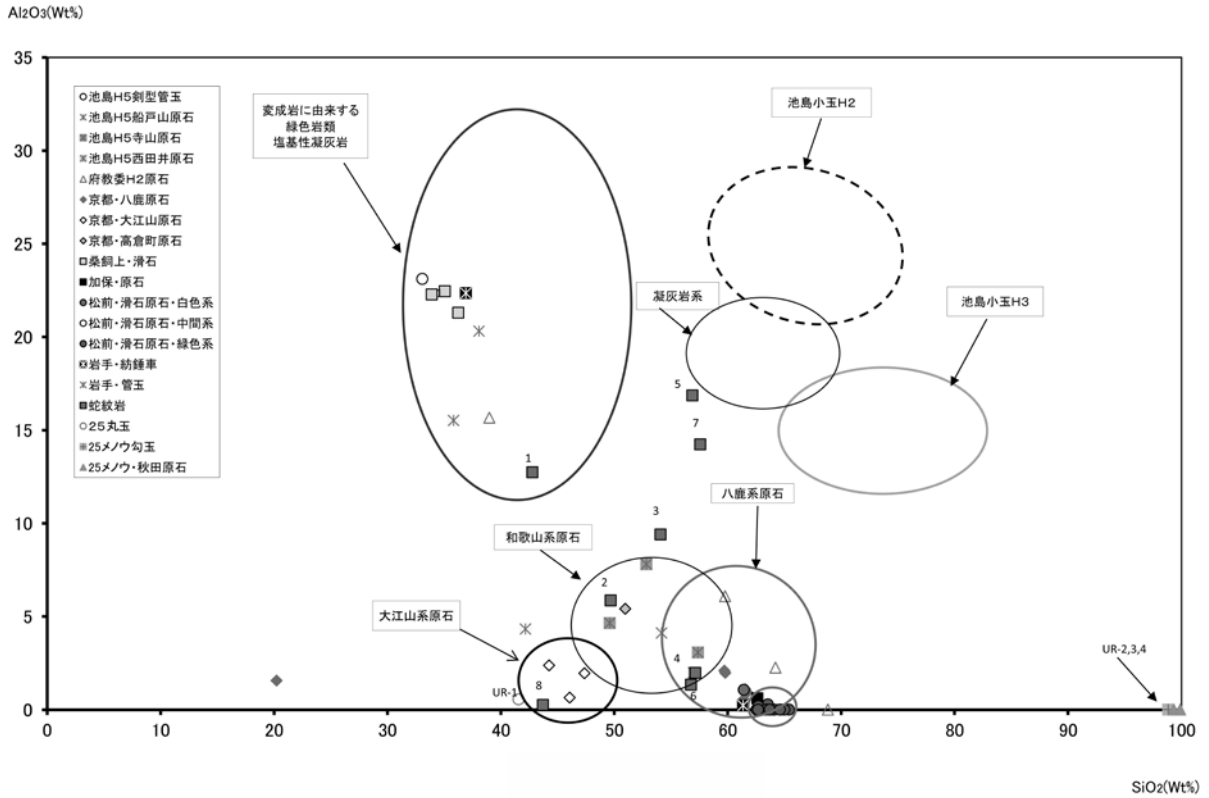
試料名	備 考	
N-1	紡錘車	岩手県
N-2	紡錘車	岩手県
N-3	管玉	岩手県
S-1	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 1
S-2	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 2
S-3	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 3
S-4	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 4
S-5	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 5
S-6	蛇紋岩	岩手県浅岸 - 6
S-7	蛇紋岩	下仲居2遺跡
S-8	蛇紋岩	早池峰山頂う
UR-1	丸玉	漆町遺跡
UR-2	メノウ勾玉	漆町遺跡
UR-3	メノウ原石	秋田県大高石
UR-4	メノウ原石	秋田県大高石

## 引用文献

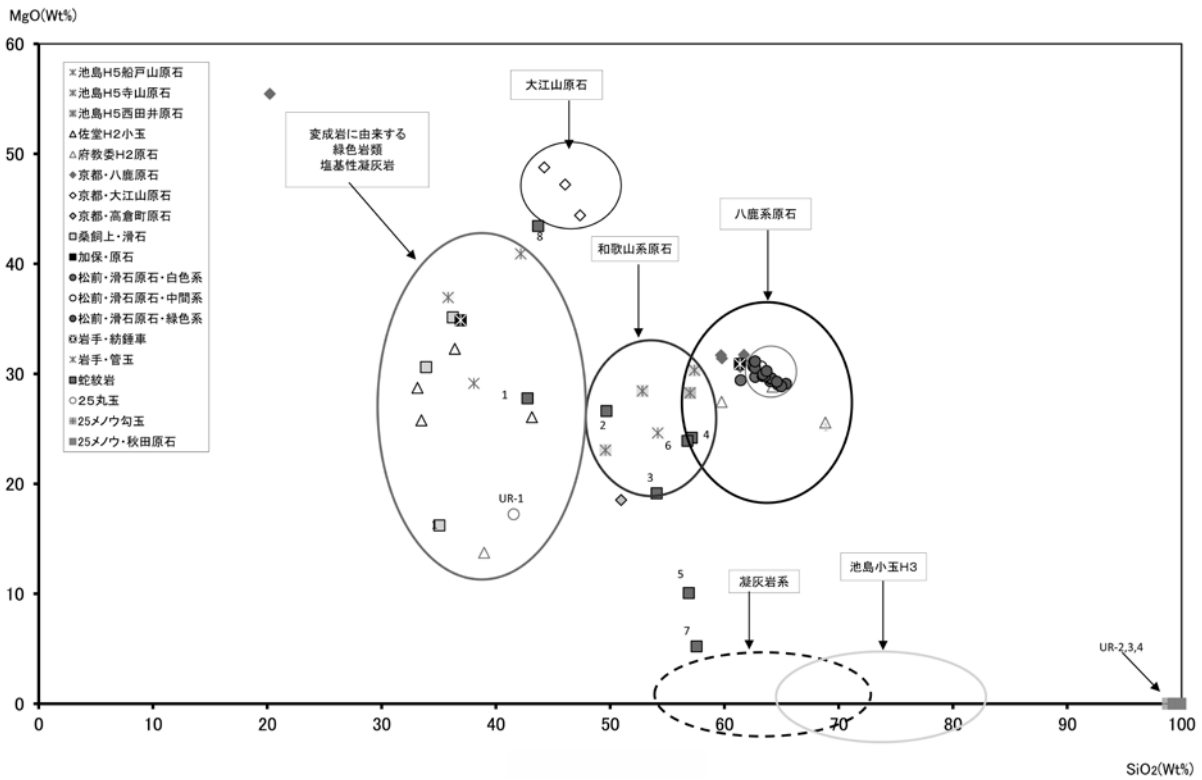
- 井上 巖 1999 「滑石製品の分析」『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 井上 巖 1999 「池島・福万寺遺跡出土滑石製品の分析」『池島・福万寺遺跡2』(財)大阪府文化財センター  
 加藤昭・岩崎正夫 2000 「滑石」『地学辞典』平凡社  
 周籐賢治・小山内康人 2002 「解析岩石学」『岩石学概論下』p 149-150共立出版

第21表 化学分析表

試料名	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Total	Rx(l)	Sr(l)	備考
N-1	0.0000	34.8610	22.3534	36.9292	0.0989	0.0661	0.1531	0.1766	0.1761	5.1674	0.0001	0.0000	0.0002	0.0181	100.0002	7	0	純輝石 岩手県
N-2	0.0000	30.8763	0.2181	61.3618	0.3786	0.0000	0.2137	0.0374	0.1359	6.7660	0.0027	0.0064	0.0000	0.0031	100.0000	138	318	純輝石 岩手県
N-3	0.0000	29.1102	20.3110	38.0778	0.1908	0.2046	0.5044	0.3207	0.3459	10.9160	0.0000	0.0067	0.0059	0.0062	100.0002	0	246	碧玉 岩手県
S-1	0.0000	27.7611	12.7431	42.7806	0.2960	0.1622	5.4528	0.2446	0.2316	10.3192	0.0036	0.0032	0.0000	0.0019	99.9999	131	141	純輝石 岩手県浅岸-1
S-2	0.0000	26.6114	5.8628	49.6890	0.3563	0.1048	5.0673	0.3570	0.2469	11.6832	0.0000	0.0018	0.0000	0.0195	100.0000	0	66	純輝石 岩手県浅岸-2
S-3	0.0000	19.1207	9.4006	54.0831	0.1888	0.1263	5.2515	1.0982	0.2890	10.4074	0.0000	0.0050	0.0000	0.0295	100.0001	0	180	純輝石 岩手県浅岸-3
S-4	0.0000	24.1832	1.9729	57.1551	0.1272	0.1518	9.0531	0.1329	0.2456	6.9700	0.0000	0.0053	0.0012	0.0014	99.9997	0	242	純輝石 岩手県浅岸-4
S-5	0.5059	10.0500	16.8634	56.8898	0.3890	2.0434	1.1685	0.7726	0.1397	11.1198	0.0126	0.0098	0.0077	0.0278	100.0000	460	348	純輝石 岩手県浅岸-5
S-6	0.0000	23.8857	1.3366	56.7683	0.1732	0.1193	10.4277	0.2081	0.2110	6.8664	0.0000	0.0037	0.0000	0.0000	100.0000	0	163	純輝石 岩手県浅岸-6
S-7	0.0430	5.2120	14.2394	57.5762	0.3619	0.1497	11.9989	0.1736	0.2391	9.9732	0.0016	0.0277	0.0036	0.0000	99.9999	55	918	純輝石 下仲居2遺跡
S-8	0.0000	43.4336	0.2546	43.7031	0.0874	0.0253	1.7784	0.0178	0.2933	10.4011	0.0018	0.0000	0.0000	0.0035	99.9999	76	0	純輝石 早池峰山頂う
UR-1	0.0000	17.2261	0.5502	41.5580	0.1384	0.5714	28.4506	0.1675	0.1549	11.1830	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	0	0	碧玉 漆町遺跡
UR-2	0.0149	0.0000	0.0000	98.8446	0.5331	0.1537	0.0955	0.0680	0.0000	0.2852	0.0041	0.0006	0.0003	0.0000	100.0000	244	36	メノウ・勾玉 漆町遺跡
UR-3	0.0000	0.0000	0.0000	99.3372	0.2142	0.0000	0.0072	0.0000	0.0028	0.4341	0.0027	0.0000	0.0011	0.0007	100.0000	164	0	メノウ原石 秋田県大高石
UR-4	0.0000	0.0000	0.0000	99.9091	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0010	0.0900	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	0	0	メノウ原石 秋田県大高石

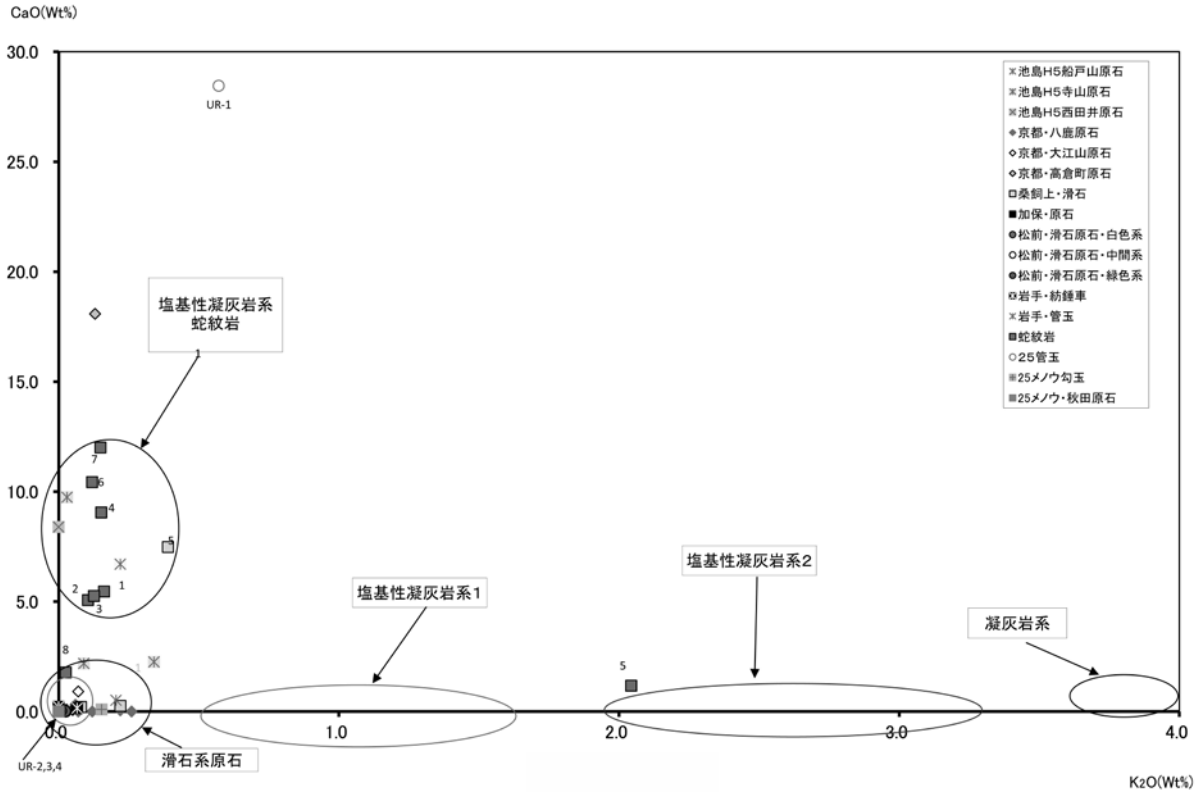


第313図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図



第314図 SiO<sub>2</sub>-MgO図

4 漆町遺跡出土玉類の分析



第315図 K<sub>2</sub>O - CaO図



第316図 漆町遺跡勾玉写真



第317図 漆町遺跡丸玉写真

## 5 漆町遺跡出土骨の分析

### はじめに

漆町遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字漆町に所在し、平安時代の大溝や住居跡、12世紀代の溝跡・堀跡や遺物などが確認されている。今回、住居のカマド跡を中心に洗い出しが行われ、そこから出土した骨類等について検討を行うこととした。

#### (1) 試料

試料は、主に古代の竪穴住居のカマド焼土を水洗洗浄した際の残渣で9試料であり、試料番号1がFSI03カマド燃焼部、試料番号2がJSI01カマド燃焼部、試料番号3がKSD02焼土、試料番号4がKSK01最下層、試料番号5がLSI02燃焼部焼土、試料番号6がLSI03カマド燃焼部焼土、試料番号7がMSK04埋土、試料番号8がMP101埋土、試料番号9がUSI01カマド埋土である。

#### (2) 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、骨およびそれ以外に分類する。検出された骨は、形態的特徴から種類および部位を同定する。

#### (3) 結果および考察

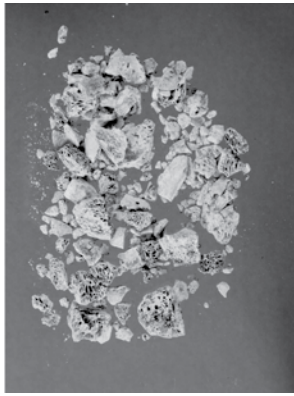
結果を表22表に示す。今回分析を行った9試料の内、骨片がみられたのは、試料番号1・4の2試料のみである。試料番号1は、海綿質、緻密質の構造が確認され、全て骨と判断される。試料番号4は、骨の微細片が10数片確認される。それ以外の試料番号2・3・5～8では骨が含まれず、砂粒、土壌・粘土塊、褐鉄鉱（いわゆる高師小僧）などである。なお、試料番号3には植物の棘がみられたが、炭化していないことから後代の混入と考えられる。試料番号9は、斑晶鉱物、火山ガラスなどがみられ、風化した軽石片である。

試料番号1・4で検出された骨は、白色を呈し、細かなひび割れが生じた破片であり、焼骨の特徴を示す。試料番号4の骨は、最大でも5mm弱の微細な破片であり、種類・部位ともに不明である。一方、試料番号1には、小型の破片が多いが、中には1cm前後の破片も含まれる。特徴的な形質も認められないことから、種類・部位ともに不明である。ただし、比較的大きな破片をみると緻密質が厚く、また海綿質も多いことから、魚類や鳥類ではなく、哺乳類の骨が焼けたものと考えられる。おそらくは、周辺の後背地で採取された獣類が食糧資源等として利用された後、骨となった状態でカマド内に破棄され、焼かれた可能性がある。

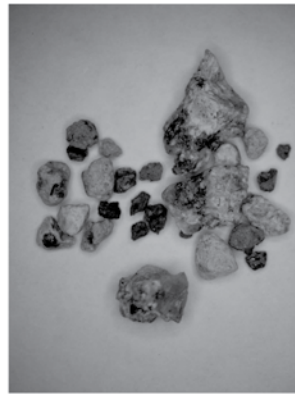
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

第22表 骨同定結果

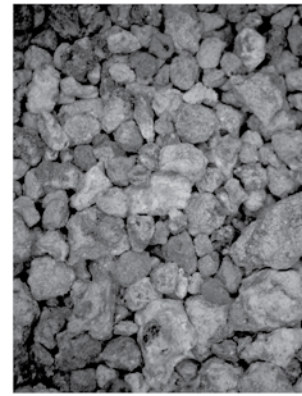
番号	遺構名等			種類	部位	状態	数量	備考
1	F区	SI03	カマド燃焼部	哺乳類	不明	破片	3.04 g	焼骨
2	J区	SI01	カマド燃焼部	砂分、土壌・粘土塊			0.12 g	
3	K区	SD02	焼土	植物遺体	棘	破片	1	
				砂分、土壌・粘土塊			5.68 g	
4	K区	SK01	最下層黒色土	不明	不明	破片	10 +	焼骨
				砂分、土壌・粘土塊			0.08 g	
5	L区	SI02	燃焼部? 焼土	砂分、土壌・粘土塊			0.26 g	
6	L区	SI03	カマド燃焼部焼土	砂分、土壌・粘土塊			0.45 g	
7	M区	SK04	埋土	砂分、土壌・粘土塊			3.12 g	
8	M区	P101	埋土	砂分、土壌・粘土塊			0.07 g	
9	U区	SI01	カマド埋土	軽石			4	
				砂分、土壌・粘土塊			0.09 g	



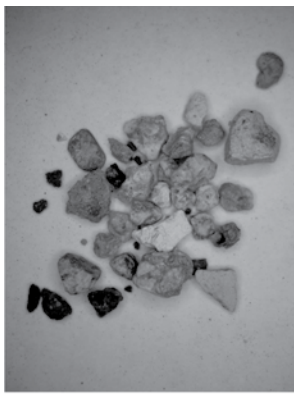
1. 出土骨(試料番号1)



2. 砂分の状況(試料番号2)



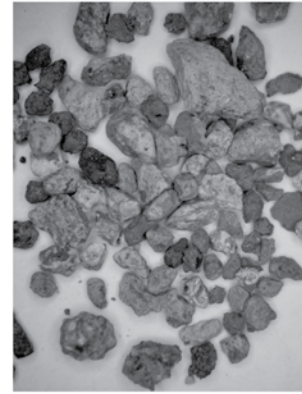
3. 砂分の状況(試料番号3)



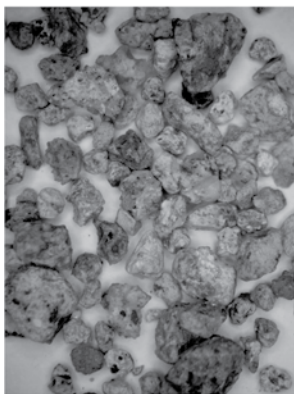
4. 砂分の状況(試料番号4)



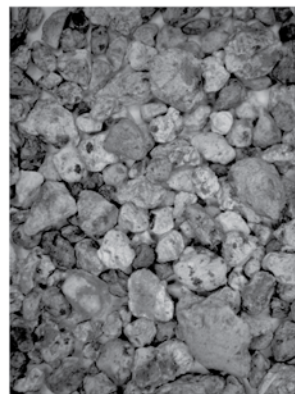
5. 出土骨(試料番号4)



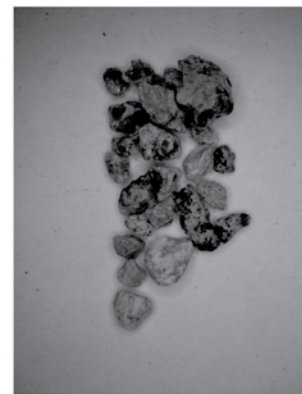
6. 砂分の状況(試料番号5)



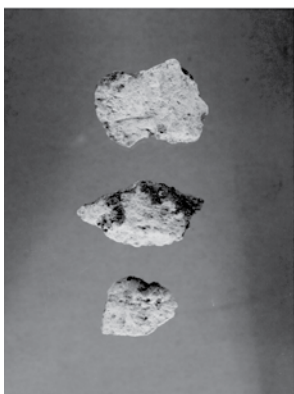
7. 砂分の状況(試料番号6)



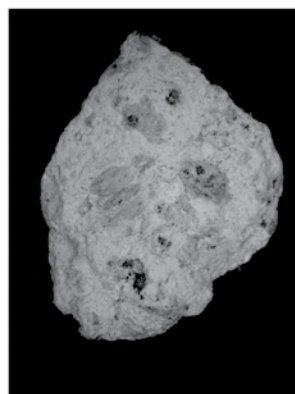
8. 出土骨(試料番号7)



9. 砂分の状況(試料番号8)



10. 軽石(試料番号9)



11. 軽石: 拡大(試料番号9)

0 2cm  
(1, 10)

0 1cm  
(2-9, 11)

第318図 試料の状況



## 6 放射性炭素年代測定

### (1) 測定対象試料

漆町遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字漆町地内（北緯39° 8' 17"、東経141° 4' 47"）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡や土坑等の遺構から出土した木片、木炭、炭化物の合計11点である（第23表）。試料の樹種は、P36がヤマザクラ、P13とP16がクリ、P19がクリ属、P15がモクレン属とクリ属に同定されている。P15については、複数ある木炭のうち1点より試料を採取した。

VSD01は堀跡と考えられる溝跡、KSD02は焼成遺構と考えられる溝跡、TSI01、USI01、LSI02、HSI09は竪穴住居、HSK05、WSK03は土坑、OSD05は溝跡、NSL04は焼土遺構、HSK17は竪穴住居状遺構とされる。試料P36は十和田 a テフラより下から出土した。

### (2) 測定の意義

出土遺物が少ないため、年代測定によって遺構の年代を明らかにする。特にP36の測定では、十和田 a テフラ以前の遺構の年代を確認する。

### (3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第23表に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### (4) 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### (5) 算出方法

- 1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第23表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第23表に、補正していない値を参考値として第24表に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下

1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第23表に、補正していない値を参考値として第24・25表に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第24・25表に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## (6) 測定結果

測定結果を第23～25表に示す。

試料11点の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $1440 \pm 20\text{yrBP}$  (試料5) から  $790 \pm 20\text{yrBP}$  (P13) の間にあり、全体としては年代値にかなりの差があるが、中心値で1290～1240yrBP頃となる試料が比較的多く、誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で一致するものも含まれる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古い試料5が606～645cal ADの範囲、最も新しいP13が1224～1265cal ADの範囲で示され、7～8世紀頃となる試料が多い。P36は十和田aテフラの下から出土したという層位関係に整合する値となっている。

なお、試料4の炭化物は  $\delta^{13}\text{C}$  が他の木炭等に比べて明らかに高い  $-10.82 \pm 0.63\%$  という値を示し、C4植物の可能性がある (赤澤ほか1993)。

試料の炭素含有率はすべて約50%以上で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株)加速器分析研究所

## 文献

- 赤澤威、米田穰、吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 — 明科町内— 北村遺跡 本文編 (財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14), 長野県教育委員会, (財長野県埋蔵文化財センター, 445-468)
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

第23表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-123576	P 36	VSD01 7層	木片 (ヤマザクラ)	AAA	-23.88 ± 0.29	1,260 ± 20	85.53 ± 0.22
IAAA-123577	P 13	KSD02 8層	木炭 (クリ)	AaA	-22.64 ± 0.37	790 ± 20	90.67 ± 0.24
IAAA-123578	P 16	TSI01 床面	木炭 (クリ)	AaA	-30.66 ± 0.31	1,290 ± 20	85.16 ± 0.24
IAAA-123579	P 19	USI01 床面	木炭 (クリ属)	AaA	-23.46 ± 0.28	1,240 ± 20	85.66 ± 0.23
IAAA-123580	P 15	LSI02 煙道埋土	木炭 (モクレン属、クリ属)	AAA	-26.90 ± 0.32	1,290 ± 20	85.18 ± 0.23
IAAA-132381	試料 1	HSI09 埋土一括	木炭	AAA	-26.61 ± 0.57	1,000 ± 20	88.29 ± 0.26
IAAA-132382	試料 2	HSK05 一括	木炭	AaA	-26.27 ± 0.56	1,290 ± 20	85.18 ± 0.25
IAAA-132383	試料 3	OSD05 2層	木炭	AAA	-26.19 ± 0.59	1,360 ± 20	84.40 ± 0.25
IAAA-132384	試料 4	NSL04	炭化物	AaA	-10.82 ± 0.63	1,290 ± 20	85.21 ± 0.25
IAAA-132385	試料 5	WSK03 1層	木炭	AAA	-25.73 ± 0.63	1,440 ± 20	83.64 ± 0.25
IAAA-132386	試料 6	HSK17 下層	木炭	AaA	-23.69 ± 0.50	1,290 ± 20	85.17 ± 0.25

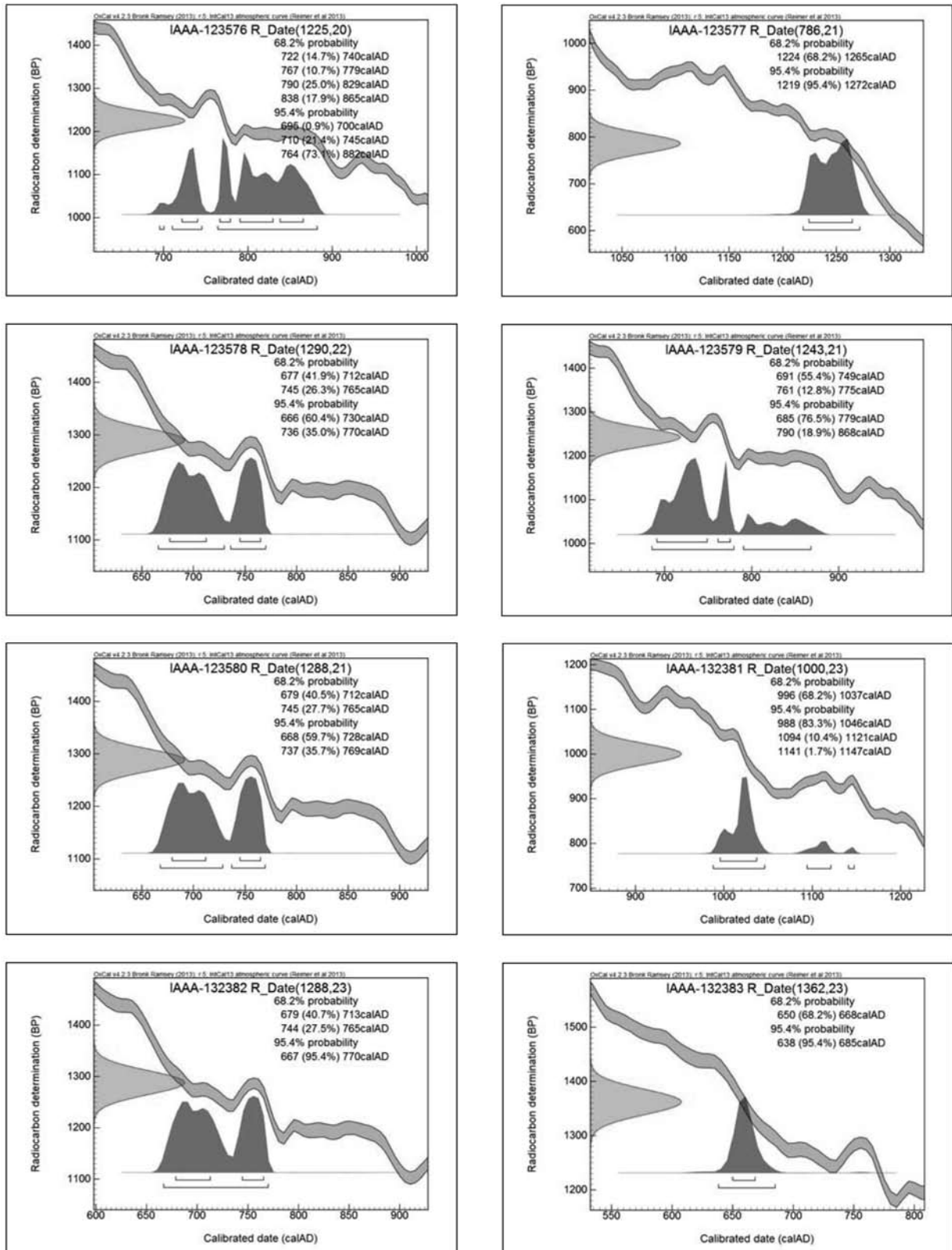
(#5667,6241)

第24表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代) 1

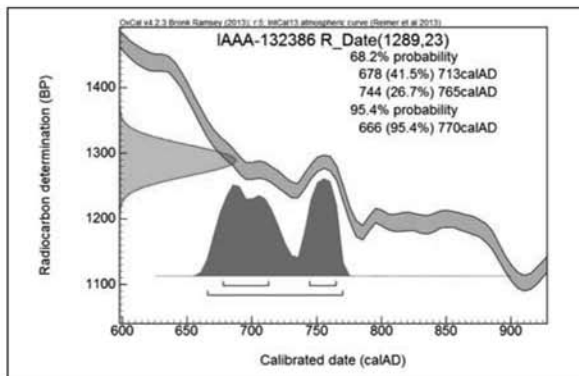
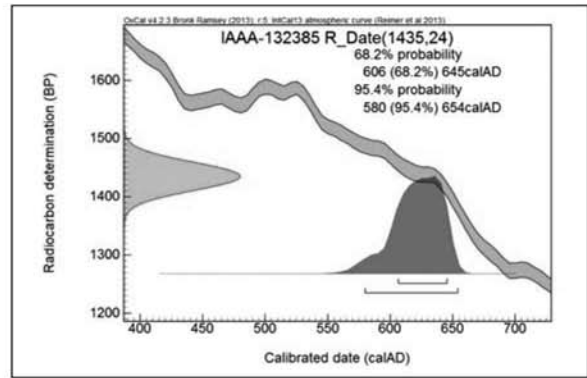
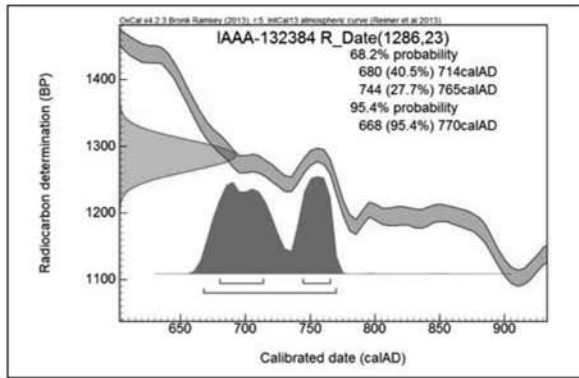
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-123576	1,240 ± 20	85.73 ± 0.22	1,255 ± 20	722calAD - 740calAD (14.7%) 767calAD - 779calAD (10.7%) 790calAD - 829calAD (25.0%) 838calAD - 865calAD (17.9%)	695calAD - 700calAD (0.9%) 710calAD - 745calAD (21.4%) 764calAD - 882calAD (73.1%)
IAAA-123577	750 ± 20	91.11 ± 0.23	786 ± 21	1224calAD - 1265calAD (68.2%)	1219calAD - 1272calAD (95.4%)
IAAA-123578	1,380 ± 20	84.17 ± 0.23	1,290 ± 22	677calAD - 712calAD (41.9%) 745calAD - 765calAD (26.3%)	666calAD - 730calAD (60.4%) 736calAD - 770calAD (35.0%)
IAAA-123579	1,220 ± 20	85.93 ± 0.23	1,243 ± 21	691calAD - 749calAD (55.4%) 761calAD - 775calAD (12.8%)	685calAD - 779calAD (76.5%) 790calAD - 868calAD (18.9%)
IAAA-123580	1,320 ± 20	84.85 ± 0.22	1,288 ± 21	679calAD - 712calAD (40.5%) 745calAD - 765calAD (27.7%)	668calAD - 728calAD (59.7%) 737calAD - 769calAD (35.7%)
IAAA-132381	1,030 ± 20	88.00 ± 0.24	1,000 ± 23	996calAD - 1037calAD (68.2%)	988calAD - 1046calAD (83.3%) 1094calAD - 1121calAD (10.4%) 1141calAD - 1147calAD (1.7%)
IAAA-132382	1,310 ± 20	84.96 ± 0.23	1,288 ± 23	679calAD - 713calAD (40.7%) 744calAD - 765calAD (27.5%)	667calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-132383	1,380 ± 20	84.19 ± 0.23	1,362 ± 23	650calAD - 668calAD (68.2%)	638calAD - 685calAD (95.4%)
IAAA-132384	1,050 ± 20	87.70 ± 0.23	1,286 ± 23	680calAD - 714calAD (40.5%) 744calAD - 765calAD (27.7%)	668calAD - 770calAD (95.4%)

第25表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代) 2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132385	1,450 ± 20	83.51 ± 0.23	1,435 ± 24	606calAD - 645calAD (68.2%)	580calAD - 654calAD (95.4%)
IAAA-132386	1,270 ± 20	85.40 ± 0.23	1,289 ± 23	678calAD - 713calAD (41.5%) 744calAD - 765calAD (26.7%)	666calAD - 770calAD (95.4%)



第319图 曆年較正图 1



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

第320図 暦年較正図 2

## VI 総 括

今回の調査では、奈良時代から平安時代にかけての遺構が主体となる。竪穴建物跡を中心に多くの遺構が検出されたが、そのなかで特筆すべきものに、大溝や材木堀、門がある。これらの遺構は、城柵・官衙遺跡以外からの検出は、岩手県においては、おそらく初めてのことであり、その意味するところは非常に重要と考えられる。このような遺構のほかに、各遺構から出土した遺物がある。土師器や須恵器が中心で、奈良時代のものが大半を占める。また、12世紀に所属するかわらけ、東海産の陶器、中国産の磁器などが比較的まとまって出土していることは注目される点である。

以下では、出土土器の検討、各遺構の時期変遷など、おもに年代的な問題を中心に検討していき総括としたい。なお、出土土器については、遺構数に対して出土量は決して多くなく、残存状態のよくないものも多いため、検討に耐え得る資料は少ない。そのため、検討に際しては集成を行うが、既存の研究成果を援用することを中心としたい。そのほか、特徴的な遺構である、大溝・材木堀・門について若干の検討を加えていくことにする。

### 1 出土土器の年代について

調査では、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、土製品などが出土している。そのなかで、出土遺物の大半を占めるのが土師器で、竪穴建物跡56棟をはじめとする多数の遺構から出土している。ここでは、この土師器を中心に検討を行うが、上述のように、良好なまとまりをもつものが非常に少ないため、遺構ごとに遺物を検討することが難しく、年代幅もあまり大きくないことから、これらを一括して検討することにしたい。

#### (1) 古代の土器

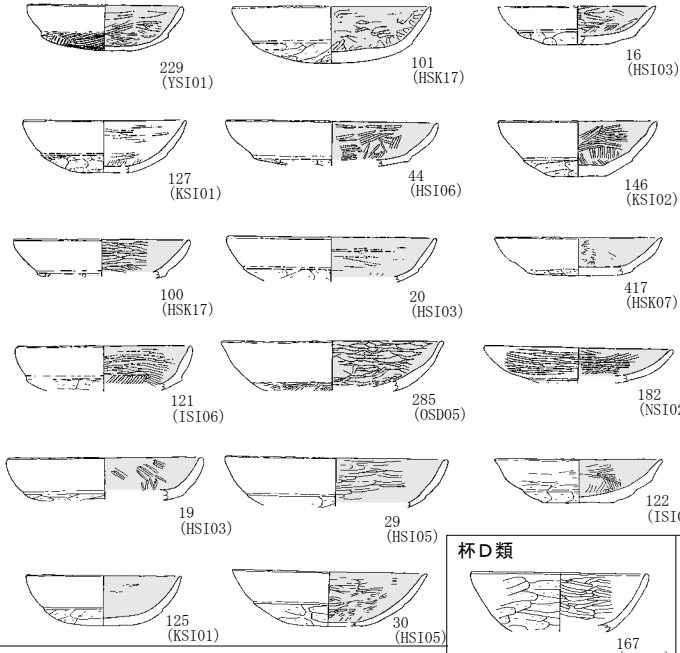
土師器の分類については、漆町遺跡の周辺地域では近年まとまった成果が上がっており（佐藤2007、高橋2007など）、それらの成果を参考にしていきたい。

土師器には杯、大型杯、甕、壺、高杯、ミニチュア土器が、須恵器には杯、大甕が出土している。出土数の比較的多い杯と甕については分類を行い先行研究である高橋千晶による編年（高橋2007、以下高橋編年とする）と対比させていく。

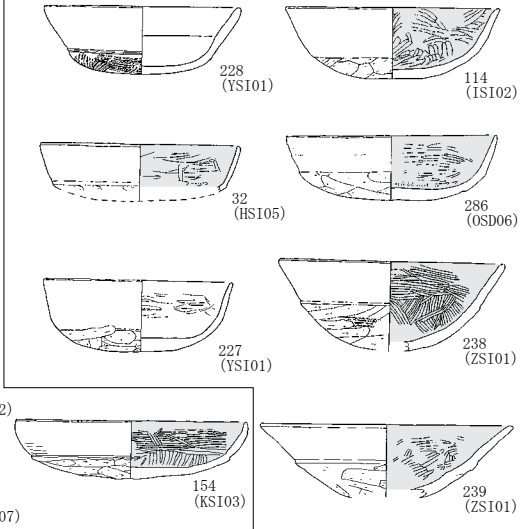
杯は、形態や調整方法などから、A～G類の7つに区分できる。また、口径が20cm以上の大型杯（鉢）も1点のみ存在する(17)。なお、分類名称は出土量の多いものから名付けたため、高橋編年とは異なっている。

A類は、もっとも出土量が多く、主体となる器形である。扁平な丸底や平底風の底部から体部で屈曲し、長い口縁部が内彎するもの（高橋編年B2類に対応）。口径は13cm前後と15cm前後の2つにまとまりがある。外面調整は、口縁部がヨコナデ、底部がケズリやハケ調整であり、前者が主体である。内面調整はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は基本的に丸底であるが、一定数平底のものも含まれる。外面には段があるが、内面の段が無いものが多い。B類は丸底で体部が屈曲し、長い口縁部が外傾するものである（高橋編年B1類に対応、一部D類も内包しているかもしれない）。本質的に内外面に段が形成されるが、本遺跡出土のものは、内面の段がないものが多い。A類に比べ、口縁部がやや直線的に開く。他域のものに比べて、総じて外反・外傾の度合いが小さい。外面調整は、

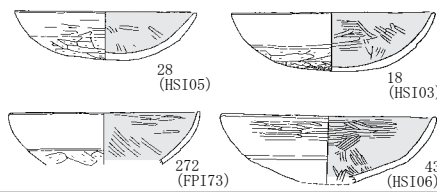
杯A類



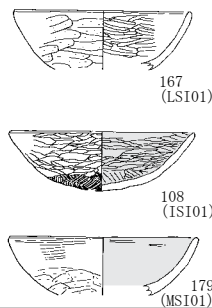
杯B類



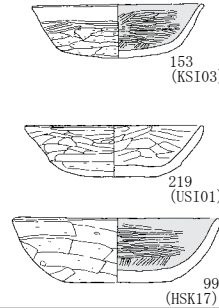
杯C類



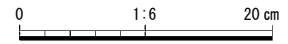
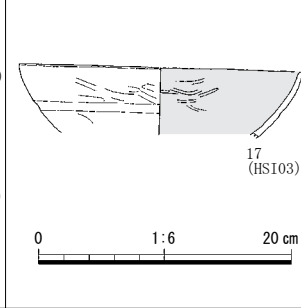
杯D類



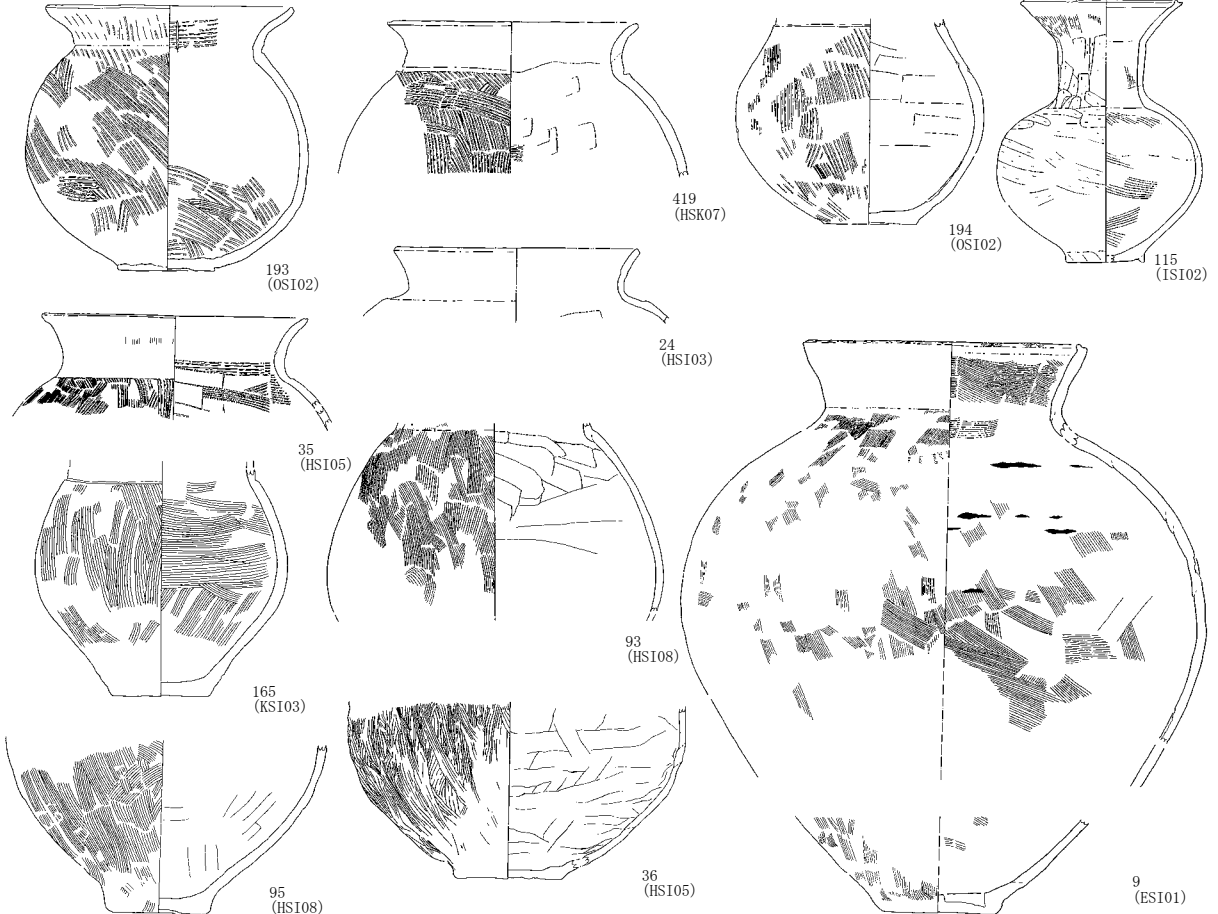
杯E類



大型杯 (鉢)

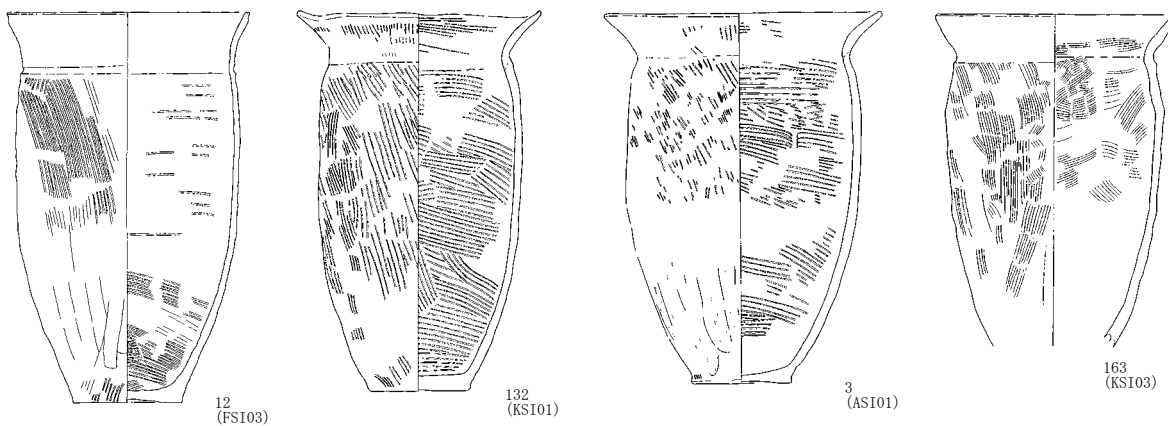


壺類



第321図 土器集成図 1

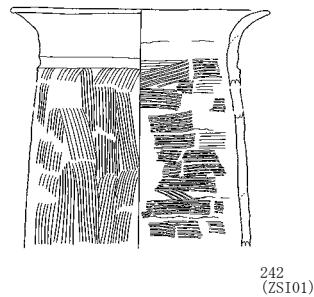
壺A1類



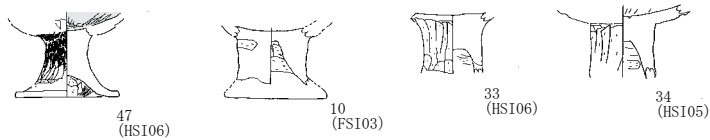
壺A2類



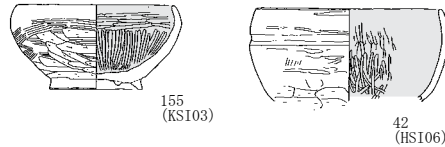
壺A3類



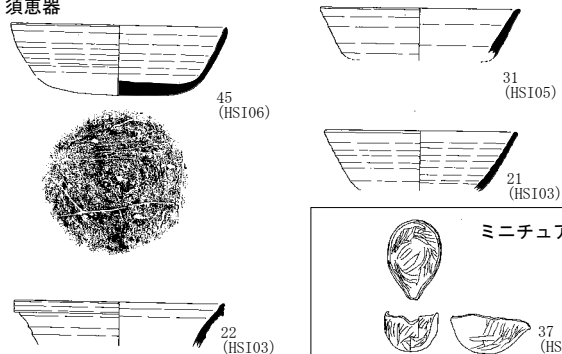
高杯



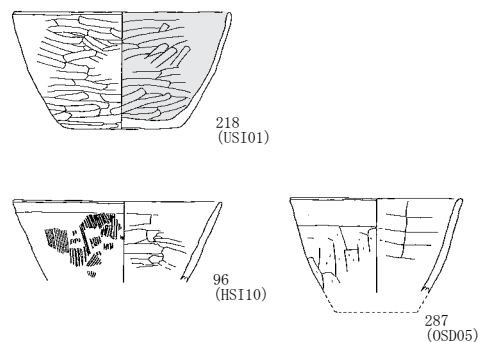
碗A類



須恵器



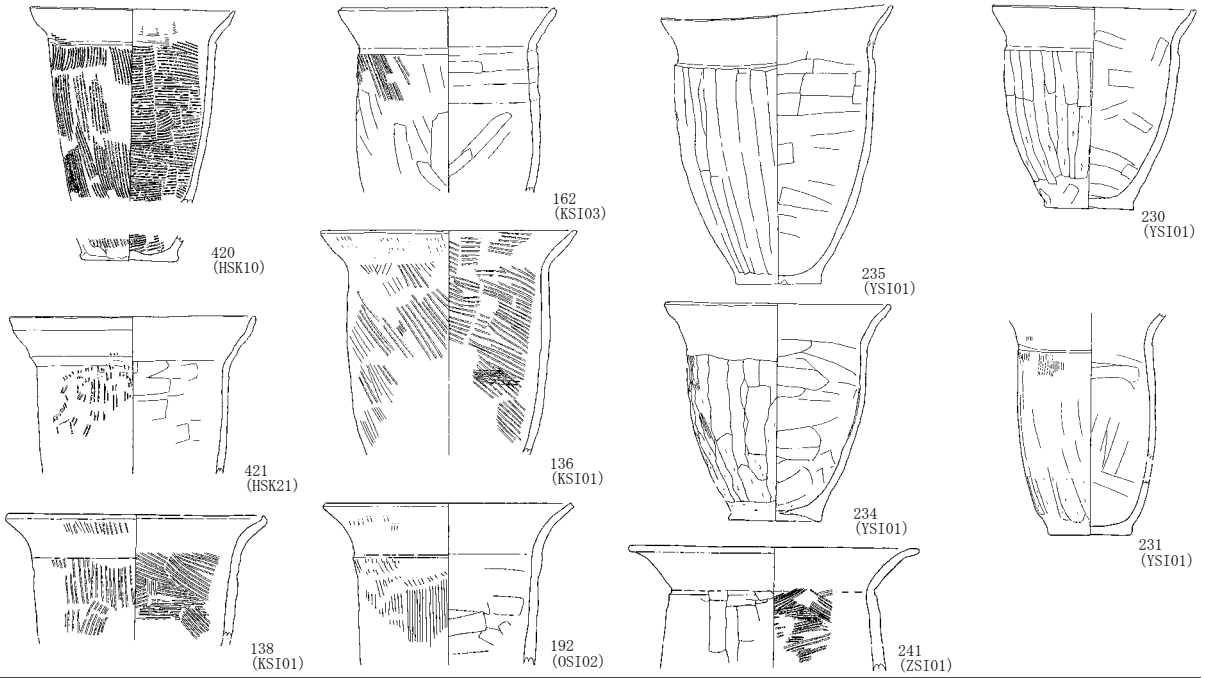
碗B類



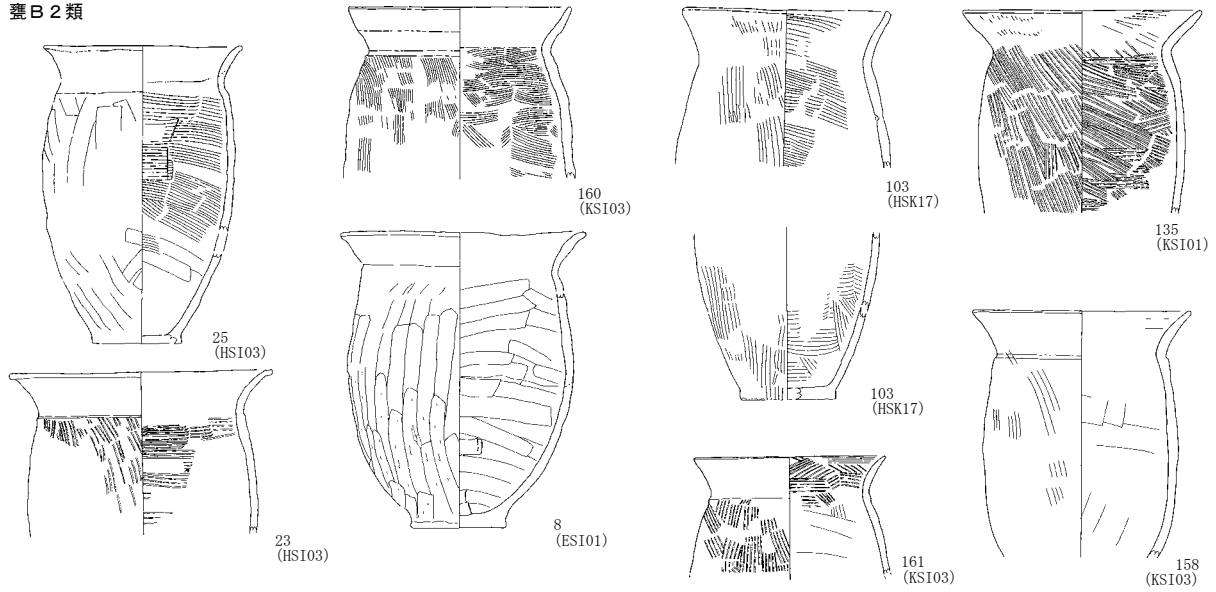
第322図 土器集成図2



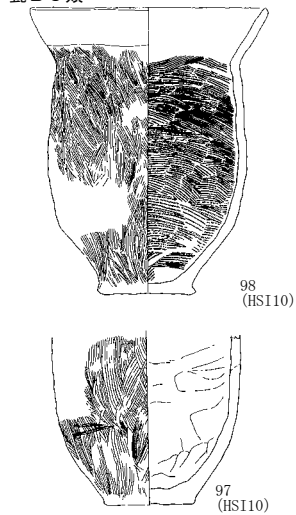
甕B 1類



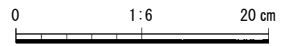
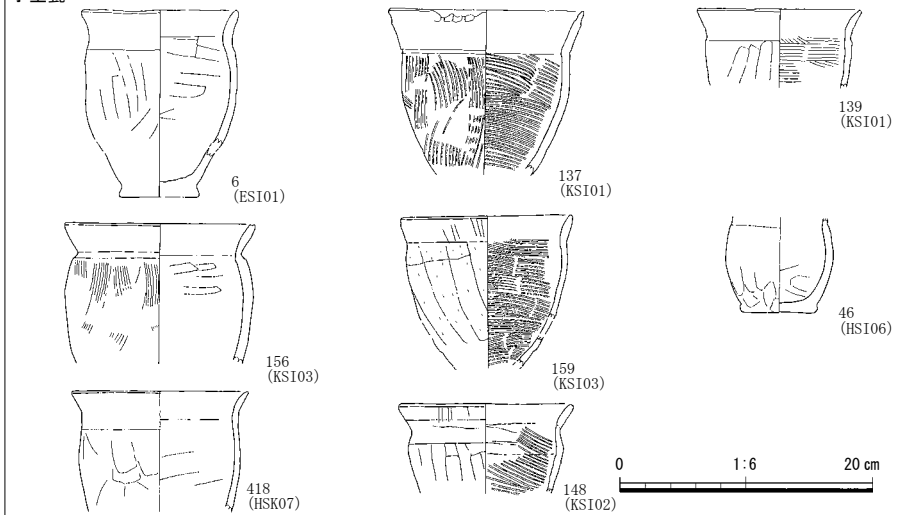
甕B 2類



甕B 3類



小型甕



第323図 土器集成図3 中小型甕

A類と同様に、口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリ主体で、ハケメがわずかである。内面調整もA類と同様である。C類は丸い底部からあまり屈曲せず内彎する口縁部を有するもので、体部に段あるいは沈線状の凹みがあるもの（高橋編年のC類に対応）。A・B類が底部と口縁部との間に明確な屈折があるのに対し、C類は、底部と口縁部が同一弧上にある半球形状を呈する。杯A類と区別が難しい器形があるが、東北地方北部に主体がある器形に系譜があるとされる。内外面の調整は、A・B類と同様である。D類は無段のもので、C類と同様の半球形を呈するもの（高橋編年E類に対応）。底部は丸底になる。外面調整は、口縁部がヨコナデのもの、ケズリのもの、ミガキのもの3者がある。底部（体部下半）もケズリが施されるものが多い。内面調整は、ミガキで黒色処理が施されている。E類は無段平底で直線的に開く口縁部を有する器形である（高橋編年F類に対応）。外面調整は全面ケズリ調整であるが、口縁部にミガキが施されるものもある。内面調整は、ミガキ及び黒色処理が施される。F類は、調整にロクロを使用するものである（高橋編年G類に対応）。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施される。ここでは、数が少ないこともあり、触れないことにする。

これら各類は、各遺構を一括して検討しているため、そのなかに相対的に古い様相を示すものや新しい様相を示すものも含まれる。次の検討として、各類の中で組列を見出すことになるが、今回は出土量やその特徴からあまり大きな差が認められないことから、古代土器については大きな年代差はないと捉えたため深く検討を行わない。

土師器甕は、いずれもいわゆる長胴甕で、先行研究から器高が25cm以上の大型品をA類、15～25cmの中型品をB類、15cm以下の小型品をC類とする。A類を口縁部や体部の形態で細分を行うと3つに分けられる。体部はあまり膨らまず、底部に向かって窄まっていく形態をもち、口縁部に最大径をもつものをA1類（高橋編年A1類に対応）。体部の中央が膨らみ、そこに最大径があるものをA2類（高橋編年A2類に対応）、体部下半に最大径があるものを3類（高橋編年A3類に対応）とする。中型のB類では、口縁部の最大径をもち、底部に向かって膨らみをもたずに窄まっていくものをB1類（高橋編年B1類）、体部中央に最大径をもつB2類（高橋編年B2類）の2つに分類できる。小型品であるC類はB1類に類似した形態のものがほとんどであることから細分は行わない。

出土数はA2類、B1類が多い。各類とも外面調整は、口縁部がハケメの後にヨコナデ、体部には縦位のハケメが施される例が多いが、下半にヘラケズリが施される例も一定数確認できる。内面調整は、口縁部は外面と同様であるが、体部は横位のハケメ調整が多く、ヘラナデも一定数認められる。また、観察できるハケメにも幅の狭いものや鋭く深いものなど使用工具の差が顕著なものがある。甕についても各類の組列を確認しなければならないが、杯での傾向からあまり広い年代幅がなさそうなので、ここでは検討を行わない。

壺は、出土数が少ないため高橋編年に対応させる。大型品のD類（いわゆる球胴甕）がほとんどであるが、胴部の最大径が上位にあるものから、中位、下位にあるものまでバリエーションがある。口縁部が不明なものの165などはC類かもしれないが、非常に数が少ない。また、115のような小型の壺が1点のみ出土する。そのほか高杯、椀、ミニチュアがあるが、いずれも出土数がわずかであるため、第322図に集成するにとどめた。なお155は、椀形態をもつが高台が二重になっている特殊な形態である。

以上の出土土器の特徴から、高橋編年と対比してみると、およそ7段階に位置づけられる。これに従うならば、年代はおよそ8世紀中葉から8世紀後葉にかけてということになる。またYSI01出土土器（第157図）は、なかでも古い傾向があり、あるいは6段階に位置づけられるかもしれない。さらにQSI01出土土器（第134図）は8段階の特徴を持つ土器が多く、一部8世紀末葉～9世紀初頭にか

けての土器群が含まれることになる。漆町杯A～C類の有段杯に認められる段は、内面にはほとんど見出せないことや外面の段も簡略化されたものが多いこと、平底に近い杯が多いことなどから、7段階に含まれるものがより多い可能性がある。したがって、これらの土器を出土する竪穴建物跡を中心とする遺構は、8世紀中葉から後葉を中心に存在したことがわかる。つまり、高橋編年7段階を中心に、その前後の段階（6段階と8段階）も一部に含まれることになる。全体的にみて8世紀前葉から8世紀末、9世紀初頭段階までの土器群が出土することになるが、大半は8世紀後半段階の土器群ということになる。須恵器杯は少数ながら出土している。これらの形態的特徴をみても、上記の年代ともあまり矛盾しないであろう。

杯や甕では明確な組列を見出せないことから、年代幅を狭めることが難しいもののおおよその位置づけを行えた。また、おもに平安時代以降のロクロを使用する土器群については、細分できるが、井上雅孝による編年（井上1997）からみるとおよそ9世紀後半段階頃と考えられる。また、緑釉陶器や灰釉陶器が1点ずつ出土している。緑釉陶器は小破片であり詳細は不明であるが猿投産の可能性がある。灰釉陶器はK-90号窯式期と推定され、それぞれ9世紀後半の年代が想定される。

## (2) 12世紀の遺物について

12世紀代に位置づけられる遺物には、かわらけ、渥美や常滑などの国産陶器、中国産の白磁や青白磁などの貿易陶磁がある。大多数を占める古代の土器類に次いでまとまった量が出土している。

かわらけには、手づくねかわらけの大皿と小皿があり、ロクロかわらけは出土していない。国産陶器には、常滑産が多く、大甕、広口壺、鉢などがある。渥美産も一定数出土し、甕や広口壺などがある。いわゆる須恵器系陶器も大甕片を中心に出土している。貿易陶磁には、白磁碗（3点）や青白磁碗（1点）がある。前者は口縁部や体部を中心とする破片であるが、口縁端部のものは水平的な折り曲げや直線的に開く体部から、大宰府編年D期Ⅷ-1類あるいはⅧ-3類に位置づけられよう。年代は12世紀中頃から後半である。後者は今のところ分類が明確ではないが12世紀代のものと考えられる。

以上の点からみて、おもに12世紀後半代を示す土器や陶磁器類が多いことがわかる。また、八重樫のいう、手づくねかわらけ、東海地方産陶器、中国産磁器（四耳壺は出土していないが）のいわゆる「平泉セット」（八重樫2001・2002、遺跡出土遺物は厳密な定義では、これに対応しないが、広義においては類すると考えている。）が確認できた点でも重要である。

## (3) その他の土器について

今回の調査では、古代の土器類や中近世の陶磁器類以外には、縄文土器の小破片が数点と石器類が出土するのみである。しかし、過去の調査では、貝殻文などの早期の土器片や弥生時代後期の土器も出土していることから、陥し穴以外の明確な遺構は発見されていないが、付近には存在する可能性がある。

## 2 遺構の時期変遷について

次に、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、大溝、塀など主要な遺構について相対的な前後関係を試みて、時期区分を行う。今回の調査では各遺構からまとめて遺物が出土する例が少なく、遺物だけでは時期を決定することが難しいため、おもに遺構の主軸方位によって時期を判断することにする。同一方位のものが同時期であるか別に検討しなければならない問題であるが、この遺跡の場合、方位にまとも

りが認められたため、ある程度有効と捉えている。ここでは、主要な遺構である竪穴建物跡によって時期を決定し、全体の時期変遷を検討する。その他の遺構については、それぞれ異なる基準で時期を決定し、全体の時期変遷に対応させることにする。

### (1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は、主軸方位（カマドのある方向を主軸とする）を基準にすると以下の4群に分けられる。なお、ISI07とTSI02は、計測不能のためここでの検討から除外する。

A群 方位が西に13°～30°傾くもの 少し西に傾く群。

B群 方位が西に31°～53°傾くもの さらに西に傾く群。

C群 方位が西に54°以上傾くもの 大きく西に傾く群。

D群 方位が東に0°～15°と50°前後に傾くものを一括する。カマドの設置方向が変化。

A群に含まれる竪穴建物跡は11棟（FSI04、HSI03・08、ISI06、KSI01、NSI03・04、QSI01・02、TSI01、XSI01）、B群に17棟（ESI01、FSI01・03、HSI01・06・10、HSK17、JSI01、LSI01・04、OSI01・02、RXS02、USI02・03、YSI01、ZSI01）、C群に16棟（ASI01、HSI02・05、ISI01～05、JSI02、KSI02・03、LSI02、MSI01、NSI05、RSX01、USI01）、D群に10棟（HSI07・09、LSI03、NSI01・02、OSI03・04、VSX01・05・06）となる。次に各群間の重複関係をもって前後関係を判断することになるが、竪穴建物跡の有効な重複が確認できるのは3例のみである。これは、存続期間が比較的短いことや計画性を表している可能性がある。① HSI10、HSK17、HSI09、HSI07がHSD08を介して重複しており、これによりB→Dの関係のみ判断できる。② NSI05とNSI02の関係からはC→Dと判断できる。③ HSI01とHSI02の関係からB→Cと判断できる。①～③をまとめると、B→C→Dの順に前後関係があることがわかる。A群との関係は重複関係からは不明であるため、先に検討した土器と対比してみる。A群に含まれるQSI01は、ロクロ調整の土師器杯や須恵器が出土している。底部切り離し技法や器形などから、B、C群の出土土器よりは明らかに後出的である。また、D群に含まれる竪穴建物跡からは、ほとんどロクロ使用の土器が出土している。したがって、A～Cのいずれよりも後出すると判断できる。その結果、A群は、B、C群よりは新しく、D群よりも古いことがわかる。すなわち、B→C→A→Dの順に相対的に新しくなる。B群のなかで、比較的まとまりがある土器を出土している建物跡には、HSI06、HSK17、YSI01がある。C群のなかでは、HSI05、KSI02、KSI03、USI01が、A群のなかではHSI03、QSI01がある。これらの土器をみても、上述の変遷とあまり矛盾は無いものと考ええる。以上を総合的に判断して、以下の通りに時期区分を行う。

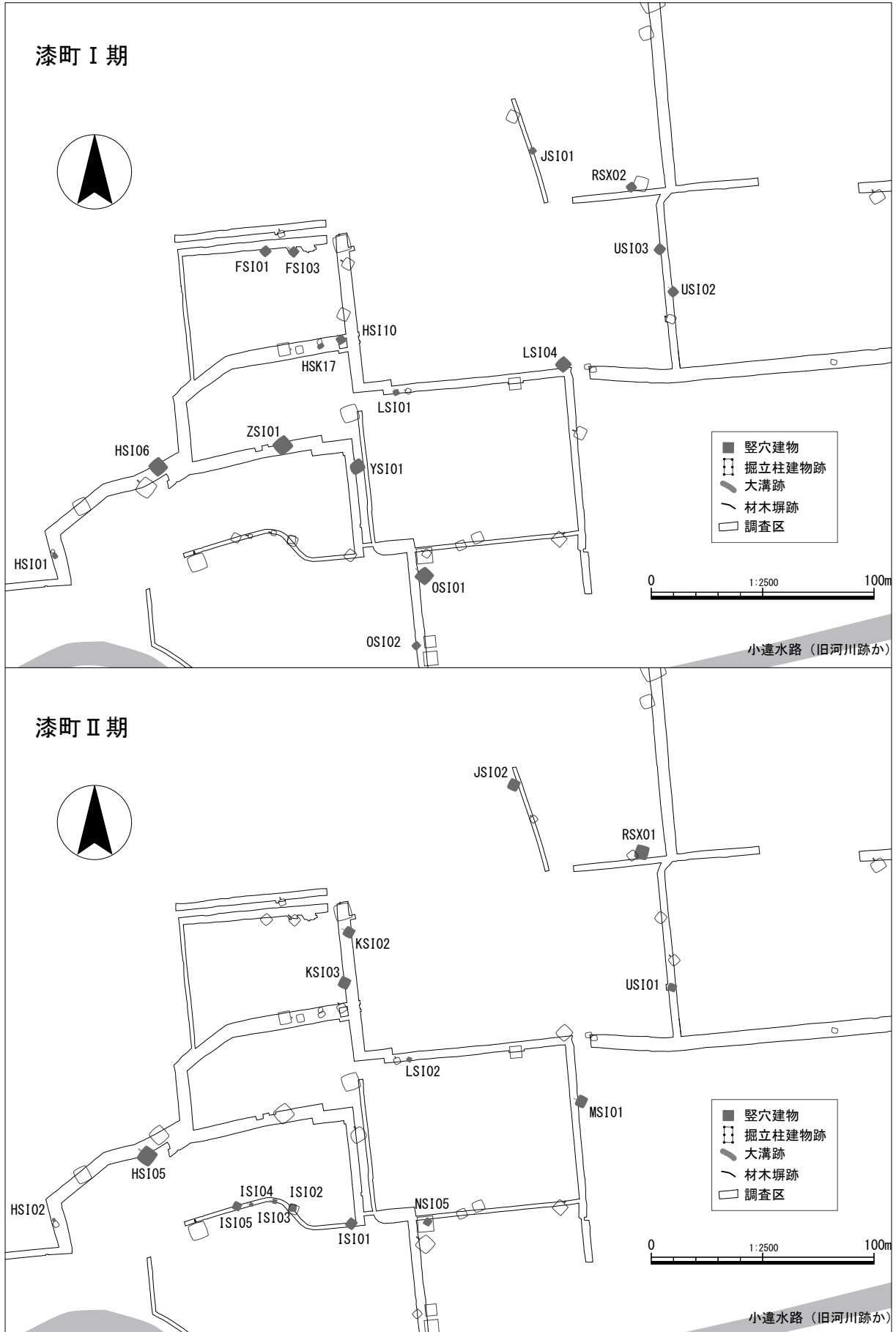
漆町Ⅰ期 竪穴建物跡B群を含む段階

漆町Ⅱ期 竪穴建物跡C群を含む段階

漆町Ⅲ期 竪穴建物跡A群を含む段階

漆町Ⅳ期 竪穴建物跡D群を含む段階

これに、先に検討した土器の年代を付与すると、B群の一部に高橋編年6段階が、A群の一部に8段階が含まれるほかは、大部分が高橋編年7段階に対応することになる。つまり、中心的な年代は8世紀中葉から後葉の年代幅であり、それに漆町Ⅰ期からⅢ期が含まれる。Ⅰ期の一部は8世紀前葉から、Ⅲ期の一部は8世紀末葉から9世紀初頭まで年代が広がる可能性があるということになる。また、Ⅳ期は、9世紀以降の平安時代となる。なお、Ⅳ期に含まれる出土土器のなかにはあきらかな時期差があり、また建物跡の主軸方位も2種あることから、さらに細分できると考えているが、含まれる遺構数が少ないため平安期として一括のままにしておきたい。A～D群間には前後関係の根拠となる重



第324図 遺構変遷図 1



複例が少ないため、前後関係を明確に判断することが難しいが、今回の調査に限っては上記のような時期変遷があると捉えた。

## (2) 掘立柱建物跡の時期について

つぎに42棟を復元した掘立柱建物跡の相対的な前後関係を検討してみる。建物方位は、本来南北棟と東西棟で異なるが、先述のとおりここでは共通方向に方位を計測した。掘立柱建物跡を建物方位でまとめてみると、A～Gの7つのまとまりに分類できる。

A群 西に0°～11°傾くが、ほぼ正方位をもつもの

B群 西に12°～20°傾くもの

C群 西に21°～31°傾くもの

D群 西に32°～41°傾くもの

E群 西に50°～59°傾くもの

F群 西に60°～80°傾くもの

G群 西に81°～90°傾くもの

A群には、ESB04・05、MSB03、OSB02・03・06・07、VSB01の8棟が、B群には、ESB01・03、FSB06、QSB02、YSB01、VSB04の6棟が、C群には、ESB02・07、FSB02・05・08・10の6棟が、D群には、ESB08、FSB03・04、HSB01の4棟が、E群には、ESB06、VSB01の2棟が、F群には、FSB07・09・11・12・13、HSB02、MSB01・2、VSB02の9棟が、G群には、OSB01・04・05、QSB01、VSB03、NSB01・02の7棟がそれぞれ含まれることになる。また、G群は90°に近い方位をもつことから、A群と同様に北を指向する同一群と捉えることができる。

次に、これら6つのまとまりごとに重複関係をみる。32棟で他遺構との重複が確認できるが、空間的に重複する場合が多く、建物跡を構成する柱穴が直接ほかの遺構と切り合う例は9例のみとなる。FSB03～06、FSB08・10・11、OSB02・03の事例である。このうち有効な重複関係をみると、FSB05に関する例からF→C→Bという前後関係がわかる。このほか、FSB06例では、C→B、F→Bが、FSB10例からD→Cが、FSB11例からF→D、F→Cの関係がわかる。OSB02・03例からは、A群はIV期を含むそれ以降ということがわかる。以上をまとめると、F→D→C→Bの順に新しくなり、A・G、E群については重複関係だけでは前後関係が判断つかないことになる。A・G群のうちESB04は方形掘方を呈し、規模も比較的大きいことから一般的にみて古代に属する可能性がある。また、その方位は西に0～11°であるが、竪穴建物跡D群の方位に類似し、北を指向している。さらに各柱穴から出土する遺物は土師器片であり、周囲の遺構からの混入の可能性はあるが、出土遺構をみると、A群からは4例、G群からは3例をあわせて7例が、C、D群からはそれぞれ2例が、F群からは1例が確認でき、A・G類からは比較的多く土師器を出土する。今のところ奈良時代にさかのぼる掘立柱建物跡の検出例は岩手県内ではないことから、漆町Ⅲ期以前には掘立柱建物跡群を積極的に位置づけることができない。これらの点を重視するとA・G群は漆町IV期（平安時代）に位置づけられる可能性が高い。A・G群以外は積極的に時期を決定する証拠がなく、また、古代に積極的に位置づける根拠もない。図式化すると以下のようなになる。

A・G（漆町IV期）・・・F→D→C→B  
・・・E・・・

A・G群以外の掘立柱建物跡については、遺跡のなかでは、古代、古代末期（12世紀）、中近世の遺物が出土することから、漆町IV期以降で、これらの年代幅の中（古代も含めて）で変遷していると

考えられるが、具体的な位置づけは困難である。

### (3) その他の遺構の時期

大溝については、あまり方位に規制されたとは考えにくいことから、第Ⅳ章で触れたように出土遺物とテフラの位置で決めている。おおよそ漆町Ⅳ期に対応すると考えている。

材木堀跡については、出土遺物からは明確には決定できないこと、大溝と同様に方位に規制されたとは考えにくいこと、検出した材木堀が大溝とほぼ平行していることから、堀跡も複数時期があるものの全体的にみて大溝と同様の漆町Ⅳ期に位置づけられる可能性がある。したがって、材木堀に付設する門跡FSB01も同様の時期であろう。しかし、この材木堀跡の時期については明確ではなく、間接的な証拠のみのため、仮に時期を位置づけるにとどめておく。

## 3 大溝で囲まれる「集落」について

前項では、検出された大溝跡や材木堀跡を漆町Ⅳ期である平安時代（9世紀後半が中心年代）に位置づけた。こういった例は、これまで周辺地域からは未発見であり、岩手県初例ともいえる。このような特徴をしめす遺跡はどのような性格を有していたのであろうか。ここでは、この点について若干の検討を行う。

漆町遺跡の特徴を、再度触れておく。立地は、標高85m前後の丘陵上でも台地上でもなく、周囲との比高もあまりない「平地」にある。時期は平安時代（9世紀後半が中心）で、集落を大溝によって西・北・東側の三方を楕円形状に囲む。南側は河川ないし低地で限られている。大溝の内側には、竪穴建物跡、掘立柱建物跡が存在する（主軸方位は正方位を意識する）。材木堀は大溝と併存するか否かは不明確であるが、材木堀存在時には門が設置されている。このような遺跡の性格としては、今のところわずかながらも可能性があるのは以下の諸点である。

- ① 北の「防御性集落」
- ② 官衙関連施設あるいは「居宅」
- ③ 12世紀の居館かあるいはその原形
- ④ その他

①については、北海道南部から岩手県北部にかけて分布し、10世紀半ば頃から11世紀後半（ないし12世紀初め）に存続する周囲を環濠や土塁などの防御施設によって囲まれたり、高い山の上に営んだりした集落をいい（三浦1995、斉藤1997）、高地性集落、環濠集落とも呼ばれている集落である。一般的にはその名称どおり、「戦い」に備えた集落である。これには、「区画施設」としての意義の方が大きいという批判的な考え方（八木2006）もある。漆町遺跡の大溝についても、時期や場所（胆沢城の近辺）を考えれば防御が主な機能とは考えにくく、区画施設として存在していたと考えられる。また、「防御性集落」とは分布する地域や時期も異なるという大きな違いも存在する。集落を何らかの施設で囲むという行為には共通点があるものの、本質的な意味は大きく異なっているであろう。

つぎに②の官衙関連遺跡として考えることも可能であろう。大溝や材木堀といった区画施設と門の存在がその立脚点となる。これらの遺跡の場合、区画施設が設置されることが多く、方形を基調とする例が多い。城柵が設置される地域では、それ以外の関連施設についての存在がよくわかっていない。そのため、これらの施設が仮にあった場合どのような内容を持つか現在のところ不明である。漆町遺跡の場合、建物配置にある程度の規則性が認められるものの、掘立柱建物跡も部分的にしか調査して



おらず、全体の建物構成を把握するまでには至っていない。それが官衙的であるか有力な証拠はなく、関連する遺物も出土していない。また、公的な施設の可能性がある一方で、有力豪族の「居宅」である可能性もある。関東から東北地方南部などで発見されている門が付随する区画溝で囲まれた「集落」である（田中2002・2005など）。これらの場合区画溝は、漆町遺跡ほど大規模ではなく、内部には掘立柱建物や竪穴建物跡がある程度整然と配置されるものが多い。出土遺物も灰釉陶器などを多量に消費する傾向にある。時期は9世紀代までのものがほとんどである。漆町遺跡の場合、調査区が狭小であることもあり、中心部分の様相、とくに建物配置が不明確なこともあり、積極的に対比させることが難しい。こういった公的あるいは私的な施設の可能性があることのみを指摘しておきたい。

③は仮に大溝が11世紀代や12世紀に位置づけられた場合にのみ該当するであろう。柳之御所遺跡のような平安時代末期の居館としての性格が考えられる。川沿いの立地とはいかないが、丘陵上や台地上にはなく、自然堤防上に立地する。漆町遺跡の大溝で囲まれる範囲は東西350m、南北270mであり、これは柳之御所遺跡に匹敵する規模である。今回の調査では必ずしも12世紀代の遺構を抽出できず、内容は不明確のままであるが、出土遺物の存在から大溝が12世紀である可能性はわずかながら残る。また、こういった居館の原形となる場合も想定され、これは③の有力豪族の「居宅」とも関連する。

④その他として、大溝が集落を囲むなど類似する遺跡の参考例としていくつかの例をあげたい。北上市に所在する尻引遺跡は、漆町Ⅱ～Ⅲ期（奈良時代後半）頃の集落で、漆町遺跡よりも古く、奈良時代の末頃とされる（北上市教育委員会1977）。北上川の自然堤防上に立地する集落であるが、1条の大溝が遺跡を横断するように北上川と直行する方向に延びている。大溝の構造や規模は漆町遺跡と類似するものの、時期が異なっている。部分的な調査のためこの大溝が集落を囲むのか否か不明な点も多いが、周辺地域での事例としてはもっとも近い例となろう。秋田県・にかほ市に所在する立沢遺跡や阿部館遺跡でも、集落の中に大溝跡が確認されている。立沢遺跡では、一部の調査であるが、幅1.5m前後の大溝の一部が確認されており、その内部には掘立柱建物群がある。時期は10世紀代を中心に考えられている（仁賀保町教育委員会1987）。出土遺物には緑釉陶器や青磁、円面硯などが出土している。阿部館遺跡では、9世紀後半を下限とする最大幅5m、深さ1.6m以上の大溝跡が弧状に巡り、遺跡の内側を区画する施設と考えられている（秋田県教育委員会2012）。丘陵上に立地することや大溝が全周するわけではなく内部の様相も明確ではないが、平安時代に区画施設がある遺跡としては重要な例となる。周辺には古代の官道と推定された道路跡を検出した清水尻Ⅱ遺跡や豊富な施釉陶器が出土した家ノ浦Ⅱ遺跡などがあり、付近には官衙関連施設の存在が想定されている。

以上のように、今回の調査結果は、ここに挙げたいずれの範疇にも今のところ明確に当てはまらない。現段階では可能性があるものの、有力な証拠はない。しかし、今後の調査によってあらたな知見が得られることや年代の不明確な点が解消されることがあれば、これらの可能性を狭めていくことができるであろう。いずれにせよ、大溝によって区画された状況は重要な意義があると考えられるが、現段階では、一般的な集落とは異なる在り方を示せるのみであり、上述の可能性を指摘するにとどめ、多くは今後の課題としたい。

#### 4 門について

FSB01とした建物跡は、材木塀であるFSD07とFSD10の途切れた箇所に取り付いている。構造は、事実記載で触れたようにいくつかの可能性があるが、四本柱門として復元した。材木塀の端部を使用して6個の柱穴から構成される四脚門の可能性も残る。また、時期についても不明確な点はあるが、

とりあえずここでは大溝と関連がある平安時代に位置づけた。いずれにせよ、門の構造をもつ施設が城柵や官衙遺跡以外の集落から検出されたことが重要であり、これは岩手県内では初出といえる。

では、集落から発見された門にはどのようなものがあるのか。城柵・官衙遺跡や寺院以外に溝や柵列、土塁等で土地を区画し、その開口部に門を設置した遺跡は列島各地にみられ、そしてそれは豪族の居宅や官人の館、集落にかかわる門とする（田中2010）。また、田中は東北地方の類例として、9例をあげている（田中前掲）。これに従うならば、漆町遺跡は、城柵・官衙遺跡とは考えにくいことから、豪族の居宅や地方のムラなどにある末端官衙の門、居宅や館の門、集落の出入り口としての門などが想定される。これは先に触れた大溝の性格と密接に関連し、門の性格が判明すれば大溝の性格ひいては集落の性格もおのずと解明されるであろう。大溝の問題と同様、漆町遺跡の場合では、中心的な建物の存否が不明であることもあり、性格を想定することも難しい。これまでの諸例のなかに答えを見つければ、上記の4つの中にあると想定されるが、城柵が設置された地域性を踏まえれば特殊な事例である可能性もある。明確な結論はでないが、以上のような想定を提示しておきたい。

なお、門や大溝の検討については、国生尚、菅原祥夫、村田晃一、室野秀文の各氏より様々な指摘をいただいた。

## 5 ま と め

今回の漆町遺跡の発掘調査の内容について、調査内容の記載や若干の考察を行ってきた。さいごに、これらの成果を再度まとめつつ、時期ごとに総括していきたい。

**調査概要** 今回の調査は、ほ場整備事業に関わるもので、この事業のうち水路や農道に相当する範囲を調査した。調査範囲は、東西1km、南北500mもあり、おおよそ遺跡の推定範囲の大部分にトレンチを入れた状況となる。その結果、判明する成果も多々あったが、個々の内容については不明な点も多く残されることになった。調査したおもな遺構には、竪穴建物、掘立柱建物、門、材木堀、大溝などがある。これらは、前項までの遺構や遺物の検討の結果、4時期に分かれることがわかった。

**縄文時代** 遺構としては、陥し穴状遺構などであり、居住施設を検出したわけではないが、若干の土器や石器が出土している。調査区でもO区やN区などの南側に遺構や遺物が集中する傾向があり、これらの範囲にはさらなる遺構が存在する可能性がある。前回の調査でも貝殻文土器が出土するなど比較的早い段階でこの土地が利用されていたと考えられる。

**奈良時代** 奈良時代であるI期からIII期では、竪穴建物跡46軒が見つまっている。これらは、規模で分けると、一辺が10m程度の超大型、7mを超える大型、4～5mの中型、4m以下の小型の4つに大別できる。そのほか、カマドをもたず床面積の小さい小型の建物跡がある。この遺構は、胆沢町教育委員会による1回目の調査時でも発見され、小竪穴として報告されている（胆沢町教委1977）。一般的にはこれらの建物跡は高床ではない倉庫と考えることが多く、ここでもそのような機能を想定している。

竪穴建物跡は、各所に存在するが、とくに中央調査区に集中する傾向がある。また重複するものは少数である。狭い調査範囲のためまとまった空間を調査していないが、大型の竪穴建物を中心に中型、小型の竪穴建物が並ぶようである。これはこれまで研究された周辺地域の様相と同様の在り方を示しているであろう。また、8世紀中葉から末葉までの年代幅（その前後の時期も少数含まれる）のなかでI期～III期の3つの段階を経ることを検討した。比較的短い時間幅の中で遺構が存続したことになる。

出土遺物は、竪穴建物跡を1棟分完掘したものが少なく、削平によって壊された建物跡が多いため、一つの遺構からの土器出土数は決して多くない。土器のほかには、HSI06などから出土した土製や石製の玉類がある。間仕切り溝のある竪穴建物からの出土である点は興味深い。

**平安時代** IV期とした平安時代は、今回の調査でもっとも重要な時期である。この時期には、推定全長が600mの大溝跡が楕円形状に巡らされるようになる。そして、その内側約20mの位置には材木堀が大溝とほぼ併行しながら巡ることがわかった。さらに、その材木堀には、途切れている箇所があり、四本柱門が設置されている。

このほか、少数ながら竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出している。平安時代の掘立柱建物は、ある程度限定された集落から検出されることが多い（西澤2010など）。本遺跡からも15棟の建物跡があり、竪穴建物の方位などともあわせて通常の集落とは異なっていることがわかる。また、多数の柱穴の存在は、さらなる建物跡の存在が予想される。一方で、大溝の外側にも建物が分布する。外側の在り方についてもまだ検討の余地があろう。今回の調査では、範囲が狭いということもあり、この時期の内部や外部の状況についてはあまりよくわからなかった。竪穴建物跡や掘立柱建物跡が存在することが判明したものの、どのような空間配置をとっているか、時期の変遷があるのかなど大溝で囲まれる内部の状況についてはあまり明確ではない。現状では、O区周辺に建物が集中している様相のみ捉えられ、門の周辺や中央部の様相は見えてこない。竪穴建物跡の検出数の少なさや柱穴の多さなどから、掘立柱建物跡が空間構成の中心となる可能性だけは指摘しておきたい。したがって、大溝と材木堀で囲まれた特異な空間については、前項で触れたようにいくつかの性格が考えられるが、現状ではどの案も保留とせざるを得ない。通常の集落とは異なった、特異な空間であることは間違いなさであろう。類例の増加やさらなる調査を待ちたい。

また、本報告では、大溝や材木堀を十和田aテフラが堆積土中の中位から下位に含まれることを重視（材木堀は大溝との関係から類推）し、平安時代に想定したが、調査した範囲はこれらの遺構のうちごくわずかであり、遺物も豊富に出土したわけではない。今回の調査でも、出土遺物の混在、放射性炭素年代測定の結果など合わせると、明確には決定し難い点が残る。これらは今後の調査によって確定していきたい。

遺物は、ロクロ調整の杯や甕土師器が中心であるが、量的には少ない。重要な遺物としては、灰釉陶器皿や緑釉陶器碗（皿）の出土がある。前者は竪穴建物跡から、後者は溝跡から出土である。

**12世紀** これまで触れた奈良・平安時代の成果のほかには、平安時代末期である12世紀に所属する遺構や遺物がある。奥州（平泉）藤原氏が活躍する時代の遺物がまとまって出土することは注目すべきである。遺構としては、溝跡のみであるが、手づくねかわらけ、常滑や渥美産、日本海側の窯産（珠洲系）、中国産の白磁碗、青白磁碗などが出土している点は重要である。とくに、中国産磁器の存在は、有力者の存在が想定でき、また、手づくねかわらけの存在は平泉と同様の儀式があったことを想定される。これらの遺物は遺跡の北東側から多く出土しており、この付近には何らかの施設があった可能性がある。詳細はさらなる調査が必要となるが、今後注目していきたい点である。

以上、時代ごとに今回の調査における成果をまとめた。判明した事実が多く、重要な点を指摘することができたが、不明な点も多々残った。これらは、今後の調査や周辺地域史の研究によって明らかとなろう。

## 引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 2012 『阿部館遺跡－一般国道7号仁賀保本荘道路建設に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書VI』秋田県文化財調査報告書第481集
- 井上雅孝 1997 「陸奥における10-11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7
- 胆沢町教育委員会 1977 『漆町遺跡調査報告書』
- 北上市教育委員会 1977 『尻引遺跡調査報告書』文化財調査報告第17集
- 齊藤利男 1997 「北の古代防御性集落とその時代－「山城型の防御性集落」に関する一試論－」『弘前大学国史研究』102
- 佐藤敏幸 2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
- 高橋千晶 2007 「岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
- 田中広明 2002 『地方の豪族と古代の官人』柏書房
- 田中広明 2005 「官衙の門、居宅の門」『研究紀要 第20号』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 2010 「居宅・館・集落と門」『第13回古代官衙・集落研究会報告書 官衙と門 報告編』奈良文化財研究所研究報告第4冊 グバプロ
- 辻秀人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 西澤正晴 2012 「北上盆地における平安時代の集落について(下)」『紀要』31 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三浦圭介 2006 「古代防御性集落と北日本古代史上の意義について」『北の防御性集落と激動の時代』同成社
- 村田晃一 2005 「7世紀における陸奥北辺の様相－宮城県域を中心として－」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
- 八重樫忠郎 2001 「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市平泉－成立とその構成－』日本考古学協会
- 八重樫忠郎 2002 「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』高志書院
- 八木光則 2006 「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防御性集落と激動の時代』同成社
- 山中敏史編 2003 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』(独)文化財研究所 奈良文化財研究所

第26表 土器類観察表

掲載No	登録No	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
1	12A035	土師器	甕	ASI01	煙道(西)	口縁部～胴部上位	5YR6/4 にぶい黄橙	20.3	<19.55>	—	ハケム(斜位) →ヨコナデ →ハケム(縦位)	ヨコナデ →ハケム(縦位) / ハラナデ(横位・縦位)			600.55
2	12A036	土師器	甕	ASI01	煙道(東)	口縁部～胴部上位	10YR6/4 にぶい黄橙	20.0	23.05	—	ヨコナデ →ハケム(縦位)	ヨコナデ →ハケム(縦位)			1111.38
3	12A041	土師器	甕	ASI01	埋土・床面	口縁部～底部	5YR6/3 にぶい黄橙	(22.0)	29.15	7.9	ヨコナデ →ハケム(縦位) →ハラナデ(斜位)	ヨコナデ →ハケム(縦位)			1113.68
4	12A044	土師器	甕	KS101	カマド	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	—	31.5	7.6	ヨコナデ →ハケム(斜位)	ハケム(斜位)			1374.02
6	13A003-1	土師器	甕	ES101	床面	口縁部～胴部	2.5YR5/3 にぶい赤褐	<12.4>	10.9	—	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ(縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ(縦位)			318.4
7	13A004	土師器	甕	ES101	埋土上層	胴部～底部	10YR8/3 にぶい黄橙	—	<7.9>	6.4	磨減	磨減			140.4
8	13A002	土師器	甕	ES101	床面	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(19.4)	23.4	7.2	口：ヨコナデ(縦位) 胴：ハラナデ(縦位) ハラナデ(縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ(縦位)			1,092.60
9	13A001-1	土師器	甕	ES101	床面	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	(22.4)	<34.6>	—	口：ヨコナデ(横位) 胴：ハケム(斜位) →ハラナデ(斜位)	口：ヨコナデ(横位) ハケム(横位、斜位)			4,465.20
	13A001-2	土師器	甕	ES101	床面	底部	10YR7/3 にぶい黄橙	—	<7.6>	8.9	胴：ハケム(斜位) →ハラナデ(斜位)	ハケム(横位、斜位)	木葉痕		350.5
10	12A003	土師器	高杯	FS103	埋土一拵	胴部～脚部	7.5YR6/4 にぶい黄橙	—	<4.5>	—	ハラナデ(一部ハラナズリ)	脚部ハラナズリ / 胴部ミガキ			122.4
11	12A069	土師器	杯	FS103	埋土一拵	胴部～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<2.7>	—	ヨコナデ →ハケム	ミガキ		内面黒色処理	11.71
12	12A038	土師器	甕	FS103	埋土一拵	胴部上位～底部	10YR8/3 浅黄橙	(19.1)	30.7	(8.4)	ヨコナデ →ハケム(縦位)	ヨコナデ →マメツ(ハケム横位)	木葉痕		581.31
14	12A037	土師器	甕	FS104	埋土一拵	胴部上位～底部	5YR7/3 にぶい黄橙	—	<10.2>	7.3	ハケム(縦位)	ハケム(横位)			435.74
15	12A067	縄文	鉢類	FS104	埋土一拵	胴部	10YR6/2 灰黄褐	—	—	—	燃糸				7.1
16	13A047	土師器	杯	HS103	埋土上層	口縁部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	(12.4)	(3.0)	—	ヨコナデ・ハラナズリ(斜位)	ミガキ(上・横位 下 縦位)	ハラナズリ	内面黒色処理	35.7
17	13A087	土師器	杯	HS103	埋土上層	口縁部～底部	10YR2/1 黒	(22.4)	<5.3>	—	ミガキ(横位)	ミガキ(横位)			32.1
18	13A036	土師器	杯	HS103	埋土上層	口縁部～底部	10YR6/3 にぶい黄橙	16.1	4.6	—	ヨコナデ・ハラナズリ(横位)	ミガキ(上・横位 下 縦位)	ハラナズリ	内面黒色処理	233.5
19	13A042	土師器	杯	HS103	埋土下層	口縁部～底部	10YR7/2 にぶい黄橙	(15.5)	<3.3>	—	ヨコナデ	ミガキ(上・斜位 下 縦位)	ハラナズリ(横位)	内面黒色処理	51
20	13A046	土師器	杯	HS103	埋土上層	口縁部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	(16.6)	<3.7>	—	ヨコナデ・ハラナズリ(横位)	ミガキ(マメツ)	ハラナズリ	内面黒色処理	28.7
21	13A117	須恵器	杯	HS103	埋土一拵	口縁部～胴部	2.5Y7/2 灰黄	(15.2)	<4.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ		須恵器	23.5
22	13A122	須恵器	甕	HS103	埋土一拵	口縁部	5Y3/2 オリーブ黒	(16.6)	<3.5>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			23.3
23	13A076	土師器	甕	HS103	埋土上層	口縁部～胴部	2.5Y7/3 浅黄	(20.8)	<12.9>	—	口：ヨコナデ 胴：ハケム(縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハケム(縦位)			160.2
24	13A080	土師器	甕	HS103	柱穴埋土	口縁部～胴部	7.5YR6/6 橙	<18.8>	(5.4)	—	口：ヨコナデ 胴：マメツ	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ(横位)			105.4
25	13A010	土師器	甕	HS103	埋土一拵	口縁部～底部	7.5YR7/2 明褐灰	15.6	23.5	(7.1)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ(縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハケム(縦位)			892.3
26	13A007	土師器	甕	HS103	埋土一拵	口縁部～底部	10YR5/3 黄褐	18.8	28.5	8.2	ハケム(横位)	ハケム(縦位)			594.7
27	欠番														
28	13A039	土師器	杯	HS105	床面	口縁部～底部	2.5Y7/4 浅黄	14.4	3.8	5.0	ミガキ(横位)・ハラナズリ(横位)	ミガキ(横位)	ハラナズリ(縦位)	内面黒色処理	196.5
29	13A092	土師器	杯	HS105	埋土下層	口縁部～底部	10YR8/4 浅黄橙	(17.4)	<3.85>	—	ヨコナデ・ハラナズリ	ミガキ(横位)		内面黒色処理	20.8
30	13A086	土師器	杯	HS105	埋土	口縁部～底部	10YR7/6 明黄褐	(15.4)	(4.8)	—	ヨコナデ・ハラナズリ(横位)	ミガキ(横位)		内面黒色処理	41.3

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
31	13A123	須恵器	坏	HS105	埋土下層	口縁部	10Y5/1 褐灰	(15.8)	<3.95>	—	ロクロナデ	ロクロナデ		須恵器	5.8
32	13A090	土師器	杯	HS105	埋土一括	口縁部～底部	10YR6/4 にぶい,黄橙	(15.8)	<3.7>	—	ヨコナデ	ミガキ (縦位)	ハラケズリ	内面黒色処理	23.4
33	13A052	土師器	高杯	HS106	埋土下層	底部	10YR6/8 明黄褐	—	<4.75>	—	ハラケズリ (縦位)			内面黒色処理	127.4
34	13A050	土師器	高杯	HS105	埋土下層	胴部～底部	10YR7/4 にぶい,黄橙	—	<5.65>	—	ハラケズリ (縦位)	ミガキ		内面黒色処理	152.7
35	13A012	土師器	甕	HS105	床面	口縁部～胴部上位	7.5YR5/6 にぶい,橙	21.0	<8.15>	—	口：ハケメ (縦位) →ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	ハケメ～ハラナデ (縦位)			777.9
36	13A014	土師器	甕	HS105	床面	胴部～底部	2.5Y7/4 浅黄	—	13.8	8.0	ハラナデ (縦位)	ハラナデ (縦位)			586
37	13B038	ミナチュウ		HS105	カマド袖			—	3.1	—	ハラナデ・手づくね	ハラナデ・手づくね	ハラナデ・手づくね		27.6
40	13A048	土師器	杯	HS106	埋土上層	胴部～底部	N1.5/0 黒	—	<2.05>	—	ヨコナデ	ミガキ (マメツ)	ハケメ (マメツ)	内面黒色処理	132
41	13A023	土師器	甕	HS106	埋土上層	胴部下位～底部	10YR6/6 明黄褐	—	<2.45>	4.6	ハラナデ (縦位)	ハラナデ (縦位)	ハラナデ		42.4
42	13A041	土師器	杯	HS106	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y7/2 灰黄	(14.6)	<7.3>	—	ミガキ (縦位)	ミガキ (縦位)		内面黒色処理	71.5
43	13A085	土師器	杯	HS106	埋土下層	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい,黄橙	(16.9)	<5.3>	—	ミガキ (縦位)	ミガキ (上 縦位 下 縦位)		内面黒色処理	34.9
44	13A045	土師器	杯	HS106	検出面	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい,黄橙	(16.6)	<3.5>	—	ヨコナデ・ハラケズリ (縦位)	ハラケズリ	ハラケズリ	内面黒色処理	46.8
45	13A037	須恵器	杯	HS106	埋土上層	口縁部～底部	10YR8/3 浅黄橙	17.1	5.5	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラ切り	須恵器	246.3
46	13A021	土師器	甕	HS106	埋土上層	口縁部～底部	10YR8/2 灰黄褐	—	<7.5>	5.6	ヨコナデ・ハラナデ	ハラナデ (縦位)	ハラナデ (縦位)		125.7
47	13A049	土師器	高杯	HS106	埋土上層	胴部～底部	10YR7/3 にぶい,黄橙	—	6.15	<8.0>	ハケメ (縦位) ミガキ (縦位) ハラケズリ (縦位)	ミガキ		内面黒色処理	98.8
81	13A043	須恵器	杯	HS107	カマド	口縁部～底部	5Y6/2 灰オリーブ	<14.0>	3.9	<6.4>	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕	須恵器	32.1
82	13A020	土師器	甕	HS107	埋土下層	口縁部～底部	2.5Y7/4 浅黄	(11.6)	9.7	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		116.1
83	13A017	土師器	甕	HS107	床面	口縁部～底部	10YR6/2 灰黄褐	(10.3)	10.3	5.7	口：ヨコナデ 胴：ハラナデか (磨減)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデか (磨減)			177.4
84-1	13A022-1	土師器	甕	HS107	埋土上層	口縁部～胴部	2.5Y7/4 浅黄	<10.4>	5.9	—	回転ナデ				25.1
84-2	13A022-2	土師器	甕	HS107	埋土上層	胴部～底部	2.5Y7/4 浅黄	—	4.5	<5.6>	回転ナデ		糸切痕		34.7
85	13A044	土師器	杯	HS107	埋土下層	胴部下位～底部	2.5Y8/2 灰白	—	<2.55>	6.0	磨減	磨減	ハラ切り	内面黒色処理	69.8
86	13A082	土師器	甕	HS107	埋土下層	口縁部～胴部	10YR7/4 にぶい,黄橙	(19.5)	<9.8>	—	口：ヨコナデ 胴：ハラケズリ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)			87.2
87	13A081	土師器	甕	HS107	床面から貼床	口縁部～胴部	7.5YR6/6 明黄褐	(19.6)	<6.5>	—	ロクロナデ	ハラナデ (縦位)			92.1
88	13A083	土師器	甕	HS107	埋土上層	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい,橙	<21.2>	(7.8)	—	口：ロクロナデ 胴：ハラケズリ (縦位)	ロクロナデ?			88.1
89	13A008	土師器	甕	HS107	床面	口縁部～胴部	2.5YR4/6 赤褐	(22.6)	23.0	—	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)			998
90	13A078	土師器	甕	HS107	SK4埋土	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい,黄橙	<18.4>	(11.9)	—	ロクロナデ	ロクロナデ			72.1
91	13A005	土師器	甕	HS107	床面	口縁部～底部	7.5YR2/3 黒褐	22.6	32.2	9.0	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)			1,722.60
92	13A006	土師器	甕	HS107	床面	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい,黄橙	20.9	34.5	(10.2)	ロクロナデ →ハラケズリ (縦位)	ロクロナデ	ハラナデ		1,355
93	13A098	土師器	甕	HS108	埋土	胴部	2.5Y8/3 淡黄	—	<15.6>	—	ハケメ (縦位) →ヨコナデ ハケメ (縦位)	ハラナデ (縦位)			191.2
95	13A018	土師器	甕	HS108	埋土下層	胴部～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<13.5>	7.3	ハケメ (縦位)	ハラナデ (縦位)			587.1
96	13A091	土師器	杯	HS110	カマド	口縁部～胴部	2.5Y7/4 浅黄	15.5	<6.45>	—	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)			17

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
97	13A015	土師器	甕	HSI10	カマド～煙道	胴部～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<13.4>	68	ハケメ (縦位)	ハラナデ (縦位)			4355
98	13A009	土師器	甕	HSI10	カマド支脚	口縁部～底部	25YR8/3 淡黄	(18.8)	22.7	68	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	木葉痕		783
99	13A038	土師器	杯	HSK17	床面	口縁部～底部	7.5YR7/4 にぶい橙	(16.0)	5.1	80	ハラケズリ (横位)	ミガキ (上 縦位) 下 縦位	ハラケズリ (横位)	内面黒色処理	262.2
100	13A095	土師器	杯	HSK17	埋土下層	口縁部～底部	10YR7/2 にぶい黄橙	(14.7)	<3.0>	—	ヨコナデ・ハラケズリ	ミガキ (横位)		内面黒色処理	16.4
101	13A040	土師器	杯	HSK17	埋土上層	口縁部～底部	2.5YR8/2 灰白	<15.6>	4.5	—	ヨコナデ・ハラケズリ (横位)	ミガキ (横位)	ハラケズリ	内面黒色処理	1236
102	13A019	土師器	甕	HSK17	埋土下層	口縁部	2.5YR7/2 灰黄	(15.8)	<4.5>	—	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	口：ハケメ (横位)			66.2
103	13A016-1	土師器	甕	HSK17	埋土上層	口縁部～胴部	10YR5/3 にぶい黄褐	(8.25)	(12.4)	—	口：ハケメ (縦位) →ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	口：ハケメ (斜位) 胴：ハケメ (横位)			206.5
108	13A058	土師器	杯	ISI01	埋土一拵	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(14.4)	4.6	(8.4)	ミガキ (横位)	ミガキ (横位)	ハケメ	内面黒色処理	63.1
113	13A056	土師器	杯	ISI02	埋土一拵	胴部上位～底部	N2/1 黒	—	<4.3>	4.5	ヨコナデ・ミガキ (マメツ)	ミガキ (横位)		内外面黒色処理	127.6
114	13A055	土師器	杯	ISI02	埋土一拵	口縁部～底部	2.5Y6/3 にぶい黄	<17.0>	5.15	—	ヨコナデ・ハラケズリ	ミガキ (斜位)	ハラケズリ	内面黒色処理	138.1
115	13A024	土師器	甕	ISI02	埋土一拵	口縁部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	(11.9)	20.8	(6.2)	口：ヨコナデ 頸：ハラケズリ (縦位) 胴：ハラケズリ (横位)	口：ヨコナデ 首：ハケメ (縦位) 胴：ハラケズリ (横位)	ハラケズリ	高台貼り付け	397.7
117	13A026	土師器	甕	ISI03	埋土一拵	胴部下位～底部	10YR6/6 明黄褐	—	<4.75>	6.1	ハラナデ (縦位)	ハケメ～ハラナデ (横位～斜位)	ハラナデ		1082
118	13A025	土師器	甕	ISI04	埋土一拵	口縁部～底部	10YR5/4 黄褐	(8.3)	6.5	(3.5)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (斜位～横位) ハラケズリ (斜位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (斜位)	ハラナデ		53.4
120	13A059	土師器	杯	ISI05	埋土一拵	胴部～底部	2.5YR8/3 淡黄	—	<1.9>	(7.0)	ロクロナデ		糸切痕		48.4
121	13A057	土師器	杯	ISI06	埋土一拵	口縁部～底部	10YR8/3 浅黄橙	(13.9)	<3.5>	—	ヨコナデ・ハラケズリ	ミガキ (上 縦位) 下 縦位		内面黒色処理	53.2
122	13A054	土師器	杯	ISI07	埋土一拵	胴部上位～底部	10YR6/3 にぶい黄橙	(13.3)	3.45	5.5	ヨコナデ・ミガキ?・ハラケズリ (横位)	ミガキ (横位)	ハラナデ	内面黒色処理	115.9
124	12A076	土師器	杯	JSI02	埋土一拵	口縁部～胴部	2.5YR8/2 灰白	(13.5)	<3.3>	—	ヨコナデ→マメツ	マメツ			23.4
125	12A005	土師器	杯	KS101	埋土一拵	口縁部～底部	5YR6/6 橙	(12.1)	3.9	—	ヨコナデ→ハラケズリ (横位)	ミガキ (マメツ)		内面黒色処理	72.48
126	12A009	土師器	杯	KS101	埋土一拵	口縁部～底部	10YR8/4 浅黄橙	—	<3.1>	丸底	ハラケズリ	ミガキ (横位)		内面黒色処理	79.2
127	12A089	土師器	杯	KS101	埋土一拵	口縁部～胴部下位	10YR8/2 灰白	(13.0)	<4.1>	—	ヨコナデ→ハラケズリ・ハケメ	マメツ (ミガキ)		黒色処理なし	38.67
128	12A092	土師器	杯	KS101	埋土一拵	胴部～底部	10YR1.7/1 黒	—	<2.2>	(7.6)	ヨコナデ→ハラケズリ (横位)	ミガキ		内外面ともに黒色処理か?	25.64
129	12A010	土師器	甕	KS101	埋土一拵	底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<3.0>	(11.6)	指頭痕?			内面黒色処理風に炭化	134.19
130	12A039	土師器	甕	KS101	埋土一拵	胴部	10YR7/4 にぶい黄橙	—	<16.2>	—	ヨコナデ→ハケメ (縦位)	ヨコナデ→ハケメ (横位)			326.2
131	12A040	土師器	甕	KS101	埋土一拵	口縁部～胴部	10YR8/2 灰白	21.4	<24.0>	—	ヨコナデ→ハケメ (縦位)	ヨコナデ→ハケメ (横位)			841.22
132	12A043	土師器	甕	KS101	埋土一拵	胴部上位～底部	10YR8/3 浅黄橙	(19.2)	29.9	8.1	ハケメ (縦位) →ヨコナデ→ハケメ (縦位・斜位)	ヨコナデ→ハケメ (横位)	ナデ		1386.64
133	12A045	土師器	甕	KS101	埋土一拵	胴部上位～底部	10YR8/4 浅黄橙	—	<15.5>	8.1	ハラケズリ (縦位) ?	ハケメ (横位) →ハラナデ (横位)	ナデ		520.07
134	12A046	土師器	甕	KS101	埋土一拵	胴部上位～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<11.4>	8.1	ハラナデ (縦位)	ハケメ (横位)	ナデ		297.85
135	12A057	土師器	甕	KS101	埋土一拵	口縁部～胴部	10YR8/3 浅黄橙	(19.0)	<16.0>	—	ハケメヨコナデ→ハケメ (縦位)	ハケメヨコナデ→ハケメ (横位)			282.15
136	12A061	土師器	甕	KS101	埋土一拵	口縁部～胴部	10YR8/2 灰白	(20.2)	<17.7>	—	ヨコナデ→ハケメ (縦位)	ヨコナデ→ハケメ (横位)			218.16
137	12A062	土師器	甕	KS101	埋土一拵	口縁部～胴部	5YR6/4 にぶい橙	(15.3)	<13.0>	—	ヨコナデ→ハケメ (縦位)	ヨコナデ→ハケメ (横位)			248.05

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
138	12A083	土師器	甕	KS101	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR7/4 にぶい橙	(20.2)	<9.8>	—	ハケム (縦位)・ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ハケム (縦位・斜位)			93.95
139	12A090	土師器	甕	KS101	埋土一括	口縁部～胴部上位	2.5YR6/4 にぶい橙	(12.7)	<7.2>	—	ヨコナデ→マメツ (ヘラナナデ?ヘラケズリ?)	ヨコナデ→ハケム (縦位)			61.84
140	12A084	土師器	甕	KS101	埋土一括	口縁部	7.5YR8/4 浅黄橙	(22.2)	<3.0>	—	ハケム・ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ			92.91
141	12A085	土師器	壺	KS101	埋土一括	胴部～底部	10YR8/2 灰白	—	<3.8>	(8.0)	マメツ (ヘラナナデ)	(剥落)	スノコ裏?		143.06
142	12A093	土師器	甕	KS101	埋土一括	口縁部～胴部上位	10YR8/3 浅黄橙	(17.2)	<6.2>	—	ヨコナデ→マメツ (ハケム縦位)	ハケム・ヨコナデ→ハケム (縦位)			52.21
146	12A013	土師器	杯	KS102	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	12.5	4.4	—	ヨコナデ→ヘラケズリ (縦位)	ミガキ (縦位→縦位)		内面黒色処理	141.89
147	12A091	土師器	鉢	KS102	埋土一括	胴部～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<5.2>	(10.8)					21.99
148	12A088	土師器	甕	KS102	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR7/4 にぶい橙	(13.4)	<7.1>	—	ヨコナデ→ヘラナナデ or ヘラケズリ	ヨコナデ→ハケム (縦位・斜位)			66.02
149	12A086	土師器	甕	KS102	埋土一括	底部	10YR7/4 にぶい黄橙	—	<1.6>	(7.7)	マメツ (ハケム縦位)	ハケム (縦位)	マメツ (ナデ?)		72.52
150	12A042	土師器	甕	KS102	埋土一括	胴部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	—	<32.0>	7.8	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ナデ		1525.07
153	12A006	土師器	杯	KS103	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	13.4	4.1	—	口:ヨコナデ胴:ミガキ (横位)→ヘラケズリ (横位)	ミガキ (縦位)	ヘラケズリ (縦位)	内面黒色処理	169.35
154	12A007	土師器	杯	KS103	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	18.1	4.5	—	ヨコナデ→ヘラケズリ	ミガキ (縦位→縦位)		内面黒色処理	294.14
155	12A012	土師器	碗	KS103	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR8/1 灰白	(12.2)	6.6	(7.2)	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ミガキ (縦位→縦位)	高台貼付	内面黒色処理	138.29
156	12A063	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR6/3 にぶい褐	(15.0)	<11.0>	—	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ヘラナナデ (縦位)			148.86
157	12A008	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y7/3 浅黄	—	<7.2>	7.5	ハケム (縦位)	ハケム (横)			129.81
158	12A058	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部	10YR8/2 灰白	(17.2)	<20.1>	—	ヨコナデ→マメツ (ハケム縦位)	ヨコナデ→ヘラナナデ (縦位)			366.52
159	12A082-1	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部	7.5YR7/6 橙	(13.2)	<12.0>	—	ヨコナデ→ヘラケズリ (縦位)	ヨコナデ→ハケム (縦位)			80.7
160	12A060	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部上位	10YR7/3 にぶい黄橙	(17.5)	<13.5>	—	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ハケム (縦位)			145.05
161	12A064	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR8/4 浅黄橙	(14.8)	<10.2>	—	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ハケム(縦位)→ヘラナナデ(縦位)			143.71
162	12A059	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR7/3 にぶい橙	(16.2)	<14.6>	—	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ヘラナナデ (縦位)			229.55
163	12A055	土師器	甕	KS103	埋土一括	口縁部～胴部	7.5YR7/2 明褐灰	(18.6)	<26.0>	—	ヨコナデ→ハケム (縦位)	ヨコナデ→ハケム (縦位)			273.8
164	12A087	土師器	ミョウ土器	KS103	埋土一括	胴部～底部	10YR7/2 にぶい黄橙	—	<2.4>	(2.8)	ハケム・ヘラナナデ	ヘラナナデ			17.71
165	12A048	土師器	壺	KS103	埋土一括	胴部上位～底部	5YR4/4 にぶい赤褐	—	<18.5>	7.6	ヨコナデ→ハケム (縦位)→マメツ (ハケム(斜位))	ハケム (縦位→縦位)	ナデ		651.71
167	12A099	土師器	杯	LS101	埋土一括	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	(14.0)	<4.6>	—	ヘラケズリ (横位)	ミガキ (縦位)		黒色処理なし	28.96
168	12A015	土師器	甕	LS101	埋土一括	底部	2.5Y8/3 淡黄	—	<4.3>	9.3	ハケム (斜位→縦位)	ハケム (縦位)→ナデ	マメツ (ナデ)		198.51
169	12A047	土師器	甕	LS101	埋土一括	胴部～底部	7.5YR6/4 にぶい橙	—	<11.0>	7.0	ハケム (縦位)→ヘラケズリ (縦位)	ハケム (縦位)	木葉痕		155.98
171	12A016	土師器	杯	LS103	ピット内	口縁部～底部	7.5YR7/6 橙	(15.0)	6.0	5.5	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ミガキ (縦位→放射状)	糸切痕	内面黒色処理 外面に墨書	223.74
172	12A095	土師器	杯	LS103	埋土上層	口縁部～胴部	10YR8/4 浅黄橙	(14.6)	<5.1>	—	ロクロナデ	ミガキ		内面黒色処理	18.1
173	12A094	土師器	杯	LS103	貯蔵穴 (SKL) 内	口縁部～胴部	10YR8/4 浅黄橙	(14.4)	<4.5>	—	ロクロナデ	ミガキ		内面黒色処理	18.57
174	12A096	土師器	杯	LS103	貯蔵穴 (SKL) 内	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい橙	(16.6)	<4.6>	—	ロクロナデ	ミガキ (縦位→縦位)		内面黒色処理	29.93



掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
175	12A097	土師器	甕	LS103	貯蔵穴 (SK1) 内	底部	7.5YR8/4 浅黄橙	—	<1.2>	6.0	ロクロナデ	マメツ (ヘラナデ)		杯の可能性も	63.88
176	12A017	土師器	甕	LS103	埋土～貯蔵穴 (SK1) 内	口縁部	7.5YR4/3 褐	(16.4)	<6.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			108.19
177	12A018	須恵器	杯	LS103	埋土～貯蔵穴 (SK1) 内	口縁部～底部	5Y6/1 白	(14.0)	5.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		133.68
178	12A019	須恵器	甕	LS103	埋土～貯蔵穴 (SK1) 内	口縁～胴部上位	5PB6/1 青灰	(22.3)	<11.6>	—	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ→あて具痕 (平行文)			335.2
179	12A073	土師器	杯	MS101	埋土一括	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	(14.8)	<4.6>	—	マメツ (ミガキ横位) →ヘラケズリ (横位)	マメツ (ミガキ)		内面黒色処理 外面も?	62
181	13A099	土師器	杯	NS102	埋土一括	口縁部～胴部	10YR5/6 黄褐	(14.0)	<3.8>	—	ロクロナデ	ミガキ (マメツ)		内面黒色処理	13
182	13A100	土師器	杯	NS102	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y4/1 黄灰	(15.0)	<2.6>	—	ミガキ (横位)	ミガキ (横位)	ヘラケズリ	内面黒色処理	23.3
183	13C009	灰釉陶器	皿	NS102	東豊際周溝	口縁部～底部	2.5Y7/1 灰白	<16.0>	2.25	<7.1>	ロクロナデ	ロクロナデ		尾張カ	42.2
186	13A061	土師器	杯	NS103	埋土一括	胴部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	—	<2.3>	5.3	ヘラケズリ (横位)	ミガキ (横位)	糸切痕・ヘラケズリ	内面黒色処理	53.8
187	13A064	土師器	杯	NS103	埋土一括	胴部～底部	5YR6/6 橙	—	<1.55>	(5.2)	マメツ	ミガキ (横位)		内面黒色処理	11.7
188	13A063	土師器	杯	NS103	埋土一括	胴部～底部	10YR8/3 淡黄	—	<1.4>	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕	須恵器	7.9
190	13A101	土師器	杯	NS104	埋土西側	口縁部～胴部	2.5Y7/4 浅黄	(15.8)	<3.6>	—	ヨコナデ (マメツ)・ヘラケズリ? (マメツ)	ミガキ			8.8
192	13A107	土師器	甕	OS102	床面	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい橙	(19.8)	<12.8>	—	口：ハケメ (縦位) →ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	ヘラナデ (横位)			101.3
193	13A027	土師器	甕	OS102	埋土下層	口縁部～底部	10YR8/3 浅黄橙	(19.2)	21.0	7.6	口：ハケメ (縦位) →ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位～斜位) ハケメ (横位)	ヘラナデ (横位)	ヘラナデ		1,119.60
194	13A028	土師器	甕	OS102	床面	胴部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	—	<16.3>	7.4	ヨコナデ・ハケメ (縦位)	ヘラナデ (横位)			77.5
195	13A102	土師器	甕	OS102	床面	胴部	2.5Y7/3 浅黄	—	<8.7>	—	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (斜位～横位)	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (横位)			187.3
200	13A108	土師器	甕	OS103	2層	口縁部～胴部	10YR8/4 浅黄橙	(19.8)	<6.3>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			36.2
201	13A109	土師器	甕	OS103	1層	口縁部～胴部	7.5YR6/6 橙	(23.1)	<4.5>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			26.9
203	13A067	土師器	杯	OS104	埋土一括	胴部～底部	10YR6/4 にぶい黄橙	—	<1.2>	(5.4)		ミガキ	ヘラケズリ	内面黒色処理	51.3
204	13A068	土師器	杯	OS104	2層	胴部～底部	10YR8/3 浅黄橙	—	<2.1>	(8.0)	ヘラケズリ (横位)		ヘラナデ		27.3
205	13A118	須恵器	甕	OS104	2層	口縁部～胴部	5Y6/1 灰	(20.8)	<4.45>	—	ロクロナデ	ロクロナデ		須恵器	69.8
210	12A024	土師器	杯	QS101	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR7/3 にぶい橙	—	4.0	8.0	ロクロナデ	ミガキ (横位)	静止糸切り	内面黒色処理	74.25
211	12A053	土師器	甕	QS101	埋土一括	胴部～底部	10YR8/2 灰白	—	<9.7>	6.2	ハケメ (縦位) →ヘラナデ (縦位)	ハケメ (縦位・斜位)	ナデ		358.53
212	12A102	須恵器	杯	QS101	埋土一括	底部	10YR7/1 灰白	—	<1.9>	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		59.24
213	12A103	須恵器	杯	QS101	埋土一括	底部	7.5YR6/1 褐灰	—	<1.5>	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	外面に火たき痕が残る	36.76
218	12A031	土師器	甕	US101	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	(17.0)	9.2	(8.4)	ヨコナデ→ミガキ (orヘラナデ)	ヨコナデ→ミガキ (orヘラナデ)	ミガキ (orヘラナデ)	内外面とも黒色処理	125.13
219	12A050	土師器	杯	US101	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	14.0	4.0	5.2	ミガキ (横位) →ヘラケズリ・ヘラナデ (横位)	ミガキ (横位)	ヘラナデ	黒色処理なし	125.3
220	12A114	須恵器	杯	US101	埋土一括	底部	2.5Y7/1 灰白	—	<1.0>	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		21.13

掲載No	登録No	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
221	12A049	土師器	甕	US101	埋土一括	胴部	7.5YR8/3 浅黄橙	—	<9.8>	7.8	ハケメ (縦位)・ミガキ (縦位)	ハケメ	ハラケズリ		243.56
222	12A112	土師器	甕	US102	埋土一括	口縁部	7.5YR8/3 浅黄橙	(18.0)	<5.2>	—	ヨコナデ→ハラナデ (縦位)	ヨコナデ→ハラナデ (縦位)			129.81
223	12A111	土師器	甕	US102	埋土一括	胴部	10YR6/2 灰黄褐	—	<8.1>	—	ハラナデ	ハラナデ			72.91
224	12A051	土師器	甕	US102	埋土一括	胴部～底部	5YR6/3 にぶい橙	—	<10.7>	7.8	マメツ (ハラナデ)	マメツ (ハラナデ)	ナデ		344.17
226	12A034	土師器	杯	XS101	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(14.1)	4.5	(7.0)	ロクロナデ→回転ハラケズリ (縦位)	ミガキ (縦位→縦・斜位)	糸切→ハラケズリ		94.55
227	13A069	土師器	杯	YS101	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/4 黄橙	(15.0)	5.65	—	ヨコナデ (縦位)	ミガキ (縦位)	ハラケズリ	黒色処理なし	213.6
228	13A070	土師器	杯	YS101	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR6/4 にぶい橙	15.4	5.4	—	ヨコナデ	ナデ?・ミガキ (縦位)	ハケメ	黒色処理なし	223.2
229	13A071	土師器	杯	YS101	埋土一括	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(12.2)	3.6	—	ヨコナデ・ハケメ (斜位)	ミガキ (上 横位 内底 縦位)	ハケメ	内面黒色処理	27.5
230	13A032	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部～底部	2.5YR3/4 暗赤褐	(16.0)	15.9	7.0	口：ヨコナデ 胴：上位ハラナデ (縦位) 下位ハラケズリ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	ハラケズリ・ハラナデ		613.4
231	13A033	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部～底部	5YR7/6 橙	—	<17.6>	6.5	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ→ハラケズリ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	木葉痕		529.7
232	13A035	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部	10YR7/6 明黄褐	13.7	<4.7>	—	ヨコナデ	ハラナデ (縦位)			171.4
233	13A113	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部～胴部	10YR6/4 にぶい黄橙	(18.5)	<7.2>	—	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)			90.7
234	13A031	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部～底部	5YR7/6 橙	(15.3)	17.1	(7.5)	口：ヨコナデ 胴：上位ハラナデ (縦位) 下位ハラケズリ (縦位)	ハラナデ (縦位)			580.5
235	13A030	土師器	甕	YS101	埋土一括	口縁部～底部	10YR5/4 黄褐	(18.4)	24.95	6.8	口：ヨコナデ 胴：ハラケズリ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	木葉痕		872.73
238	13A072	土師器	杯	ZS101	2層(褐)	口縁部～底部	N 暗灰3/	(18.0)	<7.0>	—	ヨコナデ・ハケメ (横位) → ハラケズリ (斜位)	ミガキ (上 横位 下 縦位)	ケズリ	内面黒色処理	156.7
239	13A115	土師器	杯	ZS101	埋土下層(褐)	口縁部～底部	5Y2/1 黒	(20.0)	<5.7>	—	口：ヨコナデ 胴：ハラケズリ (横位)	ミガキ (縦位)			54.4
240	13A073	土師器	杯	ZS101	埋土	胴部～底部	5YR5/6 明赤褐	—	<2.9>	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		50.7
241	13A114	土師器	甕	ZS101	埋土下層(褐)	口縁部～胴部	2.5Y4/6 オリーブ褐	(23.0)	<9.65>	—	口：ヨコナデ 胴：ハラナデ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)			93.4
242	13A112	土師器	甕	ZS101	埋土下層(褐)	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	(20.3)	<18.8>	—	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)	口：ヨコナデ 胴：ハケメ (縦位)			367.4
243	13A074	土師器	杯	ZS101	埋土1層	胴部～底部	2.5Y8/3 淡黄	—	<1.5>	9.0					106.1
246	12A004	土師器	杯	GSD01	埋土一括 (火山灰より上)	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(15.3)	4.3	6	ロクロナデ	ミガキ (縦位→縦位)	糸切痕	内面黒色処理	119.65
247	12A032	土師器	杯	VSD01	埋土上層 (火山灰より上)	口縁部～胴部	10YR7/2 にぶい黄橙	(13.3)	5.2	(5.4)	ロクロナデ	剥落しているため不明		内面黒色処理	37.58
248	12A029	土師器	杯	VSD01	埋土上層 (火山灰より上)	口縁部～胴部	10YR8/3 浅黄橙	(14.6)	3.3	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		54.65
249	12A027	土師器	杯	QSD03	埋土上層	口縁部～底部	10YR8/2 灰白	—	<2.6>	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		64.17
250	12A002	土師器	杯	FSD01	埋土上層 (火山灰より上)	口縁部～底部	7.5YR8/3 浅黄橙	11.6	3.1	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		83.48
251	12A072	土師器	杯	GSD01	底面付近	口縁部～底部	5Y8/1 灰白	(14.1)	<3.9>	(7.8)	マメツ (ロクロナデ)	マメツ			22.92
252	12A033	土師器	杯	VSD01	埋土一括	口縁部～底部	5YR7/3 にぶい黄橙	(16.0)	6.1	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切→ハラケズリ		80.45

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
253	12A075	土師器	高杯	GSD01	埋土下層 (篠層)	脚部	7.5YR7/6 橙	—	<3.2>	(7.45)	ナデ			一部内面に黒色処理	72.23
254	12A001	土師器	高台杯	FSD01	埋土上層 (火山灰より上)	口縁部～底部	5YR6/6 橙	(15.8)	6.35	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		196.13
255	12A052	土師器	甕	VSD01	埋土上層	口縁部～底部	10YR8/1 灰白	(14.8)	14.9	(8.0)	ヨコナデ→ヘラナデ (縦位)	ヨコナデ→ヘラナデ (斜位)	木葉痕		420.65
256	12A117	土師器	甕	VSD01	埋土一括	口縁部	2.5YR6/6 橙	(20.6)	<4.1>	—	ヨコナデ→ヘラケズリ (縦位)	ヨコナデ→ヘラナデ (横位)			60.47
257	12A074	須恵器	甕	GSD01	埋土下層 (底面)	口縁部	10YR3/2 黒褐	(22.9)	<4.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			59.16
258	12A066	須恵器	甕	VSD01	埋土上層 (火山灰より上)	口縁部	5R7/1 明褐灰	(36.9)	<9.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			302.8
259	12A065	須恵器	甕	VSD01	埋土下層	頸部	7.5Y7/1 灰白	—	<8.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ→同心凹当て具痕			639.22
265	12A106	縄文	鉢類	QSD02	埋土下層	頸部	10YR5/3 にぶい黄褐	—	—	—	ヘラによる刺突				5.23
272	12A070	土師器	杯	FP173	埋土一括	口縁部	10YR8/2 灰白	(15.1)	<4.1>	—	ヨコナデ→ヘラケズリ (ハケメ?)	ミガキ (横位)		内面黒色処理	25.06
273	12A079	須恵器	杯	MP116	埋土一括	底部	N5/ 灰	—	<0.7>	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		14.35
278	12A120	須恵器	杯	FSD07	埋土一括	口縁部～胴部	2.5Y6/1 黄灰	(14.0)	<4.25>	—	ロクロナデ	ロクロナデ		須恵器	13.07
279	12A011	土師器	甕	KSD04	埋土上層	底部	7.5YR4/4 褐	—	<2.3>	(7.4)	マメツ (ヘラナデ)	マメツ			56.97
280	12A098	須恵器	杯	LSD05	埋土一括	口縁部～胴部	10YR8/1 灰白	(14.8)	<5.0>	—	ロクロナデ	ロクロナデ			22.3
281	12A030	須恵器	杯	MSD05	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y8/2 灰白	(13.6)	4.1	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		57.73
282	12A022	土師器	杯	MSD06	埋土一括	口縁部～底部	10YR8/6 黄橙	1.32	4.3	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		117.61
283	12A121	土師器	甕	NSD01	埋土下層	胴部	10YR8/4 浅黄橙	—	—	—	—	—	タタキ		24.7
284	12A014	土師器	甕	LSD07	埋土一括	底部	10YR7/2 にぶい黄橙	—	<3.7>	(7.3)	ハケメ (縦位)	ハケメ (横位)	ナデ		109.61
285	13A066	土師器	杯	OSD05	2層	口縁部～底部	10YR7/2 にぶい黄橙	<17.4>	(3.9)	—	ヨコナデ・ハケメ (?)	ミガキ (横位)			58
286	13A065	土師器	杯	OSD05	2層	口縁部～底部	2.5Y7/3 浅黄	16.5	5.25	—	ヨコナデ・ヘラケズリ (縦位)	ミガキ (上 横位 下 縦位)	ヘラケズリ	内面黒色処理	326.2
287	13A125	土師器	鉢	OSD05	2層	口縁部～胴部	10YR6/4 にぶい黄橙	(13.6)	<7.5>	—	ヨコナデ 胴：ヘラケズリ (縦位)	ヨコナデ 脚：ヘラナデ (横位)			44.3
288	12A105	かわらけ	大皿	QSD02	埋土一括	口縁部～胴部	7.5YR8/2 灰白	(15.1)	<2.8>	—	ヨコナデ→エビオサエ	ヨコナデ		手づくね 大皿	28
289	13A053	土師器	高杯	HSD05	火山灰上	底部	10YR8/1 灰白	—	<3.4>	—		ミガキ			59.7
290	12A109	かわらけ	小皿	QSD02	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y8/3 淡黄	(10.0)	<1.9>	—	ヨコナデ→指頭痕			手づくね 小皿	12.38
291	12A104	かわらけ	小皿	QSD02	埋土一括	口縁部～胴部	10YR6/2 灰黄褐	(9.7)	<2.7>	—	ヨコナデ→指頭痕			手づくね 小皿	8.64
292	12A108	かわらけ	小皿	QSD02	埋土一括	口縁部～底部	5YR7/4 にぶい橙	(8.8)	<2.0>	—	ヨコナデ→エビオサエ	ヨコナデ		手づくね 小皿	20.32
293	12A107	かわらけ	大皿	QSD02	埋土一括	口縁部～底部	10YR8/2 灰白	(16.0)	<1.9>	—	ヨコナデ→スノコ痕		指頭痕	手づくね 大皿	38.86
294	12A026	土師器	高杯	QSD02	埋土一括	脚部	2.5YR8/3 淡黄	—	<6.6>	—	ハケメ (もしくはヘラナデ) →ヨコナデ			内面にしぼり痕	153.14
295	12A028	須恵器	壺類	QSD02	埋土一括	底部	5P3/1 暗紫灰	—	<3.8>	(13.2)					190.85
296	12A113	土師器	甕	USD07	埋土一括	底部	10YR7/2 にぶい黄橙	—	<1.4>	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切痕		29.37
297	12A115	土師器	甕	USD07	埋土一括	底部	7.5YR6/4 にぶい橙	—	<2.9>	(6.5)	ヘラナデ (縦位)	ハケメ (横位)	ナデ?		23.07
298	12A116	須恵器	高台杯	VSD05	埋土一括	底部	7.5Y6/1 灰	—	<1.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	貼付高台	31.26
299	13A121	ミニチュア	甕形	HSD08	埋土一括	底部	10YR6/4 にぶい黄橙	—	1.8	(3.0)	ヘラナデ	粘土ひも痕	ヘラナデ		13.2

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
379	12C110	線輪陶器	碗	VSD05	埋土下層 区画2	底部	10YR6/2 オリーブ灰	<1.25>	(7.9)	—	—	高台貼付	K-90号窯式	8.56	
415	12A071	縄文	鉢	FSK01	埋土一括	胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	—	—	—	貝殻文	—	—	8.86	
416	13A051	土師器	高杯	HSK04	埋土 (バルト) 一括	底部	10YR6/3 にぶい黄橙	—	<3>	—	ハケメ (縦位)	ミガキ	内面黒色処理	81.6	
417	13A093	土師器	杯	HSK07	埋土一括	口縁部～底部	10YR2/1 黒	(13.2)	<30>	—	ヨコナデ	ミガキ (縦位)	ハラケズリ (縦位)	18.2	
418	13A084	土師器	甕	HSK07	埋土上層	口縁部～胴部	10YR7/3 にぶい黄橙	(16.0)	<9.1>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	46.6	
419	13A013	土師器	甕	HSK07	埋土一括	口縁部～胴部上位	7.5YR7/4 にぶい橙	19.6	<12.0>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケメ (縦位)→横位)	—	—	61.9	
420	13A011-2	土師器	甕	HSK10	埋土下層 (縄)	底部	7.5YR7/4 にぶい橙	—	<2.1>	(7.4)	口：ハケメ (縦位) 胴：ハラケメ (縦位)	—	—	506.2	
421	13A079	土師器	甕	HSK21	埋土一括	口縁部～胴部	10YR6/6 明黄褐	19.4	<12.4>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	66.5	
422	13A089	土師器	甕	HSK21	埋土一括	胴部	10YR8/3 浅黄橙	—	<6.5>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケメ (縦位)	—	—	51.3	
426	12A080	土師器	杯	MSK05	埋土一括	口縁部	10YR8/3 浅黄橙	(11.9)	<4.4>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケメ (縦位)	—	内面黒色処理	23.14	
427	12A020	土師器	杯	MSK05	埋土一括	口縁部～底部	10YR8/4 浅黄橙	12.2	3.7	4.5	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	糸切痕	64.84	
428	12A021	土師器	杯	MSK05	埋土一括	口縁部	10YR8/4 浅黄橙	(13.9)	<30>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	27.5	
429	12A119	土師器	杯	MSK15	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR7/6 橙	(14.8)	4.45	(5.0)	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	糸切痕	22.9	
430	12A081	土師器	杯	MSK15	埋土一括	口縁部	10YR7/4 にぶい黄橙	(16.0)	<40>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	21.91	
431	12A023	土師器	杯	MSK15	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR7/6 橙	13.3	4.5	4.9	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	糸切痕	131.2	
432	12A118	土師器	杯	MSK15	埋土一括	口縁部	10YR7/4 にぶい黄橙	(13.0)	<28>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	20.9	
433	12A077	須恵器	壺	MSK14	埋土一括	底部	N7/ 灰白	—	<1.5>	(10.0)	回転ハラケズリ	ナデ	ハラナデ	66.42	
434	13A062	土師器	甕	NSK01	埋土一括	底部	10YR3/1 黒褐	—	1.3	<6.4>	マメツ	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	糸切痕	30.3	
435	13A110	土師器	ミナヅチ?	OSK01	埋土一括	口縁部～胴部	10YR8/3 浅黄橙	(5.4)	<2.7>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	14.9	
436	13A116	須恵器	坏	OSK01	埋土一括	口縁部～底部	2.5Y7/2 灰黄	(14.2)	<4.5>	(6.6)	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	ハラケズリ	16.1	
437	13A105-1	土師器	甕	OSK01	埋土一括	口縁部～胴部	10YR8/3 浅黄橙	(25.2)	<8.7>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラナデ (縦位)	—	—	61.9	
437	13A105-2	土師器	甕	OSK01	埋土一括	胴部	7.5YR8/6 浅黄橙	—	<17.8>	—	口：ヨコナデ・ハラケズリ (縦位)	—	—	105	
438	13A106	土師器	杯	OSK04	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR8/6 浅黄橙	(14.4)	<4.4>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケズリ (縦位)	—	糸切痕	33.8	
439	13A124	土師器	坏	OSK04	埋土一括	口縁部～胴部	10YR7/6 明黄褐	(15.0)	<40>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケズリ (縦位)	—	内面黒色処理	21.1	
440	13A029	土師器	甕	OSK04	埋土一括	胴部下位～底部	10YR6/4 にぶい黄橙	—	6.5	(8.2)	ハラケズリ (縦位)	—	ハラケズリ	152.5	
441	13A104	土師器	甕	OSK04	埋土一括	口縁部～胴部	10YR7/4 にぶい黄橙	(18.0)	<9.8>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケズリ (縦位)	—	—	98.1	
442	13A111	土師器	杯	OSK11	埋土一括	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい黄橙	(14.8)	<4.55>	—	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケズリ (縦位)	—	—	23.9	
443	13A103	土師器	甕	OSK11	埋土一括	口縁部～胴部	10YR8/4 淡黄	(21.8)	<15.9>	—	口：ヨコナデ・ハラケズリ (縦位)	—	—	247.5	
444	12A110	かわらけ	かわらけ	SSK01	埋土一括	口縁部～底部	7.5YR8/2 灰白	(12.4)	<2.5>	—	ヨコナデ→エビオサエ	—	手づくね 大皿	21.95	
446	13A034	土師器	甕	YSK03	埋土一括	胴部～底部	10YR8/4 浅黄	—	<15.6>	8.8	ハケメ (斜位～横位)	—	ハケメ	293.1	
467	13A060	土師器	杯	N 現道 F 区	検出面～ 漸移層	口縁部～底部	10YR7/3 にぶい黄橙	(13.4)	4.75	(5.4)	口：ヨコナデ (縦位) 胴：ハラケズリ (縦位)	—	糸切痕	24.9	

掲載 No.	登録No	種別	器種	出土遺構	層位	部位	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面調整	内面調整	底面調整	その他	重さ (g)
468	13A097	土師器	杯	E・H区	検出中	口縁部～胴部	10YR2/1 黒	(13.0)	<2.35>	—	ミガキ (横位)	ミガキ (横位)		内面黒色処理	123
469	12A101	かわらけ	かわらけ	P区	II層	口縁部～胴部	10YR7/2 にぶい黄澄	(14.0)	<2.5>	—	ヨコナテ→ユビオサエ	ヨコナテ			13.13
470	12A025	土師器	高杯	Q区北半	検出中	脚部	2.5Y8/2 灰白	—	<5.6>	—	マメツノヘラケズリ (縦位)			内面黒色処理	113.68
471	12A078	須恵器	壺類	M区	検出中	胴部	2.5Y6/1 黄灰	—	<3.2>	—		回転ナテ→ユビオサエ			43.92
472	12A068	縄文	鉢類	F区	検出中	胴部	10YR7/3 にぶい黄澄	—	—	—	撚糸 (地文)				11.68
473	13A119	縄文	鉢類	N区中央	漸移層	口縁部	7.5YR5/8 明褐	—	—	—	沈線文				39.3
474	12A100	縄文	鉢類	P区	II層	口縁部	10YR7/3 にぶい黄澄	—	—	—	竹管による刺突				11.68

第27表 陶磁器観察表

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	特徴など (数字)は復元値	産地	備考	重さ
184	12C027	陶器	甕	NSI02	西側最上層	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	33.04
214	12C002	陶器	鉢類	QSI01 QSE	埋土	底部	復元底径(13.2cm)	常滑	12世紀	142.42
245	12C014	陶器	甕	VSX01	埋土	胴	降灰釉剥落根	常滑	12世紀	17.72
260	12C007	陶器	鉢類	VSD01	埋土一括	底部	復元底径(12.2cm) 内面に降灰釉	常滑	12世紀	210.09
261	12C010	陶器	甕	SSD01	埋土最上部	胴部	押印(長格子文)	常滑	12世紀	116.7
262	12C103	陶器	大甕	VSD01ベルト	埋土上部	胴部	外面にタタキ痕(格子状)	須恵器系	12世紀	146.93
263	12C040	陶器	甕	VDS01	埋土一括	頸部	一部に降灰釉	常滑	12世紀	25.75
264	12C041	陶器	甕	VSD01ベルト	埋土上層	胴部	外面に薄い降灰釉(透明)	常滑	12世紀	23.78
270	12C092	陶器	大甕	USD13	埋土	胴部	外面にタタキ痕、内面に当て具痕	須恵器系	12世紀	73.18
271	12C093	陶器	大甕	USD15	埋土	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	186.04
274	12C095	陶器	大甕	UP040	埋土	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	30.22
300	12C100	陶器	大甕	JSD01	埋土	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	8.63
301	12C108	陶器	大甕	USD06	埋土一括	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	12.1
302	12C107	陶器	大甕	USD06	埋土一括	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	17.7
303	12C091	陶器	大甕	CSD02	埋土上部	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	104.75
304	12C094	陶器	大甕	USD06	埋土一括	胴部	外面にタタキ痕(平行条線)	須恵器系	12世紀	27.6
307	12C005	陶器	大甕	FSD08	埋土	口縁部	外面にタタキ痕(平行条線)	常滑	12世紀	33.01
308	12C112	白磁 (貿易陶磁)	碗	JSD01	埋土	胴部	内外面に白濁の釉	中国産	12世紀	8.32
309	12C025	陶器	甕	JDS01	埋土	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	49.53
310	12C024	陶器	鉢類	JSD01	埋土	胴部	内面に点状の降灰釉	常滑	12世紀	43.46
311	12C023	陶器	甕	JSD01	埋土	胴部	外面に点状の降灰釉	常滑	12世紀	39.34
312	12C071	陶器	甕	JSD01	遺物2	胴部	外面一部に降灰釉	渥美	12世紀	82.68
313	12C008	陶器	鉢類	JSD02	埋土	胴部	押印(格子文)	常滑	12世紀	151.69
314	12C001	陶器	鉢類	JSD03	埋土	底部	内面摩耗	常滑	12世紀	130.42
315	12C015	陶器	甕	QSD01	埋土	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	37.45
316	12C109	陶器	鉢類	QSD01	埋土	胴部	内面摩耗	渥美	12世紀	54.57
317	12C028	陶器	甕	QSD02	埋土下部	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	56.24
318	12C006	陶器	鉢類	QSD02	床面	口縁部	復元口径43.8cm、内外面に降灰釉(剥落)	常滑	12世紀	107.91
319	12C029	陶器	甕	QSD02	底面	胴部	外面上位に降灰釉、押印(格子文)	常滑	12世紀	283.39
320	12C030	陶器	甕	QSD02	底面	胴部	内面に点状の降灰釉、押印(格子文)	常滑	12世紀	128.06
321	12C075	陶器	甕	QSD02	埋土	胴部		渥美	12世紀	40.32
322	12C031	陶器	甕	QSD02	底面	胴部	外面に降灰釉、押印(平行条線)	常滑	12世紀	
323	12C032	陶器	甕	RSD01	埋土	胴部	外面に薄い降灰釉	常滑	12世紀	45.39
324	12C033	陶器	壺・瓶類	RSD01	埋土	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	59.37
325	12C003	陶器	鉢類	USD13	埋土上層	口縁部	復元口径17.8cm、内外面の一部に降灰釉	常滑	12世紀	25.67
326	12C012	陶器	壺・瓶類	USD013	埋土上層	頸部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	20.01
327	12C035	陶器	甕	USD16	埋土一括	胴部	押印(格子文)	常滑	12世紀	19.11
328	12C034	陶器	甕	USD16	埋土一括	胴部	押印(格子文)	常滑	12世紀	102.16
329	12C036	陶器	甕	USD16	埋土一括	胴部	外面に降灰釉、押印(格子文)	常滑	12世紀	69.67
330	12C037	陶器	甕	USD16	埋土一括	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	47.14
331	12C038	陶器	甕	USD16	釘1~2一括	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	23.2
332	12C077	陶器	広口壺	USD16	埋土	口縁部	復元口径34.4cm、内外面に降灰釉	渥美	12世紀	85.68
333	12C078	陶器	甕	USD16	釘1~2一括	胴部	押印(平行条線)	渥美	12世紀	47.43
334	12C076	陶器	甕	USD16	埋土	胴部	外面に降灰釉、押印(格子文)	渥美	12世紀	132.55
335	12C013	陶器	甕	VSD02	埋土	胴部	外面に降灰釉、押印(格子文)	常滑	12世紀	32.82
336	12C096	陶器	大甕	VSD02	埋土上部	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	21.92
337	12C058	陶器	壺・瓶類	VSD08	埋土	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	14.73
338	12C046	陶器	甕	VSD06	埋土上部	胴部	外面に降灰釉、押印(平行条線文)	常滑	12世紀	24.16
339	12C061	陶器	鉢	VSD06	埋土	底部	内面摩耗、高台あり	常滑	12世紀	147.83
340	12C042	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	内面に薄い降灰釉(透明)	常滑	12世紀	10.15
341	12C043	陶器	広口壺	VSD05	埋土上部	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	31.9
342	12C004	陶器	鉢類	VSD05 VSD03	下層	口縁~胴部	復元口径26.0cm、注口、スリ目あり	常滑	12世紀	209.71
343	12C044	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	60.16

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	特徴など (数字)は復元値	産地	備考	重さ
344	12C045	陶器	甕	VSD05	埋土上部	底部		常滑	12世紀	11
345	12C047	陶器	甕	VSD05	埋土上部	頸部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	17.55
346	12C048	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	23.49
347	12C049	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	外面に点状の降灰釉	常滑	12世紀	10.94
348	12C050	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	内面に点状の降灰釉	常滑	12世紀	26.82
349	12C052	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	19.48
350	12C053	陶器	壺・瓶類	VSD05	川底上層区画1	頸部	内外面に降灰釉	常滑	12世紀	17.07
351	12C055	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	胴部	外面にうすい降灰釉	常滑	12世紀	39.21
352	12C062	陶器	甕	VSD05	下層区画3	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	6.29
353	12C051	陶器	甕	VSD05	川底上層	胴部	内外面に点状の降灰釉	常滑	12世紀	52.19
354	12C056	陶器	甕	VSD05	下層区画2	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	21.14
355	12C060	陶器	壺・瓶類	VSD05	下層区画2	胴部	内面に降灰釉	常滑	12世紀	45.16
356	12C054	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	胴部	外面に降灰釉(剥落)	常滑	12世紀	16.32
357	12C057	陶器	壺・瓶類	VSD05	下層区画2	肩部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	9.24
358	12C059	陶器	壺・瓶類	VSD05	下層区画2	頸部	外面に降灰釉(一部剥落)	常滑	12世紀	36.47
359	12C063	陶器	甕	VSD05	下層区画3	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	13.49
360	12C064	陶器	甕	VSD05	下層区画3	底部	内面に降灰釉	常滑	12世紀	23.79
361	12C065	陶器	甕	VSD05	下層区画3	胴部		常滑	12世紀	25.43
362	12C066	陶器	鉢	VSD05	下層区画3	胴部	内面摩耗	常滑	12世紀	48.75
363	12C070	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	肩部		常滑	12世紀	18.04
364	12C080	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	押印(格子文)	渥美	12世紀	102.18
365	12C084	陶器	甕	VSD05	川底上層	胴部		渥美	12世紀	42.34
366	12C081	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	押印(長格子文)	渥美	12世紀	108.2
367	12C083	陶器	甕	VSD05	川底上層	胴部	押印(長格子文)	渥美	12世紀	113.91
368	12C086	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	胴部		渥美	12世紀	85.01
369	12C079	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	外面上位に降灰釉	渥美	12世紀	46.46
370	12C082	陶器	甕	VSD05	埋土上部	胴部	押印(格子文)	渥美	12世紀	70.53
371	12C085	陶器	甕	VSD05	川底上層区画1	胴部		渥美	12世紀	138.61
372	12C088	陶器	甕	VSD05	下層区画2	胴部	押印(格子文)	渥美	12世紀	102.08
373	12C087	陶器	広口壺	VSD05	川底上層区画1	胴部		渥美	12世紀	44.69
374	12C089	陶器	甕	VSD05	下層区画2	胴部	押印(格子文)	渥美	12世紀	38.34
375	12C090	陶器	甕	VSD05	下層区画2	胴部	外面に降灰痕	渥美	12世紀	72.63
376	12C102	陶器	碗	VSD05	埋土上部	口縁部		須恵器系	12世紀	14.5
377	12C105	陶器	大甕	VSD05	埋土上部	口縁～胴部	外面に降灰痕	須恵器系	12世紀	8.77
378	12C104	陶器	大甕	VSD05	埋土上部	胴部	外面にタタキ痕、内外面に降灰釉(透明)	須恵器系	12世紀	9.92
380	12C106	陶器	甕	VSD05	下層区画2	胴部	内面にスリ目あり	須恵器系	12世紀	22.46
381	12C114	白磁 (貿易陶磁)	碗	VSD05	埋土上部	口縁部	復元口径17.0cm、内外面に白濁の釉	中国産	12世紀 大宰府Ⅷ -1類カ	9.79
382	12A054	陶器	壺	QSD01	埋土一括	胴部上位 ～底部	砂底風、重ね焼き焼台の痕跡	—	近代	10000.75
383	12C139	陶器	片口	QSD01	埋土	口縁～胴部	復元口径13.8cm	大堀 相馬?	近世	84.04
384	12C138	磁器 (染付)	大皿	QSD01	埋土	口縁～底部	復元口径22.0cm、外面に唐草文、内面風景文	肥前	大橋Ⅲ期 以前	117.41
385	12C137	磁器 (染付)	皿	QSD01	埋土	口縁～底部	復元口径13.8cm、見込み中央に手書きの五弁花、 草花文、高台内に圏線	肥前	大橋Ⅲ期 以前	61.42
386	12C153	磁器 (染付)	皿類	QSD01	埋土	底部	角皿カ	肥前	大橋Ⅲ期 以前	15.86
387	12C113	青白磁 (貿易陶磁)	碗	QSD02	埋土下部	胴部	陰刻花文	中国産	12世紀	6.73
388	12C134	磁器 (染付)	皿	USD06	埋土一括	底部	復元底径11.0cm、蛇の目凹高台、草花文、高台 外側に唐草文	肥前	大橋Ⅳ期 以降	32.88
423	13C004	陶器	甕	HSK18	埋土	胴部	外面に降灰釉の痕跡、押印(格子文)	常滑	12世紀	18.9
424	13C005	陶器	甕	HSK18	埋土	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	62.8
425	13C006	陶器	甕	HSK27	埋土	胴部	内面に降灰釉	常滑	12世紀	18.1
445	12C039	陶器	甕	USK27	埋土	胴部		常滑	12世紀	109.67
475	12C018	陶器	甕	BSX01	埋土	胴部	降灰釉剥落根	常滑	12世紀	50.69
476	12C017	陶器	甕	BSX01	埋土下層	胴部	外面に降灰釉	常滑	12世紀	21.64

掲載No.	登録No.	種別	器種	出土遺構	層位	部位	特徴など (数字)は復元値	産地	備考	重さ
477	12C098	陶器	大甕	BSX01	埋土下層	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	25.3
478	12C016	陶器	甕	BSX01	埋土下層	胴部		常滑	12世紀	26.6
479	13C003	陶器	甕	EP059	埋土	胴部	押印(格子文)	常滑	12世紀	9.6
480	13C002	陶器	甕	EP062	埋土	胴部	押印(長格子文)	常滑	12世紀	18.6
481	13C001	陶器	甕	E区	検出面	胴部	押印(格子文)	常滑	12世紀	91.3
482	12C069	陶器	甕	P区包含層	黒褐色土層	胴部		常滑	12世紀	54.71
483	12C019	陶器	甕	J区	検出面	胴部	押印(長格子文)	常滑	12世紀	41.7
484	12C020	陶器	甕	J区	検出面	胴部	外面に粗い降灰痕	常滑	12世紀	58.35
485	12C074	陶器	広口壺	J区	検出時	胴部	外面に降灰釉	渥美	12世紀	29.6
486	12C073	陶器	甕	V区Ⅲ Gbd グリッド	検出面	胴部		渥美	12世紀	40.71
487	12C099	陶器	大甕	J区	検出時	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	97.16
488	12C026	陶器	甕	L区	排水溝内一括	底部		常滑	12世紀	80.97
489	12C101	陶器	大甕	L区	排水溝内一括	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	146.75
490	12C072	陶器	甕	V区	Ⅲ G4W 検出面	胴部	押印(格子文)	渥美	12世紀	46.25
491	12C022	陶器	甕	J区	検出面	胴部	内外面の一部に降灰釉	常滑	12世紀	13.64
492	12C021	陶器	甕	J区	検出面	胴部		常滑	12世紀	30.12
493	12C068	陶器	大甕	M区	検出面	胴部	外面の一部に降灰釉	常滑	12世紀	81.25
494	12C097	陶器	大甕	V区Ⅲ G6d グリッド	検出面	胴部	外面にタタキ痕	須恵器系	12世紀	7.61
495	12C009	陶器	壺類	Q区中央部	検出面	頸部	外面に厚く降灰釉	常滑	12世紀	74.13
496	13C010	陶器	甕	W区北端	検出面	胴部		常滑	12世紀	31.7
497	12C067	陶器	壺類	不明		口縁部	内外面に降灰釉	常滑	12世紀	28.52
498	12C011	陶器	甕	S区	検出面東端	胴部カ		常滑	12世紀	9.5
499	12C122	磁器 (染付)	皿	F区北	検出面	底部	高台内に圈線	肥前	近世、大橋 Ⅳ期以降	23.14
500	12C129	磁器 (染付)	皿	F区拡張	表土	口縁～底部	復元口径12.4cm・器高2.75cm・復元底径5.1cm、 蛇ノ目釉剥ぎ	瀬戸	近世、大橋 Ⅳ期以降	40.82
501	12C123	磁器 (染付)	皿	F区北	検出面	底部	草花文	肥前	近世、大橋 Ⅳ期以降	26.34
502	12C121	磁器 (染付)	皿	F区北	検出面	口縁部	復元口径14.0cm、草花文	肥前	近世、大橋 Ⅳ期以降	12.73
503	12C111	白磁 (貿易陶磁)	碗	F区	表土	胴部		中国産	大宰府 Ⅷ類カ	5.23
504	13C007	染付	皿	H区東南側 排水路付近	I層中	口縁部～ 底部	復元口径13.6cm、蛇ノ目釉剥ぎ、見込み中央に 五弁花	肥前	近世、大橋 Ⅳ期以降	69.9
505	13C008	染付	皿	H区東現代 排水路	一括	口縁部～ 底部	復元口径9.4cm、蛇ノ目凹高台、蜻唐草文	肥前	近世、大橋 Ⅲ期以前	18.4
506	12C128	白磁	碗	Z区トレンチ	遺構検出面	底部		不明	近世	32.99
-	12C127	白磁	壺	X区SD03→ 攪乱	埋土	口縁部	復元口径5.6cm		近世～近代	13.03



第28表 石器観察表

掲載No	登録No	袋番号	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	磨り	凹み	敲き	石質・産地・時代	重量(g)
5	12D001	41	石鏃	ASI01	カマド煙道	<2.2>	1.90	0.45				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.58
39	13D016		磨石	HSI05	床上	10.30	9.00	3.20	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	434.1
94	13D015		磨石	HSI08	埋土一括	<9.4>	13.30	5.75	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1076.1
110	13D019		磨石	ISI01	東端埋土	11.90	5.90	3.00	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	330.2
111	13D017		磨石+窪み石	ISI01	床直	12.70	10.10	5.55	○	○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	987.5
119	13D018		磨石	ISI04	カマド	17.10	11.40	4.80	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1396.1
123	12D004	108	磨石	JSI01	カマド芯材	<8.9>	8.80	3.40	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	364.96
143	12D007	1014	砥石	KSI01	カマド	<5.3>	<4.6>	3.10				凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	78.68
144	12D006	162	磨石	KSI01	埋土	12.30	10.60	6.00	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	4006.35
145	12D005	1017	台石	KSI01	埋土	18.90	10.40	5.90				デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1668.1
166	12D008	1034	磨石	KSI03	床面	<8.55>	11.20	3.80	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	666.73
170	12D010	184	石篋	LSI01	焼土面	7.30	4.70	1.20				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	49.92
180	13D045		磨石	NSI01	床面	26.10	10.10	9.50	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	4840
189	13D010		石鏃	NSI03	貼床内	<1.4>	1.10	0.30				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	0.4
191	13D011		スクレイパー	NSI05	埋土	4.65	2.40	1.40				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	17.8
197	13D001		石鏃	OSI02	埋土	2.70	1.60	0.40				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.2
198	13D003		石鏃	OSI02	埋土	2.45	1.55	0.50				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.3
199	13D002		スクレイパー	OSI02	埋土	8.25	3.10	1.90				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	23
202	13D004		石匙	OSI03	南半	<2.0>	0.20	2.30				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.4
206	13D005		スクレイパー	OSI04	南側1層	4.40	3.05	0.85				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	8.6
207	13D027		スクレイパー	OSI04	南半	4.40	3.30	1.10				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	14.4
208	13D028		スクレイパー	OSI04	南側2層	3.75	4.10	1.35				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	20.4
209	13D022		磨石	OSI04	1層	6.70	5.60	1.60	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	76.4
215	12D025	1030	磨石	QSI01	床面	<9.1>	12.90	5.20	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	951.36
216	12D023	1037	窪み石	QSI01	埋土	20.00	11.80	5.60		○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	2100
217	12D024	1023	敲石	QSI01	床面	14.75	7.10	5.90		○	○	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	827.16
236	13D026		磨石+窪み石	YSI01	土器5の下	14.20	6.95	5.10	○	○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	672.2
237	13D025		窪み石	YSI01	埋土上~下部	13.70	6.90	5.80		○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	661.9
244	13D014		石鏃	ZSI01	埋土	2.40	1.45	0.35				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.2
268	12D031	410	U-フレーク	VSD01	埋土上部 (火山灰上)	3.80	2.30	0.50				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	3.46
269	12D033	1021	磨石	VSD01	下層	10.75	10.00	3.95	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	585.45
275	12D009	727	石鏃	KP036	埋土	<2.25>	1.10	1.10				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.1
276	12D014	793	撿器	MP089付近	検出面	4.35	3.60	1.05				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	19.7
277	13D029		スクレイパー	NP038	埋土	3.15	4.45	0.95				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	9.1
389	12D002	503	石器材料	FSD08	埋土	<4.9>	<6.4>	0.30				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	14.3
390	12D003	81	砥石	FSD08(西側)	埋土一括	<10.6>	6.20	4.35				凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	518.24
391	13D006		削器	OSD01	埋土	4.95	0.55	1.65				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	5.8
392	13D007		石鏃	OSD05	西側1層	3.70	2.25	0.60				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	4.5
393	13D008		石鏃	OSD05	西側1層	<2.9>	2.10	0.90				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	4.3
394	13D021		磨石	OSD06	埋土	12.10	9.80	6.90	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1073.5
395	13D023		磨石	OSD06	埋土	11.40	7.00	6.70	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	757.6
396	12D051	40	石錐	QSD01	埋土	<2.6>	1.50	1.00				未鑑定	2.24
397	12D052	618	撿器	QSD02	埋土	3.40	2.60	0.70				黒曜石	3.49
398	12D022	436	砥石	QSD01	埋土	9.00	8.05	4.05				凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	384.17
399	12D028	349	撿器	USD13	埋土	7.10	5.10	1.30				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	29.59
400	12D054	350	撿器	USD13	埋土上層	4.45	3.50	1.20				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	20.09
401	12D050	1015	磨石	VSD01	埋土	<10.5>	6.10	4.60	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	428.84
402	12D029	1039	台石	USD16	埋土	<17.7>	13.60	9.20	○		○	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	3900
403	12D035	1038	窪み石	VSD05	埋土上部	<18.7>	14.30	8.80		○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	3100
404	12D039	1029	敲石	VSD05	底面	9.50	8.65	4.60			○	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	455.42
405	12D034	1036	台石	VSD05 区画1	下層	16.90	11.60	6.20	○	○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1684.67
406	12D038	1024	窪み石	VSD05	底面	13.85	11.40	4.00		○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	768.55
407	12D043	1018	敲石	VSD05	底面	9.30	8.30	5.10			○	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	441.46

掲載No	登録No	袋番号	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	磨り	凹み	敲き	石質・産地・時代	重量(g)
408	12D041	1022	台石	VSD05	底面	<15.6>	12.40	3.40	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	924.47
409	12D042	1016	磨石	VSD05	底面	<7.75>	<6.3>	2.60	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	217.21
410	12D040	1020	磨石	VSD05	底面	<7.0>	8.20	2.50	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	242.97
411	12D037	1027	台石	VSD05	埋土上部	<10.6>	12.00	3.50				デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	725.39
412	12D036	1035	台石	VSD05	底面	15.50	14.70	4.60				デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1479.17
413	12D032	699	砥石	VSD05	埋土上部	<4.1>	<7.5>	2.30				デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	130.61
414	12D045	1028	台石	VSD05	埋土上部	<12.1>	<10.8>	2.45				デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	563.69
447	13D012		尖頭器	HSK07付近	検出面	<9.75>	1.85	0.80				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	12.1
448	12D030	351	石筥	USK24	1層	6.80	4.30	1.40				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	45.01
449	13D024		窪み石	OSK08	埋土	10.50	8.10	5.40		○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	552.7
450	13D032		磨石+窪み石	OSK01	底面	14.60	11.50	2.60	○	○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	809.9
451	12D026	1019	砥石	SSK02	埋土	13.00	5.90	4.50				石英斑岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	535.52
452	12D012	1033	磨石	MSK05	埋土一括	11.10	7.90	3.70	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	457.96
453	13D020		磨石	OSK05	1層	17.50	11.20	6.40	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1339.7
454	12D013	1031	磨石	MSK19	埋土上層	13.15	6.20	3.90	○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	474.02
512	13D009		石鏃	O区	表採	<2.55>	0.30	1.70				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	1.2
513	13D013		石鏃	Y区	表土	2.00	1.20	0.25				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	0.6
514	12D017	945	石筥	P区	包含層	8.55	3.25	1.15				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	39.29
515	12D048	411	石筥	V区	排土	4.30	2.70	1.00				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	11.67
516	12D016	900	石筥	M区点取り	検出面	13.70	4.30	3.10				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	160.69
517	12D021	926	スクレイパー	P区	黒褐色土層	6.15	6.00	2.10				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	68.4
518	12D020	928	スクレイパー	P区	黒褐色土層	4.70	3.80	1.25				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	19.6
519	12D027	276	スクレイパー	T区	表土	8.15	4.10	4.15				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	50.22
520	12D018	943	削器	P区②	黒褐色土層	4.60	5.20	1.30				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	26.7
521	12D015	901	スクレイパー	M区点取りNo1付近	検出面	3.30	7.00	1.50				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	38.1
522	12D053	922	スクレイパー	P区	黒褐色土層	8.40	3.75	0.90				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	46.55
523	12D019	932	尖頭器	P区	黒褐色土層	<2.6>	2.00	0.60				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	3.33
524	12D047	427	砥石	V区Ⅲ G4u	検出面	<5.9>	<1.6>	1.90				頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	26.51
525	12D049	712	砥石	XSD03	埋土	6.10	5.30	1.70				凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	57.26
-	12D011	1026	台石	MSK03	埋土上層							デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	533.66
-	12D044	1025	台石	VSD05	底面							デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	576.94
-	12D046	1032	台石	VSD13	埋土							デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1023.53
-	13D030		台石	OSD06	埋土							デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1848.7
-	13D031		敲石	OSD06	埋土					○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1142
-	13D033		敲石	OSI03	2層					○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	246.8
-	13D034		砥石	OSI03	1層							凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	106.8
-	13D035		磨石	OSI03	カマド				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	598
-	13D036		磨石+窪み石	OSK08	上層				○	○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	263.5
-	13D037		磨石	OSI03	埋土				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	193.9
-	13D038		磨石	OSI02	EWベルト1層				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	419.2
-	13D039		磨石	ISI01	床面				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1314.9
-	13D040		カマド袖石	ISI04	カマドS2							デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1718.6
-	13D041		磨石	OSD05	中央ベルト1層				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	241
-	13D042		磨石	NSK03	埋土上部				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	514.8
-	13D043		磨石	HSI05	床土				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	1183.6
-	13D044		磨石	NSD05	埋土				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	378.5
-	13D046		敲石	YSI01	埋土上部～下部					○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	418.6
-	13D047		敲石	ISI01	埋土					○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	2700
-	13D048		敲石	HSI06 P7	埋土一括					○		デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	109.9
-	13D049		砥石	H区東	現代排水路							凝灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	367.7
-	13D50		磨石	HSI06	床面				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	167.2
-	13D051		磨石	HSI06	南東区埋土下層				○			デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	887.5

掲載No.	登録No.	袋番号	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	磨り	凹み	敲き	石質・産地・時代	重量 (g)
-	13D052		磨石	HSI06	南東区埋土下層				○			デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	176.9
-	13D053		磨石	HSI06	南東区埋土下層				○			デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	538
-	13D054		敲石	HSI06 P4	埋土						○	デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	161.4
-	13D055		磨石	HSI06 P7	検出面				○			デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	964.3
-	13D056		磨石 + 敲石	HSI06 P7	検出面				○	○		デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	601.3
-	13D057		台石	HSI05	床上							デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	4380
-	13D058		台石	HSI05	床上							デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	5600
-	13D059		台石	HSI05	床上							デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	3990
-	13D060		磨石	HSI05	床上				○			デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	2040
-	13D061		磨石	HSI05	床上				○			デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	2030
-	13D062		台石	OSD05	中央ベルト2層							デイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	4540

第29表 石製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
54	13E001	勾玉	HSI06	北西下層	2.4	1.2	0.9	5.2	
80	13E002	丸玉	HSI06	ふるい一括	1.2	1.25	1.1	2.2	

第30表 土製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
13	12B006	把手?	FSI03	埋土	<5.7>	4.3	4.3	85.05	
38	13B027	勾玉	HSI05	埋土下層	2.75	0.8	0.8	2.3	
48	13B028	勾玉	HSI06	南西区埋土下層	2.7	1.0	0.7	3	
49	13B029	勾玉	HSI06	ベルト上層	3	1.2	0.8	4.6	
50	13B030	勾玉	HSI06	ベルト上層	2.85	1.2	1.0	4.9	
51	13B031	勾玉	HSI06	ふるい一括	2.9	1.2	1.0	5.5	
52	13B032	勾玉	HSI06	ふるい一括	3	1.3	0.9	4.9	
53	13B041	勾玉	HSI06	検出面	2.1	1.0	0.9	2.2	
56	13B001	土玉	HSI06	西南埋土下層	1.8	1.9	1.0	3.2	
57	13B002	土玉	HSI06	西南埋土下層	1.6	1.6	0.9	2.1	
58	13B003	土玉	HSI06	北西埋土下層	1.8	1.5	0.7	1.7	
59	13B004	土玉	HSI06	南西埋土下層	1.6	1.7	1.0	2.2	
60	13B005	土玉	HSI06	北西埋土下層	1.4	1.3	1.3	2.1	
61	13B006	土玉	HSI06	南西埋土下層	1.55	1.7	0.9	1.9	
62	13B007	土玉	HSI06	南西埋土下層	1.35	<1.05>	<0.5>	0.5	
63	13B008	土玉	HSI06	南西埋土下層	1.6	1.8	1.1	2.6	
64	13B009	土玉	HSI06	ベルト上層	1.75	1.7	0.9	2.1	
65	13B010	土玉	HSI06	ベルト上層	1.7	1.7	0.8	2.3	
66	13B011	土玉	HSI06	ベルト上層	1.8	1.8	0.9	3	
67	13B012	土玉	HSI06	ベルト上層	1.4	1.4	1.2	1.9	
68	13B013	土玉	HSI06	ふるい一括	1.7	<1.2>	0.8	1.4	
69	13B014	土玉	HSI06	ふるい一括	1.5	1.6	0.9	1.5	
70	13B015	土玉	HSI06	ふるい一括	1.5	1.5	0.7	1.7	
71	13B016	土玉	HSI06	ふるい一括	1.6	1.5	1.1	2.2	
72	13B017	土玉	HSI06	ふるい一括	1.6	1.7	0.8	2	
73	13B018	土玉	HSI06	ふるい一括	1.5	1.6	0.7	1.8	
74	13B019	土玉	HSI06	ふるい一括	1.55	1.5	0.6	1.1	
75	13B020	土玉	HSI06	ふるい一括	1.55	1.4	0.7	1.3	
76	13B022	土玉	HSI06	ふるい一括	1.75	1.6	0.7	2	
77	13B023	土玉	HSI06	ふるい一括	1.7	1.5	0.8	2.3	

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
78	13B024	土玉	HSI06	ふるい一括	1.8	1.6	0.6	2	
79	13B025	土玉	HSI06	ふるい一括	1.85	1.7	0.7	2.2	
104	13B035	紡輪	HSK17	埋土下層	4.7	4.9	2.9	78.1	
105	13B037	紡輪	HSK17	埋土下層	<4.4>	<4.4>	2.1	12.2	
106	13B034	紡輪	HSK17	埋土	3.7	3.7	1.4	22	
107	13B036	紡輪	HSK17	埋土下層	3.6	3.8	1.8	30.3	
112	13B033	紡輪	ISI01	埋土	4.9	4.9	2.8	72.7	
116	13B026	土玉	ISI02の南	外側検出面	1.15	1.2	1.1	1.4	
151	12B007	獣脚	KSI02	カマド焼土	5.1	2.2	1.6	15.23	
152	12B005	紡輪	KSI02	ベルト1層	5.2	5.2	3.0	84.82	
185	13B044	勾玉	NSI02	貼床内	3.1	1.2	1.3	5.4	
196	13B040	不明脚部	OSI02	NSベルト1層	3.5	2.5	1.0	5.9	
266	12B001	羽口	VSD01	埋土上部 (火山灰より上)	<7.1>	8.0	1.8	120.39	
267	12B002	羽口	VSD01	埋土上部 (火山灰より上)	<6.8>	8.2	1.9	97.63	
-	12B003	羽口	VSD01	埋土				41.79	
-	12B004	羽口	VSD01	埋土				24.37	
-	13B039	不明	遺構外	検出面 (IV層)				7.9	指紋つき
-	13B042	不明	HSI06	埋土下層				1.9	
-	13B043	欠番							
	13B021	欠番							

第31表 金属製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
55	13F005	釘	HSI06	検出面	5.7	1.6	0.5	7.3	
109	13F008	釘	ISI01	埋土	5.05	1.35	0.55	3.5	
225	12F002	茎	USI02カマド	埋土1層	<4.5>	1.7	0.3	4.08	
305	13F007	釘	NSD04	埋土	5.55	1.15		4.4	
306	12F001	縁金具か	USD13	埋土	<2.4>	2.5	0.2	6.75	
455	13F003	釘	HSK31	埋土	5.05	1.0		3.2	
456	13F004	釘	HSK31	埋土	6.1	1.6		5.9	
457	13F002	釘	HSK30	埋土	6.7	1.2		3.6	
458	13F006	釘	HSK30	埋土	4.5	1.2		4.5	
459	13F001	キセル	HSK29	埋土	7.8	1.2		5.9	
460	13G001	銭貨	ISK01	埋土	-	<2.5>	1.5	1.3	永楽通寶
461	13G002	銭貨	ISK01	埋土	径2.5	-	1.4	3.2	永楽通寶
462	13G003	銭貨	ISK01	埋土	径(2.3)	-	1.5	1.6	嘉祐元寶
463	13G005	銭貨	ISK01	埋土	径2.45	-	1.4	1.6	永楽通寶
464	13G012	銭貨	ISK01	埋土	径2.45	-	1.4	1.2	永楽通寶
465	13G004	銭貨	ISK01	埋土	径2.5	-	1.4	2.1	永楽通寶
466	13G011	銭貨	HSK30	埋土	径2.9	-	11.9	22.1	銭種不明、銅8枚、鉄1枚
507	13G006	銭貨	H区東	現代排水路一括	径(2.4)	-	1.4	1.4	寛永通宝
508	13G007	銭貨	H区東	現代排水路一括	径2.8	-	2.0	2.3	寛永通宝
509	13G008	銭貨	H区東	現代排水路一括	径2.9	-	4.5	9.9	銭種不明、鉄3枚
510	13G009	銭貨	H区東	現代排水路一括	径2.9	-	2.0	3.5	銭種不明、鉄
511	13G010	銭貨	H区東	現代排水路一括	径3.0	-	4.8	1.3	銭種不明、鉄3枚

第32表 遺構別遺物出土量一覧 (不掲載)

単位はg

遺構名	土師器内訳	須置器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
ASD01	非ロクロ甕など	138.2						奈良?
ASD03	細片	196						古代か
ASD04	非ロクロ甕・杯など細片	121.2						古代
ASD05	非ロクロ甕など細片	35.6						古代
ASI01	甕片など	401.1						
ESI01	非ロクロ杯・壺	1255						
EP030					鉄滓	63.1		古代
EP122	細片	5.9						古代?
FSI01	非ロクロ甕など	33.2						
FSI03	非ロクロ甕など	2745.7				細片	9.2	
FSI04	非ロクロ甕など	280.7				細片	21.8	
FP124	甕片	8.1						古代?
FP170 (FSB05)	細片	0.8						古代?
FP172 (FSB11)	非ロクロ杯など	27.5						古代?
FP33	細片	0.4						古代?
FP75 (FSB04)	甕片など細片	20						古代?
FP76 (FSB08)	非ロクロ甕など細片	36.1						古代?
FSD01 (下層 大溝)	非ロクロ甕	379.3						平安10C 代前半
FSD01 (上層 大溝)	ロクロ杯 (非内黒)・非ロクロ甕	150.9	32.2					平安10C 代前半
FSD03	ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕	64.4						平安
FSD04	非ロクロ杯 (内黒)・ロクロ甕	212.9						古代
FSD06	細片	9.4						古代?
FSD07	非ロクロ甕	165.5						古代?
FSD08	細片	143.4	15				近代陶磁	近代か
FSK01	非ロクロ甕・非ロクロ杯 (内黒)	154.8						奈良?
FSK02	細片	6.6						古代?
FSK04	非ロクロ甕など	170.3						古代?
FSK06	非ロクロ甕など細片	23.6						古代?
FSK08	細片	23.2						古代?
FSK10	細片	19.1						古代?
GP030	ロクロ杯 (非内黒) など	25.3						平安?
GSD01 大溝	非ロクロ甕など	301.2	131.2					平安
GSD02	細片	19						
HSI01	細片	15.1						古代?

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
HSI02	細片	3.3						
HSI03	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕など	3383.1						
HSI04	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕など	1612.9						
HSI05	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕など	3800.9						
HSI06	非ロクロ杯 (内黒)・高杯・非ロクロ甕・壺など	7855.8	粘土塊				近世～近代陶磁 (赤土)	128.4
HSI06-P4								
HSI06-P7								
HSI07	ロクロ杯・ロクロ甕・非ロクロ甕など	5185.4	粘土塊					非ロクロ甕の方が量的に多い、
HSI08	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕	1200.5						奈良
HSI09	ロクロ杯 (非内黒?)・非ロクロ甕	115.9						平安?
HSI10	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕	543.5						
HP045	細片	1.2						古代?
HP063	細片	2.4						古代?
HP139	細片	3.6						古代?
HP157	甕 細片	3.1						古代?
HP174	細片	4.6						古代?
HSD01	非ロクロ甕 細片	860.8	杯片				近代磁器 (化粧版)	122.1 近代か
HSD02	非ロクロ杯 (内黒) など細片	8.8						古代?
HSD03	細片	13						古代?
HSD05	非ロクロ甕・ロクロ杯・高台杯 (低高台)	960.3	杯片					平安
HSD05 上	非ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ甕	27.9						平安
HSD06	細片	13.5						古代?
HSD07							近代陶磁器	305.5 近代
HSD08	非ロクロ甕・非ロクロ杯 (内黒)	2867.1	杯					古代か
HSD09	細片	38.9						古代か
HSD10	非ロクロ甕など細片	24.8						古代か?
HSK02	細片	13.6						古代?
HSK04	非ロクロ甕・非ロクロ杯・高杯	845.3						奈良8C代
HSK05	細片	29.1	粘土塊					古代?
HSK07	非ロクロ甕・非ロクロ杯 (内黒) 有段	841.7						奈良 (8C代) か
HSK10	非ロクロ甕	195.7						古代?
HSK11	非ロクロ甕など細片	66.2						古代?
HSK14	細片	42.7					近世～近代陶磁器	9.4 古代?

単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
HSK15	細片	1.4						不明
HSK16	非ロクロ甕など	129.2						古代?
HSK17	非ロクロ甕・非ロクロ杯・高杯	8558.6	7.5		鉄片		近世～近代 陶磁器	奈良8C代
HSK18	細片	125.6					88	近代
HSK21	壺・非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)	1777.2						奈良
HSK28	細片	6						近世～近代
HSK30					銅銭 鉄釘		22.6 3.6	近世～近代
HSK31							近代陶器	近世～近代
ISI01	非ロクロ甕など	436.8				燧石 磨石	2700 1314.9	
ISI02	非ロクロ杯(内黒)・非ロクロ甕	168.6						
ISI03	非ロクロ甕など	239.9	細片			磨石	771.9	
ISI04	非ロクロ甕など	147.6				カマド袖石	1718.6	
ISI05	非ロクロ甕・ロクロ?杯(非内黒)	241.2						奈良か(平安の可能性もあり)
ISI07	非ロクロ甕など	101.2						
IP004	細片	9						古代?
IP006	細片	0.3						不明
IP007	細片	10.2						古代?
ISD02	非ロクロ甕など	184						古代?
ISD04	土師器細片	9.4						古代?
ISK01	細片	6.8						古代?
JSD003	非ロクロ甕片・杯・かわらけ片	222.3						最新の遺物は12C
JSD01	細片	62.7	細片					古代?
JSD02	細片	23.4						古代?
JSD04	非ロクロ甕・ロクロ甕・かわらけなど	78						奈良8C～12C
JSI01	細片	5.7						
JSI02	かわらけなど細片	40.6	甕など細片					
KS01	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)など	11866.7					近代陶磁	44.1
KS02	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)	336.2						
KS03	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)	2420.2					近代陶磁	35.9
KP013	細片	1.7						古代?
KP036	非ロクロ甕など	53.7						古代?
KP046	非ロクロ甕片など	234.9						古代?
KP047	非ロクロ甕など 細片	30.4						古代?
KP054	細片	0.5						古代?



単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
KSD04	細片	11.3						古代?
KSD05	細片	28.1						古代?
KSK01	細片	113						古代?
LSI01	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)など	547.1	杯	26.7			近代陶磁	0.4
LSI02	非ロクロ甕など細片	51.3						
LSI03	非ロクロ甕・ロクロ杯(内黒)	949.8	甕類杯					古代?
LP031			甕片	10.4				
LSD05	ロクロ甕・ロクロ杯・非ロクロ甕など	885.3	甕、杯など	305.6				平安
LSD06	細片	12.8						古代?
LSD07	非ロクロ甕	38.9						古代?
LSD08	非ロクロ甕	139.8						奈良?
LSK02			甕片	17			近代磁器 (寿文皿)	近代
LSK04	細片	4.4	甕片	259.2				古代?
MSI01	非ロクロ甕	400.3	瓶類甕	163.7				
MP018	細片	3.8						古代?
MP032	細片	25.5						古代?
MP044	細片	9.1						古代?
MP052	細片	1.8						古代?
MP055	細片	3						古代?
MP080	細片	4						古代?
MP090	細片	5.4						古代?
MP102	非ロクロ甕など細片	13.4						古代?
MP103	非ロクロ甕など細片	51.9						古代?
MP106	細片	6.7						古代?
MP119	細片	7						古代?
MP153	ロクロ甕など	44.3						平安か
MSD03	鉢片など	90.9						古代?
MSD05	非ロクロ甕など細片	271.7	杯、甕など細片	17.84				古代?
MSD06	ロクロ甕・内黒高台杯など	205.6						平安
MSK01	非ロクロ甕	89.8						古代
MSK03	細片	27.3						古代?
MSK04	ロクロ杯(非内黒・内黒)・ロクロ甕	551.5						平安 9C 後~10C 以降
MSK05	ロクロ杯(非内黒)・非ロクロ甕・ロ クろ甕	392.5						平安 10C 代
MSK06	ロクロ甕など	47.5						平安

単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
MSK08	ロクロ甕・ロクロ杯(非内黒)など	258.9						平安
MSK10	ロクロ杯(内黒)・ロクロ?甕など	236.2						平安
MSK11	細片	4.4						古代か
MSK15	ロクロ杯(非内黒・内黒)・ロクロ甕	290.2						平安 9C~10C代
MSK16	ロクロ杯(非内黒)など	36.3						平安 10C前
MSK17	ロクロ甕・ロクロ杯(非内黒・内黒)	107.4						平安 9C後~10C前
MSK18	鉢(内黒)・甕(ロクロ)など	62.9						平安
MSK19	ロクロ杯(非内黒)など	10.9						平安 10C前
MSK20	ロクロ杯(非内黒・内黒)・ロクロ甕 など	259.3						平安 9C後~10前
NSI01	ロクロ甕・非ロクロ甕	680.6	杯甕類	12 剥片チップ		3.1		
NSI02	非ロクロ甕・ロクロ甕・杯(内黒)	1504.1	瓶類	5.7 粘土塊				
NSI03	ロクロ甕?・ロクロ杯(内黒)?・非 ロクロ杯	607	甕杯	109.5	鉄滓	5.5		
NSI04	細片	23.1	細片	1.7		1.4		
NSI05	ロクロ杯(内黒)・非ロクロ甕	108.5						
NP001	細片	19.9						古代?
NP035	細片	14.1						古代?
NP037	細片	0.9				4.5		古代?
NP038	細片		細片	3.1				古代?
NP040	細片	5.5						古代?
NP041	杯などの細片	2.2						古代?
NP043	細片	36.1						古代?
NP047	細片	3.5						古代?
NP048	細片	41.9						古代?
NP049	ロクロ甕など細片	68.2				0.9		平安
NP051	細片	6.4						古代?
NP052	細片	4.3						古代?
NP058	細片	29.5						古代?
NSD01	非ロクロ杯(内黒)・蓋・タタキ甕・ ロクロ高台杯(非内黒)	362.2						平安か
NSD02	細片	34.5						不明
NSD03	非ロクロ甕など	109.3	細片	2.7				古代?
NSD04						22.1		不明
NSD05	ロクロ杯(非内黒)	42.4					378.5	古代?

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
NSK01	ロクロ甕など	150.1						平安
NSK02	ロクロ甕など細片	26.4						平安?
NSK03				磨石	514.8			
NSK04	非ロクロ甕・ロクロ甕	86.8	杯					平安
NSK05	細片	57.6	杯	剥片	0.5			古代か?
NSK06	ロクロ甕など細片	65.3						平安?
NSK07	ロクロ甕など細片	27.3						平安?
NSK08	細片	21.6						古代?
NSK09	ロクロ甕・ロクロ杯 (内黒)	117.6						平安?
NSN04	ロクロ杯 (非内黒)	68.1						平安
OP001	細片	12.3						古代?
OP002	細片	14.8		剥片	13.6			古代?
OP009	細片	14.9						古代?
OP011				剥片	0.9			不明
OP047 (OSB05)	ロクロ杯 (内黒) など細片	26.4	甕細片					平安?
OP054 (OSB04)	細片	13.9						古代?
OP055	細片	13.5						古代?
OP056	ロクロ杯 (内黒)	33.6	甕					平安か
OP057 (OSB04)	細片	1.8						古代?
OP059	細片	12						古代?
OP062	細片	2.5						古代?
OP065	ロクロ杯 (内黒)・ロクロ甕など細片	26.3						平安?
OP067 (OSB03)	細片	2.3	甕の細片					古代?
OP069 (OSB03)	杯などの細片	25.4						古代?
OP074				剥片	1.6			不明
OP076	細片	2.7						古代?
OP078	細片	0.6						古代?
OP082	細片	4.5						古代?
OP083 (OSB06)	細片	0.8						古代?
OP086	ロクロ杯 (非内黒) など細片	43.6						平安?
OP087	細片	7.7						古代?
OP088 (OSB06)	細片	7.6						古代?
OP089	細片	0.8						古代?
OP090	細片	13.2						古代?
OP092	細片	2.1						古代?
OP093	細片	2.9						古代?

単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
OP095	細片	89						古代?
OP096 (OSB03)	細片	14						古代?
OP097	細片	276						古代?
OP098	細片	51						古代?
OP100	ロクロ甕・ロクロ杯 (内黒)	419.5	甕類片	137				平安
OP102	細片	16.7						古代?
OP103	細片	14.3						古代?
OP104	細片	9.8						古代?
OP105	細片	0.8						古代?
OP108	細片	27.3						古代?
OP109	細片	110	甕類片	48				古代?
OP111	ロクロ甕	133.3						平安
OP113	細片	8.8						
OP116						細片	7.3	不明
OSD01	非ロクロ甕・非ロクロ杯 (内黒) など 細片	60	杯、甕片など	7.3	剥片	2.9		古代?
OSD02	非ロクロ甕など	24.1	杯	6				古代?
OSD03	非ロクロ甕など・細片	17.7	杯	10.2				古代?
OSD04	非ロクロ甕など・細片	18.9	杯	3.4				古代?
OSD05	ロクロ杯 (内黒)・非ロクロ杯 (内黒)・ 非ロクロ甕・鉢	822.7	杯、甕など	119	剥片	23.4	台石 磨石 45400 241.0	平安
OSD06	ロクロ杯 (非内黒)	31.3					台石 磨石 1848.7 1142.0	平安?
OSI01	非ロクロ甕・非ロクロ杯 (内黒)	617.7						
OSI02	ロクロ杯 (内黒・非内黒)・非ロクロ杯・ ロクロ甕など	1058.5	杯	2.3	剥片	2	磨石 411.2	
OSI03	ロクロ杯 (内黒・非内黒)・非ロクロ甕・ 非ロクロ杯 (内黒)	513.7	甕類	24.7	剥片類	5.3	砥石 砥石 106.8 246.8	
OSI04	ロクロ杯 (内黒・非内黒)・非ロクロ甕・ ロクロ甕	964.6	甕、瓶類、杯な ど	234.3	剥片	104.4		
OSK01	ロクロ甕・ロクロ杯 (内黒)	831.6	杯、甕など	102.8	剥片	12.9		平安
OSK02	細片	4.4			剥片	2.1		不明
OSK03	高台杯 (非内黒)	11.8						平安
OSK04	ロクロ甕・ロクロ杯 (非内黒・内黒)	555.2	不明土製品	8.4				平安 9～10前
OSK05	非ロクロ甕・ロクロ杯など	168.4			剥片	14.4		平安
OSK06	ロクロ杯 (内黒)・ロクロ甕	460.1						平安
OSK07	細片	3.3			剥片	2.6		不明
OSK08	ロクロ甕	18.5					凹み+磨 263.5	平安?

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
OSK11	ロクロ甕・ロクロ杯(非内黒)など	44.2						平安?
OSK13				剥片				不明
QSD01	非ロクロ甕片など	115.4	細片	27.5			陶磁、ガラ ス等	2555.9 近代
QSD02	非ロクロ甕・かわらけ細片など	1115.6	大甕など	465.7		黒曜石剥片		平~12C
QSD03	非ロクロ甕・高杯・ロクロ土師など	391.1	大甕など	99.5				奈良~平安
QSD04	非ロクロ甕・内黒杯など	391.2						奈良?
QSD05	非ロクロ甕片など	44.1						奈良?
QSD06	非ロクロ甕片など	20						奈良?
QSD07	細片	13.7	細片	32.3			近代磁器	176 近代
QSI01	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)・ロ クロ杯(非内黒)	1190.9						
QSI02	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)	160.9						
QSK01	手づくねかわらけ?	41.3						12後か?
QSK02	細片	4.6						古代?
RP005	細片	9.8						古代?
RP009	非ロクロ杯(内黒)など細片	0.3						古代?
RSD01	甕など細片	28.2		剥片				古代?
RSD02	非ロクロ甕など 細片	97.1						古代?
RSD03	細片	11.4						古代?
RSD04	甕など	47.6						奈良
SSD01	非ロクロ甕・ロクロ甕	83.4	甕片	82.2				平安
SSD02	細片	38.3	甕片	44.7				平安
SSD03	細片	1.6						古代?
SSK01	細片	6.9						古代?
SSK02			甕片	87.8				古代?
TSI01	非ロクロ甕・壺	645.1	細片	7.4				
TSK01	非ロクロ甕など	57						
USI01	非ロクロ甕・非ロクロ杯(平底)	877.7	甕、杯など細片	35.7				
USI02	非ロクロ甕など	170.3						
USI03	細片	13						
USD01	細片	38						古代?
USD02	細片	45.3						古代?
USD03	細片	37.9	細片	35.4				古代?
USD06	細片	12.6	細片	3.6			陶磁器	176.8 近代
USD07	細片	27.2						古代?
USD08	ロクロ杯など細片	11.9						平安か

単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
USD09	細片	16.3						古代?
USD13	非ロクロ甕など細片	95.5 甕	118.7					古代?
USD16	非ロクロ杯(内黒)・非ロクロ甕・かわらけ片など	242.7 甕	643.1					古代~12C
USD18	細片	21.8						古代?
USK07	細片	14.2 杯	4.5					古代? (平安)
USK08	細片	9.6 壺類	25.6					古代?
USK15	細片	8.3						古代?
USK32	細片	2.8						古代?
USK8B	細片	11.4						古代?
VP042 (VSB01)	細片	0.9						古代?
VP050	細片	0.4 甕片	30.6					古代?
VSD01大溝	非ロクロ甕・ロクロ甕・ロクロ杯(内黒)など	2990 大甕など	1283.3					平安
VSD02	非ロクロ甕片	64	70.2					平安~12C
VSD03	細片	14.6						古代か
VSD04	内黒杯・鉢片	51.4						古代か
VSD05	高台杯・甕・かわらけ片など	485.1 大瓶など	1907.5			台石 1110.64		平安~12C
VSD06	細片	3.7 細片	8					平安か
VSD07	甕・ロクロ杯(内黒)など	59.7						平安
VSD08	細片(内黒あり)	16.3						平安か
VSD13						台石 1023.5		不明
VSX01	土師細片	15.2						古代
VSX04	甕など	159.6 長頸瓶など	100.7					平安?
VSX05	細片	33						古代
WP011	細片	28						古代?
WSD01	細片	6.8		剥片 1.9				不明
WSK03	非ロクロ甕・非ロクロ杯(内黒)	148.1						古代?
XS01	ロクロ杯(内黒)	85.6						
XS02	細片	68.5						
YS01	非ロクロ甕 など	440.4				載石 418.6		
YSK03	非ロクロ甕(蓋)	529.8						奈良
ZS01	非ロクロ甕・ロクロ甕・非ロクロ杯	1950.5						ロクロは極少量のため混入の可能性あり。
ZSD01	土師器細片	10.4						不明
ZSD02	土師器細片	8.3						不明
遺構外H24	杯・甕など	1022.7	3122.83	剥片・調片石器 40.15	古銭	3.58		ガラス 91.7 近代 3156.7

単位はg

遺構名	土師器内訳	須恵器	土製品	石器類	金属	縄文土器	近世・近代陶磁	時期
遺構外H25	杯・甕など 3909.6	398.8	不明細片 7.9	62 礫片・剥片石器	227.4			5129.5

第33表 柱穴観察表

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
BP001	34	25	18	88.610	
BP002	37	35	29	88.497	
BP003	43	34	15	88.657	
BP004	25	23	38	88.467	
BP005	37	29	12	88.657	
BP006	30	27	37	88.425	
BP007	(28)	27	16	88.572	
BP008	64	52	53	88.252	
BP009	27	24	32	88.409	
BP010	32	(28)	28	88.531	
BP011	26	22	24	88.527	
BP012	29	28	25	88.612	
BP013	29	25	42	88.352	
BP014	36	27	37	88.260	
BP015	25	20	12	88.660	
BP016	35	25	18	88.595	
DP001	26	23	16	87.400	
DP002	25	20	12	86.440	
DP003	24	20	7	86.480	
DP004	28	24	20	86.360	
DP005	28	26	12	87.282	
DP006	33	28	22.8	87.242	
DP007	30	26	15	86.360	
DP008	37	31	15	86.370	
DP009	25	10	5	86.460	
DP010	30	23	8	86.390	
DP011	28	24	25	86.280	
DP012	38	23	20	86.320	
DP013	28	19	18	86.390	
DP014	21	10	13	86.430	
DP015	(20)	(8)	-	-	
EP001	21.6	16.8	24.8	86.61	ESB01
EP002	欠番				
EP003	24.4	21	20.8	86.65	
EP004	15.2	12	14	86.744	
EP005	21.8	17.8	28.6	86.572	ESB01
EP006	24.2	23	43.4	86.452	ESB01
EP007	欠番				
EP008	19.8	19	20	86.682	
EP009	18.8	15.2	25.2	86.616	
EP010	23.2	21.8	28.4	86.562	
EP011	22.2	16.8	23.8	86.562	
EP012	30.6	29	31	86.626	
EP013	30.2	25.8	28.2	86.582	
EP014	20.4	18.4	36.4	86.486	
EP015	31.2	-	32.2	86.562	
EP016	38.8	33.2	52	86.354	
EP017	21.4	18.4	15.2	86.684	
EP018	22.4	21.6	33.8	86.508	
EP019	22.9	18.6	30	86.53	
EP020	22.9	17.4	35	86.52	
EP021	20	-	40	86.452	
EP022	18.2	16.8	23.4	86.592	
EP023	17.2	-	15.4	86.678	



柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
EP024	21.2	18.2	30.6	86.544	
EP025	28.4	16.8	20.8	86.618	
EP026	欠番				
EP027	37.6	33.2	28.6	86.452	
EP028	17.2	13	17.4	86.492	
EP029	29.8	28.2	29	86.404	ESB02
EP030	22.4	20.4	38.8	86.314	鉄滓
EP031	23.8	17.8	37	86.334	ESB02
EP032	27	25.6	27.2	86.418	
EP033	欠番				
EP034	欠番				
EP035	15.2	14.4	20.2	86.484	ESB02
EP036	欠番				
EP037	欠番				
EP038	22.8	7.6	42.6	86.256	ESB02
EP039	21.2	12.4	30.2	86.4	
EP040	欠番				
EP041	欠番				
EP042	欠番				
EP043	21	-	35.6	86.344	
EP044	24	21.6	25.6	86.428	
EP045	35.8	15	41.6	86.286	
EP046	49.2	42.8	27	86.472	
EP047	30.6	24.8	31.6	86.386	
EP048	26.6	23.8	18.2	86.56	
EP049	25.8	16	28.4	86.47	
EP050	34	26.6	45.2	86.248	
EP051	23	15.6	16.6	86.556	ESB03
EP052	25.2	-	31.6	86.398	
EP053	52.6	33.6	40.8	86.302	ESB03
EP054	32.6	-	50	86.218	
EP055	33.2	29.8	48	86.222	
EP056	18.8	17	10.2	86.622	
EP057	24.2	20.8	35.8	86.37	
EP058	20.4	18.8	43.2	86.272	
EP059	42.6	39	58.4	86.142	常滑瓦片
EP060	20.6	5.8	39.8	86.354	
EP061	44	43.2	54.6	86.188	ESB04
EP062	42.4	31.8	63.4	86.082	常滑瓦片
EP063	22.4	18	38	86.328	
EP064	25.8	20.2	14.8	86.576	
EP065	22	20.2	30	86.4	
EP066	22.7	18.2	30	86.416	
EP067	46.8	30.6	52.2	86.174	ESB04
EP068	欠番				
EP069	21	-	22.2	86.494	
EP070	22	20.4	22.4	86.5	ESB03
EP071	26	18.8	29.4	86.4	
EP072	26.4	9.6	18	86.474	
EP073	欠番				
EP074	49.4	38.2	43.2	86.222	ESB04
EP075	20.8	-	11.4	86.58	ESB05
EP076	27.6	19.8	36.2	86.266	
EP077	16.4	14	20	86.442	ESB05
EP078	29.6	22.2	20.8	86.45	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
EP079	欠番				
EP080	欠番				
EP081	23.2	16.2	36.2	86.358	ESB08
EP082	17.2	6.4	27.2	86.428	ESB08
EP083	17.6	13.4	25.2	86.446	ESB05
EP084	26.4	11.2	27	86.448	ESB06
EP085	18	-	38.6	86.314	
EP086	17.2	14.4	31.6	86.392	
EP087	20.8	4	22.8	86.492	ESB05
EP088	25.2	20.8	16.4	86.526	
EP089	28.8	24.2	23.6	86.408	ESB06
EP090	21.6	18	21.2	86.446	ESB07
EP091	20.4	-	19	86.46	
EP092	22.4	18.6	37.4	86.27	
EP093	21.2	19.8	21.6	86.43	
EP094	22.6	-	35	86.358	ESB06
EP095	32.4	31	18.6	86.476	
EP096	40.4	31.8	50.8	86.156	
EP097	22.8	20.2	23.4	86.45	
EP098	29.4	-	21.8	86.454	ESB07
EP099	欠番				
EP100	24	20	38	86.296	
EP101	24.4	21.2	38.6	86.248	ESB07
EP102	29.4	26.8	37.4	86.276	
EP103	31	24.6	47	86.162	ESB07
EP104	24.4	19.6	21.6	86.454	
EP105	25.2	23.8	13.8	86.516	
EP106	29.4	27	47.4	86.2	ESB07
EP107	45.8	24	49.6	86.21	
EP108	36.2	29.4	38.4	86.234	
EP109	25.6	22.8	12.6	86.52	
EP110	35.8	27.8	31.4	86.358	
EP111	38	28.4	27.6	86.428	
EP112	21	19.4	25.8	86.44	ESB08
EP113	22	20.4	44.4	86.222	ESB08
EP114	50.6	-	41.2	86.276	ESB04
EP115	29	28	53	86.146	ESB06
EP116	26.6	21.8	43.4	86.26	ESB06
EP117	36.4	21.8	45.4	86.204	
EP118	24.8	21.6	29.4	86.404	ESB08
EP119	20.6	18.2	42.2	86.284	
EP120	25	15	30.2	86.416	
EP121	32.6	30.4	43.6	86.416	
EP122	33.4	26.6	53.8	86.234	土師器細片、ESB08
EP123	19.4	18.6	48.6	86.11	ESB01
EP124	30.8	25	19.2	86.44	ESB03
EP125	29.2	-	38.8	86.504	
EP126	29	8.8	20.2	86.26	
EP127	17.1	15.6	40	86.472	
EP128	42.4	34.9	49.6	86.172	
EP129	55.6	27.6	24.8	86.378	
EP130	54.2	34.2	43.8	86.246	
FP001	34	(13)	20	85.610	
FP002	(18)	(16)	20	85.560	
FP003	28	26	15.8	85.570	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
FP004	30	22	16	85.750	
FP005	27	22	15	85.650	
FP006	24	20	8	85.780	
FP007	25	22	11.3	85.750	
FP008	30	20	13.2	85.740	
FP009	34	28	13.3	85.590	
FP010	24	18	22.1	85.600	
FP011	28	18	21.6	85.530	
FP012	40	16	13.4	85.550	
FP013	40	30	18	85.570	
FP014	38	30	20.1	85.620	
FP015	(27)	24	26.5	85.570	
FP016	30	22	13.6	85.570	
FP017	28	24	32.5	85.400	FSB08
FP018	34	30	27.3	85.520	FSB07
FP019	28	24	11	85.610	FSB13
FP020	28	20	15.1	85.610	FSB07
FP021	(18)	22	21.4	85.540	
FP022	38	28	43.1	85.300	FSB08
FP023	20	14	9.1	85.660	
FP024	28	22	27.6	85.480	
FP025	26	24	10.7	85.600	FSB07
FP026	20	16	7.4	85.660	FSB13
FP027	42	32	10.9	85.640	FSB12
FP028	28	16	21	85.460	FSB07
FP029	28	24	33.6	85.410	FSB07
FP030	30	24	14.2	85.630	
FP031	30	22	10.8	85.600	FSB08
FP032	28	22	20.6	85.530	
FP033	(20)	24	34	85.320	土師器片
FP034	30	24	33.1	85.360	
FP035	34	22	12.5	85.580	FSB06
FP036	21	(15)	16.1	85.630	FSB13
FP037	33	28	23.2	85.460	FSB12
FP038	36	28	36.5	85.330	
FP039	(52)	18	13.1	85.560	
FP040	38	24	8.4	85.640	FSB13
FP041	34	26	30.2	85.420	
FP042	32	28	15.1	85.570	
FP043	60	(38)	13.1	85.620	
FP044	44	28	12.9	85.580	
FP045	22	21	15.2	85.580	FSB07
FP046	36	24	11.1	85.640	FSB04
FP047	26	20	11.4	85.590	
FP048	50	40	14.8	85.500	FSB12
FP049	30	26	14.2	85.530	
FP050	40	36	14.5	85.450	FSB04
FP051	34	28	15.5	85.510	FSB08
FP052	38	30	12.1	85.540	FSB12
FP053	28	26	14.8	85.580	FSB11
FP054	30	24	8.3	85.620	
FP055	26	18	11.9	85.600	
FP056	34	24	19.1	85.500	
FP057	46	32	17.5	85.500	FSB11
FP058	(46)	(17)	15.4	85.480	FSB05

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
FP059	38	22	15.6	85.570	FSB06
FP060	29	(21)	16.7	85.540	FSB12
FP061	28	20	9.8	85.550	
FP062	(22)	18	7	85.560	
FP063	(26)	24	13.4	85.360	FSB05
FP064	(20)	26	13.5	85.510	FSB11
FP065	40	30	21.4	85.470	FSB06
FP066	20	(16)	4	85.590	
FP067	48	30	24.6	85.520	FSB04
FP068	34	20	10.8	85.600	
FP069	25	23	48.6	85.290	FSB04
FP070	28	24	13.5	85.540	FSB11
FP071	36	30	60.2	85.100	FSB11
FP072	30	24	15.5	85.600	
FP073	25	20	36.9	85.300	
FP074	28	24	12.1	85.530	
FP075	40	34	44.5	85.300	土師器壘など、FSB04
FP076	26	20	62.5	85.170	非クロコ壘など、FSB08
FP077	56	(23)	16.9	85.500	
FP078	38	30	34.6	85.270	FSB05
FP079	26	20	10.5	85.520	FSB05
FP080	36	26	25.8	85.390	FSB04
FP081	(31)	27	71.7	84.990	FSB04
FP082	42	34	18.3	85.540	FSB12
FP083	40	36	19.9	85.440	FSB06
FP084	50	(30)	17.6	85.450	
FP085	(26)	30	10.7	85.430	
FP086	30	24	47.4	85.280	FSB13
FP087	36	28	13.7	85.558	
FP088	40	35	12.6	85.530	FSB10
FP089	24	20	39.3	85.310	
FP090	20	12	10.3	85.620	
FP091	24	20	33.2	85.450	
FP092	30	26	30.4	85.450	
FP093	28	18	24.8	85.440	
FP094	42	30	11.3	85.550	
FP095	34	26	15	85.580	FSB02
FP096	26	18	8.3	85.510	
FP097	26	20	47	85.230	FSB03
FP098	24	22	12.4	85.660	
FP099	(24)	22	12.8	85.540	
FP100	22	16	31	85.470	FSB02
FP101	24	18	8.8	85.570	
FP102	(46)	40	17	85.460	
FP103	34	24	21.7	85.420	FSB10
FP104	22	18	10.4	85.610	
FP105	24	20	21	85.490	FSB02
FP106	28	20	57.4	85.250	
FP107	40	28	14	85.610	FSB02
FP108	(36)	24	10.8	85.560	
FP109	(34)	30	24.5	85.440	
FP110	54	44	17.3	85.470	
FP111	34	(30)	14	85.520	
FP112	(20)	16	14	85.500	FSB03
FP113	26	20	16	85.480	FSB02

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
FP114	36	26	54	85.120	
FP115	30	20	17.1	85.760	
FP116	34	22	18.5	85.640	
FP117	(39)	(18)	41.1	85.309	
FP118	50	38	13.1	85.490	FSB10
FP119	20	16	9.5	85.520	FSB03
FP120	32	26	8.9	85.640	FSB07
FP121	26	20	10.8	85.600	
FP122	28	20	34	85.220	FSB04
FP123	30	20	11.1	85.450	FSB04
FP124	38	(16)	13.9	85.640	土師器莖片
FP125	30	24	36	85.320	
FP126	34	30	18.5	85.500	
FP127	42	30	16.3	85.570	
FP128	40	30	26	85.890	
FP129	28	27	25	85.891	
FP130	30	23	13	86.029	
FP131	44	27	21	85.958	
FP132	21	14	23	85.949	
FP133	30	22	14.6	85.560	FSB11
FP134	32	(18)	54	85.050	FSB08
FP135	(16)	13	39	85.390	
FP136	22	12	9	85.500	
FP137	34	20	13.5	85.550	
FP138	(23)	11	9	85.620	
FP139	22	20	21.4	85.500	
FP140	24	20	15	85.500	
FP141	(39)	31	23	85.580	
FP142	36	26	18.4	85.480	
FP143	欠番				
FP144	30	20	15.8	85.140	
FP145	24	14	13.6	85.120	
FP146	26	20	10	85.420	FSB09
FP147	24	18	15.4	85.520	FSB09
FP148	30	20	16	85.420	FSB09
FP149	30	24	12	85.400	FSB09
FP150	25	22	13.6	85.580	FSB09
FP151	30	(20)	17.4	85.490	
FP152	(13)	(9)	16.5	85.420	
FP153	24	18	17.5	85.370	
FP154	20	15	17.5	85.350	
FP155	28	(14)	31.7	85.000	FSB05
FP156	33	(11)	10.9	85.320	
FP157	22	(13)	18.2	85.270	
FP158	21	18	8	85.360	
FP159	20	(15)	12.6	85.380	
FP160	33	(17)	26.5	85.120	
FP161	24	18	22.4	85.250	
FP162	30	20	12	85.360	
FP163	30	26	11	85.330	
FP164	32	24	18	85.160	
FP165	30	14	13.6	85.230	
FP166	40	30	14.8	85.220	
FP167	30	20	14.8	85.560	
FP168	30	18	14.7	85.570	FSB07

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
FP169	42	28	27.6	85.090	
FP170	44	30	41.3	85.002	土師器片、FSB05
FP171	34	28	30.2	85.008	FSB05
FP172	24	18	41.7	85.520	非ロクロ杯など、FSB11
FP173	16	15	30.2	85.520	
FP174	28	20	13	85.500	
FP175	26	18	9.6	85.570	FSB03
FP176	26.7	20.9	11.6	85.546	FSB11
FP177	欠番				
FP178	27	(18)	12.7	85.550	
FP179	(49)	(11)	13.1	85.530	
FP180	28	20	-	85.620	
FP181	30	26	-	85.300	
FP182	20	18	-	85.648	
FP183	24	17	-	85.680	
FP184	70	42	-	85.596	
FP185	欠番				
FP186	26	(21)	-	85.649	
FP187	(35)	30	-	85.651	
FP188	24	20	-	85.611	
FP189	20	(12)	-	85.614	
FP190	20	18	-	85.638	
FP191	(32)	26	-	85.605	FSB10
FP192	34	(27)	21.3	85.466	
FP193	34	26	-	85.620	
FP194	61	(44)	-	85.626	
FP195	(52)	52	-	85.625	
FP196	(48)	41	-	85.627	FSB10
FP197	(69)	60	-	85.634	
FP198	95	79	-	85.619	
GP001	37	27	10.5	85.260	
GP002	29	(11)	27	85.140	
GP003	34	27	35.1	85.020	
GP004	29	22	14.6	85.200	
GP005	35	19	6.6	85.280	
GP006	28	22	8.5	86.250	
GP007	39	33	21.5	85.140	
GP008	(40)	(18)	19.3	85.160	
GP009	(38)	32	31	85.020	
GP010	(14)	(11)	8.5	86.232	
GP011	欠番				
GP012	36	25	25.2	85.120	
GP013	31	(18)	4.2	86.297	
GP014	(33)	25	15.2	85.210	
GP015	35	29	21.8	85.120	
GP016	34	28	12.9	85.230	
GP017	39	26	15.2	85.200	
GP018	(23)	(11)	7.8	86.200	
GP019	32	25	7.1	86.280	
GP020	(30)	(24)	5.3	86.200	
GP021	35	32	18.1	86.240	
GP022	45	27	21.9	86.220	
GP023	42	30	18.3	86.141	
GP024	26	19	27.6	86.260	
GP025	29	20	13.8	86.270	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
GP026	37	32	21	86.220	
GP027	43	31	12.9	86.240	
GP028	30	15	7.6	86.180	
GP029	15	11	12.9	86.100	
GP030	39	31	28.1	86.000	
GP031	33	28	7.7	86.170	
GP032	35	27	9.7	85.190	
GP033	38	21	16.2	85.110	
GP034	44	25	27.2	85.960	
GP035	25	23	7.1	86.220	
GP036	37	23	11.1	86.140	
GP037	18	12	3.3	86.060	
GP038	欠番				
GP039	欠番				
GP040	20	17	2.8	86.080	
GP041	30	22	2.3	86.200	
GP042	36	23	2.8	86.050	
GP043	19	13	3	86.060	
GP044	48	36	25.5	86.120	
GP045	32	29	28.4	86.150	
GP046	29	18	33	85.930	
GP047	38	17	11.3	85.820	
GP048	32	23	32.8	85.810	
GP049	欠番				
GP050	32	18	6.8	86.030	
GP051	31	19	10.5	85.960	
GP052	35	18	39.6	86.000	
GP053	29	19	14.5	86.120	
GP054	40	29	14	85.980	
GP055	欠番				
GP056	21	12	9	86.040	
GP057	26	15	14	86.010	
GP058	欠番				
GP059	18	15	16	86.040	
GP060	23	19	7		
HP001	32	24.4	33.4	86.316	
HP002	欠番				
HP003	25.4	21.8	18	86.468	
HP004	18.6	16.4	22.2	86.396	
HP005	20.8	18.8	31	86.33	
HP006	37.6	34.6	34.6	86.33	
HP007	28.6	22.2	21.4	86.414	
HP008	21.4	19.8	21	86.468	
HP009	27.2	25.6	35.2	86.306	
HP010	21.2	21	34.2	86.288	
HP011	24.6	23.6	21.4	86.426	
HP012	22.8	20.8	17.2	86.48	
HP013	27.6	26.4	20.4	86.46	
HP014	19.4	16.6	35.6	86.244	
HP015	28.8	22	16.2	86.488	
HP016	22.8	19.2	24	86.418	
HP017	24.4	24.4	38	86.238	
HP018	16.6	14.2	18.8	86.442	
HP019	25.2	20.2	16	86.568	
HP020	27.4	15.2	22.4	86.378	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
HP021	27	26.6	19.6	86.47	
HP022	24	22.6	17.2	86.486	
HP023	18.6	12	13.4	86.492	
HP024	19.6	18.2	11.2	86.51	
HP025	28.8	24.8	20.4	86.466	
HP026	30	19.8	26	86.37	
HP027	24.8	22	30.6	86.286	
HP028	29.2	21.2	51	86.138	
HP029	21.6	18	14.8	86.49	
HP030	29	23.2	19.2	86.434	
HP031	23.2	17	10	86.552	
HP032	24.8	23.6	19.6	86.362	
HP033	22.8	21.4	17	86.508	
HP034	41.2	34.6	19.8	86.476	
HP035	19.6	12.2	15	86.46	
HP036	27.6	26	16.8	86.5	
HP037	欠番				
HP038	24	6.2	12.8	86.138	
HP039	31	27.6	57.8	86.048	
HP040	31.4	29.4	24	86.418	
HP041	20.2	15.2	8.8	86.404	
HP042	欠番				
HP043	19	17	20.2	86.408	
HP044	29.8	26.8	33.6	86.162	
HP045	27.6	23.4	19.8	86.326	土師器細片
HP046	23.6	21.4	16.8	86.416	
HP047	30.8	27.4	19.6	86.386	
HP048	24.8	21.8	19	86.454	
HP049	26.2	19.4	19.8	86.426	
HP050	20.4	16.6	15	86.478	
HP051	41.8	40	18.4	86.458	
HP052	42.4	32.4	16	86.374	
HP053	24	21.2	40.8	86.232	
HP054	27	23	17.8	86.504	
HP055	20.4	16	19	86.508	
HP056	31	23	34.2	86.308	
HP057	26.6	26	27.2	86.36	
HP058	25.6	23.4	18.4	86.426	
HP059	21.4	20.4	18.8	86.456	
HP060	22.6	18.6	14	86.488	
HP061	33.8	27.6	57.8	86.086	
HP062	41.6	26.4	32.6	86.324	
HP063	24.6	21.2	14.2	86.428	土師器細片
HP064	21.2	15.8	23.6	86.328	
HP065	25.8	22.6	17.2	86.324	
HP066	29.2	28.6	41	86.116	
HP067	31	27	39	86.19	
HP068	欠番				
HP069	21.6	18.8	40.6	86.074	
HP070	16.6	14.6	12	86.466	
HP071	20.4	-	12.8	86.492	
HP072	欠番				
HP073	35	25.2	17	86.362	
HP074	28.2	16.2	18.2	86.424	
HP075	25.4	21.6	27.4	86.31	



柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
HP076	44.6	30.2	31.4	86.18	
HP077	31	28.2	24.4	86.29	
HP078	31.2	26	22.6	86.43	
HP079	27.6	24.4	32.4	86.16	
HP080	30.4	-	15	86.384	
HP081	37.2	-	65.8	85.85	
HP082	18	-	19.8	86.072	
HP083	28.6	21	13	86.354	
HP084	44.3	31.1	20.6	86.364	
HP085	21.2	-	22.6	86.298	
HP086	33	27.2	12.6	86.396	
HP087	34.8	28.6	20.6	86.318	
HP088	26.8	-	19	86.252	
HP089	38.2	30.5	33.8	86.182	
HP090	43	13.8	12.6	86.318	
HP091	27.2	19.8	14.6	86.286	
HP092	28.2	24.4	10	86.198	HSB02
HP093	37	28.6	31.2	86.002	HSB02
HP094	25.2	22.2	28.8	86.034	
HP095	28.8	24.4	13	86.18	
HP096	28.8	25.8	19.4	86.148	HSB01
HP097	27.4	26	26.6	86.066	
HP098	31.2	29.6	19.6	86.07	
HP099	40.4	23	16.4	86.11	
HP100	27.6	22.8	23	86.062	
HP101	欠番				
HP102	26.4	21.8	19	86.148	
HP103	28.8	20.2	16	86.17	
HP104	25.2	24.2	18.6	86.164	
HP105	42.2	28.4	21.2	86.118	HSB02
HP106	21.2	20	10.6	86.244	
HP107	22.4	22	37	85.988	
HP108	22.8	20.8	18.6	86.166	
HP109	29.6	29	12	86.252	
HP110	24.2	20.4	36	85.986	
HP111	34.6	29	29	86.028	
HP112	42.6	39.8	36.2	86.026	HSB02
HP113	23.8	22	24.4	86.078	
HP114	32.6	28	32.6	85.986	
HP115	29.8	25	33.4	85.984	
HP116	欠番				
HP117	32.2	30.2	28	86.042	HSB01
HP118	36.8	27.2	42.2	85.89	
HP119	27	-	26.4	86.06	
HP120	32.6	27.2	21.4	86.064	HSB02
HP121	26.8	22.8	40.4	85.902	
HP122	27.2	25	10	86.204	
HP123	25.2	23.6	18.6	86.176	
HP124	27	25.2	15.2	86.206	
HP125	31	25.8	14.6	86.14	
HP126	25.4	23.6	15.4	86.168	
HP127	23	14.2	7.4	86.282	
HP128	39.8	32.6	19	86.082	
HP129	21.6	20.8	13.6	86.134	
HP130	37.6	17.6	18	86.198	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
HP131	27.6	23	20.4	85.648	
HP132	25.8	21.4	14.6	86.14	
HP133	26	24.4	20.2	86.142	
HP134	22.2	19	20.4	86.138	
HP135	31.8	30	29.8	86.03	
HP136	33.4	29.4	19.8	86.152	
HP137	20	17.4	17.8	86.094	
HP138	24.4	21.6	18.8	86.054	
HP139	30	27.8	30.4	86.12	土師器細片
HP140	32.8	24.6	14	86.122	
HP141	30.4	27.6	12	86.15	
HP142	24.6	19.2	22.2	86.062	
HP143	27	23	16.8	86.162	HSB02
HP144	23.2	21.2	18.4	85.73	
HP145	19	17.2	21.2	85.682	
HP146	25.4	13.6	24.6	85.628	
HP147	25.6	24.4	18.6	85.722	
HP148	24.6	23	33.4	85.53	
HP149	26.2	-	19.4	85.666	
HP150	21.8	15.6	20.6	85.648	
HP151	20.4	19.6	16.6	85.574	
HP152	32	27	25.4	85.576	
HP153	30.4	19.8	23.2	85.614	
HP154	23.8	21	31.4	85.548	
HP155	欠番				
HP156	17	13.4	19.4	85.6	
HP157	16.8	13	16.2	85.644	土師器甕片
HP158	28.4	24.8	33.6	85.3540	
HP159	27.2	18.4	38.2	85.478	
HP160	30.6	28.2	28.2	85.57	
HP161	25.8	18.4	24.2	85.502	
HP162	33.8	21.4	11.8	85.766	
HP163	23.8	19	26.2	85.66	
HP164	18.2	16.6	18.4	85.664	
HP165	29.4	19.6	35.4	85.466	
HP166	98.4	78	38.2	85.522	
HP167	23.6	20.8	2	85.438	
HP168	21.2	18.8	49.6	85.41	
HP169	21.8	19.6	21.4	85.714	
HP170	21.2	13	23.4	85.73	
HP171	23	20.8	23.8	85.754	
HP172	59.8	32.6	13.4	85.746	
HP173	27	25.8	24.6	85.582	
HP174	23	9.4	14.6	85.76	土師器細片
HP175	19.6	17.2	15.2	85.792	
HP176	欠番				
HP177	68	39	11	86.164	
HP178	21	18.2	21	85.666	
HP179	15.4	14.2	47.8	85.402	
HP180	21.2	17.2	10	85.806	
HP181	32.6	21.4	43.2	85.504	
HP182	26.2	24.2	36.2	85.484	
HP183	40	37.6	22.6	85.476	
HP184	欠番				
HP185	34.4	32	19.2	85.39	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
HP186	55.6	35.4	29.2	86.026	
HP187	29.4	16.8	18.8	85.44	
HP188	欠番				
HP189	35.2	28.4	64	85.19	
HP190	28.6	23.4	53.6	85.286	
HP191	36.2	31.2	17.2	86.096	
HP192	79.4	-	18.6	86.088	
HP193	35.4	30.4	11	86.154	
HP194	76.2	73.8	19.2	86.07	
HP195	30.6	19.8	19.6	86.146	
HP196	27.8	10	15	86.148	HSB01
HP197	32.2	29.8	21.2	86.11	
HP198	26.4	23.4	12.6	86.218	
HP199	34.6	30.6	19	86.18	
HP200	26.4	23.4	17.8	86.094	
HP201	28	27	28	86.136	
HP202	27.2	22.2	33.6	85.93	
HP203	55.8	52.4	29.2	85.994	
HP204	37.6	31.8	20.4	86.078	
HP205	29.8	27	41	85.974	HSB01
IP001	27.6	20.2	20.4	85.602	
IP002	32.8	22	17.4	85.662	
IP003	24.6	12.6	23	85.68	
IP004	49.2	32	21	85.654	土師器細片
IP005	40.4	12.4	31.6	85.576	
IP006	19	13.4	10.2	85.622	土師器細片
IP007	17.6	-	34.4	85.788	土師器細片
IP008	29.4	-	22.4	85.488	
IP009	55.4	40.4	18.6	85.538	
IP010	34.8	19.4	9.2	85.944	
IP011	20.2	12	24.4	86.002	
JP001	40	38	11	83.750	
JP002	28	25	43	83.740	
JP003	26	24	25	83.870	
KP001	33	26	25	85.510	
KP002	31	28	26	85.510	
KP003	31	29	25	85.540	
KP004	25	22	14	85.660	
KP005	34	23	15	85.680	
KP006	29	26	42	85.360	
KP007	24	22	12	85.600	
KP008	21	18	10.1	85.700	
KP009	43	41	29.6	85.500	
KP010	19	16	9	85.600	
KP011	26	22	33.6	85.470	
KP012	27	26	35.9	85.420	
KP013	31	22	6.4	85.680	土師器細片
KP014	(36)	(14)	6	85.740	
KP015	28	27	48.3	85.470	
KP016	24	23	25.1	85.480	
KP017	36	25	36.1	85.490	
KP018	欠番				
KP019	23	21	19.9	85.620	
KP020	26	24	22.5	85.560	
KP021	27	26	42	85.390	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
KP022	25	24	24.7	85.470	
KP023	30	24	132	84.360	
KP024	30	29	43.6	85.330	
KP025	43	33	15	85.570	
KP026	24	22	17.5	85.610	
KP027	24	21	16.4	85.590	
KP028	24	22	21.1	85.570	
KP029	23	18	10.2	85.640	
KP030	23	17	26.4	85.520	
KP031	18	18	22	85.570	
KP032	27	16	12.5	85.610	
KP033	28	23	17.2	85.500	
KP034	24	17	20.3	85.580	
KP035	19	16	14.5	85.600	
KP036	26	21	30.6	85.500	非ロクロ甕など
KP037	19	18	16.6	85.600	
KP038	21	17	25.8	85.490	
KP039	22	18	21.7	85.530	
KP040	20	18	14.3	85.490	
KP041	24	22	24.5	85.510	
KP042	23	19	18.6	85.570	
KP043	35	27	16.3	85.590	
KP044	23	21	16.3	85.570	
KP045	27	26	23.7	85.460	
KP046	48	40	19.1	85.520	非ロクロ甕など
KP047	(30)	(21)	27.8	85.470	非ロクロ甕など
KP048	(31)	(23)	12.9	85.590	
KP049	(32)	(15)	26.6	85.460	
KP050	23	21	25.4	85.480	
KP051	32	27	40.3	85.330	
KP052	31	30	12.2	85.610	
KP053	33	22	15.4	85.590	
KP054	21	14	8	85.680	土師器細片
KP055	30	23	8	85.680	
KP056	29	26	18.5	85.500	
KP057	27	24	23.2	85.480	
KP058	31	24	27.3	85.470	
KP059	20	20	30.1	85.440	
KP060	28	21	12.4	85.610	
KP061	18	16	-	85.679	検出のみ
KP062	27	22	15.4	85.592	
LP001	40	31	34.4	85.370	
LP002	43	43	18.5	85.420	
LP003	44	30	18.8	85.500	
LP004	31	(19)	21.8	85.500	
LP005	32	25	24.1	85.110	
LP006	26	19	15.7	85.200	
LP007	24	20	17.3	85.150	
LP008	22	18	17.6	85.120	
LP009	35	27	26.1	85.020	
LP010	(26)	24	21.3	85.170	
LP011	26	21	35.9	85.000	
LP012	30	23	30.9	85.070	
LP013	32	26	13.6	85.090	
LP014	34	27	26.6	84.960	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
LP015	23	19	17.3	85.050	
LP016	32	22	21.6	84.990	
LP017	25	20	17.3	85.059	
LP018	26	21	23.6	84.990	
LP019	37	23	23.1	84.910	
LP020	27	22	50.1	84.830	
LP021	33	27	13.8	85.080	
LP022	38	22	15.7	85.020	
LP023	48	32	36.7	84.860	
LP024	33	27	17.5	85.080	
LP025	28	20	23.9	84.910	
LP026	27	20	11.4	84.940	
LP027	35	30	9.6	84.920	
LP028	30	23	15.5	84.880	
LP029	(27)	25	7.9	84.940	
LP030	23	18	13	84.930	
LP031	51	31	19.6	84.830	須恵器堯片
LP032	31	25	29.2	84.740	
LP033	43	34	9.8	84.900	
LP034	38	26	21.5	85.420	
LP035	40	23	20.3	84.800	
LP036	33	21	14.9	84.730	
LP037	33	23	29.4	84.650	
LP038	35	27	36.9	84.570	
LP039	34	29	34.9	84.600	
LP040	43	26	31.3	84.750	
LP041	38	31	27.7	84.680	
LP042	30	24	15.8	84.680	
LP043	(25)	(14)	12.5	84.760	
LP044	(10)	(8)	13	84.810	
LP045	(18)	(11)	12.5	84.840	
LP046	30	25	49.1	84.440	
LP047	(18)	(12)	14.3	84.890	
LP048	(24)	(21)	24.7	84.690	
LP049	39	26	35.1	84.580	
LP050	(26)	(23)	23.4	84.700	
LP051	37	33	18.2	84.710	
LP052	33	25	18.4	84.830	
LP053	38	30	33.5	84.730	
LP054	25	22	30.7	84.700	
LP055	(19)	21	13.4	84.850	
LP056	37	30	39.4	84.640	
LP057	37	29	34.5	84.580	
LP058	45	33	39.3	84.660	
LP059	欠番				
LP060	29	(17)	21.1	84.630	
LP061	33	21	47	84.420	
LP062	41	23	21.4	85.210	
LP063	27	25	32	84.700	
LP064	49	38	37.8	84.510	
LP065	36	30	24.6	84.550	
LP066	32	26	17.8	84.630	
LP067	(30)	27	22.6	84.590	
LP068	(22)	20	16.2	84.640	
LP069	40	28	20.3	84.610	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
LP070	48	38	28.8	84.570	
LP071	30	26	15	84.660	
LP072	24	23	13	84.900	
LP073	30	23	13.1	84.890	
LP074	(31)	29	28.2	84.720	
LP075	(19)	23	19.2	84.750	
LP076	26	20	15.7	84.860	
LP077	31	25	26.8	84.660	
LP078	46	31	27.1	84.700	
LP079	32	26	25.7	84.620	
LP080	30	24	19.4	84.640	
LP081	40	31	29.3	84.560	
LP082	28	22	53.4	84.250	
LP083	41	37	25.8	84.610	
LP084	28	22	20.6	84.700	
LP085	33	29	33.6	84.310	
LP086	30	24	11	84.740	
LP087	28	(17)	20.5	84.310	
LP088	欠番				
LP089	24	24	46.4	84.988	
MP001	21	14	11.5	84.540	
MP002	40	30	9.7	84.600	
MP003	20	18	10	84.510	
MP004	22	20	21.8	84.390	
MP005	23	18	36.6	84.320	
MP006	40	34	21	84.440	MSB01
MP007	36	28	13	84.530	MSB02
MP008	30	28	40.4	84.340	MSB02
MP009	欠番				
MP010	(15)	(10)	11.8	84.620	
MP011	22	20	18.4	84.520	
MP012	30	20	12	84.560	
MP013	26	20	8.5	84.630	
MP014	24	18	15.8	84.600	
MP015	(15)	(10)	14	84.650	
MP016	25	22	19	84.410	
MP017	22	18	17	84.440	
MP018	30	22	41	84.180	土師器細片
MP019	24	20	16	84.480	
MP020	30	25	9.2	84.640	
MP021	30	28	20.6	84.440	
MP022	24	19	29	84.240	
MP023	30	20	44.3	84.280	MSB02
MP024	24	18	19.4	84.420	
MP025	46	32	25	84.450	
MP026	30	20	14	84.420	
MP027	24	17	14.6	84.560	
MP028	30	26	24	84.390	MSB01
MP029	31.9	25.5	14.8	84.450	
MP030	欠番				
MP031	34	30	36.8	84.430	
MP032	32	30	18.7	84.560	土師器細片
MP033	23	20	14.9	84.560	
MP034	21	19	11.1	84.590	
MP035	40	34	23.3	84.470	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
MP036	36	30	36	84.330	MSB03
MP037	30	27	40.8	84.320	
MP038	36	30	16	84.480	MSB03
MP039	43	30	19.4	84.580	
MP040	20	20	15.1	84.580	
MP041	22	20	12.3	84.570	
MP042	30	16	16.2	84.520	
MP043	15	11	16.9	84.520	
MP044	22	20	30	84.430	土師器細片
MP045	36	30	22.1	84.480	
MP046	40	30	33.2	84.400	MSB03
MP047	30	20	17.1	84.530	
MP048	30	20	20	84.539	
MP049	38	30	38.3	84.340	MSB03
MP050	40	35	44.1	84.240	MSB03
MP051	32	28	36	84.300	
MP052	36	30	31.7	84.340	土師器細片、MSB03
MP053	20	12	14.9	84.440	
MP054	24	20	17.8	84.400	
MP055	34	30	18	84.340	土師器細片
MP056	40	30	22.4	84.400	
MP057	20	10	18.4	84.380	
MP058	24	17	20.1	84.370	
MP059	30	20	15.5	84.410	
MP060	30	28	45.5	84.160	
MP061	40	38	35.3	84.220	
MP062	34	24	44.6	84.200	
MP063	30	26	31.6	84.240	
MP064	34	30	11.7	84.410	
MP065	25	23	16.9	84.390	
MP066	12	10	16.1	84.540	
MP067	30	22	26.3	84.490	
MP068	60	40	22	84.300	
MP069	26	20	33.5	84.220	
MP070	34	28	52	84.020	
MP071	30	26	18.2	84.340	
MP072	20	16	19.2	84.300	
MP073	30	22	34.7	84.410	
MP074	24	20	16.6	84.220	
MP075	30	22	16.3	84.210	
MP076	26	20	16.3	84.260	
MP077	24	20	27.7	84.230	
MP078	欠番				
MP079	28	22	22.2	84.180	
MP080	24	20	16.2	84.210	土師器細片
MP081	43	40	41.2	84.210	
MP082A	(47)	30	15	84.280	
MP082B	23	20	36	84.019	
MP083	22	21	14.6	84.320	
MP084	20	16	16.5	84.270	
MP085	30	20	25.6	84.100	
MP086	40	30	28.4	83.990	
MP087	(20)	30	28.4	84.010	
MP088	30	24	32	84.140	
MP089	34	20	17.6	84.260	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
MP090	40	32	33	84.090	土師器細片
MP091	30	20	29.3	84.130	
MP092	26	24	26	84.130	
MP093	24	20	21.4	84.160	
MP094	20	18	13.1	84.220	
MP095	38	30	22.9	84.110	
MP096	24	20	58.4	84.110	
MP097	28	23	24.5	84.240	
MP098	34	28	15.9	84.280	
MP099	26	20	52.3	84.020	
MP100	20	15	21.5	84.130	
MP101	74	58	13.4	84.300	
MP102	(70)	60	20.9	84.140	非ロクロ甕など
MP103	(68)	(65)	16.8	84.320	非ロクロ甕など
MP104	38	28	33.2	84.900	
MP105	30	26	18.8	84.170	
MP106	30	20	16.3	84.480	土師器細片
MP107	40	24	12	84.140	
MP108	40	26	17.1	84.450	
MP109	34	30	16.4	84.450	
MP110	42	40	28.7	84.420	MSB02
MP111	32	24	18.4	84.220	
MP112	20	18	13.1	84.260	
MP113	30	20	29.3	84.180	
MP114	28	24	24.3	84.460	
MP115	30	25	13	84.580	
MP116	50	40	21.2	84.550	
MP117	52	48	13.1	84.600	
MP118	24	20	16.6	84.570	
MP119	30	22	13.1	84.600	土師器細片
MP120	23	15	45.1	84.480	
MP121	72	58	19.3	84.560	
MP122	50	30	25.5	84.470	
MP123	30	24	37.1	84.320	
MP124	26	18	22.8	84.500	
MP125	30	24	9	84.450	
MP126	22	18	26.7	84.280	
MP127	(29)	(14)	27	84.460	
MP128	欠番				
MP129	34	30	11.8	84.580	
MP130	20	16	8.6	84.620	
MP131	24	20	17.1	84.570	
MP132	40	32	18.7	84.450	
MP133	24	20	10.8	84.570	
MP134	欠番				
MP135	(52)	50	21	84.470	
MP136	(30)	(25)	26.8	84.340	
MP137	30	26	13.6	84.540	
MP138	34	28	9.4	84.570	
MP139	26	(20)	14.8	84.440	
MP140	20	16	15.2	84.510	MSB01
MP141	30	24	26.4	84.450	
MP142	26	20	9.8	84.540	
MP143	(20)	10	10	84.560	
MP144	40	30	15.6	84.460	MSB02



柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
MP145	42	30	10.7	84.460	
MP146	24	(14)	41.8	84.380	
MP147	28	22	10.4	84.470	MSB01
MP148	30	26	10.2	84.530	MSB01
MP149	32	20	12.1	84.540	
MP150	欠番				
MP151	34	30	30.2	84.410	
MP152	40	34	37.1	84.460	
MP153	30	26	26	84.370	ロクロ莖など
NP001	59.2	54	52.6	84.07	土師器細片
NP002	34	30.4	41.2	84.442	
NP003	32.2	22	100.8	84.636	
NP004	27.8	18.2	11	84.834	
NP005	19.8	3.8	29	84.636	
NP006	24.6	21.6	19.6	84.732	
NP007	22.8	20.6	14.2	84.83	
NP008	32	-	33.4	84.174	
NP009	21.4	9.6	9.8	85.486	
NP010	33.8	17.2	27.4	85.438	
NP011	17	10.8	16.6	85.44	
NP012	18.2	15.6	11.4	85.472	
NP013	19.2	9.2	8.8	85.514	
NP014	28.2	25	27.8	85.288	NSB02
NP015	28	25.8	30.2	85.27	NSB02
NP016	21.2	14.2	16.8	85.448	
NP017	20	13.8	25.6	85.362	
NP018	26.8	24.2	15	85.322	
NP019	32.4	-	26	85.432	
NP020	25	17.8	17.2	85.358	
NP021	20.8	17.6	23.2	85.228	NSB01
NP022	25	20.2	16.6	85.334	NSB01
NP023	20.8	19.8	9.4	85.38	NSB01
NP024	19.4	14.8	7	85.4	NSB01
NP025	69.4	43.3	25	84.75	
NP026	24.4	-	24.4	84.902	
NP027	32.7	24.7	31.4	84.826	
NP028	32.2	26.4	16.2	84.986	
NP029	28.6	23.6	36.6	84.946	
NP030	39.4	23.4	18	84.954	
NP031	33.2	29.4	28.2	84.81	
NP032	32	29.6	46.4	84.698	
NP033	27.6	26.6	40.4	84.876	
NP034	23.2	20	13.4	85.182	
NP035	30.6	28.2	65.2	84.674	土師器細片
NP036	25	-	26.4	84.946	
NP037	30.8	29.6	59.4	84.68	土師器細片、剥片
NP038	39.8	38.4	27.6	85.05	
NP039	欠番				
NP040	44.2	32.4	19.2	84.904	土師器細片
NP041	39.2	31.4	16.8	84.826	土師器杯など細片
NP042	25.2	24.6	22	84.558	
NP043	40.4	34.6	33	84.21	土師器細片
NP044	29.4	27.2	29.4	85.294	NSB02
NP045	46	-	65.5	83.728	
NP046	37	37	31.5	83.908	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
NP047	34	31	29	83.934	土師器細片
NP048	51	41	45.5	83.918	土師器細片
NP049	36	-	35.5	84.086	ロクロ甕など
NP050	34	30	46	83.814	
NP051	22	20	30	83.974	土師器細片
NP052	17	14	21.5	84.048	土師器細片
NP053	19	16	20.5	84.004	
NP054	27	24	35	83.974	
NP055	16	16	22.5	84.034	
NP056	50	41	48.5	83.708	
NP057	20	20	26.5	83.948	
NP058	45	40	59	83.738	土師器細片
NP059	25	22	13.5	84.154	
OP001	46.4	42	22.2	85.052	剥片
OP002	42.4	24.6	17.2	85.102	剥片
OP003	32.4	32	36.4	84.904	
OP004	28	23	31.4	84.952	
OP005	32.6	-	46.4	84.82	
OP006	19.2	7.8	25.2	85.002	
OP007	18	17	17.4	85.04	
OP008	24	13.6	21.4	84.968	
OP009	17.2	13.4	32.4	85.37	
OP010	24.4	21.4	30	84.912	
OP011	23.2	15	17.8	85.018	
OP012	30.8	28.4	26.8	84.93	
OP013	23.2	21.4	14	85.042	
OP014	28.8	23.8	12.4	85.052	
OP015	29.6	25.6	20.2	85.014	
OP016	27.4	22.6	21	84.984	OSB07
OP017	28.4	27.6	23.2	84.958	
OP018	25.6	23.6	19.8	84.97	OSB07
OP019	27.8	25.2	18.2	84.964	OSB07
OP020	23	22.2	17.4	85.044	
OP021	20.8	20.6	12	85.062	
OP022	38.8	30.6	27	84.91	
OP023	23.8	21.6	17.2	85.006	
OP024	25.6	24.4	15.2	85.03	
OP025	23.2	20.2	21.6	84.96	OSB07
OP026	27.6	23.6	32.8	84.854	
OP027	29.6	27	28	84.884	OSB07
OP028	26	22.4	21.8	84.952	
OP029	30.4	26.2	23.8	84.922	
OP030	21.8	20.4	28.8	84.914	OSB07
OP031	22.8	20.4	15.8	85.04	OSB04
OP032	26	24.8	18.8	84.986	OSB07
OP033	30.6	29.8	23.6	84.922	OSB07
OP034	22	12.2	10.8	85.028	
OP035	24.6	8.2	16.8	84.996	
OP036	27.4	24.6	28	84.886	OSB07
OP037	21.8	11.6	19.2	84.978	
OP038	37.8	25.8	35.6	84.818	
OP039	32.2	26.2	13.8	85.022	
OP040	50.4	47.8	35.8	84.824	
OP041	22	-	20.8	84.982	OSB04
OP042	27.2	24.4	23	84.948	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
OP043	21.2	20	18.2	85.002	OSB04
OP044	26.6	24.4	40.2	84.768	
OP045	28.2	25.2	21.2	84.966	OSB06
OP046	27.2	17	12.6	85.076	OSB05
OP047	46.8	30.2	21.4	84.974	ロクロ杯、須恵器壘など、OSB05
OP048	30.6	26.6	54	84.652	
OP049	42	34.8	22.4	84.96	OSB05
OP050	29.4	-	16.2	85.014	
OP051	29.8	25	22	84.96	
OP052	28.6	25.6	12.4	85.068	
OP053	29	21.2	26.8	84.936	
OP054	23.2	11.6	17.2	85.04	土師器細片、OSB04
OP055	30.8	23.4	11.8	85.086	土師器細片
OP056	29	28	49.2	84.676	土師器ロクロ杯、須恵器壘など
OP057	27.2	7.8	30.8	84.884	土師器細片、OSB04
OP058	20	17.6	29.4	84.886	
OP059	27.4	20.2	23	84.942	
OP060	30	27.8	32.2	84.844	OSB06
OP061	29	26.2	22	85.084	
OP062	22.9	19.2	12.8	85.152	土師器細片
OP063	36.2	35	43.8	84.742	OSB02
OP064	37.6	35	62.2	84.534	OSB03
OP065	91.6	46.8	60	84.49	土師器ロクロ杯、ロクロ壘など
OP066	37.4	32.4	43.2	84.688	OSB02
OP067	45	36.2	56.4	84.596	土師器細片、須恵器壘片、OSB03
OP068	36	29.8	49.8	84.604	OSB02
OP069	38	-	49.4	84.604	土師器杯、OSB03
OP070	27.4	21.2	24	84.96	OSB03
OP071	27	14.4	33.8	84.856	OSB04
OP072	17.2	15	23.6	84.928	
OP073	28	20.6	21.4	84.944	
OP074	32.8	-	57	84.584	剥片、OSB02
OP075	23.6	21.6	16.4	84.958	
OP076	25.6	23.8	45.6	84.64	土師器細片、OSB02
OP077	27.4	23.6	40.6	84.686	
OP078	28.4	25	28.2	84.768	土師器細片
OP079	29	28.4	17.6	84.828	OSB01
OP080	24.4	23.2	33	84.66	
OP081	29.4	21.8	28	84.864	
OP082	28	25	23.4	84.876	土師器細片
OP083	27.8	25.8	30.6	84.804	土師器細片、OSB06
OP084	34.2	27.2	34.4	84.776	
OP085	25.8	21.6	14	84.91	OSB01
OP086	24.4	-	28.8	84.726	土師器杯片
OP087	64.6	58	50.4	84.214	土師器細片
OP088	34.4	28	39.8	84.774	土師器細片、OSB06
OP089	23.2	21	42	84.696	土師器細片
OP090	34.6	10.2	41.4	84.666	土師器細片
OP091	35.8	27.8	49.4	84.59	
OP092	23.2	21.6	19.4	84.802	土師器細片、OSB01
OP093	36.2	36.2	32.6	84.586	土師器細片
OP094	27.4	23.6	36.4	84.288	
OP095	31.6	-	17.2	84.856	土師器細片
OP096	26.6	25	40	84.648	土師器細片、OSB03
OP097	36.6	32.6	44.8	84.584	土師器細片

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
OP098	28.2	25	30.8	84.762	土師器細片
OP099	28.8	23.8	46.2	84.602	OSB03
OP100	57	37.6	19	84.922	土師器ロクロ甕、ロクロ杯、須恵器甕など
OP101	45	18.2	21.8	84.752	
OP102	54.2	40.6	15.6	84.804	土師器細片
OP103	32.2	19.6	8	84.538	土師器細片
OP104	23.6	19.4	14	84.828	土師器細片
OP105	28	22.2	13.8	84.904	土師器細片、OSB01
OP106	22.8	17.2	66.4	84.276	
OP107	19.8	13.6	11	84.822	
OP108	27	24.8	33.8	84.756	土師器細片
OP109	25.4	24.2	21	84.826	土師器細片、須恵器甕
OP110	18.6	10.2	12.8	84.952	
OP111	44.4	38.2	13	85.064	土師器ロクロ甕
OP112	31.8	25.8	15	85.032	OSB05
OP113	27.4	26.2	55.2	84.618	土師器細片、OSB02
OP114	29.6	28	18.8	84.438	
OP115	27.2	22.8	25.2	84.758	
OP116	59.2	15	21.6	85.166	縄文土器片
OP117	48.6	44	40.6	85.168	
OP118	29.6	26.2	31.8	85.208	
OP119	22.6	21.6	27	85.222	
OP120	23.6	22.8	20.8	85.314	
OP121	21	5.6	27.8	85.27	
OP122	27.2	22.2	18.4	85.3	
OP123	33.4	-	27.4	85.16	
OP124	19.4	15.2	11.4	85.488	
OP125	15.8	14	11.2	85.468	
OP126	18.4	16.8	14.2	85.426	
OP127	20.4	11.2	21.2	85.374	
OP128	22.2	-	19.6	85.334	
OP129	18.2	14.2	21.8	85.302	
OP130	18.8	9.6	19.2	85.288	
OP131	32	5.4	17	85.306	
QP001	45	34	21	83.160	
QP002	23	18	17	83.205	
QP003	26	24	22	83.180	
QP004	27	24	18	83.295	
QP005	16	15	11	83.398	
QP006	16	16	39	83.015	
QP007	21	(19)	32	83.129	
QP008	29	22	26	83.184	QSB02
QP009	24	20	44	83.069	QSB02
QP010	21	19	15	83.334	QSB02
QP011	16	16	20	83.300	QSB02
QP012	18	16	23	83.275	QSB02
QP013	19	18	34	83.186	QSB02
QP014	24	18	34	83.168	QSB02
QP015	25	22	30	83.264	QSB02
QP016	28	26	41	83.069	
QP017	24	19	8	83.356	
QP018	23	15	16	83.344	
QP019	20	13	13	83.327	
QP020	31	25	28	83.195	
QP021	33	27	12	83.274	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
QP022	26	26	35	83.255	Q S B01
QP023	24	21	41	83.215	Q S B01
QP024	23	22	49	83.164	Q S B01
QP025	30	22	22	83.399	Q S B01
RP001	46	24	25	83.340	
RP002	26	18	27	83.470	
RP003	12	11	18	83.540	
RP004	58	40	99	82.300	
RP005	30	26	31	83.520	土師器細片
RP006	27	22	12	83.700	
RP007	32	23	17	83.680	
RP008	21	20	14	83.700	
RP009	33	22	24	83.630	土師器非クロロ堯など
RP010	17	15	29	83.590	
RP011	24	20	18	83.710	
RP012	25	22	22	83.680	
RP013	27	22	31	83.600	
RP014	30	29	28	83.630	
RP015	23	22	17	83.730	
RP016	26	22	25	83.650	
RP017	29	26	27	83.633	
RP018	28	26	34	83.380	
RP019	30	19	33	83.390	
SP001	14	14	13	83.600	
SP002	18	18	22	83.451	
SP003	17	16	34	83.322	
SP004	16	(15)	10	83.587	
SP005	20	19	19	83.465	
SP006	23	20	23	83.518	
SP007	20	17	11	83.543	
SP008	33	30	14	83.485	
SP009	26	21	17	83.447	
SP010	20	20	6	83.549	
SP011	34	33	17	83.455	
SP012	23	19	10	83.519	
SP013	22	20	17	83.448	
SP014	23	20	14	83.525	
SP015	19	18	12	83.549	
SP016	26	26	11	83.518	
SP017	22	21	11	83.454	
SP018	20	19	10	83.490	
SP019	25	23	16	83.510	
SP020	54	34	15	83.534	
SP021	20	18	18	83.421	
UP001	欠番				
UP002	欠番				
UP003	42	28	18	83.920	
UP004	43	32	14.4	84.030	
UP005	40	25	20.3	84.010	
UP006	32	23	24.9	83.940	
UP007	22	16	13.7	84.080	
UP008	29	21	22.3	83.920	
UP009	21	18	16.4	84.030	
UP010	32	22	21.7	84.020	
UP011	21	19	13.1	84.110	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
UP012	31	23	29.3	83.970	
UP013	41	27	12.3	84.050	
UP014	27	22	24.1	83.950	
UP015	33	25	10.9	83.960	
UP016	25	13	22	83.951	
UP017	20	15	9.4	84.050	
UP018	33	22	15.3	84.100	
UP019	22	15	20.4	84.000	
UP020	22	17	19.6	84.050	
UP021	25	15	20.4	84.050	
UP022	32	(20)	35.6	84.060	
UP023	23	20	20.9	83.970	
UP024	41	25	13.4	84.020	
UP025	21	19	14	84.000	
UP026	25	12	10.1	84.020	
UP027	39	31	13.3	84.070	
UP028	(22)	(19)	16	84.060	
UP029	(32)	(27)	11.6	84.000	
UP030	(47)	44	19	83.986	
UP031	欠番				
UP032	34	29	14.1	83.950	
UP033	(33)	(17)	21.8	84.060	
UP034	30	18	15.2	84.110	
UP035	30	21	12.2	83.800	
UP036	25	23	16	83.770	
UP037	欠番				
UP038	26	20	16	84.040	
UP039	29	21	16.7	84.020	
UP040	29	25	24.2	84.100	常滑瓦片
UP041	欠番				
UP042	欠番				
UP043	欠番				
UP044	欠番				
UP045	欠番				
UP046	欠番				
UP047	31	26	26.1	83.820	
UP048	22	19	20	83.920	
UP049	36	24	26	83.950	
UP050	欠番				
UP051	欠番				
UP052	39	30	16.1	84.000	USB01
UP053	27	25	17.7	83.980	USB01
UP054	25	24	15.8	84.020	USB01
UP055	23	17	15.5	83.960	USB01
UP056	27	23	18.3	83.920	USB01
UP057	24	23	15.8	84.000	USB01
UP058	36	25	17	84.040	
UP059	27	23	15	84.020	
UP060	19	10	20.5	84.020	
UP061	19	11	16.4	84.060	
UP062	37	(21)	28	83.930	
UP063	22	20	8	84.350	
UP064	19	(10)	12	84.068	
UP065	29	19	10.5	84.380	
UP066	28	10	13	84.810	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
UP067	15	14	9	83.946	
UP068	25	21	11	84.046	USB01
VP001	30	28	21.4	82.930	
VP002	44	32	25	82.900	
VP003	23	18	19	83.180	VSB04
VP004	21	18	20	83.170	VSB04
VP005	29	(20)	12	83.240	
VP006	25	20	35	83.010	VSB04
VP007	27	21	17	83.090	
VP008	15	13	15	83.180	
VP009	(30)	20	19	83.140	
VP010	26	22	23	83.110	VSB04
VP011	30	27	20	83.360	
VP012	30	23	17	83.430	VSB03
VP013	29	22	19	83.210	VSB03
VP014	32	31	14	83.480	
VP015	29	(24)	15	84.240	
VP016	25	22	13	84.240	
VP017	28	22	21	84.240	
VP018	26	20	28.6	84.140	
VP019	25	21	33	84.190	
VP020	32	21	19.6	84.210	
VP021	21	20	21.6	84.140	
VP022	21	17	17.4	84.330	
VP023	14	14	9	84.230	
VP024	26	21	16	84.140	
VP025	22	16	15	84.150	
VP026	25	23	12	84.150	
VP027	22	18	18	84.150	
VP028	28	25	13.6	84.180	
VP029	22	19	13.6	84.160	
VP030	29	25	16	84.170	
VP031	20	20	13.4	84.160	
VP032	23	16	15.6	84.290	
VP033	19	16	19	84.190	
VP034	20	17	17.4	84.230	
VP035	33	29	20.4	83.770	VSB01
VP036	28	27	17.2	83.810	VSB02
VP037	26	25	11.2	83.740	VSB01
VP038	29	24	17.2	83.780	VSB02
VP039	22	18	12.6	83.830	VSB02
VP040	31	(16)	32	83.690	VSB02
VP041	27	23	12.2	83.800	VSB01
VP042	37	35	42	83.490	土師器細片 VSB01
VP043	24	18	18.2	83.810	
VP044	35	21	23.6	83.720	VSB01
VP045	33	22	18.2	83.590	
VP046	20	20	12.6	83.480	VSB03
VP047	18	17	9.6	83.560	
VP048	27	21	19	83.430	VSB03
VP049	19	15	5.8	83.560	
VP050	22	20	22.6	83.400	土師器細片、須恵器甕
VP051	16	13	20.2	83.400	
WP001	17.6	13.6	19.8	85.362	
WP002	26	17.2	11.2	85.482	

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
WP003	26.8	-	25.8	85.54	
WP004	19.8	16.4	9.6	85.802	
WP005	58.4	40	16	85.648	
WP006	21.6	-	23	85.638	
WP007	19.8	14.8	17.8	86.23	
WP008	18	16.6	24	85.66	
WP009	16.4	14.4	37.4	85.606	
WP010	19.6	10.2	20	85.698	
WP011	28	11.8	30	85.606	土師器細片
WP012	18.4	14.4	21.4	84.092	
XP001	23	20	24.6	85.470	
XP002	欠番				
XP003	27	(25)	14.6	85.540	
XP004	23	22	22.6	85.490	
XP005	19	19	8.5	85.620	
XP006	24	22	15.4	85.580	
XP007	25	(14)	12.5	85.590	
XP008	23	18	13.2	85.520	
XP009	36	32	32.4	85.330	
XP010	20	11	12.4	85.540	
XP011	28	24	22.6	85.400	
YP001	35.2	34	23.6	85.514	
YP002	28	27.2	20.4	85.568	YSB01
YP003	28	26.6	33.2	85.42	YSB01
YP004	32.2	31	13.8	85.534	YSB01
YP005	23.4	19	23.6	85.526	
YP006	30.6	20.2	14.4	85.596	YSB01
YP007	33	25	19.6	85.606	
YP008	32	26.6	14.8	85.634	YSB01
YP009	32.8	25.6	35.2	85.404	YSB01
YP010	28.4	25.2	25	85.492	YSB01
YP011	27	20.8	11.4	85.642	
YP012	27	25.2	19.4	85.544	
YP013	25.2	18.2	11.8	85.616	
YP014	27.2	20	26.2	85.456	
YP015	29.2	25.6	48.6	85.25	
YP016	25	21.8	26.8	85.478	
YP017	28.8	23.4	21.2	85.544	
YP018	25.4	23.6	16.4	85.54	YSB01
YP019	36.2	29.8	16	85.518	
YP020	38	32.8	23.4	85.498	
YP021	18.8	17.6	26.2	85.484	
YP022	31.8	30.4	28.4	85.514	YSB01
YP023	36.4	23.6	19.4	85.52	
YP024	27.2	22.2	41.4	85.228	
YP025	20.2	17.4	13.4	85.65	
YP026	25	22.6	21	85.59	
YP027	21	14.4	19.4	85.504	
YP028	23	18.2	11.8	85.836	
ZP001	24.6	21.2	9.8	85.56	
ZP002	25	18.6	14	85.55	
ZP003	23.8	15.6	23	85.486	
ZP004	58.2	32.4	21.6	85.476	
ZP005	28.8	18.4	16.2	85.51	
ZP006	19.6	-	16	85.484	



柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
ZP007	22.6	20.2	22.4	85.47	
ZP008	17.8	7.4	9.6	85.618	
ZP009	21.8	-	9	85.744	
ZP010	27.4	26	15	85.656	
ZP011	35	33	9.2	85.764	
ZP012	36.4	27.4	15	85.762	
ZP013	26.6	23.6	21.8	85.668	
ZP014	20.4	14.2	16.8	85.762	
ZP015	23.4	21.4	29	85.56	
ZP016	16.6	14.8	16.2	85.666	
ZP017	27	24.4	16.8	85.724	
ZP018	22.4	14.6	24.6	85.572	
ZP019	20.6	16	27.4	85.66	
ZP020	28.6	26.8	12.2	85.72	
ZP021	16.2	14.2	10.2	85.768	
ZP022	19.2	15.8	9.4	85.768	
ZP023	23.2	-	10.6	85.76	
ZP024	23.4	21.4	12.8	85.756	
ZP025	16.6	15.8	10.6	85.814	
ZP026	17.6	14.6	15	85.81	
ZP027	19.8	15.8	10.2	85.844	
ZP028	20.4	18.2	19.6	85.776	
ZP029	24.2	8	13.8	85.67	
ZP030	24.6	17.2	19.8	86.042	
ZP031	23.8	21.4	27.6	85.806	
ZP032	41.4	28.6	25.6	85.836	
ZP033	29.2	22.6	24	85.75	
ZP034	19.4	16.4	14.6	85.99	
ZP035	28.4	23	23.2	85.918	
ZP036	24.2	21.8	15.4	86.05	
ZP037	33.4	27.8	15.8	86.064	
ZP038	24	23	19.2	85.956	
ZP039	29	27.2	23.4	85.864	
ZP040	21	-	28.8	85.804	

## 報告書抄録

ふりがな	うるしまちいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	漆町遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業都鳥3期地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第633集							
編著者名	西澤正晴 鈴木博之 巴 亜子							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うるしまち 漆町遺跡	おうしゅうし いさわく 奥州市胆沢区 なつ たあどううるしまち 南都田字漆町 ちない 地内	03215	NE15-2187	39度 8分 17秒	141度 4分 47秒	2013.07.02 ～ 2013.12.14	4,835㎡  3,226㎡ 計8,061㎡	経営体育成基盤 整備事業に伴う 緊急発掘調査
						2014.04.04 ～ 2014.07.12		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
漆町遺跡	散布地	縄文時代	土坑2基	縄文土器、石器		平安時代と考えられる大溝に囲まれた「集落」遺跡である。四本柱門や材木堀も検出された。そのほか、12世紀のかわらけ、東海産陶器、中国産の磁器が出土した。		
	集落	奈良時代	竪穴建物46軒 土坑 溝跡	土師器・須恵器・土製玉類・石製玉類・土製品など				
	集落	平安時代	竪穴建物10軒 掘立柱建物15棟 大溝1条 材木堀跡3条 門跡1棟 土坑 溝跡	土師器・須恵器・かわらけ・国産陶器(常滑・渥美・須恵器系)・貿易陶磁器・土製品・金属製品				
	集落・墓	中世～ 近代 時期不明	掘立柱建物跡27条 土坑 溝跡・墓壇	陶磁器・銭貨				
要約	今回の調査は、漆町遺跡の発掘調査としては2回目となる。全域を細長く調査した結果、平安時代（奈良時代の可能性も残る）の大溝と材木堀により二重に区画された「集落」であることがわかった。さらに材木堀には門が付設されるなど、一般的な集落とは異なる性格を有すると考えられる。内部の状況は調査範囲が狭いこともあり今回の調査では十分明らかにすることができなかった。							

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 633 集  
**漆町遺跡発掘調査報告書（第 1 分冊）**  
経営体育成基盤整備事業都鳥 3 期地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 27 年 3 月 12 日

発 行 平成 27 年 3 月 20 日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地  
電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部農村整備室  
〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り 7 - 13  
電話 (0197) 35-8440

(公財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号  
電話 (019) 654-2235

印 刷 永代印刷株式会社  
〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡 1 丁目 8 - 30  
電話 (019) 636-0011